國譯大藏經

經部

第四卷

目次

漢譯原文

以上

大方廣圓覺修多羅了義經解題

罽賓沙門佛陀多羅譯

譯者　山田孝道

『圓覺經』は審には、『大方廣圓覺修多羅了義經』と云ひ、古來禪門に於て彼の『楞嚴經』と共に盛んに用ゐらるる經典であつて、佛陀自らは、『大方廣圓覺陀羅尼經』、『修多羅了義經』、『秘密王三昧經』、『如來決定境界經』、『如來藏自性差別經』の五名を立てて居られる。『大方廣圓覺修多羅了義』の經名は、此五名の中の初めの一と二とを合して、其中から『陀羅尼』の語を除いたもので謂ゆる梵漢兼擧の經名である。大方廣圓覺の五字は法義を、修多羅了義經の六字は言教を言ひ表はしたものである。

譯者は北印度罽賓國の沙門で佛陀多羅(覺救)と云ふ人である。譯した場所は東都の白馬寺、時は唐の玄宗の天寶十二年である。曾て北京海藏寺の道詮、同報國寺惟愨の兩法師が此經の註釋を著はしたが、草堂寺圭峰宗密禪師が未だ以て善美を盡さずとなし、重ねて『大疏』三卷、『大鈔』十三卷、『略疏』二卷、同じく『略鈔』六卷、『道場修證儀』十八卷を著して其精微を發揮し、集賢殿の大學士裴休公は

之に序を加へて讃歎したので、本經は大に弘通する事になつたのである。
本經は序分と正宗分と流通分との三段に分れて居る。先づ序分に於ては、一時佛、神通大光明藏に入り、文殊菩薩を始め大菩薩十二人の請問に應じて、大圓覺の妙理を宣說し給へることを叙して、本經の緣起來由を述べ、流通分に於ては、賢善首菩薩の問に對して、本經の永く末世に流通し、衆生の迷惑を救はんことを說き、正宗分は、文殊章・普賢章・普眼章・金剛藏章・彌勒章・清淨慧章・威德章・辯音章・淨諸業障章・普覺章・圓覺章の各章に分つてある。
先づ初めの文殊章は、實に本經一部の眼目にして、宇宙の眞實體たる大圓覺は法界に周遍して、恰も虛空の如く、竪に三際を貫き、橫に十方に徹して、遙に時間と空間とを超絕し、本性清淨にして恰も明鏡の如く、靈靈昭昭自から無明の塵埃を脫出せることが說いてある。是れ蓋し大乘至極の敎理にして、禪敎の根本義を述べたものである。第二章以下は、專ら此の大圓覺を修證するに必要なる觀行のことが說かれてある。乃ち普賢章に於ては、通じて上中下三根の爲めに行門を審にし、無明煩惱は夢幻空華の如きものなれば、一び覺心不動の境界に體達する時は、自から幻盡き覺圓にして眞體現ると說き、普眼章に於ては、身心無性の理を開示し、我法二空の觀を了じ、次で眞空絕相觀と理事無礙觀と周遍含容觀の法界三觀を修して、能所兼ね忘じ、愛憎雙べ空ずることを示し、金剛藏章に於ては、輪廻を深悟し、邪正を分別せしめんが爲めに迷悟の始終を辨じ、彌勒章に於ては、輪廻の根元

は貪愛にして、貪愛より差別種性を生ずとなし、愛見を斷じて無生忍に悟入することを勸め、清淨慧章に於ては、初めに圓覺無證の理を示し、次に機に對して頓漸修證の位を分てり。普眼章以下清淨慧章に至る四章は上根の者の爲めに圓覺の修證を說いたものである。威德章に於ては、衆生の根性不同にして煩惱の厚薄等しからざるを以つて、三種の觀門を開き、根に隨つて趣入すべきものなることが示されてある。辯音章には、前の三觀に就いて更に觀綱の交羅を說き、淨諸業障章に於ては、無明の主宰たる我執を除くべきことを明され、普覺章には、善知識に依止して、四病及び諸の細惑を離るることが說れてある。威德章以下普覺章までは、中根の者の爲めに、圓覺の修證が示されてある。次の圓覺章に於ては、三期の道場と加行の功用とを明して、下根の者の爲めに、同じく圓覺の修證が說かれてある。

之れを要するに、眞淨明妙虛徹靈通なる大圓覺卽ち宇宙の眞實體と、之れに冥合融卽すべき觀行を、上中下の三根に應じて最も微細に說かれたものが卽ち本經である。

本經は斯の如く大乘圓頓の教理を開示し、主として觀行を說いたものであるが、圭峰宗密が疏鈔を作つて以來、弘く禪林に流布し、殆ど禪宗所依の聖典の如き觀を作すに至つた。

然し古來斯の經に對して多少の疑義を挾むものがあつて、『禪門寶訓』には、萬庵が『維摩』『圓覺』を引證して、戒律必ずしも持たず、定慧必ずしも習はず、道德必ずしも修せず、嗜慾必ずしも去らず、貪

瞋痴盗淫を賛して梵行となすが如き、破大乘者の往往出づるを慨して、之を辯難攻擊し、又道元禪師も『圓覺經』の文の起書を推尋するに、自餘の大乘諸經に同じからず、其の意諸經に劣るものあれど、全く諸經に勝る義なしとして、之を如淨禪師に質せしに、如淨禪師も亦之に同意せし旨が『寶慶記』に記載してある。蓋し此の經は一說に、『華嚴經』から抄錄したものだとも云つてあるが、是れはつまり文中に婬怒痴性即佛性等の語があつて、古今惡平等に墮するの嫌ある點から、遂に其の價値を疑はしむるに至つたものであらう。

本經研究の材料として主なる參考書を擧ぐれば、次の

大疏	圭峰宗密著	三卷
大鈔	同	十三卷
略疏	同	二卷
略鈔	同	六卷
道場修證儀	同	十八卷
註疏	海藏寺道詮著	三卷
註疏	報國寺惟愨著	一卷
疏	居式著	四卷

疏鈔隨文要解　清遠著　六巻

類　解　鏡釋庵行霆著　八巻

鈔辨疑誤　觀復著　二巻

略疏序解　祖泰著　一巻

集註日本訣　鳳潭著　三巻

略疏助寥抄　著者不明　二巻

等であるが、猶此の外に先天寺悟實禪師の『疏』二巻、薦福寺堅志法師の『疏』四巻、彰南法師神煥の『疏』三巻、竹庵法師可觀の『手鑑』、慈室法師妙雲の『直解』、茗水沙門元粹の『集註』、宋の淳熙皇帝の『御註』二巻、日本に於ては大華嚴寺の僧濬鳳潭和尚の『集註』の外、長泉院の徳門普寂律師の『義疏』二巻等がある。

國譯大方廣圓覺修多羅了義經

(一)是の如く我聞く。一時(二)婆伽婆、(三)神通(四)大光明藏(五)三昧に入りて正受し、(十方三世)一切の如來と(六)光嚴住持したまふ。是れ諸の衆生の清淨(本)覺の(心)地なればなり。(凡聖の)身心寂滅すれば、平等(圓覺)の本際、十方(法界)に圓滿(周徧)し、(凡聖)不二にして隨順し、(凡聖)不二の境に於て諸の淨土を現じて、大菩薩摩訶薩(等)十萬人と倶なりき。其の名を、(七)文殊師利菩薩、(八)普賢菩薩、(九)普眼菩薩、(一〇)金剛藏菩薩、(一一)彌勒菩薩、(一二)淸淨慧菩薩、(一三)威德自在菩薩、(一四)辯音菩薩、(一五)淨諸業障菩薩、(一六)普覺菩薩、(一七)圓覺菩薩、(一八)賢善首菩薩等と曰ふを上首と爲し、諸の眷屬と皆三昧に入り、同じく如來平等の法會に住せり。

【文殊菩薩章】(一九)是に於て文殊師利菩薩、大衆の中にありて即ち座より起ち、佛足を頂禮して、右に繞ること三匝し、長跪叉手して、佛に白して言

【一】以下文殊菩薩章の前迄を序分とす。

【二】婆伽婆は梵語(Bhagavat)の音譯にて、能破の義。一切の煩惱妄想を破し盡したる佛のことなり。

【三】神通とは、妙用測り難きを神と云ひ、自在無礙なるを通と云ふ。

【四】大光明とは、佛の智慧。

【五】三昧とは梵語 Samādhi の音譯にて、正受、等持、正定、又は正思惟等と譯す。

【六】光嚴は[illegible]の意。

【七】文殊師利は梵語(Mañjuśrī)略して文殊と云ふ。妙吉祥、妙德、妙音等と譯す。釋尊の左側に侍して智慧を司る。

さく、
『大悲世尊、願くは此の（如來平等法）會の、諸の（四）來の法衆の爲に、如來（一〇）本起の清淨の（一一）因地（眞實）の法行を說き、及び菩薩は（一二）大乘の中に於て（眞如）淸淨の心を發し、（一三）諸病を遠離することを說き、能く未來末世の（一切）衆生の大乘を求むる者をして邪見に墮ちざらしめ給へ。』是の語を作し已つて、（一四）五體を地に投じ、是の如く三び請し終つて、復た始む。

爾の時に世尊、文殊師利菩薩に告げて言はく、
『善哉、善哉、善男子よ。汝等乃ち諸の菩薩の爲に、如來因地の法行を諮詢し、及び末世一切衆生の、大乘（佛法）を求むる者の爲に、正住持を得て邪見に墮ちざらしむ。汝等諦に聽け、當に汝（等）が爲めに說くべし。』時に文殊師利菩薩は、敎を奉じて歡喜し、諸の大衆は、默然として聽きぬ。
『善男子、（一五）無上法王に大陀羅尼門あり、名けて圓覺と爲す。一切の淸淨なる（一六）眞如と、菩提・涅槃と、及び（一七）波羅蜜とを流出して、菩薩を敎

蓮華に坐し、頭に五髻を結ひ、右手に智劍を持して獅子に騎す。
【八】普賢は梵語(Samantabhadra)の譯にして、遍吉とも譯す。普は普遍、賢は賢善なり。釋尊の右側に侍して慈悲を司る。身は月色の如く、右手に金剛杵を持し、左手に金剛鈴を執り、五佛の寶冠を戴きて、六牙の白象に乘る。
【九】普眼は衆生濟度の爲に、一切諸法の體用如何を悉く徹見す。
【一〇】金剛藏は煩惱苦を摧破して、一切の功德を成就す。
【一一】彌勒は慈氏と譯す。名を阿逸多(Ajita)と云ひ、無勝と譯す。慈悲の深き他に勝る者なきの義。
【一二】清淨慧は諸の執著を離れて自由無礙なる義。
【一三】威德自在は一切諸の邪魔

授す。

一切如來の本起の因地は、皆清淨(本)覺の(實)相を圓照するに依りて、永く（二八）無明を斷じて方に佛道を成せり。

何をか無明と云ふ。善男子よ、一切衆生は（二九）無始よりこのかた種種に顚倒して、猶ほ迷人の四方處を易るが如し。妄りに（三〇）四大を認めて自身の相と爲し、（三一）六塵の縁影を自心の相と爲す。彼の病(者)の目に空中の華、及び第二の月を見るに譬ふ。善男子よ、空には實に華なし、(華ありと見るは)病者の妄執なり。妄執に由るが故に、唯此の虚空の自性に惑ふのみに非ず、また彼の實に華の生ずる處に迷へり。此に由って妄りに生死に輪轉するなり。故に無明と名く。

善男子よ、此の無明は實に體あるにあらざるなり。(恰も)夢中の人の夢の時には夢にあらざれども、(夢)醒むるに至るに及んで、了に所得なきが如く、(又)衆の空華の虚空に滅するが如し。(されば)説いて實滅の處ありと言ふべからず。何を以ての故に、(空華は本來)生ずる處なるが故に。

一切衆生は無生の中に於て妄りに生滅を見る。此の故に説いて生死に輪

も使すこと能はず、如何なる妄惑も入ること能はざるを本領となす。

【二四】辯音は說法敎化に際し、能辯美音にして、普く衆生を濟度するの義。

【二五】淨諸業障は衆生を敎ゆるに諸の業障を除き清淨ならしむるの義。

【二六】普覺は都ての迷執を除き普く覺を開かしむ。

【二七】圓覺は圓滿周遍せる智慧を得たること。

【二八】賢善首は諸善萬行を齊しく興し、眞理に隨順して、如來の理位に近からしむることを司る。

【二九】以下賢善首菩薩章の終までを正宗分とす。

【三〇】本起は根本發起の事也。

【三一】因地とは佛果の地位に對して、原因の修行地を云ふ。

【三二】大乘とは小乘に對して、

轉すと名く。

善男子よ、如來の因地に圓覺を修すとは、是れ空華と知れば、即ち輪轉なく、亦身心の彼の生死を受くるなし。〔我が觀行を〕作すが故に無なるにあらず、本性(元來空寂にして)無なるが故なり。

彼の知覺する者は猶ほ虛空の如し。虛空と知る者も亦空華の相なり。亦知覺の(實)性なしと說くべからず。有も無も倶に遣る、是を則ち名けて淸(淨)本(覺)に隨順すと爲す。何を以ての故に、虛空の性なるが故に。常に(變)動せざるが故に。(三)如來藏の中には起滅なきが故に。知見なきが故に。(三)法界性の究竟圓滿して、十方に徧きが如くなるが故に。是を即ち名けて因地の法行と爲す。菩薩は此に因つて大乘の中に於て淸淨の心を發し末世の衆生は此に依て修行せば、邪見に墮せず。』爾の時世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言はく。

『文殊よ、汝當に知るべし、一切諸の如來は、本(起)の因地より、皆智慧を以て覺られたり。

無明に了達して、彼の空華の如しと知れば　即ち能く流轉を免る、又

大人の所乘と云ふ事、大苦を滅して大利益を與ふる教道、即ち菩薩の大行が佛果を得るの法門なり、

【三三】諸病は煩惱迷妄を云ふ。

【三四】五體を地に投じとは、四肢及び頭を地につけて禮拜すること。

【三五】無上法王は佛のこと。陀羅尼は梵語。能遮、能持等と譯す。

【三六】眞如とは絶對平等の理體を云ふ。菩提とは佛の正覺を云ふ。涅槃は滅度、無爲等と譯し、迷妄を脫し、眞理を究め、不生不滅の法身を證するを云ふ、佛の悟蜜のこと。

【三七】波羅蜜は梵音(Pāramitā)にして到彼岸と譯す。生死の此岸より涅槃の彼岸に到るの義。

【三八】無明は一切煩惱の根本。

【三九】無始とは世間の衆生は始

夢中の人の、醒むる時不可得なるが如し。
學者は虚空の如し、平等にして動轉せず、覺は十方界に徧くして、卽ち佛道を成ずることを得、衆幻の滅するに處なく、成道も亦得ることなし、本性圓滿なるが故に。
菩薩よ、此の中に於て、能く(三四)菩提心を發すべし、末世の諸の衆生、此を修せば邪見を免れん。』

【普賢菩薩章】 是に於て、普賢菩薩は大衆の中にあつて座より起ちて、佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、長跪叉手して佛に白して言さく、
『大悲世尊、願くは此の會の諸の菩薩衆のため、及び末世の一切衆生の大乘を修する者の爲に、此の圓覺淸淨の境界を聞いて、云何んが修行せん。世尊よ、若し彼の衆生(一切の諸法)幻の如しと知る者の身心も亦幻なり、云何んが還つて幻を修(習)せん。若し諸の幻性にして、一切盡く滅するときは則ち心あることとなし、誰か修行を爲し、云何んがまた如幻を修行すと說かん。
若し諸の衆生にして本より修行せず、生死の中に於て常に幻化に居して、曾て如幻の境界を了知せずんば、妄想の心をして、云何が解脫せしめんや。願くは末世の一切衆生の爲に、何の方便を作して

めあることなきを云ふ。
(三〇) 四大は一切の色法を構成する四種の成分なる地水火風のことにして、大の字は普遍を意味す。
(三一) 六塵は六境とも云ひ、色境、聲境、香境、味境、觸境、法境のこと。
(三二) 如來藏とは眞如の事。如來は佛の異名。藏は含攝の義なり。
(三三) 法界性とは萬有の本體。
(三四) 菩提心とは佛の心なり。

か漸次に修習して、諸の衆生をして、永く諸幻を離れしめん。』是の語を作し已りて、五體を地に投じ、是の如く三たび請し終つて復た始む。爾の時に世尊、普賢菩薩に告げて言はく、

『善哉、善哉、善男子よ、汝等乃ち能く諸の菩薩、及び末世の衆生の、菩薩の如幻三昧を修習せんが爲に、方便して漸次に諸の衆生をして、諸幻を離るることを得しめん。汝(等)今諦に聽け、當に汝(等)が爲に說くべし。』

時に普賢菩薩は教を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽きぬ。

『善男子よ、一切衆生の種種の幻化は、皆如來圓覺の妙心より生ぜり。猶ほ空華の空に從つてあるが如く(圓覺の妙性畢竟して無生なるが故に)幻華滅すと雖も、空性は(依然として)壞せざるなり。衆生の幻心は還つて幻(心)に依つて滅せり。諸幻盡く滅すれども覺心は動ぜず。幻に依つて覺を說くも亦名けて幻と爲す。若し覺ありと說くも猶ほ未だ幻を離れず。覺なしと說くも亦復是の如し。是の故に幻泯滅するを(若し泯滅して寄ること無く、分別不生なれば、圓覺の眞心自然に顯現して幻化の相あることなし)不動(の覺心)と爲す。

善男子、一切の菩薩及び末世の衆生よ、應に一切幻化虛妄の境界を遠離すべし。堅く(是境界を)遠離するの心を執持するが故に、心幻の如くなるも亦遠離すべし。遠離も是れ幻なれば亦復遠離すべし。遠離を(遠)離するも幻なれば亦復遠離すべし。究竟じて(遠)離する所なきを得ば卽ち諸幻を除く。譬へば火を鑽るに、兩木相因つて火出で木盡き灰飛び煙滅するが如し。幻を以て幻を修するも亦復

是の如し。諸幻盡くと雖も(圓覺の本體は始終變動なきを以て)斷滅に入らず。善男子よ、幻と知れば即ち離る、(別に)方便を作さず。幻を離るれば即ち覺る、(一超直入なるが故に)亦漸次なし。一切の菩薩及び末世の衆生此の[意]に依て(大乘を)修行せば、是の如く乃ち能く永く諸幻を離れん。』爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲し、偈を說いて言はく、

『普賢よ、汝當に知るべし、一切諸の衆生の、無始の幻なる無明は、皆諸の如來の、圓覺の心より建立せられたり。

猶虛空の華の、空に依て相あるが如し、空華若し復滅びんも、虛空は本より不動なり。

幻は(皆)諸覺より生ず、幻にして滅ぶれば覺圓滿す、覺心は(虛空の如く)動かざるが故に。若し彼の諸の菩薩、及び末世の衆生、常に應に幻を遠離すべし。

諸幻悉く皆離るれば、木の中より火を生じて、木盡きぬれば火還た滅するが如し、覺には(本)漸次なし、方便もまた是の如し。』

【普眼菩薩章】是に於て、普眼菩薩は大衆の中にあつて、即ち座より起つて佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、長跪叉手して佛に白して言さく、

『大悲世尊よ、願くは此の會の諸の菩薩衆の爲め、及び末世の一切衆生の爲めに、菩薩の修行の次第を演說し給へ。(我等)云何が思惟し、云何が住持せん。衆生未だ悟らず、何の方便を作してか、普

く開悟せしめん。世尊よ、若し彼の衆生にして正しき方便、及び正しき思惟なくんば、佛・如來の此の三昧を説くを聞くも、心迷悶を生じて圓覺に於て悟入すること能はざらん。願くは慈悲を興して、我等の輩、及び末世の衆生の爲めに假りに方便を説き給へ。』是の語を作し已つて、五體を地に投じて、是の如く三請し終つて復た始む。

爾の時に世尊は普眼菩薩に告げて言はく、

『善哉、善哉、善男子よ、汝等乃ち能く諸の菩薩及び末世の衆生の爲めに、如來の修行・漸次・思惟・住持、乃至假説の種種の方便を問ふ。汝今諦に聽け、當に汝が爲めに説かん。』時に普眼菩薩は敎を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽きぬ。

『善男子よ、彼の新學(初心)の菩薩及び末世の衆生にして、如來(淸)淨の圓覺を求めんと欲せば、應に正念に諸幻を遠離すべし。(而して)先づ如來の(三五)奢摩他の行に依り、堅く禁戒を持ち、(三六)徒衆を安處し、靜室に(三七)宴坐し、恒に是の念を作すべし。我が今此の身四大和合す。謂はゆる、髮毛爪齒・皮肉筋骨・髓腦垢色は皆地に歸し、唾涕濃血・津液涎沫・痰涙精氣・大小便利は皆水に歸し、暖氣は火に歸し、動轉は風に歸し、四大各離るれば、今は妄身當に何の所にかある。卽ち知る、此の身は畢竟體なく、和合して相を爲すこと實に幻化に同じきことを。(三八)四緣假に合

【三五】奢摩他は(Śamatha)は止、寂靜と譯す。禪定七名の一。
【三六】徒衆は同行同學の人人を指す。
【三七】宴坐は宴然端坐の義にて坐禪すること。
【三八】四緣は四大の條件。

して妄に六根あり。【三九】六根四大、中外合成して妄に縁氣あり。中に於て精聚して縁相あるに似たり、假に名けて心と爲す。善男子よ、此の虚妄の心、若し【四〇】六塵なければ則ち有ること能はず。四大分解せば(六)塵の得べき無し。中に於て縁塵各散滅に歸すれば畢竟縁心の見るべきなし。善男子よ、彼の衆生、幻身滅するが故に幻心も亦滅す。幻心滅するが故に幻塵も亦滅す。幻塵滅するが故に幻滅も亦滅す。幻滅滅するが故に【四一】非幻は滅せず。譬へば鏡を磨ぐに垢盡きて明の現ずるが如し。善男子よ、當に知るべし、身心は皆【四二】幻垢なることを。垢相永く滅すれば十方(法界)清淨なり。善男子よ、譬へば清淨なる摩尼寶珠の五色に映じて方に隨つて各現ずるに、諸の愚癡の者は、彼の摩尼に實に五色ありと見るが如し。善男子よ。圓覺の(清)淨(法)性の心身(一切萬法)を現ずることは、類に隨つて各應ずるものなるに、彼の愚癡の者は、(清)淨圓覺に實に是の如きの身心の自相ありと説くも、亦復是の如し。

此に由つて幻化に遠かること能はず。是の故に我れ身心は幻垢なりと説く。幻垢を離るるに對して(其の徳を稱して)説いて菩薩と名く。垢盡き對除けば、即ち垢に對して説いて菩薩と名くるものなし。善男子よ、此の菩薩及び末世の衆生は、諸幻を證得し、影像を滅するが故に、便ち【四三】無方清淨

【三九】六根は眼耳鼻舌身意。

【四〇】六塵は色聲香味觸法。

【四一】非幻は圓覺の性なり。本淨圓明獨體全眞なるが故に自性常に存して滅せず。

【四二】幻垢とは實體なき幻相に執著して、淨心を染汚するを以て名く。

【四三】無方は方所なきこと。

を得、無邊の虚空覺に顯發せらるるなり。覺の圓明の故に心清淨を顯はす。心清淨の故に（四四）見塵清淨なり。見清淨の故に眼根清淨なり。根清淨の故に眼識清淨なり。識清淨の故に聞塵清淨なり。聞清淨の故に耳根清淨なり。根清淨の故に耳識清淨なり。識清淨の故に覺塵清淨なり。是の如く乃至鼻舌身意も亦復是の如し。善男子よ。根清淨の故に色塵清淨なり。色清淨の故に聲塵清淨なり。(乃至)香味觸法も亦復是の如し。善男子よ、六塵清淨の故に地大清淨なり。地大清淨の故に水大清淨なり。(乃至)火大・風大も亦復是の如し。善男子よ、四大清淨の故に（四五）十二處、（四六）十八界、（四七）二十五有清淨なり。彼清淨の故に（四八）十力、（四九）四無所畏、（五〇）四無礙智、佛の（五一）十八不共法、（五二）三十七助道品清淨なり。是の如く乃至（五三）八萬四千の（五四）陀羅尼門一切清淨なり。善男子よ、一切實相の性、清淨の故に一身清淨なり。一身清淨の故に多身清淨なり。多身清淨の故に、是の如く乃至十方の衆生圓覺清淨なり。善男子よ、一世界清淨の故に多世界清淨なり。多世界清淨の故に、是の如く乃至虚空を盡し、圓に三世を裹み、一切平等清淨不動なり。善男子よ、

【四四】見塵は對境を縁ずること。

【四五】十二處とは六根(眼、耳、鼻、舌、身、意)と六塵(色、聲、香、味、觸、法)なり。

【四六】十八界とは十二處と、眼、耳、鼻、舌、身、意の六識也。

【四七】二十五有とは煩惱業苦の衆生の總稱也。卽ち四洲、四惡趣、四禪、四空處、無想、淨居、梵王及び六欲天。

【四八】十力とは佛の智慧のこと卽ち、是處非處力、業力、定力、根力、欲力、性力、至處道力、宿命力、天眼力、漏盡力これなり。

【四九】四無所畏とは佛には絶對に怖畏なき事を云ふ。一切智、漏盡、說障道、說盡苦道の四を云ふ。

【五〇】四無礙智とは佛の智慧の無礙自在なること。義無礙、法無礙、詞無礙、樂說無礙の

虚空是の如く平等不動なれば、當に覺性の平等不動を知るべし。四大不動の故に當に覺性の平等不動を知るべし。是の如く乃至八萬四千の陀羅尼門平等不動なれば當に覺性の平等不動を知るべし。善男子よ、覺性徧滿。清淨不動、圓にして無際なるが故に當に六根法界に徧滿するを知るべし。根徧滿の故に當に六塵法界に徧滿するを知るべし。塵徧滿の故に當に四大法界に徧滿するを知るべし。是の如く乃至陀羅尼門法界に徧滿す。善男子よ、彼の好覺の性の徧滿に由るが故に、根性も塵性も壞なく雜なし、(譬へば)百千の燈光、一室に照して其の光り徧滿して、壞なく雜なきが如し。

善男子よ、覺成就の故に、當に知るべし、菩薩は法のために縛せられず、法の(解)(五五)脫を求めず、生死を厭はず、涅槃を愛せず、持戒を敬せず、毀戒を憎まず、久習を重んせず、初學を輕ぜざることを。何を以ての故に、一切覺の故に。譬へば眼光の前境を曉了するに、其の光圓滿して憎愛なきを得るが如し。何を以ての故に、光體無二にして憎愛なきが故に。善男子よ、此の菩薩及び末世の衆生、此の心を修習して成就を得るもの、此に於て修もなく亦成就もなし。圓覺普く照らして寂滅(五六)無二なり。中

四を云ふ。

【五一】不共法とは特殊の義にして、佛陀以外には共はざる法と云ふ事。之に十八あり、一に身失なし、二に口失なし、三に念失なし、四に異想なし、五に不定心なし、六に已を知って捨てざるなし、七に願、八に精進、九に念、十に惠、十一に解脫、十二に解脫知見、十三に身業智慧に隨つて行ず、十四に口業智慧に隨つて行ず、十五に意業智慧に隨つて行ず、十六に智慧を以て過去を知る、十七に智慧を以て現在を知る、十八に智慧を以て未來を知る。

【五二】三十七助道品とは四念處、四正勤、四如意足、五根、五力、七覺支、八正道を云ふ。

【五三】八萬四千とは衆生教化の法門の數。

に於て百千萬億（五七）阿僧祇不可說の（五八）恒河沙諸佛世界も、猶ほ空華の亂起亂滅の如く、卽せず、離せず、（繫）（五九）縛なく（解）脫なし、始めて知る衆生は本來成佛、生死涅槃は猶昨夢の如きことを。善男子よ、昨夢の如きが故に當に知るべし、生死と及び涅槃とは起なく滅なく、來なく去なく、其の（六〇）所證も、得なく失なく、取なく捨なく、其の（六一）能證も、（六二）作なく止なく、任なく滅なきことを。此の證中に於て能なく、所なく、畢竟じて證なく亦證者もなし。一切の法性平等にして不壞なり。善男子よ、彼の諸の菩薩、是の如く（六三）修行し、是の如く漸次に思惟し、是の如く住持し、是の如く方便し、是の如く開悟し、是の如くの法を求めば亦迷悶せず。』

爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言はく、

『普眼よ汝應に知るべし、一切諸の衆生の、身心は皆幻の如し、身相は四大に屬し、心性は六塵に歸す、四大の體各離るれば、誰をか和合の者となさん。

是の如く漸く修行せば、一切悉く淸淨不動にして法界に徧く、作止任滅なし、亦能證の者もなし。

【五四】陀羅尼（Dhārani）。譯して總持、能持、又は遮持と云ふ。善を持して失はず、惡を捨して生ぜざらしむるの義。

【五五】脫は煩惱の束縛を解きて迷界の苦を脫すること。

【五六】無二とは絕對にして平等なる意。

【五七】阿僧祇（Asaṃkhyeya）は無數と譯す。

【五八】恒河沙にガンヂス河（Gaṅgā）の砂と云ふことにて、數の廣大無量なるに喩ふ。

【五九】縛とは身心を繫縛せる煩惱のこと。

【六〇】所證とは悟らるる方の眞理。

【六一】能證とは悟る方の人。

【六二】作、止、任、滅は圓覺修行の上には四病と稱する障害なり。

【六三】修行、思惟、住持、方便、開悟の五は最初普眼菩薩の拜

一切の佛世界は、猶ほ虛空の華の如く、三世悉く平等にして、畢竟じて去來なし。初發心の菩薩、及び末世の衆生にして、佛道に入ることを求めんと欲せば、應に是の如く修習すべし。』

【金剛藏菩薩章】是に於て、金剛藏菩薩、大衆の中に在りて卽ち座より起ちて佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、長跪叉手して、佛に白して言さく、

『大悲世尊、善く一切諸の菩薩衆の爲に、如來の圓覺、淸淨の大陀羅尼、因地の法行、漸次の方便を宣揚して、諸の衆生の爲めに蒙昧を開發し給ひければ、在會の法衆は、佛の慈誨を承けて、(六四)幻翳朗然として(六五)慧目淸淨たり。世尊よ、若し諸の衆生、本來成佛ならば、何んが故に復た一切の無明ありや。若し諸の無明、衆生の(六六)本有ならば、何の因緣の故に復た本來成佛と說くや。十方(六七)異生、本より佛道を成じ、後に無明を起さば、一切の如來も何時か復た一切の煩惱を生ぜん。惟願くは(六八)無遮の大悲を捨てず、諸の菩薩の爲に(六九)秘密藏を開き、及び末世の一切衆生の爲めに是の如く(七〇)修多羅の教、(七一)了義の法門を聞くことを得て、永く疑悔を斷

問せられたる所、佛、今歸結を示さる。

【六四】幻翳は迷執のこと。

【六五】慧目は智慧の眼目。

【六六】本有は本來具有の義。

【六七】異生は凡夫の異名。凡夫は聖者に異なる生類にして、五趣等に生を受くるが故に此の名あり。

【六八】無遮の大悲とは親疎彼此の差別なく普く一切衆生に蒙らしむる佛陀の慈悲を云ふ。

【六九】秘密藏とは佛の智慧の蘊奧を云ふ。

【七〇】修多羅は梵語、契經と譯す、聖教のこと。

【七一】了義とは眞實の義理を明了に詮顯すること。

たしめ給へ。」是の語を作し已つて、五體を地に投じ、是の如く三たび請し終つて復た始む。

爾の時に世尊、金剛藏菩薩に告げてのたまはく、

『善哉、善哉、善男子よ、汝等乃ち能く諸の菩薩、及び末世の衆生の爲めに、如來甚深秘密究竟の方便を問へり。是れ諸の菩薩の最上の敎誨、了義の大乘なり。能く十方修學の菩薩、及び末世一切の衆生に決定の信(心)を得しめ、永く疑悔を斷ぜしめん。汝(等)今諦に聽け、當に汝等の爲に說くべし。』

時に金剛藏菩薩、敎を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽けり。

『善男子よ、一切世界は始終生滅。(七二)前後有無。(七三)聚散起止。念念相續。循環往復。種種取捨は皆是れ輪廻なり。未だ輪廻を出でずして而して圓覺を辨せば、彼の圓覺の性も卽ち(七四)流轉に同じ。若し輪廻を免かるれば、是の處あることなけん。譬へば動目の能く湛水を搖がすが如く、又定眼の火の廻轉すとみるが如し。雲駛ければ月運び、舟行けば岸移るも亦復是の如し。善男子よ、(七五)諸旋未だ息まずんば、(七六)彼の物の先に住する尙ほ得べからず。何に況んや輪轉生死の垢心曾て未だ清淨ならずして、佛の圓覺を觀るに、而も旋復せざらんをや。是の故に汝等便ち三惑を生ず。善男子よ、譬へば幻翳の妄に空華を見るが如し。幻翳若し除かば、說いて此の幻翳已に滅す、何時か更に一切の諸翳を

【七二】前後有無は過去、未來、住劫、空劫。
【七三】聚、散、起、止は成劫、壞劫、現行、調伏。
【七四】流轉は迷界に生死を續け六趣四生の間を流れ廻る事。
【七五】諸旋とは總ての動くものと云ふ義、眼目雲舟をいふ。
【七六】彼の物は水火月岸にて、圓覺に喩ふ。

起さんと言ふべからず。何を以ての故に、(幻)翳と(空)華の二法は相待にあらざるが故に。亦空華の空に滅する時、說いて虛空何時か更に空華を起さんと言ふべからず。何を以ての故に、空本より華なし、起滅にあらざるが故に。生死涅槃は起滅に同じ、妙覺圓照して(空)華と(幻)翳とを離る。善男子よ、當に知るべし、虛空は是れ暫有にあらず、亦暫無にあらず、況んや復た如來は圓覺に隨順して、虛空平等の本性たるをや。善男子よ、金鑛を銷すが如し。金は銷してあるにあらず、既已に金と成らば、重ねて鑛とならず、無窮の時を經れども金性を壞せず、應に說いて本成就にあらずと言ふべからず。如來の圓覺も亦復是の如し。善男子よ、一切如來の妙圓覺心は、本、菩薩及び涅槃なく、亦成佛及び不成佛なく、妄輪廻及び非輪廻なし。善男子よ、但だ諸の(七七)聲聞の圓ずる所の境界は、身心語言悉く皆斷滅し、遂に彼の親證所現の涅槃に至ること能はず。何に況んや能く(七八)有思惟の心を以て如來圓覺の境界を測度せん。螢火を取つて須彌山を燒くが如く、終に著くること能はず。輪廻の心を以て輪廻の見を生じ、如來の(七九)大寂滅海に入るに、遂に至ること能はず。是の故に我は說く、一切菩薩及び末世の衆生先づ無始輪廻の根本を斷ぜよと。

善男子よ、思惟を作すことあるは有心より起る。皆是れ六塵妄想の緣氣にして、實心の體にあらざること已に空華の如し。此の思惟を用ゐて佛境(界)を辨ずることは、猶ほ空華の復た空果を結ぶが如

【七七】聲聞とは佛の教誨の聲を聞き悟道する聖者のこと。

【七八】有思惟とは凡夫の取捨憎愛にわたる心のこと。

【七九】大寂滅海とは佛の圓覺の悟のこと。

く、展轉して(畢竟)妄想なり、是の處りあることなし。
善男子よ、(八〇)虚妄の浮心は諸の(八一)巧見多ければ圓覺の方便を成就すること能はず。是の如く分別するは正問と爲すにあらず。』爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、偈を説いて言はく、
『金剛藏よ、當に知るべし、如來寂滅の性は、未だ曾て終始あらず。若し輪廻の心を以つて、思惟せば即ち旋復せん。
但だ輪廻の際に至つて、佛海に入ること能はず。譬へば金鑛を銷すに、金は銷すが故に有るにあらず。復た本來金なりと雖も、終に銷すを以て成就す。一たび眞金の體と成れば、復た重ねて鑛とならず。
生死と涅槃と、凡夫及び諸佛は、同じく空華の相となす、思惟すら猶幻化の如し、何に況んや虚妄を詰んをや。若し能く此心を了せば、然る後に圓覺を求めん。』
【彌勒菩薩章】 是に於て彌勒菩薩、大衆中にあつて即ち座より起ちて佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し。長跪叉手して佛に白して言さく、
『大悲世尊、廣く菩薩の爲に秘密藏を開いて、諸の大衆をして深く輪廻を悟らしめ、邪正を分別して、能く末世一切の衆生に無畏(決定)の(八二)道眼を施し、大涅槃に於て決定の信を生ぜしめ、復た重

【八〇】虚妄の浮心とは輪廻の根本たる有思惟の心のこと。
【八一】巧見とは普通の智慧分別と云ふ程の義なり。
【八二】道眼とは佛法の眞理を看破すべき理想的認識力を云ふ。

ねて輪轉の境界に隨つて、循環の（八三）見を起すことなからしめ給へ。世尊よ、若し諸の菩薩及び末世の衆生にして、如來の（八四）大寂滅海に遊ばんと欲せば、云何が當に輪廻の根本を斷ずべきや。諸の輪廻に於て幾ばくの種性ありや。佛の菩提を修するに幾等の差別ありや。塵勞に（八五）廻入して當に幾種の教化方便を設けて、諸の衆生を度すべきや。惟願くは救世の大悲を捨てず、諸の修行せる一切菩薩及び末世の衆生をして（八六）慧目肅清にして、心鏡を照輝し、圓に如來無上の知見を悟らしめ給へ。』

爾の時に世尊、彌勒菩薩に告げて言はく、

『善哉、善哉、善男子よ、汝等乃ち能く諸の衆生の爲に、如來深奧秘密微妙の義を請問す。諸の菩薩をして慧目を潔清し、及び一切末世の衆生をして永く輪廻を斷じ、心に（八七）實相を悟り（八八）無生忍を具せしめん。汝等諦に聽け當に汝が爲に説くべし。』時に彌勒菩薩、敎を奉じて歡喜し、諸の大衆は默然として聽けり。『善男子よ、一切衆生は無始際より種種の恩愛・貪欲あるによるが故に輪廻あり。若し諸の世界一切の種性は（其の）（八九）卵生・胎生・濕生・化生（を問はず）。皆淫欲に因て性命を正くす、當に知るべし、輪廻は愛を根本となせるを。

【八三】見は見解分別なれども此所にては妄見のこと。

【八四】大寂滅海とは不生不滅、無爲寂靜の境界を云ふ。海の字は如上の德を形容す。

【八五】廻入とは通俗にいふ混入同化なり。

【八六】慧目は智慧の眼と云ふこと。心鏡はこころのこと。

【八七】實相とは虚妄の相を離れたる有りのままのすがた、所謂眞如實相なり。

【八八】無生忍とは不生不滅の眞如法性を忍知して決定安住する位のこと、其には無生法忍といふ。

【八九】胎卵濕化は之を四生として總括す、生物の生るゝ形式は皆之に盡く。

(九〇)諸欲あるに由つて愛性を助發す。是故に能く生死をして相續せしむ。欲は愛に因つて生じ命は欲に因つてあり、衆生の命を愛するは却て欲の本による。欲を愛するを因となし、命を愛するを果となす。欲境に於て諸の違順を起すに由て、境・愛心に背きて憎嫉を生じ種種の業を造る。是の故に復地獄餓鬼に生ず。欲の厭ふべきを知つて、業を厭ふの道を愛し、惡を捨て善を樂へば復た(九一)天人に現ず。又諸愛の厭惡すべきを知るが故に、愛を棄て(九二)捨を樂へば、還つて愛の本を滋す。便ち有爲の中の増上の善果を現ず。皆輪廻の故に(九三)聖道を成せず。是故に衆生、生死を脫し、諸の輪廻を免れんと欲せば、先づ貪欲を斷じ及び(九四)愛渴を除くべし。善男子よ、菩薩變化して世間に示現するは愛を本と爲すにあらず、但慈悲を以て彼をして愛を捨てしめ、諸の貪欲(の業因)を假りて、而して生死に入る。若し諸の末世の一切衆生能く諸欲を捨て、及び憎愛を除き永く輪廻を斷じて、如來圓覺の境界を勤求せば、清淨心に於て即ち(無上の佛知見を)開悟することを得べし。善男子よ、一切衆生は貪欲を本とするに由つて、無明を發揮して(九五)五性の差別等からざることを顯出し、二種の障に依て深淺を現ず。云何んが二障なる。一には(九六)理障なり、正知見を礙ふ。二に

【九〇】諸欲とは財、色、食、名、睡等の欲をいふ。
【九一】天人とは天上と人間のこと。
【九二】捨とは心所の名、行捨とも云ふ。心をして惛沈と掉擧とを離れて、平等安適ならしむる精神作用のこと。
【九三】聖道とは眞實無爲常住の大道を云ふ。
【九四】愛渴の渴の字は貪愛の心の甚しき狀を形容せるなり。
【九五】五性とは凡夫性、二乘性、菩薩性、如來性、外道性なり。
【九六】理障とは根本無明のことにて、迷執の本源なり。

は（九七）事障なり、諸の生死を續く、云何んが五性なる。善男子よ、若し此の二障にして、未だ斷滅を得ざれば未成佛と名く。若し諸の衆生永く貪欲を捨て、先づ事障を除き、未だ理障を斷ぜざれば、但だ能く聲聞・緣覺に悟入して、未だ菩薩の境界を顯住すること能はず。

善男子よ、若し諸の末世の一切衆生にして、如來の大圓覺海に汎ばんと欲せば、先づ當に願を發して勤めて二障を斷ずべし。二障已に伏すれば即ち能く菩薩の境界に悟入す。若し事理の障已に斷滅せば即ち如來微妙の圓覺に入り、菩提及び大涅槃を滿足せん。善男子よ、一切衆生、皆圓覺を證して、（九八）善知識に逢ひ、彼の所作の因地の法行に依つて、爾の時修習するに、便ち（九九）頓漸あり。若し如來の無上菩提正修行の路に遇へば、根に大小なく皆佛果を成ず。若し諸の衆生、善友を求むと雖も、邪見の者に遇ひて未だ正悟を得ざれば、是を則ち名けて外道種性と爲す。邪師の過謬なり、衆生の咎にあらず、是を衆生の五性差別と名く。善男子よ、菩薩は唯大悲と方便とを以て、諸の世間に入り未悟を開發せしめ、乃至（一〇〇）種種の形相を示現し、逆順の境界に其れと事を同うし、化して成佛せしむることは、皆無始淸淨の（佛の本）願力に依れり。若し末世の一切衆生にして、大圓覺に於て增上心を起さば、當に菩薩淸淨の大

【九七】事障とは煩惱障のことにて、本心が無明の爲めに汚さるるを云ふ。

【九八】善知識とは正法を說いて人をして佛道に入らしめ、解脫を得しむる人のこと。

【九九】頓とは直ちに大乘に入る頓悟の機に對して說く法。漸とは次第に修學して大乘に入る漸入の機の爲めに說く法。

【一〇〇】種種の形相とは比丘、比丘尼、信男、信女、長者、居士、宰官、婆羅門等の身を現じて衆生を濟度する佛の形相を云ふ。

願を發すべし。(此の大願を發さんには)應に是の言を作すべし。願くは我今、佛の圓覺に住して、善知識を求めて、(一〇一)外道と及び(一〇二)二乘とに値ふことなく、願に依つて修行し、漸く諸障を斷じ、障盡き願滿ちて、便ち解脫淸淨の法殿に登り、大圓妙莊嚴の域を證せん。』爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言はく、

『彌勒よ、汝當に知るべし、一切諸の衆生の、大解脫を得ざること
は、皆貪欲に由るが故に生死に墮落す。
若し能く憎と愛と、貪と瞋と痴とを斷ぜば、差別の性に因らず、皆佛道を成ずることを得、二障永く銷滅せん、師を求めて正悟を得、菩薩の願に隨順して、大涅槃に依止せよ。
十方諸の菩薩は、皆大悲の願(力)を以て、生死に入ることを示現す。
現在修行の者、及び末世の衆生も、勤めて諸の愛見を斷じて、便ち大圓覺に歸せよ。』

【淸淨慧菩薩章】是に於て、淸淨慧菩薩、大衆の中に在りて、卽ち座より起ちて佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、長跪叉手して佛に白して言く、『大悲世尊は、我等輩の爲に廣く是の如き不思議の事を說き給へり。本見ざる所、本聞かざる所、我等今佛の善誘を蒙り、身心泰然として大饒益を得たり。願くは諸の來れる一切法衆の爲めに、重ねて(一〇三)法王圓滿の覺性を宣べ給へ、一切衆生と及び

【一〇一】外道とは佛教以外の諸教學を指す。六師外道、九十五種外道等なり、又異端邪說の義にも用ゆ。
【一〇二】二乘とは聲聞乘と緣覺乘なり。
【一〇三】法王とは佛陀世尊なり。

諸の菩薩と如來世尊との所證(の覺性)所得(の位地)は云何んが差別せん。末世の衆生をして此の聖教を聞きて隨順し、開悟して漸次に能く入らしめ給へ。』是の語を作し已つて、五體を地に投じ、是の如く三たび請じ終つて復た始む。

世尊、淸淨慧菩薩に告げて宣はく、

『善哉、善哉、善男子よ、汝等乃ち末世の衆生の爲めに、如來に漸次の差別を請へり。汝(等)今諦に聽け、當に汝(等)が爲めに說くべし。』

時に淸淨慧菩薩、敎を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽けり。

『善男子よ、(一〇四)圓覺の自性は性にあらず。(然りと雖も此の)性「の中には皆悉く圓覺の性」あり、諸性に循つて起る「圓覺は自性を守らず、諸の差別の性に徧滿するが故に」、(所)取もなく(能)證もなし。(一〇五)實相の中に於て實に菩薩及び諸の衆生なし。何を以ての故に、菩薩も衆生も皆是れ幻化なり。(一〇六)幻化滅なるが故に證を取るものなし。譬へば眼根の自から眼を見ざるが如し。性自から平等にして平等ならしむるものなし。衆生は迷倒して未だ一切の幻化を除滅すること能はず。滅と未滅とに於て(一〇七)妄功用の中に便はち差別を顯はす。若し如來の寂滅に隨順するを

【一〇四】圓覺の自性云々とは前の五性及び貪愛輪廻差別等の性と異るが故に性にあらずと云ふ意。

【一〇五】實相とは圓覺のこと。

【一〇六】幻化滅とは圓覺の自性の上には畢竟凡聖迷悟の相なし衆生と云ひ菩薩と云ふは、且らく圓覺の自性の顯隱による一時の現象に過ぎざれば、幻化を去りて、後自性を見るにあらざるを以て、本來幻化なきことを云ふ。

【一〇七】妄功用とは妄りに心を使役すること。

得ば、實に寂滅も及び寂滅者もなし。善男子よ、一切衆生は、無始よりこのかた、妄想の我、及び我を愛する者に由つて、曾つて自ら（一〇八）念念生滅することを知らず。故に憎愛を起し。五欲に耽著す。若し善友の教に遇うて、（淸）淨圓覺の性を開悟せしむれば、起滅を發明して、卽ち（一〇九）此の生は性自から勞慮することを知る。若し復人あり、勞慮永く斷じて法界淨を得れば、卽ち彼の淨解、自の障礙となる。故に圓覺に於て自在ならず、此を凡夫の(相應)隨順覺性と名く。善男子よ。一切菩薩は解の礙たることを見て、解の礙を斷ずと雖も、猶（一一〇）見覺に住し、覺の礙、礙と爲りて而も自在ならず。此を菩薩の（一一一）未入地者の隨順覺性と名く、善男子よ、（一一二）照あり、覺あるは倶に障礙と名く、是の故に菩薩は常に覺して(覺に安)住せず、照と照者と同時に寂滅す。譬へば人ありて自ら其の首を斷つに首已に斷つが故に、能く斷つ者なきが如し。卽ち礙心を以て自ら諸礙を滅するに、礙(心)已に斷滅すれば礙を滅する者なし。

修多羅の敎は月を標す指の如し。若し復た月を見れば標す所畢竟月にあらざることを了知す。一切如來の種種の言説を以て菩薩に開示するも亦復是の如し。此れを菩薩の（一一三）已入地者の隨順覺性

【一〇八】念々生滅とは一念一念の生滅と云ふことなり

【一〇九】此の生とは四大五蘊假和合の生のこと、勞慮とは心を勞役することにて妄念妄想を云ふ。

【一一〇】見覺とは前の淨解が却て障礙となることを看破したる識見のこと。

【一一一】未入地者とは未だ不退轉の境界に達せざる者のこと。

【一一二】照とは凡夫の隨順覺性の法界淨を指す。覺とは見覺を指す。

【一一三】已入地者とは已に不退轉地に入りたる修行地の者のこと。

と名く。善男子よ、一切の障礙は卽ち(如來)究竟の覺(性)なり。得念も失念も解脱にあらざることなし。成法も破法も皆涅槃と名く。智慧も愚癡も通じて般若なり、菩薩外道の成就する所の法は、同じく是れ菩提なり。無明と眞如とは境界異るなし。諸の戒定慧及び淫怒癡俱に是れ(二四)梵行なり。衆生も國土も同一法性なり。地獄も天宮も皆淨土なり。(二五)有性も無性も齊しく佛道を成じ、一切の煩惱畢竟じて解脱なり。(佛の)(二六)法界海慧は諸相を照了するに猶虛空の如し。此を如來の隨順覺性と名く。善男子、諸菩薩及び末世の衆生よ、一切の時に居て妄念を(生)起せざれ。諸の妄念に於て亦息滅せざれ。「其の故如何んと云ふに、妄を捨て眞を求めんと欲して、更に妄念を生ずれども、此の妄念は向上の妄念なるを以て、息滅せしめざるを要するなり。」妄想の境に住して了知を加へざれ。了知無きに於て眞實(知)を辨せざれ。彼の諸の衆生是の法門を聞きて信解し、受持し、驚異を生せざれば、是を卽ち名けて覺性に隨順すと爲す。善男子よ、汝等當に知るべし。是の如きの衆生已に曾て百千萬億恒河沙の諸佛及び大菩薩を供養して、衆の德本を植ゑたり。佛は是の人を說きて(二七)一切種智を成就すと爲す。」爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言はく、

【二四】梵行とは、梵は淨の義にて淸淨なる行を云ふ。
【二五】有性、無性とは佛性の有るものと無きものとを云ふ。
【二六】法界海慧とは如來世尊の廣大無邊なる智慧光明の事。
【二七】一切種智とは三智と稱する世間智(凡夫外道の智)、出世間智(聲聞圓覺の智)、出世間上上智(佛菩薩の智)の一にして、一種の智を以て一切諸佛の道法に了達し、一切衆生の因種を知り、種種の法門を觀じて、諸の無明を破する智慧の義、佛陀の智慧と云ふことなり。

『淸淨慧よ、當に知るべし、圓滿せる菩提の性は、取もなく證もなし、菩提も衆生もなし。覺と未覺との時に、漸次に差別あり。衆生は解の爲に礙へられ、菩薩は未だ覺を離れず。地に入りて永く寂滅し、一切の相に住せず、大覺悉く圓滿するを、名けて徧（一切所覺性）隨順となす。

末世の諸の衆生、心に虛妄を生ぜざれば、佛は是の如きの人を卽ち現世に（於ける）菩薩なりと說き給ふ。

恒沙の佛に供養して功德已に圓滿せば、（幾）多の方便ありと雖も、皆（圓覺の性に）隨順する智と名く。』

【威德自在菩薩章】　是に於て威德自在菩薩、大衆の中にありて、卽ち座より起つて、佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、長跪叉手して佛に白して言さく、

『大悲世尊、廣く我等が爲に是の如く隨順覺性を分別し、諸の菩薩をして覺心光明にして、佛の（二八）圓音を承けて、修習に因らずして善利を得せしめ給へ。世尊よ、譬へば大なる城の外に四の門あり、方に隨つて來る者止だ一路にあらざるが如し。一切の菩薩、佛國（土）を莊嚴し、及び菩提を成ずること一方便にあらず。惟だ願くは、世尊よ、廣く我等が爲に一切方便の漸次、並びに修行の人に總べて幾種あるか、此の會の菩薩、及び末世の衆生の大乘を求むる者をして速に開悟を得て、如來

【二八】圓音とは佛の圓滿なる音辭と云ふこと。

の大寂滅海に遊戯せしめたまへ。是の語を作し已つて五體を地に投じ、是の如く三び請じ終つて復た始む。爾の時に世尊、威德自在菩薩に告げて言はく、

『善哉、善哉、善男子よ、汝等乃ち能く諸の菩薩及び末世の衆生の爲に如來に是の如きの方便を問へり。汝今諦に聽け、當に汝が爲めに說くべし。』時に威德自在菩薩は敎を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽けり。

『善男子よ、(二九)無上妙覺は諸の十方に徧(在)して(十方三世の)如來を出生す。一切の法と同體にして平等なり。諸の修行に於て實に二あるなし。方便隨順するに其數無量なり。圓に所歸を攝し、生の差別に(隨)順すれば當に(三〇)三種あるべし。善男子よ、若し諸の菩薩(如來の淸)淨圓覺(の性)を悟り、淨覺の心を以つて(寂)靜を取り行と爲し、諸念を澄むるに由つて、(三一)識の煩動を覺し(三二)靜慧發生して、身心の客塵此より永く滅すれば、便ち能く內、(三三)寂靜輕安を發さん。寂靜に由るが故に、十方世界の諸の如來の心中に於て顯現すること鏡中の像の如し。此の方便をば便ち

【二九】無上妙覺とは宇宙平等の本體たる大圓覺の性のこと。

【三〇】三種とは一に Samādhi 止息と譯す、定の異名にして、寂靜の義。二に Samāpatti 等至と譯す、定を修すれば光明を發して善惡の境に於て平靜止住することを得るを云ふ。三に、Dhyāna 靜慮と譯す、俗業を離れ、繫縛を斷じ、慮を靜め心を明にして眞正の理に達するを云ふ。

【三一】識とは情意分別等の意識のこと。煩動とは煩惱妄動の略。

【三二】靜慧とは動亂を離れたる智慧のこと、客塵とは妄念のこと。

【三三】寂靜輕安とは六根六塵の動亂休息して、內心淸明和調なる狀態。

奢摩他と名く。善男子よ、若し諸の菩薩にして(淸)淨の圓覺(の性)を悟つて、淨覺(信解)の心を以つて(二四)心性と(二五)根塵とは皆幻化に因ると知覺すれば、卽ち諸幻を起して以つて幻者(の根本たる無明)を除き、諸幻を變化して而して(如)幻衆(生)を開(導敎誘)し、幻を起すに由るが故に便ち能く内に大悲輕安を發し、一切の菩薩は此より行を起して漸次に增進せん。彼の幻を觀ずる者も、幻に同ずるに非ざるが故に、幻に同ずるに非ざるの觀(知)皆是れ幻なるが故に、(能幻所)幻の相永く離れむ。是の諸の菩薩の(二六)所圓の妙行は、土の苗を長ずるが如し、此方便をば三摩鉢提と名く。

善男子よ、若し諸の菩薩、淨圓覺を悟り、淨覺の心を以つて、幻化及び諸の靜相を取らず、身心を了知するは、皆罣礙なり。(二七)知覺なきの明は諸の礙に依らず、永く礙と無礙との境(界)を、超過するを得。(二八)受用世界及び心身は(二九)塵域に相在せり。(譬へば)器中の(三〇)鍠聲の外に出るが如し。煩惱涅槃相留礙せざれば、便ち能く内に寂滅輕安(の眞智を)發す。妙覺に隨順する寂滅の境界は自他の身心の及ぶ能はざる所なり。衆生も壽命も皆浮想たり。此の方便をば便ち名けて禪那となす。善男子よ、此の三の法門は皆是れ圓覺に親近し、隨順し、十方の如來も此に因つて成佛す。種種の方便一切の同異も、皆是の如き三種の事業に依る。若し(此の三法門を

【二四】心性とは六識を指す。
【二五】根塵とは六根と六塵のこと。
【二六】所圓とは圓滿なること。
【二七】知覺とは心に繫するを知と云ひ、身に觸るゝを覺と云ふ、身心の作用のこと。
【二八】受用世界とは衣食資財等によりて一身が託する國土のこと。
【二九】塵域は五濁惡世のこと。
【三〇】鍠は樂器の一種。

具足し(圓)滿に證(悟)することを得ば、卽ち圓覺を成就せむ。善男子よ、假使人ありて聖道を修し、(竝に多くの人を)敎化して、百千萬億の阿羅漢と（三二）辟支佛果とを成就するも、人あり此の圓覺無礙の法門を聞きて、一（三三）刹那の頃も(妙覺に)隨順して修習せんには如かず。』

爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說きて言はく、

「威德よ、汝當に知るべし、無上大覺の心は、本際二相なし、諸の方便に隨つて、其の數卽ち無量なり。

如來は總べて開示し給ふに、便ち三の種類あり。寂靜の奢摩他は、

鏡の諸像を照すが如く、如幻の三摩提は、苗の漸く增長するが如し。

禪那は唯寂滅なり、彼の器中の鍠の如し、三種の妙法門は、皆是れ覺に隨順す。

十方の諸の如來、及び諸の大菩薩は、此に因つて道を成ずることを得、三事圓證するが故に究竟涅槃と名く。」

【辯音菩薩章】 是に於て辯音菩薩、大衆の中にありて、卽ち座より起つて佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、長跪叉手して、佛に白して言さく、

「大悲世尊よ、是の如き法門は甚だ希有なりと爲す。世尊よ、此の諸の方便一切の菩薩圓覺の門に

【三二】辟支佛は梵語、緣覺と譯す、飛花落葉の緣を觀じて悟る聖者なり又獨覺とも云ふ。
【三三】刹那とは梵語、最大短時の標準なり。

於て幾の修習かある。願くは大衆及び末世の衆生の爲に、方便開示して實相を悟らしめ給へ。」是の語を作し已つて五體を地に投じ、是の如く三び請し終つて復た始む。

爾の時に世尊、辯音菩薩に告げて言はく、『善哉、善哉、善男子よ、汝等乃ち能く諸の大衆及び末世の衆生の爲めに如來の是の如きの修習を問へり。汝今諦に聽け、當に汝が爲めに說くべし。」時に辯音菩薩は敎を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽けり。

『善男子よ、一切如來の圓覺は淸淨にして、本より修習及び修習の者なし、一切菩薩及び末世の衆生は、未だ覺せざるに依て(三三)幻力修習す。爾の時に便ち二十五種の淸淨の定(三四)輪あり。

若し諸の菩薩にして、唯極靜を取り(息心寂)靜の力に由るが故に、永く煩惱を斷じて、究竟成就し、座より起ずして便ち涅槃に入らば、此の菩薩をば單に奢摩他を修すと名く。若し諸の菩薩にして唯如幻を觀じ、力を以ての故に、世界の種種の作用を變化し、備に菩薩淸淨の妙佛行を行じ、(三五)陀羅尼に於て寂念及び諸の靜慧を失はざれば、此菩薩をば單に三摩鉢提を修すと名く。若し諸の菩薩にして唯如幻を滅して作用を取らず、獨り煩惱を斷じ、煩惱を斷じ盡して、便ち實相を證すれば、此の菩薩をば單に禪那を修すと名く。若し諸の菩薩にして先づ至(極寂)靜を取り、(寂)靜(智)慧の心を以て諸幻を照し、便ち是の中に於て菩薩の行を起さ

【三三】幻力修習とは一切の菩薩及び末世の衆生が、未だ圓覺を顯はし得ぬ爲めに且らく假りに修行するを以て名く。

【三四】輪とは摧破の義、輾輪の義。能く惑障を摧き正智をなして轉ぜしむ。

【三五】陀羅尼は圓覺を指す。

ば、此の菩薩をば先きに奢摩他を修し、後に三摩鉢提を修すと名く。若し諸の菩薩にして(寂)靜(智)慧を以つての故に、至(極寂)靜の性を證して便ち煩惱を斷じて永く生死を出でなば、此の菩薩をば先に奢摩他を修して、後に禪那を修すと名く。若し諸の菩薩にして、寂靜(智)慧を以て復た幻力を現じ、種種に變化して諸の衆生を度し。後に煩惱を斷じて而して寂滅に入らば、此の菩薩をば先に奢摩他を修し、中に三摩鉢提を修し、後に禪那を修すと名く。若し諸の菩薩にして、至(極寂)靜の力を以て煩惱を斷じ已つて、後に菩薩清淨の妙行を起して諸の衆生を度せば、此の菩薩をば先に奢摩他を修し、中に禪那を修し、後に三摩鉢提を修すと名く。若し諸の菩薩にして至(極寂)靜の力を以て心に煩惱を斷じて、復た衆生を度し、世界を建立せば、此の菩薩をば先に奢摩他を修して、齊しく三摩鉢提と禪那とを修すと名く。若し諸の菩薩にして、至(極寂)靜の力を以て變化(の力)を資(助策)發して、後に煩惱を斷ずれば、此の菩薩をば奢摩他と三摩鉢提とを修して後に禪那を修すと名く。若し諸の菩薩にして至(極寂)靜の力を以て用ゐて寂滅を資り、後に作用を起して世界を變化せば、此の菩薩をば齊しく奢摩他と禪那とを修し、後に三摩鉢提を修すと名く。若し諸の菩薩にして、變化の力を以て種種に隨順して(衆生を度したる後)至(極寂)靜を取らば、此の菩薩をば先に三摩鉢提を修し、後に奢摩他を修すと名く。若し諸の菩薩にして、變化の力を以て種種の境界に寂滅を取らば、此の菩薩をば先に三摩鉢提を修し、後に禪那を修すと名く。若し諸の菩薩にして、變化の力を以て佛事を作し、

寂靜に安住し、煩惱を斷せば、此の菩薩をば、先きに三摩鉢提を修し、中に奢摩他を修し、後に禪那を修すと名く。若し諸の菩薩にして、變化の力を以って無礙に作用し、煩惱を斷ずるが故に、至(極の寂)靜に安住せば、此の菩薩をば先に三摩鉢提を修し、中に禪那を修し、後に奢摩他を修すと名く。若し諸の菩薩にして、變化の力を以って方便作用して、至靜寂滅二倶に隨順せば。此の菩薩をば先に三摩鉢提を修し、齊しく奢摩他と禪那とを修すと名く。若し諸の菩薩にして、變化の力を以て種種に(妙)用を起し、至靜を資つて後に煩惱を斷せば、此の菩薩をば齊しく三摩鉢提と奢摩他とを修し、後に禪那を修すと名く。若し諸の菩薩にして、變化の力を以て寂滅を資り、後に清淨無作の靜慮に住せば、此の菩薩をば先に齊しく三摩鉢提と禪那とを修し、後に奢摩他を修すと名く。若し諸の菩薩にして、寂滅(斷煩惱)の力を以て至靜を起し、清淨(無作の境界)に住すれば、此の菩薩をば先きに禪那を修し、後に奢摩他を修すと名く。若し諸の菩薩にして、寂滅(斷煩惱)の力を以て作用を起し、一切の境に於て寂(滅作)用隨順せば、此の菩薩をば先に禪那を修し、後に三摩鉢提を修すと名く、若し諸の菩薩にして、寂滅(斷煩惱)の力を以つて種種の自性に〔於て〕靜慮に安(住)し、變化を起せば、此の菩薩をば先に禪那を修し、中に奢摩他を修し、後に三摩鉢提を修すと名く。若し諸の菩薩にして、寂滅(斷煩惱)の力を以て、無作の自性に(於て)作用を起し、清淨の境界に(安住して)靜慮に歸せば、此の菩薩をば先きに禪那を修し、中に三摩鉢提を修し、後に奢摩他を修すと名く、若し諸の

菩薩にして、寂滅(斷煩惱)の力を以つて種種清淨「の境界に於て」、靜慮に(安)住して變化を起せば、此の菩薩をば先に禪那を修し、齊しく奢摩他と三摩鉢提とを修すと名く。若し諸の菩薩にして、寂滅(斷煩惱)の力を以て至靜を資つて變化を起さば、此の菩薩をば齊しく禪那と奢摩他とを修し、後に三摩鉢提を修すと名く。若し諸の菩薩にして、寂滅(斷煩惱)の力を以て變化を資つて、至靜清明の境慧を起せば、此の菩薩をば齊しく禪那と三摩鉢提とを修し、後に奢摩他を修とす名く。若し諸の菩薩にして、圓覺の(智)慧を以て圓に一切に合し、諸の性相に於て覺性を離るることなければ、此の菩薩をば圓に三種を修し、自性清淨に隨順すと爲すと名く。善男子よ、是を菩薩の二十五輪と名く、一切の菩薩の修行是の如し。若し諸の菩薩及び末世の衆生にして、此の輪に依る者は當に梵行を持し寂靜思惟して、十方三世一切の諸佛に對して哀を求め懺悔すべし。三七日を經二十五輪に於て各標記を安じ、至心に哀愍を求めて、手に隨つて結び取り、結に依つて開示し、便ち頓漸を知る。一念も疑悔せば卽ち成就せざるべし。』爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言はく。

『辯音よ、汝當に知るべし、一切諸の菩薩の、無礙清淨の(智)慧は、皆禪定に依つて生ず。

所謂奢摩他と三摩鉢提と禪那との、三法を頓と漸とに修するに、二十五(種の定)輪あり。

十方の諸の如來も、三世の修行者も、此の法に因りて、菩提を成ずることを得ざるなし。

唯頓覺の人と、並びに法に隨順せざるものをば除く。
一切諸の菩薩、及び末世の衆生も、常に當に此の(定)輪を持ちて、隨順して修習すべし。
佛の大悲の力に依つて、久しからずして涅槃を證せん。』

【淨諸業障菩薩章】是に於て淨諸業障菩薩、大衆の中にありて卽ち座より起ちて、佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、長跪叉手して佛に白して言さく、『大悲世尊は、我等輩の爲めに廣く是の如きの不思議の事。一切如來の因地の行相を說いて、諸の大衆をして未曾有を得せしめ給へり(三七)調御の恒沙劫を歷て勤苦せる一切の境界の功用を覩見すること猶ほ一念の如し。我等菩薩深く自から慶慰す。世尊よ、若し此の覺心本性淸淨ならば、何に因つてか染汚(して煩惱妄想を起)して、諸の衆生をして迷悶して(大圓覺に)入らざらしむるや、唯願くは如來よ、廣く我等が爲めに法性を開悟して、此の大衆及び末世の衆生をして、將來の眼と作さしめ給へ。』是の語を說き已つて五體を地に投じ、三び請し終つて復た始む。

爾の時に世尊、淨諸業障菩薩に告げて言はく、
『善哉、善哉、善男子よ、汝等乃ち能く諸の大衆及び末世の衆生の爲めに如來に是の如きの方便を諮問せり。汝(等)今諦に聽け、當に汝(等)が爲めに說くべし。』時に淨諸業障菩薩は敎を奉じて歡

【三七】調御は佛の十號の一也。卽ち御者の善く馬を御するが如く、如來は一切衆生を自在に御し給ふ。故に調馬師に譬へたるなり。

喜し、及び諸の大衆は默然として聽けり。

『善男子よ、一切衆生は無始よりこのかた、妄想して我と人と衆生と及び壽命とありと執じ、四顚倒を認めて實我の體と爲す。此に由つて便ち憎愛の二境を生じ、虛妄の體に於て重ねて虛妄を執す。二妄相依つて妄業道を生ずるが故に流轉あり。流轉を厭ふものは妄に涅槃を見る、此に由つて清淨の(圓)覺に入ること能はず。覺の諸の能入の者を違拒するにあらず、諸の能入の者あるも覺の入にあらざるが故に。是の故に(凡夫煩惱の)動會も(聲聞緣覺修行者の)息念も皆迷悶に歸す。何を以つての故に、無始本起の無明ありて、己れが主宰と爲るに由つて、一切衆生生れながら(一三七)慧目なし、身心等の性皆無明なり。譬へば人あつて自から命を斷せざるが如し。是の故に當に知るべし、我を愛することある者は我と共に隨順し、隨順にあらざる者には便ち憎怨を生ず、憎愛の心の爲めに無明を養ふが故に、相續して道を求むるも皆成就せず。善男子よ、如何んが(一三八)我想なる。謂く、諸の衆生の心に證する所のものなり。善男子よ、譬へば人あり、(一三九)百骸調適せば忽ち、我が身を忘る。(一四〇)四支弦緩し、攝養方(法)に乖き、微しく針艾を加ふれば、卽ち我あるを知る。是の故に(一四一)證取して方に我が體を現す。善男子よ、是の心乃至如來の畢竟了知せる清淨

【一三七】慧目とは圓覺の本性を洞觀する智慧の眼目と云ふ意。
【一三八】我相とは妄想によりて現はれたる我に似たるすがたにして、凡夫の認めて實我と執著するもの。
【一三九】百骸調適は身體の能くととのふこと。
【一四〇】四支弦緩は手足の緩怠せることを云ふ。
【一四一】證取は認識と云ふ程の義なり。

涅槃を證するも皆是れ我相なり。善男子よ、如何んが（二四二）人相なる。謂く、諸の衆生の心に悟證するものなり。善男子よ、我ありと悟る者は復た我を認めず、我にあらずと悟る所の悟も亦是の如し。悟り已つて一切の證を超過する者も悉く人相となす。善男子よ、其の心乃至圓に涅槃も倶に是れ我と悟るも、心に少悟を存すれば、備さに證理を殫せども、皆人相と名く。善男子よ、云何んが（二四三）衆生相なる。謂く、諸の衆生は心に自から證も悟も及ばざる所のものなり。善男子よ、譬へば人ありて是の如きの言を作すが如し、我は是れ衆生なりと。則ち知んぬ、彼の人の衆生なりと說くは我にもあらず、彼にもあらざることを。云何んが我にあらざる。我は是れ衆生なれば、即ち是れ我にあらず。云何んが彼にあらざる。我は是れ衆生なれば、彼の我にあらざるが故に。善男子よ、唯諸の衆生の了證と了悟とを皆我人と爲す。而して我人の相の及ばざる所の者の、了ずる所ありと存するを衆生と名く。善男子よ、云何んが（二四四）壽命相なる。謂く、諸の衆生、心照淸淨にして所了を覺する者なり。一切の業智自から見ざる所、猶ほ命根の如し。善男子よ、若し心に一切の覺を照見するものは皆塵垢となす。覺と所覺とは塵を離れざるが故に。湯の氷を消すに、別に氷ありて氷消くと知るものなきが如し。我を存して我を覺るも亦復た是の如し。善男子よ、

【二四二】人相とは我は悟道に執著せずと云ふこに執著すること。悟道に執著せざるも猶悟我の心を存するを云ふ。

【二四三】衆生相とは衆生が妄に五蘊の法集まりて此の我が身を成すと誤解するを云ふ。

【二四四】壽命相とは衆生假和合の法の上に、妄に我は一期の壽命を受けたりと思ひ、我が壽命の長短等に對して誤解するを云ふ。

末世の衆生(一四五)四相を了せざれば、多劫を經て勤苦して道を修すと雖も、但だ(一四六)有爲と名く。終に眞實無爲の一切の聖果を成ずること能はず。是の故に名けて(一四七)正法の末世と爲す。何を以つての故に、一切の我を認めて涅槃と爲すが故に、證あり悟あるを成就と名くるが故に。譬へば人あり、賊を認めて子と爲せば、其の家の財寶終に成就せざるが如し。何を以つての故に、我愛あるものは亦涅槃を愛す、我愛の根(本)を(調)伏するを涅槃の相と爲す。我を憎むことあるものは、亦生死を憎む、愛は眞の生死なることを知らざるが故に、別に生死を憎むを不解脱(乃ち繫縛)と名く。云何んが當に法の解脱すべからざることを知るべきや。善男子よ、彼の末世の衆生の菩提を習ふものの、己れが微證を以つて自の清淨となす。尙ほ未だ我相の根本を盡すこと能はず。若し復た人ありて彼の法を讚歎すれば、卽ち歡喜(の心)を生じて、便ち濟度せんと欲すれども、若し復た彼の所得(の法)を誹謗すれば、便ち瞋恨を生ず。則ち知んぬ、我相堅固に執著して(一四八)藏識に潛伏し、(一四九)諸根に遊戲して曾て間斷せざることを。

善男子よ、彼の道を修するものは、我相を除かず、是の故に清淨の(圓)覺に入ること能はず。善男子よ。若し我は空なりと知らば、我を毀る者なし。我ありて法を說くには、我未だ斷せざればなり。

【一四五】四相とは我相、人相、衆生相、壽命相なり。
【一四六】有爲とは生滅變化を免れざるものをいふ。
【一四七】正法とは佛法の世間に行はるる初の一千年間を云ふ。次の一千年を像法、其の次の一萬年を末法と云ふ。
【一四八】藏識は第八識のこと。
【一四九】諸根は眼、耳、鼻、舌、身、意の六根をいふ。

(我相已に然り、人相)衆生(相)、壽命(相)も亦た復た是の如し。善男子よ、末世の衆生は（二五〇）病を說いて法となす、是の故に名けて憐愍すべきものとなすなり。(故に)勤めて精進すと雖も諸病を增益す、是故に清淨の(圓)覺に入ること能はず。善男子よ、末世の衆生、四相を了せずして、如來の(解)行及び所行の處を以て自の修行となさば終に成就せず。或は衆生ありて未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證せりと謂ひ、勝進の者を見ては心に嫉妬を生ず。彼の衆生は未だ我愛を斷せざるに由る、是故に清淨の(圓)覺に入ること能はず。善男子よ、末世の衆生にして成道を希望し、悟を求めしむることなくして、唯多聞を益さば、我見を增長す。但當に精勤して煩惱を降伏し、大勇猛(の心)を起して、未だ（二五一）得ざるは得せしめ、未だ（二五二）斷せざるは斷せしむべし。貪・瞋・愛・慢・諂曲・嫉妬(等)、境に對して生せず、彼我恩愛一切寂滅す。佛は是の人を漸次に成就し、善知識を求め、邪見に墮せずと說く。若し所求に於て別に憎愛を生せば、即ち清淨(圓)覺海に入ること能はず。爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言はく、

「淨業よ、汝當に知るべし、一切諸の衆生は、皆我愛を執ずるによつて、無始より妄りに流轉して、未だ四種の相を除かざれば、菩提を成ずることを得ず。
愛憎心に生じ、諂曲諸念に存す、此の故に多く迷悶して、覺域に入ること能はず。

【二五〇】病とは我相、人相、衆生相、壽命相の四相を意味す。
【二五一】得は圓覺乘に於ける眞實無相の妙用功德を得ること。
【二五二】斷は顚倒妄想一切の障礙を斷つなり。

若し能く（一五三）悟刹に歸せんとせば、先づ貪瞋癡を去り、法愛も心に存せず、漸次に成就すべし。我が身はもと有ならず、憎愛何によりてか生せん、此の人善友を求めば、終に邪見に墮せず、所求に［に於て］別に心を生せば、究覺じて成就にあらず。』

【普覺菩薩章】是に於て普覺菩薩、大衆の中にありて卽ち座より起つて、佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、長跪叉手して佛に白して言さく、

『大悲世尊、快く禪病を說き、諸の大衆をして未曾有を得て、心意蕩然として大安穩を獲せしめ給へ。世尊よ、末世の衆生は、佛と去ること漸く遠くして、賢聖隱伏し、邪法增熾ならん。諸の衆生をして何等の人を求め、何等の法に依り、何等の行を行じ、何の病を除き去つて。云何が發心せしめ、彼の群盲をして邪見に墮ちざらしめん。』是の語を作し已つて五體を地に投じ、是の如く三たび請し終つて復た始む。

爾の時に世尊、普覺菩薩に告げて言はく、

『善哉、善哉、善男子よ、汝等乃ち能く如來に、是の修行を諮問し、能く末世の一切衆生に（一五四）無畏の道眼を施し、彼の衆生をして聖道を成ずることを得しめん。汝今諦に聽け、當に汝が爲めに說くべし。』

時に普覺菩薩敎を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽けり。

【一五三】刹は境なり。

【一五四】無畏とは佛菩薩の具する德の一にして、佛菩薩に智慧內にあるが故に畏るる所なきを云ふ。

『善男子よ、末世の衆生將に大心を發さんとして善知識を求め、修行せんと欲せば、當に一切正知見の人を求むべし。心相に住せず、聲聞緣覺の境に著せず、塵勞を現ずと雖も、心恒に清淨に、諸過あることを示せども、梵行を讃歎して、衆生をして不律儀に入らしめず、是の如きの人を求むれば、卽ち阿耨多羅三藐三菩提を得ん。末世の衆生、是の如きの人を見て應に供養して身命を惜まざれ。彼の善知識は、(一五五)四威儀の中に常に清淨を現じ、乃至、種種の過患を示現するも、心に憍慢するなし。況んや復た(一五六)摶財妻子眷屬をや。若し善男子、彼の善友に於て惡念を起さざれば、卽ち能く究竟じて正覺を成就し、心華發明して十方刹を照さん。

善男子よ、彼の善知識所證の妙法は、應に四病を離る。云何んが四病なる。一には作病。若し復た人ありて、是の如きの言を作さん、我本心に於て種種の行を作し、圓覺を求めんと欲すと。彼の圓覺の性は、(一五七)作得にあらざるが故に、說いて名けて病となす。二には任病。若し復た人ありて、是の如きの言を作さん、我等今は生死を斷せず涅槃を求めず、涅槃生死起滅の念なし。彼の一切に任せ、諸の法性に從ひて圓覺を求めんと欲すと。彼の圓覺の性は(一五八)任有にあらざるが故に、說いて名けて病となす。三には止病。若し復た人ありて、是の如きの言を作さん、我今自心に永く諸念を息め一切の性を得て寂然平等にして、圓覺を求めんと

【一五五】四威儀とは行、住、坐、臥の四事。
【一五六】摶は摶食の義なり。
【一五七】作得は作業によつて造り得ること。
【一五八】任有は自然に打ち任せること。

欲すと。彼の圓覺の性は（一五九）止合にあらざるが故に、說いて名けて病となす。四には滅病。若し復た人ありて、是の如きの言を作さん、我今永く一切の煩惱を斷じ、身心畢竟空うして所有なし。何に況んや根塵虛妄の境界をや。一切永く寂して圓覺を求めんと欲すと。彼の圓覺の性は寂相にあらざるが故に、說いて名けて病となす。四病を離るるものは則ち知る、淸淨なることを。是の觀を作す者を名けて正觀となす、若し他觀の者は名けて邪觀となす。善男子よ、末世の衆生、修行せんと欲する者は、應に命を盡して善友を供養し、善知識に事ふべし。彼の善知識來つて親近せんと欲するも、應に憍慢を斷ずべし。若し復た遠離すとも、應に瞋恨を斷ずべし。順逆の境を現ずること猶ほ虛空の如し。身心畢竟平等にして、諸の衆生と同體にして異ることなしと了知す。此の如く修行せば、方に圓覺に入るべし。善男子よ、末世の衆生、成道を得ざるは、無始より自他憎愛の一切の種子あるによる、故に未だ解脫せず。若し復た人ありて、彼の怨家を觀ること己が父母の如く、心に二あることなくんば、卽ち諸病を除かん。諸法の中に於て自他憎愛も亦復是の如し。善男子よ、末世の衆生も圓覺を求めんと欲せば、應に發心して、是の如きの言を作すべし、「虛空を盡せる一切の衆生をして、我皆究竟圓覺に入り、圓覺の中に於て覺を取る者なく、彼の我・人、一切の諸相を除かしめん」と。是の如く發心せば邪見に墮せず。」爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言はく、

【一五九】止合は妄を止めて眞に合すること。

『善覺よ、汝當に知るべし。末世の諸の衆生にして、善知識を求めんと欲せば、應に正見にして、心、二乘に遠ざかり、法中に四病の、作・止・任・滅を除ける者を求むべし。親近するも憍慢なく、遠離するも瞋恨なく、種種(順、逆)の境界を見て、心に當に希有を生ずること、還つて佛の出世の如くなるべし。非律儀を犯さず、戒根永く清淨にして、一切衆生を度し、究竟して圓覺に入り、彼の我・人の相なく、當に正智慧に依るべし、便ち邪見を超ることを得て、般涅槃を證覺せん。』

【圓覺菩薩章】是に於て圓覺菩薩、大衆の中にありて卽ち座より起つて佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、長跪叉手して佛に白して言さく、

『大悲世尊よ、我等輩の爲めに、淨覺種種の方便を說き、末世の衆生をして大增益あらしめ給へ。世尊よ、我等今已に開悟を得たり。若し佛の滅後の末世の衆生にして、未だ悟を得ざる者は、云何が安居して、此の圓覺淸淨の境界を修せん。此の圓覺の中の三種の淨觀は何を以て、首となさん。唯願くは大悲よ、諸の大衆、及び末世の衆生の爲めに大饒益を施し給へ。』是の語を作し已つて、五體を地に投じ、是の如く三たび請し終つて復た始む。

爾の時に世尊、圓覺菩薩に告げて言はく、

『善哉、善哉、善男子よ、汝等乃ち能く如來に是の如き方便を問ひ、佛の秘密大圓覺の心を信じて

修行せんと欲するもの、若し(二六〇)伽藍にあつて徒衆を安處せば、緣事あるが故に分に隨つて思察すること、我已に說くが如くせよ。若し復他事の因緣あることなくんば、卽ち(二六一)道場を建てて當に期限を立つべし。若し長期を立てば百二十日、中期は百日、下期は八十日、(二六二)淨居に安置すべし。若し佛現在ならば當に(二六三)正思惟すべし、若し復た滅後ならば形像を施設せよ。心に存し目に想うて正憶念を生ぜば、還つて如來常住の日に同からん。諸の(二六四)幡華を懸け、三七日を經て、十方の諸佛の名字を稽首(禮拜)して哀(愍)を求め(罪障を)懺悔すべし。善境界に遇はば心(二六五)輕安なることを得ん。三七日を過ぎて一向に念を攝めよ。若し夏首を經て、三月安居せば當に淸淨の菩薩の止住を爲すべし。心、聲聞を離れて、徒衆を假らず、安居の日に至つて、卽ち佛前に於て是の如きの言を作すべし。我、比丘・比丘尼・(二六六)優婆塞・優婆夷・某甲、菩薩乘に踞し、寂滅の行を修し、同じく淸淨の實相に入つて住持し、大圓覺を以つて我が伽藍となし、身心平等の性智に安居す。涅槃の自性は繫屬なきが故に、今我敬請して聲聞に依らず、當に十方如來、及び大菩薩と三月安居すべし、菩薩の無上妙覺を修する大因緣の爲めの故に、徒衆に繫らず。善男子よ、これを菩薩の示現安居

【二六〇】伽藍は梵語、衆園又は僧房と譯す。佛弟子相集りて道を修むる所、寺院のことなり。
【二六一】道場は眞實修道の人の安居する場所。
【二六二】淨居は內外清淨身心潔白にして安居すること。
【二六三】正思惟は八正道の一にして、無漏の智慧を以つて四諦を見るとき、正念に思惟して觀を益々進ましむるをいふ。
【二六四】幡華は佛前莊嚴の供養物をいふ。
【二六五】輕安は身心調暢にして安穩輕快なるかたちなり。
【二六六】優婆塞は信男、優婆夷は信女と譯す。

と名く。三期の日を過れば往に隨つて、無礙なるべし。善男子よ、若し彼の末世修行の衆生、菩薩の道を求めて、三期に入らんとする者は、(一六七)彼の所聞にあらざれば、一切の境界終に取るべからず。善男子よ、若し諸の衆生、奢摩他を修せば、先づ至(極寂)靜を取り、思念を起さず、靜極まれば便ち覺す、是の如き初靜は、一身より一世界に至る、覺も亦是の如し。善男子よ、若し覺一世界に徧滿する者は、一世界の中に一衆生ありて、一念を起せば皆悉く能く知る、百千の世界も亦復是の如し。彼の所聞にあらざれば、一切の境界終に取るべからず。善男子よ、若し諸の衆生、三摩鉢提を修せば、先づ當に十方の如來、十方の世界、一切の菩薩の種種の門に依つて漸次に修行し、三昧(の行願)を勤苦し給へることを憶想し、廣く大願を發して自から種(子)を(一六八)薰成すべし。彼の所聞にあらざれば、一切の境界終に取るべからず。善男子よ、若し諸の衆生禪那を修せば、先づ(一六九)數(息)門を取り、心中に(一七〇)生住(異)滅の念、(一七一)分齊頭數を了知すべし。是の如く四威儀の中に周徧し、念數を分別して了知せざるなく、漸次に增進し、乃至百千世界の一滴の雨をも知ることを得ること、猶ほ目に受

【一六七】彼の所聞とは、すなはち奢摩他、三摩鉢提、禪那の三觀を指す。

【一六八】薰成とは根據ある慣習をつけると云ふことにて、俗に感化と云ふ程の義なり。

【一六九】數息とは五停心觀の一にして、持息念ともいふ。出入の息を念持して其數を計り、以て散亂心を對治する觀法なり。

【一七〇】生住(異)滅は之を四相といひ、不相應行法に屬し、非色非心の存在物にして、萬物を生滅變化せしむるものをいふ。生は有爲の諸法を未來より現在に入らしむるもの、住は之れを安住せしむるもの、異は之れを現在に衰損せしむるもの、滅は之れを現在より過去に流れ入らしむるもの、萬物の生滅するは自力にて生

用する所の物を觀るが如し。彼の所聞にあらざれば、一切の境界終に取るべからず、是を三觀初首の方便と名く。若し諸の衆生徧く三種を修して勤行精進せば、卽ち如來世に出現すと名く。若し後の末世の鈍根の衆生、心に道を求めんと欲するも、成就すること能はざるは、昔の業障による。當に勤めて懺悔し、常に希望を起して、先づ憎愛嫉妬諂曲を斷じ、勝上の心を求むべし。三種の淨觀、隨つて一事を學すべし。此の觀を得ざれば、復彼の觀を習ひ、心放捨せずして漸次に證を求めよ。』爾の時に世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言はく、

『圓覺よ、汝當に知るべし、一切諸の衆生、無上道を求めんと欲せば、先づ當に三期を結し、

無始の業を懺悔し、三七日を經て、然る後に正思惟すべし。

彼の所聞の境にあらずんば、畢竟して取るべからず。奢摩他は至靜、三摩は正憶持、禪那は衆門を明らむ、是を三の淨觀と名く。

若し能く勤めて修習せば、是を佛出世すと名く。鈍根未成の者は、常に當に心に勤めて、無始の一切の罪を懺(悔)すべし、諸障若し消滅せば、佛境卽ち現前せん。』

【賢善首菩薩章】 是に於て賢善首菩薩、大衆の中にありて卽ち座より起つて佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、長跪叉手して佛に白して言さく、

滅するにあらず、四相の推移によるなり。

【一七】分齊とは分位差別せること。

『世尊は、廣く我等及び末世の衆生の爲に是の如き不思議の事を開悟し給へり。世尊よ。此の大乘教の名字は何等ぞ、云何が奉持し、衆生は何の功德をか得ん。云何が我は持經の人を護持せしめ、此の經を流布して何の地に至らん。』是の語を作し已つて、五體を地に投じ、是の如く三び請し終つて復始む。爾の時に世尊、賢善首菩薩に告げて言はく、『善哉、善哉、善男子よ、汝等乃ち能く諸の菩薩、及び末世の衆生の爲に、如來に是の如き經敎の功德名字を問へり。汝今諦に聽け、當に汝が爲に說くべし。』

時に賢善首菩薩、敎を奉じて歡喜し、及び諸の大衆は默然として聽けり。

『善男子よ、是の經は百千萬億恒河沙諸佛の所說、三世の如來の守護する所、十方菩薩の歸依する所、十二部經の淸淨の眼目なり。此經を大方廣圓覺陀羅尼と名け、亦た修多羅了義と名け、亦た秘密三昧と名け、亦た如來決定境界と名け、亦た如來藏自性差別と名く。汝當に奉持すべし。善男子よ、此の經は唯如來の境界を顯なす、唯佛如來のみ能く盡く宣說し給ふ。若し諸の菩薩、及び末世の衆生、此に依つて修行せば、漸次に增進して佛地に至らん。善男子よ、是の經を名けて（一七二）頓敎大乘となす。（一七三）頓機の衆生は此に從つて開悟し、亦漸修の一切群品をも攝す。譬へば大海小流を讓らず、乃至蚊虻及び阿修羅（等）も其の水を飲めば皆充滿することを得るが如し。善男子よ、たとひ人あつて純ら七寶を以て三千大千世界に積滿し

【一七二】頓敎とは次第階級によつて漸進するにあらず、直に頓悟の法を說くといふ即ち大乘圓頓の敎なり。

【一七三】頓機とは頓悟の機と云ふこと、即ち頓敎を信受する人のなり。

以て布施すとも、人あつて此の經の名、及び一句の義を聞かんにはしかず。善男子よ、たとひ人あつて、百恒河沙の衆生をして阿羅漢果を得しめんも、人あつて此の經を宣說して半偈を分別せんにはしかず、善男子よ。若し復た人あつて此の經の名を聞いて信心惑はずんば、當に知るべし、是の人は一佛二佛に於て諸の福(德智)慧を種るのみにあらず、是の如く乃至盡恒河沙の一切佛の所にして、諸の善根(功德)を種ゑて此の經敎を聞けることを。汝善男子よ、當に世末の是の修行者を護つて、惡魔、及び諸の外道をして其の身心を惱まして退屈を生ぜしむることなかるべし。』爾の時、世尊重ねて此の義を宣べんと欲して偈を說いて言はく、

『賢善首よ、當に知るべし、是の經は諸佛の說なり、如來能く護持し給ふ、十二部の眼目なり。名けて大方廣圓覺陀羅尼と爲す、如來の境界を顯はす、此に依つて修行せば、增進して佛地に至る。海の百川を納るるが如し、飲むもの皆充滿す。假使七寶を施して、積んで三千界に滿つるも此の說を聞くには如かず。

若し河沙の衆を化して、皆阿羅漢を得しむるも、(此の經の)半偈を聞くに如かず。汝等末世に於て、是の宣持の者を護り、退屈を生ぜしむなかれ。』

(二四)爾の時に、會中に火首金剛・摧碎金剛・尼藍婆金剛等八萬の金剛並に其眷屬あり、卽ち座より起つて佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、佛に白して言さく、『世尊よ、若し後の一切衆生能く此の

決定大乘を持つことあらば、我當に守護すること眼目を護るが如くすべし。乃至、道場、所修行の處に、我等金剛自から徒衆を領して晨夕に守護して退轉せざらしめん。其家乃至永く災障なく、疫病消滅し、財寶豐足して常に乏少せざらん。』

爾の時に、大梵王、(一七五)二十八天王、並に(一七六)須彌山王、(一七七)護國天王等、卽ち座より起つて佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、佛に白して言さく、『世尊よ、我亦是の經を持つ者を守護して、常に安穩にして心に退轉せざらしめん。』爾の時に大力の鬼王あり、(一七八)吉槃茶と名く、十萬の鬼王と卽ち座より起つて佛足を頂禮し、右に繞ること三匝し、佛に白して言さく、『我(等)亦是の經を持せん者を守護して朝夕に侍衛して、退屈せざらしめん。其の人の所居の一(一七九)由旬の內に、若し鬼神あつて其の境界を侵さば、我當に其をして碎くこと微塵如くならしめん。』

佛、此の經を說き已つて、一切の菩薩、天・龍・鬼神・八部眷屬・及び諸天王梵王等、一切の大衆、佛の所說を聞いて、皆大に歡喜して信受し奉行したりき。

國譯大方廣圓覺修多羅了義經　終

【一七四】以下流通分なり。
【一七五】二十八天王は欲界の九天と色界の十九天を云ふ。
【一七六】須彌山王は帝釋天のこと阿修羅軍を征する天王なり。
【一七七】護國天王は東方持國、西方廣目、南方增長、北方多聞の四天王なり。
【一七八】吉槃茶は林野に住して常に諸鬼衆を管る。
【一七九】由旬（Yojana）は里程を計る稱目にして、帝王一日行軍の里程なりと云ふ。

中天竺沙門波羅密諦譯

首楞嚴經解題

本經は具に『大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經』といひ、略して『首楞嚴經』と稱し、又は『中印度那爛陀大道場經』と名く。唐の神龍元年乙巳歳五月、中天竺沙門波羅密諦、廣州の制止道場に於て譯出し、菩薩戒の弟子前の正諫大夫、同中書門下平章事、淸河の房融筆授し烏長國沙門彌伽釋迦の譯語せしものなり。智昇の『開元釋敎目錄』によれば、大唐沙門懷迪又廣州に於て譯出せることを記せり。或は又羅什三藏の譯出せし『首楞嚴三昧經』は本經の舊譯なりとも云へり。而して最も世に行はるるものは本經なり。

本經は大略分つて十段となす。第一段は序分にして、佛弟子阿難尊者が婬女摩登伽の爲めに大幻術を以て飜弄せられ、將に戒體を破毀せんとせしに、不可思議なる呪力によりて佛の會座に歸來し、懺悔して佛に修三昧の敎を請へることを叙したるものなり。阿難は佛弟子中多聞第一を以て

稱せられたる人なれども、未だ道を得ること能はず。佛之を憐みて、多聞は道力を全ふせざれば、正に禪定を修して愛網を斷ずべきを示せるものにして、是れ本經一部の縁由なり。第二段より第九段までは正宗分にして、第二段には阿難が一切諸法の本源に達せずして、妄法を認めて眞相となすの邪見を破し、眞心を以て眞性を究めんことを勸め、第三段には眞性は圓明淨妙にして、本來常住なることを說きて、眞妄の二見は畢竟凡夫の顚倒夢想の迷見より生ずることを明し、第四段には修行方便を示し、第五段には魔業を離るるの修行を辨じて、祕密の法門なる佛頂神呪を說き、第六段には妄見を返して本覺淨明の眞源に歸入する地位の階級を示し、第七段には本經歸趣の題目を說き、第八段には惑業の所感に依つて、趣生の因に各差異あることを辨じて、三界二十五有等の相を示し、第九段には禪那の現境を擧げて魔事を宣說し、以て定慧圓明の修行を示す。第十段は流通分にして、本經の永く世に住して後代の衆生を利益せんことを陳べたり。要するに本經は五陰、十二處、十八界、七大等に於て圓通無礙の理を詮し、二十五の菩薩をして各各所修の法を擧げ所證の理を陳べしめ、文殊師利法王子に勅して其所說を批判せしめ、最後に於ける觀世音菩薩の耳根圓通の法を以て入道の門となし、五陰に就て五十種の禪の魔境を指摘して、禪病を排するを以て其特色となす。

本經は『圓覺經』と共に古來禪林に流布せる經典なり。然れども本經の價值に關しては、道元禪師已に疑難を抱き、其著『寶慶記』に於て批評を試み、その說くところ頗る六師等の見解に同じきあり、文相の起盡も亦自餘の大乘諸經と異なるを以て眞僞の辨じ難きを記せり。謂ふに斯の如きの批評は經文中斷常の二見又は我大色小等を說くに外道の論議に似たるあり、或は禪那の修證に階級を立つるが如き文ありて、往往世人の疑惑を招きたるより起りしものにして、經意は頗る禪教を宣傳するに便なるより、夙に禪林に流布し、楞嚴會なる法式をも生ずるに至り、今日尚行はれつつあり。

本經の註釋をなせし人は古來頗る多く、宋の長水沙門子璿の如きは、本經に於て造詣殊に深く、楞嚴大師の號あり、其著『義疏注經』二十卷は最も世に行はる。

其他主なるものを擧ぐれば

義海	三十卷	宋	咸輝著
義疏釋要鈔	六卷		懷遠著
集註	十卷	宋	印著
同　釋題	一卷		思坦著

重聞記　五卷　仁岳著

要解　二十卷　戒環著

合論　十卷　德洪著

會解　十卷　元　惟劉著

正脈疏科　一卷　明　眞鑑著

正脈懸示　一卷　同

正脈疏　十卷　同

摸象記　一卷　袾宏著

懸鏡　一卷　德清著

通議　一卷　同

臆說　一卷　圓澄著

圓通疏　十卷　傳澄著

玄義　四卷　同

祕錄　十卷　一松著

玄義　二巻　同
文句　十巻　同
如說　十巻　鏡惺著
疏解蒙鈔　三十六巻　錢謙益著
證疏廣解　一巻　弘憲著
合轍　十巻　通潤著
擊節　一巻　大韶著
懸談　一巻　歡衡著
略疏　十巻　元賢著
貫攝　十巻　劉道明著
歡心空解科　一巻　清　靈耀著
大綱　一巻　同
觀心字解　十巻　同
指掌疏懸示　一巻　通理著

首楞嚴經

指掌疏　十巻　同
事義　一巻　同
勢至圓通章科解　一巻　正相著
同疏鈔　二巻　續法著
同解　一巻　行等著

等あり、支那撰述のみにても枚擧に遑あらず。

譯者　山田孝道識

國譯(一)首楞嚴經

卷の第一の一

是の如く我聞けり、一時、佛、室羅伐城(二)祇洹精舍に在して、大比丘衆、千二百五十人と倶なりき。皆是(三)無漏の大阿羅漢なり。佛子として(萬善の功德を)住持し、善く(四)諸有に超え、能く國土に於いて、威儀を成就し、佛に從つて[法]輪を轉じ、妙に遺囑に堪へたり。(五)毘尼を嚴淨して、(六)三界の弘範となり、(七)應身無量にして、衆生を度脫し、未來を拔濟し、諸の塵累を超えしむ。其名を大舍利弗、摩訶目揵連、摩訶拘絺羅、富樓那彌多羅尼子、須菩提、優婆尼沙陀等と曰ふ。而も上首たり。

復た無量の(八)辟支[佛]の無學、幷に其初心のもの有りて、同じく佛の所に來れり。諸の比丘の夏を休みて(九)自恣するに屬うて、十方の菩

【一】首楞嚴 (Sūraṅgama) は、一切事究竟堅固と譯す、卽ち大定(三昧)の總名なり。「涅槃經」には五種(首楞嚴三昧、般若波羅蜜三昧、金剛三昧、獅子吼三昧、佛性三昧)の異名を擧げ、此經には首楞嚴王、金剛王等と名けたり。此の三昧を得れば、諸の衆法は究竟して盡き、諸の妙用は究竟して顯はれ、凡ての場合を盡して心動亂することなく、法に於て無礙自在なりと云ふ。

【二】祇洹精舍 (Jetavanavi-

薩、心疑を諮決し、慈嚴を欽奉して、將に密義を求めんとす。卽時に如來、座を敷き宴安として、諸の會中の爲めに、深奥を宣示したまひ、法筵の淸衆、未曾有なることを得たり。(一〇)迦陵の仙音、十方界に徧く、恒沙の菩薩、道場に來り聚まり、文殊師利その上首爲りき。

時に波斯匿王、其父王の爲に、諱日に齋を營み、佛を宮掖に請じ、自ら如來を迎へたてまつりて、廣く珍羞無上の妙味を設け、兼て復た親ら諸の大菩薩を延けり。城中に復た長者居士有りて、同時に僧に飯せんとして、佛の來應を佇ちたてまつりぬ。佛、文殊に勅し、菩薩及び阿羅漢を分領して諸の齋主に應ぜしめ給ふ。唯阿難のみ有りて、先より別請を受け、遠く遊いて未だ還らず、僧次に遑あらざりき。既に上座及び(一一)阿闍梨無ければ、途中より獨り歸るに、其日供無し。卽時に阿難、(一二)應器を執持して、遊ぶ所の城に於て、次第に循ひ乞ふ。心中初めより最後の檀越を求めて、以て齋主と爲して、淨穢の(一三)刹(帝)利尊姓、及び(一四)旃陀羅を問ふこと無く、(平)等の慈を行ずるを

---

hāra)。又は祇園精舍に作る。給孤獨園に建立せられたる精舍にして、釋尊及び衆僧の說法修行の道場として、須達長者の建立せしものなり。

【三】無漏の大阿羅漢。無漏とは有漏に對し、漏は漏れ出づるの義にして、卽ち煩惱妄想のことなり。之を除きて殘ることなきを無漏と云へり。阿羅漢は梵名にして、應供、殺賊、無生等と譯す。卽ち煩惱を滅盡して、小乘最終の果位に到達せるを云ふなり。

【四】諸有とは、二十五有等の一切の迷ひの境界にして、之に由りて生死の相續するを云ふなり。

【五】毘尼(Vinaya)は、離行、滅、調伏等と譯せり、卽ち戒律のことなり。

方として、微賤を擇ばず、意を發して、一切衆生の無量の功德を圓成せむとす。阿難已に如來世尊の、須菩提及び大迦葉は、阿羅漢なれども、心均平ならずと訶したまふことを知り、如來の、(一五)無遮を開闡して、諸の疑謗を度すことを欽仰して、彼の城隍を經て、徐く郭門を歩み、威儀を嚴整して、齋法を肅恭す。

爾の時に阿難、乞食の次で因みに、婬室を經歷するに、大幻術の(一六)摩登伽女が、(一七)娑毘迦羅が先梵天の呪を以て、婬席に攝入するに遭ひ、婬躬摩撫して、將に戒體を毀らむとす。如來、彼の婬術の加する所を知ろしめし、齋畢つて旋歸したまふに、王及び大臣、長者、居士、倶に來りて佛に隨ひ、法要を聞かんことを願ふ。時に世尊、頂より百寶無畏の光明を放つて、光の中に千葉の蓮花を出生し、佛の化身有まして、結跏趺坐して、神呪を宣說したまふ。文殊師利に勅して、「神呪を將つて往いて護らしむるに、惡呪消滅す。(乃ち)阿難及び摩登伽を提獎して、佛の所に歸り來る。阿難、佛を見たてまつり、頂禮悲泣

【六】三界とは、一切衆生の生死輪廻する所にして、欲界、色界、無色界のことなり。

【七】應身とは、諸佛其妙用を現じ、諸種の機根に應じ、時に隨ひ、處に隨つて、無量に身を變化して、種々の法を說きて諸の衆生を濟度する其佛身を云ふ。

【八】辟支佛(Pratyeka-Buddha)とは、梵語、譯して緣覺と云ふ、十二因緣を觀じて我執を除き、涅槃を覺るが故に緣覺と名く。

【九】自恣とは、鉢利婆刺拏(Pravāraṇa)の譯にして、一夏九十日の安居を終りたる時、衆僧各自恣に其間に於ける罪過を說き、或は善事を擧げて[illegible]するをいふ。

【一〇】迦陵(Kalaviṅi)とは、ka

す。無始より來かた、一向多聞にして、未だ道力を全ふせざることを恨みて、慇懃に十方の如來の菩提を成ずることを得たまへる、(一八)妙奢摩他と、(一九)三摩と、(二〇)禪那との、最初の方便を啓請す。時に於て、復た恒沙の菩薩、及び諸の十方の大阿羅漢、辟支佛等有り、倶に聞かむことを願樂し、退坐默然として、聖旨を承受せり。

佛、阿難に告げたまはく、『汝我と氣情を同うし、天倫を均うす。當初發心せしとき、我が法中に於て、何の勝相を見てか、頓に世間の深重の恩愛を捨てたる。』阿難、佛に白さく、『我れ如來の(二一)三十二相の勝妙殊絶にして、形體映徹すること、猶ほ琉璃の如きことを見たてまつりて、常に自ら思惟すらく、此の相は是れ欲愛の所生に非らず。何となれば、欲氣は麁濁にして、腥臊交遘し、膿血雜亂して、勝淨妙明の紫金光聚を發生すること能はず。是を以て渴仰して、佛に從つて剃落すればなり。』

佛の言はく『善い哉阿難よ、汝等當に知るべし、一切衆生、無始よ

梵語にして、詳しくは迦陵頻伽又は迦樓頻と云ふ、鳥の名にして、妙聲、或は好聲と譯す、其聲微妙なり。此鳥は雪山に生棲し、殼中にあつて既に妙聲を發すと云ふ。以て佛聲に喩へたり。

【一一】 阿闍梨(Acārya)とは、梵語、譯して軌範師又は正行と云ふ。僧俗の學侶行爲を矯正指導して其師範たるべき大德を云ふ。

【一二】 應器とは、鉢多羅(Pātra)の譯語なる應量器の略。佛及佛弟子の食器の名にして、各自の食量に相應する器の意より斯く名く。

【一三】 剎利尊姓とは、剎帝利のことなり。由來印度には四姓と謂つて四種の階級あり。一に婆羅門、二に剎帝利、三に毗

り來かた、生死相續することは、皆な常住の眞心、性淨明の體を知らずして、諸の妄想を用うるに由れり。此の想は眞ならず、故に輪轉あり。汝今無上菩提眞發明の性を研めんと欲せば、當に直心をもつて我が所問を訓ふべし。十方の如來は同一道なるが故に、生死を出離するに皆な直心を以てせり。心と言と直なるが故に是の如し。乃至〔三〕終始地位の中間、「皆な直心を以て證入するが故に」永く諸の委曲の相なし。阿難よ、我今汝に問はん、汝が發心して如來の三十二相を縁せしときに當つて、將に何の見る所ぞ、誰か愛樂を爲せし。』阿難、佛に白して言さく、『世尊、是の如く愛樂せしは我が心目を用つてせり。目に如來の勝相を觀見したてまつり、心に愛樂を生ぜしに由るが故に我發心して生死を捨てんと願ひき』。

佛、阿難に告げたまはく、『汝が所説の如し、眞に愛樂する所は心目に因れり。若し心目の所在を識知せずんば、塵勞を降伏することを得ること能はじ。譬へば國王の賊の爲めに侵されて、兵を發して討除

舍、四に首陀、即ち刹帝利は其第二位を占むるものにして王族、武士の階級なり。

【一四】旃陀羅（Caṇḍāla）とは、屠殺者、惡人、又は殺者と譯す。四姓の外にあつて、漁獵、屠殺等を業とし、其性獰惡にして、仁義に習はず。

【一五】無遮とは、何人も遮り拒まず、平等に遇することなり。

【一六】摩登伽（Mātaṅga）とは、譯して本性と云ふ、此經中には性比丘尼と名く、蓋し當時の賤業婦ならん。

【一七】婆毘迦羅は、劫毘羅（Kapila）と云ひ、譯して金頭、或は黄髮と云ふ。人家に至りて、米屑を拾ひ取つて食と爲せる外道なり。梵天に師事して呪を得たり、世人諷習して幻術を行ふと云ふ。

するに、是の兵要らず當に賊の所在を知るべきが如し。汝をして流轉せしむるは、心目咎を爲す、吾今汝に問はん、唯心と目と、今何れの所にか在る。』阿難、佛に白して言さく。『世尊、一切世間の（二三）十種の異生、同じく識心を將て身內に居在す。縱ひ如來の靑蓮華の眼を觀ずるにも、亦た佛面に在り、我今此の（二四）浮根の四塵を觀ずるに、秖我が面に在り、是の如く識心は實に身內に居せり。』

佛、阿難に告げたまはく、『汝今現に如來の講堂に坐して（二五）祇陀林を觀る。今何れの所にか在る。』［阿難言さく］『世尊、此の大重閣、淸淨の講堂は給孤園に在り、今祇陀林は實に堂の外に在り。』

［佛の言はく］『阿難よ、汝今堂中にして先づ何の見る所ぞ。』『世尊我堂中に在つて、先づ如來を見たてまつり、次に大衆を觀る。是の如く外に望んで方に林園を矚る。』『阿難よ、汝林園を矚るに、何に因てか見ること有る。』『世尊、此の大講堂は、戶牖開豁せり、故に我堂に在つて、遠く瞻見することを得たり。』

【一八】妙奢摩他。奢摩他（Samādhi）は、譯して止觀又は寂靜と言ふ。心、外境に動かされず、一切の亂想を止むるを云ふ。

【一九】三摩は三摩提（Samādhi）の略。等持、正受、寂靜等と譯す。

【二〇】禪那（Dhyāna）は、定、思惟修、靜慮等と譯す。

【二一】三十二相とは、如來には凡人に見ることを得ざる三十二種の微妙なる相好ありたるを云ふ。

【二二】終始地位とは菩提の極果を終と云ひ、最初の發心を始と云ふ。地位は始めより終りに達する階級にして、普通五十二位あれども、此の經には五十七位を立てたり。

【二三】十種の異生とは、地獄、餓

爾の時に世尊、大衆の中に在して、金色の臂を舒べて阿難の頂を摩でて、阿難及び諸の大衆に告げ示したまふ、『(二六)三摩提有り、大佛頂首楞嚴王具足萬行と名く。十方の如來、(二七)一門より超出する妙莊嚴の路なり。汝今諦に聽け。』阿難頂禮して、伏して慈旨を受く。佛、阿難に告げたまはく、『汝が言ふ所の如し。身は講堂に在つて、戸牖開豁すれば、遠く林園を矚る。亦た衆生の此の堂中に在つて、如來を見ずして堂外のみを見る者あり。』阿難答へて言さく、『世尊、堂に在つて如來を見たてまつらずして、能く林泉のみを見るといふは、是の處り有ること無けん。』

「佛の言はく」『阿難、汝も亦是の如し。汝が心の靈は一切明了なり。若し汝現前に明了する所の心、實に身内に在らば、爾の時先づ内身を了知すべし。頗し衆生の、先づ身中を見て後に外物を觀るものあり。縱ひ心肝脾胃を見ること能はざれども、爪の生ひ、髮の長び、筋の轉り、脈の搖くは、誠に明了なるべきに、如何ぞ知らざる。必ず内を知

鬼、畜生、修羅、人間、天上、聲聞、緣覺、菩薩、佛の十界を云ふ。前の六は凡夫の世界なれば六凡と云ひ、後の四は聖賢の世界なれば四聖と云ふなり。

【二四】浮根の四塵とは、浮根は又扶根、詳くは浮塵根と云ひ、外に浮いて見るべきものを浮と云ひ、能く物を生ずるを根と云ふ。四塵は色、香、味、觸、或は地、水、火、風の所成を云ふ。謂ゆる意識に依て分別する所の現象なり。

【二五】祇陀林(Jetavana)とは、中印度舍衛城の南、凡そ一里の處にあり。曾て祇陀太子所有の園林なりしが、釋尊說法の道場になさんが爲に、須達(給孤獨)長者之を購ひて釋尊に獻ぜしもの、卽ち祇園精舍の建立せられたる地所なり。

らざれば、云何が外を知らん。是故に應に知るべし、汝が覺了能知の心、身內に住在せりと言ふは、是處り有ることなし。』阿難稽首して佛に白して言さく、『我如來の是の如き、法音を聞くに、我が心は實に身外に居せりと悟り知んぬ。所以は何んとなれば、譬へば燈光を室の中に然すに、是の燈必ず能く先づ室內を照して、其室門よりして、後に庭際に及ぶが如し。一切衆生身中を見ずして、獨り身外を見ることは、亦燈光の室外に居住するには、室を照すこと能はざるが如し。是の義必らず明かなり、將に惑ふ所無からん。佛の了義に同くして、妄なきことを得んや。』

佛、阿難に告げたまはく、『是の諸の比丘、適に來つて我に從ひ、室羅伐城に〔二八〕摶食を循乞して祇陀林に歸る。我已に宿め齋するに、汝、比丘の一人食する時に、諸人の飽くを觀るや否や。』阿難答へて言さく、『否なり、世尊。何となれば、是の諸の比丘、阿羅漢なりと雖も、軀命同じからざればなり。云何ぞ一人の能く衆をして飽かしむることをえん。』

佛阿難に告げたまはく、『若し汝が覺了の知見の心、實に身外に在らば、身心相ひ外れて自ら相ひ干らざらん。則ち心に知る所をば、身には覺すること能はず、覺身の際に在らんをば、心に

〔二六〕三摩提とは、前出三摩の異稱。
〔二七〕一門とは、菩提涅槃に到るには直心を以て證入して、更に餘道なく、十方の如來も等しく之に因るが故なり。
〔二八〕摶食とは、飯等を手にて團めて食すること、印度の風俗なり。

知ること能はざらん。我今汝に（二九）兜羅綿の手を示す、汝眼に見る時、心に分別するや否や。』阿難答へて言さく、『是の如し、世尊。』佛、阿難に告げたまはく、『若し相ひ知らば、云何ぞ外に在りといはん。是の故に應に知るべし、汝、覺了能知の心は身外に住在せりと言ふ、是の處り有ること無し。』

【二九】兜羅（Tuṣāra）とは又は兜沙と云ひ、氷又は霜と譯す。綿は其樹より生ずる綿の種類にして、印度に在りと云ふ、佛手の柔軟なるを之に喩へたり。

卷の第一の二

阿難、佛に白して言さく、『世尊、佛の言ふ所の如く、内を見ざるが故に身内に居せず。身心相ひ知つて、相ひ離れざるが故に身外にも在らず。我今思惟するに、〔識心は〕一處に在ることを知りぬ。』

佛の言はく、『〔識心の潛む〕處は今何れにか在る。』阿難言さく、『此の了知の心、既に内を知らずして而も能く外を見る、我が思忖するが如きは（一）根の裏に潛伏せり。猶ほ人有りて、琉璃の椀を取つて其兩眼に合するに、物の合ふこと有りと雖も、而も留礙せざるが如し。彼の根、見に隨つて〔一境を照らす時、此の心根に隨つて〕卽ち分別す。然れども我が覺了能知の心、内を見ざることは、根に在るが爲めの故なり。分明に外を矚るに障礙なきことは、根の内に潛めるが故なり。』

佛、阿難に告げたまはく、『汝が言ふ所の如く、根の内に潛めることは、猶ほ琉璃の如しといふは、彼の人當に琉璃を以て眼に籠むるに、山河を見るに當つて瑠璃をも見るべきや不や。』〔阿

【一】根とは、能生の義にして、眼耳鼻舌身意の六は能く色聲香味觸法の六境を生ずる故に根といふ。

難言さく」『是の如し、世尊。是の人當に瑠璃を以て眼に籠むるに、實に瑠璃をも見るべし。』
佛、阿難に告げたまはく、『汝が心若し瑠璃の合するに同じしといはゞ、山河を見るに當つて何ぞ眼をも見ざるや。若し眼を見るといはゞ、眼卽ち境に同うして隨を成ずることを得じ。若し見ること能はずば、云何ぞ說いて、此の了知の心潛んで根の內に在ること、瑠璃の合するが如しと言はずや。是の故に應に知るべし、汝覺了能知の心、根の裏に潛伏して、瑠璃の合するが如しと言ふは、是の處り有ること無し。』阿難、佛に白して言さく、『世尊、我今又是の如きの思惟を作す。是の衆生の身は、腑藏中に在り、竅穴外に居せり。藏有れば則ち暗く、竅有れば則ち明らかなり。今我佛に對して眼を開くは、明を見るを名けて外を見ると爲し、眼を閉ぢて闇を見るを名けて內を見ると爲さん、是の義云何。』
佛、阿難に告げたまはく、『汝眼を閉ぢて暗を見るの時に當つて、此の暗の境界は、眼と對すと爲んや、眼に對せずと爲んや。若し眼と對すといはゞ、暗は眼の前に在り、云何ぞ內と成らん。若し內と成るといはゞ、暗室の中に居して、日月燈(の光)無きとき、此の室の暗中は、皆な汝が焦腑なるべしや。若し「眼と」對せずといはゞ、云何ぞ見を成ぜん。若し外見を離れて內對成ずる所あらば、眼を合して暗を見るを名けて身中と爲さば、眼を開いて明を見るとき、何ぞ面を見ざ

る。若し面を見ざれば、內對成ぜざらん。面を見ること若し成ぜば、此の了知の心と及び眼根とは、乃ち虛空に在るべし。何ぞ內に在ることを成ぜん。若し虛空に在らば、自から汝が體に非らじ。卽ち如來の今汝の面を見たまふも、亦た是れ汝が身なるべし。汝眼に已に知らば、身には覺すること非ざるべし。必らず汝執して身と眼と兩ながら覺すと言はゞ、應に二の知あるべし、〔若し二知あらば〕卽ち汝が一身兩佛と成るべし。是の故に應に知るべし、汝が暗を見るを內を見ると名くと言ふことは、是の處り有ること無し。』阿難言さく、『我常に佛の（二）四衆に開示したまふことを聞く、心生ずるに由るが故に種種の法生じ、法生ずるに由るが故に種種の心生ずと。我今思惟す、卽ち思惟の體は實に我が心性なり、所合の處に隨つて心則ち隨つて有り、亦た內外中間の三處に非ず。』

佛、阿難に告げたまはく、『汝今說いて、法生ずるに由るが故に種種の心生じ、所合の處に隨つて、心隨つて有りと言はゞ、是れ心に體なく則ち所合なきなり。若し體有ることなくして、而も能く合すといはゞ、則ち（三）十九界ありて（四）七塵に因つて合すべし、

【二】四衆とは比丘（男の出家）と比丘尼（女の出家）と優婆塞（在家の男の佛弟子）と優婆夷（在家の女の佛弟子）を云ふ。

【三】十九界とは六根（眼、耳、鼻、舌、身、意）と六境（色、聲、香、味、觸、法）と、六識（六根各々識あり）とを合して十八界と云ふ。今假に所合の心を立てゝ、合して十九界と云へり。

【四】七塵とは、六塵（色聲香味觸法の六境にして、吾人の心を染汚するが故に塵と云ふ）に所合の心を併て云ふなり。

是の義然らず。若し體あらば、汝が手を以て自ら其體に挃るゝが如き、汝が所知の心は復た内より出づると爲んや。外より入ると爲んや。若し復た内より出でなば、還つて身中を見るべし。若し外より來らば、先づ面を見るべし。』阿難言さく、『見は是れ其眼なり、心知は眼に非ず、見と爲すは義に非ざるなり。』

佛の言はく、『若し眼能く見るとせば、汝、室中に在つて能く門を見るや不や。(眼能く見るとせば)則ち諸の已に死せるもの尚ほ眼有りて存せり、應に皆な物を見るべし。若し物を見ば云何が死と名けん。阿難よ、又汝が覺了能知の心、若し必らず體ありといはゞ。復た一體なりと爲んや、多體なりとや爲んや。今汝が身に在つて、復た體に偏しと爲んや、體に偏からずとや爲んや。若し一體といはゞ、則ち汝手を以て一支に挃るゝ時、四支應に覺すべし。若し咸く覺せば、挃ること(本觸の所)在ること無かるべし。若し挃るゝところあらば、則ち汝が一體といへるは自から成ずること能はじ。若し多體といはゞ、則ち多人と成らん。(然らば)何れの體をか汝と爲ん。若し體に偏しといはゞ、前の挃るゝ所に同じ、若し偏からずといはゞ、汝が頭に觸るゝに當つて、亦た其足に觸るゝに、頭に覺する所あり、足には知ること無かるべし。今汝然らず。是の故に應に知るべし、所合の處に隨つて、心則ち(根に)隨つて有りといふは、是の處あることなし。』阿

難、佛に白して言さく、『世尊、我も亦た佛の文殊等の諸の法王子の與めに、實相を談じたまひしを聞きし時、世尊亦た言ひき、心は內にも在らず、亦た外にも非ずと。我が思惟するが如きは內ならば見る所なく、外ならば相知るべし。內に知ること無きが故に、內に在ることも成らず、身心相知れば外に在ることも義に非ず、今相知る故に、復た內に見ること無きをもつて、當に中間に在るべし。』

佛の言はく、『汝中間と言ふ、中は必らず迷はず、所在なきに非ず。今汝中を推せよ、中何くにか在りと爲ん、復た處に在りとや爲ん、當た身に在りとや爲ん。若し身に在りといはゞ、邊に在らば中に非じ、中に在らば內に同じ。若し處に在りといはゞ、所表有りとや爲ん、所表無しとや爲ん。表なくば無に同じ、表あらば則ち定めなし。何となれば、人の表を以て表して中と爲る時の如き、東より看れば則ち西なり、南より觀れば北と成り、表體既に混じて、心雜亂すべければなり。』阿難言さく、『我が所說の中は此の二種には非ず。世尊の言ふが如し。眼と色とを緣として眼識を生ずるとき、眼には分別あり、色塵には知なし。識其中に生ずるを則ち心の在とするなり。』

佛の言はく、『汝が心若し根と塵との中に在りといはゞ、此の心體は復た二を兼ぬとや爲ん、

二を兼ねずとや爲ん。若し二を兼ぬといはゞ、物と體と雜亂せん、物體知に非ざれば、敵と成つて兩立す、云何ぞ中と爲さん。二を兼ねて成ぜずして、知と不知とに非ずば、卽ち體性なし、中何をか相と爲ん。是の故に知るべし、當に中間に在るべしといふは、是の處りあることなし。』阿難、佛に白して言さく、『世尊、我昔佛の大目連、須菩提、富樓那、舍利弗、四大弟子と共に法輪を轉じ給ふを見るに。常に覺知分別の心性は、既に内に在らず亦た外にも在らず、中間にも在らず、倶に所在なし、一切無著なる之を名けて心と爲すと言ひき。(然らば)則ち我無著なるを名けて心と爲さんや不や。』

佛、阿難に告げたまはく、『汝、覺知分別の心性は倶に在ることなしと言はゞ、世間の虚空、水陸飛行、諸所の物像を名けて一切と爲す。(卽ち)汝が不著といふは在りとやせん、無しとやせん。(全く)無ならば則ち(五)龜の毛(又は)兎の角に同じ、云何ぞ不著といはん。(若し)不著ならば無と名くべからず、相に「心」なくんば、則ち無なるべし、無に非ずんば卽ち相あるべし、相に「心」あらば則ち「著」在るなり、云何ぞ無著といはん。是の故に應に知るべし、一切著なきを覺知の心と名くといふは、是の處りあることなしと。』

【五】龜の毛兎の角とは、印度の古諺にして、共に無なるものゝ喩なり。

爾の時に阿難、大衆中に在つて、卽ち座より起ち、偏に(六)右の肩を袒ぎ、右の膝を地に著けて、合掌恭敬して、佛に白して言さく、『我は是如來の最小の弟子なり、佛の慈愛を蒙りて、今出家すと雖も猶ほ憍憐を恃む、所以に多聞なれども未だ無漏を得ず。娑毘羅の咒を折伏すること能はず、彼が爲めに轉ぜられて婬舍に溺るゝことは、當に(七)眞際の所指を知らざるに由るべし。唯願くは世尊、大慈哀愍して、我等に奢摩他の路を開示し、諸の(八)闡提をして(九)彌戾車を隳らしめたまへ』と。是の語を作し已つて五體を地に投じ、及び諸の大衆は傾渴翹佇して、欽みて示誨を聞けり。

爾の時に世尊、其面門より種種の光を放ちたまふに、其の光晃耀して百千の日の如く、普佛の世界(一〇)六種に震動せり。是の如く十方微塵の國土一時に開現すれば、佛は威神をもて、諸の世界をして合して一界と成さしめ給ふ。(而して)其世界の中の有らゆる一切の諸の大菩薩は、皆な本國に住して、合掌し承聽せり。

【六】右の肩を袒ぐは、印度の風俗にして、王者に謁する時の最敬禮なり。採つて佛教に用ふるは、大法を荷擔せんとするの意を表するなり。右と云ふは、順じて逆ふことなきの意なり。

【七】眞際とは、眞如實際の義。眞如は虛妄ならざる意にして實際は究竟の意、要するに人法物我の相を泯じたる平等一如の理を云ふ。

【八】闡提とは、梵語一闡提(Icchantika)の略、斷善根、信不具足と譯す。本來解脫の因なきもの、又は解脫の因なきも佛の威力に依つて解脫するを得るもの等の意なり。

【九】彌戾車(Mleccha)又彌離車と書し、樂垢穢人と譯せり。卽ち不正の見に住して正

佛、阿難に告げたまはく、『一切衆生は、無始より來た、種種に顚倒して、(一一)業種の自然なること(一二)惡叉聚の如し。諸の修行の人の、無上菩提を成ずることを得ること能はずして、乃至別れて(一三)聲聞緣覺となり、及び外道、諸天、魔王、及び魔の眷屬となれるは、皆な二種の根本を知らずして、錯亂して修習するに由れり。猶ほ沙を煮て嘉饌と成さんと欲するが如く、縱ひ塵劫を經るとも終に得ること能はず。云何なるをか二種とせん、阿難よ、一には(一四)無始生死の根本なり。卽ち汝が今諸の衆生と與に、(一五)攀緣の心を用ゐて自性とする者なり。二には無始の(一六)菩提涅槃元淸淨の體なり。卽ち汝が今識精元明より能く諸緣を生じて、緣を遺ひたる者なり。諸の衆生の此の本明を遺へるに由りて、終日行ずと雖も、而も自覺せずして、枉げて(一七)諸趣に入る。阿難よ、汝今奢摩他の路を知つて、願つて生死を出でんと欲せば、今復た汝に問はん。』

卽時に如來、金色の臂を擧げ五輪の指を屈して、阿難に語りて言は

法を謗らず、死して邊地下賤に墮するを云ふなり。

【一〇】 六種に震動せり。六種とは、一に動、二に起、三に涌、四に震、五に吼、六に覺。佛、說法せらるゝ時には大地六種に震動せりと云ふ。

【一一】 業種。人は過去の業卽ち行爲に依つて現在の果報を生ずるを以て過去の業は種なりと云ふ意味より業種と云ふ。

【一二】 惡叉聚(Rudra-akṣa)。惡叉は譯して線貫珠と云ふ。卽ち樹の名にして、其形葡萄に似たるを以て、業種の關聯せるに譬へたり。

【一三】 聲聞とは、梵語 Śrāvaka の譯、佛說法の音聲を聞きて眞諦の理を悟る故に聲聞と云ふ。眞諦の理を悟ると雖此の分齊にては自利のみあつて未

く、『汝今見るや不や。』阿難言さく、『見る』と。佛の言はく、『汝何の見る所ぞ。』阿難言さく、『我如來の臂を擧げ指を屈して、光明の拳となして、我が心目を耀かしたまふことを見る。』佛の言はく、『汝誰を將てか見る』。阿難言さく、『我大衆と與に、同じく眼を將て見る。』佛、阿難に告げたまはく、『汝今我に答ふ、如來指を屈し、光明の拳となして、汝が心目を耀かすと、汝が目は見るべし、何を以て心をして我が拳の耀けるに當へたる。』阿難言さく、『如來、現に今心の所在を徴したまふに、而も我心を以て、推窮し尋逐す。即ち能推の者、我將て心となす。』佛の言はく、『咄、阿難、此れ汝が心に非ず。』阿難矍然として座を避け、合掌起立して、佛に白さく、『此れ我が心に非ずんば、當に何等をか〔心と〕名くべき。』佛、阿難に告げたまはく、『此は是れ(一八)前塵虚妄の相想の汝が眞性を惑はすなり。汝無始より今生に至るまで、〔妄想の〕賊を認めて子となして、汝が(一九)元常を失ふに由るが故に輪轉を受くるなり。』

だ利他の行願なし。

【一四】無始とは、一切衆生所作の業に因つて身を受け、六道(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上)に輪廻するに、其の始めなきを云へり。

【一五】攀緣の心。境に對して起る所の妄想分別の心なり。

【一六】菩提涅槃。菩提(Bodhi)は智、道、覺等と譯す、佛陀正覺の智慧をいふ。涅槃(Nirvana)は又、泥洹とも書き。滅度、圓寂、寂滅等と譯す。一切の迷妄を脱して無爲の安樂を得る不生不滅の眞諦にして、即ち佛の悟なり。

【一七】諸趣。趣は趣向の義にて衆生各々其業因に依り果報を受けて趣き向ふ處。此れに天上、人間、修羅、畜生、餓鬼地獄の六趣あり。六趣は又六

阿難、佛に白して言さく、『世尊、我は佛の寵弟なり、心に佛を愛したてまつるが故に、我をして出家せしむ。我が心、何ぞ獨り如來を供養するのみならんや。乃至〔二〇〕恒沙の國土を徧歴して、諸佛及び善知識に承事し、大勇猛を發し、諸の一切難行の法事を行ずることも、皆な此の心を用てす。縱ひ法を謗じて、永く善根を退することも亦た此の心に因る。若し此の發明せるもの、是れ心にあらずんば、我乃ち無心にして諸の土木に同じかるべし。此の覺知を離れては、更に所有なし、云何ぞ如來此れ心に非ずと說きたまふ。我實に驚怖しぬ、兼て此の大衆も疑惑せずといふことなし。唯大悲を垂れて、未悟を開示したまへ。』

爾の時に世尊、阿難及び諸の大衆に開示して、心をして〔二一〕無生法忍に入らしめんと欲し、〔二二〕師子の座に於て、阿難の頂を摩でて、之に告げて言はく、『如來は常に諸法の所生は唯心の所現なり、一切の因果、世界の微塵は、心に因つて體を成せりと說く。阿難よ、若し諸の

道とも云ふ。是等を稱して諸趣と云ふ。

【一八】前塵虛妄の相想。相とは色相の意にして青黃美醜等の一切の色をいふ。想とは想像、または思等の義にして、客觀の萬象雜多の相を見分けて、男女、草木など〻想を浮ぶる精神作用を云ふ。卽ち二倶に虛妄なり。

【一九】元常とは、本元眞常の義にして、謂はゆる菩提涅槃元淸淨の體を云ふなり。

【二〇】恒沙とは、印度の恒河(今のガンヂス河)の沙といふことにして、委くは恒河沙數といふべきなり。卽ち無量無數のことに喩へたり。

【二一】無生法忍。無生法は不生不滅の眞如法性にて、忍は忍持して退かざるの意、要する

世界の一切の所有、其中の乃至草葉縷結までも、其根元を詰むるに咸な體性あり、縱ひ虚空も亦た名貌あり。何に況んや清淨妙淨明の心、一切に性たる心、而も自ら體なからんや。若し汝、分別覺觀の了知する所の性を執悋して必らず心と爲さば、此の心卽ち諸の一切の色香味觸の諸塵の事業を離れて、別に全性あるべし。汝が今我が法を承聽するが如きは、此れ則ち聲に因つて分別あり。縱ひ一切の見聞覺知を滅して、內に幽閑を守るも猶ほ法塵分別の影事たり。我汝に勅して、(强ひて)執して心に非ずとせよとには非ず、但汝、心に於て微細に揣摩せよ。若し前塵を離れて分別の性あらば、卽ち眞に汝が心ならん。若し分別の性、塵を離れて體なくんば、斯れ則ち前塵分別の影事なり。塵は常住に非ず、若し變滅する時は、此の心則ち龜の毛(又は)兎の角に同じ。則ち汝が(三三)法身斷滅に同せば、其れ誰か無生法忍を修證せん。』卽時に阿難、諸の大衆と與に、默然として自失す。

佛、阿難に告げたまはく、『世間一切の諸の修學の人、現前に(三四)九次第定を成ずと雖も、漏盡き

に眞如法性を認知して得る所の決定不退轉の位を云ふ

【三二】 師子の座。師子は獅子と同じ釋尊の坐し給ふ高座の下には獅子侍立せり故に云ふ。

【三三】 法身とは、佛三身の一にして此れに三意ありと雖、此處に謂ふ法身は其中に於て眞如、法性、佛性等の語と同意義に用ひらるゝものにて、阿難が本來具有せる理性を云ふ。

【三四】 九次第定とは、小乘の坐禪の方法、四禪と四空處と滅盡定とを合して九となす。小乘にては初禪より二禪三禪と順序を立て、最後滅盡定に至るを坐禪の終極とす、故に九次第定と云ふ。

て阿羅漢と成るを得ざることは、皆な此の生死の妄想を執して、誤つて眞實なりと爲すに由れり。是故に汝、今多聞を得ると雖も、聖果を成ぜず。』阿難聞き已つて、重ねて復た悲涙し、五體を地に投じて、長跪合掌して佛に白して言さく、『我佛に從つて、發心出家せしより、佛の威神を恃みて、常に自ら思惟すらく、我が修を勞することなくとも、將に如來我に(二五)三昧を惠みたまはんと謂ひて、身心本より相代らざることを知らず。我が本心を失すれば、身は出家せりと雖も、心は道に入らず、譬へば窮子の父を捨てゝ逃逝するが如し。今日乃ち知んぬ、多聞なりと雖も、若し修行せざれば聞かざるに等く、人の食を説くに、終に飽くこと能はざるが如し。世尊、我等今(二六)二障に纒さるゝこと、良に寂常の心性を知らざるに由つてなり。惟願くは如來よ、(二七)窮露を哀愍して、妙明の心を發き、我が道眼を開かしめたまへ。』

卽時に如來、胸の(二八)卍字より寶光を涌出したまふに、其光晃昱

【二五】三昧(Samādhi)。又は之を三摩地、三摩提等に作る。定、等持、正受、正見、止息、寂靜等と譯す。心を一境に住せしめて動ぜず。心を正ふして塵念を離るゝを云ふなり。

【二六】二障とは、一に理障、二に事障。理障は吾人の正智を昧まして、宇宙の眞理に背くこと、事障は事實に迷うて得道し能はざることを云ふなり。

【二七】窮露とは、身に資財なく棲息する所もなきものにして即ち功德の法財なく、三界に跉跰する者を云ふなり。

【二八】卍字。梵語、塞縛悉底迦(Svastika)の譯にして、吉祥雲海、吉祥萬德、佛心印と云ふ。古來より佛敎に存する所の標形なり。

にして百千の色あり、十方微塵の普佛世界、一時に周徧して、徧く十方所有の寶刹、諸の如來の頂に灌ぎ、旋つて阿難及び諸の大衆に至る。〔佛〕阿難に告げて言はく、『吾今汝が爲めに大法幢を建て、亦た十方一切の衆生をして、（二九）妙微密性淨明の心を獲て、淸淨眼を得せしめん。阿難よ。汝、先に我に光明の拳を見ると答ふ。此の拳の光明は、何に因つて有る所ぞ。云何が拳なる、汝誰を將てか見る。』阿難言さく、『佛の全體（三〇）閻浮檀金にして、寶山よりも赩く、淸淨より生ずる所なるに由るが故に光明有り。我實に眼に五輪指の端の、屈握して人に示したまふを觀る、故に拳相あるなり。』

佛、阿難に告げたまはく、『如來今日實言をもつて汝に告ぐ、諸の有智の者は、要らず譬喩を以て開悟することを得ん。阿難よ、譬へば我が拳の若し我が手なければ、我が拳を成せざらんが如く、若し汝が眼なくんば、汝が見を成せじ。汝が眼根を以て我が拳の理に例するに、其の義均きや不や。』阿難言さく、『唯然り、世尊、既に我が眼なくば、我が見を成せじ、如來の拳に例するに、事義相

【二九】妙微密性は三德圓滿せるを云ふ。微は幽玄にして十地の菩薩より之を見れば羅縠を隔つるが如きを云ふ。密は佛と佛とのみ究盡して、餘人の見ざる所を云ふ。即ち尋常の智を以て知ること能はざる靈妙の心體なり。

【三〇】閻浮檀金。閻浮檀（Jam-būnada Suvarṇa）は、閻浮は樹名、檀は江、或は海の義。即ち閻浮樹の下を流るゝ河中より生ずる砂金のこと、又一說には白金とも云ふ、兎に角最上の黃金を稱するならん。

ひ類す。』
佛、阿難に告げたまはく、『汝相類すと言ふ、是の義然らず。何となれば、手なき人の如きは、拳畢竟して滅すれども、彼の眼なき者は、見全くなきに非ざればなり。所以は何となれば、汝試みに途に於て盲人に詢問せよ、汝何の見る所あると。彼の諸の盲人必らず來つて汝に答へん、我今、眼の前に黒暗のみを見て、更に他の矚るものなしと。是の義を以て觀るに、前塵自から暗なり、見何ぞ虧損せん。』阿難言さく、『諸盲人の眼の前に唯黒暗のみを觀るをば、云何ぞ見を成ずといはん。』

佛、阿難に告げたまはく、『諸盲(人)の眼なくして唯黒暗を觀ると、眼ある人の暗室に處すると、二の黒〔暗〕に別あり〔とせん〕や別あること無しとせんや。』〔阿難言さく〕『是の如し。世尊、此暗中の人と彼の群盲と、二の黒〔暗〕挍量するに、曾て異あること無し。』〔佛の言はく〕『阿難よ、若し眼なき人の全く前の黒を見るに、忽ち眼光を得て、還つて前塵に於て種種の色を見るを、眼の見と名けば、彼の暗中の人、全く前の黒を見るに、忽ち燈光を獲て、亦た前塵に於て種種の色を見るを、燈の見と名くべきや。若し燈の見ならば、燈能く見あり、自ら燈と名けじ。又則ち燈の觀ならば、何ぞ汝が事に關らん。是の故に當に知るべし、燈能く色を顯はす。是の如く見る

ことは、是れ眼にして燈には非ず。眼は能く色を顯はす、是の如き見の性は、是れ心にして眼には非じ。』阿難復た是の言を聞くことを得て、諸の大衆と與に、口は已に默然たりと雖も、心は未だ開悟せず。猶ほ如來慈音の宣示を冀ひて、掌を合せ心を淸くして、佛の悲誨を佇ちたてまつれり。

爾の時に世尊、兜羅綿の網相光の手を舒べ、五輪の指を開きて、阿難及び諸の大衆に誨勑したまふ。『我れ初め成道のとき、(三一)鹿〔野〕園の中に於て、阿若多の(三二)五比丘等、及び汝四衆の爲めに言ひき。一切衆生、菩提と及び阿羅漢とを成ぜざることは、皆(三三)客塵煩惱に誤らるゝに由ると。汝等當時何に因つてか開悟して、今聖果を成せる。』時に憍陳那起立して佛に白さく、『我今(三四)長老として、大衆の中に於いて獨り解の名を得たることは、客塵の二字を悟つて〔聖〕果を成ぜるに由りてなり。世尊、譬へば行客の旅亭に投寄して、或は宿し或は食す、食宿事畢つて、假裝して途に前んで、安住するに遑あらず。若し實の主人は自ら往く攸なきが如し。是の如く思惟すらく、住せざるをば客と名け、住するをば主

【三一】鹿園(Mrgadava)は鹿野園の略、印度波羅奈國に在る園にして、釋尊成道の後、初めて說法し給ひたる地なり。

【三二】五比丘とは、釋尊成道後、最初に鹿野園に於て敎化を受けたる五人の僧を云ふ。五人とは、阿若憍陳如（卽ち阿若多）、阿濕婆恃、跋提、十力迦葉（一說に摩訶男とも云ふ）、婆娑婆の五人なり。

【三三】客塵とは、煩惱の異名。客は住ることなく、塵は動搖を免れざるものなり。故に本來空なるものに實有の妄見を生ずるを煩惱となす。

【三四】長老とは、道眼を具へ、智德ある人を云ふ。

人と名くと。（故に）住せざる者を以て、名けて客の義となす。又新に霽れて清陽の天に昇るとき、光隙の中に入りて、空中の諸有ゆる塵相を發明するに、塵質は搖動するとも、虚空は寂然たるが如し。是の如く思惟すらく、澄寂なるを空と名け、搖動するを塵と名くと。〔故に〕搖動する者を以て名けて塵の義となす。』

佛の言はく、『是の如し。』即時に如來、大衆の中に於て、五輪の指を屈し、屈し已つて復た開き、開き已つて又屈して、阿難に謂つて言はく、『汝今何とか見る。』阿難言さく、『我如來百寶輪の掌を衆中にして、開合することを見る。』佛、阿難に告げたまはく、『汝我が手を衆中にして開合すと見るとき、是れ我が手に開あり合ありとせんや、復た汝が見に開あり合ありとやせん。』阿難言さく、『世尊、寶手を衆中にして開合したまふや、我如來の手自ら開合すると見る、我が見性の自ら開し自ら合するに非じ。』佛の言はく、『〔佛手と見性と〕誰か動じ誰か靜なる。』阿難言さく、『〔佛手の住せざるなり、而も我が見性は尙ほ靜だもあること無し、誰をか住あることと無しとせん。』

佛の言はく、『是の如し。』如來是に於て、輪掌の中より一寶光を飛ばして、阿難の右に在きたまふ、即時に阿難、首を廻らして右に盼る。又一光を放つて阿難の左に在きたまふ。阿難、又則

ち首を廻らして左に盼る。佛、阿難に告げたまふ、『汝が頭今日何に因つてか搖動する。』阿難言さく、『我如來の妙なる寶光を出して、我が左右に來らしたまふを見たてまつる。故に左右に觀るとき、頭自から搖動するなり。』〔佛の言はく〕『阿難よ、汝佛光を盼て、左右に頭を動かすとき汝が頭の動くとやせん、復見の動くとやせん。』〔阿難言さく〕『世尊、我が頭の自ら動くなり、而も我が見性は止だも有ることなし、誰をか搖動すとせん。』佛の言はく、『是の如し。』是に於て如來普く大衆に告げたまはく、『若し復た衆生、搖動の者を以ては之を名けて塵となし、不住の者を以ては之を名けて客とせば、汝觀よ、阿難頭は自ら搖動すとも、見は動ずる所なきことを。又汝觀よ、我が手は自ら開合するとも、見は舒卷なきことを。（是の如くなるに）云何ぞ汝今動を以て身と爲し、動を以て境と爲して、始より終に洎ぶまで、念念に生滅し、眞性を遺失して、顚倒して事を行じ、性心に眞を失つて、物を認めて己と爲し、是の中に輪轉して、自ら流轉を取るや。』

巻の第二の一

爾の時に阿難及び諸の大衆は、佛の示誨を聞きて、身心泰然たり。無始より來を念ふに、本心を失却して、妄りに〔一〕縁塵分別の影事を認む。今日開悟すること、乳を失ひたる兒の忽に慈母に遇ふが如し。掌を合せ佛を禮して、如來の身心の眞妄虚實と、現前の〔二〕生滅と不生滅との、二の發明の性を顯出せんことを聞かんと願ふ。

時に波斯匿王は、起立して佛に白さく、『我昔未だ諸佛の誨勅を承けざりしとき、〔三〕迦旃延と毘羅胝子とに見えしに、咸な言へり、此の身死して後斷滅するを、名けて〔四〕涅槃と爲すと。我佛に値ひたてまつれりと雖も、今猶ほ狐疑す。云何が發揮して此の心の不生滅の地を證知せん。今此の大衆、諸の有知の者、咸く皆聞かんことを願ふ。』

佛、大王に告げたまはく、『汝が身現在せり。今復た汝に問はん、汝が此の肉身は金剛と同じく、常住にして朽ちずとせんや、復た變壞すとせんや。』「王言さく」『世尊、我が今此の身は、終

【一】縁塵分別の影事とは、客塵煩惱の幻影を云ふなり。

【二】生滅と不生滅。生滅は生死の根本となる虚妄の心を云ふ、不生滅は菩提涅槃元清淨の妙心を云ふ。

【三】迦旃延と毘羅胝子。ともに婆羅門の學者なり。

【四】涅槃(Nirvāṇa)は、梵語。滅度、圓寂、寂滅等と譯す。一切の迷妄を脫却して寂靜無爲の安樂を得ることを云ふ。不生不滅の眞證、卽ち佛の悟を云ふ。

に變滅に從ふべし。』佛の言はく、『大王よ、汝未だ曾て滅せず、云何が滅を知る。』〔王言さく〕『世尊、我が此の無常變壞の身は、未だ曾て滅せずと雖も、我は現前に、念念に遷謝し、新新に住まらず、火の灰と成つて漸漸に銷殞し殞亡して息まざるが如くなるを觀るに、決めて知んぬ、此の身は當に滅盡に從ふべしと。』佛の言はく、『是の如し。大王よ、汝今生齡已に衰老に從へり、顏貌童子の時と如何ん』。〔王言さく〕『世尊、我昔孩孺なりしときには、膚腠潤澤なりき。年長盛するに至つては、血氣充滿せり。而今頽齡にして衰耄に迫り、形色枯悴し、精神昏昧せり。髮白く面皺んで、將に久しからざるに逮べり、如何ぞ充盛の時に比せられん。』佛の言はく、『大王汝が形容頓に朽ちざるべしや。』王の言さく、『世尊、變化密に移ること、我誠に覺えず、寒暑遷流して漸く此に至れり。何となれば、我年二十なりしときには、年少と號すと雖も、顏貌已に初めの十歲の時よりも老いたり。三十の年は又二十よりも衰へき。今六十又二を過ぎたり。五十の時を觀るに、宛然として强壯なりしを以てなり。世尊、我れ密に移ることを見るに、此れ殂落すと雖も。此の間の流易は且く十年に限る。若し復た我をして微細に思惟せしめば、其の變ずることと寧ろ唯一紀二紀のみならんや、實に年年に變ずと爲す。豈に唯年年に變ずるのみならんや、亦た兼ねて月月に化す。何ぞ直月月に化するのみならんや、兼ねて又日日にも遷る。思を沈めて諦觀

するに、〔五〕刹那刹那念念の間も停住することを得ず。故に知んぬ、我が身終に變滅に從ふべしと。』

佛、大王に告げたまはく、『汝變化遷改して停らざるを見て、汝が滅を悟知しぬ。亦た滅の時に於て、汝が身中に不滅あることを知れりや。』波斯匿王、掌を合せて佛に白さく、『我實に知らず。』佛の言はく、『我今汝に不生滅の性を示さん。大王よ、汝が年幾ばく時にか恒河の水を見し。』王言さく、『我れ生れて三歲にして、慈母我を携へて〔六〕耆婆天に謁せしに、此の流を經過して、爾の時卽ち是れ恒河の水と知りき。』佛の言はく、『大王、汝が所說の如きは、二十の時は十歲より衰へ、乃し六十に至り、日月歲時念念に遷變せりと。(然らば)則ち汝三歲にして此の河を見し時と、年十三に至りしときと、其水云何ん。』王言さく、『三歲の時の如くして、宛然として異ることなく、乃し今年六十二に至るまで亦た異ること有ることなし。』佛の言はく、『汝今自ら髮白く面皺むを傷む、其の面必定して童年よりも皺めり。則ち汝今の時に此の恒河を觀るに、昔の童なりし時河を觀るの見と、童耄ありや否や。』王言さく、『不なり、世尊。』佛の言はく、『大王よ、

【五】刹那(Kṣaṇa)は、梵語、念と譯す、印度に於ける時の最少單位にして、極めて短き時間を云ふなり、俱舍論には「壯士の一彈指頃に六十五刹那ありし」と云へり。

【六】耆婆とは、(Jīva)譯して能活、又は命活と云ふ。長壽の神なり。

汝が面は皺むと雖も、而も此の見精性は未だ曾て皺まず。皺める者をば變と爲し、皺まざれば變に非ず。變ずる者は滅を受くべく、彼の變せざる者は元より生滅なし。云何ぞ中に於て汝が生死を受けん。而も猶ほ彼の(七)末伽梨等が、却て此身死して後全く滅すと言ふことを引くや。』王此の言を聞きて、身は後に生を捨てゝ生に趣くといふことを信知して、諸の大衆と與に、踊躍歡喜して未曾有なることを得たり。

阿難即ち座より起ちて佛を禮し、合掌長跪して佛に白さく、『世尊、若し此の見聞必らず生滅せずば、云何ぞ世尊、我等が輩をば眞性を遺失して、顚倒して事を行ずと名けたまへる。願くは慈悲を興して我が塵垢を洗ひたまへ。』即時に如來金色の臂を垂れ、輪手下を指さして阿難に示して言はく、『汝今我が(八)母陀羅手を見よ、正とやせん、倒とやせん。』阿難言さく、『世間の衆生は此を以て倒となす、而も我は誰か正誰か倒といふことを知らず。』佛、阿難に告げたまはく、『若し世間の人此を以て倒とせば、即ち世間の人は何を將てか正とせん。』阿難言さく、『如來臂を竪て兜樓綿手を上げて、空を指さすを則ち名けて正となす。』佛即ち臂を竪て、阿難に告げて言はく、『かくの如く顚倒して首尾相換へば、諸の世間の人、一倍して瞻視せん。

【七】末伽梨(Makkhali)は婆羅門の學者にして、迦旃延等と共學説を同じふせり。

【八】母陀羅手、母陀羅(Mudrā)は此に印と譯す。印を結べる手なり。

(之を以て)則ち知んぬ、汝が身と諸の如來の淸淨法身と、比類し發明するに、如來の身をば(九)正徧知と名け、汝等が身をば性顚倒と號くべし。汝に隨す、諦觀せよ、汝が身と佛身とを顚倒と稱けば、何の處を名字けてか號して顚倒とする。』

時に阿難諸の大衆と、瞪瞢して佛を瞻て目睛瞬ろかず、身心顚倒の所在を知らず、佛慈悲を興し、阿難及び諸の大衆を哀愍して、(一〇)海潮音を發して、偏く同會の諸の善男子に告げたまはく、『我常に說いて言ひき、(一一)色と心と諸緣及び心所使と諸の所緣の法とは、唯心の所現なりと、汝が身と汝が心とは、皆是れ妙明の眞精、妙心の中の所現の物なり。云何ぞ汝等、(一二)本妙圓妙の明心、寶明の妙性を遺失して、(一三)悟中の迷を認むるや。晦昧にして空となり、空と晦との暗中に暗を結んで色と爲す。色妄想に雜つて、想の相れたるを身と爲し、緣を聚めて内に搖ぎ、外に趣いて奔逸す。昏くして擾擾たる相の心性と以爲へり。一たび迷うて心と爲れば、決定して惑うて「我が心」色身の内に

【九】 正徧智とは、阿耨多羅三藐三菩提(アヌッタラサムミヤクサンボーデイ Anuttarasamyak-sambodhi)の譯語、平等の正智を究め盡して、知らざることなき佛陀無上の智慧なり。

【一〇】 海潮音とは、時を違へざるの義なり。

【一一】 色と心と諸緣及び心所使と諸の所緣の法とは、色は色法にして十一種あり。心は心法にして意識を云ふ。此識を第六意識第七末那識第八阿賴耶識の三に分てり。諸緣は六塵の法を云ふ。心所使(心所有の法といふ意)は五十一の心所法を云ふ。諸の所緣は色心二法の働きに伴ふ諸種の法を云ふなり。

【一二】 本妙圓妙の明心。心の本體の不可思議なるを云ふ。

【一三】 悟中の迷とは、本來明心

在り」と爲へり。〔故に〕色身より外、山河虛空大地に洎ぶまで、咸く是れ妙明の眞心中の物といふことを知らず。譬へば澄清たる百千の大海之を弃てゝ唯一浮漚の體を認めて、名けて全潮と爲して、瀛渤を窮め盡くせりといはんが如し。汝等卽ち是れ迷中に〔迷を〕倍せる人なり、我が垂れたる手の等くして差別なきが如く、如來說いて憐愍すべき者と爲す。』阿難、佛の悲救深誨を承けて、涙を垂れ叉手して佛に白して言さく、『我佛の是の如きの妙音を承けて、妙明の心元より圓滿なる所の常住の心地なるを悟ると雖も、而も我佛の現說法の音を悟るに、現に〔四〕緣心を以て、允に瞻仰する所なり。徒に此の心を獲るとも、未だ敢て認めて本元の心地となさず、願くは佛哀愍して圓音を宣示し、我が疑根を拔いて、無上道に歸せしめたまへ。』

佛、阿難に告げたまはく、『汝等尙ほ緣心を以て法を聽かば、此の法も亦た緣なり、法性を得るに非ず。人の手を以て月を指ざして人に示すが如く、彼の人、指に因つて當に月を看るべし。若し復た指を觀て以つて月の體とせば、此の人豈に唯月輪を亡失するのみならんや、亦た其の指をも亡せり。何となれば、標せる所の指を以て明月となすを以てなり。豈に唯、指を亡ずるのみならんや、亦た復た明と暗とをも識らず。何となれば、卽ち指の體を以て月の明性

の中に在りながら覺に背いて妄見を生ずるを云ふなり。

【四】緣心とは、物に對して分別する心なり。

となして、明と暗との二性所了なきを以てなり。汝も亦た是の如し。若し我が說法の音を分別するを以て汝が心とせば、此の心自ら音を分別するを離れて分別の性あるべし。譬へば客あり、旅亭に寄宿して、暫く止まつて便ち去り、終に常住せず。而して亭を掌る人は、都て去る所なければ、名けて亭主とするが如し。此「の分別の心」も、亦た是の如し。若し眞に汝が心ならば、則ち去る所なけん。云何ぞ聲を離れて分別の性なきや。斯れ則ち豈に唯聲を分別する心のみならんや、我が客を分別するも、諸の色相を離るれば分別の性なけん。是の如く乃至分別都て無きとき、色に非ず空に非ず。(一五)拘舍離等は、昧くして冥諦となす。(若し)諸法の緣を離れば分別の性なし、則ち汝が心性各還る所あり、云何ぞ主とせん。』阿難言さく、『若し我が心性、各還る所あらば、則ち如來の說きたまふ妙明の元心は、云何ぞ還ることなけん。唯哀愍を垂れて、我が爲に宣說したまへ。』

佛、阿難に告げ給はく、『且く汝が我を見る見精は明元なれども、此の見、妙精明の心に非ず。第二の月の、是れ月の影にだも非ざるが如しと雖も、汝諦に聽くべし、今當に汝に還る所なきの地を示すべし。阿難よ、此の大講堂、洞に東方に開けて日輪、天に昇るとき則ち明曜あり、中夜

【一五】拘舍離……冥諦。拘舍離(Gosari)は數論哲學を立てたる學者なり。冥諦とは思量の及ばざる所を云ふなり。

と黒月と雲霧との晦暝のときは、則ち復た昏暗なり。戸牖の隙よりも則ち復た通れるを見、牆宇の間つるには則ち復た壅れるを觀る。分別の處には則ち復た縁を見る。頑虚の中には徧く是れ空の性なり。鬱孛の像は則ち昏塵に紆り、澄霽氛を斂むるも又清淨を觀る。阿難よ、汝咸く此諸の變化の相を看よ、吾又各本所因の處に還さん。云何なるか本(所)因。阿難よ、此の諸の變化〔に於て〕明をば日輪に還す。何となれば、日なければ明ならず、明の因は日に屬すればなり。是の故に日に還へす。暗をば黒月に還し、通をば戸牖に還し、壅をば牆宇に還し、縁をば分別に還し。頑虚をば空に還し、鬱孛をば塵に還し、清明をば霽に還すべし、則ち諸の世間の一切所有は、斯の類を出でざるなり。汝(二六)八種を見る〔所の〕見精明性は、當に誰に還さんとか欲する。何を以ての故に、若し明に還さば則ち明ならず、明ならざる時は復た暗を見ること無けん。明暗等は種種の差別ありと雖も、見に差別なし。諸の還るべき者は、自然に汝〔が見〕に非ず、汝が還らざる者は、汝〔が眞〕に非ずして誰ぞや。則ち知んぬ、汝が心は本妙明淨なり。汝自ら迷悶して、本を喪うて輪〔轉〕を受け、生死の中に於て常に漂溺せり。是の故に如來憐愍すべしと名く。』阿難言さく、『我此の見性の還ることなきことを識ると雖も、云何ぞ是れ我が眞性なりと知ることを得ん。』

【二六】八種とは、前文にある明曜、昏暗、通、壅、縁、空、昏塵、清淨を云ふなり。

佛、阿難に告げたまはく、『吾今汝に問はん、いま汝未だ無漏淸淨なることを得ざれども、佛の神力を承けて、(一七)初禪を見ること障礙なきことを得たり。而るに(一八)阿那律は、閻浮提を見ること掌中の(一九)菴摩羅果を觀るが如し。諸の菩薩等は百千界を見、十方の如來は微塵淸淨の國土を窮盡して矚ざる所なし。衆生は洞に視ること分寸に過ぎず。阿難よ、且く吾と汝と(二〇)四天王の所住の宮殿を觀しとき、中間に徧く水陸空行を覽る。昏と明との種種の形像ありと雖も、前塵の分別留礙に非ずといふことなし。汝此に於て自他を分別すべし。吾いま汝に將ふ、〔所〕見の中に〔自他を〕擇べ。誰が是れ我が〔見〕體、誰をか物象とせん。阿難よ、汝が見源を極めよ。日月宮の、是れ物にして、汝に非るものより、七金山に至るまで、周徧く諦に觀ずるに、種種の光ありと雖も、亦た物にして汝に非ず。漸漸に更に觀るに、雲は騰り鳥は飛び、風は動き塵は起り、樹木山川、草芥人畜、咸く物にして汝に非ず。阿難よ、是の諸の近遠の諸有ゆる物性は、復た差殊なりと雖

【一七】初禪とは、初禪天のことなり。色界を分つて初禪天、二禪天、三禪天、四禪天の四種とし、各禪天を又各數種に分ち合して十八天となす。而して初禪天は梵衆天、梵輔天、大梵天の三天に分る。

【一八】阿那律(Aniruddha)は如意と譯す。釋尊十大弟子の隨一にして、天眼通を得たる人なり。

【一九】菴摩羅果(Amalaka)とは又は菴羅とも書く。印度の植物の名なり。

【二〇】四天王とは四天王の王にして、佛法を守護する神なり。即ち東方持國、西方廣目、南方增長、北方多聞天なり。其住所は須彌山の中間に在りといふ。

も、同じく汝が見精の淸淨に矚る所なり。則ち諸の物類は、自ら差別あれども、見性は殊なることなければ、此の精妙明は誠に汝が見性なり。若し見是れ物ならば、則ち汝亦た吾が見を見るべし。若し同じく見るをば、名けて吾が〔見を〕見るとせん。〔吾を見るとせば〕吾が不見の時、何ぞ吾が不見の處を見ざる。若し不見を見るといはゞ、自然に彼の不見の相に非ず。若し吾が不見の地を見ざれば、自然に物に非ず。云何ぞ汝〔が眞見〕に非ざらん。又則ち汝今物を見るの時、汝既に物を見る。物亦た汝を見るといはゞ、體と性と紛雜して、則ち汝と我と幷に諸の世間と、安立することを成ぜず。阿難よ、若し汝見する時、是れ汝にして我に非ず、見性は周徧せり、汝に非ずして誰ぞ。云何ぞ自ら汝が眞性の汝に性たるを眞にあらずと疑つて、我に取つて實を求むるや。』阿難、佛に白して言さく、『世尊、若し此の見性、必らず我にして餘に非ずば、我と如來と四天王の勝藏寶殿を觀るとき、日月宮に居りしに、此の見周圓にして娑婆國に徧せり。退いて精舍に歸るときに、祇伽藍のみを見る。心を戸堂に澄すには、但簷廡を瞻る。世尊、此の見是の如く、其の體本來一界に周徧するも、今室中に在るときは、唯一室に滿てり。復た此の見は、大を縮めて小となすとやせん、當た牆宇の夾んで、斷絕せしむるとやせん。我いま斯の義の所在を知らず、願くは弘慈を垂れて、我が爲に敷演したまへ。』

佛、阿難に告げたまはく、『一切世間の大小內外の諸所の事業は、各前塵に屬す、說いて見に舒縮ありと言ふべからず。譬へば方器の中に方空を見るが如きは、吾また汝に問はん、此の方器の中に見る所の方空は、復た定めて方なりとやせん、定めて方なるには非ずとやせん。若し定めて方ならば、別に圓器を安くとも、空は圓ならざるべし。若し定めて［方なら］ざれば、方器の中に在つて、方なる空なかるべし。汝斯の義の所在を知らずと言へり、義の性是の如し。云何ぞ在とせん。阿難よ、若し復た方圓なきことを入らしめんと欲せば、組器の方(圓)を除け、空の體には方(圓)なし、說いて更に虛空の方相の、所在を除かんと言ふべからず。若し汝が問の如く、室に入る時に、見を縮めて少ならしめば、仰いで日を觀る時には、汝豈に見を挽いて、日の面に齊しからしめんや。若し牆宇を築きて、能く見を夾んで斷たしめば、穿つて小竇をなさば、寧ろ續ける迹なからんや、是の義然らず。一切衆生、無始より來、おのれに迷うて物となし、本心を失つて物の爲に轉ぜらる。故に是の中に於て、大を觀小を觀る。若し能く物を轉ずれば、則ち如來に同じ。身心圓明なり、道場を動せずして、一毛端に於て徧く能く十方の國土を含受す。』阿難、佛に白して言さく、『世尊、若し此の見精、必らず我が妙性ならば、今此の妙性は、現れて我が前に在らん。見必らず我が眞ならば、我が今の身心は、復是れ何物ぞ。而るに今の身心は、分別

すること實あり、彼の見は別に我が身を分辨することなし。若し實に我が心にして、我をして今見せしめば、見性は實に我にして、身は我に非ざるべし。何ぞ如來先に難じて、物能く我を見ずと言ふ所に殊ならん。唯大慈を垂れて、未悟を開發したまへ。』

佛、阿難に告げたまはく、『今汝が見汝が前に在りと言ふ所、是の義實に非ず。若し實に汝が前にあつて、汝實に見るといふは、則ち此の見精、既に方所あり、指示するところ無きにあらじ。且つ今汝と祇陀林に坐して、徧く林渠と及び宮殿とを觀るに、上は日月に至り、前は恆河に對へり。汝今我が師子座の前に於て、手を擧げて是の種種の相を指陳せよ。陰れる者は是れ林なり、明かなる者は是れ日なり、礙れる者は是れ壁なり、通れる者は是れ空なり、是の如く乃至草樹纖毫まで、大小殊なりと雖も、但形あるものは指ざして著さずといふこと無かるべし。若し必ず其の見現れて、汝が前に在りといはゞ、汝手を以て確實に指陳すべし、何者か是れ見なる。阿難よ、當に知るべし、若し空是れ見ならば既已に見と成す、何者か是空ならん。若し物是れ見ならば、既已に是れ見なり。汝微細に萬像を披剝し、精明淨妙の見元を析出して、指陳して我に示すこと彼の諸物に同じく、分明にして惑ふことなかるべし。』阿難言さく、『我今此の重閣講堂に於て、遠きは恆河に洎び、上は日月を觀る、手を擧げて指ざす所、目を縱にして觀る所、皆是

物にして、是れ見なる者なし。世尊、佛の所說の如し。況んや我は有漏初學の聲聞なり、乃至菩薩なりとも。亦た萬物の像の前に於て、精見の一切の物を離れて、別に自性あることを剖出すること能はじ。』佛の言はく、『是の如し是の如し。』

佛復た阿難に告げたまはく、『汝が言ふ所の如くば、精見ありて一切の物を離れて、別に自性あることなくんば、則ち汝が指ざす所、是の物の中に是れ見なる者なけん。今復た汝に告げん。汝如來と與に祇陀林に坐して、更に林苑より乃至日月種種の像の殊なるを觀るに、必らず見精の汝が指ざす所を受くるなくば、汝又發明せよ、此の諸物の中に何者か(これ)非見と。』阿難の言さく、『我實に徧く此の祇陀林を見るに、是の中に何者か非見といふことを知らず。何となれば、若し樹見に非ずば、云何ぞ樹を見ん。若し樹卽ち見ならば、復た云何ぞ樹ならん。是の如く乃至若し空見に非ずは、云何ぞ空を見ん。若し空卽ち見ならば、復た云何ぞ空ならん。我又思惟すらく。是の萬像の中に。微細に發明するに非見なる者なし。』

佛の言はく、『是の如し是の如し。』

是に於て大衆、無學に非ざる者、佛の此の言を聞き、茫然として是の義の終始を知らず、一時に惶悚して其守る所を失へり。如來其魂慮の變慴せることを知つて、心に憐愍を生じ、阿難及び

諸の大衆を安慰したまはく、『諸の善男子、無上法王〔の說〕は是れ眞實の語なり、(三一)所如に如うて說く、不誑不妄にして、末伽梨が(三二)四種の不死矯亂の論議に非ず。汝諦に思惟して、忝く哀慕することなかれ。』

是の時に文殊師利法王子、諸の四衆を愍みて、大衆の中に在つて、卽ち座より起つて、佛足を頂禮して、合掌恭敬して佛に白して言さく、『世尊、此の諸の大衆、如來二種の精見と色空との(三三)是と非是との義を發明したまふことを悟らず。世尊、此の若きの前緣の色空等の像、若し是れ見ならば、指さす所あるべし。若し非見ならば矚る所なかるべし。而るに今是の義の歸する所を知らず、故に驚怖あり。是れ疇昔の善根輕尠なるに非ず。唯願くは如來、大慈をもて發明したまへ。此の諸の物像と此の見精と、元是れ何物ぞ。其の中間に於て、是と非是となきや。』

佛、文殊及び諸の大衆に告げたまはく、『十方如來及び大菩薩、其の(三四)自住の三摩地の中に於

【三一】所如とは、眞如の理法其まゝのことなり。

【三二】四種の不死矯亂とは、其類一に非ず、各々有無等の四句ありと云ふ。卽ち妄見を執して還て不死の說を立てたるものなり。

【三三】是と非是とは、精見の色空に對する上に於て、是れ見なりと云ふ義も無く、是れ見に非ずといふ義も無しと說く。卽ち二種の義なり。

【三四】自住の三摩地、自住とは諸佛如來の常に寂靜に住して、起居動止にも此の中を離るゝことなきを云ふなり。三摩地は前に出でたる三摩提のことなり。

て、（二五）見と見緣と幷に所想の相とは、虛空の華の本より所有なきが如し。此の見と及び緣とは、元より是れ菩提妙淨明の體なり。云何ぞ中に於て是と非是と有らん。文殊吾いま汝に問ふ、汝文殊なるが如く、更に文殊の是れ文殊なる者ありや、文殊なるもの無しとせんや。』〔文殊言さく〕『是の如し、世尊。我眞の文殊にして、〔別に〕是れ文殊なし、何となれば、若し是れ(文殊)なる者あらば、則ち二文殊あらん、然るに我今日文殊なきに非ず、中に於て實に是非の二相なければなり。』

佛の言はく、『此の見の妙明も諸の空塵も、亦た復た是の如し。本是れ妙明たる無上菩提淨圓の眞心なり。妄に色空と及び聞見と爲れること、第二の月の如し。誰をか是月となし、又誰をか非月とせん。文殊よ、但一月のみ眞なり、中間に自ら是月と非月となし。是を以て汝今見と塵とを觀て、種種發明するを名けて妄想と爲し、中に於て是と非是とを出ること能はず。是の精眞たる妙覺明の性に由るが故に、能く汝をして（二六）指と非指とを出さしむ。』

【二五】見と見緣……所想の相。見は識の體。見緣は識の依て生ずる所、卽ち根なり。所想の相は卽ち客塵煩惱なり。

【二六】指と非指と。前文是と非是と同意義にして、是れ見なり是れ非見なりと執する是非の二見を云ふなり。

巻の第二の二

阿難、佛に白して言さく、『世尊、誠に法王の所說の如く、覺緣は十方界に徧く、湛然常住にして、性、生滅に非ずんば、先に(一)梵志娑毘迦羅が談ずる所の(二)冥諦及び投灰等の諸の外道種の、眞我ありて十方に徧滿すと說くと、何の差別かあらん。世尊亦嘗て楞伽山に於て、大慧等の爲めに、斯の義を敷演したまひき。彼の外道等は常に自然と說く、我が因緣と說くは彼の境界に非ずと、我いま此の覺性の自然にして、生に非ず滅に非ず、一切の虛妄顚倒を遠離せることを觀ずるに、因緣に非ざるに似たり。彼の自然と云何が(分辨)開示して、群邪に入らず、眞實の心、妙覺明の性を獲せしめん。』

佛、阿難に告げたまはく、『我いま是の如く方便を開示して、眞實に汝に告ぐ、汝猶ほ未だ悟らず、惑うて自然となす。阿難若し必らず自然なりといはゞ、自ら須く自然の體あることを甄明すべし。汝且く觀ぜよ、此妙明の見の中に何を以てか自と爲さん。此の見復た明を以て自となし、暗を以て自と爲し、空を以て自となし、塞を以て自となすとやせん。

【一】梵志娑毘迦羅　梵志は婆羅門なり。娑毘迦羅の事は前に出づ。

【二】冥諦及び投灰等。冥諦は前に出づ。投灰は苦行外道なり。此等の外道に九十六種ありて、各々我を立つれども、要するに斷常(卽ち空有)の二見を出でざるなり。

阿難よ、若し明を自とせば暗を見ざるべし。若し復た空を以て自の體とせば塞を見ざるべし。是の如く乃至諸の暗等の相を以て自となさば、則ち明の時に於て見性斷絕せん、「然らば」云何が明を見ん。」阿難言さく、『必らず此の妙見の性、自然に非らずば我今發明す、是れ因緣より生ずるならん。心猶は未だ明めず、如來に諮詢したてまつる、是の義云何が因緣の性に合せん。』

佛の言はく、『汝因緣と言ふ。吾復た汝に問はん、汝今見に因つて見性現前せり。此見は復た明を因として見あり、暗を因として見あり、空を因として見あり、塞を因として見ありとやせん。阿難よ、若し明を因として「見」有らば、暗を見ざるべし。如し暗を因として「見」有らば明を見ざるべし。是の如く乃至空を因とし塞を因とすることは明暗に同じ。復た次に阿難よ、此の見又復た明を緣として見ありや、暗を緣として見ありや、空を緣として見ありや、塞を緣として見ありや。阿難よ、若し空を緣として「見」あらば塞を見ざるべし、若し塞を緣として「見」あらば空を見ざるべし。是の如く乃至明を緣とすることも暗を緣とすることも、空塞に同じ。當に知るべし、是の如き精覺妙明は、因に非ず緣に非ず、亦自然に非ず、不自然に非らず、非と不非と無く、是と非是と無く、一切の相を離れて一切の法に卽す。汝今云何ぞ中に於て心を措きて、諸の世間の戲論の名相を以て分別することを得んや。手掌を以て虛空を撮摩するが如し。祇自ら勞

することを増益すとも、虚空云何ぞ汝が執捉に隨はん。』阿難、佛に白して言さく、『世尊、必ず妙覺の性は因に非ず緣に非ずんば、世尊、云何ぞ常に比丘の與めに、見性は四種の緣を具せりと宣說したまふ。謂ゆる空を因とし、明を因とし、心を因とし、眼を因とすと、是の義云何。』

佛の言はく、『阿難よ、我世間の諸の因緣の相を說くことは、第一義に非じ。阿難よ、吾復た汝に問はん。諸の世間の人、我能く見ると說く、云何をか見と名け、云何をか不見とせん。』阿難言さく、『世人日月燈の光に因つて、種種の相を見る、之を名けて見と爲す。若し復た此の三種の光明なきときには、則ち見ること能はず。』

〔佛の言はく〕『阿難よ、若し明なき時を不見と名けば暗を見ざるべし、若し必らず暗を見ば、此れ但明なきなり。云何ぞ見なしとせん。阿難よ、若し暗に在る時、明を見ざるが故に名けて不見と爲さば、今明に在る時、暗相を見ざるをも還つて不見と名くべし。是の如くなるをば二相倶に不見と名くべし。若し復た二相は自ら相陵奪すれども、汝が見性中に於て暫くも無きに非ず。是の如くならば則ち知んぬ、二倶に見と名くべし。云何ぞ見ずといはん。是の故に阿難よ、汝今當に知るべし、明を見るの時も、見是れ明に非ず、暗を見るの時も、見是れ暗に非ず、空を見るの時も、見是れ空に非ず、塞を見るの時も、見是れ塞に非ず、四義をもつて成就せんや。汝復た

應に知るべし。見を見するの時、見是れ見に非ずと、見猶ほ見を離る。見も及ぶこと能はず、云何ぞ復た因緣、自然及び和合の相を說かん。汝等聲聞、狹劣無識にして、淸淨の實相に通達すること能はず。吾いま汝に誨ゆ、當に善く思惟して妙菩提の路に疲れ怠ることを得ることなかるべし』。阿難、佛に白して言さく、『世尊、佛世尊の如きは我等が輩の爲に、因緣と及び自然とを宣說したまへども、諸の和合の相と不和合と〔に於て〕心猶ほ未だ開けず、而して今更に見を見するに、見に非ずといふことを聞きて重ねて迷悶を增す。伏して願くは弘慈、大慧目を施し、我等に覺心明淨なることを開示したまへ。』是の語を作し已つて、悲涙頂禮して、聖旨を承け受く。

爾の時に世尊、阿難及び諸の大衆を憐愍して、將に大〔三〕陀羅尼、諸の〔四〕三摩提・妙修行路を敷演せんと欲して、阿難に告げて言はく、『汝强記と雖も、但多聞を增益して、奢摩他微密の觀照に於て心猶ほ未だ了せず。汝今諦に聽け、吾當に汝が爲めに分別開示して、亦將來の諸の〔五〕有漏の者をして、菩提の果を獲せしむ

【三】陀羅尼(Dhāraṇī)。能持、能遮、總持等と譯し、或は咒と稱す。字々無量の義理を含むを以て、之を誦する者をして、一切の障碍を除き、無邊の利益を得せしむる力用ありと云ふ。

【四】三摩提妙修行路。三摩提は前に出づ。妙修行路は三摩提を修して無上菩提に到達する圓融無碍の法門を云ふなり、下の文に奢摩他微密の觀照と云へるも又同じ。

【五】有漏とは、漏は煩惱の異名にして、未だ煩惱を除かざる初學の凡夫等を云ふなり。

べし。

阿難よ、一切衆生の世間に輪廻することは、二の顚倒分別の見妄に由れり。當處に發生し、當業に輪轉す。云何をか（六）二見といふ。一には衆生の別業妄見なり、二には衆生の同分妄見なり。云何をか名けて別業妄見となす。阿難よ、世間の人の目に赤眚ありて、夜燈光を見るに、別に圓影ありて五色重疊するが如し。意に於て云何。此の夜の燈明の所現の圓光を、是れ燈の色なりとやせん、當見の色なりとやせん。阿難よ、此れ若し燈の色ならば、則ち眚に非ざる人も何ぞ同ぐ見ずして、而も此の圓影を唯眚ある「人」のみ之を觀る。若し是れ見の色ならば、見已に色となす。則ち彼の眚ある人の圓影を見るをば、名けて何等とかなさん。復た次に阿難よ、若し此の圓影、燈を離れて別にあらば、則ち旁に屏帳几筵を觀るに圓影の出づること有るべし。見を離れて別にあらば眼に矚るに非ざるべし。云何ぞ眚ある人、目に圓影を見るや。是の故に當に知るべし、色は實に燈に在り、見の病によりて影となさば、影と見と倶に眚なり。眚なりと見れば病なし、終に是れ燈是れ見と言ふべからず、是の中に於て非燈非見ありや。（譬へば）第二の月の、體にも非ず影にも非ざるが如し。何

【六】二見とは、一念の心動いて分別を起し、物を緣じて見を生ずれども、宇宙の現象は元實體なき故に妄見と云ふ。妄見は同一なるを以て一を同分と云ひ、人に依りて國中異あるを以て一を別業と云ふ。

となれば、第二の觀は揑て成る所なるを以てなり。諸の有智の者は、說いて此の揑の根元は是形非形、見非見を離れたりと言ふべからず。此も亦た是の如き目眚を成ぜる所なり。今誰をか是燈、是見と名けんと欲す、何に況んや非燈非見を分別せんをや。

云何をか名けて同分妄見となす。阿難よ、此の(七)閻浮提、大海の水を除いて、中間の平陸に三千洲あり。正中の大洲は東西を括量するに、大國凡そ二千三百あり。其餘の小洲は諸海の中に在り、其間に或は三兩百國あり、或は一或は二より千三十四十五十に至れり。阿難よ、若し復た此の中に一の小洲あつて祗兩の國あり、唯一國の人のみ同じく惡緣を感ずれば、則ち彼の小洲、當土の衆生は、諸の一切不祥の境界を覩る。或は二の日を見、或は兩の月を見る。其中に乃至(八)暈適、珮玦、彗孛飛流、負耳、虹蜺、種種の惡相あり。但此の國のみ見て、彼の國の衆生は本より見ざる所なり、亦た復た聞かざるなり。

阿難よ、吾いま汝が爲めに此の二事を以て、進退合して「見と無見とを」明さん。阿難よ、彼の衆生の別業妄見の如しとは、燈火の中に現ずる所の圓影を矚るに、現に境に似たりと雖も、終に

【七】閻浮提とは、梵語詳しくは閻浮提波（Jambu-dvipa）と云ふ。須彌四州の一にして人類の棲息する世界なり。

【八】暈適珮玦云々。暈適は星の類、珮玦は玉器にして、日月の暈をなすこと人の玉を佩ぶるが如きを云ふ。彗孛飛流は彗星を云ふ。負耳は昔人耳に付くる玉にして、氣日邊に負ふを云ふ。虹蜺はニジを云ふ。是の如き變異を人智未開の時には不祥となせり。

彼の見る者の目眚の成ずる所なく、眚は卽ち見の勞なり、色の所造に非ざるなり。然れども眚なりと見れば、終に見の咎なし。例へば汝今日、目を以て山河國土及び諸の衆生を觀見せんに、皆是れ無始の見病の所成なり。見と見緣と現前の境に似たれども、元より我が覺明なり。所緣を見るとも眚なり、見を覺るも卽ち眚なり。本覺の明心たる覺緣は眚に非ず、覺と、所覺とは眚なり。覺は眚の中に非ず、此れ實に見を見するなり。云何ぞ復た覺聞知見と名けん。是の故に汝いま我及び汝幷に諸の世間(九)十類の衆生を見るは、皆卽ち見眚なり。見の眚に非ざる者は、彼の見の眞精なり、性は眚に非ざるが故に見と名けず。

阿難よ、彼の衆生同分妄見の如きを彼の妄見別業の一人に例せば、一病目の人は彼の一國に同じく。彼の圓影を見る眚妄の所生と、此衆同分の所現の不祥の同見業の中の瘴惡所起とは、倶に是れ無始の妄見の所生なり。閻浮提の三千の洲の中、兼ては四大海と娑婆世界より、幷に十方の諸の有漏の國、及諸の衆生に洎ぶまで、同じく是覺明無漏の妙心なり。見聞覺知の虛妄の病緣、合和して妄に生じ、和合して妄に死するに例す。若し能く諸の和合の緣と及び不和合とを遠離すれば、則ち復た諸の生死の因を滅除して、菩提不生滅の性を圓滿せん、淸淨の本心は本覺常住なり。阿難よ、汝先づ本覺妙明の性は、因緣に非ず、自然の性に非ずと

【九】十類。後に出づ。

悟ると雖も、而も猶ほ未だ是の如き覺元は、和合の生及び不和合とに非ざることを明めず。
　阿難よ、吾今復た前塵を以て汝に問はん、汝今猶ほ一切世間の妄想和合の諸の因縁の性を以て、而も自ら菩提を證する心も和合より起ると疑惑せば、則ち汝今妙淨の見精と明と和すとやせん、暗と和すとやせん。通と和すとやせん、塞と和すとやせん。若し明と和せば、且く汝明を觀るとき、明の現前するに當つて、何の處か見に雜せん、見と相と辨ずべし。雜せば何の形像ぞ。若し見るべきに非ずば云何が明を見ん。若し卽ち見るべくんば云何が見を見せん。必らず見圓滿せば、何の處か明に和せん。若し明圓滿せば、見和すべからず。見は必らず明に異なり、雜せば則ち彼の性と明との名字を失ふ。雜の明と性を失ふことを、明に和するは義に非ず。彼の暗と通と及び諸の群塞も亦復是の如し。
　復た次に阿難よ、又汝今妙淨の見精は明と合すとやせん、暗と合すとやせん、通と合すとやせん、塞と合すとやせん。若し明と合せんには、暗の時に至れば明の相已に滅せん、此の見卽ち諸暗と合せざりしとき云何ぞ暗を見ん。若し暗を見る時暗と合せずといはば、明と合せんときは明を見るに非ざるべし。既に明を見ざれば、云何ぞ明と合せんときは明と暗に非ずと了せんや。彼の暗と通と及び諸の群塞とも亦復是の如し。』阿難、佛に白して言さく、『世尊、我が思惟する

が如きは、此の妙覺元と諸の緣塵と及び心の念慮とは和合に非ざるをや。』

佛の言はく、『汝今又覺は和合に非ずと言ふ。吾復た汝に問はん、此の妙見の精は、和合に非ずといふは、明と和するに非ずと爲すや、暗と和するに非ずと爲すや。通と和するに非ずと爲すや、塞と和するに非ずと爲すや。若し明と和するに非ずば、則ち見と明と必らず邊畔あらん。汝且く諦觀せよ。何の處か是れ明、何の處か是れ見、見に在き明に在いて其の何をか畔と爲さん。阿難よ、若し明際の中に必らず見なくんば、則ち相ひ及ばずして、自ら其明相の所在を知らず、畔云何ぞ成ぜん。彼の暗と通と及び諸の群塞も亦復是の如し。又妙見の精和合に非ずば、明と合するに非ずとやせん、暗と合するに非ずとやせん、通と合するに非ずとやせん、塞と合するに非ずとやせん。若し明と合するに非ずんば、則ち見と明と性相乖角せること、耳と明との了に相觸れざるが如し。見且つ明相の所在を知らず、云何ぞ合と非合との理を甄明せん。彼の暗と通と及び諸の群塞も亦復是の如し。

阿難よ、汝猶ほ未だ一切浮塵の諸の幻化の相は、當處に出生し、隨處に滅盡し、幻妄を相と稱し、其性は眞に妙覺明の體たることを明めず。是の如く乃至〔一〇〕五陰六入十二處より十八界に至

【一〇】五陰は、又五蘊とも云ふ。色、受、想、行、識の五なり。六入とは、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根。十二處とは六根と色、聲、香、味、觸、法の六境とを云ふ。十八界とは、十二處と眼、耳、鼻、舌、身、意の六識とを云ふ。

るまで、因縁和合すれば虚妄に生あり、因縁別離すれば虚妄に滅と名く。殊に生滅去來、本〔二〕如來藏にして、常住妙明不動周圓の妙眞如の性なることを知ること能はじ。性眞常の中には、去來迷悟死生を求むるに了に所得なきなり。

阿難よ、云何ぞ五陰本如來藏にして妙眞如の性なる。阿難よ、譬へば人ありて、清淨の目を以て晴明の空を觀るに、唯一の晴虚のみにして、迥に所有なきが如し。其人故なく、目睛を動せずして瞪つて以て勞を發すれば、則ち虚空に於て別に狂華を見、復た一切狂亂の非相あり。色陰も當に知るべし亦復是の如し。阿難よ、是の諸の狂華は、空より來るにも非ず、目より出づるにも非ず。是の如く阿難若し空より來るといはば、既に空より來らば還つて空より入らん。若し出入あらば卽ち虚空に非ず。空若し空に非ずば、自ら其華相の起滅することを容れず。阿難の體に阿難を容れざるが如し。若し目より出づるといはゞ、既に目より出でなば還つて目より入るべし。卽ち此の華の性、目より出づるが故に、〔華にも〕當に見ることあるべし。〔目より〕去つて既に空に華あらば、〔空より目に〕旋らんとき眼を見るべし。若し見ることなくんば、〔目より〕出でて既に空に

【二】如來藏とは、眞如のことなり。如來とは佛の異名にして、佛は眞如より現れ來るが故に如來と云ふ。眞如は佛の功德を含み居るが故に如來藏と云ふ。又此の眞如は衆生の迷妄の爲めに隱覆せらるゝとの義よりも如來藏と名くるなり。

翳す。「空より」旋らんとき當に目を翳ずべし。又華を見るの時、目に翳なかるべしといふは、云何ぞ晴空のとき晴明の眼と號するや。是の故に當に知るべし、色陰は虚妄にして、本因緣に非ず、自然の性に非ざることを。

阿難よ、譬へば人ありて、手足宴安に、百骸調適にして、忽ち生を忘れたるが如くにして、性違順なからんに、其人故なくして、二手の掌を以て空に於て相ひ摩するに、二手の中に於て妄に澁滑冷熱の諸相を生ずるが如し。受陰も、當に知るべし、亦復是の如し。阿難よ、是の諸の幻觸は、空より來らず、掌より出でず。是の如く阿難よ、若し空より來るといはゞ、既に能く掌に觸るゝに、何ぞ身に觸れざらん。虚空選擇して來り觸るべからず。若し掌より出づるといはゞ、應に合することを待つに非ざるべし。又掌より出づるが故に、合するとき掌知らば、離するとき則ち觸入るべし、「觸入る時」臂腕骨髓も亦入る時の蹤跡を覺知すべし。必らず覺心あつて出づるを知り入るを知らば、自ら一物ありて身中に往來せん。何ぞ合するを待つて知るを、要らず名けて觸とせん。是の故に當に知るべし、受陰は虚妄にして本因緣に非ず、自然の性に非ざることを。

阿難よ、譬へば人ありて、酢梅を談說すれば、口中より水出で、懸崖を蹋まんことを思へば、足心酸澁するが如し。想陰も、當に知るべし、亦復是の如し。阿難よ、是の如き酢の說は、梅よ

り生ぜず、口より入るに非ず。是の如く阿難よ、若し梅より生ずといはゞ、梅自ら談るべし、何ぞ人の說くを待たん。若し口より入らば、自ら口に聞くべし、何ぞ耳を待つことを須ゐん。若し獨り耳のみ聞かば、此の水何ぞ耳の中より而も出でざる。懸崖を蹋まんことを想ふ、〔酢の〕說と相ひ類す。是の故に當に知るべし、想陰は虛妄にして本因緣に非ず、自然の性に非ず。

阿難よ、譬へば瀑流の波浪相續して、前際後際相ひ踰越せざるが如し。行陰も當に知るべし、亦復是の如し。阿難よ、是の如き流の性は、空に因つて生ずるにも非ず、水に因つて有るにもあらず。亦た水の性にも非ず、空と水とを離れたるにも非ず。是の如く阿難よ、若し空に因つて生ぜば、則ち諸の十方無盡の虛空、無盡の流と成りて、世界自然に倶に淪溺を受くべし。若し水に因つて有らば、則ち此の瀑流の性、水に非ざるべし、(若し)所有の相あらば、今應に現に在るべし。若し水の性に卽すといはゞ、卽ち澄淸の時應に水の體に非ざるべし。若し空と水とを離るれば、空は外に有るに非ず、水の外に流なし。是の故に當に知るべし、行陰虛妄にして本因緣に非ず、自然の性に非ず。

阿難よ、譬へば人ありて、(三)頻伽缾を取りて其兩の孔を塞ぎ、中に滿てゝ空に擎げて、千里に

【三】頻伽缾とは、頻伽は前に出でたる好聲鳥なり。此鳥の形を模して作りたる缾を云ふなり。

遠く行きて用ゐて他國に餉するが如し。識陰も、當に知るべし、亦復是の如し。阿難よ、是の如く虚空は、彼の方より來るにも非ず、此の方にして入るにも非ず。是の如く阿難よ、若し彼の方より來るといはゞ、則ち本瓶の中に既に空を貯へて去り、本瓶の地に於て應に虚空を少ぐべし。若し此の方にして入れば、則ち孔を開き瓶を倒して空の出づるを見るべし。是の故に當に知るべし、識陰は虚妄にして本因縁に非ず、自然の性に非ず。

卷の第三の一

復た次に阿難よ、云何んが（一）六入は本如來藏にして妙眞如の性なる。阿難よ、卽ち彼の目睛瞪つて勞を發するは、目と勞とを兼ねて、同じく是れ菩提なるに、瞪つて勞相を發せり。明暗二種の妄塵に因つて、見を發し中に居して、此の塵像を吸るを、名けて見の性となす。此の見彼の明暗の二塵を離るれば、畢竟して體なし。是の如く阿難よ、當に知るべし、是見は明暗より來るにも非ず、根より出づるにも非ず、空より生ずるにも非ず。何となれば、若し明より來るといはゞ、暗には卽ち隨つて滅して、暗を見るに非ざればなり。若し暗より來るといはゞ、明には卽ち隨つて滅し、明を見ることなかるべし。若し根より生ぜば、必らず明暗なきとき、是の如き見精は本自性なし。若し空より出づといはゞ、前まんには塵像を矚、歸らんには當に根を見るべし。又空自ら觀ば、何ぞ汝が[眼]入に關らん。是の故に當に知るべし、眼入は虛妄にして、本因緣に非ず、自然の性に非ざることを。

阿難よ、譬へば人ありて、兩手の指を以て急に其耳を塞ぐに、耳根勞するが故に、頭の中に聲

【一】六入とは、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根は色、聲、香、味、觸、法の六境の入る所なるが故に云ふ。

を作すが如し。耳と勞とを兼て同じく是れ菩提なるなり、瞪つて勞相を發せるなり。動靜二種の妄塵に因て、聞を發し中に居して、此の塵像を吸るを聽聞の性と名く。此の聞彼の動靜の二塵を離れては、畢竟して體なし。是の如く阿難よ、當に知るべし。是聞は動靜より來るにも非ず、根より出づるにも非ず。空より生ずるにも非ず。何となれば、若し靜より來るといはゞ、動には卽ち隨つて滅し、動を聞くに非ざるべく、若し動より來るといはゞ、靜には卽ち隨つて滅し、靜を覺することなかるべく、若根より生ずといはゞ、必らず動靜なきときは、是の如きの聞、體本より自性なきを以てなり。若し空より出づるといはゞ、聞あらば性と成りて、卽ち虛空には非じ。又空自ら聞かば、何ぞ汝が「耳」入に關らん。是の故に當に知るべし、耳入は虛妄にして本因緣に非ず、自然の性に非ざることを。

阿難よ、譬へば人ありて、急に其鼻を畜む、畜むこと久ふして勞を成せば、則ち鼻の中に於て聞ぐに冷觸ありて、觸に因つて通と塞と虛と實と、是の如く乃至諸香と、臭氣とを分別するが如し。鼻と勞とを兼ねて同じく是菩提なるに、瞪つて勞相を發せり。通塞二種の妄塵に因つて、聞を發し中に居して、此の塵像を吸るを、齅聞の性と名く。此の聞彼の通塞の二塵を離れては、畢竟して體なし。當に知るべし、此の聞通塞より來るにも非ず、根より出づるにも非ず、空より生

ずるにも非ず。何となれば、若し通より來るといはゞ、塞には則ち聞滅すればなり。云何ぞ塞を知らん。若し塞に因つて有りといはゞ、通には則ち聞ぐことなかるべし、云何ぞ香臭等の觸を發明せん。若し根より生ずといはゞ、必らず通塞なきとき、是の如きの聞の機、本より自性なし。若し空より出づるといはゞ、是聞自から當に廻るとき汝が鼻を齅ぐべし。空自ら聞ぐこと有らば何ぞ汝が〔鼻〕入に關らん。是の故に當に知るべし、鼻入は虛妄にして、本因緣に非ず、自然の性に非ざることを。

阿難よ、譬へば人ありて、舌を以て吻を舐り、熟く舐りて勞せしむるとき、其人若し病あらば則ち苦味あり。病なきの人は微き甜觸あり。甜と苦とに由りて、此の舌根不動の時、淡性常に在ることを顯すが如し。舌と勞とを兼ねて同じく是れ菩提なるに、瞪つて勞相を發するなり。甜苦と淡との二種の妄塵に因つて、知を發し中に居して、此の塵像を吸るを、知味の性と名く。此の知味の性、彼の甜苦と及び淡との二塵を離れては、畢竟して體なし。是の如く、阿難よ、當に知るべし、是の如く苦淡を嘗むる知は、甜苦より來るにも非ず、淡に因つて有なるにも非ず、又根より出づるにも非ず、空より生ずるにも非じ。何となれば、若し甜苦より來るといはゞ、淡には則ち知滅すべければなり、云何ぞ淡を知らん。若し淡より出づるといはゞ、甜には卽ち知亡ずべ

し、復た云何ぞ祇苦の二相を知らん。若し舌より生ずといはゞ、必らず甜淡と及び苦塵となきとき、斯の知味の根本自性なし。若し空より出づるといはゞ、虚空自ら味めん、汝が口の知に非じ。又空自ら知らば、何ぞ汝が「舌」入に關らん。是の故に當に知るべし、舌入は虚妄にして、本因緣に非ず、自然の性に非ざることを。

阿難よ、譬へば人ありて、一の冷手を以て熱手に觸るゝとき、若し冷の勢多ければ、熱きもの冷に從ひ、若し熱の功勝れば、冷きもの熱と成るが如し。是の如く此の合覺の觸を以て、離の知を顯す。涉勢若し成ずれば、勞に因つて觸す。身と勞とを兼ねて同じく是れ菩提なるに、瞪つて勞相を發す。離合二種の妄塵に因つて、覺を發し中に居して、此塵像を吸るを知覺の性と名く。此の知覺の體は、彼の離合違順の二塵を離れては畢竟して體なし。是の如く、阿難よ、當に知るべし、是の覺は離合より來るにも非ず、違順より有なるにも非ず、根より出づるにも非ず、又空より生ずるにも非じ。何となれば、若し合する時來るといはゞ、離には當に已に滅すべし。云何ぞ離を覺せん。違順の二相も亦復是の如し。若し根より出づるといはゞ、必らず離合違順の四相なきとき、則ち汝が身知元より自性なし。必らず空より出づるといはゞ、空自ら知覺すべし、何ぞ汝が「身」入に關らん。是の故に當に知るべし、身入は虚妄にして、本因緣に非ず。自然の性に

非ざることを。
阿難よ、譬へば人ありて、勞倦すれば則ち眠り、睡り熟すれば便ち寤む、塵を覽て斯に憶す、憶を失するをば忘と爲すが如し。是れ其顚倒の（三）生住異滅を吸習して、中に歸して相ひ踰越せざるを意知根と稱す。意と勞とを兼ねて同じく是れ菩提なるに、瞪つて勞相を發す。生滅二種の妄塵に因つて、知を集め中に居して、內塵を吸撮す。見聞の逆流するに、流の及ばざる地を覺知の性と名く。此の覺知の性は、彼の寤寐生滅の二塵を離れては畢竟して體なし。是の如く、阿難よ、當に知るべし、是の如き覺知の根は、寤寐より來るにも非ず、生滅より有なるにも非ず、根より出づるにも非ず、亦空より生ずるにも非ず。何となれば、若し寤寐より來るといはゞ、寐には卽ち隨つて滅すべければなり。何を以てか寐と爲さん。必らず生の時有なりといはゞ、滅には卽ち無に同じ。誰をしてか滅を受けしめん。若し滅に從つて有りといはゞ、生には卽ち滅無かるべし、誰か生を知る者ならん。若し根より出づるといはゞ、寤寐の二相、身の開合に隨つて斯の二體を離るれば、此覺知は空花に同じく、畢竟して性なからん。若し空より生ずといはゞ、自ら是れ空の知なり、何ぞ汝が（意）入に關らん。是の故に當に知

【三】生住異滅。一切萬物は常住不變なる事無し、一度生ずれば暫らく止住すと雖も必ず變異して遂に滅するものなり、之れを生住異滅の四相と云ふ。

るべし、意入は虚妄にして、本因縁に非ず、自然の性に非ざることを。

復た次に阿難よ、云何んが（三）十二處は本如來藏にして妙眞如の性なる。阿難よ、汝且く此の祇陀樹林及び諸の泉池を觀るに、意に於て云何。此等は是れ色より眼見を生ずとやせん、眼より色相を生ずとやせん。阿難よ、若し復た眼根より色相を生ずといはゞ、空を見るとき色に非ず、色性應に銷すべし、銷せば則ち一切都て無なることを顯發せん。色相既に無ならば、誰が空質を明らめん。空も亦是の如し。若し復た色塵より眼見を生ずといはゞ、空を觀ずるとき色に非ず、見卽ち銷亡す、亡せば則ち都て無なるべし、誰か空と色とを明らめん。是の故に當に知るべし、見と色空と倶に處所なし。卽ち色と見との二處虚妄にして本因縁に非ず、自然の性に非ず。

阿難よ、汝更に此の祇陀園の中に、食の辦せられて鼓を撃つて衆集まるとき、（食を受くれば）鐘を撞き、鐘と鼓との音聲、前後相續するを聽くに、意に於て云何。此等は是れ聲の耳の邊に來るとやせん、耳の聲の處に往くとやせん。阿難よ、若し復た此の聲、耳の邊に來るといはゞ、我室羅筏城に乞食するとき、祇陀林に在ては、則ち我あることなきが如し。此の聲必らず阿難の耳

【三】十二處とは、六根六境の二法は倶に識の依て生ずる處なるを云ふ。或は十二入とも名く。初めに六入を擧げたるは專ら根を論じ、此に十二處と立てたるは正しく境を破せんが爲なり。

處に來らば、目連迦葉倶に聞かざるべし。何に況んや其中の一千二百五十の沙門、一しく鐘聲を聞きて、同じく食處に來らんや。若し復た汝が耳、彼の聲の邊に往くといはゞ、我歸りて祇陀林の中に往くとき、室羅(筏)城に在つては則ち我あることなきが如く、汝鼓聲を聞くとき、其耳已に鼓を撃つの處に往き、鐘聲の齊しく出づるをば倶に聞かざるべし。何に況や其中の象馬牛羊の種種の音響をや。若し來往なくんば亦復聞くことなけん。是の故に當に知るべし、聽と音響と倶に處所なし。卽ち聽と聲との二處は虚妄にして、本因緣に非らず、自然の性に非ず。

阿難よ。汝又此の爐中の栴檀を齅ぐに、此の香若し復た一銖を然けば、室羅筏城四十里の内に同時に(香)氣を聞く。意に於て云何。此の香復た栴檀の木より生ずとやせん、汝が鼻より生ずとやせん、空より生ずとやせん。阿難よ、若し復た此の香汝が鼻より生ずといはゞ、鼻の所生と稱す、當に鼻より出づべし。鼻は栴檀に非ず、云何ぞ鼻中に栴檀の氣あらん。汝香を聞くと稱す、當に鼻より入るべし。鼻中より香を出して聞くと說くことは義に非ず。若し空より生ぜば、空の性は常恒なり、香常在なるべし、何ぞ爐の中に此枯木を爇くに藉らん。若し木より生ずといはゞ、則ち此の香の質は爇に因つて煙と成る。若し鼻聞ぐことを得るとも、煙の氣を蒙るべし。其煙は空に騰りて未だ遙遠に及ばず、四十里の内云何ぞ已に聞くや。是の故に當に知るべし、香鼻と聞

と倶に處所なし。卽ち臭と香との二處は虛妄にして、本因緣に非ず、自然の性に非ず。

阿難よ、汝常に二時に衆中にして持鉢す、其間或は【四】酥酪醍醐に遇はゞ名けて上味となす、意に於て云何。此味復た空中より生ずとやせん、舌根より生ずとやせん、食中より生ずとやせん。阿難よ、若し復た此の味汝が舌より生ずといはゞ、汝が口中に在て祇一舌のみ有り、其舌爾の時已に酥味と成る。【五】黑石蜜に遇ふとも推移せざるべし、若し變移せずんば、味を知ると名けじ。若し變移せば、舌多體に非ず。云何ぞ多味は、一舌の知る「所」ならん。若し食より生ぜば、食は識あるに非ず、云何ぞ自ら知らん。又食自ら知らば、卽ち他の食するに同じからん。何ぞ汝に預りて味の知と名けん。若し空より生ずといはゞ、汝虛空を噉はんに、當に何の味をか作すべき。必らず其れ虛空若し鹹味を作さば、既に汝が舌に鹹きとき、亦た汝が面をも鹹くせん、則ち此界の人海魚に同じからん。既に常に鹹を受けば了に淡を知らず。若し淡を識らずんば亦た鹹を覺らず。必らず知る所なくんば、云何ぞ味と名けん。是の故に當に知るべし、味舌と嘗と倶に處所なきことを。卽ち嘗と味と二倶に虛妄にして、本因緣に非ず、自然の性に非ず。

【四】酥酪醍醐。精製したる乳を酪と云ひ、更に之を精製したるものを酥と云ひ、猶更に之を精製したるものを醍醐と云ふ。

【五】黑石蜜とは甘蔗糖の堅きこと石の如くなるを云ふ。卽ち今の黑砂糖の類なるべし。

阿難よ、汝常に晨朝に手を以て頭を摩づ、意に於て云何。此の摩でゝ知る所は、誰をか能觸とする。能は手に在りとやせん、復た頭に在りとやせん。若し手に在りといはゞ、頭は則ち知ることなからん、云何ぞ觸を成ぜん。若し頭に在りといはゞ、手は則ち用ゆることなけん。云何ぞ觸と名けん。若し各各有りとせば、則ち汝阿難二身あるべし。若し頭と手と一觸の所生ならば、則ち手と頭と當に一體なるべし。若し一體ならば觸則ち成ずることなけん。若し二體ならば觸は誰にか在りとせん。能に在らば所に非ず、所に在らば能に非じ、虚空と汝と觸を成ずべからず。是故に當に知るべし、覺觸と身と倶に處所なきことを。卽ち身と觸と二倶に虚妄にして、本因緣に非ず、自然の性に非ず。阿難よ、汝常に意の中に所緣の(六)善惡無記の三性の法則を生成す。此法は復心に卽して生ずる所とやせん、當た心を離れて別に方所ありとやせん。阿難よ、若し心に卽すとせば、法則は塵に非ず心の所緣に非ずんば、云何ぞ處を成ぜん。若し心を離れて別に方所ありとせば、則ち法の自性は知とやせん、知に非ずとやせん。知ならば則ち心と名けよ。汝に異にして塵に非ずば、他の心量に同じからん。汝に卽せば卽ち心ならん。云何ぞ汝が心更に汝に二あらん。若し知に非ずば、此の塵所に色聲香味、離合冷煖

【六】善惡無記の三性。人が常に身口意の三に於て作る所の業は善性か惡性か、又は善にも非ず惡にもあらざる中間性のものなり、この中間性のものを無記性と云ふ。

及び虛空の相に非ず。當に何によりてか在るべき。今色と空とに於ても、都て表示すべきもの無けん。人間に更に空の外なるもの有るべからず。心縁ずる所なくんば、處誰に從つてか立せん。是の故に當に知るべし、法則と心と倶に處所なきことを。則ち意と法と二倶に虛妄にして、本因縁に非ず、自然の性に非ず。

復た次に阿難よ、云何んが(七)十八界は本如來藏にして妙眞如の性なる。阿難よ、汝が明むる所の眼と色との如くんば、緣と爲つて眼識を生ず。此識復た眼の所生なるに因つて、眼を以て界と爲すとやせん、色の所生なるに因つて、色を以て界とやせん。阿難よ、若し眼に因つて生ずといはゞ、既に色空なきとき、分別すべきこと無けん。縱ひ汝が識ありとも、何を將て用ゐんと欲する。汝が見又青黃赤白に非ず、表示する所なけん、何に從つて界を立せん。若し色に因つて生ずといはゞ、空にして色なき時、汝が識滅すべし、云何ぞ是れ虛妄の性なりと識知せん。若し色變ずる時、汝亦た其色相の遷變を識る。汝が識遷らずんば界何に從つてか立せん。變に從つて則ち變せば、界の相自ら無けん。變せずんば則ち恒なるべし。既に色に從つて生せば、虛妄の所在を識知せざるべし。若し二種を

【七】十八界とは萬有を分類したる名目にして、前に出でたる六根六境六識を云ふなり。界は梵語の駄都(Dhatu)の譯にして、因の義なりといふ。即ち根境識の三、互に因と爲るが故なり。

兼ねて、眼と色と共に生ずとせば、合せば則ち中離すべく、離せば則ち兩つに合して體性雜亂すべし。云何ぞ界を成ぜん。是の故に當に知るべし、眼と色とを緣と爲して、眼識の界を生ずること、三處都て無なり。則ち眼と色と及び色界との三は、本因緣に非ず、自然の性に非ず。

阿難よ、又汝が明むる所の、耳聲を緣と爲して耳識を生ずとせば、此の識は復た耳の所生なるに因つて、耳を以て界となすとやせん、聲の所生なるに因つて、耳を以て界となすとやせん。阿難よ、若し耳に因つて生ずといはゞ、動靜の二相既に現前せざれば、根知を成ぜず。必らず所知なくんば、知すら尚ほ成ることなし、識何の形貌かあらん。若し耳聞を取るとも、動靜の故なければ、聞に成ずる所なけん。云何ぞ耳形の色と觸との塵に雜せるを、名けて識の界と爲す。則ち識界復た誰に從つてか立せん。若し聲より生ずとせば、識は聲に因つて有り、則ち聞に關らず。聞なくんば則ち聲明の所在を亡せん。識は聲より生ず(と謂ひ又)聲は聞に因つて聲の相ありと許さば、聞くときは識をも聞くべし。聞かずんば界に非じ。聞かば則ち聲に同じ。識已に聞かれなば、誰か識を聞くと知らん。若し知なくんば終に草木の如くならん。聲と聞と雜りて中界を成ずべからず。界、中位なくんば則ち內外の相復何に從つてか成ぜん。是故に當に知るべし、耳聲を緣と爲して、耳識の界を生ずること、三處都て無なり。則ち耳と聲と及び聲界との三は、本因緣

に非ず、自然の性に非ざることを。

阿難よ、又汝が明むる所の、鼻香を縁と爲して鼻識を生せば、此の識復た鼻の所生なるに因つて、鼻を以て界と爲すとやせん。香の所生なるに因つて、香を以て界とやせん。阿難よ、若し鼻に因つて生ずといはゞ、則ち汝が心中に何を以てか鼻とせん。肉形を取るとやせん、齅知動搖の性を取るとやせん。若し肉形を取らば、肉質は乃ち身なり、身の知は卽ち觸なり。身と名けば鼻に非じ、觸と名けば卽ち塵なるべし。鼻尙ほ名なし、云何ぞ界を立せん。若し齅知を取らば、又汝が心中に、何を以てか知と爲さん、肉を以て知と爲さば、則ち肉の知は、元より觸にして鼻に非ず。空を以て知と爲すといはゞ、空則ち自知せば、肉は覺に非ざるべし。是の如くならば、則ち虛空是れ汝なるべし、汝が身知るに非ずば、今日の阿難應に所在なかるべし。香を以て知と爲さば、知自ら香に屬す、何ぞ汝に預からん。若し香臭の氣必らず汝が鼻より生ずといはゞ、則ち彼の香臭二種の流氣、(八)伊蘭及び梅檀の木を生ぜじ。二物來らざるとき、汝自ら鼻を齅いで香とやせん臭とやせん。臭ならば則ち香なかるべし。香ならば臭なかるべし。若し香臭の二倶に能く聞かば則ち汝一人に兩鼻あるべし。我に對して道を問ふとき、二の阿難あらば、誰をか汝が體とせん。

【八】伊蘭（Erāvaṇa）とは、印度の植物の名にして、惡臭を放つこと「ニワトコ」に類すと云ふ。

若し鼻是れ一ならば、香臭二なかるべし。臭既に香と爲り、香復た臭と成らば、二性有ならじ。界誰に從つてか立せん。若し香に因つて生ずるならば、識香に因つて有なり。眼に見あれども眼を觀ること能はざるが如く、香に因つて有なるが故に、香を知らざるべし。知らば卽ち生に非らじ、知らざれば識に非じ。香知の有るに非ずんば、香界成せじ。識香を知らずんば、因界則ち香に從つて建立するに非じ。既に中間なければ、內外を成ぜず、彼の諸の聞性は畢竟して虛妄なり。是故に當に知るべし、鼻香を緣と爲して鼻識界を生ずる、三處都て無なり、則ち鼻と香と及び香界との三は、本因緣に非ず、自然の性に非ざることを。

阿難よ、又汝が明むる所の、舌味を緣と爲して舌識を生ぜば、此の識復た舌の所生なるに因つて、舌を以て界と爲すとやせん。味の所生なるに因つて、味を以て界とやせん。阿難よ、若し舌に因つて生ずといはゞ、則ち諸の世間の(九)甘蔗、烏梅、黃連、石鹽、細辛、薑桂都て味有ることなきとき、汝自ら舌を甞めんに、甜しとやせん苦しとやせん。若し舌の性苦しといはゞ、誰か來つて舌を甞めん。舌自ら甞めずば、孰か知覺するものとせん。舌の性苦に非ずば、味自ら生ぜじ、云何ぞ界を立せん。若し味に因つて生ずといはゞ、識自ら味と爲らん。(然れば則ち)舌根に同くして、自ら甞めざるべし、云何が是味非味を識知せん。又一切の味

【九】甘蔗云云とは、甘酸等の五味を云ふなり。

一物より生ずるに非ず。味既に多より生ず、識も亦た多體なるべし。識體若し一にして、體必らず味より生ぜば、鹹淡甘辛和合と、倶生と諸の變異との相は、同じく一味と爲つて、分別なかるべし。分別既に無ければ、則ち識と名けじ、云何ぞ復舌味識界と名けん。虚空は汝が心識を生ずべからず。舌と味と和合すといはゞ、卽ち是の中に於て元より自性なけん。云何ぞ界を生ぜん。是故に當に知るべし、舌味を緣と爲して、舌識界を生ずること、三處は都て無なり、則ち舌と味と及び舌界との三は、本因緣に非ず、自然の性に非ざることを。

阿難よ、又汝が明らむる所の、身觸を緣と爲して身識を生ぜば、此の識復た身の所生なるに因つて、身を以て界と爲すとやせん。觸の所生なるに因つて、觸を以て界とやせん。阿難よ、若し身に因つて生ずといはゞ、必らず合離二覺の觀緣なきとき。身何ぞ識る所あらん。若し觸に因つて生ずといはゞ、必らず汝が身なきとき、誰か身なくして合離を知る者あらん。阿難よ、物は觸を知らず。身は觸あることを知る。知あらば身と觸に卽せん、知あらば觸も身に卽せん。觸に卽せば身に非らじ、身に卽せば觸に非らじ。身と觸との二相、元より處所なし。身に合せば卽ち身の身體の性と爲り、身を離せば卽ち是れ虚空と等き相なるべし。內外成ぜずんば、中云何ぞ立せん。中復た立せず、內外の性空ならば、則ち汝識の生ずること、誰に從つてか界を立せん。是の

故に當に知るべし、身觸を緣と爲して、身識界を生ずること、三處都て無なり、則ち身と觸と及び身界との三は、本因緣に非ず、自然の性に非ざることを。

阿難よ、又汝が明らむる所の、意と法とを緣と爲して意識を生ぜば、此識復た意の所生なるに因つて、意を以て界と爲すとやせん。法の所生なるに因つて、法を以て界とやせん。阿難よ、若し意に因つて生ずといはゞ、汝が意の中に於て、必らず所思あるとき、汝が意を發明せん。若し前の法なきときは、意生ずる所なし。緣を離るれば形すら無し、識將に何の用かあらん。又汝が識心と諸の思量と兼ねて了別の性は、同とやせん、異とやせん。意に同じくば卽ち意なるべく、云何ぞ所生ならん。意に異ならば同じからず、應に識る所なかるべし。若し識る所なくんば、云何ぞ意より生ぜん。若し識る所あらば、云何が識といひ意といはん。唯同と異との二性成すること無くんば、界云何ぞ立せん。若し法に因つて生ずといはゞ、世間の諸法は五塵を離れず。汝色法及び諸の聲法香法味法及び觸法とを觀ぜよ。相狀分明にして、以て五根に對して、意の所攝に非ず、汝が識決定して、法に依つて生ぜば、今汝諦に觀ぜよ、法の法は何の狀ぞ。若し色空動靜と通塞と合離との生滅を離れて、此諸相を越えなば、終に所得なけん。生は則ち色空の諸法等の生なり、滅は則ち色空の諸法等の滅なり。所因すら既に無なり、生に因つて識ありとせば、何

の形相をか作す。相狀有なからずば、界云何が生せん。是の故に當に知るべし、意と法とを緣と爲して、意識界を生ずること、三處都て無なり、則ち意と法と及び意界との三は、本因緣に非ず、自然の性に非ざることを。』

卷の第三の二

阿難、佛に白して言さく、『世尊、如來常に說きたまふ、和合の因緣、一切世間の種種の變化は、皆(一)四大和合に因つて發明すと。云何ぞ如來、因緣自然二俱に排擯したまふ。我いま斯の義の屬する所を知らず。唯哀愍を垂れて、衆生に(二)中道了義無戲論の法を開示したまへ。』

爾の時に世尊、阿難に告げて言はく、『汝、先に聲聞緣覺諸の小乘の法を厭離して、發心して無上菩提を勤め求むるが故に、我今時汝が爲めに第一義諦を開示す。如何ぞ復た世間の戲論、妄想の因緣を將て、而も自ら纏繞せるや。汝多聞なりと雖も、藥を說く人の眞藥現前するを、分別すること能はざるが如し。如來說いて眞に憐愍すべしと爲す。汝今諦に聽け、吾まさに汝が爲めに分別開示して、亦た當來の大乘を修せん者をして、實相に通達せしむべし。』阿難、默然として佛の聖旨を承く。

〔佛の言はく〕、『阿難よ、汝が言ふ所の如く、四大和合して世間の種種の變化を發明すといは

【一】四大和合。四大とは地水火風の四、之を大と稱するは此等のものは一切處に周徧して至らざる處なきを以てなり、一切萬物は此の四大が種々の因緣に依つて假に和合して生じたるものなり。

【二】中道了義無戲論の法。中道とは空有の一方に偏せざるを云ふ。了義とは佛法の理義を盡すと云ふの意、無戲論とは眞實ならざる即ち誤れる見解無きを云ふ。要するに佛法甚深の理趣を云ふ。

ば、阿難、若し彼〔四〕大の性體和合に非らずんば、則ち諸大と雜和すること能はざること、猶虛空の諸色に和せざるが如くならん。若し和合せば變化に同じて、始終相成し、生滅相續せん。生じては死し、死しては生じ、生生死死すること㈢旋火輪の如く、未だ休息すること有らじ。阿難よ、水の冰と成り、冰の還つて水と成るが如くならん。

汝地の性を觀よ。麁をば大地と爲し、細をば微塵と爲し、隣虛塵に至る。彼の極微の色の邊際の相を析いて、七分に成ぜられたり。更に隣虛を析けば、卽ち實に空の性なり。阿難よ、若し此の隣虛を析いて虛空と成すといはゞ、當に知るべし、虛空よりも色相を出生すべし。汝今問うて、和合に由るが故に、世間の諸の變化の相を出生すと言ひき。汝且く此一の隣虛塵を觀ぜよ、幾くの虛空を用ゐて和合してか而も有る、隣虛を以て合して隣虛とは成す。又隣虛塵を析いて空に入るといはゞ、幾の色相を用ゐるてか、合して虛空を成ぜん。若し色合せん時、色を合せば空に非じ。若し空合せん時、空を合せば色に非じ。色をば猶ほ析きつべし、空云何が合せん。汝元より如來藏中の性色、眞空、性空、眞色は淸淨本然にして法界に周徧し、衆生の心に隨ひ所知の量に應じ、業に循つて發現すといふ

【三】 **旋火輪**。火を把つて之れを急に旋廻すれば、火光は連續して輪の相を生じて絕ゆることなし、之を旋火輪と云ふ。今生滅の相に於ても斯の如く生生死死相連續して絕ゆることなし。

ことを知らず。世間の無知のものは、惑ふて因緣及び自然の性と爲す。皆是れ識心の分別計度なり。但言說のみ有つて、都て實義なし。

阿難よ、火性は我なし、諸緣に寄れり。汝觀よ、城中の未だ食せざるの家に、炊爨せんと欲する時、手に(四)陽燧を執つて日の前に火を求むることを。阿難よ、(若し)和合と名けば、我と汝と一千二百五十の比丘の如きを今一衆と爲す。衆は一たりと雖も、其根本を詰むるに、各各身ありて皆所生の氏族名字あり。(五)舍利弗は婆羅門種、優盧頻螺は迦葉波種、乃至、阿難は瞿曇種姓なるが如し。阿難よ、若し此火性、和合に因つて有りとせば、彼手に鏡を執り、日に於て火を求むるとき、此の火は鏡中より出づるとやせん、艾より出づるとやせん、日より來るとやせん。阿難、若し日より來るとせば、自ら能く汝が手中の艾を燒くのみならんや。來る處の林木皆應に焚を受くべし。若し鏡の中より出づるといはゞ、自ら能く鏡より出でて艾を然く、鏡何ぞ鎔けざる。汝が手に紆て執るすら尙ほ熱相なし、云何ぞ融泮せん。若し艾より生ずとせば、何ぞ日と鏡との光明相ひ接せるに藉りて、然して後火生ぜんや。汝又諦かに觀せよ、鏡は手に因つて執り、日

【四】陽燧とは、火を出す器にして、「火打ち」のことなり。

【五】舍利弗云云とは、婆羅門は印度四姓の一にして、學問藝術を業とする種族なり。迦葉波は貴族。瞿曇は地最勝と譯して、卽ち地球上に於て最勝なるの意、釋尊一族の姓なりと云ふ。

は天より來り、艾は本地より生ず。火何の方よりか此に遊歷する。日と鏡と相遠くして、和に非ず合に非ず。火光從ふことなくして自ら有るべからず。汝猶ほ如來藏の中の性火眞空、性空眞火は、清淨本然にして、法界に周徧し、衆生の心に隨ひ、所知の量に應ずることを知らず。阿難よ當に知るべし、世人一處に鏡を執れば、一處に火生じ、法界に徧くして執れば、世間に滿ちて起るべし。起つて世間に徧せば、寧ろ方所あらんや。(則ち)業に循つて發現せん。世間の無知のもの、惑うて因緣及び自然の性と爲す。皆是れ識心の分別計度なり、但言說のみ有りて、都て實義なし。

阿難よ、水性は不定にして、流息恒あることなし。室羅[筏]城の迦毘羅仙、斫迦羅仙、及び鉢頭摩、訶薩多等の諸の大幻師、太陰の精を求めて、用ゐて幻藥を和するが如き、是の諸師等、白月の晝に於て、手に(六)方諸を執つて月中の水を承く。此水復た珠の中より出づるとやせん、空中に自から有りとやせん、月より來るとやせん。阿難よ、若し月より來るといはゞ、尚ほ能く遠方より珠をして水を出さしめん、經る所の林木皆流を吐くべし。流せば則ち何ぞ方諸の出す所を待たん。流せずといはゞ、明らけし水月より降るに非ざることを。若し珠より出づるといはゞ、則ち此の珠の中に常に水を流すべし。何ぞ中宵を待つて白月の晝に承け

【六】方諸とは、水を生ずる玉の名。之を執つて月に對すれば自ら水氣を生ずと云ふ。

ん。若し空より生ずといはゞ、空性無邊なり、水も當に無際なるべし、人より天に洎ぶまで皆同じく滔溺せん、云何ぞ復た水陸空行あらん。汝更に諦かに觀ぜよ、月は天に從つて陟り、珠は手に因つて持し、珠水を承くる盤は本人敷き設けたり。水何の方よりか此に流注する。月と珠と相遠くして、和に非ず合に非ず、月の精從ることなくして自から有なるべからず、汝尚ほ如來藏中の性水眞空、性空眞水は、清淨本然にして、法界に周徧し、衆生の心に隨ひ、所知の量に應ずることを知らず。［阿難よ當に知るべし、］一處に珠を執れば、一處に水出づ、法界に徧くして執らば、法界に滿ちて生ぜん。生じて世間に滿てば寧ろ方所あらんや、（則ち）業に循つて發現せん。世間の無知のもの、惑うて因緣及び自然の性と爲す。皆是れ識心の分別計度なり、但言說のみ有つて、都て實義なし。

阿難よ、風性は體なし、動靜常ならず。汝常に衣を整へて大衆に入るとき、(七)僧伽梨の角動じて傍人に及ぶに、則ち微風ありて彼の人の面を拂ふを、此風復た袈裟の角より出づとやせん、虛空より發すとやせん、彼人の面より生ずとやせん。阿難よ、此風若し復袈裟の角より出づとせば、汝乃ち風を披る、其衣飛搖して應に汝が體を離るべし。我今法を說いて、會中に衣を垂る。

【七】僧伽梨（Saṅghāli）とは、梵語、大衣又は重複衣と譯す。說法又は城に入つて托鉢する時に披くる袈裟を云ふ。

汝我が衣を看よ、風何の所にか在る。衣の中に風を藏す地あるべからず。若し虛空より生ずといはゞ、汝が衣動かざるとき、何に因つてか拂ふことなき。空の性常住なれば、風も常に生ずべし。若し風なき時は、虛空當に滅すべし、滅せん風をば見つべし。滅せん空は何の狀ぞ。若し生滅あらば虛空と名けじ。名けて虛空と爲さば、云何ぞ風出でん。若し風自ら拂はるゝの面より生ずといはゞ、彼の面より生ずるとき、當に汝を拂ふべし。自ら汝衣を整ふるとき、云何ぞ倒に拂はん。汝審諦に觀せよ、衣を整ふことは汝に在り、面は彼の人に屬す。虛空は寂然として流動に參らず、風誰の方よりか鼓動して此に來る。風と空と性隔てゝ、和に非ず合に非ず、風心從ふこと無く自ら有なるべからず。汝宛も如來藏中の性風眞空性空眞風は、淸淨本然にして、法界に周徧し、衆生の心に隨ひ、所知の量に應ずることを知らず。阿難よ、汝一人微く服衣を動ずれば、微風ありて出づるが如く、法界に徧くして拂へば、國土に滿ちて生ずべし。世間に周徧せば寧ろ方所あらんや、業に循つて發現せん。世間の無知のもの、惑ひて因緣及び自然の性と爲す。皆是れ識心の分別計度なり、但言說のみ有りて、都て實義なし。

阿難よ、空性は形なし、色に因つて顯發す。室羅「筏」城の河を去ること遙なる處に、諸の（八）刹

【八】刹利種云々　前に出せり。頗羅墮(Bhâradvâja)等は四性の中の別種なり。

〔帝〕利種及び婆羅門、毘舍、首陀、兼ては頗羅墮、旃陀羅等の、新に安居を立てゝ、井を鑿りて水を求むるが如く、土を出すこと一尺すれば、中に於て則ち一尺の虚空あり、是の如く乃至土を出すこと一丈すれば、中間に還つて一丈の虚空を得ん。虚空の淺深は、出すことの多少に隨ふ。此の空は當に土に因つて出す所なりとやせん、鑿に因つて有る所なりや。因なくして自ら生ずるや。阿難よ、若し復た此の空因なくして自ら生ずといはゞ、未だ土を鑿らざる前に、何ぞ無礙ならずして、唯大地のみを見て、逈に通達なきや。若し土に因つて出づといはゞ、則ち土の出づる時、應に空の入るを見るべし。若し土は先に出でて、空の入ること無くんば、云何ぞ虚空は土に因つて出でん。若し出入なくんば、則ち空と土と元より異因なかるべし。異なくして則ち同ならば、則ち土の出づる時、空何ぞ出でざる。若し鑿るに因つて出づとせば、則ち鑿りて空を出す時、土を出すに非ざるべし。鑿るに因つて出づるに非ずんば、鑿りて自ら土を出すとき、云何ぞ空を見るや。汝更に諦審に諦審にして諦觀せよ。鑿ることは人の手に從り、方に隨つて運轉す。土は地の移るに因れり。是の如きの虚空、何に因てか出づる所あらん。鑿と空と虚と實とにして、用を相ひ爲さゞれば、和に非ず合に非ず、虚空從ること無くして自ら出づべからず。此の如きの虚空、性圓周偏にして本より動搖せず。當に知るべし、現前の地水火風を均く五大と名けて、性眞

圓融せり、皆如來藏にして本より生滅なきことを。阿難よ、汝が心昏迷にして、四大元より如來藏なることを悟らず。當に觀ずべし、虛空は出とやせん入とやせん、出入に非ずとやせん。汝全く如來藏中の性覺眞空、性空、眞覺は、清淨本然にして、法界に周徧し、衆生の心に隨ひ、所知の量に應ずることを知らず。阿難よ、一井の空なる時、空の一井に生ずるが如く、十方の虛空も亦復是の如し、十方に圓滿せり。寧ろ方所あらんや、業に循つて發現せん。世間の無知のもの、惑うて因緣及び自然の性と爲す。皆是れ識心の分別計度なり、但言說のみ有りて、都て實義なし。

阿難よ、見覺は知なし、色空に因つて有なり。汝今祇陁林に在つて、朝には明に夕には昏し、設ひ中宵に居るとも、白月には則ち光ありて、黑月には便ち暗きが如き、則ち明暗等は見に因つて分析す。此の見は復た明暗の相と幷に太虛空と、同一體とや爲ん、一體に非ずとや爲ん。或は同か同に非ざるか、或は異か異に非ざるか。阿難よ、此の見若し復た明と暗と及び虛空と、元より一體なりといはゞ、則ち明と暗と二體相に亡じて、暗の時明なく、明の時暗なし。若し暗と一ならば、明には則ち見亡せん。必らず明に一ならば、暗の時は「明」當に滅すべし、滅せば則ち云何ぞ明を見暗を見ん。若し明暗は殊なれども、見に生滅なくば、一云何ぞ成せん。若し此の見精、暗と明と一體に非ずといはゞ、汝明暗及び虛空を離れて、見の元を分析せよ、何の形相をか作せ

る。明を離れ、暗を離れ、及び虚空を離れば、是見の元、龜毛、兎角に同し、明と暗と虚空と、三事俱に異なり、何に從りてか見を立せん。明暗相に背けり、云何が同きことあらん。三を離れては元無し、云何が異なることあらん。空を分ち見を分つに本より邊畔なし、云何ぞ非同ならん。暗を見明を見る、性遷改に非ず、云何ぞ非異ならん。汝更に細審にして微細に審詳し、審諦に審觀せよ。明は太陽に隨ひ、暗は黑月に隨ひ、通は虚空に屬し、壅は大地に歸す。是の如きの見精は、何に因つてか出づる所ぞ。見は覺にして空は頑なり、和に非ず合に非らず、見精從ることなくして自ら出づべからず。此の若きの見聞知、性圓周徧して、本より動搖せず。當に知るべし、無邊の不動の虚空と、並に其動搖の地水火風とを、均く六大と名け、性眞圓融せり。皆如來藏にして本より生滅なきことを。阿難よ、汝が性沈淪して、汝の見聞覺知、本より如來藏なることを悟らず。汝當に此の見聞覺知を觀ずべし。生とや爲ん、滅とや爲ん、同とや爲ん、異とや爲ん、生滅に非ずとや爲ん、同異に非ずとや爲ん。汝曾ち如來藏中の性見覺明、覺精明見は、清淨本然にして、法界に周徧し、衆生の心に隨つて、所知の量に應ずることを知らず。一の見根の見、法界に周きが如く、聽と嗅と甞觸と覺觸と覺知とも、妙德瑩然として、法界に徧周し、十(方)虚(空)に圓滿せり。寧ろ方所あらんや。業に循つて發現せん。世間の無知のもの、惑うて因

縁及び自然の性と爲す。皆是れ識心分別の計度なり、但言說のみ有つて、都て實義なし。

阿難よ、識性は源なく、六種の根塵に因つて妄に出づ。汝今徧く此の會の聖衆を觀よ。目を用て循歷するに、其目周く視るも。但鏡中に別の分析なきが如し。汝が識中に於て、次第に此は是れ文殊、此は富樓那、此は目犍連、此は須菩提、此は舍利弗と標指せん。此識の了知は、見より生ずとや爲ん、相より生ずとやせん、虛空より生ずとやせん、所因なくして突然として出づとやせん。阿難よ、若し汝が識性、見の中より生ずといはゞ、如し明暗及び色空なくして、四種必らず元なきとき、汝が見なし、見性すら尙ほ無なり、何に從つてか識を發せん。若し汝が識性、相の中より生じて、見より生ぜずといはゞ、既に明を見ざれば亦た暗を見じ。明暗矚ざれば、卽ち色空なけん。彼の相すら尙ほ無なり、識何に從つてか發せん。若し空より生ぜば、相に非ず見に非ず。見に非ずば辨ずることなけん。自ら明暗色空を知ること能はじ。相に非ずば緣を滅す。見聞覺知安立する處なけん。此の二非に處して空ならば則ち無に同じ、有ならば物に同ずるに非ざらんか。縱ひ汝が識を發するとも、何をか分別せんと欲する。若し所因なくして、突然として出づといはゞ、何ぞ日中に別に明月を識らざる。汝更に細詳し、微細に詳審すべし。見は汝が睛に託し、相は前の境に推つる。狀あるときは有と成り、相あらざれば無と成る。是如きの識緣、

何に因つてか出づる所ありや。識は動き見は澄めり、（故に）和に非ず合に非ず。聞聽覺知も亦復是の如し。識緣從ること無くして自ら出づべからず。此の若きの識心は、本より所從なし。當に知るべし、了別の見聞覺知も、圓滿湛然として、性從所に非ず、彼の虛空地水火風を兼ねて、均しく七大と名け、性眞圓融せり。皆是れ如來藏にして、本生滅なきことを。阿難よ、汝が心麁浮にして、見聞の發明せる了知は、本如來藏なることを悟らず。汝應に此の六處の識心を觀ずべし。同とや爲ん異とや爲ん、空とや爲ん有とや爲ん、同異に非ずとや爲ん、空有に非ずとや爲ん。汝元如來藏中の性識明知、覺明眞識は、妙覺湛然として、法界に徧周し、十［方］虛［空］を含吐することを知らず、寧ろ方所あらんや、業に循つて發現せん。世間の無知のもの、惑ひて因緣及び自然の性と爲す。皆是れ識心の分別計度なり、但言說のみ有りて、都て實義なし。』

爾の時に阿難及び諸の大衆、佛如來の微妙の開示を蒙りて、身心蕩然として罣礙なきことを得たり。是の諸の大衆、各各自ら心十方に徧せることを知つて、十方の空を見ること、手中の所持の葉物を觀るが如し。一切世間の諸の所有の物、皆卽ち菩提妙明の元心なり、心精徧

【九】妙湛云云とは、佛の三種の身、法、報、應に配したるものにて、首楞嚴王は前に出でたる妙修行の德をいふ。皆是れ常住の眞心卽ち宇宙の妙理を宗教的に讃歎したるものなり。

【一〇】僧祇とに、阿僧祇（アサム一三三

圓にして、十方を含裹す。父母所生の身を反觀するに、猶ほ彼の十方虛空の中に、一微塵を吹くがごとし。安ずるが若く亡ずるが若し。湛たる巨海に一の浮漚を流すが如くにして、起滅從ふことなし。了然として自ら知つて、妙本心常住不滅なることを獲たり。佛を禮し合掌し、未曾有なることを得て、如來の前に於て、偈を說いて佛を讃じたてまつる。

(九)妙湛と摠持と不動尊と、首楞嚴王とは世に希有なり。我が億劫顚倒の想を銷して、(一〇)僧祇を歷ずして法身を獲せしむ。願くは今果を得て寶王と成りて、還つて是の如きの(一一)沙恒の衆を度せん。此の深心を將て(一二)塵刹に奉せん、是を則ち名けて佛恩を報ずと爲す。伏して請ふ世尊證明を爲したまへ、誓つて先づ(一三)五濁惡世に入らん。如し一衆生も未だ成佛せずば、終に此に於て(一四)泥洹を取らず。

khyea)の略にて、無數と譯す。卽ち大數の意にして、長時間の修行を云ふなり。

【一一】沙恒。前に出でたる恒沙に同じ。

【一二】塵刹。詳しくは微塵刹と云ふ、刹は國土の義。塵刹とは極めて微細なる國土、又は多數の國土の義あり、今此にては後者の意に用ゆ。

【一三】五濁惡世とは、劫、見、煩惱、衆生、命、に依つて穢濁せる毒惡の世の中なり。

【一四】泥洹(Nirvana)は涅槃のことなり、前に出せり。

【一五】大雄云云とは前に出でたる妙湛等の三身の德を讃じたるものなり。

【一六】舜若多(Śūnyatā)は梵語、空性と譯す、一切空無の性なり。

〔二五〕大雄大力大慈悲、希くは更に微細の惑を審除して、我をして早く無上道に登つて、十方界に於て道場に坐せしめたまへ。

〔二六〕舜若多の性は銷亡すべくとも、〔二七〕爍迦羅の心は動轉すること無けむ。

【二七】爍迦羅(Sakra)とは梵語、堅固と譯す。即ち金剛不壞の妙心を云ふなり。

卷の第四の一

爾の時に富樓那彌多羅尼子、大衆の中に在りて、卽ち座より起ちて、偏に右の肩を袒ぬぎ、右の膝を地に著けて合掌恭敬して、佛に白して言く、『大威德世尊よ、善く衆生の爲に、如來の(一)第一義諦を敷演し給へり。世尊は常に說法の人中に推して、我を第一と爲したまへり。今如來微妙の法音を聞くこと、猶ほ聾人の百步の外に逾へて、蚊蚋を聆くが如く、本見ざる所なり、何に況や聞くことを得んや。佛宣明して我をして惑を除かしむと雖も、今猶ほ未だ斯の義の究竟して疑惑なき地を詳にせず。世尊、阿難の輩の如きは、則ち開悟すと雖も、(二)習漏未だ除かず。我等會中の無漏に登れる者、諸漏を盡すと雖も、今如來の所說の法音を聞きて、尙ほ疑悔に紆る。世尊、若し復た世間の一切(三)根塵陰處界等、皆如來藏にして、淸淨本然ならば、云何ぞ忽に山河大地諸の有爲の相を生じて、次第に遷流して、終つて復た始まるや。又如來、地水火風、本性圓融し、法界に周徧して、湛然常住なりと說きた

【一】第一義諦は、第二義門に對する語なり。第二義門は客觀的事實を稱し、第一義門は主觀的理想を云ふ。卽ち第一義諦は絕待の理想界に名けたるものにして、謂ゆる無上甚深の法門なり。

【二】習漏は煩惱の異名。習は習氣の義にして、極めて微細なる惑をいふ。

【三】根塵云云とは、六根六塵五陰十二處十八界のこと。

まふ。世尊、若し地性（周）偏せば、云何が水を容れん。水性周偏せば、火は則ち生ぜじ。復云何が水火の二性、俱に虛空に偏して相ひ陵滅せざることを明らめん。世尊、地性は障礙し、空性は虛通す、云何ぞ二倶に法界に周偏せん。而も我是の義の往く攸を知らず。唯願くは、如來、大慈を宣流して、我が迷雲を開きて、諸の大衆に及ぼしたまへ。』是の語を作し已つて、五體を地に投じて、如來の無上の慈誨を欽渇したてまつる。

爾の時に世尊、富樓那及び諸の會中の、漏盡の無學、諸の阿羅漢に告げたまはく、『如來今日普く此の會の爲めに、（四）勝義の中の眞の勝義の性を宣べて、汝が會中の（五）定性の聲聞、及び諸の一切の未だ（六）二空を得ざる、廻向上乘の阿羅漢等をして、皆（七）一乘寂滅場地、眞の（八）阿練若、正修行の處を獲せしめん。汝今諦かに聽け、當に汝が爲めに說くべし。』富樓那等、佛の法音を欽みて、默然として承り聽く。

【四】勝義とは、殊勝なる義理の意にて、眞如の理を云ふ。即ち第一義諦なり。

【五】定性とは、限定せられたる性の意にて、方便の說には二乘聲聞の徒は成佛を得ずと云へり。

【六】二空とは、人空と法空とをいふ。

【七】一乘寂滅場地とは、一乘は三乘に對して云ふ、一は唯一無二、乘は運載の義なり。迷境にある衆生を乘せて、佛果に到らしむる法をいふ。寂滅場地は即ち究竟せる涅槃の境界を云へるなり。

【八】阿練若は、或に阿蘭若（Araṇya）に作り、略して蘭若、練若とも云ふ。遠離處、寂靜處等と譯せり、即ち閑靜無諍の森林を云ふなり。

佛の言はく、『富樓那よ、汝が言ふ所の如く、淸淨本然ならば、云何ぞ忽に山河大地を生ず。汝常に如來の、性覺は妙明なり、本覺は明妙なりと宣說したまふを聞かずや。』富樓那の言さく、『唯然り、世尊、我常に佛の斯の義を宣說したまふことを聞けり。』

佛の言はく、『汝覺明と稱するは、復た性の明なるを稱名して覺と爲すとやせん、覺は明ならざれども、稱して明覺と爲すとやせん。』富樓那の言さく、『若し此れ明ならざれども、名けて覺と爲さば、則ち所明なけん。』佛の言はく、『若し所明なければ、則ち明覺なしといはゞ、(九)〔能〕所あらば(眞)覺に非じ。所なくば明に非ずといはゞ、明なくば又覺湛明性に非じ。性覺は必らず明なり、妄に明覺と爲へり。覺は所明に非ざれども、明に因つて所を立ず。所既に妄に立すれば、汝が妄能を生じ、異同なき中に、熾然として異を成ず。彼の所異に異なりて、異に因つて同を立す。同異發明すれば、此に因つて復た無同無異を立す。是の如く擾亂し、相待して勞を生ず。勞すること久しければ、塵を發して自ら相ひ渾濁す。是に由りて塵勞煩惱を引き起す。起は世界と爲り、靜は虛空と成る。虛空を同と爲し、世界を異と爲す。彼の異同なきは、眞の有爲の法なり。覺明と空昧と、相待して搖を成ず。故に風輪ありて世

【九】（能）所。經中往々此字を用ゐて能緣所緣と云ひ、所明能明等と云へることは、色心の二法に於て、主觀的には能と名け、客觀的には所と名けたるものなり。

界を執持す。空に因つて搖を生じ、明を堅して礙を立す。彼の金寶は、明覺に堅を立す。故に金輪ありて國土を保持す。覺を堅して寶成じ、明を搖して風出づ、風金相ひ摩するが故に、火光ありて變化の性と爲る。寶明潤を生じ、火光上り蒸す、故に水輪ありて十方界を含む。火は騰り水は降りて、交に發して堅を立す。濕へるは巨海と爲り、乾けるは洲潭と爲る、是の義を以ての故に、彼の大海の中にも、火光常に起れり、洲潭の中にも、江河常に注ぐ、水の勢火よりも劣なるときは、結して高山と爲る。是の故に山石は、撃つときは則ち燄と成り、融くるときは水と成る。土の勢水よりも劣なるときは、抽んでゝ草木と爲る。是の故に林藪は、燒くに遇へば土と成り、絞るに因つて水と成る。交妄發生して遞に相種と爲る、是の因縁を以て世界相續す。

復た次に富樓那、妄を明すことは他に非ず。覺明咎を爲せり。所妄既に立すれば、明理踰へず。是の因縁を以て、聽くこと聲を出でず、見ること色を超へず、色「聲」香味觸「法」の六妄成就す。是れに由つて見覺聞知を分開す。(一〇)同業相纏ひ、合離化を成す。見の明より色を發し、明の見より想を成ず、見に異れば憎を成じ、想に同ずれば愛を成す。愛を

【一〇】同業相纏ひ合離化を成すとは、衆生の生ずる卵、胎、濕、化、の四緣を藉る（之を四生と云ふ）、其中卵胎の二は必らず父母の同業相感ずるを待ち、濕化の二は情想の合離に因るといふ。卽ち情想の合する處に濕生じ、離する處に化生すと云ふ。

流して種と爲し、想を納れて胎と爲し、交遘發生して同業を吸引す。故に因緣ありて、(一)羯羅藍遏蒲曇等を生ず。胎卵濕化は、其所應に隨ふ。卵は唯想より生じ、胎は情に因つて有り、濕は合を以て感じ、化は離を以て應ず。情想合離は、更相に變易し、所有の受業は、其(二)飛沈を逐ふ。是の因緣を以て衆生相續す。

富樓那よ、想愛同じく結び、愛離るゝこと能はざれば、則ち諸の世間の父母子孫、相生じて斷へず。是等は則ち欲貪を以て本と爲す。(三)貪愛同滋にして、貪止むこと能はざれば、則ち諸の世間の卵化濕胎、力の强弱に隨つて、遞に相吞食す。是等は則ち殺貪を以て本と爲す。人の羊を食ふを以て、羊死して人と爲り、人死して羊と爲る、是の如く乃至十生の類、死死生生。互に來りて相噉ひ、惡業倶に生じて、未來際を窮む。是等は則ち盜貪を以て本と爲す。汝我が命を負ひ我債を汝に還す。是の因緣を以て、百千劫を經るとも、常に生死に在り。汝我が心を愛すれば、我汝が色を愛す。是の因緣を以て、百千劫を經るとも、常に纏縛に在るは、唯殺盜婬の三を

【一】羯羅藍云云。「倶舍論」に謂ゆる胎内五位のことなり。卽ち入胎初七日迄を羯羅藍(凝滑)と名けて、終に凝結し、二七日を遏蒲曇(皰)と名けて、凝滑上に薄き皮膚を生ずる等を云ふなり。

【二】飛沈とは、飛は空を行く鳥の類、沈は水に棲む魚の類なり。卽ち業の善惡に隨つて、受報に升沈あるを云ふなり。

【三】貪愛同滋とは、衆生の互に相吞食するに、彼の血肉を貪愛し、我が體を滋養するの心、彼我同じきを云ふなり。

根本と爲す。是の因緣を以て、業果相續するなり。富樓那よ、是の如く三種の顚倒相續することは、皆是れ覺明明了知性なり。了に因つて相を發し、妄見に從つて山河大地諸の有爲の相を生ず、次第に遷流すること、此の虛妄に因つて、終りて復た始まる。』富樓那の言さく、『若し此の妙覺本妙の覺明と、如來の心と不增不減なれども、狀なくして忽に山河大地諸の有爲の相を生せば、如來は今妙空明覺を得たまへり、山河大地有爲の習漏、何のときか復た當に生ずべきや。』

佛、富樓那に告げ言はく、『譬へば迷へる人の、一の聚落に於て、南を惑ひて北と爲すが如し。此の迷は復迷に因つて有りとや爲ん、悟に因りて出づる所なり〔とやせん。〕』富樓那の言さく、『是の如きの迷へる人亦迷にも因らず又悟にも因らず。何を以ての故に、迷は本より根なし云何ぞ迷に因らん。悟は迷を生ずるに非ず、云何ぞ悟に因らん。』佛の言はく、『彼の迷へる人、正しく迷に在る時、倏ち悟れる人ありて、指示して悟らしめんに、富樓那よ、意に於て云何。此の人迷を縱にして、此の聚落に於て更に迷を生せんや。〔富樓那言さく〕『不なり世尊。』〔佛の言はく〕『富樓那よ、十方の如來も亦復是の如し。此迷は本なし、性は畢竟して空なり。昔は本迹なし、（今は）迷と覺と有るに似たり。迷を覺すれば迷滅す、覺は迷を生せず。亦翳人の

空中の華を見るが如し。翳病若し除かば、華は空に於て滅せん。忽に愚人ありて、彼の空花の滅する所の空地に於て、花の更に生ぜんことを待たんに、汝是の人を觀て、愚とや爲ん慧とや爲ん。』富樓那の言さく、『空には元華なし、妄に生滅を見る、華の空に滅するを見る、已に是れ顚倒なり。勅して更に出ださしむる、斯れ實に狂癡なり。云何ぞ更に是の如きの狂人を名けて愚と爲し慧と爲んや。』

佛の言はく、『汝が解する所の如くならば、云何ぞ問うて、諸佛如來の妙覺明空、何のときか當に更に山河大地を出すべきと言はんや。又金鑛の精金に雜るに、其金純一なれば、更に雜と成らざるが如く、木の灰と成りぬれば、重ねて木と成らざるが如し。諸佛如來の（四）菩提涅槃も亦復是の如し。

富樓那よ、又汝問うて言へ、地水火風は、本性圓融して、法界に周徧し、水火の性相陵滅せざることを疑ひ、又虛空及び諸の大地、倶に法界に徧せば相容るべからずと徴せり。富樓那よ、譬へば虛空の體は群相に非ざれども、而も彼の諸相の發揮するを拒まざるが如し。

所以は何となれば、富樓那よ、彼の太虛空は、日の照すときは則ち明かに、雲の屯るときは則ち暗し。風の搖くときは則ち動じ、霽れ澄めるときは則ち淸し。氣の凝るときは則ち濁り、土積

【四】菩提涅槃。前に出づ。

れば靈を成し、水澄めば映を成す。意に於て云何、是の如きの殊方、諸の有爲の相は、彼に因つて生ずとや爲ん、復た空に「因つて」有りとや爲ん。

若し彼の所生ならば、富樓那よ、且く日の照らす時、既に是れ日の明なり、十方世界同じく日の色を爲すべし、云何ぞ空中に更に圓日を見るや。若し是れ空の明ならば、空自ら照らすべし、云何ぞ中宵と雲霧の時には光耀を生ぜざる。當に知るべし、是の明は日にも非ず空にも非ず、空日に異なるにもあらず。相を觀ずるに元妄にして、指陳すべきもの無し。猶ほ空華の結んで空果と爲らんことを邀つがごとし。云何ぞ其の相陵滅するの義を詰めん。性を觀ずるに元眞にして、唯妙覺明なり。妙覺明の心は先より水火に非ず、云何ぞ復た相容れざる者なりと問はん。眞の妙覺明も亦復是の如し。汝空を以て明さば、則ち空現ずることあり、地水火風各各に發明すれば、則ち各各に現ず、若し倶に發現すれば、則ち倶に現ずることあり。

云何が倶に現ずる。富樓那よ、(譬へば)一水の中に日の影を現ずるに、兩人同じく水中の日を觀て東西に各行くとき、則ち各日ありて二人に隨つて去るが如し。一は東一は西、先より準的なし。難じて此の日是れ一なり、云何ぞ各行くに各日既に雙びて、云何ぞ一を現ずと言ふべからず。宛轉虚妄にして憑據すべきものなし。

富樓那よ、汝色空を以て、(一五)如來藏を相傾け相奪へば、而も如來藏は隨つて色空と爲りて、法界に周徧す。是の故に〔眞覺の〕中に於て、風は動き空は澄み、日は明に雲は暗し、衆生迷悶して、覺に背きて塵に合す、故に塵勞を發して世間の相あるなり。我妙明の不滅不生を以て、如來藏に合す。而も如來藏は唯妙覺明にして、法界を圓照す。是の故に中に於て、一を無量と爲し、無量を一と爲す。小の中に大を現じ、大の中に小を現ず。道場を動ぜずして十方界に徧す。身に十方無盡の虚空を含んで、一毛端に於て寶王刹を現じ、微塵裏に坐して大法輪を轉ず。塵を滅して覺に合す、故に眞如妙覺明の性を發す。而も如來藏の本妙圓心は、(一六)心に非ず空に非ず、地に非ず水に非ず、風に非ず火に非ず、(一七)眼に非ず耳鼻舌身意に非ず、色に非ず聲香味觸法に非ず、眼識界に非ず、是の如く乃至意識界に非ず。(一八)明と無明と、明と無明の盡くるにも非ず、是の如く乃至老に非ず死に非ず、老死の盡くるにも非ず。(一九)苦に非ず集に非ず、滅に非ず道に非ず、智に非ず得に非

【一五】如來藏とは、阿賴耶識のことにして、此識は眞如より現はれたるものなるが故に、眞如を如來藏と云ふ。又如來は佛の異名にして、藏は一切の功德を包含し、又は出生し、或は蘊覆するの義なり。即ち實相無相の妙體に名けたるものなり。

【一六】心に非ず云云は、如來藏は本來無相にして、心等の七大名相を絕するを云ふなり、七大とは地、水、火、風、空識に根を加へたるを云ふ。

【一七】眼に非ず云云とは、十八界各名相を絕するを云ふ。

【一八】明と無明と云云は、緣覺所觀の十二因緣流轉と還滅の法を非するなり。十二因緣とは即ち無明、行、識、名色、六入、觸、受、愛、取、有、

ず。(三〇)檀那に非ず、尸羅に非ず、毘梨耶に非ず、羼提に非ず、禪那に非ず、般剌若に非ず、波羅密多に非ず、是の如く乃至(三一)怛闥阿竭(度)に非ず、阿羅訶に(非ず)三耶三菩に非ず。(三二)大涅槃に非ず、常に非ず樂に非ず、我に非ず淨に非ず。是れ俱に世出世に非ざるを以ての故なればなり。

即ち如來藏元明の心妙、心に卽し空に卽し、地に卽し水に卽し、風に卽し火に卽す。眼に卽し耳鼻舌身意に卽す。色に卽し聲香味觸法に卽す。眼識界に卽して、是の如く乃至意識界に卽す。明、無明、明無明盡に卽し、是の如く乃至老に卽し、死に卽し、老死盡に卽す。苦に卽し集に卽し、滅に卽し道に卽し、智に卽し得に卽す。檀那に卽し、尸羅に卽し、毘梨耶に卽し、羼提に卽し、禪那に卽し、鉢剌若に卽し、波羅密多に卽す。是の如く乃至怛闥阿竭に卽し、阿羅訶(に卽し)三耶三菩に卽す。大涅槃に卽し、常に卽し樂に卽し、我に卽し淨に卽す。是れ俱に世出世に卽するを以ての故なればなり。

生、老死なり。

【一九】苦に非ず云云は、聲聞の修する所の四諦及び主觀の智と客觀の法各名相を絶するを云ふなり。

【二〇】檀那云云は、菩薩の修する所の六波羅密各名相を絶するを云ふ。波羅密(パーラミター)は梵語、又は波羅密多と寫す。度又は到彼岸と譯せり。謂ゆる六とは一に檀那(ダーナ)(布施と譯す)二に尸羅(シーラ)(戒と譯す)三に毘梨耶(ヴィーリヤ)(精進と譯す)四に羼提(クシャーンティ)(忍辱と譯す)五に禪那(ヂャーナ)(靜慮と譯す)六に般剌若(プラッヂニャー)又は般若(知慧と譯す)を云ふ。

【二一】但闥阿竭云云とは佛の立號なり。怛闥阿竭は如來と譯し、常住にして去來の相なきを云ふなり。阿羅訶(アルハン)は應供と譯し、他の供養に應ずるに堪

即ち如來藏妙明の心元は、即を離れ非を離れ、是即非即なり。如何ぞ世間の(三三)三有の衆生、及び出世間の聲聞縁覺、所知の心を以て如來の無上菩提を測度し、世の言語を用て佛の知見に入らん。譬へば琴瑟箜篌琵琶の妙音ありと雖も、若し妙指なければ終に發すること能はざるが如し。汝と衆生も亦復是の如し。寶覺の眞心は各圓滿せり。我が指を按ずるが如きは、(三四)海印光を發す、汝暫くも心を擧ぐれば、塵勞先づ起る。(是れ)勤めて無上覺道を求めずして、小乘を愛念して、少を得て足れりと爲るに由れり。』

富樓那の言さく、『我と如來と寶覺圓明眞妙の淨心は、無二にして圓滿せり。而も我は昔より無始の妄想に遭うて、久しく輪廻に在り、今聖果を得たれども、猶ほ未だ究竟せず。世尊は諸妄一切圓に滅して、獨妙眞常なり。敢て如來に問ひたてまつる。一切衆生何に因つてか妄ありて、自ら妙明を蔽うて、此の淪溺を受けたるや。』

佛、富樓那に告げたまはく、『汝疑を除くと雖も、餘惑未だ盡きず。吾世間の現前の諸事を

へたる人の義なり。三耶三菩は普通に三藐三菩提といひ、正徧智と譯す。

【三二】大涅槃云云。涅槃に前に出づ。常樂我淨は涅槃の四種の德なり。

【三三】三有とは、欲、色、無色の三界にして、有とは業苦に牽れて生滅の有るを云ふなり。

【三四】海印は三昧の名、佛智を云ふ。如來の智淨明にして諸法を鑑照することを海の能く萬像を映現するが如きをいふ。

以て、今復た汝に問はん。汝豈に聞かざらんや、室羅(筏)城の中、演若達多「なる者ありて」忽に晨朝に於て、鏡を以て面を照らし、鏡中の頭の眉目見るべきことを愛するに、己が頭に面目を見ざることを嗔責して、以て魑魅なりと爲し、狀なくして狂走するに、意に於て云何、此の人何に因つてか故なくして狂走する。』富樓那の言さく、『是の人は心狂せり、更に他の故なし。』

佛の言はく、『妙覺明圓にして本圓明妙なり。既に稱して妄と爲す、云何ぞ因あらん。若し所因あらば、云何ぞ妄と名けん。自ら諸の妄想展轉して相因り、迷より迷を積んで、以て塵劫を歷るなり。佛は發明したまふと雖も、猶は是の如きの迷因に返すこと能はず。迷に因つて自ら有り、迷の因なきことを識らば、妄に所依なし。尙ほ生あること無し、何をか滅と爲さんと欲する。菩提を得る者は、寤めたる時の人の夢中の事を說くが如し。心には縱ひ精明なれども、何の因緣をもつてか夢中の物を取らんと欲せん。況や復た因なく本より所有なきをや。彼の城中の演若達多が如き、豈に因緣あらんや。(唯)自ら頭を怖れて走れり。忽然として狂歇みぬれば、頭は外より得るに非ず。縱ひ未だ狂を歇めざれども、亦何ぞ遺失せん。

富樓那よ、妄の性も(亦)是の如し。何に因つてか在りと爲ん。汝但隨つて世間と業果と衆生との三種の相續を分別せざれ、三緣斷ずるが故に三因生ぜず。則ち汝が心中の演若達多が狂性自

ら歇まん。歇めば則ち菩提なり。勝淨明心は本より法界に周し、人に從つて得るにあらず、何ぞ劬勞を藉つて、修證に肯綮せん。譬へば人あり、自らの衣の中に於て如意珠を懸けて自ら覺知せず、他方に窮露して乞食馳走するが如し。實に貧窮なりと雖も、珠は曾て失はず。忽に智者ありて、其珠を指示するとき、所願心に從つて大饒富を致す。方に神珠の外より得るに非ざることを悟らん。

卷の第四の二

卽時に阿難大衆の中に在つて、佛足を頂禮し、起立して佛に白さく、『世尊、現に殺盗婬の業三縁斷するが故に三因生ぜず、心中の〔演若〕達多が狂性は自ら歇まん、歇めば則ち菩提なり。人に從つて得ずと說きたまふ。斯れ則ち因縁皎然として明白なり、云何ぞ如來は、頓に因縁を棄てたまふ。我も因縁に從つて、心開悟することを得たり。世尊、此の義何ぞ獨り我等年少の有學の聲聞のみならんや。今此の會中の大目犍連、及び舍利弗須菩提等も、老梵志より佛の因縁を聞きて、發心開悟して、無漏を成ずることを得たり。今菩提は因縁よりせずと說き給はゞ、則ち王舍城の拘舍梨等が說く所の自然は、第一義と成らん。唯大悲を垂れて、迷悶を開發したまへ。』

佛、阿難に告げたまはく、『卽ち城中の演若達多が如きは、狂性の因縁若し滅除することを得れば、則ち不狂の性自然に而も出づ。因縁自然、理是に窮りぬ。阿難よ、演若達多の頭本より自然ならば、本より自其れ然り、然として自に非ずといふこと無けん。何の因縁の故に、頭を怖れて狂走する。若し自然の頭、因縁の故に狂せば、何ぞ自然なれども、因縁の故に失せざる。本頭失せず、狂怖妄に出づ、曾て變易なし、何ぞ因縁を藉らん。本より狂自然ならば、本より狂怖

あるべし。未狂の際に、狂何の所にか潜る。不狂も自然ならば、頭本より妄なし、何によつてか狂走する。若し本頭を悟つて、狂走なりと識知すれば、因緣自然倶に戲論と爲るなり。是の故に我言ふ、三緣斷ずるが故に卽ち菩提心なり。(若し)菩提の心は生じ、生滅の心は滅せば、此れ但だ生滅なり。滅と生と倶に盡くるを無功用の道とす。若し自然ありとも、是の如くならば則ち明らけし、[今汝が明らむる所の]自然の心は生じ、生滅の心は滅するならば、此れ亦生滅なり。生滅なき者を名けて自然と爲す。猶ほ世間に、諸相の雜和して一體と成る者を、和合の性と名け、和合に非ざれば、本然の性と稱するが如し。本然も然に非ず、和合も合に非ず、合と然と倶に離し、離合も倶に非なる、此の句を方に無戲論の法と名く。菩提涅槃尙ほ遙遠に在り、汝が歷劫にも、辛勤修證すべきに非ず。復た十方如來の十二部經の淸淨妙理を憶持すること、恒河沙の如しと雖も、祇戲論を益さん。汝が因緣自然を談說すること、決定明了にして、人間汝を多聞第一なりと稱すと雖も、此の積劫の多聞熏習を以て、摩登伽が難を免離すること能はずして、何ぞ我が(一)佛頂神呪を待つて、摩登伽が心にも、婬火頓に歇み、(二)阿那含を得て、我が法中に於

【一】佛頂神呪とは、本經に說く所の陀羅尼なり。

【二】阿那含(Anāgāmin)の梵語にして、不還又は不來と譯す。聲聞四果(須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢)の一なり。卽ち欲界の迷を離れて色界無色界に生じ、復び欲界に還り來らざるを云ふなり。

て、精進林を成じ、愛河乾き枯れて、汝をして解脱せしむるを須ふるや。

是の故に阿難よ、汝歴劫に如來の祕密妙嚴を憶持すと雖も、一日無漏の業を修して、世間の憎愛の二苦を遠離するに如かじ。摩登伽が如きは、宿し婬女なりしがども、神呪の力に由つて、其愛欲を消して、〔我が〕法の中に今は性比丘尼と名く。羅睺〔羅〕も母耶輸陀羅と、同じく宿因を悟り、歴世の因は、貪欲を苦と爲すことを知つて、一念に無漏の善を熏修するが故に、或は出纏を得、或は（三）授記を蒙る。（汝）如何ぞ自ら欺きて、尚ほ觀聽に留まるや。』

阿難及び諸の大衆、佛の示誨を聞きて、疑惑消除し、心に實相を悟つて、身意輕安にして、未曾有なることを得たり。重ねて復悲涙し、佛足を頂禮し、長跪合掌して、而も佛に白して言さく、『無上大悲淸淨寶王は、善く我が心を開き、能く是の如き種種の因緣を以て、方便提奬して、諸の（四）沈冥を引きて、苦海より出し給へり。世尊、我今是の如きの法音を承りて、如來藏妙覺明の心は、十方世界に徧して、如來の十方國土、淸淨の寶嚴妙覺王の（五）刹を含育することを知ると雖も、如來復た多聞功なくして、修習に逮ばざること

【三】授記とは、佛眞實語を以て其弟子に記別を授くるを云ふ。即ち各々の因緣により、未來必らず菩提の果を得べきを說き、人をして之を心に期せしむることなり。

【四】沈冥とは、久く生死の境に沈み、永く無明の暗に覆はるる迷の衆生を云ふなり。

【五】刹とは梵語、具には刹摩（Kṣetra）と云ふ、塔、廟、國、土等と譯す。即ち淸淨の場所の意なり。

を責めたまふ。我今猶ほ、旅泊の人の、忽ち天王の華屋を賜與ふことを蒙るが如し。大宅を獲ると雖も、要らず門に因つて入るべし。唯願くは如來、大悲を捨てたまはず、我(等)在會の諸の蒙暗の者に、小乘を捐捨して、畢く如來の(六)無餘涅槃本發心の路を獲ることを示したまへ。有學の者をして、何れに從つてか疇昔の攀緣を攝伏して、陀羅尼を得て佛知見に入らしめん。』是の語を作し已つて、五體を地に投ぐれば。在會「の大衆」は一心にして、佛の慈旨を佇ちたてまつれり。

爾の時に世尊、會中の緣覺聲聞、菩提心に於て、未だ自在ならざる者を哀愍し、及び當來佛滅度の後、末法の衆生の、菩提心を發すものの爲めに、無上乘の修行の路を開かんとして、阿難及び諸の大衆に宣說したまふ。『汝等決定して、菩提心を發して、佛如來の妙三摩提に於て、疲倦を生ぜざれば、當に先づ初心を發覺する二の決定の義を明らむべし。

云何なるか初心の二義決定なりや。阿難よ、第一の義とは、汝等若し聞聲を捐捨し、菩薩乘を修して、佛知見に入らんと欲せば、當に審かに(七)因地の發心と、(八)果地の覺とを觀ずべし。同と

【六】無餘涅槃とは、涅槃は前に出づ。涅槃の分類に四種ある中の小乘の有餘涅槃に對して無餘といふ。謂ゆる煩惱、所知の二障を斷じて、衆苦全く盡きたるを云ふなり。

【七】因地とは、因位のことにして、佛果に到る迄の修行時代を云ふ。

【八】果地とは、果位のことにして、如來十號の德を成就したる無上の果位を云ふ。

や爲ん異とや爲ん。阿難よ、若し因地に於て、生滅の心を以て、本と爲して因を修して、佛乘の不生不滅を求めば、是の處あること無けん。是の義を以ての故に、汝當に諸の（九）器世間の可作の法は、皆變滅に從ふことを照明すべし。

阿難よ、汝觀せよ、世間の可作の法は、誰をか不壞と爲ん。然も終に虛空を爛壞することを聞かず。何となれば、空は可作に非ず、是れ始終壞滅なきに由るを以てなり。則ち汝が身中に、堅相を地と爲し、潤濕を水と爲し、煖觸を火と爲し、動搖を風と爲す。此の四纒に由つて、汝が湛圓妙覺明の心を分つて、視と爲し聽と爲し、覺と爲し察と爲し、始めより終りに入るまで、五疊渾濁す。

云何をか濁と爲す。阿難よ、譬へば淸水の淸潔なるは本然なり。卽ち彼の塵土灰沙の倫は、本質留礙せり、二體（一〇）法爾として性相循はず。世間の人ありて、彼の塵土を取りて淨水に投ずれば、土は留礙を失し、水は淸潔を亡じて、容貌汨然たる、之を名けて濁と爲るが如し。汝が濁の五重なることも亦復是の如し。

阿難よ、汝が見と虛空と十方界に徧せり。空と見と分れざれば、空あれども體なく、見あれど

【九】器世間の可作の法とは、世間に二種ある中、有情世間に對する器世間なり。世は遷流の義、間は隔別の義にて、天地間の萬物は時間的には刻々變遷し、空間的には箇々分界するが故に世間と云ふ。更に分類して山河大地等を器世間と云へり。卽ち生滅變遷有爲の法なるが故に可作と云ふ。

【一〇】法爾とは、人爲を加へず、諸法自然の義なり。

も覺なし、相織りて妄に成ずる、是の第一重を名けて劫濁と爲す。汝が身は現に四大を摶て體と爲す。見聞覺知は、壅いで留礙せしめ、水火風土は、旋りて覺知せしむ。相織りて妄に成ずる、是の第二重を名けて見濁と爲す。又汝が心中の憶識誦習するの性は知見より發し、容は六塵より現ず。塵を離れて相なく、覺を離れては性なし。相織つて妄に成ずる、是の第三重を煩惱濁と名く。又汝が朝夕に生滅して停らざる知見の、毎に世間に留まらんことを欲すれども、業運んで毎常に國土を遷す。相織つて妄に成ずる、是の第四重を衆生濁と名く。汝等が見聞元より異性なけれども、衆塵隔越すれば、故なくして異生ず。性の中には相知れども、用の中には相背く。同異準を失つて、相織つて妄に成ず、是の第五重を名けて命濁と爲す。

阿難よ、汝今見聞覺知をして、遠く如來の常樂我淨に契はしめんと欲せば、當に先づ生死の根本を擇んで、不生滅に依らば、圓湛の性成ずべし。湛を以て其虚妄の滅生を旋らして、元覺に復還し、元明の覺の生滅なきの性を得て、因地の心と爲し、然して後果地の修證を圓成すべし。(譬へば)濁水を澄ますに、靜器に貯れて靜深にして動せざれば、沙土自ら沈みて、清水現前するが如し。[是を]名けて初に客塵煩惱を伏すと爲し、泥を去りて純水なるを、名けて永く根本無明を斷ずと爲す。明相精純にして、一切變現すれども煩惱を爲さず、皆涅槃清淨の妙德に合す。

第二の義といふは、汝等必らず菩提心を發して、菩薩乘に於て大勇猛を生じ、決定して諸の有爲の相を棄捐せんと欲せば、當に煩惱の根本を審詳にすべし。此の無始より來かた業を發し生を潤ずるは、誰か作し誰か受くる。

阿難よ、汝菩提を修して、若し審かに煩惱の根本を觀ぜずんば、則ち虚妄の根塵の、何の處にか顚倒あると知ること能はず。尙ほ知らずんは、云何が降伏して如來の位を取らん。

阿難よ、汝世間の結を解くの人を觀よ、結する所を見ずんば、云何が解くことを知らん。虚空の汝に隳裂せらるゝをば聞かず。何となれば、空には形相なく、結解なきを以てなり。則ち汝が現前の眼耳鼻舌及び身心の六を賊の媒と爲して、自ら家寶を劫む。此に因つて無始より「來かた」衆生世界纏縛を生ずるが故に、器世間に於て超越すること能はざるなり。

阿難よ、云何なるをか名けて衆生世界と爲す。世をば遷流と爲し、界をば方位と爲す。汝今當に知るべし、東西南北と東南西南と、東北西北と上と下とを界と爲し、過去未來現在を世と爲す。方位には十あり、【二】流數には三あり、一切衆生は妄を織りて相成し、身中に貿遷して、世界と相渉る。而も此の界の性は、設けたることは十方と雖も、位を定めて明らむべきは、世間に只東西

【二】流數とは、世界を云ふ。過去、現在、未來の三世に亙りて遷流するが故なり。數の三は謂ゆる衆生と五陰と器界とを云ふなり。

南北を目け、上下は位なく、中は定まれる方なし。四の數は必らず明にして、世と相ひ渉る。三四と四三と、宛轉して十二となり、流變して三疊すれば、一は十百は千となる。始終を惣括するに、六根の中、各功徳に千二百あり。

阿難よ、汝復た中に於て克く優劣を定めよ。眼の觀見するが如きは、後は暗く前は明なり。前の方は全く明に後の方は全く暗し。左右の旁を觀ること三分の二なり。統べて所作を論ずるに、功徳全からず。三分を功と言ひ、一分には徳なし。當に知るべし、眼(根)には八百の功徳あり。耳の周く聽くが如きは、十方に遺すことなし。動には邇遙なるが若くなれども、靜には邊際なし。當に知るべし、耳根は一千二百の功徳を圓滿せりと。鼻の齅聞するが如きは、出入の息に通ず。出あり入ありて、而も中交を闕げり。鼻根を驗するに、三分に一を闕げり。當に知るべし、鼻は唯八百の功徳ありと。舌の宣揚して、諸の世間出世間の智を盡すが如きは、言には方分あれども、理には窮盡なし。當に知るべし、舌根は一千二百の功徳を圓滿せりと。身の觸を覺して、違順を識るが如きは、合の時は能く覺し、離の中には知らず。離は一にして合は雙べり。身根を驗するに、三分に一を闕けり。當に知るべし、身は唯八百の功徳ありと。意の默して十方三世一切の世間出世間の法を容るゝが如きは、唯聖と凡と、包容して其涯際を盡さずといふことなし。當に知

るべし、意根は一千二百の功徳を圓滿せりと。
阿難よ、汝今生死の欲流に逆つて、返つて流の根を窮めて、不生滅に至らんと欲せば、當に此等の六受用の根を驗すべし。誰か合誰か離、誰か深誰か淺、誰をか圓通と爲し、誰をか圓滿せざる。若し能く此に於いて、圓通の根を悟らば、彼の無始より妄業を織れる流に逆つて圓通に循ふことを得、不圓の根と（二）日劫相倍せん。我今備に（三）六湛圓明の本所の功徳を顯す。數量是の如し、汝が詳に其入るべき者を擇ぶに隨つて、吾當に發明して、汝をして增進せしむべし。十方の如來は、十八界に於て、一一に修行して、皆無上菩提を圓滿することを得たまへり。其中間に於いて亦優劣なし。但汝下劣にして、未だ中に於て自在の慧を圓にすることを能はず、故に我宣揚して、汝をして但（四）一門に於て深く入らしめん。一に入つて妄なければ、彼の六知根、一時に清淨なり。』
阿難、佛に白して言さく、『世尊、云何が流を逆して深く一門に入り、能く六根をして、一時に清淨ならしめん。』

【二】日劫相倍せん。日に一日なり。劫は委しくは劫波（Kalpa）と云ひ、長時と譯す。即ち無限の長時間のことなり、謂ゆる根に於て圓通を得たる人の一日の修習は、他の圓通を得ざる者の一劫の修習に倍するを云ふ。

【三】六湛圓明とは、六根の本性は元より清淨妙圓なるを云ふ。

【四】一門　一門は六根の一を云ふ、門は能入の義にして、六根能く六境を引入るゝを云ふ。

佛、阿難に告げたまはく、『汝今已に〔二五〕須陀洹果を得て、已に三界の衆生、世間の〔二六〕見所斷の惑を滅すとも、然れども猶ほ未だ根中の積生、無始の虛習を知らず。彼の習は要らず修所斷の得に因る。何に況や此の中の生住異滅の分劑頭數をや。今汝且く觀せよ、現前の六根は、一とや爲ん六とや爲ん。阿難よ、若し一と言はゞ耳何ぞ見ざる、目何ぞ聞かざる、頭奚ぞ履まざる、足奚ぞ語ることなきや。若し此の六根、決定して六と成らば、我が今の會に汝がために微妙の法門を宣揚するが如きは、汝が六根に誰か來つて領受する。』

阿難の言さく、『我耳を用て聞く。』

佛の言はく、『汝が耳自ら聞かば、何ぞ身口に關はりて、口は來つて義を問ひ、身は起つて欽承するや。是故に應に知るべし、一に非ずんば終に六ならん、六に非ずんば終に一ならん、汝が根は元より一元より六なるにあらず。阿難、當に知るべし、是根は一にも非ず六にも非ず、無始より來かた顚倒淪替するに由るが故に、圓湛に於て一六の義生ず。汝須陀洹にして、六消することを得ると雖も、猶ほ未だ一を亡せず。(譬へば)太虛空の群器に參合するに、器形の

【二五】須陀洹(Srotāpanna)とは梵語。預流と譯す。小乘聲聞の修行の階級に四果ある中の第一位にして、見惑を斷じて初めて聖者の流類に入るが故にかく名けたり。

【二六】見所斷の惑とは、惑に二種あり、一に見惑、二は思惑なり。前者は事相の上に起る惑にして、斷じ易きを以て見所斷の惑と云ひ、後者は觀理の上に起る惑にして、修に隨つて漸次に斷するを以て修所斷の得と云ふなり。

異なるに因つて、之を異空と名くるとも、器を除きて空を觀ずるときは、空を說きて一と爲るが如し。彼の太虛空、云何が汝が爲めに同と不同とを成ぜん。何に況や更に是一非一と名けんや。則ち汝が了知の六受用の根も亦復是の如し。

明暗等の二種の相形すに由つて、妙圓の中に於て、[一七]湛を黏じて見を發す。見精色に映じて色を結びて根を成ず。根の元を目けて淸淨の四大と爲す。因つて眼の體を名けば蒲萄の朶の如く浮塵の四枯流逸して色に奔る。動靜等の二種の相擊つに由つて、妙圓の中に於て、湛を黏じて聽を發して、聽精聲を映じ、聲を卷きて根を成じ、根の元を目けて淸淨の四大と爲す。因つて耳の體を名けば、新に卷ける葉の如く、浮根の四塵流逸して聲に奔る。通塞等の二種相發するに由つて、妙圓の中に於て、湛を黏じて嗅を發す。嗅精香を映じ、香を納めて根を成し、根の元を目けて淸淨の四大と爲す。因つて鼻の體を名けば、雙に垂れたる爪の如く、浮根の四塵流逸して香に奔る。恬變等の二種相參はるに由つて、妙圓の中に於て、湛を黏じて嘗を發し、嘗精味を映じ、味を絞んで根を成じ、根の元を目けて淸淨の四大と爲す。因つて舌の體を名けば、初偃の月の如く、浮根の四塵流逸して味に奔る。離合等の二種相

【一七】湛を黏じてとは、湛は六塵のこと、黏はアハノリのことにして、習吞力の[illegible]を云ふ。謂ゆる本來自然として圓明なる六根の上に六塵の妄境黏著すると云ふ。

摩するに由つて、妙圓の中に於て、湛を黏じて覺を發し、覺精觸に映じ、觸を摶つて根を成じ、根の元を目けて清淨の四大と爲す。因つて身の體を名けて、腰鼓の顙の如く、浮根の四塵流逸して觸に奔る。生滅等の二種相續するに由つて、妙圓の中に於て、湛を黏じて知を發し、知精法を映じ、法を攬りて根を成じ、根の元を目けて清淨の四大と爲す。因つて意思を名けば幽室の見の如く、浮根の四塵流逸して法に奔る。

阿難よ、是の如きの六根は、彼の覺明に由つて、有明の明覺彼の精了を失つて、妄を黏じて光を發す。是を以て汝今、暗を離れ明を離れては見の體あること無し。動を離れ靜を離れては元より聽質なし。通なく塞なければ齅性生せず。變に非ず恬に非ざれば嘗出づる所なし。離せず合せざれば覺觸本なし。滅なく生なければ知安にか寄らん。汝但動靜合離、恬變通塞、生滅明暗、是の如きの十二の諸有爲の相に循はずして、一根を拔くに隨つて、黏を脫して內に伏せよ。伏して元眞に歸すれば、本の明耀を發す。耀性發明すれば、諸餘の五黏も、拔くに應じて圓脫す。前塵に由つて起す所の知見にあらざれば、明根に循はず。根に寄せて明發す、是に因つて六根互相に用を爲す。

阿難よ、汝豈に知らずや、今此の會中の阿那律陀、目なくして而も見る。(一八)跋難陀龍は、耳な

【一八】 跋難陀(Bhadrānanda)は賢喜と譯す。龍名なり。

くして而も聽く。(二九)殑伽神女は、鼻なくして香を聞ぐ。(三〇)驕梵鉢提は異舌をもて味を知り。(三一)舜若多神は、身なくして觸を覺す。如來の光の中に映じて暫く現せしむ。既に風質たれば、其體元より無なり。諸の(三二)滅盡定の寂を得たる聲聞、此の會中の摩訶迦葉の如きは、久く意根を滅すれども、圓明の了知は心念に因らず。

阿難よ、今汝が諸根、若し圓に拔け已つて、内に瑩きて光を發す。是の如きの浮塵及び器世間の、諸の變化の相は、湯の冰を消するが如く、念に應じて化して、無上知覺と成る。

阿難よ、彼の世人の見を眼に聚むるが如きは、若し急に合せしむれば、暗相現前す。六根黯然として、頭足相類す。彼の人手を以て、體に循へて外に繞らさば、彼見ずと雖も、頭足一辨して、知覺是れ同じ、緣見は明に因れば、暗には無見を成ず。自ら發するにも明ならざれば、則ち諸の暗相も永く昏ますこと能はじ。根塵既に消せば、云何が覺明圓明を成せざらん。』

阿難、佛に白して言さく、『世尊、佛の說き言ふが如く。因地の覺心常住を求めんと欲せば、

【二九】殑伽神女。殑伽は印度の恆河（ガンヂス河）にして、神女は河を主とる所の神なりと云ふ。
【三〇】驕梵鉢提（Gavāṁpati）。牛相と譯す。佛弟子なり。
【三一】舜若多は前に出づ。
【三二】滅盡定とは、或は滅盡三昧（禪定）とも云ふ。卽ち煩惱を滅し盡くしたる境界を云ふ。

要らず果位と名目相應すべし。世尊、果位の中の（三）菩提、涅槃、眞如、佛性、菴摩羅識、空如來藏、大圓鏡智の如きは、是の七種の名、稱謂別なりと雖も、清淨圓滿にして、體性堅凝なること、金剛王の如くにして、常住不壞なり。此の如きの見聽は、明暗動靜通塞を離るれば畢竟して體なし。猶ほ念心の前塵を離れては、本所有なきが如し。云何が此の畢竟斷滅を將て、以て修因と爲して、如來の七常住の果を獲んと欲する。世尊、若し明暗を離れては、見畢竟して空なること、前塵なければ念の自性滅するが如し。進退循環し、微細に推求するに、本より我が心及び我が心所なし。誰を將てか因を立てて無上覺を求めん。如來先に湛精圓常なりと說き給ふ。誠言を違越して、終に戲論を成ず。云何ぞ如來は眞實語の者ならんや。唯大慈を垂れて我が蒙悋を開きたまへ。』

佛、阿難に告げたまはく、『汝多聞を學すれども、未だ諸漏を盡さす。心中に徒に顚倒の所因を知つて、實は未だ眞倒の現前せるを識る

【三】菩提涅槃云云とは、菩提、涅槃は前に出づ。眞如は一切萬有の眞性にして、一切の迷執なく、一切の染汚を離れ、宇宙の一切諸法に徧滿せる理體を云ふ。佛性と云ふも又之に同じ。菴摩羅識とは菴摩羅は難分別と譯し。印度の植物の名にして、其果桃に似て桃に非ず、李に似て李に非ず、分別し難きが故なり。即ち之を以て第八阿賴耶識に喩へたるものなり。空如來藏とは、空は清淨無礙の義にして、如來藏は無量の功德を含藏するを云ふなり。大圓鏡智とは、四智の一にして、如來の眞智は內外に透徹にして、宇宙の事物を顯現すること、恰も大圓鏡の如く、萬物を映じて明了ならざることなきを云ふなり。

こと能はず。恐くは汝誠心に猶ほ未だ信伏せざらん。吾いま試みに塵俗の諸事を將て、當に汝が疑を除くべし。』

卽時に如來、羅睺羅に勅して、鐘を擊たしむること一聲して、阿難に問うて言はく、『汝今聞くや不や。』阿難大衆倶に『我れ聞く』と言す。鐘歇みて聲なし。佛又問うて言はく、『汝今聞くや不や。』阿難大衆倶に『聞かず』と言す。時に羅睺羅、又擊つこと一聲す。佛又問うて言はく『汝今聞くや不や。』阿難大衆又倶に聞くと言す。佛、阿難に問ひたまはく、『汝云何をか聞くといひ、云何をか聞かずといふ。』阿難大衆、倶に佛に白して言さく、『鐘聲若し擊つときは、則ち我れ聞くことを得。擊つこと久ふして聲消え、音響雙び絶ゆるとき、則ち聞くことなしと名く。』

如來又羅睺(羅)に勅して鐘を擊たしめて、阿難に問ふて言はく『爾今聲すや不や。』阿難大衆倶に聲ありと言す。少選にして聲消ゆ。佛又問うて言はく、『爾今聲すや不や。』阿難大衆答へて言さく、『聲なし』と。頃ありて羅睺羅更に來りて鐘を撞く。佛又問うて言はく、『爾今聲すや不や。』阿難大衆、倶に聲ありと言す。佛、阿難に問ひたまはく、『汝云何をか聲すといひ、云何をか聲なしといふ。』阿難大衆、倶に佛に白して言さく、『鐘の聲若し擊つときは、則ち聲ありと名く。擊つこと久ふして聲消し、音響雙び絶ゆれば、則ち聲なしと名く。』

佛、阿難及び諸の大衆に語りたまはく、『汝今云何ぞ自語矯亂する。』大衆阿難、倶時に佛に問ひたてまつる、『我今云何をか名けて矯亂とする。』佛の言はく、『我汝に「聞くや」と問へば、汝則ち聞くと言ふ。又汝に聲すやと問へば、汝則ち聲すと言ふ。唯だ聞と聲と、報答定まれることなし。是の如くならば、云何ぞ矯亂と名けざらん。

阿難よ、聲消えて響なきとき、汝聞くことなしと説く。若し實に聞くことなければ、聞性已に滅して枯木に同じかるべし。鐘聲更に撃つとき、汝云何ぞ有と知り無と知ることを知るや。自ら是れ聲塵、或は無或は有なり、豈に彼の聞性、汝が爲めに有無となるものならんや。聞實に無なりと云はゞ、誰か無なりと知る者ならん。

是の故に阿難よ、聲は聞の中に於て自ら生滅あれども、汝が聞たるに非ず。聲の生じ聲の滅するを以て、汝が聞性をして有と爲し無とせしむるなり。汝尙ほ顚倒して、聲に惑うて聞と爲す。何ぞ昏迷して、常を以て斷とすることを恠まん。終に諸の動靜閉塞開通を離れて、聞を説いて性なしと言ふべからず。「譬へば」重睡の人の牀枕に眠熟するが如き、其家に人ありて、彼の睡る時に於て練を擣ち米を舂くに、其人夢中に舂擣の聲を聞きて、別に他物と作す。或は鼓を撃つと爲し、或は鐘を撞くと爲す。即ち夢の時に於て、自ら其れ鐘かと怪み、(又)木石の響かと爲す。時

に於て忽に寤めて、遄く杵の音なりと知つて、自ら家人に告ぐ、我正に夢みる時、此の舂の音に惑うて、將に皷の響と爲へりと。

阿難よ、是の人夢中に豈に靜搖開閉通塞を憶はんや。其形寐たりと雖も、聞性昏からず。縱ひ汝が形は消え、命光は遷り謝すとも、此の性は云何ぞ汝が爲めに銷滅せん。諸の衆生は、無始より來かた、諸の色聲に循つて、念を逐うて流轉するを以て、曾て性淨妙常を開悟せず、所常に循はず、諸の生滅を逐ふ。是に由つて生生に雜染流轉せり。若し生滅を棄てゝ眞常を守らば、常光現前して、根塵識心、時に應じて銷落せん。想相を塵と爲し、識情を垢と爲して、二倶に遠離せば、則ち汝が法眼、時に應じて清明ならん、「若し是れ明見ならば」、云何ぞ無上知覺を成せざらん。

卷の第五の一

阿難佛に白して言さく、『世尊、如來は第二義門を說きたまふと雖も、今世間の結を解くの人を觀るに、若し其結べる所の元を知らざれば、我は信ず、是の人は終に解くこと能はじと。世尊、我及び會中の有學の聲聞も、亦復是の如し。無始際より(一)諸の無明と倶に滅し、倶に生ず。是の如きの多聞の善根を得て、名けて出家と爲すと雖も(二)猶ほ日を隔てたる瘧のごとし。唯だ願くは大慈、淪溺を哀愍したまへ。今日の身心云何にしてか是結せる、何に從つてか解と名くる。亦未來の苦難の衆生をして、輪廻を免れて(三)三有に落ちざることを得せしめたまへ。』是の語を作し已つて、普く大衆と五體を地に投げて、涙を雨し誠を翹て、佛如來の無上の開示を佇ちたてまつる。

爾の時に世尊、阿難及び諸の會中の諸の有學の者を憐愍し、亦未來の一切衆生の爲めに、出世の因と爲り、將來の眼と作らんとして、閻浮檀紫金光の手を以て、阿難の頂を摩で給ふに、即時

【一】諸の無明とは、無明は煩惱の異名にして、煩惱には見惑、思惑あり。(或は煩惱障、所知障と立つ)謂ゆる凡ての煩惱を云ふなり。

【二】猶ほ日を隔て云々とは、未だ全く煩惱を斷ぜざるが故に、時に起滅あるに喩へたるなり。

【三】三有。前に出づ。

に十方普佛の世界、六種に震動し、微塵の如來の、世界に住し給へる者、各寶光ありて其頂より出で、其光同時に、彼の世界より祇陀林に來つて、如來の頂に灌ぎ、是の諸の大衆は未曾有なることを得たり。是に於て阿難及び諸の大衆倶に、十方の微塵の如來、異口同音に阿難に告げて言ふことを聞く。『善哉阿難よ、汝（四）倶生無明の、汝をして生死に輪轉せしむる結根を識知せんと欲せば、唯汝が六根なり、更に他物なし。汝復た無上菩提の、汝をして速に安樂解脫、寂靜妙常を證せしむるものを知らんと欲せば、亦汝が六根なり、更に他物に非ず。』阿難是の如きの法音を聞くと雖も、心猶ほ未だ明ならず。稽首して佛に白さく、『云何んが我をして生死輪廻し、安樂妙常ならしむること、同じく是れ六根にして、更に他物に非ざるや』。佛、阿難に告げたまはく、『根と塵とは源を同うし、縛と脫とは二なきなり。識性の虛妄なること、猶ほ空華の如し。阿難よ、塵に由つて知を發し、根に因つて相あり。相と見と無性なること（五）交蘆に同じ。是の故に汝いま、知見に知を立すれば、即ち無明の本なり。知見に見なければ、斯れ即ち涅槃無漏の眞淨なり。云何ぞ是の中に更に他物を容れん。

【四】倶生無明とは、無始際より諸の無明と倶に生ずるところの煩惱を云ふなり。

【五】交蘆とは、葦を三本束ねて立てたるものにして、結びを解けば固より名なし。即ち根、境、識の三、本來無自性なるに喩へたるなり。

爾の時に世尊、重ねて此の義を宣べんと欲して、而も(六)偈を說いて言はく、

『眞性には有爲も空なり、緣より生ずるが故に幻の如し。無爲も起滅すること無し、不實なること空華の如し。妄を言うて諸眞を顯すは、妄と眞と同じく二ながら妄なり。猶ほ眞と非眞とに非ず、云何ぞ見と所見とあらん。中間に實性なし、是の故に交蘆の如し。結解所因を同うして、聖凡二路なし。汝交中の性を觀よ、空と有と二俱に非なり。迷晦すれば卽ち無明なり、發明すれば便ち解脫なり。結を解くことは次第に因る、六解すれば一も亦亡ふ。根に圓通を選擇して(七)流を入せば正覺を成ず。(八)陀那は微細の識なり、習氣は暴流を成す。眞と非眞とに迷はんことを恐れて、我常に開演せず。

【六】偈とは梵語の伽陀([illegible])を譯したるものにして、頌又は諷頌とも云ふ。卽ち詩歌の義なり。總じて四種或は八種の義あれども、要するに句を結びて宣唱する讚文にして、少數の字句を以て多くの義理を攝し、諷誦に堪ふるもの、多くは重說又は讚歎の時に用ゆるものなり。

【七】流を入せばとは、流は欲流卽ち迷にして、入は根元に返すの義なり。謂ゆる迷の根元も悟の根元も、同く六根にして他物に非ず、識性は虛妄にして、根と塵とは同一體なりと了するを云ふなり。

【八】陀那とは、委しくは阿陀那(Ādāna)と云ふ、執持と譯せり。卽ち能く煩惱の種子を執持するが故なり。

自心自心を取れば、非幻も幻法と成る。取らざれば非幻もなし。
非幻すら尚ほ生ぜず。
幻法云何が立せん。是を（九）妙蓮花の、金剛王寶覺、如幻三摩提と
名け、
彈指に無學を超ゆ。是の（一〇）阿毘達磨は、十方の（一一）薄伽梵、一路
涅槃の門なり。』

是に於て阿難及び諸の大衆、佛如來の無上慈誨の（一二）祇夜伽陀、雜糅して精瑩し、妙理淸徹なるを聞きて、心目開明にして、未曾有なることを歎ず。阿難合掌頂禮して佛に白さく、『我今佛の無遮の大悲の性、淨妙常眞實の法句を聞けども、心猶ほ未だ六解すれば一亡すると、結を舒ぶるの倫次とに達せず。唯大慈を垂れて、再び斯の會「の大衆、及び將來「の衆生と」を愍みて、施すに法音を以てし、沈垢を洗滌したまへ。』

卽時に如來、師子の座に於て（一三）涅槃僧を整へ、僧伽梨を斂めて、七

【九】妙蓮花云々。妙蓮花とは佛知見の性の世間の法に染まざるに喩へ、金剛王寶覺は最尊無上の覺果に喩ふ。如幻は煩惱の喩にして、三摩提は前に出でたる觀性の智慧なり。

【一〇】阿毘達磨（Abhidharma）。無比法と譯せり。卽ち金剛王寶覺等の三昧を云ふなり。

【一一】薄伽梵（Bhagavān）。薄伽は佛の異名、梵に淸淨の義なり。此に六義あり、自在、熾盛、端嚴、名稱、吉祥、尊貴是れなり。

【一二】祇夜伽陀とは、前に出でたる偈の別名なり。

【一三】涅槃僧とは、大衣のことにして、九條衣以上の袈裟を云ふ。又下著を涅槃僧といひ上著を僧伽梨と云へり。

寶の几を攬り、手を几に引べて、(四)劫波羅天の奉る所の華巾を取りて、大衆の前に於て綰んで一結と成し、阿難に示して言はく、『此をば何等とか名くる。』阿難大衆、倶に佛に白して言さく、『此を名けて結と爲す。』是に於て如來、疊華の巾を綰んで又一結と成して、重ねて阿難に問ひ給はく、『此をば何等とか名くる。』阿難大衆、又佛に白して言さく、『此も亦結と名く。』是の如く倫次に疊華の巾を綰んで、惣て六結を成し、一一に結成せり。皆手中所成の結を取りて、持つて阿難に問ひたまはく、『此をば何等とか名くる。』阿難大衆も亦復是の如く、次第に佛に諭へたてまつる、此をば名けて結と爲すと。

佛、阿難に告げたまはく、『我初め巾を綰ぶを、汝名けて結と爲す。此の疊華の巾は、先より實に一條なり。第二第三云何ぞ汝曹は復た名けて結と爲すか。』阿難、佛に白して言さく、『世尊、此の寶疊華は緝績して巾を成せり。本一體なりと雖も、我が思惟するが如きは、如來一綰したまへば一結の名を得、若し百綰成せば、終に百結と名けん。何に況や此の巾祇六結のみ有りて、終に七にも至らず、亦五にも停まらず。云何ぞ如來、祇初の時をのみ許して、第二第三をば名けて結と爲したまはざらん。』佛、阿難に告げたまはく、『此の寶華の巾、汝此の巾は元止一條なれども、我が六結する時、六結ありと名くることを知るや。汝審かに觀

【四】劫波羅天とは、劫波は時分と譯す、天部の名なり。

察せよ。巾體は是れ同じくとも、結に因つて異あり。意に於て云何、初め綰んで結成ずるをば、名けて第一と爲す。是の如く乃至第六の結生ず。吾いま第六の結の名を將て第一と成さんと欲するや否や。』「阿難白さく」不なり、世尊、六結若し存せば、斯の第六の名終に第一に非じ。縱ひ我生を歷て其明辨を盡すとも、如何が是の六結をして名を亂らしめん。』

佛の言はく、『是の如し、六結同じからざれども、本因を循顧するに一巾の所造なり、其をして雜亂せしめんこと、終に成ることを得ず。則ち汝が六根も亦復是の如く、畢竟の同の中に、畢竟の異を生ず。』佛、阿難に告げたまはく、『汝必らず此六結を嫌うて、(五)成ぜずして、一のみ成ぜんと願樂せんに、復た云何が得ん。』阿難言さく、『此結若し存せば、是非鋒起して、中に於て自ら此結は彼に非ず、彼の結は此に非ざることを生ぜん。如來今日、若し總て解除して、結若し生ぜずんば、則ち彼此なけん。尚ほ一とも名けず、六云何が成ぜん。』佛の言はく、『六解一亡も亦復是の如し。汝の無始より心性狂亂するに由つて、知見妄を發す。妄を發して息まざれば、見を勞して塵を發す。目睛を勞すれば、則ち狂華あるが如し。湛精明に於て、因なくして一切世間の山河大地を亂起す。生死涅槃は、皆即ち狂勞顚倒の華相なり。』阿難言さく、『此の勞は結に同じ、云何が

【五】成ぜずしてとは、六結の成ぜざることを得んと欲しての意なり。

解除せん。』

如來手を以て結ぶ所の巾を將て、偏に其左に掣て、阿難に問うて言はく、『是の如くして解かんや不や。』(阿難白さく)『不なり、世尊。』佛、阿難に告げ給はく、『吾今手を以て左右各牽くに竟に解くこと能はじ。汝方便を設けよ、云何にしてか解くことを成さん。』阿難、佛に白して言さく、『世尊、結を心に當て、解かば、卽ち分散すべし。』佛、阿難に告げたまはく、『是の如し是の如し。若し結を除かんと欲せば、結を心に當つべし。阿難よ、我佛法は因緣より生ずと說くことは、世間の和合の麁相を取るに非ず。如來世出世の法を發明して、其本因は所緣に隨つて出づることを知る。是の如く乃至恒沙界の外の一滴の雨をも亦頭數を知る。現前せる種種の「法に於て」松は直く棘は曲り、鵠は白く烏は玄きも、皆(その)元由を了れり。是の故に阿難よ、汝が心中に於て、六根を選擇して、根結若し除かば、塵相自ら滅し、諸妄銷亡せば、不眞何ぞ待せん。阿難よ、吾今汝に問はん、此劫波羅巾、六結現前せり、同時に縈へるを解きて、同じく除くことを得んや不や。』阿難白さく、『不なり、世尊、是の結本以て次第に綰生せり。今日當に須く次第にして解くべし。六結同體なれども、結同時ならざれば、則ち結解の時、云何が同じく除かん。』佛の言はく、『六根の解除も亦復是の如し。此の根初め解するとき、先づ人空を得ん。空性圓明

なれば、法の解脱を成ず。法を解脱し已つて、倶空も生せず。是を菩薩、三摩地に從りて無生忍を得ると名く。』

阿難及び諸の大衆、佛の開示を蒙りて、慧覺圓通して疑惑なきことを得たり。一時に合掌し、雙足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我等今日、心身皎然として快く無礙を得、復た一六の亡する等を悟知すと雖も、然も猶ほ未だ圓通の根本に達せず。世尊、我が輩飄零して、積劫にも孤露なり。何の心何の慮ありてか、佛の天倫に預れる。(譬へば)乳を失へる兒の、忽に慈母に遇へるが如し。若し復た此の際會に因つて道成じ、所得の密言還つて本悟に同うせば、則ち未だ聞かざると差別あること無からん。唯大悲を垂れて、我に(一六)秘嚴を惠みて、如來の最後の開示を成就したまへ。』是の語を作し已つて、五體を地に投げ、退きて密機を蔵め、佛の冥授を冀ふ。

爾の時に世尊、普く衆中の諸の大菩薩、及び諸の漏盡の大阿羅漢に告げたまはく、『汝等菩薩及び阿羅漢は、我が法の中に生じて、無學を成ずることを得たり。吾いま汝に問はん。最初に發心して、十八界を悟りき。誰をか圓通と爲し、何の方便に從つてか三摩地に入る。』

【一六】秘嚴とは、秘密妙莊嚴の意にして、卽ち首楞嚴三昧のことなり。謂ゆる究竟圓滿せる菩提の證果を云ふなり。

(二七)憍陳那(等)の五比丘は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我鹿苑に在り、及び雞園に於て、如來最初の成道を觀見して、佛の音聲に於て(二八)四諦を悟明せり。佛、比丘に問ひたまふに、我初め解すと稱す、如來我を印して(二九)阿若多と名く。妙音密圓にして、我音聲に於て阿羅漢を得たり。佛圓通を問ひたまふ。我が所證の如きは、音聲を上と爲す。

(三〇)優婆尼沙陀は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我亦佛最初の成道を觀じて、不淨の相を觀じ、大厭離を生じて、諸の色性を悟る。不淨の白骨の、微塵より虛空に歸するを以て、空と色と二ながら無にして、無學道を成せり。如來我を印して尼沙陀と名く。塵色既に盡きて、妙色密圓なり。我色相に從つて、阿羅漢を得たり。佛圓通を問ひたまふ、我が所證の如きは、色因を上と爲す。』

(三一)香嚴童子は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して

【二七】憍陳那(Kauṇḍinya カーウンディニヤ)は又憍陳如とも云ふ。鹿野苑に於て釋尊最初の濟度に接したる五人の弟子の隨一なり。是より以下は二十五の菩薩が各々自證の圓通の法門を陳べられたるものなり。

【二八】四諦とは世相を四段に分類して觀察せるものにして、四とは苦、集、滅、道なり。苦とは迷界の果報の皆苦なるをいひ、集とは迷界の因にして、未來の苦果を集起するをいひ、滅とは迷の苦果を滅無したる果をいひ、道とは滅に至る佛道の因をいふなり。諦とは眞實の意にして、眞理眞相と云ふ義なり。聲聞は此理を觀じて證果を得るなり。

【二九】阿若多(Ajñāta アージニャータ)とは、初知、已知と譯す。即ち了解の

言さく、『我如來の我に教へて、諦に諸の有爲の相を觀ぜしめ給ふを聞きて、我時に佛を辭し、晦き清齋に宴「坐」して、諸の比丘の沈水香を燒くを見しに、香氣寂然として、來つて鼻中に入る。我此の氣を觀ずるに、木に非ず、空に非ず、煙にも非ず、火にも非ず。去るに著くる所なく、來るに從ふ所なし。是に因りて意銷し、無明を發明す。如來我を印して、香嚴の號を得せしめたまへり。塵氣倏に滅して、妙香密圓なり。我香嚴に從つて阿羅漢を得たり。佛、圓通を問ひ給ふ。我が所證の如きは、【二二】香嚴を上と爲す。』

藥王藥上の二【二三】法王子、幷に在會の中の五百の梵天は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我無量劫に(於て)世の良醫たり。口中に此の娑婆世界の草木金石を嘗むるに、名數凡て十萬八千あり。是の如く悉く苦酢鹹淡甘辛等の味、幷に諸の和合俱生の變異を知る。是れ冷是れ熱、有毒無毒、悉く能く徧知す。如來に承事して、味の性を了知するに、空に非ず有に非ず、身心に即する

義なり。

【二〇】優婆尼沙陀(Upanisad)とは、近少又は塵性と譯す。白骨を觀じて中道の理を證せるを以て此名を得たり。

【二一】香嚴童子とは、香を觀じて道を悟り童眞位を得たる者を云ふなり。童子は菩薩の異名にして、種々の義あれども、一例を擧ぐれば卽ち世の童子の女色に對して染むことなきが如く、法に於て愛染を生ぜざるを云ふなり。

【二二】香嚴とは、香氣の本元を窮盡して、六根の塵性を空じ、妙莊嚴の相の顯はれたるを云ふなり。

【二三】法王子とは、佛の種子、正法を紹繼して斷絕せざらしめ、以て佛の候補者と爲るに堪へたる菩薩を云ふなり。

にも非す、身心を離するにも非ず、味因を分別して、是に從つて開悟せり。佛如來の、我昆季に、藥王藥上二菩薩の名を印するを蒙むる。今會中に於て法王子と爲りて、味に因つて覺明して、位、菩薩に登れり。佛圓通を問ひたまふに、我が所證の如きは、味因を上と爲す。』

(二四)跋陀婆羅幷に其同伴の十六の(二五)開士は、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我等先に威音王佛(の所)に於て、法を聞きて出家し、浴僧の時に於て、例に隨つて室に入るに、忽に水因を悟る。既に塵をも洗はず、亦體をも洗はず、中間安然として所有なきを得たり。宿習忘るゝことなくして、乃至今の時佛に從つて出家して無學を得せしむ。彼の佛我を跋陀婆羅と名く。妙觸宣明して(二六)佛子住を成す。佛圓通を問ひたまふ。我が所證の如きは、觸因を上と爲す。』

(二七)摩訶迦葉及び紫金光比丘尼等は、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我往劫に於て、此の〔娑婆世〕界の中に

【二四】跋陀婆羅(Bhadrapāla)。賢護と譯す。浴に入るに當て、水の性は本來不可得なりと悟れる菩薩なり。禪寺の浴室に此菩薩を安置せるは、此因緣に由りてなり。

【二五】開士とは菩薩(Bodhisattva)の譯なり。菩薩は一切の眞理を開明し、衆を指導する士夫なるが故に開士と云ふ。

【二六】佛子住とは、無生法忍のことにして、不生不滅の眞如法性を認知して、得るところの決定の位なり。卽ち菩薩の住するところなり。

【二七】摩訶迦葉(Mahākāśyapa)。姓は婆羅門、名は迦葉波、譯して飮光と云ふ。印度相承の第一祖にして、釋尊十大弟子中、頭陀第一と稱せらるる人なり。

於て佛出世したまふことあり、日月燈と名く。我親近したてまつることを得て、法を聞きて修學す。佛滅度の後、舍利を供養し、燈を然し明を續き、紫光金を以て、佛の形像に塗りき。爾れより已來、世世生生、身常に紫金光聚を圓滿せり。此の紫金光比丘尼等は、即ち我が眷屬として同時に發心せり。我世間の六塵の變壞を觀じて、唯空寂を以て(二八)滅盡を修す。身心乃ち能く百千劫を度ること、猶ほ彈指の如し。我空法を以て阿羅漢を成ず。世尊我に說いて(二九)頭陀を最なりと爲す。妙法開明して、諸漏を銷滅せり。佛圓通を問ひたまふ、我が所證の如きは、法因を上と爲す。」

【二八】滅盡とは、滅盡三昧にして諸の煩惱を滅盡するところの觀法を云ふなり。

【二九】頭陀（Dhūta）は譯して抖擻、修治等と云ふ。煩惱妄想を去つて佛道修行をなすことなり。これに十二種あり。

卷の第五の二

(一)阿那律陀は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我初め出家して、常に睡眠を樂ふ。如來我を訶して畜生の類と爲す。我佛の訶したまふことを聞きて、啼泣して自ら責め、七日眠らずして其雙目を失す。世尊我に(二)樂見照明金剛三昧を示したまふ。我眼に因らずして、十方を觀見するに、精眞洞然なること(三)掌果を觀るが如し。如來我を印して、阿羅漢と成れりとのたまふ。佛圓通を問ひたまふ。我が所證の如きは、(四)見を旋し元に循ふ、斯を第一と爲す。』

周利般特迦は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我誦持を闕ぎて、多聞の性なし。最初に佛に値ひたてまつり、法を聞き出家して、如來の一句の(五)伽陀を憶持せしむ。一百日に於て、前を得れば後を遺れ、後を得れば前を遺る。佛我が愚を愍み

【一】阿那律陀(Aniruddha)は又阿㝹樓馱とも云ひ、無滅、如意、無貪等と譯す。釋尊十大弟子の一にして、天眼第一なりと稱せらる。

【二】樂見照明金剛三昧とは、肉眼を失ふと雖も、見んと欲する所あれば、心眼を以て明了に照察し得るところの三昧を云ふ。

【三】掌果とは、掌中の菴摩羅果を云ふ。前に出づ。

【四】見を旋し云云とは、其妄見を旋して、妙明なる眞元に循ふを云ふなり。

【五】伽陀(Gāthā)は梵語、又偈陀ともいふ頌と譯す。

て、我に安居して出入の息を調ふることを教へたまひき。我時に息を觀じて、微細に生住異滅諸行の刹那を窮盡せしに、其心豁然として大無礙を得、乃至漏盡きて阿羅漢を成じ、佛の座下に住す。(如來)無學と成れりと印したまふ、佛圓通を問ひたまふ。我が所證の如きは、(六)息を返して空に循ふ。斯を第一と爲す。』

憍梵鉢提は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく。『我に口業ありき。過去劫に於て(七)沙門を輕弄して、世世生生に牛の呞む病ありしに、如來我に一味清淨の心地の法門を示したまふに、我心を滅して三摩地に入ることを得たり。味の知を觀ずるに、體にも非ず物にも非ず、念に應じて世間の諸漏を超ゆることを得たり。内に身心を脫し、外に世界を遺る。三有を遠離すること、鳥の籠を出づるが如し。垢を離れ塵を銷し、法眼清淨にして阿羅漢を成ず。如來親しく無學道に登れりと印す。佛圓通を問ひたまふ。我が所證の如きは、味を還し知を旋す、斯を第一と爲す。』

(八)畢陵伽婆蹉は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、我初め發心し、

【六】息を返して云云とは、生滅無常の息を窮めて、息の實相は本來無生なりと了するを云ふなり。

【七】沙門(Çramaṇa)とは勤息と譯して、一切の惡業を息め、諸の善事を勤むるをいふ。即ち出家修道の人なり。

【八】畢陵伽婆蹉(Pilinda-vatsa)は餘習と譯す。過去に於て婆羅門たりし時の業に因りて、他を輕んじて賤しむの習氣ある人あり。

佛に從つて道に入る。數如來の諸の世間の、不可樂の事を說きたまふことを聞きて、城中に乞食して、心に法門を思ひ、覺えず路中の毒刺に足を傷らるゝに、身を擧つて疼痛す。我念ふに、知ありて此深痛を知る。覺と痛とを覺ると雖も、淸淨の心を覺するに、痛と痛覺となし。我又思惟するに、是の如きの一身、寧ろ雙覺あらんや、念を攝すること未だ久しからざるに、身心忽に空なり、三七日の中に諸漏虛しく盡きて、阿羅漢を成じ、親しく無學を發明せりと印記せらるゝことを得たり。佛圓通を問ひたまふ。我が所證の如きは純覺にして身を遺る、斯を第一と爲す。』

〔九〕須菩提は、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我曠劫より來かた、心無礙なることを得て、自ら受生を憶ふに恒河沙の如し。初め母胎に在つて、卽ち空寂を知る。是の如く乃至十方空と成れば、亦衆生をして空性を證得せしむ。如來の性覺眞空性圓明なりと發し給ふことを蒙りて、阿難漢を得、頓に如來の〔一〇〕寶明の空海に入りて、佛知見に同せしかば、無學を成せりと印し給ふ。性空を解脫することは、我を無上と爲す。佛圓通を問ひ給ふ。我が所證の如

【九】須菩提（Subhūti）は空生善現等と譯す。能く諸法の空理を了解して、常に空行を修する人なり。釋尊十大弟子の中には解空第一なり。

【一〇】寶明の空海とは、淸淨無碍にして、一切處に徧滿せる智慧の眞相を稱したるものにして、或は性覺眞空といひ、空性圓明といひ、或は佛智見といふも、皆是れ無碍の眞智をいふなり。

きは、諸相を非に入れ、(二)非と所非と盡きて、法を旋して無に歸する、斯を第一と爲す。

(三)舍利弗、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我曠劫より以來、心見淸淨にして、是の如く生を受くること、恒河沙の如し。世出世間の種種の變化、一たび見れば、則ち通じて障礙なきことを獲たり。我路中に於て、迦葉波の兄弟に逢ひ、相逐うて因緣を宣說せしに、心の無際を悟りき。佛に從つて出家し、見覺明圓にして、大無畏を得て阿羅漢と成れり、佛の長子としては佛口より生じ法化より生ず。佛圓通を問ひたまふ、我が所證の如きは、心見光を發し、光知見を極む。斯を第一と爲す。』

(三)普賢菩薩、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我已に曾て恒沙の如來の爲めに、法王子と爲りき。十方の如來、其弟子の菩薩根なる者を教へて、普賢の行を修せしめんに、我に從つて名を立てき。世尊、我心聞を用て、衆生所有の知見を分明す。若し他方の恒沙界の外に於て、一衆生ありて、心中に普賢の行を發明すれば、我爾の時に於て、六牙の象に乘じ、身を百千

【二】非と所非。非とは空理をいひ、所非とは空ぜらるゝ諸相をいふ。謂ゆる法相を窮めて空理に歸せしむるとき、空相も亦盡くるをいふなり。

【三】舍利弗(Śāriputra シャーリプトラ)は、身子又は鶖子と譯す。十大弟子の中にて智慧第一の尊者なり。

【三】普賢菩薩は、常に文殊菩薩と併稱せられ、文殊は智慧を專らとし、普賢は行願を專らとす。行、法界に徧ゐるを普といひ、位、至聖に鄰るを賢といふなり。

に分ちて、皆其の處に至る。縱ひ彼障深うして、未だ我れを見ることを得ざるも、我其の人の與めに暗中に摩頂し、擁護安慰して、其れをして成就せしめん。佛圓通を問ひたまふ。我本因を說く、心聞發明して、分別自在なる、斯を第一と爲す。』

（一四）孫陀羅難陀、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我初め出家して、佛に從つて道に入る。戒律を具すと雖も、三摩地に於て、心常に散動して未だ無漏を獲ず。世尊、我及び倶絺羅に敎へて、鼻端の白を觀せしむ。我初め諦に觀じて、三七日を經て、鼻中の氣を見るに、出入煙の如し。身心內に明にして、圓なること世界に洞り、徧く虛淨を成ずること、猶ほ琉璃の如し。煙相漸く銷して鼻息白と成る。心開け漏盡きて、諸の出入の息、化して光明と爲りて十方界を照し、阿羅漢を得たり。世尊、我當に菩提を得べしとときたまふ。佛圓通を問ひたまふ、我息を銷するに、息久ふして發明し、明圓にして漏を滅するを以て、斯を第一と爲す』。

（一五）富樓那彌多羅尼子は、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我曠刧より以來、辯才無礙にして、苦空を宣說し、深く實相に達す。是の如く乃至、恒沙の如來の秘密

【一四】孫陀羅難陀（Sundarananda）。孫陀羅は艶喜と譯す、難陀の妻女の名なれども、そを冠して通名とせしなり。釋尊の俗弟なり。

【一五】富樓那彌多羅尼子（Pūrṇamaitrayaṇi-Putra）は、滿慈子と譯す。佛十大弟子中、辯才縱橫にして、說法第一の尊者なり。

の法門、我衆中に於て、微妙に開示するに、無所畏を得たり。世尊、我に大辯才あることを知りたまひて、音聲論を以て、我に教へて發揚せしむ。我佛前に於いて、佛を助けて〔法〕輪を轉じ、師子吼に因つて阿羅漢を成せり。世尊我を說法無上なりと印したまへり。佛圓通を問ひたまふ。我法音を以て、魔怨を降伏し、諸漏を銷滅す、斯を第一と爲す。』

〔一六〕優波離、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我親く佛に隨つて、城を踰へ出家して、親く如來六年の勤苦を觀たてまつり、親しく如來の諸魔を降伏し、諸の外道を制し、世間の貪欲の諸漏を解脫したまふことを見たてまつりき。(故に)佛の敎戒を承けたてまつる。是の如く乃至〔一七〕三千の威儀八萬微細の性業遮業、悉く皆清淨に、身心寂滅して阿羅漢を成せり。我れは是れ如來の衆中の綱紀なり、親しく我が心を印したまふ。戒を持ち身を修むること、衆推して上と爲す。佛圓通を問ひたまふ、我身を執するを以て身に白

【一六】優婆離(Upāli)は近執と譯す。常に釋尊に近侍して、品行方正の人なり。十大弟子中持戒第一と稱せらる。

【一七】三千の威儀云云とは、佛弟子たるべき男子(卽ち比丘)の保つべき戒律の數二百五十あり、行往坐臥の四威儀に配すれば一千となる、復た三聚に配すれば三千と成る。又三千を以て身口の七支等に配すれば、八萬四千となる。性業、遮業とは、前者は其事の性質上本來惡にして、例せば殺、盜、淫の如き、犯せば卽ち罪業となるをいふ。後者は其事の性質上本來惡にあらざれども、惡を行ふの助縁となる、例せば飲酒の結果、犯罪するが如きをいふなり。

在を得、次第に心を執して心に通達を得たり、然して後に身心一切通利なり、斯を第一と爲す。』

大目犍連、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我初め路に於て乞食するに、優樓頻螺、伽耶、那提の三迦葉波の、如來の因緣の深義を宣說せるに逢ひ遇うて、我頓に發心して、大に通達することを得たり。如來、我に惠みたまふに、袈裟身に著きしかば、鬢髮自ら落つ。我十方に遊ぶに罣礙なきを得たり。神通發明せること、推して無上と爲して阿羅漢と成れり。寧ろ唯世尊のみならんや、十方の如來も(亦た)我が神力圓明 清淨にして、自在無畏なることを歎めたまへり。佛圓通を問ひたまふ。我（一八）旋湛を以て心光發宣す。濁流を澄ましむるに、久うして淸瑩と成るが如くなり。斯を第一と爲す。』

（一九）烏芻瑟摩は、如來の前に於て掌を合せ、佛の雙足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我常に先づ久遠劫の前を憶ふに、性に貪欲多かりき。佛世に出づること有りて、名けて空王と曰ふ。多婬の人は猛火聚と成ると說きたまふ。我に敎へて徧く百骸四支諸の冷煖の氣を觀せしむ。神光内に凝つて、多婬の心を化して智慧の火と成す。是れより諸佛、皆我れを呼召して、名けて火頭と爲す。我火光三昧の力を以ての故に阿羅漢と成れり。心に大願を發

【一八】旋湛とは、湛然淸淨にして、生滅せざる處の識體をいふ、卽ち定のことなり。

【一九】烏芻瑟摩(Ucchuṣma)。火頭金剛と譯す。火性を觀じて道を得たる人、大忿怒の相を現ぜる護法神なり。

して、諸佛の成道には、我力士と爲りて、親しく魔怨を伏す。佛圓通を問ひたまふ。我身心の煖觸を諦觀するに、無礙流通するを以て、諸漏既に銷して、大寶焰を生じ、無上覺と登る、斯を第一と爲す。』

(二〇)持地菩薩は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我往昔を念ふに、普光如來、世に出現したまひしとき、我比丘と爲りて、常に一切の要路津口に於て、田地の險隘にして如法ならざること有りて、車馬を妨損すれば、我皆平げ塡めたり。或は橋梁と作り、或は沙土を負ふ、是の如く勤苦して、無量の佛の世に出現するを徑たり。或は衆生ありて、闤闠の處に於て、人の物を擎げんと要すれば、我先づ爲めに擎げて、其詣るべき所に至つて、物を放つて即ち行くに、(而も)其直を取らず。毘舍浮佛の現在世の時、世多く飢荒せり。我負人と爲りて、遠近を問ふことなく、唯一錢を取る。或は車牛の泥に溺らさるゝこと有らんには、我神力ありて、其が爲めに輪を推して、其の苦惱を拔けり。時に國の大王、佛を延いて齋を設く、我爾の時に於て、地を平げて佛を待ちたてまつれば、毘舍(浮)如來、頂を摩でて謂はく、我當に心地を平ぐべし、即ち世界の地一

【二〇】持地菩薩とは、地の能く萬物を載せ持つが如く、凡ての衆生を載せ救ふの行願を有する菩薩なり。凡そ佛菩薩及び佛弟子の名は、多くは其の行願、若しくは過去の業を顯はしたるものにして、此の菩薩の如きも亦然り。

切皆平かならん。我即ち心開けて、身の微塵と(三一)造世界の所有の微塵とを見るに、等くして差別なし。微塵の自性は、相ひ觸摩せず、乃至刀兵も亦觸るゝ所なし。我れ(三二)法性に於て、(三三)無生忍を悟つて阿羅漢と成る。廻心して今菩薩の位の中に入りて、諸の如來の妙蓮花、佛知見の地を宣べたまふを聞きて、我先づ證明して上首たり。佛圓通を問ひたまふ、我諦に身と界との二塵等くして差別なく、本如來藏より虚妄に發する塵なりと觀ずるを以て、塵銷し、慧圓にして無上道を成せり、斯れを第一と爲す。』

(三四)月光童子、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我往昔恒河沙劫を憶ふに、佛世に出でたまふこと有りき。名けて水天と爲す。諸の菩薩に敎へて、水觀を修習して、三摩地に入らしめたまひき。身中の水性は奪はるゝこと無きことを觀ずるに、初め涕唾よりして、是の如く窮盡するに、津液精血大小便利、身中に旋復せる水性同一なり。水を見るに身中「の水」と世界の外の(三五)浮幢王刹の諸の香水海と、等くして

【三一】造世界とは、前に出でたる天地日月山川草木等の器世間をいふなり。

【三二】法性(Dharmatā)。諸法の體性の義にして、萬有の本體をいふ。眞如、法身、如來藏性等といふも皆同じ。

【三三】無生忍とは、又無生法忍ともいひ、不生不滅の眞如法性を認知して得るところの決定の位をいふなり。

【三四】月光童子とは、水相を觀じて名を得たる菩薩なり。

【三五】浮幢王刹云云とは、『華嚴經』によれば、華藏海中に大蓮華あり、其中に諸の香水海あり、この香水海に諸の佛刹世界ありといふ。

差別なし。我是の時に於て初めて此の觀を成ずるに、但其水のみを見て未だ身なきことを得ず。我比丘と爲りて室中に安禪するに當りて、我に弟子あり、窻を窺ひ室を觀るに、唯清水の徧く室中に在るを見て、了に〔他の〕所見なし。童稚無知にして、一の瓦礫を取つて水の內に投ずるに、水を激して聲を作せしかば、「童稚卽ち」顧眄して去りぬ。我定を出でて後に頓に心の痛むことを覺えたり。(例せば)(二六)舍利弗の違害鬼に遭へるが如し。我自ら思惟すらく、今我已に阿羅漢を得て、久しく病緣を離れたり。云何ぞ今日忽に心の痛みを生ずる。將に(所證の道果を)退失すること無からんやと。爾の時に童子、捷に我が前に來りて、上の如きの事を說く。我則ち告げて言く、汝更に水を見ば、卽ち門を開きて、此の水の中に入りて、瓦礫を除去すべし。童子教を奉じて、後に定に入れる時、還つて復た水を見るに、瓦礫宛然たり。(卽ち)門を開きて除き出す。我後に定を出づるに、身質初めの如し。(爾れより來)無量の佛に逢ひたてまつれり。是の如くにして山海自在通王如來に至つて、方に身を亡ずることを得、十方界の諸の香水海と、性眞空に合して無二無別な

【二六】 舍利弗(Śāriputra)云云とは、舍利弗尊者、ある時恒河の邊に於て定に入るに、鬼あり來つて頭を打つ、尊者定を出づるに頭痛を覺えたり。佛之に告げたまはく、汝若し定なくんば、身應に碎壞せらるべしと。

【二七】 童眞とは、第六意識の淨盡せる菩薩の地位をいふなり。童子といふも亦同じ。小兒の無邪氣なるが如く、法に於て染著なきを童といひ、虛妄なきを眞といふ。

り。今如來に於て（二七）童眞の名を得て、菩薩の會に預かる。佛圓通を問ひたまふ。我水性の一味流通を以て、無生忍を得て、菩提を圓滿せり、斯を第一と爲す。』

（二八）瑠璃光法王子は、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我往昔を憶ふに、恒沙劫を經て、佛世に出でたまふこと有り、無量聲と名く。菩薩に本覺の妙明なることを開示したまひ、此世界及衆生の身は、皆是れ妄緣風力の所轉なりと觀ぜしむ。我爾の時に於て、界の安立を觀じ、世の動の時を觀じ、身の動止を觀じ、心の動念を觀ずるに、諸動無二にして等しく差別なし。我れ時に此の群動の性を觀ずるに、來るに所從なく、去るに所至なし。十方微塵の顚倒の衆生は同一に虛妄なり。是の如く乃至、三千大千の一世界の內の有らゆる衆生は、一器の中に百の蚊蚋を貯れたるに、啾啾として亂れ鳴きて、分寸の中に於て、鼓發狂鬧するが如し。佛に逢ふこと未だ幾ならざるに、無上忍を得たり。爾の時に心開けて、乃ち東方の不動佛國を見て、法王子と爲りて、十方の佛に事へたてまつるに、身心光を發して洞徹無礙なり。佛圓通を問ひたまふ、我風力の無依なるを觀察するを以て、菩提心を悟つて三摩地に入り、十方の佛に合ひて一の妙心を傳ふる、斯を第一と爲す。』

【二八】琉璃（Vaidūrya）。譯して遠山寶といふ、智光洞かにして、琉璃に似たるを以て名を得たるなり。

(二九)虛空藏菩薩、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我如來と、定光佛の所にして、無邊の身を得たり。爾の時に、手に四の大寶珠を執りて、十方微塵の佛刹を照明するに、化して虛空と成る。又自心に於て、大圓鏡を現じ、內より(三〇)十種微妙の寶光を放つて、十方に流灌す。盡虛空際の諸の幢王刹、鏡の內に來入し、我が身に涉入するに、身虛空に同じて相妨礙せず、身能善く微塵の國土に入つて、廣く佛事を行じ、大に隨順することを得たり。此の大神力は、我れ諦かに四大依ることなく、妄想より生滅し、虛空二なく、佛國本より同じと觀じて、同に於て發明して無生忍を得るに由れり。佛圓通を問ひたまふ。我虛空の無邊なることを觀察するを以て、三摩地に入りて妙力圓明なる、斯を第一と爲す。』

彌勒菩薩、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我往昔を憶ふに、微塵劫を經て、佛世に出でたまふこと有り、日月燈明と名く。我彼の佛に從つて、而も出家することを得たれども、心に世名を重んじて、好んで族姓に遊ぶ。爾の時に世尊、我に唯心識定を修習して、三摩地に

【二九】虛空藏（Âkâśagarbha）。虛空の邊際なく無礙なるが如く、四大（地水火風）の性及び自心は、本より清淨無礙にして、一切處に徧滿せりと觀じたる菩薩なり。

【三〇】十種微妙の寶光とは、如來の十種の身光をいふ。十身とは「華嚴經」に謂ゆる一には衆生身、二には國土身、三には業報身、四には聲聞身、五には緣覺身、六には菩薩身、七には如來身、八には智身、九には法身、十には虛空身、是れなり。

入ることを教へたまひき。歷劫より已來此の三昧を以て、恒沙の佛に事へて、世名を求むる心、歇滅して有ること無し。然燈佛の世に出現したまふに至つて、我乃ち無上妙圓識心三昧を成ずることを得たり。乃至盡空の如來の國土淨穢有無、皆是れ我が心の變化の所現なり。世尊、我是の如きの唯心識を了ずるが故に、識性より無量の如來を流出して、今授記を得て、次に佛處に補せり。佛圓通を問ひたまふ。我諦かに十方唯識なりと觀ずるを以て、識心圓明にして（三）圓成實〔性〕に入り、依他〔起性〕と及び徧計〔所〕執を遠離して、無生忍を得る、斯を第一と爲す。』

大勢至法王子、其同倫の五十二菩薩と與に、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我往昔を憶ふに、恒河沙劫に〔於て〕佛世に出でたまふこと有り、無量光と名く。十二の如來、一劫に相繼ぎ、其最後の佛を日月光と名く。彼の佛、我に念佛三昧を教へたまひき。譬へば人ありて、一は專ら憶を爲し、一は專ら忘るる如し。是の如きの二人、若は逢ひ

【三】圓成實性云云とは、唯識に於ける三性なり、卽ち一に徧計所執、(理無)、宇宙萬有の實體は本來無なるを、誤つて實有と見るを云ふ。二に依他起性、(假有)、宇宙の現象は實體あるに非ず、悉く他の緣に依つて起るものにして、皆これ因緣の和合なり、因緣を離れて一物も存せずと見るをいふ。三に圓成實性、(妙有)、心の實性、卽ち依他起の根本、絕對無限の本體にして、圓滿とて一切處に徧くして缺ぐることなく、成就とて生滅せずして常に存し、眞實とて諸法の實性にして、虛妄を絕したる眞如法性をいふ。

(若は)逢はず、或は見、(或は)見ること非し。二人相憶うて、二の憶念深ければ、是の如く乃至生より生に至るに、形と影とに同うして相乖異せず。十方の如來、衆生を憐念したまふこと、母の子を憶ふが如し。若し子、逃逝せば、憶ふと雖も何か爲ん。子若し母を憶ふこと母の(子を)憶が如くなる時は、母子生を歷るとも相違遠せず。若し衆生の心に、佛を憶ひ佛を念ずれば、現前にも當來にも必定して佛を見たてまつり、佛を去ること遠からずして、方便を假らずして自ら心開くことを得ん。(譬へば)香に染める人の身に香氣あるが如し。此を則ち名けて香光莊嚴と曰ふ。我本因地に、念佛の心を以て無生忍に入る。今此の界に於て、念佛の人を攝して淨土に歸せしむ。佛圓通を問ひたまふ、我選擇すること無く、都て六根を攝して、淨念相繼ぎて三摩地を得る、斯を第一と爲す。』

卷の第六の一

爾の時に（一）觀世音菩薩は、即ち座より起ち、佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『世尊、我昔の無數恒河沙劫を憶念するに、時に於て、佛世に出現したまふこと有り、觀世音と名く。我彼の佛(の所)に於て菩提心を發せり。彼の佛、我に教へて、聞思修より三摩地に入らしむ。初め聞の中に於て、（二）流を入して所を亡ず。所入既に寂なれば、（三）動靜の二相了然として生ぜず。是の如く漸に增すれば、聞と所聞と盡きぬ。盡聞にも住せざれば、覺と所覺と空なり。覺を空ずること極めて圓なれば、空と所空と滅するなり。生滅既に滅して、寂滅現前す。忽然として世出世間を超越し、十方圓明にして、二の殊勝を獲たり。一には上十方諸佛の本妙覺心に合つて、佛如來と同一の慈力あり。二には下十方一切の（四）六道の衆生に合つて、諸の衆生と同一の悲仰あり。

【一】觀世音菩薩とは阿利耶婆盧吉帝濕縛羅（Āryāvalokiteśvara）の譯にして、觀自在といふを適當とすれど、此の菩薩の性質上より意譯して觀世音といふ。耳根により圓通を得たるを以て、能く世間の音聲を聞きて、諸の苦惱を脫せしめたまふ。

【二】流を入して所を亡ずとは耳根が聲境に對し耳識發作して、好惡の音聲を聞取して、流れて外に出たるを、本の耳識(能緣)に入る時、對境(所緣)の聲もなし、即ち能所共に泯絶したるを云ふ。

【三】動靜の二相とは、能緣の耳識を動といひ、所緣の聲塵

世尊、我觀音如來を供養するに由りて、彼の如來、我に〔五〕如幻の聞熏、聞修、金剛三昧を授げたまふことを蒙りて、佛如來と慈力を同うするが故に、我が身をして三十二の應を成じ、諸の國土に入らしむ。世尊、若し諸の菩薩、三摩地に入りて、無漏を進修して、勝解現に圓ならんとするには、我佛身を現じて、而も爲に法を說いて、其をして解脫せしむ。若し諸の有學の寂靜妙明にして、勝妙現に圓ならんとするには、我彼の前に於いて、獨覺の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして解脫せしむ。若し諸の有學、十二(因)緣を斷じ、緣斷じて、勝性勝妙現に圓ならんとするには、我彼の前に於て、緣覺の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして解脫せしむ。若し諸の有學四諦の空を得て、道を修して滅に入り、勝性現に圓ならんとするには、我彼の前に於いて、聲聞の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして解脫せしむ。若し諸の衆生、心に明悟して欲塵を犯さゞらんことを欲し、身の淸淨ならんことを欲すれば、我彼の前に於いて、梵王の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして解脫せ

な靜といふ。然れども單に此に止まらずして、迷悟凡聖是非得失等總て兩邊に滯ふる對待を指す。

〔四〕六道とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上なり。

〔五〕如幻の聞熏聞修金剛三昧とは、有無を超絕したる中道を如幻といひ、聞等は聞、思、修の三慧にして、修に思を兼ぬ。熏とは熏習の義にして、聞根により思修を熏すること、卽ち眞如の力を以て煩惱の惡を淨熏して、菩提に入らしむるを云ふなり。金剛三昧は前に出でたる三摩地のことなり。

しむ。若し諸の衆生、天主と爲りて諸天を統領せんと欲すれば、我彼の前に於いて、帝釋の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、身自在にして十方に遊化せんと欲すれば、我彼の前に於いて、自在天の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、身自在にして虛空に飛行せんと欲すれば、我彼の前に於いて、大自在天の身を現じて、而も爲に法を說き、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、鬼神を統べて國土を救護せんことを愛すれば、我彼の前に於いて、天大將軍の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、世界を統べて衆生を保護せんことを愛すれば、我彼の前に於て、四天王の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、天宮に生じて鬼神を驅使せんことを愛すれば、我彼の前に於いて、四天王國太子の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、人主と爲らんことを樂へば、我彼の前に於て、人王の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、族姓に主として、世間に推讓せられんことを愛すれば、我彼の前に於いて、長者の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、名言を談じ、清淨にして自ら居らんことを愛すれば、我彼の前に於いて、居士の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆

生、國土を治め邦邑を剖斷せんことを愛すれば、我彼の前に於いて、宰官の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、諸の數術攝衛自ら居らんことを愛すれば、我彼の前に於いて、婆羅門の身を現じて而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し男子ありて、出家を學し諸の戒律を持たんことを好まんには、我彼の前に於いて、比丘の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し女人ありて、出家を學し、諸の禁戒を持たんことを好まんには、我彼の前に於て、比丘尼の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し男子ありて、[六]五戒を持たんことを樂はんには、我彼の前に於いて、[七]優婆塞の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し女子ありて、五戒(を持って)自ら居らんには、我彼の前に於て、[八]優婆夷の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し女子ありて、內政に身を立て、以て家國を修めんとするには、我彼の前に於いて、女主の身及び國夫人命婦大家とを現じて、

【六】五戒とは、一には不殺生戒（生命あるものを害する勿れ）二には不偸盜戒（他の財物を盜む勿れ）三には不邪婬戒（邪なる婬を行ふ勿れ）、四には不妄語戒（虛妄の言を吐く勿れ）五には不飮酒戒（酒を飮むこと勿れ）、是れ卽在家の者の持つべき戒律なり。

【七】優婆塞（Upāsaka）とは、近事男、又近善男と譯す。卽ち三寶に親近する男子の義にして、五戒を受持する在家の男子を云ふ。

【八】優婆夷（Upāsikā）とは、近事女、又近善女と譯す。卽ち三寶に親近して五戒を持つ在家の女子をいふ。

而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し衆生ありて、男根を壞せざらんには、我彼の前に於いて、童男の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し處女ありて、處身を愛樂し、侵暴を求めざらんには、我彼の前に於いて、童女の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し諸天ありて、天倫を出でんことを樂はんには、我れ天身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し諸龍ありて、龍倫を出でんことを樂はんには、我龍身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し(九)藥叉ありて、本倫を度せんことを樂はんには、我彼の前に於いて、藥叉の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し乾闥婆、其倫を脫せんことを樂はんには、我れ彼の前に於て、乾闥婆の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し阿修羅、其倫を脫せんことを樂はんには、我彼の前に於いて、阿修羅の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し緊那羅、其倫を脫せんことを樂はんには、我彼の前に於いて、緊那羅の身を現じて、而も爲に法を說きて其をして成就せしむ。若し摩呼羅伽、其倫を脫せんことを樂はんには、我彼の前に於いて、摩呼

【九】藥叉(Yakṣa)とは、鬼神の類にして其性勇健なり。以下摩呼羅伽に至るまで皆是れ鬼神の類にして、乾闥婆は樂神。阿修羅は形醜くして我慢多き鬼神。緊那羅は人に似て角を戴く類にして、之を疑神といふ。摩呼羅伽は腹行の類にして、之を大蟒神といふ。

羅伽の身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し諸の衆生、人を樂ひて人を修せんには、我人身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。若し諸の非人有形無形有想無想、其倫を度せんことを樂はんには、我彼の前に於て、皆其身を現じて、而も爲に法を說きて、其をして成就せしむ。是を妙淨の三十二應入國土身と名く。皆三昧の聞熏、聞修、無作の妙力を以て自在に成就す。

世尊、我復、此の聞熏、聞修、金剛三昧無作の妙力を以て、諸の十方三世六道の一切衆生と、同じく悲仰するが故に、諸の衆生をして、我が身心に於て、十四種の〔一〇〕無畏の功德を獲せしむ。一には我自ら音を觀せずして、觀ずる者を觀ずるに由つて、彼の十方の苦惱の衆生をして、其音聲を觀じて卽ち解脫を得せしむ。二には知見旋復すれば、諸の衆生をして、設ひ大火に入るとも、火も燒くこと能はざらしむ。三には聽を觀じて旋復すれば、諸の衆生をして、大水に漂はさるゝとき、水も溺らすこと能はざらしむ。四には妄想を斷滅して心に殺害なければ、諸の衆生をして、諸の鬼國に入るとも、鬼も害すること能はざらしむ。五には聞を熏じて聞を成じ、六根銷復して聲聽に同ずれば、能く衆生をして當に害せらるべきに臨むとも、刀段段に壞

【一〇】無畏の功德とは、一切衆生の怖畏を脫せしむるをいふ。觀世音菩薩は實に此の功德を具したまふを以て、施無畏者の稱あり。

せしむ。（譬へば）其兵戈をして、猶ほ水を割くが如く、亦光を吹くが如くならしめて、性に搖動なけん。六には聞熏精明にして法界に徧すれば、則ち諸の幽闇の性全きこと能はず。能く衆生をして、(二)藥叉、羅刹、鳩槃茶鬼及び毘舍遮、富單那等、其傍に近づくと雖も、目に視ること能はざらしむ。七には音性圓銷し觀聽返入して、諸の塵妄を離れぬれば、能く衆生をして、禁繋枷鏁も著くること能はざる所ならしむ。八には音を滅し、聞を圓にして、徧く慈力を生ずれば、能く衆生をして險路を經過するとも、賊も劫むること能はざらしむ。九には聞を熏じ塵を離れて、色も劫めざる所なれば、能く一切多婬の衆生をして、貪欲を遠離せしむ。十には音を純にするに塵なく、根境圓融して對と所對と無ければ、能く一切忿恨の衆生をして、諸の嗔恚を離れしむ。十一には塵を銷して明に旋れば、法界と身心とは猶ほ琉璃の如く朗徹無礙にして、能く一切昏鈍性の障の諸の(三)阿顚伽をして、永く癡暗を離れしむ。十二には形を融じて聞に復すれば、道場を動ぜずして世間に涉入し世界を壞せずして能く十方に徧し、微塵の諸佛如來を供養して、各各の佛邊にして法王子と爲り能く法界の子なき衆生の男を欲求する者をして、福德智慧の男を誕生せしむ。十三には六根圓通

【二】藥叉羅刹云云とは、皆是れ幽暗に處する惡鬼の名也。

【三】阿顚伽（Atyantika）阿闡提の轉訛なり、斷善根、信不具足と譯して、本來解脫の因を缺きて、容易に成佛すること能はざる者をいふ。

明照無二にして、十方界を含むで大圓鏡空如來藏を立て、十方微塵の如來に承順し、祕密法門を受領して失ふこと無ければ、能く法界の子なき衆生の女を欲求する者をして、端正福德柔順にして、衆人の愛敬する有相の女を誕生せしむ。十四には此の三千大千世界に百億の日月あり、世間に現住する諸の法王子は、六十二恒河沙の數あり、法を修し範を垂れ、衆生を教化し、衆生に隨順する、方便智慧各各同じからず。我が得る所の圓通の本根は、妙耳の門より發して、然して後に身心微妙に含容し、法界に周徧するに由つて、能く衆生をして、我が名號を持たんものと、彼の共に六十二恒河沙「數」の諸の法王子「の名號」を持たんものと、二人の福德正に等うして異なること無からしむ。世尊、我が一の名號と彼の衆多の名號と異なること無きことは、我が修習して眞の圓通を得るに由つてなり。是を十四の施無畏の力をもつて、福を衆生に備ふと名く。

世尊、我又た是の圓通修證の無上道を獲るが故に、又能く善く四不思議無作の妙德を獲たり。

一には我初め（三）妙妙の聞心を獲て、心精聞を遺るるに由つて、見聞覺知分隔すること能はず、一の圓融清淨の寶覺を成ず。故に我能く衆多の妙容を現じて、能く無邊の祕密神呪を說く。其

【三】妙妙の聞心とは、聞の性本より圓通にして、根と境との對待を絕したる圓なる心をいふ。

中に或は一首三首五首七首九首十一首、乃至一百八首千首萬首八萬四千(一四)爍伽囉首、二臂四臂六臂八臂十臂十二臂十四十六十八二十より二十四に至る、是の如く乃至一百八臂千臂萬臂八萬四千(一五)母陀羅の臂、二目三目四目九目、是の如く乃至一百八目千目萬目八萬八千清淨の寶目を現ず、或は慈或は威、或は定或は慧、衆生を救護するに大自在を得たり。二には我が聞思に由つて六塵を脱出すること、聲の垣を度るに礙を爲すこと能はざるが如し。故に我妙に能く一一の形を現じ一一の呪を誦するに、其形其呪、能く無畏を以て諸の衆生に施す。是の故に十方微塵の國土、皆我を名けて施無畏者と爲す。三には我が本妙圓通の清淨の本根を修習するに由つて、遊ぶ所の世界に、皆衆生をして身と珍寶とを捨てゝ、我が哀愍を求めしむ。四には我佛心を得て究竟を證す。能く珍寶を以て、種種に十方の如來を供養し、傍に法界六道の衆生に及ぼす。妻を求めんには妻を得せしめ、子を求めんには子を得せしめ、三昧を求めんには三昧を得せしめ、長壽を求めんには長壽を得せしむ。是の如く乃至大涅槃を求めんには大涅槃を得せしむ。

佛圓通を問ひたまふ、我耳門(一六)圓照三昧に從つて、縁心自在にして流相を入すに因つて、三

【一四】爍迦羅は金剛堅固の意なり。前に出づ。

【一五】母陀羅(Mudra)とは、印と譯す。卽ち印を結べる手の義なり。

【一六】圓照三昧とは、妙圓の智慧を以て、煩惱を照らす義なり。又一行三昧ともいふ。卽ち一切處に於て、行住坐臥、常に一の直心に住して、餘事を雜へず、專ら其行を一にするをいふなり。

摩提を得て菩提を成就す、斯を第一と爲す。世尊、彼の佛如來は、我が善く圓通の法門を得ることを歎じて、大會中に於て、我に授記して觀世音の號を爲したまへり。我が聽を觀じて十方に圓明なるに由るが故に、觀音の名十方界に徧せり。』

爾の時に世尊、師子座に於て、其五體より同く寶光を放つて、遠く十方微塵の如來及び法王子諸の菩薩の頂に灌ぐ。彼の諸の如來も亦五體に於て同じく寶光を放ち、微塵の方より來つて佛頂に灌き、並に會中の諸の大菩薩及び阿羅漢に灌ぐ。林木池沼、皆法音を演べ、光を交へて相羅なること寶絲網の如し。是の諸の大衆未曾有なることを得て、一切普く金剛三昧を獲たり。即時に天より百寶蓮花を雨らし、青黄赤白間錯紛糅して、十方の虛空七寶の色と成る。此の裟婆界の大地山河俱時に現ぜず、唯十方微塵の國土を見るに、合して一界と成りて、梵唄詠歌し自然に敷奏す。

是に於て如來、文殊師利法王子に告げたまはく、『汝今此の二十五の無學の諸の大菩薩及び阿羅漢、各最初成道の方便を說くを觀よ、皆眞實の圓通を修習すと言へり。彼等の修行は、實に優劣なけれども前後の差別あり。我今阿難をして開悟せしめん。二十五の行、誰か其根(本)に當れる。兼ねて我が滅後に此の界の衆生、菩薩乘に入つて無上道を求めんに、何の方便の門か成就

し易きことを得ん。』

文殊師利法王子は、佛の慈旨を奉じて、即ち座より起ち、佛足を頂禮して佛の威神を承け、偈を說きて佛に對へていはく。

「覺海の性は澄圓なり、圓澄の覺は元妙なり。元明の照に所を生じ、所立すれば照の性亡ず。迷妄にして虛空あり、空に依つて世界を立す。想の澄めるは國土と成り、知覺は乃ち衆生なり。

空の大覺の中に生ずることは、海に一漚の發するが如し。有漏の微塵の國は、皆空に依つて生ずる所なり。

漚滅すれば空本無なり、況や復た諸の三有をや。元に歸すれば性は無二なり、方便には多門あり。

聖性は通ぜずといふこと無ければ、順逆皆方便なり。初心の三昧に入るに、遲速同倫ならず。

巻の第六の二

色は想結して塵と成り、精了に徹すること能はず。如何ぞ明徹ならずして、是に於て圓通を獲ん。

音聲は語言に雜れり、但伊れ名句味なり。一は一切を含むに非ず、云何ぞ圓通を獲ん。

香は合中知なるを以て、離するときは則ち元より有ること無し。其所覺を恒にせず、云何ぞ圓通を獲ん。

味の性は本然に非ず、要らず味する時を以て有り、其覺恒一ならず、云何ぞ圓通を獲ん。觸は所觸を以て明なり、所なきときは觸を明めず。合と離との性は定まれるに非ず、云何ぞ圓通を獲ん。

法を稱して內塵と爲す、塵に憑れば必らず所あり。能所あるは徧沙に非ず、云何ぞ圓通を獲ん。

見性は洞然なりと雖も、前は明にして後は明ならず。四維に一半を虧ぎて、云何ぞ圓通を獲ん。

鼻息は出入に通じて、現前に交る氣なし。支離として渉入に匪ず、云何ぞ圓通を獲ん。

舌は入に非ざれば端なし、味に因つて覺了を生ず。味亡ずれば有ること無し、云何ぞ圓通を獲ん。

身は所觸と同じ、各圓覺の觀に非ず。涯量ありて冥會せず、云何ぞ圓通を獲ん。

知根は雜亂せる思なり、湛了すれば終に見なし。想念脱すべからず、云何ぞ圓通を獲ん。

識見は三和に雜り、本稱を詰むるに相に非ず。自體先より定なし、云何ぞ圓通を獲ん。

心聞の十方に洞なることは、大因の力より生れり、初心は入ること能はず、云何ぞ圓通を獲ん。

鼻想は本權機なり、祇心を攝して住せしむ。住すれば心の所住を成ず、云何ぞ圓通を獲ん。

說法は音文を弄す、開悟は先より成ずる者なり。名句は無漏に非ず、云何ぞ圓通を獲ん。

持犯は但身を束ぬ、身に非ずんば束ぬる所なし。元より一切に徧するに非ず、云何ぞ圓通を獲ん。

神通は本宿因なり、何ぞ分別を法とするに關らん。念緣は物を離するに非ず、云何ぞ圓通を獲ん。

若し地性を以て觀せば、堅礙にして通達に非ず。有爲は聖性に非ず、云何ぞ圓通を獲ん。
若し水性を以て觀せば、想念は眞實に非ず。如如は覺觀に非ず、云何ぞ圓通を獲ん。
若し火性を以て觀せば、有を厭ふは眞の離に非ず、初心の方便に非ず、云何ぞ圓通を獲ん。
若し風性を以て觀せば、動寂は對なきに非ず。對あるは無上覺に非ず、云何ぞ圓通を獲ん。
若し空性を以て觀せば、昏鈍は先より覺に非ず。覺なきは菩提に異なり、云何ぞ圓通を獲ん。
若し識性を以て觀せば、識を觀ずるに常住に非ず、心を存すれば乃ち虚妄なり、云何ぞ圓通を獲ん。
諸行は是れ無常なり、念性は元より生滅す。因果今感に殊なる、云何ぞ圓通を獲ん。
我今世尊に白す、佛娑婆界に出でたまふ。此の方の眞の敎體は、清淨にして音聞に在り。三摩提を取らんと欲せんには、實に以て聞の中より入り、苦を離れて解脱を得ん。
良哉觀世尊、恒沙劫の中に於て、微塵の佛國に入り、大自在の力を得て、無畏を衆生に施す。
妙音觀世音、梵音海潮音、世を救ひて悉く安寧ならしめ、出世には常住を獲しむ。
我今如來に啓す、觀音の所說の如きは、譬へば人の靜に居するとき、十方倶に鼓を擊てば、十處一時に聞くが如し、此れ則ち圓の眞實なり。

目は障の外を觀るに非ず、口と鼻とも亦復然り。身は合を以て方に知る、心念は紛れて緒なし。

垣を隔てて音響を聞くに、遐邇倶に聞くべし。五根の齊しからざる所、是れ則ち通の眞實なり。

音聲の性に動靜あれば、聞の中に有無を爲す。聲なきを無聞と號すれども、實に聞の性なきには非ず。

聲の無きとき既に滅無し、聲の有るとき亦生に非ず。生滅二ながら圓に離る、是れ則ち常の眞實なり。

縱令夢想に在りて、爲さざれども無と思はず。覺觀と思惟とを出でて、身心及ぶこと能はず。

今此の娑婆國は、聲論をもて宣明を得ん。衆生本聞に迷ひて、聲に循ふが故に流轉す。

阿難は縱ひ強記なれども、邪思に落つることを免れず。豈に所に隨つて淪むに非ざらんや、

流を旋せば妄無きことを獲ん。

阿難よ汝諦に聽け、我佛の威力を承けて、(一)金剛王、如幻不思議、佛母眞三昧を宣說せん。

【一】金剛王云云。金剛及び如幻は、前に出でたる、金剛三昧、如幻三昧なり。佛母眞三昧とは、首楞嚴三昧をいふなり。三世の如來は、皆是の中より出でたまふが故に佛母といふなり。

汝微塵の佛の、一切の秘密門を聞くとも、欲漏先づ除かざれば、聞を畜へて過誤を成す。聞を將て（三）佛佛を持せんよりは、何ぞ自ら聞を聞せざる。聞は自然の生に非ず、聲に因つて名字あり。

聞を旋せば聲と與に脫す、能脫誰をか名づけんと欲する。一根既に源に返れば、六根解脫を成ず。

見聞は幻翳の如く、三界は空花の若し。聞復すれば翳根除き、塵消すれば覺圓淨なり。

淨極りて光通達し、寂照にして虛空を含む。却り來つて世間を觀ずれば、猶ほ夢中の事のごとし。

摩登伽も夢に在り、誰か能く汝が形を留めん。

世の巧幻師の、諸の男女を幻作するとき、諸の根の動くことを見ると雖も、要らず一機を以て抽んず。機を息めて寂然に歸すれば、諸幻は無性と成るが如し。

六根も亦是の如し、元一精明に依つて、分れて六和合と成る。一處に休復を成ずれば、六用皆成せず。

【三】佛佛とは、上の佛は人をいひ下の佛は法をいふ。謂ゆる佛の說きたまふ處の秘密法門をいふなり。

塵垢念に應じて消えぬれば、圓明淨妙と成る。塵を除すは尙は〔三〕諸學なり、明極まれば卽ち如來なり。

大衆及び阿難よ、汝が〔四〕倒聞の機を旋らして、反つて聞の自性を聞せば、性は無上道と成らん、圓通は實に是の如し。

此は是れ微塵の佛の、一路涅槃門なり。過去の諸の如來は、斯の門より已に成就し、現在の諸の菩薩は、今各圓明に入る。未來の修學の人は、當に是の如きの法に依るべし。我も亦中に從つて證せり、唯觀世音のみに非ず。誠に佛世尊の、我に諸の方便を詢ひたまふが如きは、以て諸の末劫に、出世間を求むる人を救はんとなり。涅槃の心を成就することは、觀世音を最と爲す。自餘の諸の方便は、皆是れ佛の威神、事に卽して塵勞を捨てしむ。是れ長く修學し、淺深同說の法に非ず。如來藏の無漏不思議なるを頂禮す。

【三】諸學とは、未だ煩惱を斷じ盡さざる二乘聲聞の有學をいふなり。

【四】倒聞とは、耳識が顚倒して塵境に對して流れ出づるをいふ。

願くは未來を加被して、此の門に於て惑なく、方便をもて成就し易からしめたまへ。以て阿難及末劫の、沈淪のものを敎ふるに堪へん。

但此の根を以て修せば、圓通餘の者に超ん、眞實の心是の如し。』

是に於て、阿難及び諸の大衆は、身心了然として大に開示することを得て、佛、菩提及び大涅槃を觀ること、猶人ありて、事に因りて遠く遊んで、未だ歸還することを得ざるに、明かに其家の所歸の道路を了るが如し。普會の大衆、天龍八部、有學の二乘、及び諸の一切の新發心の菩薩、其數凡て十恒河沙あり。皆本心を得て、遠塵離垢して(五)法眼淨を獲たり。性比丘尼、偈を說くことを聞き已つて阿羅漢を成ず。無量の衆生は皆(六)無等等の阿耨多羅三藐三菩提心を發しき。

阿難は衣服を整へ、大衆の中に於て合掌頂禮し、心迹圓明にして悲欣交集り、未來の諸の衆生を益せんと欲するが故に、稽首して佛に白さく、『大悲世尊、我今已に成佛の法門を悟つて、是の中の修行に疑惑なきことを得たり。常に如來の是の如きの言を說きたまふことを聞きて、自ら未だ度を得ざるに先つ人を度するは、菩

【五】法眼淨とは、一切諸法を觀取する眼のこと、卽ち諸法の眞相を達觀して、一切の顚倒妄想を淨盡したるをいふ。

【六】無等等の阿耨多羅三藐三菩提心とは、等匹なき究竟の理を無等といひ、無等に等しきを無等等といふ。阿耨多羅三藐三菩提は、無上正徧知と譯す。卽ち佛陀の智德を尊稱したるものにして、佛陀は絕對智者にして、其智を超えて大なる者なきが故に無上といひ、萬有の凡てを了悟せざることなきが故に正徧知といふ。

薩の發心なり。自覺已に圓にして能く他を覺するは、如來の應世なりと。我未だ度せずと雖も、願くは末劫の一切衆生を度せん。世尊、此の諸の衆生は、佛を去ること漸く遠く、邪師の說法恒河沙の如くならん。其心を攝して三摩地に入らんと欲せば、云何が其をして道場を安立し、諸の魔事を遠ざかり、菩提心に於て退屈なきことを得せしめん。』

爾の時に世尊、大衆の中に於て、阿難を稱讚したまはく、『善哉善哉、汝が所問の如きは、道場を安立し、衆生の末劫の沈溺を救護せんとす。汝今諦に聽け、當に汝が爲に說くべし。』阿難大衆、唯然として敎を奉ず。佛、阿難に告げたまはく、『汝常に我(七)毘奈耶の中に、三決定の義を修行することを宣說せしを聞けり。謂ゆる心を攝むるを戒と爲し、戒に因つて定を生じ、定に因つて慧を發す、是を則ち名けて三無漏の學と爲す。

阿難よ、云何が心を攝むるを我は名けて戒と爲す。若し諸の世界の六道の衆生、其心婬せざれば、則ち其に隨つて生死相續せず。汝三昧を修することは、本塵勞を出でんがためなり。婬心除かざれば塵出づべからず。縱ひ多智にして禪定現前すること有りとも、如し婬を斷せざれば、必らず魔道に落ちて、上品は魔王、中品は魔民、下品は魔女とならむ。彼等の諸魔には亦徒衆あ

【七】毘奈耶(Vinaya)とは、梵語。離行、滅、調伏と譯す。經、律、論三藏の中の律のことなり。

り。各自ら無上道を成ずと謂へり。我が滅度の後、末法の中に此の魔民多くして、世間に熾盛にして廣く貪婬を行じ、(假に)善知識と爲りて、諸の衆生をして愛見の坑に落し、菩薩の路を失はしめん。汝世人に敎へて三摩地を修せしめんには、先づ心婬を斷せしめよ。是を如來と先佛世尊との第一決定淸淨の明誨と名く。是の故に阿難よ、若し婬を斷せずして禪定を修する者は、砂石を蒸して、其をして飯と成さんと欲するが如し。(縱ひ)百千劫を經るとも、祇熱砂と名けん。何となれば此の飯は本より砂石の成すに非ざるを以てなり。汝婬身を以て佛の妙果を求めば、縱ひ妙悟を得るとも、皆是れ婬根なり。根本婬を成ずれば(八)三途に輪轉して、必らず出づること能はず。如來の涅槃、何の路よりか修證せん。必らず婬機をして、身心俱に斷じて斷性も亦無からしめば、佛菩提に於て斯れ希冀すべし。我が此の說の如きは、名けて佛說と爲し、此の如く說かざれば、卽ち(九)波旬の說なり。

阿難よ、又諸の世界、六道の衆生、其心殺せざれば、則ち其に隨つて生死相續せず。汝三昧

【八】三塗とは、地獄、餓鬼、畜生の三惡道をいふ。また三惡趣とも名く。塗とは塗炭に苦しむの意にして、地獄を火塗道といひ、餓鬼を刀塗道といひ、畜生を血塗道といふ。

【九】波旬とは波卑夜(pāpīya)の訛、惡愛、又は惡と譯す。欲界天の頂に住し、種種奇異の相を現じ、常にその子女を人界に下して惡人を煽動し、聖者を惱亂す、釋尊成道の時に障礙を加へたるは是なり。

を修することは、本塵勞を出でんがためなり。殺心除かずんば塵出づべからず。縱ひ多智にして禪定現前すること有りとも、如し殺を斷ぜざれば必らず「鬼」神道に落ちて、上品の人は大力の鬼と爲り、中品は則ち飛行の夜叉諸の鬼師等と爲り、下品は當に地行の羅刹と爲るべし。彼の諸の鬼神も亦徒衆ありて、各自ら無上道を成ずと謂へり。我が滅度の後、末法の中に此の鬼神多くして、世間に熾盛にして、自ら肉を食するも、菩提の路を得ると言はん。阿難よ、我比丘をして五の淨肉を食せしむることは、此肉は皆我が神力の化生なればなり。本より命根なし。汝婆羅門の地は多く蒸濕にして、加ふるに砂石を以てして草菜生ぜず。我大悲神力の加ふる所を以て、大慈悲に因つて、假に名けて肉とせるに、汝其味を得たりき。奈何ぞ如來滅度の後、衆生の肉を食せんを名けて釋子と爲んや。汝等當に知るべし、是食肉の人は、縱ひ心開けて三摩地に似ることを得るとも皆大羅刹なり。報終らば必らず生死の苦海に沈まむ。「これ」佛弟子に非ず。是の如きの人、相殺し相呑み、相食すること未だ已らず、云何が是の人三界を出づることを得ん。汝世人に敎へて三摩地を修せしめんには、次に殺生を斷ぜしめよ。是を如來と先佛世尊との第二決定清淨の明誨と名く。是の故に阿難よ、若し殺を斷ぜずして禪定を修する者は、譬へば人ありて自ら其耳を塞ぎて、高聲に大に叫びて、人の聞かざることを求むるが如し。此等を名けて隱さん

と欲すれども彌露はると爲す。淸淨の比丘及び諸の菩薩は、岐路に於て行くに、生草をも蹋まず、況や手を以て拔くをや。云何ぞ大悲、諸の衆生の血肉を取つて食に充てんや。若し諸の比丘、東方の絲綿絹帛、及び是れ此土の靴履裘毳、乳酪醍醐を服せずば、是の如きの比丘は、世に於て眞に脫せり、宿債を酬還して三界に遊ばず。何となれば、其身分を服すれば、皆彼の緣と爲るを以てなり。人其地中の百穀を食うて、足地を離れざるが如し。必らず身心をして、諸の衆生の若くは身と身分とに於て、身心の二塗に服せず食せざらしめば、我是の人は眞の解脫者なりと說く。我が此の說の如きを名けて佛說と爲す。此の如く說かざるは卽ち波旬の說なり。

阿難よ、又復世界六道の衆生、其心偸せざれば、則ち其に隨つて生死相續せず。汝三昧を修することは、本塵勞を出でんがためなり。偸心除かずんば塵出づべからず。縱ひ多智禪定現前すること有りとも、如し偸を斷せざれば必らず邪道に落つ。上品は精靈、中品は妖魅、下品は邪人として諸魅の著く所なり。彼等の群邪にも亦徒衆あり、各自ら無上道を成ずと謂へり。我が滅度の後、末法の中に此の妖邪多くして、世間に熾盛にして、奸欺を潛匿して善知識と稱し、各自ら已に上人の法を得たりと謂ひて、無識を誑惑し、恐して失心せしむ。所過の處に、其家耗散す。我比丘に敎へて、方に循つて乞食せしむることは、其をして貪を捨てゝ菩提の道を成ぜしめ

んとなり。諸の比丘等、自ら熟食せざることは、殘生を旅泊の三界に寄せて、一たび往還することを示す、去りぬれば返ること無し。云何ぞ賊人、我が衣服を假りて如來を稗販し、種種の業を造つて、皆佛法なりと言つて、却つて出家具戒の比丘を非りて、小乘の道と爲し、是に由つて無量の衆生を疑誤して、無間獄に墮せしめん。若し我が滅後に、其れ比丘ありて、發心決定して三摩提を修せんとき、能く如來の形像の前に於て、身に一燈を然し、一指の節を燒き、及び身上に於て一の香炷を爇かば、我は說かん、是の人無始の宿債、一時に酬ひ畢つて、長く世間を揖し、永く諸漏を脫して、未だ卽ち無上覺路に明らかならずと雖も、是の人法に於て已に決定の心なりと。若し此の捨身の微因を爲さゞれば、縱ひ無爲を成ずれども、必らず還つて人に生れて其宿債を酬ふこと、我が〔一〇〕馬麥の如くに正に等ふして異なること無けん。汝世人に教へて、三摩地を修せしめんには、後に偸盜を斷せしめよ。是を如來と先佛世尊との第三決定淸淨の明誨と名く。是の故に阿難よ、若し偸を斷せずして禪定を修する者は、譬へば人ありて、水を漏巵に灌て其滿つることを求めんと欲するが如し。縱ひ塵劫を經るとも終に平復すること無けん。若し諸の比丘、衣鉢の餘をば分寸も畜へざれ、乞食の餘をば分つて餓ゑたる衆生に施せ。大集會に於ては、合掌して衆

【一〇】馬麥とは、釋尊過去の宿債によりて馬麥を食するの厄に逢へるをいふ。

を禮し、人ありて捶ち詈るとも、稱讃に同じくして、必らず身心をして二倶に捐捨し、身肉骨血衆生と共ならしめよ。如來不了義の說を將て廻らして己が解と爲して、以て初學を誤らしめざれ。佛は是の人を眞の三昧を得ると印す。我が所說の如きを名けて佛說と爲す。此の如く說かざるは卽ち波旬の說なり。

阿難よ、是の如く世界六道の衆生は、則ち身心に殺盜婬なくして、三行已に圓なりと雖も、若し大妄語すれば、卽ち三摩提清淨なることを得ず、(一)愛見の魔と成りて如來の種を失ふ。謂ゆる未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證したりと謂ひ、或は世間に尊勝第一ならんことを求めて、前の人に謂つて、我れ今已に(二)須陀洹果、斯陀含果、阿那含果、阿羅漢道、辟支佛乘、十地地前の諸住の菩薩を得たりと言つて、彼が禮懺を求め、其供養を貪る。是れ(三)一顚迦として、佛種を銷滅すること、人の力を以て(四)多羅木を斷るが如し。佛是人を記したまふ、永く善根を殞して知見に復ること無く、(五)三苦の

【一】愛見の魔とは我を執するよりして起る煩惱魔をいふ。見に因りて愛を生じ、愛に因りて諸の邪業を生じ、遂に如來の種子を失ふに至る。

【二】須陀洹云云とは、須陀洹より阿羅漢道までは、聲聞の修證する四果位をいひ、辟支佛乘は、緣覺の果位をいふ、倶に前に出づ。十地々前の菩薩とは十住、十行、十廻向の三賢位をいふ。

【三】一顚迦は前に出づ。卽ち闡提無佛性の徒なり。

【四】多羅木(Tala タラ)。具には貝多羅といふ。印度の植物の名なり。一たび切斷すれば再び發芽せざるを以て、佛種を斷する者の正覺に復ること難きに喩ふ。

【五】三苦とは、苦苦、壞苦、行

海に沈んで三昧を成ぜじと。我が滅度の後に、諸の菩薩及び阿羅漢に勅して、應身して彼の末法の中に生じ、種種の形と作つて、諸の輪轉を度せしむ。或は沙門、白衣の居士、人王、宰官、童男、童女と作り、是の如く乃至婬女、寡婦、奸偸、屠販、其と事を同うして佛乘を稱讃し、其をして身心三摩地に入らしむ。終に自ら我は眞の菩薩、眞の阿羅漢なりと言つて、佛の(二六)密因を泄らして輕く、末學のものに、唯命終のとき、陰かに遺付あるをば言はず。云何ぞ是の人、衆生を惑亂して大妄語を成ぜん。汝世人に敎へて三摩地を修せしめんには、後に復た諸の大妄語を斷除せしめよ。是を如來と先佛世尊との第四決定淸淨の明誨と名く。是の故に阿難よ、若し其大妄語を斷ぜざる者は、人の糞を刻んで栴檀の形と爲して、香氣を求めんと欲するが如し。是の處あること無けん。我比丘に敎へて、直心を道場として、(二七)四威儀一切の行の中に於いて、尙ほ虛假なからしむ。云何ぞ自ら上人の法を得たりと稱せん。譬へば窮人の妄に帝王と號して、自ら誅滅を取らんが如し。況や復法王、如何ぞ妄に竊まん。因地直からざれば、果紆曲を招く。佛の菩提を求むるとも、臍を噬むの人の如くなら

苦なり。身は苦の緣より生じて衆苦を受く、故に苦苦といひ、樂受壞るゝとき苦を受く、之を壞苦といひ、世間の無常遷流する、是れ行苦なり。

【二六】密因とは、唯だ聖のみ自ら證する佛の秘密因緣をいふなり。

【二七】四威儀とは、行、住、坐、臥、悉く佛祖の示訓に契ひ、律儀を失はざることをいふなり。

ん、誰か成就せんと欲する。若し諸の比丘、心直絃の如くならば、一切眞實にして、三摩提に入るに永く魔事なけん。我是の人は、菩薩の無上知覺を成就すと印す。我が所說の如きを名けて佛說と爲す、此の如く說かざるは即ち波旬の說なり。

卷の第七

阿難よ、汝攝心を問ふ。我いま先づ三摩地に入る修學の妙門を說かんに、菩薩の道を求むるには、要らず、先づ此の（一）四種の律儀を持つべし。皎きこと氷霜の如くなれば、自ら一切の枝葉を生ずること能はず、（二）心三口四生ずること必らず因なけん。

阿難よ、是の如きの四事若し遺失せずんば、心尚ほ色香味觸を緣ぜず、一切の魔事云何ぞ發生せん。若し（三）宿習ありて滅除すること能はざれば、汝是の人に敎へて、一心に我が（四）佛頂光明摩訶薩怛多般怛羅無上神咒を誦せしめよ。斯は是如來の（五）無見頂相の無爲の心佛の頂より發輝し、寶蓮華に坐して說く所の（六）心咒なり。且く汝が宿世に摩登伽と歷劫の因緣恩愛の習氣あり、是れ一生及び一劫に非ず。我一たび宣揚するに、愛心永く脫して阿羅漢と成る。彼尚ほ婬女にして修行に心なけれども、神力冥に資けて速に無學を證せり。云何ぞ汝等

【一】四種の律儀とは、第八卷の末に出でたる四種の決定にして、殺盜婬妄をいふ。

【二】心三口四とは、十惡中の七なり、卽ち心の三は慳貪、瞋恚、邪見をいひ、口の四は綺語、妄語、惡口、兩舌をいふ。此の外、身に三あり、殺生、偸盜、邪婬をいふ。これは第八卷の終に說かれたり。

【三】宿習とは、宿世の習氣をいふ。

【四】佛頂光明摩訶薩云云とは、佛頂は尊勝の義、光明は照破の義にして、佛の無礙圓滿の慧光を以て、無明の宿習を照破するをいふ。摩訶薩等は白傘蓋と譯す。白は淸淨の

在會の聲聞の、最上乘を求むるに、決定して成佛せんこと、譬へば塵を以て順風に揚ぐるが如くにして、何の艱險か有らん。若し末世に道場に坐せんと欲するもの有らば、先づ比丘の清淨の禁戒を持てよ。(而して)要らず當に戒清淨の者、第一の沙門を選擇して、以て其師と爲すべし。若し其れ眞の清淨の僧に遇はずんば、汝が戒律儀必らず成就せじ。戒成じて已後、新淨の衣を著けて香を然き、閑居して此の心佛所說の神呪一百八徧を誦せよ。然して後に結界し、道場を建立して、十方の現住國土の無上如來大悲の光を放つて、來りて其の頂に灌ぎ給はんことを求めよ。阿難よ、是の如く末世の清淨の比丘、若くは比丘尼、白衣の檀越、心に貪婬を滅し、佛の淨戒を持して、道場の中に於て菩提の願を發し、出入澡浴して(七)六時に行道せん。是の如く寐ねずして三七日を經ば、我自ら身を現じて其の人の前に至り、摩頂し安慰して、其れをして開悟せしめん。』阿難、佛に白して言さく、『世尊、我如來の無上の悲願を蒙つて心已に開悟し、自ら修證して無學の道の成ぜんことを知れり。末法の修行のもの道場を建

義、衆盖は物を覆ふの義なり。これ卽ち首楞嚴陀羅尼(神呪)をいふ。

【五】無見頂相の無爲の心佛とは、高くして上なく、深ふして極まりなき、不可思議なる如來自證の法門、卽ち中道第一義諦(無見頂相)の中の、心に欲求する所なく、一切の作業に所作の相なき、天眞の妙用(卽ち無爲の心佛)をいふ。

【六】心呪とは、心を攝めて最も安定ならしむる所の呪文をいふ。

【七】六時とは、朝、晝、暮、晨朝、晡時、夜中のことなれども、要するに間斷なきの意なり。

立せんことは、云何が結界して佛世尊の清淨の軌則に合はん。』

佛、阿難に告げたまはく、『若し末世の人、道場を立てんと願はゞ、先づ雪山の大力の白牛の其山中の肥膩香草を食するを取るべし。此の牛は唯雪山の清水を飮みて其の糞微細なり。其の糞を取りて栴檀に和合して以て其の地に泥るべし。若し雪山に非ざれば其の牛臭穢なり。地に塗るに堪へず、別して平原に於て地皮を穿り去ること五尺已下にして、其の黄土を取つて、上の(八)栴檀、沈水、蘇合、薫陸、鬱金、白膠、青木、零陵、甘松及び鷄舌香に和せよ。此十種を以て、細に羅ふて粉となして、土に合せ、泥と成して以て場地に塗り、方圓丈六八角の壇に爲る。壇心に一の金銀銅木の所造の蓮華を置き、華中に鉢を安ぜよ。鉢中に先づ八月の露水を盛れ、水中に隨つて所有の華葉を安ぜよ。八の圓鏡を取つて、各其の方に安じ花鉢を圍繞せよ。鏡の外には十六の蓮華を建立せよ。十六の香鑪は華に間へて鋪設せよ。香鑪を莊嚴し純ら沈水を燒いて火を見さしむること無れ。白牛の乳を取つて十六の器に置き、乳をもて煎餅を爲りて、並に諸の砂糖、油餅、乳糜、蘇合、蜜薑、純蘇、純蜜を蓮花の外に於て、各十六華の外に圍繞して、以て諸佛及び大菩薩に奉るに、毎に食時を以てせよ。若し中夜に在ては、蜜半升を取り蘇三合を用つて、壇前に別に一の小火爐を安じて、兜樓

【八】栴檀云云は、十種の香の名なり。

婆香を以て香水を煎取して、其の炭を沐浴し然て猛熾ならしめ、是に蘇蜜を投げて、炎鑪の内に於て、燒いて煙をして盡さしめて、佛菩薩に享り、其の四外に徧く幡花を懸けしめよ。壇室の中に於て、四壁に十方の如來及び諸の菩薩の有ゆる形像を敷設せよ。(九)當陽に於て盧舍那を張るべし。釋迦、彌勒、阿閦、彌陀、諸の大變化、觀音の形像と金剛藏とを兼ねて其の左右に安せよ。帝釋梵王烏芻瑟摩並に藍地迦、諸の軍荼利と毘倶胝との四天王等頻那夜迦、門の側に張つて左右に安置せよ。又八鏡を取つて虚空に覆せ懸けて、壇場の中に安ずる所の鏡と方面相對して、其の形影をして重重相涉らしめよ。初七の中に於ては、誠を至して十方の如來、諸の大菩薩、阿羅漢の號を頂禮し、恒に六時に於て、呪を誦し壇を圍り、心を至して行道せよ。一時に常に行ずること一百八徧せよ。第二七の中には、一向に心を專にし、菩薩の願を發して、心に間斷すること無れ。我(一〇)毘奈耶において先より(一一)願敎あり。第三七の中には、十二時に於いて、一向に佛の(一二)般怛羅呪を持せよ。第七日に至つては、十方の如來一時に鏡の光を交へる處に出現して、佛の摩頂を承けん。卽ち道場に於て三摩地を修せば、能く是の如きの末世の修學のものをして、身心明淨なること猶ほ瑠璃の如く

【九】當陽とは、境の中央をいふなり。
【一〇】毘奈耶は前に出づ、卽ち律藏のことなり。
【一一】願敎とは、佛子は常に願を發すべしといふ敎なり。
【一二】般怛羅呪とは、首楞嚴神呪をいふ。

ならしめん。阿難よ、若し此の比丘の本受戒の師、及び同會の中の十比丘等、其中に一の不清淨の者あらば、是の如きの道場多く成就せず。三七の後より端坐安居して一百日を經るに、利根なる者は、座を起たずして須陀洹を得べし。縱ひ其の心身に聖果未だ成ぜずとも、決定して自ら成佛謬らざることを知る。汝道場を問ふ、建立是の如し。』

阿難は佛足を頂禮して、而も佛に白して言さく、『我出家せしより、佛の憍愛を恃みて、多聞を求むるが故に未だ無爲を證せず。彼の梵天邪術の所禁に遭ひて、心は明了なりと雖も力自由ならず、文殊に遇ふに賴りて、我をして解脫せしむ。如來の佛頂神呪を蒙ると雖も、冥に其の力を獲て尙ほ未だ親聞せず。唯願くは大慈重ねて爲に宣說して、此の會の諸の修行の輩を悲救し、末(世)當來の輪廻に在る者に及ぶまで佛の密音を承けて、身意解脫せしめ給へ。』時に會中の一切の大衆、普く皆禮を作して、如來の秘密章句を聞かんことを佇ちたてまつる。

爾の時に世尊、肉髻の中より百寶の光を涌し、光の中に千葉の寶蓮を涌出す。化如來ありて寶華の中に坐して、頂より十道百寶の光明を放ち、一一の光明皆徧く十恒河沙の(三)金剛密迹を示現す。山を擎げ杵を持して虛空界に徧せり。大衆仰ぎ觀て畏愛兼ね抱き、佛の哀祐を求めて、

【三】金剛密迹とは、二人の力士にして佛法の守護神なり。寺院の門に安置せる所の二王と稱する者これなり。

一心に佛の無見頂相より光を放てる如來の、神呪を宣說したまふことを聽けり。

『南無薩怛他蘇伽多耶阿羅訶帝三藐三菩陀寫、薩怛他佛陀俱知瑟尼釤、南無薩婆勃陀勃地薩跢鞞弊、南無薩多南三藐三菩陀俱知南、娑舍囉婆伽僧迦喃、南無盧雞阿羅漢跢喃、南無蘇盧多波那喃、南無娑羯唎陀伽彌喃、南無盧雞三藐伽跢喃、三藐伽波囉底波多那喃、南無提婆離瑟赧南無悉陀耶毘地耶陀囉離瑟赧、舍波奴揭囉訶娑訶娑囉摩他喃、南無跋囉訶摩泥、南無因陀囉耶、南無婆伽婆帝。嚧陀囉耶、烏摩般帝、娑醯夜耶、南無婆伽婆帝、那囉野拏耶。槃遮摩訶三慕陀囉、南無悉羯唎多耶、南無婆伽婆帝、摩訶迦囉耶。地唎般剌那伽囉、毘陀囉波拏迦囉耶、阿地目帝、尸摩舍那泥婆悉泥、摩怛唎伽拏、南無悉羯唎多耶、南無婆伽婆帝、多他伽跢俱囉耶。南無般頭摩俱伽耶。南無跋闍囉俱囉耶。南無摩尼俱囉耶、南無伽闍俱囉耶、南無婆伽婆帝、帝唎茶輸囉西那、波囉訶囉拏囉闍耶、跢他伽多耶、南無婆伽婆帝、南無阿彌多婆耶跢他伽多耶。阿囉訶帝。三藐三菩陀耶、南無婆伽婆帝、阿芻鞞耶、跢他伽多耶。阿囉訶帝、三藐三菩陀耶、南無婆伽婆帝。鞞沙闍耶俱嚧吠柱唎耶、般囉婆囉闍耶、他伽伽多耶、南無婆伽婆帝、三補師毖多、薩憐捺囉剌闍耶、伽他伽多耶。阿囉訶帝、三藐三菩陀耶、南無婆伽婆帝、舍雞野母那曳、跢他伽多耶、阿囉訶帝。三藐三菩陀耶。南無婆伽婆帝、剌怛那雞都囉闍

耶、跢他跢多耶。阿囉訶帝、三藐三菩陀耶、帝瓢南無薩羯唎多、翳曇婆伽婆多、薩怛他伽都瑟尼釤、薩怛多般怛㘕、南無阿婆囉視耽、般囉帝揚岐囉、薩囉婆部多揭囉訶、尼羯囉訶揭伽囉訶尼、跋囉毖地耶叱陀儞、阿伽囉蜜唎柱、般唎怛囉耶儜揭唎、薩囉婆槃陀那目叉尼、薩囉婆突瑟吒、突悉乏般那儞伐囉尼赭都囉失帝南、羯囉訶娑訶薩囉若闍、毘多崩娑那羯唎、阿瑟吒冰舍帝南、那叉刹怛囉若闍、婆囉薩陀那羯唎、阿瑟吒南、摩訶揭囉訶若闍、毘多崩薩那羯唎、薩婆舍都嚧儞婆囉若闍、呼藍突悉乏雞遮那舍尼、毖沙舍悉怛囉、阿吉尼烏陀迦囉若闍、阿般囉視多具囉、摩訶般囉戰持、摩訶疊多、摩訶帝闍、摩阿稅多闍婆囉、摩訶跋囉槃陀囉婆悉儞、阿唎耶多囉、毘唎倶知、誓婆毘闍耶、跋闍囉摩禮底、毘舍嚧多、勃騰罔迦跋闍囉制喝那阿遮、摩囉制婆般囉質多、跋闍囉檀持、毘舍囉遮、扇多舍鞞提提補視多、蘇摩嚧波、摩訶稅多阿唎耶多囉、摩訶婆囉阿般囉、跋闍囉商羯囉制婆、跋闍囉倶摩唎、倶藍陀唎、跋闍囉喝薩多遮、毘地耶乾遮那摩唎迦、啒蘇母婆羯囉跢那、鞞嚧遮那倶唎耶、夜囉兎瑟尼釤、毘折　婆摩尼遮、跋闍囉迦那迦波囉婆、嚧闍那跋闍囉頓稚遮、稅多遮迦摩囉、刹奢尸波囉婆、翳帝夷帝、母陀囉羯拏、娑鞞囉懺、掘梵都、印兎那麼麼寫。

烏鈝、唎瑟揭拏。般刺舍悉多、薩怛他伽都瑟尼釤、虎鈝、都嚧雍、瞻婆那、虎鈝、都嚧雍、

悉耽婆那、虎許、都嚧雍、波羅瑟地耶三般叉拏羯囉。虎許、都嚧雍、薩婆藥叉喝囉刹娑、羯囉訶若闍、毘騰崩薩那羯囉、虎都、都嚧雍、者都囉尸底南、揭囉訶娑訶薩囉南、毘騰崩薩那囉、虎許、都嚧雍、囉叉、婆伽梵、薩怛他伽都瑟尼釤、波囉點闍吉唎、摩訶娑訶薩囉、勃樹娑訶薩囉室唎沙、俱知娑訶薩尼帝、阿弊提視婆唎多、吒吒甖迦、摩訶跋闍嚧吒囉、帝唎菩婆那、曼茶囉。烏許、莎悉帝薄婆都、麼麼、印兎那麼麼寫。

囉闍婆夜、主囉跋夜。阿祇尼婆夜、烏陀迦婆夜、毘沙婆夜、舍薩多囉婆夜、婆囉斫羯囉婆夜、突瑟叉婆夜。阿舍儞婆夜、阿迦囉蜜唎柱婆夜。陀囉尼部彌劒波伽波陀婆夜、烏囉迦婆多夜、刺闍壇茶婆夜、那伽婆夜、毘條怛婆夜、蘇波囉拏婆夜、藥叉揭囉訶、囉叉私揭囉訶。毘唎多揭囉訶。毘舍遮揭囉訶、部多揭囉訶、鳩槃茶揭囉訶、補丹那揭囉訶、迦吒補丹那揭囉訶、悉乾度揭囉訶。阿播悉摩囉揭囉訶、烏檀摩陀揭囉訶、車夜揭囉訶、醯唎婆帝揭囉訶、社多訶唎南、揭婆訶唎南、嚧地囉訶唎南、牡娑訶唎南、謎陀訶唎南、摩闍訶唎南。闍多訶唎南、視比多訶唎南。毘多訶唎南。婆多訶唎南、阿輸遮訶唎女、質多訶唎女、帝釤薩鞞釤、薩婆揭囉訶南、毘陀耶闍嗔陀夜彌。雞囉夜彌。波唎跋囉者迦訖唎擔、毘陀夜闍嗔陀夜彌。雞囉夜彌、茶演尼訖唎擔、毘陀夜闍嗔陀夜彌、雞囉夜彌、摩訶般輸般怛夜、嚧陀囉訖唎擔、毘陀夜闍嗔

陀夜彌、雞囉夜彌、那囉夜拏訖唎擔、毘陀夜闍嗔陀夜彌、雞囉夜彌、怛埵伽嚧茶西訖唎擔、毘陀夜彌嗔陀夜彌、雞囉夜彌、摩訶迦囉、摩怛唎迦拏訖唎擔、毘陀夜闍嗔陀夜彌、雞囉夜彌、迦波唎迦訖唎擔、毘陀夜闍嗔陀夜彌、雞囉夜彌、闍耶羯囉摩度羯囉、薩婆囉他娑達那訖唎擔、毘陀夜闍嗔陀夜彌、雞囉夜彌、赭咄囉婆耆儞訖唎擔、毘陀夜闍嗔陀夜彌、雞囉夜彌、毘唎羊訖唎知、難陀雞沙囉伽拏般帝、索醯夜訖唎擔、毘陀夜闍嗔陀夜彌、雞囉夜彌、那揭那舍囉婆拏訖唎擔、毘陀夜闍嗔陀夜彌、雞囉夜彌、阿羅漢訖唎擔、毘陀夜闍嗔陀夜彌、雞囉夜彌、毘多囉伽訖唎擔、毘陀夜闍嗔陀夜彌、雞囉夜彌、跋闍囉波儞、具醯夜具醯夜、迦地般帝訖唎擔、毘陀夜闍嗔陀夜彌、雞囉夜彌、囉叉罔、婆伽梵、印兎那麼麼寫。

婆伽梵、薩怛多般怛囉、南無粹都帝、阿悉多那囉刺迦、波囉婆悉普吒、毘迦薩怛多鉢帝唎、什佛囉什佛囉、陀囉陀囉、頻陀囉頻陀囉、嗔陀嗔陀、虎許、虎許、泮吒、泮吒泮吒泮吒泮吒、婆訶、醯醯泮、阿牟迦耶泮、阿波囉提訶多泮、婆囉婆囉陀泮、阿素嚧毘陀囉波迦泮、薩婆提鞞弊泮、薩婆那迦弊泮、薩婆藥叉弊泮、薩婆乾闥婆弊泮、薩婆補丹那弊泮、迦吒補丹那弊泮、薩婆突狼枳帝弊泮、薩婆突澀比唎訖瑟帝弊泮、薩婆什婆唎弊泮、薩婆阿播悉摩囉弊泮、薩婆舍囉婆拏弊泮、薩婆地帝雞弊泮、薩婆怛摩陀繼弊泮、薩婆毘陀耶囉誓遮唎弊泮、闍夜羯囉摩

度羯囉、薩婆囉他娑陀雞弊泮、毘地夜遮唎弊泮、者都囉縛耆儞弊泮、跋闍囉俱摩唎、毘陀夜囉誓弊泮、摩訶波囉丁羊乂耆唎弊泮、跋闍囉商羯囉夜、波囉丈耆囉闍耶泮、摩訶迦囉夜、摩訶末怛唎迦拏、南無娑羯唎多夜泮、毖瑟拏婢曳泮、勃囉訶牟尼曳泮、阿耆尼曳泮、摩訶羯唎曳泮、羯囉檀遲曳泮、蔑怛唎曳泮、嘮怛唎曳泮、遮文茶曳泮、羯邏囉怛唎曳泮、迦般唎曳泮、阿地目質多迦尸摩舍那、婆私儞曳泮、演吉質、薩埵婆寫、麼麼印兎那麼麼寫。

突瑟吒質多、阿末怛唎質多、烏闍訶囉、伽婆訶囉、嚧地囉訶囉、娑婆訶囉、摩闍訶囉、闍多訶囉、視毖多訶囉、跋略夜訶囉、乾陀訶囉、布史波訶囉、頗囉訶囉、婆寫訶囉、般波質多、突瑟吒質多、嘮陀囉質多、藥叉揭囉訶、囉刹娑揭囉訶、閉隷多揭囉訶、毘舍遮揭囉訶、部多揭囉訶、鳩槃茶揭囉訶、悉乾陀揭囉訶、烏怛摩陀揭囉訶、車夜揭囉訶、阿播薩摩囉揭囉訶、宅袪革茶耆尼揭囉訶、唎佛帝揭囉訶、闍彌迦揭囉訶、舍俱尼揭囉訶、姥陀囉難地伽揭囉訶、阿藍婆揭囉訶、乾度波尼揭囉訶、什伐囉堙迦醯迦、墜帝藥迦、怛隷帝藥迦、者突託迦、昵提什伐囉毖釤摩什伐囉、薄底迦、鼻底迦、室隷瑟蜜迦、娑儞般帝迦、薩婆什伐囉、室嚧吉帝、末陀鞞達嚧制劍、阿綺嚧鉗、目佉嚧鉗、羯唎突嚧鉗、揭囉訶揭藍、羯拏輸藍、憚多輸藍、迄唎夜輸藍、末麼輸藍、跋唎室婆輸藍、毖栗瑟吒輸藍、烏陀囉輸藍、羯知輸藍、跋悉帝輸藍、

鄔嚧輸藍、常伽輸藍、喝悉多輸藍、跋陀輸藍、娑房盎伽般囉丈伽輸藍、部多毖跋茶、茶耆尼什婆囉、陀突嚧伽建咄嚧吉知婆路多毘、薩般嚧訶凌伽。輸沙怛囉娑那羯囉、毘沙喻伽、阿耆尼烏陀伽。末囉鞞囉建跢囉。阿伽囉蜜唎咄怛斂部伽、地栗剌吒、毖唎瑟質伽、薩婆那俱囉、肆引伽弊揭囉唎藥叉怛囉芻。末囉視吠帝釤娑鞞釤、悉怛多鉢怛囉、摩訶跋闍嚧瑟尼釤、摩訶般賴丈耆藍夜波突陀舍喻闍那、辮怛隸拏、毘陀耶槃曇迦嚧彌、帝殊槃曇迦嚧彌、般囉毗沱槃曇伽嚧彌、跢姪他、唵、阿那隸、毘舍提鞞囉跋闍囉陀唎、槃陀槃陀彌、跋闍囉謗尼泮。虎𤙖都嚧甕泮、莎婆訶。』

『阿難よ、是の〔四〕佛頂光聚悉怛多般怛羅秘密伽陀微妙の章句は、十方一切の諸佛を出生す。十方の如來は此の〔五〕呪心に因つて、無上正徧智覺を成ずることを得たり。十方の如來は、此の呪心を執つて、諸魔を降伏して、諸の外道を制せり。十方の如來は、此の呪心に乘じて寶蓮華に坐し、微塵の國に應ず。十方の如來は此の呪心を含んで、微塵の國に於て大法輪を轉ず。十方の如來は此の呪心

〔四〕佛頂光聚云云とは、佛の無見頂相は百寶光の聚まる所なるを以て光聚といふ。悉怛多等は白傘蓋と譯す。塵妄に染まざるが故に白といひ、徧く一切の法を覆ふが故に傘蓋といふ。伽陀は前にも出づ、頌の意なり。

〔五〕呪心とは一切の呪の中の精要にして、諸の秘密を攝持するが故に呪心といふなり。

を持して、能く十方に於て（一六）摩頂授記す。（一七）自果未だ成せざるには、亦十方に於て佛の授記を蒙る。十方の如來は此の呪心に依つて、能く十方に於て群苦を拔濟す。謂ゆる（一八）地獄餓鬼畜生、盲聾瘖瘂、怨憎會苦、愛別離苦、求不得苦、五陰熾盛、大小の諸橫は同時に解脫し、賊難兵難、王難獄難、風火水難、飢渴貧窮は、念に應じて銷散す。十方の如來は此呪心に隨つて、能く十方に於て善知識に事へ、四威儀の中に供養すること意の如し。恒沙の如來は、會中に推して大法王子と爲す。十方の如來は此の呪心を行じて、能く十方に於て親因を攝受し、諸の（一九）小乘の機をして、（二〇）秘密藏を聞きて驚怖を生ぜざらしむ。十方の如來は此の呪心を誦して、無上覺を成じ、菩提樹に坐し、大涅槃に入る。十方の如來は此の呪心を傳へて、滅度の後に於て佛法の事を付し、究竟住持し、戒律を嚴淨して悉く淸淨なることを得せしむ。若し我是の佛頂光聚般怛羅呪を說かんに、旦より暮に至るまで、音聲相ひ聯ならん、字句の中間に亦重疊せず、恒沙劫を經とも、終に能

【一六】摩頂授記とは、佛、眞實語を以て其弟子に記莂を授くるをいふ。卽ち斯く斯くの因緣により、未來必ず菩提の果を得べきを說き、人をして之を心に期せしむることなり。

【一七】自果とは、自己の修行によりて顯はるゝところの證果をいふなり。

【一八】地獄餓鬼畜生云云とは、八難所、八苦をいふなり。謂ゆる八難所とは、一には在地獄難、二には在餓鬼難、三には在畜生難、四には在北洲難、五には在長壽天難、六には生盲聾瘖瘂難、七には世智辯聰難、八には生佛前佛後難なり。八苦とは生、老、病、死、の四苦に、怨憎會苦以下の四苦を合したるをいふなり。

【一九】小乘とは、大乘に對して

く盡すこと能はず。亦此の呪を說きて如來頂と名く。汝等有學は、未だ輪廻を盡さず、心を發し誠を至して阿羅漢を取らんに、此の呪を持せずして道場に坐し、其の身心をして諸の魔事に遠ざからしめ「んといふ」は是の處あること無けん。

阿難よ、若し諸の世界、隨所の國土の有ゆる衆生は、國に隨つて生ずる所の樺皮貝葉紙素白氎に、此の呪を書寫して香嚢に貯へよ。是の人心昏くして未だ誦憶すること能はず、或は身上に帶び、或は宅中に書せよ。當に知るべし、是人に其の生年を盡すまで、一切の諸毒害すること能はざる所なり。

阿難よ、我今汝が爲に更に此の呪の世間を救護して、大無畏を得せしめ、衆生の出世間の智を成就することを說かん。若し我が滅後の末世の衆生の、能く自ら誦し若くは他に敎へて誦せしむること有らば、當に知るべし、是の如く誦持する衆生は、火も燒くこと能はず。水も溺らすこと能はず。大毒小毒も害すること能はざる所なり。是の如く乃至龍天魔神精祇魔魅所有の惡呪も皆著すること能はず、心に正受を得ん。一切の呪咀、厭、蠱、毒藥、金毒、銀毒、草木、蟲蛇、萬物の毒氣も、此の人の口に入らば甘露の味と成らん。一切の惡星幷に諸の鬼神、磣心の毒人

いふ。小なる乘物の義にして、自利のみを行じて利他を行ぜざる、小根機なる聲聞緣覺の修する法門をいふなり。

【二】秘密藏とは、秘密微妙の法門にして、卽ち首楞嚴神呪をいふなり。

も、是の如きの人に於ては、惡を起すこと能はじ。毘那夜迦諸の惡鬼王幷に其眷屬も、皆深恩を領じて常に守護を加へん。

阿難よ、當に知るべし、是の呪には常に八萬四千（二）那由他恒河沙倶胝の（三）金剛藏王菩薩の種族あり、一一に皆諸の金剛衆ありて眷屬と爲り、晝夜に隨侍す。設し衆生ありて、散亂の心に於て三摩地に非ずとも、心に憶し口に持せば、是の金剛王は常に彼の諸の善男子に隨從せん。何に況や菩提心を決定せる者をや。此の諸の金剛菩薩藏王の精心、陰速にして彼の識心を發すれば、是の人時に應じて、心能く八萬四千恒河沙劫を記憶し、周徧了知して疑惑なき事を得ん。第一劫より乃至後身までは、生生に藥叉羅刹及び富單那、迦吒富單那、鳩槃茶、毘舍遮等、幷に諸の餓鬼有形無形有想無想、是の如きの惡處に生せず。是善男子、若くは讀若くは誦、若くは書若くは寫、若くは帶し若くは藏めて、諸色をもつて供養せば、劫劫に貧窮下賤不可樂の處に生ぜず。此諸の衆生は、縱ひ其自身に福業を作さずとも、十方の如來は、有ゆる功德を悉く此の人に與へたまふ。是に由つて恒河沙（三）阿僧祇不可說不可

【二】那由他（Nayuta）とは、極めて多き數のことにして、數千萬といひ、千億といひ、萬億といふ。倶胝（Koti）といふも無數量の義なり。

【三】金剛藏王。金剛は堅固の義、藏は包含の義、王は自在の義なり。謂ゆる金剛不壞の性は、萬有を包含して凡べての場合に自在なるをいふ。又は首楞嚴王ともいふなり

【三】阿僧祇とは、前に出づ。即ち無量の義なり。

說劫に於て、常に諸佛と同じく一處に生ずることを得て、無量の功德惡叉聚の如く、同處に熏修して永く分散することなし。是故に能く破戒の人には戒根をして淸淨ならしめ、未だ戒を得ざる者には、戒を得せしめ、未だ精進ならざる者には、精進を得せしめ、智慧なき者には智慧を得せしめ、淸淨ならざる者には速に淸淨を得せしめ、齋戒を持せざる(者)には自ら齋戒を成ぜしむ。

阿難よ、是の善男子、此の呪を持する時、設ひ禁戒を未だ(呪を)受けざるの時に犯すとも、持呪の後には衆の破戒の罪、輕重を問ふことく、一時に銷滅せん。縱ひ酒を飮み（二四）五辛を食噉する種種の不淨を經れども、一切の諸佛菩薩、金剛天仙鬼神は、將て過と爲さず。設ひ不淨破弊の衣服を著くるとも、一行一住悉く同じく淸淨ならん。縱ひ壇を作さず道場に入らず、亦行道せずとも、此の呪を誦持せば、還つて入壇行道の功德に同じし。若し（二五）五逆無間の重罪、及び諸の比丘比丘尼の（二六）四棄八棄を造るとも、此の呪を誦し已らば、是の如きの重業も、猶ほ猛風の沙聚を

【二四】五辛とは、葷菜の類にして、韮、薤、葱、蒜、薑の稱なり。臭氣ありて婬を增し瞋を起さしむるが故に不淨といふなり。

【二五】五逆とは、一に父母を殺し、二に和合僧を破り、三に佛身より血を出し、四に阿羅漢を殺し、五に羯磨僧を破るをいふ。

【二六】四棄八棄とは、四棄は殺、盜、婬、妄、にして專ら比丘(男子の僧)の重罪、八棄は以上の四に比丘尼(女子の僧)の缺陷四種を加へたるをいふ。共に重罪なるが故に、之を犯せば永く佛法と遠ざかるを以て棄といふなり。

吹き散らすが如く、悉く皆滅除して更に毫髪も無からん。
阿難よ、若し衆生ありて、無量無數劫より來、有ゆる一切の輕重の罪障、前世より來未だ懺悔に及ばざるも、若し能く此の呪を讀誦し書寫して、身上に帶持し、若くは住處の莊宅園館に安せば、是の如きの積業は、猶ほ湯の雪を消するがごとく。久しからずして皆無生忍を悟ることを得ん。
復次に阿難よ、若し女人ありて未だ男女を生まず、孕まんことを欲求せん者、若し能く至心に斯の呪を憶念し、或は能く身上に此の悉怛多般怛囉を帶せば、便ち福德智慧の男女を生まん。長命を求むる者は即ち長命を得、果報速に圓滿せんことを欲求する者は、速に圓滿することを得ん。身命色力も亦復是の如し。命終の後には願に隨つて十方國土に往生して、必定して邊地下賤に生ぜじ、何に況や雜形をや。
阿難よ、若し諸の國土州縣聚落の飢荒疫癘、或は復た刀兵、賊難、鬪諍、兼ねて餘の一切の厄難の地に、此の神呪を寫して、城の四門并に諸の(二七)支提或は(二八)脫闍の上に安じて、其國土の有ゆる衆生をして此の呪を迎へ奉り、禮拜恭敬して一心に供養せしめ、其人民をして各各に身に

【二七】支提（Caitya）譯して靈廟といひ、意譯して可供養處といふ。卽ち諸佛を安置して供養するに堪へたる處なり。
【二八】脫闍（Dhvaja）とは、城臺高顯の處をいふなり。

佩び、或は各各に所居の宅地に安せしめば、一切の災厄は悉く皆銷滅せん。阿難よ、在在處處の國土の衆生、隨つて此の呪を持たば、天龍歡喜して風雨時に順ひ、五穀豐殷にして兆庶安樂ならん。亦復能く一切の惡星、隨方の變怪を鎭めて、災障起らず、人に橫夭なく、杻械枷鎖も其の身に著かず、晝夜安眠して常に惡夢なからん。

阿難よ、是の娑婆界に八萬四千の災變の惡星あり、二十八の大惡星を上首と爲す。復た八の大惡星ありて以て其の主たり。種種の形と作つて世に出現する時、能く衆生の種種の災異を生ずるとも、此の呪の有る地は悉く皆銷滅せん。十二(二九)由旬結界の地と成つて、諸惡災祥永く入ること能はず。是の故に如來は、此の呪を宣示して、未來世に於て初學を保護す。諸の修行者の三摩提に入らんに、身心泰然として大安穩を得て、更に一切の諸魔鬼神、及び無始より來の寃橫、宿殃、舊業、陳債、來つて相惱害すること無からん。汝、及び衆中の諸の有學の人、及び未來世の諸の修行の者、我が壇場に依つて、如法に戒を持し、所受の戒主、清淨の僧に逢ふて、此の呪心に於て疑悔を生せざらん。是の善男子、此の父母所生の身に於て心通を得ずんば十方の如來は便ち妄言(者)と爲りたまはん。』是語を說き已つて會中の無量百千の(三〇)金剛、一時に

【二九】由旬(yojana)とは、印度に於ける里數にして、四十里又は三十里を一由旬と云ふ。

【三〇】金剛とは、金剛力士にして即ち佛法の守護神なり。

佛の前に合掌頂禮して、而も佛に白して言さく、『佛の所說の如し、我當に誠心に是の如きの菩提を修する者を保護すべし。』

爾の時に梵王幷に天帝釋、四天大王は、亦佛前に於て同時に頂禮して、而も佛に白して言さく、『審に是の如きの修學の善人あらば、我當に心を盡し誠を至して保護し、其れをして一生の所作願の如くならしむべし。』

復た無量の藥叉大將、諸の羅刹王、富單那王、鳩槃茶王、毘舍遮王、頻那夜迦諸の大鬼王、及び諸の鬼師ありて、亦佛前に於て合掌頂禮して、而も佛に白して言さく。『我亦誓願す、是の人を護持して、菩提心をして速に圓滿することを得せしめん。』

復た無量の日月天子、風師、雨師、雲師、雷師幷に電伯等、年歲巡官諸星の眷屬ありて、亦會中に於て、佛足を頂禮して而も佛に白して言さく、『我亦是の修行の人を保護して、道場を安立せんに、所畏なきことを得せしめん。』

復た無量の山神海神、一切の土地水陸空行、萬物の精祇幷に風神王、無色界の天ありて、如來の前に於て、同時に稽首して而も佛に白して言さく、『我亦是の修行の人を保護して、菩提を成ずるを得るまで、永く魔事なからしめん。』

爾の時に八萬四千那由他恒河沙倶胝金剛藏王菩薩、大會の中に在り、卽ち座より起つて而も佛に白して言さく、『世尊、我等が輩の如きは、所修の功業久しく菩提を成ずれとも、涅槃を取らず、常に此の呪に隨つて、末世の三摩提を修する正修行の者を救護せん。世尊、是の如く心を修して正定を求むる人、若くは道場に在り、及び餘の經行乃至散心にして聚落に遊戲せんに、我等が徒衆、常に當に隨從して此人を侍衞すべし。縱令魔王大自在天、其の方便を求むるも、終に得べからず。諸の小鬼神此の善人を去ること十由旬の外ならん。彼の發心して修禪を樂ふ者をば除く。世尊、是の如きの惡魔若くは魔の眷屬、來つて是の善人を侵擾せんと欲せば、我寶杵を以て其の首を殞碎すること猶ほ微塵の如くせん、恒に此の人をして所作願の如くならしめん。』

阿難、卽ち座より起ち、佛足を頂禮して而も佛に白して言さく、『我が輩愚鈍にして好んで多聞を爲し、諸漏の心に於て未だ出離を求めず、佛の慈誨を蒙り、正しく熏修することを得て、身心快然として大饒益を獲たり。世尊、是の如く佛の三摩提を修證して、未だ涅槃に到らざるに、云何なるをか名けて(三)乾慧の地四十四

【三】**乾慧の地四十四心**とは、菩薩修行の位階なり。普通に十信、十住、十行、十廻向、十地、等覺、妙覺の五十二位を立つれども、此經には更に乾慧地と四種の加行を加へて五十七位を立つ。乾慧とは最初の因にして、斷惑の智を起すをいふ、卽ち欲念乾き盡きて本具の智慧明なるの義。四十四心は信、住、行、向の四十位に煖、頂、忍、世第一の四加行を合せていふなり。

心と爲す、何の漸次に至つてか修行の日を得る、何の方所に詣つてか【三二】地中に入ると名くる、云何なるをか名けて【三三】等覺の菩薩と爲す。』是の語を作し已つて五體を地に投げ、大衆一心に佛の慈音を佇ちたてまつり、瞪瞢瞻仰す。

爾の時に世尊、阿難を讃して言はく、『善哉善哉、汝等乃ち能く普く、大衆、及び諸の末世の一切衆生の、三摩提を修し大乘を求むる者の爲に、凡夫より大涅槃に終るまで、懸に無上正修行の路を示さんとす。汝今諦に聽け、當に汝が爲に說くべし。』〔時に〕阿難大衆、掌を合せ、心を刳うして、默然として敎を受く。

佛の言はく、『阿難よ、當に知るべし。妙性は圓明にして諸の名相を離れたり、本來世界と衆生とあること無し。妄に因つて生あり、生に因つて滅あり、生滅を妄と名け、妄を滅するを眞と名く。是を如來の無上菩提及び大涅槃【三四】二轉依の號と稱す。

阿難よ、汝今眞の三摩地を修し、直に如來の大涅槃に詣らんと欲せ

【三二】地中とは、五十七位の中十向の上に位する十地の菩薩位の中をいふ。前の住、行、向を三賢位と稱するに對して、十地を十聖位といふ。地と名くるは大地の動かざるが如く、又萬物を生長するが如く、此地の菩薩はよく佛智を生長し住持して、且つ衆生を出離せしむるが故なり

【三三】等覺とは、十地最終の位に於て、更に一品の無明を斷じたる位の名にして、妙覺に至るには更に一品の無明を斷ぜざるべからざるも、因地に於ては最上位なり。等は等齊の義にして、佛因地の「サトリ」に等しきを以て等覺といふなり

【三四】二轉依の號とは、菩提と涅槃なり。轉依は依りどころ

ば、先づ當に此の衆生と世界との二顚倒の因を識るべし。顚倒生ぜずんば、斯れ則ち如來の眞の三摩地なり。

阿難よ、云何をか名けて衆生の顚倒と爲す。阿難よ、性明の心性は明圓なるに由るが故に、明に由つて性を發すれば、性より妄見生じて、(三五)畢竟の無より畢竟の有を生ず。此の有と所有と非因を所因とすれば、住と所住との相は了に根本なし。此の無住を本として、世界及び諸の衆生を建立す。本の圓明に迷うて是の虚妄を生ず、妄性體なければ所依あるに非ず。將眞に復せんと欲して眞を欲ふは、已に眞の眞如の性に非ず、非眞に復を求むれば、宛として非の相を成ず。非の生、非の住、非の心、非の法、展轉發生して、生力發明すれば、熏じて以て業を成ず。同業相感じ、感業あるに因つて、相滅し相生ず。是に由るが故に衆生の顚倒あり。

阿難よ、云何をか名けて世界の顚倒と爲す。是の有と所有と分段妄に生ず、此に因つて界立し、非因にして所因たり、無住にして所住たり、遷流して住まらざれば、此に因つて世成ず。三世四方和合相涉すれば、變化の衆生も(三六)十二類を成ず。是の故に世界は、動に因つて聲あり、聲に

を轉ずるの意なり。即ち菩提涅槃は、迷妄の所依を轉じて悟の所依と爲るが故に轉依といふ。

【三五】畢竟の無云云とは、心性の本體は本來空寂にして畢竟無相なれども、妄に因つて忽ち相を生ずるをいふ。

【三六】十二類とは、下に説くところの卵生胎生より非無想に至る衆生の變生をいふ。

因つて色あり、色に因つて香あり、香に因つて觸あり、觸に因つて味あり、味に因つて法を知る。六(境)妄想に亂して業性と成るが故に、十二區に分る、此に由つて輪轉す。是の故に世間の聲香味觸、十二の變を窮めて一の旋復を爲す。此の輪轉顚倒の相に乘ずるが故に、是れ世界の卵生胎生濕生化生、有色無色有想無想若くは非有色若くは非無色、若くは非有想若くは非無想あり。

阿難よ、世界の虚妄輪廻の動顚倒に由り因るが故に、氣に和合して八萬四千の飛沈の亂想を成す。是の如きの故に卵の(三七)羯邏藍あり、國土に流轉して、魚鳥龜蛇其類充塞せり。世界の雜染輪廻の欲顚倒に由り因るが故に、滋に和合して八萬四千の横竪の亂想を成ず。是の如きの故に胎の(三八)遏蒲曇あり、國土に流轉して、人畜龍仙其類充塞せり。世界の執著輪廻の趣顚倒に由り因るが故に、煖に和合して八萬四千の翻覆の亂想を成ず。是の如きの故に濕相の蔽尸あり、國土に流轉して、含蠢蠕動其類充塞せり。世界の變易輪廻の假顚倒に由り因るが故に、觸に和合して八萬四千の新故の亂想を成ず。是の如きの故に化相の羯南あり、國土に流轉し、轉蛻飛行其類充塞せり。世界の留礙輪廻の障顚倒に由り因るが故に、著に和合して八萬四千の精耀の亂想を成ず。是の如きの故に色相の羯南あり、國土に流轉し、休咎精明其類充塞せり。世界の銷散輪廻の惑顚倒に由り因るが故に、暗に和合して八萬

【三七】羯邏藍は前に出づ。
【三八】遏蒲曇は前に出づ。

四千の陰隱の亂想を成ず。是の如きの故に無色の羯南あり、國土に流轉して、空散銷沈其類充塞せり。世界の罔象輪廻の影顚倒に由り因るが故に、憶に和合して八萬四千の潛結の亂想を成ず。是の如きの故に想相の羯南あり、國土に流轉す、神鬼精靈其類充塞せり。世界の愚鈍輪廻の癡顚倒に由り因るが故に、頑に和合して八萬四千の枯槁の亂想を成ず。是の如きの故に無想の羯南あり、國土に流轉して、精神化して土木金石と爲り、其類充塞せり。世界の相待輪廻の僞顚倒に由り因るが故に、染に和合して八萬四千の因依の亂想を成ず。是の如きの故に、色相あるに非ずして色を成ずる羯南ありて、國土に流轉し、諸の水母等、蝦を以て目と爲る其類充塞せり。世界の相引輪廻の性顚倒に由り因るが故に、呪に和合して四萬四千の呼召の亂想を成ず。是に由るが故に、色相なきに非ずして色なき羯南あり、國土に流轉し、呪詛厭生其類充塞せり。世界の合妄輪廻の罔顚倒に由り因るが故に、異に和合して八萬四千の廻互の亂想を成ず。是の如きの故に、想の相あるに非ずして想を成ずる羯南ありて、國土に流轉し、彼の蒲蘆等の異質相成じて其類充塞せり。世界の怨害輪廻の殺顚倒に由り因るが故に、恠に和合して八萬四千の食父母の想を成ず。是の如きの故に、想の相なきに非ずして想なき羯南ありて國土に流轉す。土梟等の塊に附て兒と爲し、及び破鏡鳥の毒樹の果を以て、抱きて其子と爲して、子成ずれば父母皆其食に遭ふが如く、

なる其類充塞せり。是を衆生の十二種類と名く。

巻の第八の一

阿難よ、是の如きの衆生は、一一の類の中に亦各に十二の顚倒を具す。猶ほ目を捏るに亂華の發生するが如く、妙圓眞淨の明心に顚倒して、斯の如きの虚妄の亂想を具足す。汝今佛の三摩提を修證せんとならば、是の本因の元より亂想せる所に於て、三の漸次を立てゝ方に除滅することを得ん。淨器の中に毒蜜を除去して、諸の湯水並に雜灰香を以て、其器を洗滌して後に甘露を貯るが如し。云何なるをか名けて三種の漸次と爲す。一には修習して其助因を除き、二には眞修して其正性を刳くし、三には增進して其現業に違す。

云何なるか助因。阿難よ、是の如き世界の十二種の生は、自ら全ふすること能はず、四食に依つて住す。謂ゆる(四食とは)段食、觸食、思食、識食なり。是の故に佛、一切衆生は皆食に依つて住すと說き給ふ。阿難よ、一切衆生は、甘を食するが故に生じ、毒を食するが故に死す。是の諸の衆生、三摩提を求めんとならば、當に世間の五種の辛菜を斷ずべし。是の五種の辛は、熟せるを食すれば婬を發し、生を啖ては恚を增す。是の如きの世界の辛を食する人は、縱ひ能く十二部經を宣說するとも、十方の天仙は其の臭穢を嫌うて、咸く皆遠離す。諸の餓鬼等は、彼の食

の次に因つて其脣吻を舐り、常に鬼と與に住すれば、福德日に銷して長く利益なし。是の辛を食する人は、三摩地を修するとも、菩薩天仙十方の善神は、來つて守護せず。大力の魔王は其方便を得て、佛身を現作して來りて爲に法を說き、禁戒を非毀し、婬怒癡を讃ず。命終れば自ら魔王の眷屬と爲り、魔福を受くること盡きぬれば無間獄に墮す。阿難よ、菩提を修する者は、永く五辛を斷ず、是を則ち名けて第一增進修行の漸次と爲す。

云何なるか正性。阿難よ、是の如きの衆生、三摩地に入るには、要らず先づ清淨の戒律を嚴持し、永く婬心を斷じ、酒肉を食せず、火を以て食を淨めて、生氣を啖ふこと無かれ。阿難よ、是の修行の人、若し婬及び殺生とを斷ぜずして、三界を出づといはば、是の處あること無けん。當に婬欲を觀ずること猶ほ毒蛇の如くし、怨賊を見るが如くすべし。先づ聲聞の四棄八棄を持して身を執つて動かず、後に菩薩清淨の律儀を行じて、心を執つて起さゞれ。禁戒成就すれば、則ち世界に於て永く相生相殺の業なく、偸劫行はれざれば、相ひ負累すること無し。亦世界に於て、宿債を還さず、是の清淨の人三摩地を修するに、父母の肉身にして天眼を須ゐざれども、自然に十方世界を觀見し、佛を覩、法を聞きて親しく聖旨を奉け、大神通を得て十方界に遊び、宿命清淨にして艱險なきことを得、是を則ち名けて第二の增進修行の漸次と爲す。

云何なるか現業。阿難よ、是の如く淸淨に禁戒を持する人は、心に貪婬なし。外の六塵に於て、多く流逸せず。流逸せざるに因つて、元に旋つて自ら歸す。塵既に緣せざれば、根は偶ふ所なし。流を反して全く一なれば、六用行ぜず。十方の國土皎然として淸淨なること、譬へば琉璃の内に寶月を懸けたるが如し。身心快然妙圓平等にして大安隱を獲たり。一切如來の密圓淨妙は、皆其中に現ず。是の人は卽ち無生法忍を獲ん。是の漸次より、所發の行に隨つて聖位を安立す。是を則ち名けて第三の增進修行の漸次と爲す。

阿難よ、是の善男子は、欲愛乾枯して根境偶はざれば、現前の殘質復た續て生ぜず。心を執つて虛明にして、純ら是れ智慧なり。慧性明圓にして十方界に瑩き、乾きて其慧のみ有れば乾慧地と名く。欲習初めて乾きて、未だ如來の法流の水と接はらず。卽ち此の心を以て、(一)中中流入して圓妙開敷し、眞の妙圓より重ねて眞の妙を發す。妙信常住にして、一切の妄想滅盡して餘りなく、中道純眞なるを信心住と名く。眞住明了なれば、一切圓通して、(二)陰處界の三は礙と爲ること能はず。是の如く乃至過去未來無數劫の中に、身を捨て身に受くる一切の習氣、皆前に現在す。是の善男子、皆

【一】中中流入とは、乾慧の菩薩は一切二邊の相を離るゝが故に、其智中道の理に合するを中中といひ、此の智念々相繼いで任運にして上位に進むを流入といふなり。

【二】陰處界とは五陰、十二處、十八界をいふなり。

能く憶念して遺忘なきことを得るを念心住と名く。妙圓純眞にして眞精の化を發す、無始の習氣通じて一の精明のみなり。唯精明を以て眞淨に進趣するを精進心と名く。心精現前して、純ら智慧を以てするを慧住と名く。智明を執持し、周徧寂湛にして寂妙常凝なるを定心住と名く。定光發明して明性深く入り、唯進んで退くこと無きを不退心と名く。心身安然として保持して失はず、十方の如來の氣分と交接するを護法心と名く。覺明保持して、能く妙力を以て佛の慈光を廻らし、佛に向ひて安住すること、猶ほ雙鏡の光明相對するに、其中に妙影重重に相入するが如くなるを廻向心と名く。心光密に廻らして佛の常凝無上の妙常を獲無爲に安住して遺失なきを得るを戒心住と名く。戒に住すること自在にして、能く十方に遊び。去る所、願に隨ふを願心住と名く。

阿難よ、是の善男子は、眞の方便を以て此の十心を發す。心精輝を發して十用涉入し、一心に圓成するを發心住と名く。心中發明せることは、淨琉璃の内に精金を現ずるが如く、前の妙心を以て履んで以て地を成するを治地住と名く。心地涉知して俱に明了なることを得、十方に遊履するに留礙なきことを得るを修行住と名く。行と佛と同うして、佛の氣分を受くることは、(三)中陰の身の自ら父母を求むるが如く。陰信冥通して如來の種に入るを生貴

【三】中陰とは、人死して後、次の生を受くるまでの中間を云ふ。又は死有より生有に至る中間にして、之を中有と名く。

住と名く。既に道胎に遊んで、親しく覺胤を奉くること、胎の已に成じて人相の缺げざるが如くなるを方便具足住と名く。容貌佛の如くにして、心相亦同じきを正心住と名く。身心合成して、日に益增長するを不退住と名く。㈣十身の靈相一時に具足するを童眞位と名く。形成り胎を出でて、親しく佛子と爲るを法王子住と名く。表するに成人せるを以て、國の大王、諸の國事を以て太子に分委し、彼の刹利王の世子、長成すれば灌頂を陳列するが如くなるを、灌頂住と名く。

阿難よ、是の善男子、佛子と成り已つて、無量の如來の妙德を具足して、十方に隨順するを歡喜行と名く。善く能く一切衆生を利益するを饒益行と名く。自覺覺他、違拒なきを得るを、無瞋恨行と名く。種類を出生して未來際を窮め、三世平等にして十方通達するを無盡行と名く。一切合同して、種種の法門差悞なきことを得るを離癡亂行と名く。則ち同の中に於て群異を顯現し、一一の異相に各各同を見るを善現行と名く。是の如く乃至十方の虛空に滿足せる微塵の、一一の塵の中に、十方界を現じて、現塵現界相留礙せざるを無著行と名く。種種に現前する、咸く是れ㈤第一の波羅密多なるを尊重行と名く。是の如く圓融し

【四】十身の靈相とは、佛の具する十種の身相をいふなり。一に衆生身、二に國土身三に業報身、四に聲聞身、五に緣覺身、六に菩薩身、七に如來身、八に智身、九に法身、十に虛空身これなり。

【五】第一の波羅密多とは、菩薩の修行する六度の中の般若をいふ。般若は智慧と譯し、波羅密多は度と譯するなり。

て、能く十方諸佛の軌則を成ずるを善法行と名く。一一に皆是れ清淨無漏一眞無爲にして、性の本然なるが故に眞實行と名く。

阿難よ、是の善男子、神通を滿足し、佛事を成じ已つて、純潔精眞にして、諸の留患に遠ざかり、衆生を度するに當つて度の相を滅除し、無爲の心を廻らして涅槃の路に向ふを、救一切衆生、離衆生相廻向と名く。其壞すべきを壞して、諸離を遠離するを不壞廻向と名く。本覺湛然として、覺佛覺に齊きを、等一切佛廻向と名く。精眞發明して、地、佛地の如くなるを一切處廻向と名く。世界と如來と互に相涉入して、罣礙なきことを得るを、無盡功德藏廻向と名く。(六)同佛地地の中に於て、各に清淨の因を生じ、因に依りて涅槃を取る道を發揮するを、隨順平等善根廻向と名く。眞根旣に成ずれば、十方の衆生は皆我が本性なり、性圓成就して衆生を失はざるを、隨順等觀一切衆生廻向と名く。一切の法に卽して一切の相を離る、唯卽と離との二に著する所なきを、眞如相廻向と名く。眞に所如を得て十方無礙なるを、無縛解脫廻向と名く。性德圓成して法界の量滅するを、法界無量廻向と名く。

【六】同佛地地の中とは、前に說く所の地佛地の如しとある至一切處廻向の位をいふ。

阿難よ、是の善男子、是の清淨の四十一心を盡して、次に四種の妙圓の加行を成ず、卽ち佛覺

を以て用ゐて己が心と爲して、出づるが若くにして未だ出でざること、猶ほ火を鑚つて其の木を然かんと欲するが如くなるを、名けて南地と爲す。又己が心を以て佛の所履を成じ、依るが如くにして依るに非ざること、高山に登りて身虚空に入るに、下に微礙あるが如くなるを、名けて頂地と爲す。心佛二ながら同じくして、善く中道を得ること、事に忍ずる人の、懐にも非ず出にも非ざるが如くなるを、名けて忍地と爲す。數量銷滅して、迷覺と中道と二ながら目くる所なきを、世第一地と名く。

巻の第八の二

阿難よ、是の善男子、大菩提に於て善く通達することを得、覺如來に通じ、佛の境界を盡すを歡喜地と名く。異性より同に入る、同性も亦滅するを離垢地と名く。淨極まり明生ずるを發光地と名く。明極まり覺滿つるを焰慧地と名く。一切の同異至ること能はざる所を難勝地と名く。無爲の眞如、性淨明の露るゝを現前地と名く。眞如際を盡すを遠行地と名く。一眞如の心を不動地と名く。眞如の用を發するを善慧地と名く。阿難よ、是の諸の菩薩、此より已往は修習功を畢へ功德圓滿す、亦此の地を目けて修習位と名く。慈陰と妙雲と、涅槃の海を覆ふを法雲地と名く。如來は逆流し、是の如きの菩薩は順行して至り、覺際入交するを等覺と爲す。

阿難よ、乾慧心より等覺に至り已つて、是の覺始めて金剛心の中に獲たり。初め乾慧地より是の如く重重にして(二)單複十二なり、方に(三)妙覺を盡して無上道を成ず。是の種種の地は、皆

【二】單複十二とは、單位に七あり、謂る乾慧、煖、頂、忍、世第一、等覺、妙覺是なり。複位に五あり、即ち信、住、行、向、地にして、一一の位に皆十を具するが故に複といふなり。

【三】妙覺とは、等覺の菩薩更に一品の無明を斷じて入る位にして、佛果をいふ、即ち此經に立つる所の五十七位中の最終にして更に斷ずべき無明なきが故に無上道を成ずといへり。

〔三〕金剛を以て如幻の〔四〕十種の深喩を觀察し、奢摩他の中に諸の如來の〔五〕毘婆舍那を用て清淨に修證し、漸次に深く入る。阿難よ、是の如く皆三の增進を以ての故に、善く能く〔六〕五十五位の眞菩提の路を成就す。是觀を作す者を名けて正觀と爲し、若他觀の者を名けて邪觀と爲す。」

爾の時に文殊師利法王子は、大衆の中に在りて卽ち座より起ち、佛足を頂禮して而も佛に白して言さく、『當に何んが是の經を名くべき。我れ及び衆生は云何が奉持せん。』佛、文殊師利に告げたまはく、『是の經をば大佛頂悉怛多般怛羅無上寶印十方如來清淨海眼と名く。亦は救護親因度脫阿難及び此會中の性比丘尼得菩提心入徧知海と名く。亦は如來密因修證了義と名く。亦は大方廣妙蓮花王十方佛母陀羅尼呪と名く。亦は灌頂章句諸菩薩萬行首楞嚴と名く。汝當に奉持すべし。』

是の語を說き已つて、卽時に阿難及び諸の大衆は、如來の密印般怛囉の義を開示し給ふことを蒙ることを得、兼て此の經の了義の名目を聞きて、頓に〔七〕禪那を悟つて聖位を修進し、妙理を增上して、心慮虛

【三】金剛とは、前に出でたる金剛如幻三昧をいふなり。

【四】十種の深喩とは幻、炎、水月、虛空、響、城、夢、影、像、化をいふ。卽ち一切有爲の諸法は有るが如く無きが如く、畢竟得べきものなきの喩なり。

【五】毘婆舍那（Vjpasyan）とは、觀察の智慧をいふなり。

【六】五十五位とは信、住、行、向、地各々十位を具するを以て五十となし、乾慧、煖、頂、忍、世第一の五を合していふなり。皆是れ因位に屬するを以て、菩提の路と名く、等覺妙覺は果位なればなり。

【七】禪那(Dhyana)は、定、思惟修、靜慮等と譯す。念慮を安靜にして、眞理を思惟するをいふ。

麁にして三界の修心の（八）六品の微細の煩惱を斷除せり。（阿難は）即ち座より起ちて、佛足を頂禮して合掌恭敬して、而ち佛に白して言さく、『大威德世尊は、慈音無遮にして、善く衆生の微細の沈惑を開き、我をして今日身心快然として大饒益を得せしめたまへり。世尊、此の若きの妙明眞淨の妙心は、本來徧圓なり。是の如く乃至大地草木蠕動含靈は本元より眞如なり。即ち是如來成佛の眞體佛體眞實なり、云何してか復た地獄餓鬼畜生修羅人天等の道あらんや。世尊、此の道は復た本來自ら有りとや爲ん、是れ衆生の妄習より生起すとや爲ん。世尊、寶蓮香比丘尼の如きは、菩薩戒を持して私に婬慾を行じ、妄に行婬は殺に非ず偸に非ざれば、業報あること無し」と言ふ。是の語を發し已て、先づ女根より大猛火を生じ、後に節節に於て、猛火燒然として無間獄に墮す。（又）琉璃大王（及び）善星比丘琉璃（の如き）は、（九）瞿曇の族姓を誅するが爲め、善星は妄に一切法空を說きて、生身にして阿鼻地獄に陷入せり。此の諸の地獄は定處ありとや爲ん、復た自然とや爲ん。彼彼業を發して、各各私に受くるとやせん。唯大慈を垂れて童蒙を發開し、諸の一切持戒の衆生をして、決定義を聞きて歡喜頂戴し、謹潔にして犯すこと無からしめたまへ。』

【八】六品の微とは、三界（欲、色、無色）の中欲界に九品の煩惱あり、前六品をいふなり。事相に迷うて無始より引伸に生ずるところの煩惱にして、最も除き難きが故に下に於て微細といふ。

【九】瞿曇は前に出づ、釋迦一族の姓をいふ。

佛阿難に告げたまはく、『快なる哉此問や、諸の衆生をして邪見に入らざらしめんとす。汝今諦に聽け、當に汝が爲に說くべし。阿難よ、一切衆生は、實に本より眞淨なり。彼の妄見に因つて妄習生ずること有り、此に因つて內分と外分とを分開す。阿難よ、(一〇)內分とは卽ち是れ衆生の分內なり。諸の愛染に因つて妄情を發起す、情積んで休まざれば能く愛水を生ず。是の故に衆生、心に珍羞を憶へば、口の中に水出づ。心に前の人を憶ひて、或は憐み、或は恨まば、目の中に淚盈つ。財寶を貪り求めて、心に愛涎を發すれば、體を擧つて光潤す。心行婬に著すれば、男女の二根自然に流液す。阿難よ、諸愛は別なりと雖も、流結は是れ同じ。濡濕して昇らざれば自然に從ひ墜つ。此を內分と名く。

阿難よ、(一一)外分とは卽ち是れ衆生の分外なり。諸の渴仰に因つて虛想を發明す。想積んで休まざれば、能く勝氣を生ず。是の故に衆生、心に禁戒を持すれば、擧身輕淸なり。心に呪印を持すれば、顧眄雄毅なり。心に天に生ぜんことを欲すれば、夢に飛び擧がると想ふ。心に佛國を存すれば、聖境冥に現ず。善知識に事ふれば、自ら身命を輕んず。阿難よ、諸想は別なりと雖も、輕擧は是れ同じ。飛動して沈まざれば、自然に超越す、此を外分と名く。

【一〇】內分とは、內身に著して起る所の感情をいふなり。

【一一】外分とは、外境に對して起る所の意識をいふなり。

阿難よ、一切世間の生死相續することは、生は〔二二〕順習に從ひ、死は〔二三〕變流に從ふ。命終の時に臨んで、未だ煖觸を捨てざるときは、一生の善惡俱時に頓に現じて、死逆生順の二習相ひ交はり、純想なるものは卽ち飛んで必らず天上に生ず。若し飛心の中に福を兼ねて、慧及び淨願とを兼ぬれば、自然に心開けて、十方の佛を見たてまつり、一切の淨土へは願に隨つて往生す。情少く想多きものは、輕擧すること遠きに非ず、卽ち飛仙と、大力の鬼王と、飛行の夜叉、地行の羅刹と爲りて、〔二四〕四天に遊びて、去る所無礙なり。其中に若し善願あるものは、善心をもて我法を護持し、或は禁戒を護つて持戒の人に從ひ、或は神呪を護つて持呪の者に隨ひ、或は禪定を護つて法忍を保綏す。是等は親しく如來の座下に住せり。情想均等にして、飛ばず墜ちざるものは、人間に生じて、想明なれば斯れ聰なり。情幽なれば斯れ鈍なり。情多く想少きものは、〔二五〕橫生に流入して、重きは毛群と爲り、輕きは羽族と爲る。七情三想なれば、水輪より沈下して火際に生ず。氣を猛火に受けて、身餓鬼と爲り、常に焚燒せられて水能く己を害し、食なく飮なくして百千劫を經るなり。九情一想なれば、火輪より

【二二】順習とは、情に順ずるをいふ。卽ち生を欣び死を厭ふは人情にして、情に從つて生の相續するをいふなり。

【二三】變流とは、變易遷流の義にして、死は卽ち情に逆うて變易し、業に牽かれて遷流するをいふなり。

【二四】四天とは、前に出でし四王天をいふなり。

【二五】橫生とは、畜生の異名にして、或は傍生ともいふ。卽ち橫行の衆生といふ義なり。

下り洞りて、身は風火の二交過せる地に入り、輕きは有間に生じ、重きは無間に生ず。二種の地獄あり。純情なれば卽ち（一六）阿鼻地獄に沈む。若し沈心の中に、大乘を謗し、佛の禁戒を毀り、誑妄に法を說き、虛しく信施を食して、濫りに恭敬に膺りて、（一七）五逆十重あるもの有らば、更に十方の阿鼻地獄に生ず。造惡の業に循つて、則ち自ら招くと雖も、（一八）衆同分の中に兼ねて元地あり。阿難よ、此等は皆是れ彼の諸の衆生の自業の所感なり。十習の因を造つて、（一九）六交報を受く。

云何なるをか十(習の)因となす。阿難よ、一には婬習交接して相磨を發し、研磨すること休まず。是の如きの故に大猛火の光中に於て發動すること有り。人の手を以て自ら相磨觸するに、煖相現前するが如し。（二〇）二習相燃ゆるが故に、鐵床、銅柱の諸事あり。是の故に十方一切の如來は、行婬を色目して同く欲火と名く。菩薩は欲を見れば火坑を避くるが如くす。二には貪習交計して相吸を發す。吸攬すること休まず。是の如きの故に積寒堅氷の中に於て、凍洌すること有り。人

【一六】阿鼻地獄（Avīci アヴーチ）は、又阿鼻旨、或は[illegible]ともいふ。無間と譯す。現世の惡業によりて來世に生れて苦痛を受くべき地獄の名なり。其の苦を受くること間斷なきが故に無間といふ。卽ち八熱地獄なり。

【一七】五逆十重。前に出づ。十重は十種の重惡業なり。

【一八】衆同分云々とは、衆は多數の義、分は因の義にて、卽ち無差別をいふ。元地は差別卽ち獨立の義なり。これ同中に異あることを辨じたるものにして、例せば人といふときは同分の所感なれども、貴賤の差あるは別分なるが如し。

【一九】六交報とは、六識六根に從りて業を造り、六根亦た報を受け、業と報と互に交はるをいふなり。

の口を以て風氣を吸ひ縮むるに、冷觸の生ずること有るが如し。二習相淩ぐが故に、【三】吒吒、波波、羅羅、青赤白蓮寒冰等の事あり。是の故に十方一切の如來は、多求を色目して同じく貪水と名く。菩薩は貪を見ること、瘴海を避くるが如し。三には慢習交淩して、相恃を發し、馳流して息まず。是の如きの故に騰逸奔波して積波水を爲すことあり。人の口舌自ら相綿味するに因つて、水の發するが如し。二習相鼓するが故に、血河、灰河、熱沙、毒海、融銅、灌呑の諸事あり。是の故に十方一切の如來は、我慢を色目して、癡水を飲むと名く。菩薩は慢を見ること、巨溺を避くるが如し。四には瞋習交衝して、相忤ふことを發す。忤結して息まざれば、心熱して火を發し、氣を鑄して金を爲す。是の如きの故に、刀山、鐵橛、劍樹、劍輪、斧鉞、鎗鋸あり。人の寃を銜みて殺氣飛動するが如し。二習相擊つが故に宮割、斬斫、剉刺、槌擊の諸事あり。是の故に十方一切の如來は、瞋恚を色目して利刀劍と名く。菩薩は瞋を見ること、誅戮を避くるが如し。五には詐習して相調を發す。引起すること住まらず。是の如きの故に繩木、絞挍あるなり。水の田を浸すとき、草木の生長するが如し。二習相延くが故に、杻械、枷鎖、鞭杖、檛棒の諸事あり。是の故に十方一切の如來は、奸僞を色目して同じく讒

【二】二習とは、根と境と相重涉して習業となるをいふ。

【三】吒吒婆婆云云とは、八寒地獄の苦相。吒吒、婆婆、羅羅は寒へたる者の音聲なり。青赤等は寒へたる者の身體の色をいふなり。

賊と名く。菩薩は詐を見ること、豺狼を畏るゝが如し。六には誑習交欺して相罔を發す、誣罔止まざれば、心を飛ばして奸を造す。是の如きの故に塵土、屎尿、穢汚不淨あり。塵の風に隨つて各所見なきが如し。二習相加ぐが故に、沒溺、騰擲、飛墜、漂淪の諸事あり。是の故に、十方一切の如來は、欺誑を色目して、同じく劫殺と名く。菩薩は誑を見ること、蛇虺を踐むが如し。七には怨習交嫌して銜恨を發す。是の如き故に飛石、投礰、匣貯、車檻、甕盛、囊撲あり。陰毒の人の懷抱に惡を畜ふるが如し。二習相吞むが故に、投擲、擒捉、擊射、拋撮の諸事あり。是の故に十方一切の如來は、怨家を色目して〔三二〕違害鬼と名く。菩薩は冤を見ること、鴆酒を飲むが如し。八には見習交明す。〔三三〕薩迦耶と見と戒禁取と、邪悟との諸業の如きは、〔三四〕違拒を發して相返を出生す。是の如きの故に、王使主吏の文藉を證執すること、行路の人の來往相見るが如し。二習相交はるが故に、勘問、權詐、考訊、推鞫、察訪、披究して照明し、善惡の童子の手に文簿を執つて、諸事を辭辯することあり。是の故に、十方一切の如來は、惡見を色目して、同じく見坑と名く。菩薩は諸の虛妄徧執を見ること、毒壑に入るが如し。九には枉習交

【三二】違害鬼は前に出づ。

【三三】薩迦耶等とは、十使の根本無明中の五利使（身見卽ち薩迦耶、邊見、邪見、見取見、戒禁取見）の中の三を擧げ、邪悟に於て餘の二及び六十二見等を攝したるものなり。利使とは吾人の心を使役すること最も快利なるを以て名く。

【三四】違拒等とは、互に相反したる見解をなすをいふ。

加して誣謗を發す。是の如きの故に合山、合石、碾磑、耕磨することあり。讒賊の人の良善を逼枉するが如し。二習相排す、故に押捺、搥按、蹙漉、衡度の諸事あり。是の故に十方一切の如來は、怨謗を色目して、同じく讒虎と名く。菩薩は枉を見ること、霹靂に遭ふが如し。十には訟習交諠して藏覆を發す。是の如きの故に鑒見照燭すること有り。日中に於て影を藏すこと能はざるが如し。(二習相發するが)故に、惡友、業鏡、火珠の宿業を披露し、諸事を對驗することあり。是の故に十方一切の如來は、覆藏を色目して、同じく陰賊と名く。菩薩は覆を觀ること、高山を戴き巨海を履むが如し。

卷の第八の三

云何なるをか六「交」報となす。阿難よ、一切衆生は、六識業を造つて、招く所の惡報は六根より出づ。云何が惡報六根より出づる。

一には見の報惡果を招引す。此の見業と交はるときは、則ち臨終の時に、先づ猛火十方界に滿つと見、亡者の神識飛墜して、煙に乘じて無間獄に入るとき、二の相を發明す。一には明を見るときは、則ち能く徧く種種の惡物を見て、無量の畏を生ず、二には暗を見るとき、寂然として見ざれば、無量の恐を生ず。是の如く見火聽を燒くには、能く鑊湯洋銅と爲り、息を燒くには能く黑煙紫焰と爲り。味を燒くには能く燋丸鐵糜と爲り、觸を燒くには能く熱灰鑪炭と爲り、心を燒くには能く星火迸灑して空界に煽鼓することを生ず。

二には聞の報惡果を招引す。此の聞業と交はるときは、則ち臨終の時先づ波濤天地を沒溺すと見る。亡者の神識降注して、流に乘じて無間獄に入るとき、この相を發明す。一には聽を開くときは、種種の鬧きことを聽きて精神愁亂す。二には聽を閉づるときは、寂として聞く所なくして幽魄沈沒す。是の如きの聞波聞に注ぐときは、則ち能く責を爲し詰を爲す。見に注ぐときは、

則ち能く雷と爲り吼と爲り、惡毒の氣と爲る。息に注ぐときは則ち能く雨と爲り霧と爲り、諸の毒蟲を洒いで周く身體に滿つ。味に注ぐときは則ち能く膿と爲り血と爲りて、種種の雜穢あり。觸に注ぐときは、則ち能く畜と爲り鬼と爲り、糞と爲り尿と爲る。意に注ぐときは、則ち能く電と爲り雹と爲りて心魄を摧碎す。

三には嗅の報惡果を招引す。此の嗅業と交はるときは、則ち臨終の時先づ毒氣遠近に充塞すと見る。亡者の神識、地より涌出して無間獄に入るとき、二の相を發明す。一には聞を通ずるときは、諸の惡氣を被り、熏ずること極まりて心擾る。二には聞を塞ぐときは氣掩うて通せず、地に悶絶す。是の如きの嗅氣息を衝くには、則ち能く質と爲り履と爲る。見を衝くには、則ち能く火と爲り炬と爲る。聽を衝くには、則ち能く沒と爲り溺と爲り、洋と爲り沸と爲る。味を衝くには則ち能く餒と爲り爽と爲る。觸を衝くには、則ち能く綻と爲り爛と爲り大肉山と爲る。百千の眼あるもの無量にして咂ひ食ふ。思を衝くには、則ち能く灰と爲り瘴と爲り、飛砂礰と爲りて身體を擊碎す。

四には味の報惡果を招引す。此の味業と交はるときは、則ち臨終の時先づ鐵網猛炎熾烈にして周く世界を覆ふと見る。亡者の神識下り透りて網に挂り、倒に其の頭を懸けて無間獄に入るとき、

二の相を發明す。一には氣を吸ふときは結んで寒氷と成り、身肉を凍裂す。二には氣を吐くときは飛んで猛火と爲り、骨髓を燋爛す。是の如きの嘗味嘗に歷るときは、則ち能く承と爲り忍と爲る。見に歷るときは、則ち能く然けたる金石と爲る。聽に歷るときは、則ち能く利き兵刃と爲る。息に歷るときは、則ち能く大鐵籠と爲りて國土に彌覆す。觸に歷るときは、則ち能く弓と爲り箭と爲り、弩と爲り射と爲る。思に歷るときは、則ち能く飛ぶ熱鐵と爲りて、空よりして下る。

五には觸の報惡果を招引す。此の觸業と交はるときは、則ち臨終の時先づ大山四面より來り合して、復た出づる路なしと見る。亡者の神識大鐵城を見るに、火蛇、火狗、虎狼、獅子、牛頭の獄卒、馬頭の羅刹、手に鎗矟を執つて城門に驅け入れ、無間獄に向はしむるとき、二の相を發明す。一には觸を合するときは、合山體を逼めて骨肉血潰す。二には觸を離するときは、刀劍身に觸れて心肝屠裂す。是の如きの合觸、觸に歷るときは、則ち能く道と爲り觀と爲り、廳と爲り案と爲る。見に歷るときは、則ち能く燒と爲り爇と爲る。聽に歷るときは、則ち能く撞と爲り擊と爲り、剚と爲り射と爲る。息に歷るときは、則ち能く括と爲り袋と爲り、考と爲り縛と爲る。嘗に歷るときは、則ち能く耕と爲り鉗と爲り、斬と爲り截と爲る。思に歷るときは、則ち能く墜と爲り飛と爲り、煎と爲り炙と爲る。

六には思の報惡果を招引す。此の思業と交はるときは、則ち臨終の時先づ惡風國土を吹き壞ると見る。亡者の神識空に吹き上げられて、旋り落ちて風に乘じて無間獄に墮つるとき、二の相を發明す。一には覺せずして迷ひ極まるときは、則ち荒れて奔走すること息まず。二には迷はずして覺知するときは則ち苦あり、無量に煎燒せられ、痛み深くして忍び難し。是の如きの邪思、思に結するときは、則ち能く方と爲り所と爲り、見に結するときは、則ち能く鑒と爲り證と爲る。聽に結するときは、則ち能く大なる合石と爲り、氷と爲り霜と爲り、土と爲り霧と爲り、息に結するときは、則ち能く大火車、火船、火檻と爲る。嘗に結するときは、則ち能く大叫喚と爲り、悔と爲り泣と爲り、觸に結するときは、則ち能く大と爲り小と爲り、一日の中萬生萬死することを爲し、偃を爲し仰を爲す。

阿難よ、是を地獄の十因六果と名く。皆是れ衆生の迷妄の所造なり。若し諸の衆生、惡業同じく造れば阿鼻獄に入り、無量の苦を受けて無量の劫を經ん。六根各造れども、彼の作る所に及んで境を兼ね根を兼ぬれば、是の人則ち八無間獄に入り、身口意の三殺盜婬を作せば、是の人則ち十八地獄に入る。三業兼ねずして、中間に或は一殺一盜を爲さば、是人は則ち三十六の地獄に入り、見に見して一根に單に一業を犯さば、是人は則ち一百八の地獄に入る。是れ衆生の別に作

し別に造るに由つて、世界の中に於て同分地に入る。(皆)妄想より發生す。本來有るに非ず。

復た次に阿難よ、是の諸の衆生は、律儀を非破し、菩薩戒を犯し、佛の涅槃を毀る。諸餘の雜業歷劫に燒然し、後に罪を還し畢れば諸の鬼形を受く。若し本因に於て、物を貪つて罪を爲るは、是の人罪畢つて、物に遇うて形を成す。名けて(一)怪鬼と爲す、色を貪つて罪を爲るは、是の人罪畢つて、風に遇うて形を爲す、名けて(二)魃鬼と爲す。惑を貪つて罪を作るは、是の人罪畢つて、畜に遇うて形を爲す。名けて(三)魅鬼と爲す。恨を貪つて罪を爲るは、是の人罪畢つて、蟲に遇うて形を爲す、名けて(四)蠱毒鬼と爲す。憶を貪つて罪を爲るは、是の人罪畢つて、衰に遇うて形を成す、名けて(五)癘鬼と爲す。慠を貪つて罪を爲るは、是の人罪畢つて、氣に遇うて形を爲す。名けて餓鬼と爲す。罔を貪つて罪を爲るは、是の人罪畢つて、幽に遇うて形を爲す。名けて(六)魘鬼と爲す。明を貪つて罪を爲るは、是の人罪畢つて、精に遇う

【一】怪鬼とは、金銀草木の精、物に遇うて怪をなすものなりといふ。
【二】魃鬼とは、風に託して災をなすところの鬼神の類をいふ。
【三】魅鬼とは、狐狸等の年老いたるものに附託して、美形を現じて人を惑はすの類なりといふ。
【四】蠱毒鬼とは、蚰蜒等に附託して人を毒するの類なりといふ。
【五】癘鬼とは、人の衰弱に附込んで以て災をなすもの、世にいふ疫病神の如きをいふ。
【六】魘鬼とは、寐中に入りて人を惑はすもの、惡夢を見て「ウナサレル」ことあるが如きをいふ。

て形を爲す。(七)魑魅鬼と名く。成を貪つて罪を爲るは、是の人罪畢つて、明に遇うて形を爲す、(八)役使鬼と名く。黨を貪つて罪を爲るは、是の人罪畢つて、人に遇うて形を爲す。(九)傳送鬼と名く。阿難よ、是の人は皆純情を以て業火に墜落し、燒き乾かされ、上り出でて鬼と爲る。此等は皆是自[己]の妄想業の招引する所なり。若し菩提を悟れば、則ち妙圓明にして、本より所有なし。

復た次に阿難よ、鬼業既に盡くれば、則ち情と想との二倶に空と成る。方に世間に於て元負はせし人の與に、怨對相値ひ、身畜生と爲りて其の宿債に酬ふ。物怪の鬼は、物銷し報盡きて世間に生まるゝに、多くは梟類と爲る。風魃の鬼は、風銷し報盡きて世間に生まるゝに、多くは(一〇)咎徵の一切異類と爲る。畜魅の鬼は、畜死し報盡きて世間に生まるゝに多くは狐類と爲る。蟲蠱の鬼は、蟲滅し報盡きて世間に生まるゝに、多くは(一一)毒類と爲る。衰癘の鬼は、衰窮り報盡きて世間に生まるゝに、多くは(一二)蛔類と爲る、受氣の鬼は、氣銷し報盡き

【七】魑魅鬼とは、水石の變怪なりといふ。

【八】役使鬼とは、他の爲に身心を使役さるゝもの、例せば鴉は八幡の使者といひ、鼠は大黑天の使者といふの類なるべし。

【九】傳送鬼とは、世に巫覡の類あるが如く、吉凶禍福の言を傳送するものをいふ。

【一〇】咎徵。咎とは過惡の義にして、徵は應驗の義なり。謂ゆる牝鷄の晨鳴きするは、家に不祥ありといふが如く、災害の起らんとするに先だちて、豫め報ずるの類をいふ。

【一一】毒類とは、虺蛇蝮蝎の類をいふ。

【一二】蛔類とは、腹中に生ずる「サナダ」蟲の類をいふ。

て世間に生まるゝに、多くは（一三）食類と爲る。綿幽の鬼は、幽銷し報盡きて世間に生まるゝに、多くは（一四）服類と爲る。和類の鬼は、和銷し報盡きて世間に生まるゝに、多くは（一五）應類と爲る。明靈の鬼は、明滅し報盡きて世間に生まるゝに、多くは（一六）休徴の一切の諸類と爲る。依人の鬼は、人亡じ報盡きて世間に生まるゝに、多くは（一七）循類と爲る。阿難よ、是等は皆業火を以て乾枯せられて、其宿債に酬いんとして旁に畜生と爲る。此等は皆自〔己〕の虛妄の業の招引する所なり。若し菩提を悟れば、則ち此の妄緣本より所有なし。汝が言ふ所の寶蓮香等、及び琉璃王善星比丘が如き、是の如きの惡業は、本自ら發明して、天より降るにも非ず、亦地より出づるにも非ず、亦人の與ふるにも非ず、自〔己〕の虛妄の招く所にして、還つて自ら來りて受く。菩提心の中には、皆浮塵たり、妄想の凝結たるなり。

復た次に阿難よ、是の畜生より先債に酬い償ふに、若し彼の酬ゆる者の酬ゆる所に分越すれば、此等の衆生は、還つて復た人と爲りて、返りて其剩を徴せん。若し彼力あり兼ねて福德あり、則ち人中に於て、人身を捨てざるときは、彼の力を酬い還す。若し福

【一三】食類とは、他の爲に食せらるゝところの畜類をいふ。
【一四】服類とは、人に使用せられ、又は衣用せらるゝ、牛馬及び蠶の類をいふ。
【一五】應類とは、四時の節序に應じて去來するもの、卽ち春燕秋雁の如きをいふ。
【一六】休徴。休は美にして、徴は驗なり。祥瑞の將に至らんとする時先づ現はるゝ、麒麟鳳凰の類をいふ。
【一七】循類とは、卽ち人に狎れ順ふ犬猫の類をいふ。

なき者は、還つて畜生と爲りて、彼の餘直を償ふ。阿難よ、當に知るべし。若し錢物を用ひ、或は其力を役するは、償ひ足りぬれば自ら停る如し。其中間に彼の身命を殺し、或は其肉を食するは、是の如く乃至微塵劫を經て、相食し相誅すること猶ほ輪轉の如く、互に高下と爲りて休息あることなし。奢摩他及び佛の出世を除きては、停り寢むべからず。汝今應に知るべし、彼の梟倫のもの、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、(一八)頑類に(一九)參合す。彼の咎徵のものの、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、(二〇)愚類に參合す。彼の狐倫の者の、酬ひ足りて形を復し、人道の中に生ずる時は、(二一)佷類に參合す。彼の毒倫の者の、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、庸類に參合す。彼の蛔倫の者の、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、(二二)微類に參合す。彼の食倫の者の、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、(二三)柔類に參合す。彼の服倫の者の、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、(二四)勞類に參合す。彼

【一八】頑類とは、頑迷固陋の徒。
【一九】參合　今此畜生より來る者は餘業の招く所にして、人界に生を受くる正因に非ず、僅に仲間入するの意。
【二〇】愚類とは、低[illegible]愚の徒。
【二一】佷類とは狼戾にして人の教訓を用ひず、我が意を恣にするの輩をいふ。
【二二】微類とは、卑賤の者にして卽ち奴僕の細きをいふ。
【二三】柔類とは、柔弱にして自ら事に堪へず、或は他に阿附するの類をいふ。
【二四】勞類とは、勞役に從事して、[illegible]辛自ら甘んずる者。
【二五】文類とは、多少の文筆の才ある者をいふ。
【二六】明類とは、[illegible]明なるもの。
【二七】[illegible]類とは、人世の窮通に

の應倫の者の、酬い足りて形を復し、人道の中に參合するときは、(二五)文類に參合す。彼の休徵の者の、酬ひ足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、(二六)明類に參合す。彼の諸の循倫の者の、酬い足りて形を復し、人道の中に生ずるときは、(二七)達類に參合す。阿難よ、是等は皆宿債畢酬するを以て、形を人道に復せり。皆無始より來かた、(二八)業繫顚倒して相生じ相殺す、如來に遇はず、正法を聞かず、塵勞の中に於て(二九)法爾として輪轉す。此の輩を名けて憐愍すべき者と爲す。

阿難よ、復た人に從つて、正覺に依りて三摩地を修せざる有り、別に妄念を修して想を存し形を固くして、山林の人の及ばざる處に遊ぶものに十種の仙あり。阿難よ、彼の諸の衆生は、服餌を(三〇)堅固にして休息せず、食道圓成するを地行仙と名く。(三一)草木を堅固にして休息せず、藥道圓成するを飛行仙と名く。(三二)金石を堅固にして休息せず、化道圓成するを遊行仙と名く。(三三)動止を堅固にして休息せず、氣精圓成するを空行仙と名く。(三四)津液を堅固にして休息せず、潤德圓成す

達し、龍等にも驚かず、安然として自得するものをいふ。

【二八】業繫。所作の業の相續するをいふ。

【二九】法爾とは、理の當に然るべきをいふ。卽ち人の强て爲さしむるに非ずして、因果の理法に依りて律せらるなり。

【三〇】堅固とは、心に長生を求め想を凝らし身を練つて怠らざるをいふ。

【三一】草木とは、松栢等の實。

【三二】金石とは、丹砂の類。

【三三】動止とは、時の消長、月の盈虛を觀察する等をいふ。

【三四】津液とは、口より生ずる「ツバキ」等の類をいふ。

【三五】精色とは、日月の精氣を呑むこと、謂ゆる霞を喫ひ露を呑むをいふ

【三六】呪禁とは、仙家に於ける

るを天行仙と名く。(三五)精色を堅固にして休息せず、吸粹圓成するを通行仙と名く。(三六)呪禁を堅固にして休息せず、術法圓成するを道行仙と名く。(三七)思念を堅固にして休息せず、思憶圓成するを照行仙と名く。(三八)交遘を堅固にして休息せず、感應圓成するを精行仙と名く。(三九)變化を堅固にして休息せず、覺悟圓成するを絶行仙と名く。阿難よ、是等は皆人中に於いて、心を錬して、正覺を修せず、別に生理を得て、壽千萬歳にして、深山、或は大海島の人を絶せる境に休止す。斯れ亦た輪廻妄想の流轉なり。三昧を修せず、報盡きて、還り來つて、諸趣に散入す。

阿難よ、諸の世間の人、常住を求めず、未だ諸の妻妾の恩愛を捨つること能はず、邪婬の中に於て心流逸せず、澄瑩として明を生ずれば命終の後は、日月に鄰る、是の如きの一類を四天王天と名く。己が妻房に於て、婬愛微薄にして、淨居の時に於て全味することを得ず、命終の後、日月の明を超へて、人間の頂に居す、是の如きの一類を(四〇)

禁厭呪術をいふ。

【三七】思念とは、思想力を錬り堅めるをいふ。

【三八】交遘とは、陰を採り陽を採るの術をいふ

【三九】變化とは、心想を世間の變化の境に存すれば、心想も亦變化に伴うて、遂に心境を絶するをいふ

【四〇】忉利天 (Trāyastriṃśa トラーヤストリンシヤ) 三十三天と譯す、須彌山の頂、閻浮提の上に在りて、帝釋天の領する所なり、又人間の雜穢を離れて清淨の處に居するを以て、淨居天と名く。

【四一】須夜摩天 (Yāma ヤーマ) 時分と譯す、時に欲境に接するも但一時の念にして、戀著の情なきをいふ。

【四二】兜率陀天とは、(Tuṣita ツシタ) 知足と譯す、彌勒等の處の菩

忉利天と名く。欲に逢うて暫く交はるとも、去つて思憶することなく人間の事に於て動少く靜多きものは、命終の後、虛空の中に於て朗然として安住し、日月の光明上り照らすこと及ばず。是の諸人等は、自ら光明あり。是の如きの一類を（四一）須燄摩天と名く。一切の時に靜なれども、應觸ありて來らば未だ違戾すること能はざるものは、命終の後上昇すること精微にして、下界の諸の人天の境に接はらず。乃至刧壞の三災も及ばず。是の如きの一類を（四二）兜率陀天と名く。我は欲心なけれども、汝に應じて事を行ず。（四三）橫陳の時に於て、味ふこと蠟を嚼むが如くなるは、命終の後（四四）越化地に生ず。是の如きの一類を（四五）樂變化天と名く。世間の心なけれども、世に同じて事を行じ、行事交はるときに於て、了然として超越するものは、命終の後徧く能く（四六）化と無化との境を出超す。是の如きの一類を（四七）他化自在天と名く。阿難よ、是の如きの六天は、形は動を出づと雖も、心跡は尙ほ交はれり。此より已還を名けて（四八）欲界と爲す。

薩の香潔なりといふ。

【四三】橫陳とは、自心に欲境を求めざるに、還つて他の誘惑に接するをいふ。

【四四】越化地とは、此天に生ずる者は[illegible]きを以て、欲境を變化すること、下界の無變化の天を超越するをいふ。

【四五】樂變化天とは、五欲の境を變化して心に染着なきを樂むを以て名く。

【四六】化と無化とは、化は第五の樂變化天にして、無化は下の諸天をいふなり。

【四七】他化自在天とは、他の變化するところの欲境に進んで自在なるが故に名く。

【四八】欲界とは、三界の一、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、及六欲天の總稱也、此界の衆生は色、食、睡眠等の諸欲に耽溺するが故に此名あり。

巻の第九の一

阿難よ、世間一切の心を修する所の人は、禪那を假らざれば、智慧あることなし。但能く身を執して婬欲を行ぜず、若くは行若くは坐、想念倶に無くして愛染生ぜざれば、欲界に留まることなし。是の人念に應じて身、梵侶と爲る。是の如きの一類を【一】梵衆天と名く。欲習既に除きて、離欲の心現はれ、諸の律儀に於て愛樂隨順す。是の人時に應じて能く梵德を行ず。是の如きの一類を【二】梵輔天と名く。身心妙圓にして威儀缺けず、禁戒を清淨にして、加ふるに明悟を以てす。是人時に應じて能く梵衆を統べて大梵王と爲る。是の如きの一類を大梵天と名く。阿難よ、此の三の【三】勝流は、一切の苦惱の逼ること能はざる所なり。正しく眞の三摩地を修するに非ずと雖も、清淨の心の中に、諸漏動ぜざれば、名けて【四】初禪（天）と爲す。

阿難よ、其次の梵天は、梵人を統攝し梵行を圓滿して、澄心不動なれば寂湛光を生ず。是の如

【一】梵衆天。梵は清淨の義にして、欲界の愛著已に盡きて、淨相の現はるゝ境界をいふ

【二】梵輔天とは、清淨の戒行を保ちて、互に相輔くるの義に依りて此名あり。

【三】勝流とは、欲界に於ける散亂麁動の心を離れて、清淨無染の境に進むが故に名く。

【四】初禪とは、眞の三摩地の勝定には非ざるも、有漏の禪定を修して至る境界なるを以て此の名あり。

きの一類を（五）少光天と名く。光光相ひ然して照耀盡くること無く、十方界に映じて徧く琉璃と成る。是の如きの一類を（六）無量光天と名く。圓光を吸持して敎體を成就し、發化淸淨にして應用無盡なり。是の如きの一類を（七）光音天と名く。阿難よ、此の三の勝流は、一切の憂愁の逼ること能はざる所なり。正しく眞の三摩地を修するに非ずと雖も。淸淨の心の中に麁漏已に伏すれば、名けて二禪（天）と爲す。

阿難よ、是の如きの天人は、圓光音を成す。音を披き妙を露し、精行を發成して（八）寂滅の樂に通ず。是の如きの一類を（九）少淨天と名く。淨空現前して引發際なく、身心輕安にして寂滅の樂を成ず。是の如きの一類を無量淨天と名く。世界と身心と、一切圓淨にして淨德成就し、（一〇）勝託現前して寂滅の樂に歸す。是の如きの一類を徧淨天と名く。

阿難よ。此の三の勝流は（一一）大隨順を具し、身心安穩にして無量の樂を得。正しく眞の三摩地を修するに非ずと雖も、安穩の心の中に歡

【五】少光天とは、此天は禪定稍勝れたるに依り、智慧の光を生ず、されど慧光尙ほ劣なるが故に此名あり。

【六】無量光天とは、慧光倍明かにして、照らすこと際涯なきが故に名く。

【七】光音天。音は音聲を以て敎を施く義にして、此の天は智慧の光明を敎體となし、之によりて化を發するが故に此名あり。

【八】寂滅の樂とは、無漏涅槃の樂には非ずして、二禪に於ける喜相を滅して、淨樂の生ずるをいふ。

【九】少淨天とは、淨樂を得たるも未だ充分ならざるが故に名く。

【一〇】勝託。勝は淸淨の德にして、託は淸淨の依りどころな

喜畢く具はるを、名けて三禪(天)と爲す。

阿難よ、復た次に、天人は身心を逼めず、苦因已に盡せども、樂常住に非ざれば、久くして必らず壞生ず。苦樂の二心倶時に頓に捨て、(一二)麁重の相滅して淨福の性生ず。是の如きの一類を福生天と名く。(一三)捨心圓融し、勝解清淨にして、(一四)福無遮の中に、妙隨順を得て、未來際を窮む。是の如きの一類を(一五)福愛天と名く。阿難よ、是の天の中に從つて、(一六)二の岐路あり。若し先心の無量淨光より、福德圓明にして、修證して而も住する、是の如きの一類を(一七)廣果天と名く。若し先心に於て、雙べて苦樂を厭ひ、捨心を精研すること相續して斷ずれば、捨道を圓窮して身心倶に滅し、(一八)心慮灰凝して、五百劫を經。是の人既に生滅を以て因と爲れば、不生滅の性を發明すること能はずして、初半劫に滅し、後半劫に生ず。是の如きの一類を(一九)無想天と名く。阿難よ、此の四の勝流は、一切世間の諸の苦樂の境の動ずること能はざる所なり。無爲の眞の不動地に非ずと雖も、(二〇)有所得の

り。謂ゆる清淨の殊勝の妙樂の由りて以て成就するをいふ。

【一一】大隨順とは、三摩地に非ざるも已に之に隨順して、諸の憂喜を離れ、殊勝の妙樂を具して、世間に過ぐるものなきをいふ。

【一二】麁重の相とは、生滅苦樂等の麁障をいふ。

【一三】捨心とは、一切苦樂等の法に於て貪著せざるをいふ。

【一四】福無遮とは、殊勝の見解清淨にして、大自在を得たるが故に福を受くること限り無きをいふ。

【一五】福愛天とは、前の福生天に於て樂とするところの捨心を轉じて、勝解清淨の福となして愛むが故に此名あり。

【一六】二の岐路とは一に直往

心、功用純熟すれば、名けて四禪(天)と爲す。阿難よ、此の中に復た五(二一)不還天あり。下果の中に於て、(二二)九品の習氣倶時に滅盡し、苦樂雙び亡ずれば、下に居を卜することなし。故に捨心の衆同分の中に於て、居處を安立す。阿難よ、苦樂兩ながら滅して、鬪心交はらず。是の如きの一類を(二三)無煩天と名く。機括獨行して、研交地なし。是の如きの一類を(二四)無熱天と名く。十方世界に、妙見圓澄にして、更に塵像一切の沈垢なし。是の如きの一類を善見天と名く。精見現前して、陶鑄無礙なり。是の如きの一類を善現天と名く。群幾を究竟し、色性の性を窮めて、無邊際に入る。是の如きの一類を(二五)色究竟天と名く。阿難よ、此の不還天は、彼の諸の四禪四位の天位、獨り欽ひ聞くこと有れども、知見すること能はず。今の世間の曠野深山は、聖道場の地なれども、皆阿羅漢の住持する所なるが故に、世間の麁人は見ること能はざる所なるが如し。阿難よ、是の十八天は、獨行にして交はることなく、未だ形累を盡さず。此より

道、直に聖果に至るをいひ、二に迂僻道、迂迴して無學に至るをいふ。

【一七】廣果天とは、福愛に於て勝定を增し、更に勝處に至るが故に名く。

【一八】心慮灰凝とは、意識を滅却すること死灰の如くならしむる、謂ゆる無念無想のところをいふ。專門的には灰身滅智と稱せり。

【一九】無想天とは、妄想の禪寂なることを了せざるに因りて、灰身滅智すと雖も尙ほ生滅を免れざるが故に名く。

【二〇】有所得の心とは、初禪より四禪に至るまでは有漏の禪定にして、尙ほ心に何物かを求むるところあるを云ふ。

【二一】不還とは、再び欲界に還歸せざるをいふ。

已還を名けて（二六）色界と爲す。

復た次に阿難よ、是の（二七）有頂の色邊際の中より、其間に復た（二八）二種の岐路あり。若し捨心に於て智慧を發明し、慧光圓通して便ち塵界を出で、阿羅漢と成り、菩薩乘に入る。是の如きの一類を、名けて（二九）廻心の大阿羅漢と爲す。若し捨心に在つて、捨厭成就すれば、身の礙を爲すことを覺して、礙を銷して空に入る。是の如きの一類を名けて（三〇）空處と爲す。諸礙既に銷して、無礙の無も滅す。其中に唯（三一）阿賴耶識と全の末那と半分の微細とを留む。是の如きの一類を名けて識處と爲す。空色既に亡じ、識心都て滅して、十方寂然として逈に往く攸なし。是の如きの一類を無所有處と名く。識性不動にして以て窮研を滅す。無盡の中に於て盡性を發宣すれば、存するが如くして存せず、盡くるが如くして盡くるに非ず。是の如きの一類を名けて非想非非想處と爲す。此等は空を窮むれども、空の理を盡さず。不還の天より、聖道の窮まる者なり。是の如きの一類を、（三二）不廻心鈍阿羅漢と名く。

【二二】九品の習氣とは、欲界と初禪と二禪と三禪とに於ける各九品の煩惱をいふ。

【二三】無頓とは、頓は障の義にして、卽ち苦樂の障を脫し、有苦樂の心を絕するをいふ。

【二四】無熱とは、心の苦惱を離れて、清く清凉の境に至るをいふ。

【二五】色究竟とは、一切萬有の根竟を推窮して、遂に色體の見るべきもののなきに至るをいふ。

【二六】色界とは、三界の一なり。此界の衆生は食欲、婬欲の二欲を離るゝも、未だ五蘊の色心を脫せざるが故に色界といふ。

【二七】有頂の色邊際：有頂は色の頂にして、眞に色究竟なり。この頂に位するを色邊際といふなり。

若し無想の諸の外道の天より、空を窮めて歸せざるは、迷漏無聞にして、便ち輪轉に入る。

阿難よ、是の諸の天上の各の天人は、則ち是れ凡夫の業果の酬答なり。答ふること盡きぬれば輪(轉)に入る。彼の天王は、卽ち是れ菩薩の三摩提に遊んで漸次に增進し、聖倫に廻向して、修行する所の路なり。

阿難よ、是の四空天は、身心滅盡し、定性現前して、無業果の色、此より終に逮ぶまで、(三三)無色界と名く。此れ皆妙覺明心を了せずして、妄を積んで妄を發生す。三界の中間に、妄に七趣に隨つて沈溺する(三四)補特迦羅ありて、各各其類に從ふ。

復た次に阿難よ、是の三界の中に、復た四種の(三五)阿修羅の類あり。若し鬼道に於て護法力を以てすれば、通に乘じて空に入る。此の阿修羅は、卵よりして生ず。これ鬼趣の所攝なり。若し天中に於て、德を降して貶墜せば、其ト居する所日月に鄰れり。此の阿修羅は、胎より

【二八】二種の岐路とは、一に三界を出づる路、卽ち廻心の人の履む所なり。二に無色に入る路、卽ち定性の人の履む所なり。

【二九】廻心とは、有頂に於て直に上界の煩惱を斷じて、大乘菩薩の道に入り、更に空、識等を經ざるをいふ。

【三〇】空虛とは、定性の聲聞無想若くは有頂に於て、有頂の煩惱を斷じて入る處にして、一切の色法對待の相を滅して心虛空の如くなるをいふ。

【三一】阿賴耶識等とは、唯識論に說く八識中の識なり。八識とは眼、耳、鼻、舌、身、意の六識と、第七末那識、第八阿賴耶識とをいふ。阿賴耶(Ālaya)は梵語、藏と譯して、一切の種子を藏するの義な

して出づ。(これ)人趣の所攝なり。(又)修羅王あり、世界を執持するに、力洞にして畏なく、能く梵王及び天帝釋四天と權を爭ふ。此の阿修羅は、變化に因つて有り。(これ)天趣の所攝なり。阿難よ、別に一分の下劣の修羅あり。大海の心に生じて、水の穴口に沈んで、旦には虚空に遊び、暮には水に歸つて宿す。此の阿修羅は、濕氣に因つて有り。(これ)畜生趣の(所)攝なり。

阿難よ、是の如きの地獄、餓鬼、畜生、人、及び神仙、天、洎び修羅七趣を精研するに、皆是れ昏沈諸の有爲の相なり。妄想に(因つて)生を受け、妄想に(因つて)業に從ふ。妙圓明無作の本心に於ては、皆空華の如くにして、元より所著なし。但一の虚妄にして、更に根緒なし。

阿難よ、此等の衆生は、本心を識らずして、此の輪廻を受け、無量劫を經るとも、眞淨を得ず、皆殺盜婬に隨順するに由るが故に、此の三種に反すれば、又則ち出でゝ、殺盜婬なきものに生る。有をば鬼倫と

り。八識中の根本なるが故に心王といふ。末那(Manas)は意と譯して、思量の義なり。半分の微細に、第六意識の色を縁ずる分を除きて、識を縁ずる分を留むるをいふ。

【三二】不廻心。前の頓に大乘に入る利根の者に反して、漸次に煩惱を斷じて、此四天を經て阿羅漢となるが故に不廻心といふ。

【三三】無色界とは、三界の一なり。色界には倚ほ肉體あれども、此界は萬有の理を窮めて、無想の地に達せるを以て、一切の色想を離るゝが故に此名あり。

【三四】補特迦羅とは梵語、譯して數取趣といふ。業の善惡によりて、各其趣に趣ふところの妄心をいふ。

名け、無をは天趣と名け。有無相傾けて輪廻の性を起す。若し妙に三摩提を發することを得れば、則ち妙常寂なり。有無二ながら無にして、無二も亦滅す。尚ほ不殺不偸不婬すらなし、云何ぞ更に殺盜婬の事に從はん。阿難よ、〔三六〕三業を斷ぜざれば、各各に私あり、各各の私に因つて、衆私同分あり。定處なきに非ず。妄より發生す。妄を生ずること因なければ、尋究すべきこと無けん。汝勗めて修行して菩提を得んと欲せば、要らず三惑を除け。三惑を盡さゞれば、縱ひ神通を得るとも、皆是れ世間有爲の功用なり。習氣滅せざれば魔道に落ち、妄を除かんと欲すと雖も、倍虛虛を加ふべし。如來説いて哀憐すべき者と爲したまふ。汝妄に自ら造れり、菩提の咎には非ず。是の説を爲す者を、名けて正説と爲す。若し他説の者は、即ち魔王の説なり。

即時に如來は、將に法座を罷めんとして、師子の牀に於て七寶の几を攬り、紫金山を廻らして、再ひ來り凭り倚つて、普く大衆及び阿難に告げて言はく、『汝等有學の緣覺聲聞、今日心を廻らして、大菩提無上の妙覺に趣けり。吾いま已に眞修行の法を説く、汝猶ほ未だ奢摩他毘婆舍那を修する微細の魔事を識らず。魔境現前するとき、汝識ること能はずんば、心を洗ふこと正に非

【三五】阿修羅（ア三三）とは、常に猜忌の心を以て、闘爭を事とする鬼神の一種にして、高慢の者の趣く所なりとす。修羅界、修羅道、修羅趣といひ、十界、六道、四惡趣の一なり。

【三六】三業とは、殺、盜、婬をいふ。下に三惑とあるも亦同じ。

すして邪見に落ちん。或は汝が陰魔、或は復た天魔、或は鬼神に著き、或は魑魅に遭はんに、心中明めずんば、賊を認めて子と爲さん。又復中に於て少を得て足れりと爲んこと、第四禪の無聞比丘、妄に聖を證せりと言つて、天の報已に畢りて、衰相現前するとき、阿羅漢の身後有に遭ふと謗りて、阿鼻獄に墮せしが如くならん。汝、諦に聽くべし、吾いま汝が爲に子細に分別せん。

阿難起立し、並に其會中の同き有學の者は、歡喜頂禮して、伏して慈誨を聽けり。

佛、阿難及び諸の大衆に告げたまはく、『汝等當に知るべし、有漏の世界の十二類の生、本覺妙明覺圓の心體は、十方の佛と無二無別なり。汝妄想して理に迷ひ咎を爲すに由つて、癡と愛と發生す。生發すれば徧く迷ふ。故に空性あり。迷を化して息まざれば、世界生ずることあり。則ち此の十方微塵の國土の無漏に非ざる者は、皆是れ迷頑妄想の安立なり。當に知るべし、虛空の汝が心內に生ずることは、猶ほ片雲の太淸の裏に點ずるが如し。況や諸の世界の虛空に在るをや。汝等一人眞を發して元に歸すれば、此の十方の空は、皆悉く銷殞す。云何ぞ空中の所有の國土にして而も振裂せざらん。汝が輩、禪を修し三摩地を飾めて、十方の菩薩及び諸の無漏の大阿羅漢、心精通脗して、當處湛然たり。一切の魔王及び鬼神と諸の凡夫の天は、其宮殿の故なく崩裂し、大地振拆し、水陸飛騰するを見て、驚き懼れざることなし。凡夫は昏暗にして、遷

り訛ることを覺らず、彼等は咸く〔三七〕五種の神通を得たり、唯漏盡を除く。此の塵勞を纏はゞ、如何ぞ汝をして其處を摧破せしめん。是の故に神鬼及び諸の天魔、魍魎、妖精は、三昧の時に於て、僉來つて汝を惱まさん。然も彼の諸魔は、大に彼の塵勞の內に怒ること有りと雖も、汝が妙覺の中には、風の光を吹くが如く、刀の水を斷るが如くにして、了に相觸れず。汝は沸ける湯の如く、彼は堅き氷の如し。煖氣漸く鄰づけば、不日に銷殞す。徒に神力を恃めども、但其客たり。成就と破亂とは、汝が心中の五陰の主人に由る。主人若し迷へば、客其便を得ん。當に禪那に處して、覺悟して惑ふこと無かるべし。則ち彼の魔事は汝を奈何ともすること無けん。〔五〕陰銷して明に入るとき、則ち彼の群邪咸く幽氣を受く。明能く暗を破す。近づけば自ら銷殞す。如何ぞ敢て留めて禪定を擾亂せん。若し明悟せずして、〔五〕陰の所迷を被らば、則ち汝阿難は、必らず魔子と爲つて、魔人を成就せん。摩登伽が如きは、殊に眇劣なりと爲す。彼唯汝を呪して佛の律儀を破る。八萬の行の中に、祇一戒を毀らんとす。（汝が）心清淨なるが故に、尙ほ未だ淪溺せず。此は乃ち汝が寶覺全身を驟らんとす。宰臣の家の忽ち籍沒に逢ひ、宛轉零落して哀救すべきことなきが如し。

【三七】五種の神通とは、一に天眼通、二に天耳通、三に他心通、四に宿命通、五に神足通なり。之に漏盡通を加へて六神通といふ。漏盡とは、煩惱（漏）を斷じ盡して、再び三界に生ぜざる解脫を得るをいふ。

阿難よ、當に知るべし。汝道場に坐して、諸念を銷落せよ。其念若し盡くれば、則ち諸の離念一切精明にして、動靜に移らず、憶妄如一ならん。當に此の處に住して三摩提に入るべし。明目の人の大幽暗に處するが如く、精性妙淨なれども、心未だ光を發せず、此れ則ち名けて色陰の〔三六〕區宇と爲す。若し目明朗なれば、十方洞に開けて、復幽黯なきを、色陰の盡くると名く。是の人は則ち能く劫濁を超越す。其所由を觀ずるに、堅固の妄想を以て、其本と爲す。

阿難よ、此の中に在りて妙明を精研するに當つて、四大織らざれば、少選の間に身能く礙を出づ、此を精明前境に流溢すと名く。斯れ但功を用て暫く是の如きことを得るとも、聖證と爲すに非ず。聖心を作さゞれば善境界と名け、若し聖解を作せば即ち群邪を受く。

阿難よ、復た此の心を以て妙明を精研するに、其身內に徹す。是の人忽然として、其身內より蟯蛔を拾ひ出すとも、身相宛然として、亦傷毀することも無し。此を精明形體に流溢すと名く。斯れ但精行を以て、暫く是の如きことを得るとも、聖證と爲すに非ず。聖心を作さゞれば善境界と名け、若し聖解を作さば、即ち群邪を受く。

【三六】區宇とは區は、別の義にして、宇は覆の義なり。即ち五陰各分齊ありて眞如佛性を覆ふをいふ。

又此の心を以て內外精研すれば、其時魂魄意志精神、(三九)執受の身を除きて、餘は皆涉入して互に賓主と爲る。忽ち空中に於て說法の聲を聞き、或は十方に同じく密義を敷くを聞く、此を精魄遞相に離合すと名く。善種を成就するものは、暫く是の如きことを得るとも、聖證と爲すに非ず。聖心を作さゞれば善境界と名け、若し聖解を作さば、則ち群邪を受く。

又此の心を以て、澄露皎徹して內光發明すれば、十方徧く閻浮檀の色と作り。一切の種類は化して如來と爲る。時に忽ち(四〇)毘盧遮那、天光臺に踞して千佛圍繞し、百億の國土及び蓮華と、俱時に出現すと見る、此を心魂靈悟の染する所、心光研明にして、諸の世界を照らすと名く。暫く是の如きことを得るとも、聖證と爲すに非ず。聖心を作さゞれば善境界と名け、若し聖解を作さば則ち群邪を受く。

又此の心を以て妙明を精研すれば、觀察すること停まらず。抑按降伏し、制止超越す。時に於て忽然として十方の虛空、七寶の色と成り、或は百寶の色同時に徧滿して相留礙せず、青黃赤白各純ら現ず。此を抑按の功力分に逾へたりと名く。暫く是の如きことを得るとも、聖證

【三九】執受の身とは、六根の種子は、皆第八阿賴耶識の爲めに、執受せらるゝをいふ。

【四〇】毘盧舍那（Vairocana）とは梵語、光明徧照、又は徧一切處と譯す、佛陀の別名なり。佛陀は最勝無上の地位なるが故に、慧光圓明にして徧く一切處を照らすの義なり。

と爲すに非ず。聖心を作さゞれば善境界と名け、若し聖解を作さば卽ち群邪を受く。
又此の心を以て、研究澄徹して精光亂れざれば、忽ち夜合に於て暗室の內に在るに、種種の物を見ること白晝に殊ならず、而も暗室の物も亦除滅せず、此を心細密澄にして、其見の視る所洞幽なりと名く。暫く是の如くなることを得るとも、聖證と爲すに非ず。聖心を作さゞれば善境界と名け、若し聖解を作さば卽ち群邪を受く。
又此の心を以て圓入虛融すれば、四體忽然として草木に同じ。火「を以て」燒き刀を「以て」斫れども、覺ゆる所なし。又則ち火光も燒熱すること能はず、縱ひ其肉を割けども、猶ほ木を削るが如し、此を塵倂して四大性を排すと名く。一向に入ること純なれば、暫く是の如くなることを得るとも、聖證と爲すに非ず。聖心を作さゞれば善境界と名け、若し聖解を作さば卽ち群邪を受く。
又此心を以て淸淨を成就して、淨心の功極れば、忽に大地十方山河を見るに、皆佛國と成り、七寶を具足し、光明徧滿す。又恒沙の諸佛如來、空界に徧滿して、樓殿華麗なるを見る。下、地獄を見、上、天宮を觀るに、障礙なきことを得たり、此を欣厭想を凝らすこと、日深く想久ふして化して成ずと名く。「暫く是の如くなることを得るとも」聖證と爲すに非ず。聖心を作さゞれば善境界と名け、若し聖解を作さば則ち群邪を受く。

又此の心を以て、研究すること深遠なれば、忽に中夜に於て、遠方の市井街巷の親族眷屬を見て、或は其語を聞く、此を心を逼めて、逼むること極まれば飛び出づるが故に、多く隔見すと名く。〔暫く是の如きことを得るとも〕聖證と爲すに非ず。聖心を作さゞれば善境界と名け、若し聖解を作さば卽ち群邪を受く。

又此の心を以て、研究して精極まれば、善知識を見るに、形體變移す。少選(の間)にして端なく種種に遷改す。此を邪心魑魅を含受し、或は天魔の其心腹に入つて、端なく法を說いて、妙義に通達せしむるに遭ふと名く。〔暫く是の如きことを得るとも〕聖證を爲すに非ず。聖心を作さゞれば魔事消歇す、若し聖解を作さば卽ち群邪を受く。

阿難よ、是の如きの十種の禪那の現境は、皆是れ色陰に(おいて)用心交互するが故に斯の事を現ず。衆生は頑迷にして自ら忖り量らず、此の因緣に逢うて、迷うて自ら識らず、謂うて聖と登れりと言つて、大妄語成ずれば、無間獄に墮す。汝等當に如來滅後に依つて、末法の中に於て、斯義を宣示して、天魔をして其方便を得せしむること無く、保持覆護して無上道を成ぜしむべし。

卷の第九の二

阿難よ、彼の善男子、三摩提奢摩他を修する中に、色陰盡くれば、諸佛の心を見ること、明鏡の中に其の像を顯現するが如し。若し所得あれども、而も未だ用ふること能はざること、猶ほ(一)魘人の手足宛然として、見聞すること惑はざれども、心客邪に觸れて動くこと能はざるが如し。此を則ち名けて受陰の區宇と爲す。若し魘咎歇むときは、其心身を離れて、返つて其面を觀、去住自由にして復た留礙なきを、受陰盡くると名く。是の人は則ち能く見濁を超越す。其の所由を觀るに、虚明の妄想を以て其本と爲す。

阿難よ、彼の善男子、當に此の中に在つて大光耀を得るとき、其心發明して内に抑ふること分に過ぐれば、其處に於て無窮の悲を發す。是の如く乃至蚊蝱を觀見するも、猶ほ赤子の如く、心に憐愍を生じて覺へず涙を流す。此を功用抑摧すること過超せりと名く。悟れば則ち咎なきを聖證と爲すに非ず。覺了して迷はざれば、久しくして自ら銷歇す。若し聖解を作さば、則ち悲魔ありて其心腑に入り、人を見ては則ち悲みて、啼泣すること限りなし。(二)正

【一】魘人とは、睡眠中ものに「オソハレ」たる人をいふ。

【二】正受とは、三昧の譯にして、三摩地、又は奢摩他に同じ。心を正して、妄念雜慮を離るゝの義或は正見とも名く、卽ち正しき知見をいふ。

受を失つて當に淪墜に從ふべし。

阿難よ、又彼の定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白にして、勝相現前するを見て、感激すること分に過れば、忽ち其中に於て無限の勇を生ず。其心猛利にして志諸佛に齊しく、(三)三僧祇は一念に能く越えんと謂へり。此を功用陵率すること過越すと名く。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。覺了して迷はざれば、久くして自ら銷歇す。若し聖解を作さば、則ち狂魔ありて其心腑に入り、人を見るときは則ち誇つて、我慢比なし。其心乃至上は佛を見ず、下は人を見ず、正受を失つて當に淪墜に從ふべし。

又彼の定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見て、前んでは新證なく、歸つては故居を失ひ、智力衰微にして(四)中隳地に入つて、逈に見る所なく、心中忽然として大枯渇を生ず。一切の時に於て、沈憶して散せず、此を將て以て勤精進の相と爲す。此を心を修するに慧なくして自ら失すと名く。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。若し聖解を作さば、則ち憶魔ありて其心腑に入り、旦夕に心を撮つて、懸けて一處に在く。正受を失つて當に淪墜に從ふべし。

【三】三僧祇とは具には三大阿僧祇と稱す　阿僧祇（Asaṃkhyā）は無數の義にして、無限の時間を費して修證する所の聖位も一念時に超越し得ると謂へるなり。

【四】中隳地とは、色陰盡きて受陰未だ盡きざる中間に墮在して、依るところなきをいふ。

又彼の定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見て、慧力定に過ぐれば、猛利に失ありて、諸の勝性を以て心中に懷き、自心に已に是盧舍那かと疑つて、少を得て足れりと爲す。此を用心恒審を亡失して、知見に溺ると名く。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。若し聖解を作さば、則ち下劣易知足の魔ありて其心腑に入り、人を見ては自ら言ふ「我無上第一義諦を得たり」と。正受を失つて當に淪墜に從ふべし。

又彼の定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見て、新證は未だ獲ず、故心は已に亡び、二際を歷覽して、自ら艱險を生じ、心に於て忽然として無盡の憂を生ずること、鐵牀に坐するが如く、毒藥を飲むが如し。心に活んことを欲せず、常に人に於て其命を害せしめて、早く解脫を取らんことを求む。此を修行に方便を失ふと名く。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。若し聖解を作さば、則ち一分の常憂愁の魔ありて其心腑に入り、手に刀劍を執つて自ら其肉を割き、其壽を捨てんことを欣ふ。或は常に憂愁して、山林に走り入り、人を見るに耐へず、正受を失つて當に淪墜に從ふべし。

又彼の定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見て、清淨の中に處して心安隱なる後、忽然として自ら無限の喜生ずること有りて、心中の歡悅自ら止むること能はず。此を輕安にし

て慧の自ら禁ずることなしと名く。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。若し聖解を作さば、則ち一分の好喜樂の魔ありて其心腑に入り、人を見ては則ち笑ひ、衢路の傍に於て自ら歌ひ自ら舞ふ、自ら已に無礙解脱を得たりと謂ひ、正受を失つて當に淪墜に從ふべし。

又彼の定中の諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見て、自ら已に足れりと謂つて、忽ち端なく大我慢の起ること有り。是の如く乃至(五)慢と過慢と及び慢過慢、或は增上慢、或は卑劣慢の一時に倶に發して、心中に尙ほ十方の如來を輕んず、何に況や下位の聲聞緣覺をや。此を見勝れて慧の自ら救ふこと無しと名く。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。若し聖解を作さば、則ち一分の大我慢の魔ありて其心腑に入り、塔廟を禮せず、經像を摧毀し、檀越に謂て言ふ、「此は是れ金銅なり。或は是れ土木なり、經は是れ樹葉なり、或は是れ疊花なり、肉身の眞常なるを自ら恭敬せずして、却て土木を崇むるは、實に顚倒せり」と爲す。其深信なる者は、其に從つて毀り碎き、地中に埋み棄てゝ、衆生を疑誤して無間獄に入り、正受を失つて當に淪墜に從ふべし。

【五】慢と過慢等とは七慢の五を擧げて二を攝したるものなり。卽ち他を凌ぎ、高く擧がるを我慢といひ、自他を比べて已を恃むを慢と云ひ、他と等しきに於て已勝ると謂ふを過慢といひ、他の勝ると謂ふを慢過慢といひ、得ざるを得たりと謂ふを增上慢といひ、下劣を以て却つて矜るを卑劣慢といひ、經像を非毀するを邪慢といふ。

又彼の定中に諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見るとき、精明の中に於て、精理を圓悟して、大隨順を得、其心忽に無量の輕安を生じ、已に言ふ「聖と成りて大自在を得たり」と。此を慧に因つて諸の輕清を獲と名く。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。若し聖解を作さば、則ち一分の好輕清の魔ありて其心腑に入り、自ら滿足せりと謂つて、更に進むことを求めず。此等は多く無聞比丘と作つて、後生を疑謗して阿鼻獄に墮す。正受を失つて當に淪墜に從ふべし。

又彼の定中に諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見るとき、明悟の中に於て、虚明の性を得て、其中に忽然として永滅に歸向し、因果を撥無して、一向に空に入り空心現前すれば、乃至、心に長く斷滅の解を生ず。悟れば則ち咎なし、聖證と爲すに非ず。若し聖解を作さば、則ち空魔ありて其心腑に入り、乃ち持戒を謗して、名けて小乘と爲し、菩薩は空を悟る、何の持犯か有らんといふ。其人常に信心の檀越に於て、酒を飲み肉を噉つて、廣く婬穢を行ずれども、魔力に因るが故に、其前の人をして疑謗を生ぜざらしむ。鬼心久しく入りぬれば、或は屎尿を食ふこと酒肉と等く、一種倶に空にして、佛の律儀を破り、人を誤りて罪に入り、正受を失つて當に淪墜に從ふべし。

又彼の定中に諸の善男子、色陰銷し、受陰明白なるを見るとき、其虚明を味つて、深く心骨に入れば、其心忽に無限の愛生ずることあり、愛極まれば狂を發して便ち貪欲を爲す。此を定境に安順して心に入るとき、慧の自ら持すること無ければ、誤つて諸欲に入ると名く。悟れば則ち咎なし。聖證と爲すに非ず。若し聖解を作さば、則ち欲魔ありて其心腑に入り、一向に法を說きて菩提の道と爲し、諸の(六)白衣を化して平等に欲を行ぜしめ、其婬を行ずる者を持法子と名く。神鬼の力の故に、末世の中に於て、其凡愚を攝して其數百に至る。是の如く乃至一百二百或は五六百、多きは千萬に滿つ。魔心猒を生じて其身體を離るれば、威德既に無くして王難に陷り、衆生を疑誤して無間獄に入らしめ、正受を失つて當に論墜に從ふべし。

【六】白衣とは、白色の衣服のことにして、出家の僧侶の壞色の衣を著るに對して、在家俗人を白衣といふ。

阿難よ、是の如き十種の禪那の現境は、皆是れ受陰に(おいて)用心交互するが故に斯の事を現ず。衆生は頑迷にして、自ら忖り量らず、此の因緣に逢うて、迷うて自ら識らず、謂うて聖と登れりと言ふ。大妄語成ずれば無間獄に墮す。汝等亦當に如來の語を將て、我が滅後に於て、末法(の世)に傳示して、徧く衆生をして斯の義を開悟せしむべし。天魔をして其方便を得せしむること無く、保持覆護して無上道を成ぜしめよ。

阿難よ、彼の善男子、三摩提を修して、受陰盡くれば、未だ漏盡きずと雖も、心其の形を離るゝこと、鳥の籠を出づるが如し。已に能く成就すれば、是の凡身より上は菩薩の（七）六十の聖位を歴て、（八）意生身を得て、往に隨つて無礙なり。譬へば人ありて、熟く寐て寱言するに、是の人は則ち別の所知なしと雖も、其言は已に音韻倫次することを成じて、寐ざる者をして、咸く其語を悟らしむるが如し。此を則ち名けて想陰の區宇と爲す。若し動念盡きて浮想銷除すれば、覺明の心に於て塵垢を去るが如し。（九）一倫の生死、首尾圓に照すを、想陰盡くと名く。是の人は則ち能く煩惱濁を超ゆ。其所由を觀ずるに、融通の妄想を以て其本と爲す。

阿難よ、彼の善男子、受陰虛妙にして、邪慮に遭はず。圓定發明せる三摩地の中に〔於て〕心に圓明を愛し、其精思を鋭くして善巧を貪求すれば、爾の時に天魔其便を候ひ得て、精を飛ばし人に附きて口に經法を說かん。其人は是れ其魔の著けるを覺らずして、自ら言つて「無上涅槃を得たり」と謂へり。彼の〔善〕巧を求むる善男子の處に來りて、座を敷き法を說く。其形斯須ありて、或は比丘と作つて、彼の人をして、或

【七】六十の聖位とは、菩薩の證階は五十七位なれども、大數を擧げて稱したる者なり。

【八】意生身とは、觀心自在なるが故に、意に隨つて十界に進み、衆生を利濟し得る身をいふ。

【九】一倫の生死とは、一倫は行陰の倫類にして、行に遷流生滅の義なるが故に生死といふ。

は帝釋と爲り、或は婦女と爲り、或は比丘尼と見せしむ。或は闇室に寢すに、身に光明あり、是の人愚迷にして、惑うて菩薩なりと爲して、其敎化を信じ、其心を搖蕩して、佛の律儀を破し、潛に貪欲を行ぜしむ。口中に災祥變異を言ふを好んで、或は如來は某の處に出世すと言ひ、或は劫火を言ひ、或は刀兵を説きて、人を恐怖せしめて、其家資をして故なく耗散せしむ、此を怪鬼年老いて魔と成り、是の人を惱亂すと名く。（この魔）厭足の心生じて、彼の人の體を去れば、弟子と師と、倶に王難に陷る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮するを知らざるなり。

阿難よ、又善男子、受陰虚妙にして邪慮に遭はず、圓定發明せる三摩地の中に〔於て〕心遊蕩を愛し、其精思を飛ばして、經歷を貪求すれば、爾の時に天魔其便を候ひ得て、精を飛ばし人に附きて、口に經法を説かしむ。其人、亦魔の著けることを覺知せずして亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼の遊〔蕩〕を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を説くに、自らが形は變ずることなくして、其聽法の者は忽ち自ら身を見れば、寶蓮華に坐して、全體化して紫金光聚と成る。一衆の聽人各各是の如くして未曾有なることを得たり。是の人愚迷にして、惑うて菩薩なりと爲して、其心を婬逸して佛の律儀を破り、潛に貪欲を行し、口中に好んで諸佛の應世を言ひ、某の

處某の人は、當に是れ某の佛身を化して此に來れるなるべし、某の人は卽ち是の某の菩薩等來りて人間を化すといふ。其人見るが故に、心に傾渇を生ずれば、邪見密に興つて、種智銷滅す。此を魃鬼年老いて魔と成り、是の人を惱亂すと名く。〔この魔〕厭足の心生じて、彼の人の體を去れば、弟子と師と、倶に王難に陷る。汝當に先つ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮するを知らざるなり。

又善男子、受陰虛妙にして邪慮に遭はず、圓定發明せる三魔地の中に〔於て〕心に(一〇)綿溜を愛し、其精思を澄して契合を貪求すれば、爾の時に天魔其便を候ひ得て、精を飛ばし人に附きて、口に經法を說かしむ。其人は實に魔の著けることを覺知せずして、亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼の〔契〕合を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を說くに、其形及び彼の聽法の人、外には遷變なけれども、其聽く者をして未だ法を聞かざる前に、心に自ら開悟して、念念移易し、或は(一一)宿命を得、或は他心あり、或は地獄を見、或は人間の好惡の諸事を知り、或は口に偈を說き、或は自ら經を誦すれば、各歡娛して、未曾有なることを得せしむ。口中に好んで、佛に大小あり、某の佛は先佛、某の佛は後佛、其中に亦眞佛、假佛、男佛、女佛あり、

【一〇】綿溜とは綿は密の義にして、溜は合の義なり。卽ち密に妙理に契合せんことを希ふをいふ。

【一一】宿命等は五種の神通をいふなり。

菩薩も亦然りと言ふ。其人見るが故に、本心を洗滌して邪悟に入り易し、此を魅鬼年老いて魔と成り、是の人を惱亂すと名く。（この魔）猒足の心生じて、彼の人の體を去れば、弟子と師と、倶に王難に陷る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮するを知らざるなり。

又善男子、受陰虛妙にして邪慮に遭はず、圓定發明せる三摩地の中に「於て」心に根本を愛して、物化の性の終始を窮覽し、其心を精爽にして、辨析を貪求すれば、爾の時に天魔其便を候ひ得て精を飛ばし人に附きて、口に經法を說くに、其人先づ魔の著けることを覺知せずして、亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼の元を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を說くに、身に威神ありて、求むる者を摧伏し、其座下をして、未だ法を聞かずと雖も、自然に心に伏せしむ。是の諸人等は、佛の涅槃菩提法身を將て、卽ち是れ現前の我が肉身の上にありとす。父父子子遞代に相ひ生ずれば、卽ち是れ法身の常住にして絕えざるなり。都て現在を指して卽ち佛國と爲し、別に淨居及び金色の相なしといふ。其人信受して先心を亡失し、身命歸依して未曾有なることを得。是等は愚迷にして、惑うて菩薩なりと爲し、其心を推し究めて佛の律儀を破り、潛に貪欲を行ず。口中に好んで、眼耳鼻舌は皆淨土たり。男女の二根は則ち是れ菩提涅槃の眞處なりと言ふ。彼の無知の者は、是の穢言を信ず、此

【三】物化とは、萬有の變化をいふ。

を蠱毒魘勝の惡鬼年老いて魔と成り、是の人を惱亂すと名く。(この魔)厭足の心生じて彼の人の體を去れば、弟子と師と倶に王難に陷る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮することを知らざるなり。

又善男子、受陰虚妙にして邪慮に遭はず、圓定發明せる三摩地の中に〔於て〕心に(三)懸應を愛し、周流精研して冥感を貪求すれば、爾の時に天魔其便を候ひ得て、精を飛ばして人に附き、口に經法を說かしむるに、其人元より魔の著けることを覺知せずして、亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼の(冥)應を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を說くに、能く聽衆をして、暫く其身を見ること百千歲の如くならしむ。心に愛染を生じて、捨離すること能はず、身奴僕と爲りて、(四)四事を以て供養するに疲勞を覺へず、各各其座下の人の心をして、是の先師本の善知識なりと知らしむ。別に法愛を生じて、粘すること膠漆の如くして、未曾有なることを得。是の人愚迷にして、惑うて菩薩なりと爲し、其心に親近して佛の律儀を破り、潛に貪欲を行ず。口中に好んで、我前世に於て、某の生の中に於て先づ某の人を度す。當時は是れ我が妻妾兄弟なり、今來つて相度す。汝と相隨つて、某の世界に歸つて某の佛を供養せんと言ひ、或は別に大

【三】懸應とは、懸は懸遠、應は感應の義にて、思はざる時に於て感應あるをいふ。
【四】四事とは、飲食、衣服、臥具、醫藥をいふ。

光明天あり。佛中に於て住す、一切如來の休居する所の地なりと言ふ。彼の無知の者は、是の虛誑を信じて、本心を遺失す。此を厲鬼年老いて魔と成り。是の人を惱亂すと名く。(この魔)厭足の心生じて彼の人の體を去りぬれば、弟子と師と俱に王難に陷る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも。迷惑して無間獄に墮することを知らざるなり。

又善男子、受陰虛妙にして邪慮に遭はず、圓定發明せる三摩地の中に〔於て〕心に(一五)深入を愛し、己を剋めて辛勤し、陰寂に處せんことを樂ひ、靜謐を貪求すれば、爾の時に天魔其便を候ひ得て、精を飛ばして人に附き、口に經法を說くに、其人本より魔の著けることを覺知せず、亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼の陰を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を說くに、其聽く人をして各各(一六)本業を知らしむ。或は其處に於て一人に語つて言はく、汝今未だ死せざるに、已に畜生と作れり、勅して一人をして後に於て尾を蹋ましめ、頓に其人をして起つことを得ること能はざらしむ。是に於て一衆心を傾けて欽伏す。人の心を起すこと有れば、已に其肇を知る、佛の律儀の外に重ねて精苦を加へ、比丘を誹謗し、徒衆を罵詈し、人事を訐き露して譏嫌を避けず、口中に好んで未然の禍福を言ひ、其時に至るに及んで、毫髮も失ふこと無し。

【一五】深入とは、禁緣を厭ひて深く靜寂の境に入りて、以て眞の修行の處とするをいふ。
【一六】本業とは、過去に於ける所作の業をいふ。

此を大力の鬼年老いて魔と成り、是の人を惱亂す「と名づく」。（この魔）猒足の心生じて、彼の人の體を去れば、弟子と師と倶に王難に陷る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮することを知らざるなり。

又善男子、受陰虛妙にして邪慮に遭はず、圓定發明せる三摩地の中に「於て」心に知見を愛し勤苦研尋して　（一七）宿命を貪求すれば、爾の時に天魔其便を候ひ得て、精を飛し人に附きて、口に經法を說くに、其人殊に魔の著けることを覺知せず、亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼の知を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を說くに、是の人端なく說法の處に於て、大寶珠を得たり。其魔或時は化して畜生と爲り、口に其珠及び雜珍寶、簡策符牘、諸の奇異の物を銜んで、先づ彼の人に授けて、後に其體に著く。或は聽く人を誘うて、地下に藏すに明月の珠ありて、其處を照曜す。是の諸の聽く者は未曾有なることを得て、多く藥草を食して、嘉饌を餐はざるが故に、或時は日に一麻一麥を餐つて、其の形肥へ充てることは魔力の持するが故なり。比丘を誹謗し、徒衆を罵詈して、譏嫌を避けず、口中に好んで他方の寶藏、十方の聖賢潛匿の處を言ふ。其後に從ふ者は、往往に奇異の人あることを見る。是を山林土地城隍川嶽の鬼神、年老いて魔と成ると名く。或は

【一七】宿命とは、五種の神通の一にして、過去に於ける種々のこと知る力をいふ。

婬を宣べて佛の律儀を破り、承事の者と潜に〔一八〕五欲を行ずる有り。或は精進にして純ら草木を食ひ、定まれる行事なくして、是の人を惱亂する有り。(この魔)猒足の心生じて彼の人の體を去れば、弟子と師と倶に王難に陷る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮することを知らざるなり。

又善男子、受陰虛妙にして、邪慮にして遭はず、圓定發明せる三摩地の中に[於て]心に神通種種の變化を愛し、化元を研究して神力を貪取すれば、爾の時に天魔其便を候ひ得て、精を飛し人に附きて、口に經法を說くに、其人誠に魔の著けることを覺知せず、亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼の通を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を說くに、是の人或は復た手に火光を執り、手に其光を撮て聽く所の〔一九〕四衆の頭上に分つ。是の諸の聽く人の頂上の火光は皆長け數尺、亦熱性なくして曾て焚燒せず。或は水の上を行くこと、平地を履むが如し。或は空中に於て安坐して動ぜず、或は瓶內に入り、或は囊中に處す。牖を越へ垣を透るに、曾て障礙なく、唯刀兵に於て自在を得ず。自ら是れ佛なりと言うて、身に白衣を著けて、比丘の禮を受け、禪律を誹謗し、徒衆を罵詈し、人事を訐き露にして、譏嫌を避け

〔一八〕五欲とは、財欲、色欲、食欲、名譽欲、睡眠欲をいふ。
〔一九〕四衆とは、比丘(男子の出家)、比丘尼(女子の出家)、優婆塞(在家の信男)、優婆夷(在家の信女)をいふ。

す。口中に常に神通自在なりと說き、或は復た人をして傍に佛土を見せしめ、鬼力人を惑はすも眞實あるに非ず。行婬を讃歎し、麁行を毀らず、諸の猥媟を將て、以て傳法と爲す。此を天地の大力の山精、海精、風精、河精、土精、一切草木の劫を積める精魅と名く。或は復た龍魅、或は壽終る仙の再び活きて魅と爲れる、或は仙の期終へて、年を計るに應に死すべきを、其形化せざるに他の怪の附く所、年老いて魔と成りて是の人を惱亂すと名く。(この魔)猒足の心生じて、彼の人の體を去れば、弟子と師と、多くは王難に陷る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して無間獄に墮するを知らざるなり。

又善男子、受陰虚妙にして邪慮に遭はず、圓定發明せる三摩地の中に[於て]心に(二〇)入滅を愛し、化性を研究して(二一)深空を貪求すれば爾の時に天魔其便を候ひ得て、精を飛ばして人に附き、口に經法を說くに、其の人は終に魔の著けることを覺知せず、亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼の空を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を說くに、大衆の内に於て、其の形忽ち空にして、衆は見る所なし。還つて虚空より突然として出でて、存沒自在なり。或は其身を現ずるに、洞なること

【二〇】入滅とは、涅槃に入るをいふ。涅槃は寂滅、又は滅度の義にして、諸の煩惱を滅盡して、不生不滅の寂靜無爲の境界に到るをいふなり。

【二一】深空とは、一切の行業を杜絶したる、空々寂々の境をいふ。若し夫れ眞空ならば、有の儘にして性常に空なるが故に、善行を修するも、空を礙へず。深空は是れ外道の見なり。

琉璃の如し。或は手足を垂れて、栴檀の氣を作す。或は大小便、厚石蜜の如し。戒律を誹毀し、出家を輕賤す。口中に常に因なく果なく、一たび死すれば永く滅して、復た後身及び諸の凡情なしと說く、空寂を得ると雖も潛に貪欲を行ふ。其欲を受くる者は亦空心を得て、因果を撥無す。此の日月薄蝕の精氣、金玉芝草、麟鳳龜鶴の、千萬年を經るとも、死せずして靈と爲り、國土に出生して、年老いて魔と成り、是の人を惱亂すと名く。(この魔)厭足の心生じて、彼の人の體を去りぬれば、弟子と師と多くは王難に陷る。汝當に先づ覺して輪廻に入らざるも、迷惑して知らざれば無間獄に墮すべし。

又善男子、受陰虛妙にして定慮に遭はず、圓定發明せる三摩地の中に「於て」心に長壽を愛して、辛苦研幾して永歲を貪求すれば、(二)分段の生を棄てゝ、頓に(三)變易の細想常住を希ふ。爾の時に天魔其便を候ひ得て、精を飛して人に附き、口に經法を說くに、其人は竟に魔の著けることを覺知せず、亦自ら無上涅槃を得たりと言ふ。彼の生を求むる善男子の處に來つて、座を敷きて法を說くに、好んで他方の往還滯りなしと言ふ。或は萬里を經て、瞬息に再び來るに、皆彼の方に於て其物

【二】分段とは、二種の生死の一にして、分段生死、又は分段身といふ。三界六道の衆生が、その業因によつて感ずるところの果報の身に分限あり形段あるをいふなり。

【三】變易とは、分段生死に對する變易生死をいふ。卽ち分段の形を變じて異なれる形を取ることにして、見思のあらあらしき煩惱を斷絕するも、尙ほ塵沙の如き微細の煩惱あるを以て此の生死あるなり。

を取り得、或は一處に於て、一宅の中に在り、數步の間に其東より西の壁に詣至せしめ、是の人急に行くに、年を累ねて到らず、此に因つて心に信じて、佛の現前したまへるかと疑ふ。口中に常に十方の衆生は、皆是れ吾が子なり、我は諸佛を生ず、我は世界に出づ、我は是れ元佛なり、出世自然にして修得に因らずと說く。此を住世自在の天魔と名く。其眷屬の（二四）遮文茶及び四天王の（二五）毘舍童子の如きをして、未發心の者其の虚明を利するときは彼の精氣を食せしむ。或は師に由らずして、其修行する人をば、親しく自ら觀見して、執金剛汝に長命を與ふと稱して、美女の身を現じて、盛に貪欲を行ぜしむ。未だ三歲を逾へざるに、肝腦枯竭し、口に兼ねて獨言す、聽くに妖魅の若く、前の人未だ詳にせざるに、多くは王難に陷る。未だ刑に遇ふに及ばざるに、先に已に乾死す。彼の人を惱亂して、以て殂殞に至す。汝當に先づ覺して輪廻に入ざるも、迷惑して無間獄に墮することを知らざるなり。

阿難よ、當に知るべし、是十種の魔は、末世の時に於て、我が法の中に在つて、出家修道し、或は人の體に附き、或は自ら形を現じて、皆已に（二六）正徧知覺を成ずと言つて、婬欲を讚歎し、

【二四】遮文茶（Chamaṇḍa）嫉妬女と譯す。天部の鬼神。

【二五】毘舍童子（Piśāca）。噉精氣と譯し、人の精氣を噉ふものにして、四天王天に屬する鬼神の名なり。

【二六】正徧知覺とは、阿耨多羅三藐三菩提の譯語にして、佛陀の悟をいふ。

佛の律義を破つて、先の惡魔の師と魔の弟子と、婬婬相傳せん。是の如きの邪精其心腑に魅き近きは則ち九たび生じ、多きは百世を踰へて、眞の修行(者)をして總て魔の眷〔屬〕と爲さしむ。命終の後は必らず魔民と爲りて、正徧知を失して無間獄に墮す。汝今未だ先づ寂滅を取るを須ひず、縱ひ無學を得たりとも、願を留めて彼の末法の中に入つて、大慈悲を起して、正心深信の衆生をして、魔に著せずして正知見を得せしめよ。我今汝を度して已に生死を出せり。汝、佛語に遵ふを、佛恩を報ずと名くべし。

阿難よ、是の如きの十種の禪那の現境は、皆是れ想陰の用心交互するが故に斯の事を現ず。衆生は頑迷にして、自ら忖り量らず、此の因緣に逢うて、迷うて自ら識らず、謂うて聖と登れりと言ふ。大妄語成ずれば無間獄に墮す。汝等必らず須く如來の語を將て、我が滅後に於て、末法(の世)に傳示して、徧く衆生をして斯の義を開悟せしめ、天魔をして其方便を得せしむること無く、保持覆護して、無上道を成せしむ。

巻の第十の一

阿難よ、彼の善男子、三摩提を修して、想陰盡くれば、是の人平常に夢想銷滅して、寤寐恒一なり。覺明虚靜なること、猶ほ晴空の如し。復た麤重前塵の影事なし。諸の世間の山河大地を觀ずるに、鏡の鑒明にして、來るも黏く所なく、過ぐるも蹤跡なく、虚しく受けて照らし應ずるが如し。了に（一）陳習なく、唯一の精眞のみなり。生滅の根元此より披露す。諸の十方十二の衆生を見るに、畢く其類を彌くして、未だ其（二）各命の由緒に通ぜずと雖も、（三）同生の基を見るに、猶ほ野馬の熠燿として淸擾するが如くにして、浮塵根の究竟の樞穴たり、此を則ち名けて行陰の區宇と爲す。若し此の淸擾熠燿たる元性は、性（四）元澄に入つて、一ら元習を澄ますこと、波瀾の滅化して澄水と爲るが如くなるを、行陰盡くと名く。是の人は則ち能く衆生濁を超ゆ。其所由を觀ずるに、（五）幽隱妄想を以て其本と爲す。

【一】陳習とは、陳は舊又は宿と同義にて、無始の煩惱をいふ。元習といふも又同じ。

【二】各命の由緒とは、十二類の衆生は齊しく、行陰（業の體）より出づることを了解するも、未だ各別の性命の因由端緒を窮めざるをいふ。

【三】同生の基とは、卽ち十二類の衆生の由つて出づるところの行陰をいふ。

【四】元澄とは、識蘊卽ち第八阿賴耶をいふなり。

【五】幽陰とは、行陰の生滅卽ち業の體は微細にして了解し難きを以て幽陰妄想といふ。

阿難よ、當に知るべし、是正知を得る奢摩他の中に、諸の善男子、凝明正心なれば、十類の天魔其便を得ず。方に精研して生類の本を窮むることを得て、本類の中に於て、生元露るれば、彼の幽淸の圓に擾動する元を觀る。（若し）圓元の中に於て計度を起せば、是人は二無因論に墜入す。一には、是の人（六）本無因なりと見る。何を以ての故に、是の人は旣に生基全く破るゝことを得て、眼根の八百の功德に乘じて、八萬劫の有らゆる衆生の業流、灣環して此に死し彼に生ずるを見る。祇衆生の其處に輪廻するを見て、八萬劫の外は、冥として觀る所なし。便ち是の解を作す、此等世間の十方衆生は、八萬劫より來かた、無因にして自ら有りと。此の計度に由つて、正徧知を亡じ、外道に墮落し、菩提の性に惑ふ。二には、是の人（七）末無因なりと見る。何を以ての故に、是の人は生に於て旣に其根を見るに、人は人を生ずと知り、鳥は鳥を生ずと悟る。烏は從來黑く、鵠は從來白し、人天は本竪なり、畜生は本橫なり、白は洗ひ成せるに非ず、黑は染め造るに非ず、八萬劫より復た改移

【六】本無因とは、衆生の生滅する元は行陰なることを知ると雖も、識陰の由つて起るところの種子卽ち無明煩惱の熏染にあることを知らざるが故に、本來因なくして生滅ありとなす見解をいふ。卽ち萬有の本體は本無なりと斷ずる無因論師の說なり。

【七】末無因とは、萬有の本已に無因と斷ずるに由つて、一切現象の末も又無因と斷ずる見解をいふ。卽ち無明煩惱の熏習に由つて業を生じ業に差別あるが故に各々異類の生を感受することを知らざる見解にして、專門的にいへば、撥無因果の見をいふ。

なし。今此の形を盡すも、亦復是の如くならん。而も我本來菩提を見ず、云何ぞ更に菩提を成ずる事あらんや。當に知るべし、今日一切の物象は、皆本無因なりと。此の計度に由つて、正偏知を亡じ、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ。是を則ち名けて第一の外道の立無因論と爲す。

阿難よ、是の三摩［提］の中に、諸の善男子、凝明正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼の幽淸にして常に擾動する元を觀じて、（八）圓常の中に於て計度を起せば、是人四の偏常論に墜入す。一には、是人は心と境との性を窮むるに、二處無因なり、修習して能く二萬劫の中の十方衆生の有ゆる生滅は、咸く皆循環して曾て散失せずと知り。計して以て常と爲す。二には、是人は（九）四大の元を窮むるに、四性常住なり。修習して能く四萬劫の中の十方衆生の有ゆる生滅は、咸く皆體恒にして曾て散失せずと知り、計して以と常と爲す。三には、是人は（一〇）六根末那と執受の心意識の中の本元由の處を窮むるに、性常恒なるが故に、修習して能く八萬劫の中に一切衆生、循環して失はざれば本來常

【八】圓常とは、圓は周徧の義、常は常住の義にして、行陰（即ち業の儘）は一切處に周徧し、生滅相續して散失せざるをいふ。

【九】四大とは地、水、火、風にして、此四は萬物に周遍して至らざる所なく、一切萬物の大原素なるが故に大といふ。

【一〇】六根等は前に擧げたる八種の識をいふ。執受とは身體を受け纏きて執持して失はざるの義なり。本元由とは、第八阿賴耶識なり。

住なりと知り、不失の性を窮めて、計して以て常と爲す。四には、是の人既に想の元を盡くして、生理更に流止運轉することなし。生滅の想心は今已に永く滅して、理の中に自然に不生滅を成じ、心の所度に因つて、計して以て常と爲す。此計常に由つて、正徧知を亡じ、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ、是を則ち名けて第二の外道の立圓常論と爲す。

又三摩[提]の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼の幽清の常に擾動する元を觀じて、自他の中に於て計度を起せば、是人は四顛倒の見、一分の無常、一分の常論に墜入す。一には、是人は妙明の心を觀ずるに、十方界は徧くして、湛然なるを以て究竟の神我と爲す。是に從つて則ち我十方に徧せりと計す。凝明にして動ぜず、一切衆生は、我が心中に於て自ら生じ自ら死す、則ち我が心性、之を名けて常と爲す。彼の生滅する者は、眞の無常の性なり。二には、是人は其心を觀ぜずして、徧く十方恒沙の國土を觀るに、(二)劫壞の處を見ては名けて究竟の無常の種性と爲し、(三)劫不壞の處をば究竟の常と名く。三には、是は人別して我が心を觀ずるに、精細微密なること、猶ほ微塵の如く、十方に流轉す。性は移改なけれども、能く

【二】劫壞の處とは、世界の成立より破滅に至る四大時期あり、即ち成、住、壞、空にして之を四劫といふ、壞劫の時に至りて火、水、風三災起り色界の三禪天以下悉く壞滅に歸するを以て劫壞の處といふ。

【三】劫不壞の處とは、色界の四禪天以上の三災も及ばざる境界をいふ。

此の身をして卽ち生じ卽ち滅せしむ。其不壞の性をば、我性の常と名け、一切の死生の我より流出するをば、無常の性と名く。四には、是人は想陰盡ることを知り、行陰の流するを見て、行陰の常に流するを計して常の性と爲し。色受想等の今已に滅盡せるを名けて無常と爲す。此れ一分は無常、一分は常なりと計度するに由るが故に、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ、是を則ち名けて第三の外道の一分常論と爲す。

又三摩(提)の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼の幽淸の常に擾動する元を觀じて、(三)分位の中に於て計度を生ずれば、是人は四 (四)有邊[無邊]論に墜入す。一には、是人は心に生元の流用息まざることを計す。過(去)未(來)を計しては名けて有邊と爲し、相續心を計しては、名けて無邊と爲す。二には、是人は八萬劫を觀ずるとき、則ち衆生を見る、八萬劫の前は、寂として聞見なし、聞見なき處を名けて無邊と爲し、衆生ある處を名けて有邊と爲す。三には、是人は我偏く知りて、無邊の性を得たりと計す。彼の一切の人は、我が知の中に現ずればなり。我曾て彼の知の性を知らず、彼の無邊を得ざるの心を名くれば、但有邊の性なりと。四には、是人は行

【三】分位とは、四種あり、一に三際(過去、現在、未來)分位、二に見聞分位、三に彼我分位、四に生滅分位なり、一一の位に於て二樣の見解をなすが故に分位といふ

【四】有邊[無邊]論とは、邊表を見るを有邊といひ、邊表を見ざるを無邊といふ。

陰の空を窮めて、其の所見を以て、心路に一切衆生を籌度するに、一身の中に其れ咸く皆半ば生じ半ば滅すと計す。明けし其世界一切の所有も、一半は有邊、一半は無邊なりと。是の有邊無邊を計度するに由つて、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ。是を名けて則ち第四の外道の立有邊論と爲す。

又三摩〔提〕の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼の幽淸の常に擾動する元を觀じて、知見の中に於て計度を生ずれば、是人は四種顚倒の(一五)不死矯亂偏計戲論に墜入す。一に是の人は變化の元を觀じて、遷流の處を見ては、之を名けて變と爲す、相續の處を見ては、之を名けて恒と爲す。見の所見の處をば、之を名けて生と爲す。見に見ざる處をば、之を名けて滅と爲す。相續の因性斷せざる處をば、之を名けて增と爲す、正しく相續する中に、中の離せる所の處をば、之を名けて滅と爲し。各各に生ずる處をば、之を名けて有と爲し。互互に亡する處をば、之を名けて無と爲す。理を以て都て觀ずれば、用心の別見なり。求法の人ありて、來つて其義を問へば、答へて言ふ、我いま亦は生亦は滅、亦は有亦は無、亦は增亦は減なり

【一五】不死矯亂偏計戲論とは、衆生の生滅は想に由て有り、想を泯絕すれば、生滅を離れて涅槃を得るといふ見解より、色界の無想天を以て不死の境界となし、非理に於て强て理と說くを矯亂といひ、人の問に對して非理の說をなさゞるものは無想天に生じ、之に反するものは生ずるを得ず等と斷ずるを偏計戲論といふ。

と。一切の時に於て、皆其語を亂して、彼の前人をして章句を遺失せしむ。二に是の人は諦かに其心の互互に無なる處を觀じて、無に因つて證を得たり。人あり來つて問へば、唯一字を答へて、但其れ無と言ふ。無を除くの餘は、言說する所なし。三に是の人は諦かに其の心の各各に有なる處を觀じて、有に因つて證を得たり。人あり來つて問へば、唯一字を答へて、但其れ是と言ふ。是を除くの餘は、言說する所なし。四には、是の人有無俱に見る、其の境の枝れたるが故に、其の心も亦た亂る。人あり來つて問へば、答へて亦有は卽ち是れ亦無なれども、亦無の中には是れ亦有ならずと言ひ、一切矯亂して窮結すべきことなし。此の矯亂虛無を計度するに由つて、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ。是を則ち名けて第五の外道四顚倒性不死矯亂徧計戲論と爲す。

【二六】無盡の流とは、行陰卽ち業相の生じては滅し、滅しては生じ、展轉流行して、斷絕せざるをいふ。

又、三摩提、の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼の幽淸の常に擾動する元を觀じて、（二六）無盡の流に於て計度を生ずれば、是人は死後有相發心顚倒に墜入す。或は自ら身を固くして、色は是れ我なりと云ひ、或は我は圓にして國土を含徧すと見て、我に色を有すと云ひ、或は我の前緣、我に隨つて廻復すれば、色は我に屬すと云ひ、或は復た我は

行の中に依つて相續すれば、我は色に在りと云ひ、皆計度して死後にも相ありと云ふ。是の如く循環するに（一七）十六の相あり。此に從つて或は畢竟して煩惱あり、畢竟して菩提あり、兩性並び驅せて、各相觸れずと計す。此の死後の有を計度するに由るが故に、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ。是を則ち名けて第六の外道の立五陰中死後有相心顚倒論と爲す。

又三摩[提]の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼の幽淸の常に擾動する元を觀じて、先に滅除せる色受想の中に於て、計度を生ずれば、是人は死後の無想發心顚倒に墜入す。其色の滅するを見るに、形に所因なく、其想の滅するを觀るに心に所繫なく、其受の滅を知るに、復た連綴することなし。陰銷性散すれば、縱ひ生理ありとも、而も受想なければ、草木と同じ。此の質は現前に猶ほ不可得なり、死後に云何ぞ更に諸相あらん。之に因つて勘校するに、死後には相なし。是の如く循環するに、（一八）八の無相あり。此に從つて或は涅槃の因果も一切皆空にして徒らに名字のみ有りて、究竟して斷滅すと計す。此の死後の無を計度するに由るが故に、外道に墮落し

【一七】十六の相とは、今四の或の字を以て色陰に就きて四種の見解を立てて死後に皆相ありと爲す、是の如くして受、想、行の三陰に於ても亦各々四相を立つるが故なり。

【一八】八の無相とは、已に色陰に於て形の由つて來る因もなければ、去つて受くる果もなしと斷ず、餘の受、想、行の三陰に就いても又同じく、是の如きの見解をなすが故に八の無相論となるなり。

て、菩提の性に惑ふ。是を則ち名けて第七の外道の立五陰中死後無相心顛倒論と爲す。

又三摩〔提〕の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め彼の幽淸の常に擾動する元を觀じて、行の存せる中に於て、受想の滅を兼ねて、雙べて有無を計して、自體相破す。是人は（一九）死後の倶非起顛倒論に墜入し、色受想の中に、有と非有とを見、行の遷流する內に、無と不無とを見る。是の如く循環して、陰界を窮盡するに、八の倶非の相ありとし、隨つて一緣を得れば、皆死後の有相無相を言ふ。また諸行の性は遷訛すと計するが故に、心に通悟を發して、有無倶に非し、虛實措を失ふ。此の死後の倶非を計度するに由つて、後際昏瞢にして、從ふべきこと無きが故に、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ。是を則ち名けて第八の外道の立五陰中死後倶非心顛倒論と爲す。

又三摩〔提〕の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼の幽淸の常に擾動する元を觀じて、（二〇）後後の無に於て計度を生ずれば、是人は（二一）七斷滅論に墜入す。

【一九】死後の倶非とは、已に滅無なりと斷定したる前の色、受、想の三陰を以て、現存せる行陰の有を觀するに、行も又滅無に歸すと見るが故に同じ非有を得たり。行陰を以て前三陰を觀するに、行正に有なるが故に前三陰も又然りと見る、之に由つて亦同の非無を得たり。現在已に爾り死後も又是の如しと觀するが故に死後の倶非といふ。

【二〇】後後の無とは、行陰の時々刻々滅無に歸するをいふ。

【二一】七斷滅論とは、設七際に生ずるとも、死後は皆滅無に歸すると立つる見解をいふ。

或は身も滅し、或は欲盡も滅し、或は苦盡も滅し、或は極樂も滅し、或は極捨も滅すと計す。是の如く循環して、(三二)七際を窮盡するに、現前に銷滅し、滅し已つて復することなし。此の死後斷滅を計度するに由つて、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ。是を則ち名けて第九の外道の立五陰中死後斷滅心顛倒論と爲す。

又三摩[提]の中に、諸の善男子、堅凝正心なれば、魔は便を得ず。生類の本を窮め、彼の幽清の常に擾動する元を觀じて、(三三)後後の有に於て計度を生ずれば、是人は五涅槃論に墜入す。或は欲界を以て(三四)正轉依と爲す、圓明を觀見して愛慕を生ずるが故に、或は初禪を以て(正轉依とな)す、性は憂なきが故に。或は二禪を以て(正轉依とな)す、心に苦なきが故に。或は三禪を以て(正轉依とな)す、極悅隨ふが故に。或は四禪を以て(正轉依とな)す、苦樂二ながら亡じて、輪廻生滅の性を受けざるが故に。有漏の天に迷うて、無爲の解を作す、(三五)五處の安穩を勝淨の依と爲す。是の如く循環するに、五處を究竟とす。此の五現涅槃を計度するに由つ

【三二】七際とは、三界を七に分類せるものにして、人間、欲界、初禪、二禪、三禪、四禪、無色界をいふなり。

【三三】後後の有とは、行陰の滅しては生じ、生じては滅し、生滅相續して間斷なき相をいふなり。

【三四】正轉依とは、生死の苦を轉じて、涅槃の境界に到る、正しき依り場所の義なり。五涅槃論とは、下に說くところの五轉依をいふなり。

【三五】五處の安穩とは、欲界及四禪の五處に於ける有漏の定慧に依りて、少分の涅槃を得たるをいふ。

て、外道に墮落して、菩提の性に惑ふ。是を則ち名けて第十の外道の立五陰中五現涅槃心顛倒論と爲す。

阿難よ、是の如く十種の禪那の狂解は、皆是れ行陰において、用心交互せるが故に、斯の悟を現ず。衆生は頑迷にして、自ら忖量らず、此の現前に逢うて、迷を以て解と爲し、自ら聖と登れりと言ひ、大妄語を成じて無間獄に墜つ。汝等必らず須らく如來の語を將て、我が滅後に於て、末法(の世)に傳示して、徧く衆生をして斯の義を覺了せしむべし。心魔をして自ら深孽を起さしむること無れ。保持覆護して、邪見を消息し、其身心をして眞義を開覺し、無上道に於て、枝岐に遭はざらしめよ。心祈をして少を得て足れりと爲して、大覺王の淸淨標指と作さしむること勿れ。

阿難よ、彼の善男子、三摩提を修して、行陰盡くれば、諸の世間の性は、幽淸にして擾動する(三六)同分の生機、倏然として隳裂し、沈細にして(三七)補特伽羅に綱紐して業に酬ふる、深脉感應懸に絕え、涅槃の天に於て、將に大に明悟ならんとするに、雞の後に鳴くとき、東方を瞻顧すれば、已に精色あるが如し。六根虛靜にして、復た馳せ逸することなく、內內湛明にして、入に

【三六】同分の生機とは、所作の業因を同ふせる衆生の機類をいふなり。
【三七】補特伽羅は前に出づ、即ち果報の義にして、人の身體をいふなり。

所入なし。深く十方十二種類の命を受くるの(二八)元由に達して、執の元に由れりと觀ずれば、諸類召かず。十方界に於て、已に其同を獲て、精色沈まざれば、幽祕を發現す。此を則ち名けて識陰の區宇と爲す。若し群召に於て、已に同を獲る中に、(二九)六門を銷磨して、合開成就すれば、見聞鄰に通じて、互用清淨なり。十方世界と及び身心と、吠瑠璃の如くにして、內外明徹なるを識陰盡くと名く。是の人は則ち能く命濁を超越す。其所由を觀ずるに、罔象虛無、顚倒妄想を以て其の本と爲す。

【二八】元由。第五の識陰をいふ。即ち十二類の衆生の由って來たる元因由緒なればなり。

【二九】六門とは、眼、耳、鼻、舌、身、意の六根にして、色、聲、香、味、觸、法の六塵の出入するところなるが故に門といふ。

卷の第十の二

阿難よ、當に知るべし、是の善男子、諸行の空を窮めて、識に於て元に還るに、已に生滅を滅すと、而も寂滅に於て、精妙未だ圓ならず。能く己身の根隔をして合開せしむれば、亦十方の諸類と覺を通じ、覺知通溜して、能く圓元に入る。若し所歸に於て、眞常の因を立して、勝解を生すれば、是の人は則ち所因を因とする執に墮す。婆毘迦羅が所歸の冥諦は其伴侶と成り、佛菩提に迷うて、知見を亡失す。是を第一に、所得の心を立てゝ、所歸の果を成じ、圓通に違遠し、涅槃城に背き、外道の種を生ずと名く。

阿難よ、又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず。若し所歸に於て、覽て自體と盡虛空界の十二類の内の有ゆる衆生は、皆我が身中より一類に流出せりと爲して、勝解を生ずれば、是の人は則ち非能を能とする執に墮す。(一)摩醯首羅の無邊身を現ずれば、其伴侶と成り、佛菩提に迷うて、知見を亡失す。是を第二に、能爲の心を立てゝ、能事の果を成じ、圓通に違遠して、涅槃城に背き、(二)大慢天我徧圓

【一】摩醯首羅（Maheśvara）とは、大自在天神にして、此天は我身一切處に徧滿すとなすが故に無邊身を現すといふ。

【二】大慢天とは、摩醯首羅の異名なり。能はざるを能ふといふ、故に大慢の名あり。

の種を生ずと名く。

又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず。若し所歸に於て歸依する所あれば、自ら身心も彼より流出し、十方虛空も咸く其より生起するかと疑つて、卽ち都起し宣流する所の地に於て、眞常の身、無生滅の解を作し、生滅の中に在つては、早く常住を計す。既に不生に惑ひ、亦生滅に迷ひ、沈迷に安住して勝解を生ずれば、是の人は則ち非常を常とする執に墮し、自在天を計すれば、其伴侶と成つて、佛菩提に迷ひ、知見を亡失す。是を第三に因依の心を立て、妄計の果を成じ、圓通に違遠して、涅槃の城に背き、倒顚の種を生ずと名く。

又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず。若し（三）所知に於て、知遍圓なるが故に、知に因つて解を立て、十方の草木皆情あることと人と異なることなしと稱す。（謂ゆる）草木は人と爲り、人は死して還つて十方の草樹と成りて擇ふことなく、徧く知ありと〔なして〕勝解を生ずれば、是の人は則ち無知を知とする執に墮す。（四）婆吒と霰尼とが一切の覺と執すれば、其伴侶を成りて、佛菩提に迷ひ、知見を亡

【三】所知とは、事理の二に迷ふ上に二種の障あり、一を煩惱障といひ、二を所知障といふ。卽ち所知障にして、識陰の惑體をいふなり。

【四】婆吒と霰尼とは、二人の婆羅門にして、草木土石も皆知覺ありとの見解をなすものなり。

失す。是を第四に圓知の心を計して虚謬の果を成じ、圓通に違遠して涅槃城に背き、倒知の種を生ずと名く。

又善男子、諸行の色を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず。若し圓融の根互用する中に於て、已に隨順することを得れば、便ち圓化に於て一切發生す、火の光明を求め、水の清淨を樂ひ、風の周流を愛し、塵の成就を觀じて、各各崇事す。此の群塵を以て、發して本因と作して、常住の解を立すれば、是の人は則ち無生を生とする執に墮す。諸の迦葉波、並に婆羅門は、心を勤め身を役して、火に事へ水を崇めて、生死を出づることを求むれば、其伴侶と成りて、佛の菩提に迷ひ、知見を亡失す。是を第五に崇事に計著して、心に迷ひ物に從つて、妄求の因を立て、妄冀の果を求めて、圓通に違遠して、涅槃の城に背き、顚化の種を生ずと名く。

又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず。若し圓明に於て、(五)明中は虚なれども、(六)群化を滅するには非ずと計して、(七)永滅の依を以て、所歸の依と爲して、勝解を生ずれば、是の人は則ち無歸を歸とする執に墮す。無想天の中に、諸の

【五】明中とは、圓明の理をいふ、卽ち心の智體なり。
【六】群化とは、一切の諸法をいふ。卽ち諸法は唯識の所變にして差別あるを以てなり。
【七】永滅の依等とは、圓明の理體の畢竟空なるに於て、依り場處とするをいふ。

（八）舜若多と、其伴侶と成つて、佛の菩提に迷ひ、知見を亡失す。是を第六に圓虛無心にして空亡の果を生じ、圓通に違遠して涅槃の城に背き、斷滅の種を生ずと名く。

又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て、精妙未だ圓ならず。若し圓常に於て、身を固して常住ならしめ、精因に同じと、長く傾逝せじと〔なして〕勝解を生ずれば、是の人は則ち非貪を貪とする執に墮す。諸の（九）阿斯陀の長命を求むる者と、其伴侶と成りて、佛の菩提に迷ひ、知見を亡失す。是を第七に命元に執著して、固妄の因を立て、長勞の果に趣き、圓通に違遠して涅槃の城に背き、妄延の種を生ずと名く。

又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず、命の互通することを觀じて、却つて塵勞を留めて、其銷盡を恐る。便ち此の際に於て蓮華宮に坐し、廣く七珍を化し、多く寶媛を增して、其心を縱恣せんとして勝解を生ずれば、是の人は則ち無眞を眞とする執に墮し、（一〇）吒枳迦羅と其伴侶と成りて、佛の菩提に迷ひ知見を亡失す。是を第八に邪思の因を發し、熾塵の果を立て、圓通に違遠して、涅槃の城に背き、

【八】舜若多は前に前づ、空生の義にして、前に擧げたる空處をいふなり。
【九】阿斯陀（Asita）。無比と譯す。長壽の仙人なり。
【一〇】吒枳迦羅は未だ譯語なし。既に欲境を變化して自ら樂むが故に、或は欲界の自在天の類ならんかといふ。

天魔の種を生ずと名く。

又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず。(若し)(一)命明の中に於て精麤を分別し、眞僞を疏決し、因果相酬ゆれば、唯感應を求めて清淨の道に背く。謂ゆる苦を見て集を斷じ、滅を證して道を修す。滅に居して已に休み、更に前進せずと〔なして〕勝解を生ずれば、是の人は則ち(二)定性の聲聞に墮し、諸の(三)無聞の僧增上慢の者と、其伴侶と成りて、佛の菩提に迷ひ、知見を亡失す。是を第九に(四)圓精心に應じ、寂に趣く果を成じて、圓通に違遠して、涅槃の城に背き、(五)纏空の種を生ずと名く。

又善男子、諸行の空を窮めて、已に生滅を滅すとも、而も寂滅に於て精妙未だ圓ならず。若し圓融清淨の覺明に於て、深妙を發研して、即ち涅槃を立てゝ、而も前進せじと〔爲して〕勝解を生ずれば、是の人は則ち定性の辟支(佛)に墮し、(六)諸緣獨倫の廻心せざる者と、其伴侶と成りて、佛の菩提に迷ひ、知見を亡失す。是を第十に圓覺心に溜

【一】命明とは、深く識體を窮むるによりて、衆生の生滅する元由を明らむるをいふ。

【二】定性とは、聲聞四果位の修證を以て無上涅槃と心得、少を得て足れりとなす輩をいふ。

【三】無聞の僧とは、大乘の法を聞くことなくして、還って聽說を違ふするものをいふ。

【四】圓精とは、圓は周通の義にして、精は麁滿を絕したるの義なり。謂ゆる衆生生滅の元由たる識をいふなり。

【五】纏空とは、空理に纏縛せらるゝの意にして、寂滅無爲に止まつて百尺竿頭一步を進むるの分なきをいふなり。

【六】諸緣獨倫とは、辟支の境界に在る輩にして、辟支を譯して、緣覺又は獨覺といふな

ふて、湛明の果を成じ、圓通に違遠して、涅槃の城に背き、覺圓明にして（二七）化圓ならざる種を生ずと名く。

阿難よ、是の如く十種の禪那の中途に狂を成ずることは、迷惑に依つて、未足の中に於て、滿足の證を生ずるに因れり。皆是れ識陰の用心交互するが故に斯の位を生ず。衆生は頑迷にして、自ら忖量せず、此現前に逢うて、各所愛の先習の迷心を以て、而も自ら休息して、將て畢竟所歸寧の地と爲して、自ら無上菩提を滿足すと言ひ、大妄語を成ずれば、外道邪魔所感の業終つて、無間獄に墮す。聲聞緣覺は增進を成さず。汝等心を存して如來の道を乘りて、此の法門を將て、我が滅後に於て、末世に傳示して、普く衆生をして斯の義を覺了せしめて、（二八）見魔をして自ら深孽を作さしむること無れ。保綏哀救して邪緣を消息し、其身心をして佛の知見に入つて、始より成就まで岐路に遭はざらしめよ。是の如きの法門、先過去世恒沙劫の中の微塵の如來は、此れに乘じて心開けて無上道を得たまへり。識陰若し盡きぬれば、則ち汝現前に諸根互用す、互用の中より能く菩薩の金剛乾慧に入る。圓明の精心、中に於て化を發すること、淨瑠璃の内に寶月を含

り。卽ち十二因緣を觀じて空理を證し、或は師なくして諸の世相を觀じて涅槃を悟るが故に此名あり。

【二七】化圓ならざる種とは、心を廻らして大乘に入ること能はざる定性の徒なるが故に、更に慈心を發して衆生を教化するの妙用なきをいふなり。

【二八】見魔とは前に擧げたる二障の中の所知障なり、卽ち中道實相の眞理に迷ふところの障礙をいふ。

むが如し。
是の如く乃至十信、十住、十行、十廻向、四加行の心、菩薩所行の金剛、十地等覺の圓明を超えて、如來の妙莊嚴海に入り、菩提を圓滿して無所得に歸す。此れは是れ過去先佛世尊の奢摩他と毘婆舍那との覺明ありて、分析したまへる微細の魔事なり。魔境の現前するとき汝能く諳識せば心垢洗除して邪見に落ちず。陰魔銷滅し、天魔摧破し、大力の鬼神は魄を褫て、逃逝し、魑魅魍魎は復た出生すること無くして、直に菩提に至るまで、諸の乏少なく下劣も增進して、大涅槃に於て、心迷悶せじ。若し諸の末世の愚鈍の衆生、未だ禪那を識らず、説法を知らず、樂つて三昧を修せんとき、汝邪に同じきことを恐れば、一心に勸めて我が佛頂陀羅尼呪を持せしめよ。若し未だ誦すること能はずば、禪堂に寫し、或は身上に帶せば、一切の諸魔も動ずること能はざる所なり。汝當に恭欽すべし、（此れは是れ）十方如來の究竟修進最後の垂範なり。』

阿難は卽ち座より起ち、佛の示誨を聞きて、頂禮欽奉し、憶持して失すること無し。大衆の中に於て、重ねて復た佛に白さく、『佛の言ふ所の如く、五陰の相の中に五種の虛妄の本たる想心、我等平常に未だ如來微妙の開示を蒙らず。又此の五陰は、倂せて銷除すとや爲ん、次第に盡すとや爲ん。是の如きの五重は、何くに詣りてか界と爲ん。唯願くは如來、大慈を發宣して、此の大

衆の爲に、心目を淸明にして、以て末世の一切衆生の爲に將來の眼と作したまへ。』

佛、阿難に告げたまはく、『精眞妙明本覺圓淨にして、死生及び諸の塵垢を留むるに非ず、乃至虛空も皆妄想に因つて生起する所なり。斯れ元本覺妙明の眞精なるに、妄に以て諸の器世間を發生すること、演若多が頭に迷うて影を認むるが如し。妄元より因なし、妄想の中に於て、因緣の性を立す。因緣に迷ふ者は、稱して自然と爲す。彼の虛空の性は、猶ほ實に幻より生ず、因緣自然は、皆是れ衆生妄心の計度なり。

阿難よ、妄の所起を知らば、妄の因緣を說くべし。若し妄元無ならば、妄の因緣を說くも、元所有なけん、何に況や知らずして自然を推す者をや。是の故に如來は、汝が爲に五陰の本因は同じく是れ妄想なりと發明す。汝が體は先づ父母の想に因つて生せり。汝が心想に非ずんば則ち想中に來つて命を傳ふること能はず。我、先に言ふが如く、心に酢味を想へば、口中に涎を生じ、心に高きに登ることを想へば、足の心に酸起る。懸崖有るにあらず、酢物も未だ來らず、汝が體、必らず虛妄の(一九)通倫に非ずんば、口の水如何ぞ酢を談ずるに因つて出ん。是の故に當に知るべし、汝が現〔在〕の色身を名けて、堅固第一の妄想と爲す。

【一九】 通倫とは、同類ないふ義なり。

卽ち此の說く所と、高きに臨める想心と、能く汝が形をして、眞に酸澁を受けしむ。受の生ずるに由り因つて、能く色體を動ず。汝今現前に順益違損して、二つながら現に驅馳するを名けて虛明第二の妄想と爲す。

汝が念慮に由つて、汝が色身を使ふ。身念倫に非ずんば、汝が身何に因つてか念に隨つて使はれん。種種に像を取ること心より生じて、形を取れば念と相應し、寤むれば卽ち想心となり、寐ねば諸夢と爲る。則ち汝が想念、妄情を搖動するを名けて融通第三の妄想と爲す。

(三〇)化理は住せず、運運として密に移る、(謂ゆる)爪は長じ、髮は生じ、氣は銷し、容は皺んで、日夜に相代れども、曾て覺悟することなし。阿難よ、此れ若し汝に非ずんば、云何ぞ體遷る。如し必ず是れ眞ならば、汝何ぞ覺することなきや。則ち汝が諸行の念念停らざるを、名けて幽隱第四の妄想と爲す。

【三〇】化理とは、變化の理法にして、遷流を以て義とする行陰の相をいふなり。

又汝が精明湛として搖かざる處を恆常と名けば、身に於て見聞覺知を出でず。若し實の精眞ならば、習妄を容れず、何に因つてか汝等曾て昔年に於て一の奇物を視て、年歲を經歷して憶忘倶に無けれども、後に於て忽然として覆ねて前の異を視、記憶すること宛然として、曾て遺失せ

ざるときは則ち此の精了、湛として搖かざる中に、念念熏を受くること何の籌算かあらん。阿難よ、當に知るべし、此湛の眞に非ざること、急流の水を望めば恬靜なるが如くにして、流急なれども見へず、是流なきに非ざるが如し。若し想の元に非ずんば、寧ろ妄習を受けんや。汝が六根互用し合開するに非ずは、此の妄想は時として滅を得ること無けん。故に汝が現在の見聞覺知の中の（三一）串習の機は、則ち湛了の内の罔象虛無なる、第五の顚倒微細の精想なり。

阿難よ、此の五（三二）受陰は、五妄想をもて成せり。汝今（三三）因界の淺深を知らんと欲せば、唯色と空と、是れ色の邊際なり。唯觸と離と、是れ受の邊際なり。唯記と忘と、是れ想の邊際なり、唯滅と生と、是れ行の邊際なり。湛を入して湛に合すれば、識の邊際に歸す。此の五陰の元は、重疊して生起す。（謂ゆる）生は識に因つて有り、滅は色に從つて除く、理は則ち頓に悟り、悟に乘じて併せて銷す。事は頓に除くに非ず、次第に因つて盡す。我已に汝に劫波の巾結を示す。何の明らめざる所あつてか、再び此に詢問す。汝應に此の妄想の根元を將て、心に開通することを得て、將來末法の中の、諸の修行の者に傳示して、虛妄な

【三一】串習の機とは、六根を串きて連綿として斷絕することなき想の幾微にして、卽ち識の本をいふなり。

【三二】受陰とは、色、受、想、行、識の五陰は一切衆生の受くるところの報なるが故に受といふ。或は取陰ともいふ、卽ち衆生は皆之を取りて自身の體とするが故に取陰の名あり。

【三三】因界とは、五陰の界畔をいふなり。

りと識りて、深く自の生を厭ひ、涅槃あることを知つて、三界を繼はざらしむべし。』

阿難よ、若復人ありて、十方所有の虚空に徧滿〔するが如く〕七寶を盈滿して、持して以て微塵の諸佛に奉上し承事し供養して、心に虚く度ること無くんば、意に於て云何。是人此の施佛の因緣を以て、福を得ること多きや不や。』阿難答へて言く、『虚空無盡にして、珍寶無邊なり。昔衆生ありて、佛に七錢を施し、身を捨てゝ猶ほ轉輪王の位を獲たり。況や復た現前に虚空を既に窮め、佛土に充遍して、皆珍寶を施さんこと、劫を窮めて思議すとも尙ほ及ぶこと能はじ、此の福云何ぞ更に邊際あらん。』

佛、阿難に告げ給はく、『諸佛如來の語は虚妄なし。若し復た人ありて、身に四重十（四）波羅夷を具して、瞬息に卽ち此方他方の阿鼻地獄を經、乃至十方の無間〔地獄〕を窮め盡して、經歷せずといふこと無からんに、能く一念を以て此の法門を將て、末劫の中に於て、未學に開示せば、是の人の罪障は、念に應じて銷滅し、其受くる所の地獄の苦因を變じて、安樂國を成し、福を得ること前の施人に超越すること、百倍千倍千萬億倍ならん。是の如く乃至算數譬喩も及ぶこと能はざる所なり。

【四】 波羅夷（Pārājika）とは。梵語にして、極惡、又は斷頭等と譯す。重惡罪の義にして、殺生、偸盜、邪婬、妄語の四重惡と、以上の四に綺語、惡口、兩舌、貪欲、瞋恚、愚癡を加へたる十惡業をいふなり。

阿難よ、若し衆生ありて、能く此の經を誦し、能く此の呪を持せんに、如し我廣く說かば、劫を窮むとも盡きじ。我が教言に依りて、教の如く道を行ぜば、直に菩提を成じて、復た魔業なからん。佛、此經を說き已るに、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷、一切世間の天人阿修羅、及び諸の他方の菩薩、二乘聖仙童子、並に初發心の大力の鬼神、皆大に歡喜し、禮を作して去りぬ。

國譯首楞嚴經　終

(一)于闐國三藏(二)實叉難陀奉詔譯

(三)大乘入楞伽經解題

【序言】渺乎たる如來自覺の妙趣を寫出して、能く敎海の浩汗を湛へ、璨然たる佛陀の光明を放射して、善く群生の昏迷を照破するものは、佛心を宗とし、自覺を要とする楞伽山頂の大獅子吼、卽ち此の大乘入楞伽經に如くものはなからう。彼の和漢兩朝に於ける禪宗の初祖、達磨大師が、「われ震旦の有ゆる經敎を觀るに、唯、楞伽四卷のみ、以て心を印すべし」と高唱し給ひしもの、洵に所以なきにあらずである。爾來、此の經典は、祖祖相承して、敎外別傳の心法至寶とせられ、不立文字の要諦骨髓とせられ、以て禪林不可缺の暖皮肉となつたのである。

されば此の經典の、義趣幽妙にして、管窺蠡測の及ぶ能はざるは、固より其の所である。が、

【一】于闐は國名、(Khoten)

【二】實叉難陀(Śikṣānanda)に西暦六九五年より七一〇年の間に、此の經の外、大乘起信論を初め、十五部の飜譯をなし、五十九歳の時入寂せし人なり。

【三】此の原名を Laṅkāvatāra Sūtra と云ふ。Laṅkā は地名、Avatāra は入と譯す。

甚深幽玄なるの故を以て、徒らに之を高閣につかね置くは、佛子法孫たるものの學ぶべき態度ではあるまい。で、以下且く此の經の內容を概觀しよう。

【內容の要略】 凡そ佛敎の聖典は、㈣序分と、㈤正宗分と、及び㈥流通分との三分より成り立つて居るのであるが、古來この經は違例で、歸結卽ち流通分を缺くと言はれて居る。こは勿論宋譯の四卷楞伽經に就ての立言である。唐譯の七卷楞伽經と、魏譯の十卷楞伽經とには、陀羅尼品と偈頌品とを附加してあるから、正宗分の總括的重說と言ふ意味よりせば、最後の偈頌品が、流通分卽ち結論と觀られないでもない。但し陀羅尼品は云はずもあれ、偈頌品も、其の詩形並に內容の上より考へて、如何にも後世の添加補成のやうに見ゆる點が多い。で、予も亦た古來の註疏家に隨ひ、流通分を缺けるものとして、一經の大要を解說する方が無難だと思ふ。

此の經の序文には、楞伽王羅婆那が、世尊を楞伽山頂に拜請し奉りて、

『我等は、いまの楞伽城中に住する衆人と共に、一心に離言自證の法門を拜聽せんと欲す。』

『われ去來の世を念ふに、無量の諸佛は、諸の菩薩に圍繞せられて、楞伽經を演說し給ふ。』

【四】序分とは、今日の所謂序論又は序言のこと。
【五】正宗分とは、今日の所謂本論のこと。
【六】流通分とは、今日の所謂結論のこと。

『請ふ、佛よ、無量の夜叉衆を哀愍して、彼の寶嚴城に入り、此の妙なる法門を説き給へ。』
と哀願懇望し、更に大慧菩薩を勸請して、
『我いま大士を請じて、世尊に奉問せしむ。我と夜叉衆と及び諸の菩薩は、一心に如來の自證智の境界を聞かんことを願ふ。此の故に咸「大士を」勸請す。』
『大士は是れ修行者にして、言論中の最勝「者」なり。是故に咸「大士に對して」尊敬「の心」を生じ、汝に勸めて法を問はんことを請ふ。』
と言ひ、次に如來の許を得て、種種の上妙なる供養を營み、佛陀の教益を受くるに至れる縁由を説いてある。換言せば、一經の因つて起れる因縁を明かにする。是れ此の經の序説である。次に此の經の正宗分は、先づ二大段に分けて見る方が妥當である。即ち第一大段には、(七)一心眞如を直指し、以て三界は唯心の所現なる大宗旨を總括的に説明し、第二大段には、(八)委曲に一心生滅の理由因縁を談じ、以て(九)萬法唯識の教義を顯示してある。斯くて最初の第一大段は、

天　(一〇)大慧菩薩の提起せる一百八の偈問。

【七】本經十八頁より三十三頁三行に至る。
【八】本經三十三頁四行より卷末まで。
【九】萬法唯識とは、宇宙の萬有は皆悉く吾人が心の現はす所なりと主張する佛教の唯心論の教義なり
【一〇】本經十九頁六行より二十六頁十一行に至る。

地　(一一)世尊の是に對する偈答。

の二段に分れて居る。而して彼の明朝の德清師は、其の觀楞伽記に於いて、此の經の正宗分の第二大段を

第一　(一二)眞妄の因を明して、廣く(一三)八識を示し、以て因緣生滅の相を顯はす。

第二　妄を返して眞に歸することを明し、(一四)五法、(一五)自性、(一六)無我等の諸方面より、邪正の因果の相を辨明す。

第三　五法、自性、八識及び無我の究竟差別の相を明す。

第四　(一七)法身の常住を明し、以て煩惱卽菩提、生死卽涅槃の平等絕對の相を明す。

第五　(一八)藏心の自性を示し、以て眞妄生滅の平等の相を明す。

第六　廣く(一九)六度を明し、以て自性妙行無修の相を示す。

第七　廣く衆の疑を決し、以て法身は過を離れたる旨を顯はす。

第八　特に性戒を示し、以て(二〇)生佛平等の理由を彰かにす。

【一一】本經二十六頁十二行より三十三頁三行に至る。

【一二】眞妄。眞とは獨立自存の眞の實在を云ひ、妄とは因緣によつて生ずるもの、及び吾人が妄想の結果になれるものを云ふ。

【一三】八識とは、眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識、末那識及び阿賴耶識なり。

【一四】五法とは、名と相と妄想と正智と如如とを云ふ。而して如如とは眞如卽ち眞理の義なり。

【一五】自性とは、物の有する三の性質なり。本經一頁の脚註を見よ。

【一六】無我とは、個人にも個物にも、執つて以て永久不變の我とすべきものなきを云ふ。

【一七】法身とは梵語（Dharma-

の八段に分けて解釋して居る。で、予も亦た德清師に隨つて、此の經の大要を略說しよう。

第一分段なる「眞妄の因を明し、廣く八識を說き、以て生滅因緣の相を顯はす」の一段は、また二章に分れて、

天 （二一）略して唯識を明し、以て邪正の因を別つ。

地 （二二）廣く八識を明し、以て識智の相を示す。

となるのである。而して此の（天）章は又更に、

甲 （二三）眞の唯識の量を明し、以て邪宗を辨ず。

乙 （二四）七種の聖義を示し、以て邪見を別つ。

丙 （二五）邪因を揀び、以て正因を示す。

の三節に分たれ、（地）章も亦た更に分れて、

丁 （二六）八識の相を示す。

戊 （二七）三智の相を明す。

の二節となるのである。然り而して（甲）は又さらに

---

kāya）の譯語にて眞理又は眞如の體を云ふ。

【一八】藏心とは、萬有の種子を藏する心と云ふ意味にて、第八阿賴耶識の譯名なり。

【一九】六度とは、布施（Dāna）と、持戒（Sīla）と忍辱（Kṣānti）と精進（Vīrya）と禪定（Dhyāna）と智慧（Prajñā）となり。度（Pāramitā）とは蓋し迷界の此岸より悟界の彼岸に到るの義なり。

【二〇】生佛とは、衆生と佛陀の略語。

【二一】本經三十三頁詮識異外分より、三十八頁末行に至る。

【二二】本經三十九頁識轉不壞分、乃至四十五頁勤修三相分。

【二三】本經三十三頁詮識異外分の全段

【二四】本經三十五頁七種性心分

ア　眞の唯識を顯はす。
イ　喩を以て二見を破す。
ウ　邪宗を揀辨す。

の三小節に分たれ、(乙)は、

エ　正義を示す。
オ　明かに非を斥く。

の二小節より成り、(丙)も亦た

カ　邪因を揀ぶ。
キ　正因を示す。

の二小節に分たるるのである。要するに我等は、本經の三十三頁より四十五頁に至る間に於いて、眞實獨立の實在と妄想依立の假在の因を了り、八識の如何なるものなるかを學び、以て因緣によつて生滅するものの實相を明らめねばならぬ。

第二分段なる「妄を返して眞に歸し、五法、自性及び無我に約して、以て邪正因果の相を辨ず」るの一段は、先づ、

の全段。
【三五】三十五頁揀正見見異分の全段。
【三六】本經三十九頁識轉不壞分より、四十五頁達心修方分に至る
【三七】本經四十五頁勤修三相分の全段。

天　(二八)邪正を辨じて、一乘理行の因果の相を顯示す。

地　(二九)前の理行に依つて、斷惑證眞の因果の相を顯示す。

の二章に分たれ、(天)は又分れて

甲　因地の心を辨明す。

乙　果地の覺を辨明す。

の二大節となり、(甲)は又さらに

上　邪を破して正を顯はし、以て常住の眞理を示す。

下　理の勘定に依つて、以て邪正の二行を辨ず。

の二段に分たれる。然り而して(上)は又さらに、二分せられて、

ア　三門に約して邪因を破し。以て正因を顯はす。

イ　一心に約して妄計を破し、以て眞理を顯はす。

となり、而して ア は

い　(三〇)五法を明す。

ろ　(三一)三自性を明す。

【二八】本經四十五頁有無想離分、乃至六十一頁末行。
【二九】本經六十二頁空無離性分、乃至百七十六頁十一行。
【三〇】本經四十五頁有無想離分より五十七頁三行に至る。
【三一】本經五十七頁三自性分の全段。

は　(三二)二無我を明す。
に　(三三)有無の二見を破す。
ほ　(三四)正因を結示す。
の五節より成り立つて居る。然り而して、(い)は又更に
(一)(三五)名相妄想を破す。
(二)(三六)正智如如を顯はす。
(三)(三七)二種の邪因を破す。
(四)(三八)果を擧げて因を驗す。
(五)(三九)果を勘して因を知る。
(六)(四〇)因果一如を示す。
の六小節に分れて居る。而して(イ)「一心に約して妄計を破し、以て眞理を顯はす」の章は、
へ　(四一)寂滅の一心を明す。
と　(四二)如來藏の性を示す。

【三二】本經五十八頁二無我相分の全段。
【三三】本經五十九頁建立誹謗分の全段。
【三四】本經六十一頁隨類普現分の全段。
【三五】本經四十五頁末行より四十九頁に至る。卽ち有無想離分及び離見心授分。
【三六】本經四十九頁五行淨流漸頓分と三身簡說分。
【三七】本經五十一頁五行二種聲聞分及び內外常異分。
【三八】本經五十三頁聲聞涅槃分と不生差別分の全段。
【三九】本經五十四頁五性分別分の全段。
【四〇】本經五十六頁闡提差別分の全段。
【四一】本經六十二頁空無離性分より遮言表義分卽ち六十四頁

の二節に分たれて。之を要するに、本經の四十五頁より、六十五頁に至る二十頁の間には、破邪顯正、卽ち外道二乘の、邪宗邪義を破斥し、以て常恒不變なる眞理の如何なるものなるかを說破してあるのである。次に(下)〔四三〕「理の勘定に依つて、以て邪正の二行を辨ず」るの段は、更に四章に分れて

ア　總じて正行の方便を示す。

イ　略して邪正因果の相を示す。

ウ　廣く邪正の因果差別の相を示す。

エ　果を擧げて因を驗し、以て一乘眞因の相を示す。

となり、(ア)は又更に、

い　〔四四〕能觀の智を示す。

ろ　〔四五〕所破の惑を明す。

は　〔四六〕圓成の理を顯はす。

に　〔四七〕過を離れ非を絕することを顯はす。

に至る。

【四二】本經六十四頁如來藏相分全段。

【四三】本經六十六頁乃至百○九頁。

【四四】本經六十六頁修行方便分の全段。

【四五】本經六十七頁緣因漸俱分の全段。

【四六】本經七十頁言說想分及び離四句義分。

【四七】本經七十七頁說法建立分の全段。

の五節となり、(イ)も亦た四節に分れて、

ほ　(四八)略して邪正の二因を示す。

へ　(四九)略して邪正の二果を明す。

と　(五〇)略して當に轉ずべき二性を示す。

ち　(五一)略して感應の二徴を示す。

となり、(ほ)には又更に、二種の邪因禪と、二種の正因禪との二方面を説き、(へ)にも亦た如來涅槃の眞果と、二乘涅槃の假果との二方面を説いてある。次に(ウ)は、

り　廣く前三種の禪を釋し、以て三乘差別の因果の相を顯はす。

ぬ　廣く如來清淨の禪を釋し、以て一乘平等の因果の相を顯はす。

の二節に分れ、而して(リ)は又更に、

(一)廣く因の別を辨ず。

(二)廣く果の別を辨ず。

【四八】本經七十八頁四種禪說分の全段。

【四九】本經七十九頁諸涅槃分の全段。

【五〇】本經八十頁二自性相分の全段。

【五一】本經八十頁二種神力分の全段。

の二小節に分れ、(一)は「愚夫所行の禪」と、「觀察義の禪」と、「攀緣眞如禪」とに分たれ、「愚夫所行の禪」は、更に「外道の邪禪」と、「二乘の偏禪」とに分たれて居る。而して「外道の邪禪」を說ける一段は、

(A) (五二)緣起の無性を辨じ、以て言說自性の相を破す。

(B) (五三)妄想の無性を辨じ、以て事の自性の相を破す。

の二項より成り、(B)は又さらに、

(1) 妄境と眞常とを明かにし、以て斷見を破す。

(2) 法は一なるも、見解異なる旨を明かにし、以て常見を破す。

(3) 心境の如如を明かにし、以て一異の見を破す。

(4) 因緣所生の法は、幻の如くなる旨を明かにし、以て有無の見を破す。

(5) 法は本來自ら無生なることを明かにし、以て因に依つて生ずるの見を破す。

(6) 言說の無性なる旨を明かにし、以て名言の習氣を破す。

(7) 名言雙絕を顯はし、以て妄言默照を誡む。

の七小項に分れて居るのである。然り而して「愚夫所行の禪」の中の「二乘の偏禪」は、(五四) 四果通相

【五二】本經八十二頁因緣同異分及び言說無性分の全段。

【五三】本經八十四頁惑亂眞常分乃至一切法相分の全段。

【五四】本經九十二頁末行より、九十六頁十二行に至る。

分に於いて之を說き、「攀緣眞如禪」は、(五五)二覺得地分乃至涅槃因識分に於いて之を說示してある。

次に(ぬ)「廣く如來淸淨の禪を釋し、以て一乘平等の因果の相を顯はす」の一節に於いては、

(三)妄卽眞を明し、以て因平等を顯はす。

(四)心卽境を明し、以て果平等を顯はす。

(五)權卽實を明し、以て法平等を顯はす。

の三小節に分れ、(五六)妄計自性分に於いて、十二種の分別と妄計の無性なる旨を談じ、(五七)自覺一乘分に於いて、一乘を說かざる理由を示してある。次に(エ)「果を擧げて因を驗し、以て一乘眞因の相を示す」の章は、

る　(五八)意成身の眞果の相を擧ぐ。

お　(五九)五無間行の眞因の相を示す。

の二節より成り立つて居る。之を要するに以上は正宗分の第二大段の第二分段、返妄歸眞の科中に於ける、第一小段の第一章であるが、本章の主旨は「因地の心」の要諦を說き、以て邪正の因を明すのが大目的であるのである。

次に(乙)「果地の覺を辨ず」るの章は、又分れて、

【五五】九十六頁十三行より、百頁十行に至る。

【五六】百頁十一行より百〇四頁十三行に至る。

【五七】百〇四頁十四行より百〇七頁三行に至る。

【五八】百〇八頁意成身分の全段。

【五九】百〇九頁內外無間分の全段。

上　(六〇)三身を明し、以て法身の常德を顯はす。
中　(六一)二見を破し、以て涅槃は過を離るることを顯はす。
下　二通を示し、以て果海は言詮の及ばざることを顯はす。

の三節となつて居る。而して(上)は又更に、

ア　(六二)總じて如來の體性を示す。
イ　(六三)報身及び化身を明す。
ウ　(六四)本有常住の法身を顯はす。

の三小節に分たれ、(中)は究竟するに、一心は有無の二を離れ、涅槃は一切の過を離れたるものなる旨を顯はすのである。が、先づ其の歷程として、(六五)有見に墮すると、無見に墮するの非なる所以を說破し、以て眞如絕對の涅槃の妙境は、有無の過を離れたるものなることを敎へて居る。而して其の次の(下)には、(六六)菩薩には二種の宗の法相ある旨を明してある。要するに此の章には、一乘の理行因果の相を明し、以て大悟界の眞風光の、果して如何なるかを說示してあるのである。

【六〇】本經百十一頁如來體性分乃至百十二頁自證本住分。
【六一】本經百十四頁有無俱離分。
【六二】本經百十一頁如來體性分の全段。
【六三】本經百十一頁四平等性分の全段。
【六四】本經百十二頁自證本住分の全段。
【六五】本經百十四頁有無俱離分。
【六六】本經百十六頁宗說自利分。

次に第二分段の「地」なる「前の理行に依つて、(六七)斷惑證眞の因果を示す」の一章は、

上　因行を顯はす。

下　果德を示す。

の二節に分れ、(上)は更に、

甲　自利の功圓なり。

乙　利他の行滿つ。

の二段に分れ、(甲)は又さらに四章に分れて、

ア　(六八)妄想の不實なることを明し、以て我執を破し、煩惱障を斷ず。

イ　(六九)言說の性空なることを明し、以て法執を破し、所知障を斷ず。

ウ　(七〇)境智を遣り、以て智もなく、亦た得もなきことを明す。

エ　(七一)言を忘じて頓に證するの旨を明し、以て果海は緣を離れたるものなることを顯はす。

となるのである。而して(イ)は又さらに、

【六七】斷惑證眞とは、煩惱を斷じて眞理を證るの義なり。但し佛教にて證ると云ふは、體現の意味なることと心得ざる可らず。百十八頁初行より百七十六頁までを看よ。

【六八】本經百十八頁妄想心量分の全段。

【六九】本經百二十一頁善語義分乃至深密解脫分。

【七〇】本經百二十七頁如實空法分、乃至無智是智分。

【七一】本經百三十三頁宗說利他分の一部。

い　(七二)言説は法執の本たることを明す。

ろ　(七三)智識は縛脱の源たることを示す。

は　(七四)轉變の相に卽して、動は本來不動なることを明す。

に　(七五)相續の心を斷じ、以て生は本より無生なることを明す。

の四節に分れ、(ウ)も亦た

ほ　(七六)所觀の境を遣る。

へ　(七七)能觀の智を遣る。

の二節となり、(ほ)は又更に分れて、

(一)　(七八)事境を遣る。

(二)　(七九)理境を遣る。

の二小節となるのである。次に(乙)なる「利他の行滿つ」の一節は、

オ　(八〇)雙べて自他の二行を結ぶ。

カ　(八一)特に利他を示す。

の二章に分たるるのである。次に下なる「果德を示す」の一節は、

【七二】本經百二十一頁善語義相の分全段。
【七三】本經百二十三頁智[illegible]相分の全段。
【七四】本經百二十四頁外道轉變分の全段。
【七五】本經百二十五頁深密解脫分の全段。
【七六】本經百二十七頁新實空法分及び不生知幻分。
【七七】本經百三十一頁無智是智分の全段。
【七八】本經百二十七頁新實空法分の全段。
【七九】本經百二十九頁不生知幻分の全段。
【八〇】本經百三十四頁[illegible]利他分の後半部。
【八一】本經百三十四頁世[illegible]分乃至盡交可不分。

丙　轉依涅槃の果。

丁　轉依菩提の果。

の二段に分れ、(丙)は又更に、

キ　(八二)二十一種の邪宗に揀ぶ。

ク　(八三)最上一乘の正果を示す。

の二章に分たれ、(丁)も又さらに、

ケ　(八四)法身眞我の德を顯はす。

コ　(八五)法身眞常の德を顯はす。

サ　(八六)法身眞樂の德を顯はす。

シ　(八七)法身眞淨の德を顯はす。

ス　(八八)疑を釋して如來藏の觀察を勸む。

の五章に分るのである。而して此の中(ケ)は又更に

と　三德の祕藏を明す。

ち　一心眞如を顯はす。

【八二】本經百四十一頁內外涅槃分の前半。

【八三】本經百四十三頁內外涅槃分の後半。

【八四】本經百四十六頁如來自性分乃至不生滅異分。

【八五】本經百六十二頁七種無常分乃至不二如來分。

【八六】本經百六十七頁入滅次第分乃至夢覺無次分。

【八七】本經百七十四頁淨識藏名分の前半。

【八八】本經百七十五頁淨識藏名分の後半。

の二節に分れ、(ち)は又さらに、

(三) 眞如は一切の相を離る。

(四) 究竟して一心を結ぶ。

の二小節に分れて居る。次に(コ)は

り [八九]七種の無常を破す。

ぬ [九〇]正しく眞常を顯はす。

の二節に分るるのである。之を要するに以上本經の四十五頁より百七十六頁に至る、返妄歸眞の第二分段には、五法、三自性及び二無我に約して、邪を破し正を顯はし、以て眞實なる因果の相を説示してあるのである。

次に第三分段「五法、三自性、八識及び無我の究竟差別の相を明す」の一段は、

天 總じて迷悟の因を明す。

地 別して四門の攝入を顯はす。

の二章に分たれ、(地)は、又更に

【八九】本經百六十二頁七種無常分の全段。

【九〇】本經百七十一頁如來不二分の全段。

甲　五法差別の相を明す。
乙　三門は五法に入ることを明す。
丙　四門は一切の法を攝することを明す。
丁　總じて眞如に歸することを明し、以て正觀を示す。
戊　結んで修學を勸む。

の五節に分たるるが、〔九二〕五法諸說分の一段のみで、此第三分段を構成して居る。然り而して(甲)は

〔九二〕百七十六頁十四行より百八十頁八行に至る。

又
ア　總じて差別の法を明す。
イ　眞如に住する人を明す。

の二小段より成り、(乙)も亦た

ウ　三自性は五法に入ることを明す。
エ　八識も無我も五法に入ることを明す。

の二小段に分たるるのである。要するに此の第三分段は、五法と八識と三自性と無我との關係並に差別の相を辨じ、以て八識も無我も三自性も、竟には五法の中に攝入せらるべきものなること

を説示せるものである。

次に第四分段、「法身の常住を明し、以て生死涅槃平等の相を説く」の一段は、

天　(九二)法身の常住を明す。

地　(九三)平等の如如を明す。

の二章に分たれて居るが、要するに此の段には、如來を恒河の沙に喩ふる意義並に其の理由を説きつつ、法身の常恒不變なること、及び生死と涅槃とは、決して全く別異のものにあらざる旨を説いてあるのである。

次に第五分段の、「藏心の自性を示し、以て眞妄生滅平等の相を明す」の一章は、(九四)刹那不壞分の一段のみより成り、第六分段の、「廣く六度を明し、以て自性妙行は修相なきことを示す」の一章は、(九五)六波羅密多分の一段のみを以て成り立つて居るのである。

次に第七分段には、(九六)廣く衆の疑を決し、以て法身は一切の過を離るるものなることを説き、第八分段には、(九七)特に肉戒を示し、以て生佛平等なることを彰はしてある。斷食肉の一品は即

【九二】本經百八十頁恒河沙等分の前半。

【九三】本經百八十三頁三行より同十三行に至る。

【九四】本經百八十三頁末行より百八十六頁四行に至る。

【九五】本經百八十六頁五行より百八十七頁に至る。

【九六】本經百八十八頁法身離過分の全章。

【九七】本經百九十二頁斷肉食戒分の全章。

ちそれである。

以上は古來最も流布せられたる四卷楞伽を原典としての科段の切り方であるが、七卷楞伽も十卷楞伽も、此の第八斷食肉品までは、大同小異、唯廣略の差あるのみであるから、譯者は古來の註釋書中、最も要領を得て居ると信ぜらるる、釋德淸の觀楞伽記に隨つて、科段を切り、概要を約說したのである。

然るに唐譯にも魏譯にも、斷食肉品の次に、陀羅尼品と偈頌品とが添加されて居る。第九の陀羅尼品は寧ろ無くもがなと思はるる底のものだが、第十の偈頌品は在つても決して邪魔にはならない。否な此の品は、前諸品の總括的結論とも見れば、見られぬものでもないから、在つた方がいいかも知れない。但し譯者の寡聞淺學なる、未だ曾て此の楞伽經の偈頌品ほど、難解な漢文は見たことはない。隨つて往往にして誤譯もあるだらうと思ふから、謹んで先達の諸碩學の叱正を仰ぎたい。

終りに是非附け加へねばならぬことは、此の楞伽經の一大特色と、此の經と達磨傳來の禪宗との關係に就てである。

本經の一大特色として吾人の眼に映ずるのは、原始佛敎の無我觀から出發して、終に眞我說に

到達して居ることである。こは勿論涅槃經や其の他の聖典にも、往往にして見出さるる所であるが、此經ほど眞我說を眞向から振りかざして居る聖典は稀である。試みに經中の文を引用せば、

『(九八)猶伏藏せる寶の如く、亦地下の水の如く、有りと雖も見えず、蘊中の我も亦然り。』

『(九九)女子の懷胎せるが如く、有りと雖も見る可らず。蘊中の眞實の我も、無智のものは知ること能はざるなり。』

と說いて、我等が五蘊積集の身心中に、無形の眞我ありと主張するのである。然らば其の眞我なるものは、果して如何なるものであるかと言ふに、

『(一〇〇)藥中の勝力の如く、亦は木中の火の如し、無智の者は蘊中の眞實の我を知ること能はざるなり。』

と言つてあるから、蘊中に徧滿せる一種の大勢力と見てよからう。卽ち眞我なるものは、腦髓にのみありとも、或は胸間に伏在し、母指の形をなせるものとも言はずに、藥の中に病氣を癒す力の充ち滿てるが如く、木の中に燃え立つ火の勢力を藏するが如く、眞我は吾人の頭のギリ〳〵から足の爪先まで、徧滿彌綸して居るものと見たのであらう。

『(一〇一)諸法の中の空性、及び無常の性の如く、無智の者は、蘊中の眞實の我を知ること能はざ

【九八】本經二百六十五頁。
【九九】本經二百六十六頁。
【一〇〇】本經二百六十六頁。
【一〇一】本經二百六十六頁。

るなり。』

と言つてあるのでも略察することが能きる。蓋し萬有に存する空の性も、無常の性も、萬有その物の何れの部分にも徧滿して居るのであつて、決して物の一部分にのみ存するのではないからである、例せば私が今手に握つて居る筆でも、或は腰掛けて居る椅子でも、其の全體の部分に無常の性質又は空の性質が行き亙つて居るので、決して椅子の右脚だけに無常の性質が籠つて居るとか、筆の軸だけに空の性質が籠つて居るのではないのである。眞我も亦た是の如く、五蘊積集の個體の、何れの部分にも行き亙つて居るのであつて、決して頭とか胸とかにのみ、宿つて居るのではないと言ふやうに見たものらしい。斯くて此の經には眞我の存在の疑ふ可らざる理由として、

『〔一〇三〕若し此の眞實の我なくんば、諸佛、自在通、灌頂、及び勝三昧等は皆悉く無とならむ。』

『人あり破壞して、「若し眞我あらば。應に我に示すべし」と言はば、智者は應に答へて、「汝が分別を我に示せ」と言ふべし。』

と道破してある。然り、眞我は既に無形無影の存在であつて、簞笥の中や桐箱の中に、後生大事に仕舞ひ込んで置く一張羅の着物や、他所行きの指輪とは違ふから、一寸出して見せろと言はれ

【一〇三】本經二百七十一頁。

ても、「それ此の通り」だと引き出して見せる譯には行くまい。然しながら吾人は此の眞我の相續によつて、佛陀の慧命、無限の生命を活躍させて居るのであるから、若し人われに眞我を示せと言はゞ、活潑潑地の活動をして見せる外はあるまい。是の如く眞我の存在は疑ふ可らざる絶對の事實であるから、

『(一〇三)眞我の說は熾然たること、猶ほ劫火の起るが如く、無我の稠林を燒いて、諸の外道の過を離る。

眞我なしと說くものは、法を謗りて有無に著す。比丘の業を作すものは、應に「彼を」擯斥して共に語るべからず。』

と力を極めて高唱してある。淺學寡聞の譯者は、佛教の經典中、未だ曾て此の如く、眞我の存在を力說せるものを讀んだことはない。これ予が特に此經の一大特色として標出する所以である。

尙ほ此の經の特色の一として數へ擧げるほどのことではないが、

『十方の諸の刹土「に於ける」、衆生の菩薩の中の、有ゆる法報佛も、化身も及び變化も、みな(一〇四)無量壽の極樂界中より出づ。』

と言へる文字や、

【一〇三】本經二百七十一頁。
【一〇四】本經二百十四頁。

『〔彼は〕南天竺國の中〔に生るる〕大名德の比丘にして、その號を龍樹と謂へるものなり。〔彼は〕能く有無の宗を破し、世間の中に我が無上の大乘の法を顯〔揚〕し、初め歡喜地を得て、〔一〇五〕安樂國に往生せむ。』

と言へる文句の如きは、研究者の注意を拂ふに足るべき事項ではあるまいか。否か。

此の經と禪との關係。楞伽經と達磨傳來の禪との關係は、他の楞嚴經及び圓覺經と禪とのそれに比して、一層根本的のやうに思はれる。否な達磨大師の思想を代表するものは楞伽經であると言ふも過言ではあるまい。達磨大師が、此の楞伽經四卷を、二祖慧可大師に授けられたとの傳說は信を措くに足らぬと言ふ人があるかも知れないが、不肖の知り得た限りに於いては、此の傳說は諸錄みな一致して居る。續高僧傳卷十九には、

『初め達磨大師、四卷の楞伽を以て〔一〇六〕可に授けて曰く、われ漢地を觀るに、唯此の經のみ有り。仁者〔これに〕依行せば、自ら世を度することを得む。』

と言つてあるし、景德傳燈錄卷三には、

『師また曰く、吾に楞伽經四卷あり、亦た用つて汝に付〔與〕す。卽ち是れ如來心地の要門な

【一〇五】本經二百十六頁。
【一〇六】可とは支那に於ける禪宗の第二祖慧可大師のこと。

り、諸の衆生をして開示悟入せしめよ。』と記し、續高僧傳の著者は、慧可も亦た其の徒、僧那、慧滿等をして楞伽經を心要となさしめたと傳へて居る。加之、景德傳燈錄の著者は、其の第三卷、僧那の傳中に、僧那自らをして、

『初祖は兼て楞伽四卷を付〔與〕し、我が師、二祖に謂つて曰く。われ震旦を觀るに、惟この經のみあり、以て心を印す可し。仁者〔これに〕依りて行せば、自ら世を度することを得む。』

と言はしめて居る。(一〇七)宋の蘇軾の「書楞伽經後」に、

『楞伽阿跋多羅寶經は、先佛の所說にして、微妙第一、眞實了義なり。故に之を佛語心品と謂ふ。祖師達磨は、〔これを〕以て、二祖に付〔與〕して曰く、吾、震旦の有ゆる經教を觀るに、惟楞伽四卷のみ、以て心を印すべし。祖祖相授けて、以て心法と爲せ。』

と言つて居る。又、(一〇八)蔣之奇は「楞伽經」に序して、

『昔、達磨は西より來り、既に心印を二祖に傳へ、且つ云く、吾に楞伽經四卷あり、亦た用て汝に付〔與〕す。卽ち是れ如來心地の要門なり。諸の衆生をして開示悟入せしめよ。此れ亦た佛と禪と並び傳へ、玄と義と倶に付するなり。(一〇九)五祖に至つて始めて金剛經を以て傳授

【一〇七】讀藏經第一輯第二十五套第三冊二百十四丁表—下段。

【一〇八】讀藏經第一輯第二十五套第三冊二百十三丁裏—上段。

【一〇九】五祖は、達磨大師より第五代の祖師、大滿弘忍禪師なり。

す。云云。』

と記し、傳燈錄の說を承繼して、五祖に至るまで、楞伽經を付し、五祖は之に代ふるに、金剛經を以てしたと言つてるけれども、張說の碑によれば、六祖も亦た楞伽經を應用し、五祖門下の神秀も亦た楞伽經を以て心要の法門としたとある。由是觀此、此の楞伽經は達磨大師以來、六祖大鑑惠能禪師に至るまで、實際に祖祖相授したものと思はれる。以て此の經と禪宗との關係の如何に密接なるものあるかを知るべきである。然るに現代禪家の末流、曹洞と云はず、臨濟と云はず、此の楞伽經を完全に讀破し咀嚼し消化せるもの、果して幾人かあるだらう。只管打坐は、固より禪宗本來の面目だが、達磨以來、禪宗と切つても切れない關係のある此の聖典は、了解して居た方が達磨の法孫たるに相應はしくはあるまいか。今左に楞伽經の內容を檢して、禪の特色の由來せる所を明かにしよう。

不立文字、敎外別傳と云ふことは、禪の一大特色である。然るに今此楞伽經の態度を見るに、

『〔二〇〕言說は卽ち變異あり、「而も」眞理は「卽ち」文字を離る。』

『〔二一〕我が無上の大乘は名言を超越して、其の義甚だ明了なれども、「而も」愚夫は「之を」覺知

【二〇】本經四十四頁四行。
【二一】本經二百四十三頁の五行及び六行。

せざるなり。』

『〔二二〕大慧よ、若し人あり、法を說いて文字に墮するあらば、そは皆これ誑說なり。何となれば諸法の自性は文字を離るるを以てなり。是の故に大慧よ、我が經中に、我は諸佛及び菩薩と與に、一字を說かず一字を答へずと說く、何となれば一切の諸法は文字を離るるが故に、義に隨はずして分別して說くに非ざればなり。……是故に大慧よ、菩薩摩訶薩は、應に文字に著せず、宜に隨つて說法すべし。……是の故に大慧よ、善男子善女人は、應に言の如く義に執著すべからず。何となれば眞實の法は文字を離るるを以てなり。大慧よ、譬へば人あり、指を以て物を指さんに、小兒は指を觀て物を觀ざるが如く、愚癡の凡夫も亦た復た是の如し。言說の指に隨つて執著を生じ、命盡るに至るまで、文字の指を捨てず、第一義を取ること能はざるなり。』

と說破して、禪の所謂不立文字、敎外別傳の端的と共鳴する所があるやうに思はれる。また一切の文字言語を以て、月を指す指の如しと喝破するは、禪家の常套語である。然るに楞伽經には、

『〔二三〕愚〔夫〕の月を指せるを見、指を見て月を觀ざるが如く、文字に計著するものは、我が眞

【二二】本經百五十三頁九行より百五十五頁三行に至る。

【二三】本經百七十六頁十一行より同十二字行に至る。

實「の法」を見ず。』

と說き、宛然禪家の常套語の出所をなせるが如き觀を呈して居る。次に四十九年一字不說と云ふ語は禪家の人口に膾炙する所であるが、楞伽經には、

『〔一四〕某夜に正覺を成じてより、某夜に涅槃するに至るまで、此の二の中間に於いて、我、すべて說く所なし。』

とある。これ亦た禪家と楞伽と共鳴する點であらう。また三界唯一心、心外無別法とは、禪家の力說する所である。が、楞伽經にも亦た極めて痛切に此の趣を說いてある。曰く、

『〔一五〕心の所見は「實」有にあらず、唯心に依つて起るのみ。身、資所住、影は、衆生の藏識の現はす所なり。』

『〔一六〕大慧よ、身及び資生、器世間等の一切は、皆これ藏識の影像にして、能取所取二種の相の現はれたるものなり。』

『〔一七〕身、資財「及び」所住は、皆「これ」唯心の影像のみ。凡愚は「此の理を」了る能はずして、建立「の常見」と誹謗「の斷見」とを起す。起す所も但これ心、心を離れては不可得なり。』

〔一四〕本經百十三頁十三行。
〔一五〕本經四十八頁十行。
〔一六〕本經五十四頁四行。
〔一七〕本經五十九頁十二、三行。

『(二八)佛子は能く世間の、唯これ心なることを觀見し、種種の身を現じて、所作に障礙なく、神通力自在に、一切みな成就す。』

『(二九)唯心なりと覺了するを以て、外法を捨離し、亦妄分別を離る、此行は卽ち中道に契ふ。唯心にして境あるなく、境なければ心生ぜず、我及び諸の如來は、此を說いて中道となす。』

等と說き、三界唯心の義は楞伽經の根本要義の一と云ふも、決して過言ではない。次に禪家にては、無常觀を初入の門とし、空觀を玄關として眞實觀を奧座敷とするのである。而して眞實觀とは本有天眞なる諸法の狀態は、何物の爲作造作に預らざるを云ふ。今それ此の楞伽經も亦た、

『(三〇)何をか本住の法と云ふ。謂く、法の本性は、「譬へば」金等の鑛に在るが如し。若し佛の出世あるも、又は佛の出世なきも、法は法位に住して、法界、法性みな悉く常住なり。大慧よ、譬へば人あり。曠野の中を行き古城に向ひ、平坦たる舊道を見て、便ち「其の道に」隨つて城に入り、「其處に」止息し遊戲するが如し。大慧よ、汝いかんと意ふ。此の道及び城中の種種の物は、彼の作る所となすか。」「大慧」言さく、『不なり。』佛の言はく、「大慧よ、我及び諸佛の證する所の、眞如常住の法性も亦た復た是の如し。」

【二八】本經六十一頁十三、四行。
【二九】本經二百三十二頁十一、二、三行。
【三〇】本經百十三頁五行以下。

と道破し、法華經の所謂「諸法は法位に住して、世間の相は常住なり」の語と共鳴し以て禪家の眞實觀の據り處と成つて居るやうに思はれる。又彼の禪家の所謂禪なるものは、凡夫二乘の禪や、外道の禪と揀ぶために、特に如來禪又は如來淸淨禪と稱せらる。然るに楞伽經も亦た、

『〔三〕大慧よ、四種の禪あり。何等をか四となす。謂く、愚夫所行の禪、觀察義の禪、攀緣眞如の禪、諸の如來禪「之れ」なり。大慧よ、何をか愚夫所行の禪と云ふ。謂く、聲聞と緣覺と及び諸の修行者は、人無我を知り、自他の身は骨鎖相連なり、皆これ無常、苦、不淨の相なりと見、是の如く觀察し、堅著して捨てず、漸次に增進して無想定に至る。是を愚夫所行の禪と名く。何をか觀察義の禪と云ふ。謂く、自「相と」共相と人無我とを知り已つて、又外道の自他俱作「の見」を離れ、法無我の諸地相の義に於いて隨順に觀察す。是を觀察義の禪と名く。何をか攀緣眞如の禪と云ふ。謂く無我に二ありと分別するは是れ虛妄の念なり。若し如實に知れば彼の念起らず。是を攀緣眞如の禪と名く。何をか諸の如來禪と云ふ。謂く、佛地に入りて、自證聖智の三種の樂に住し諸の衆生の爲に不思議の事を作す。是を諸の如來の禪と名く。』

【三】本經七十八頁五行より七十九頁初行に至る。

と說いて、外道禪や二乘禪等から、大乘の正法の禪を區別して居る。次に禪家に謂ふ所の涅槃は、

決して死滅を意味するのでもなく、亦た消極的の枯木のやうな態度でもない。而して楞伽經は、

『〔二二〕大慧よ、大般涅槃は不壞不死なり。若し死なれば應に更に生を受くべく、若し壞なれば應に是れ有爲なるべし。是故に涅槃は不壞不死にして、諸の修行者の歸趣する所なり。』

と謂ひ、以て大乘的涅槃の積極的態度を明かにして居る。加之、

『〔二三〕大慧よ、諸の聲聞は、生死妄想の苦を畏れて、涅槃を求む。〔彼等は〕生死と涅槃との差別の相は、一切みな是れ妄分別によりて有るのみにして、所有なきことを知らざるが故に未來の諸の根境を滅するを妄計して涅槃となす。〔故に彼等は〕自證智の境界は、所依の藏識を轉じて、大涅槃となすを知らざるなり。』

と喝破して、消極的な態度を非難して居る。これ明かに禪の積極的態度と共鳴する點の一であるまいか。

又かの禪宗のことを佛心宗と稱するに至れるは、本經の佛語心品より採れるものだと言ふ説がある。これ又この經と禪宗との密接なる關係を物語れるものと謂はねばならぬ。其の他、禪の教理の出所と認むべき點は、本經の始終を通じて各頁に見出し得らるるから、具眼の士は須らく精

【二二】本經八十頁三、四行。
【二三】本經五十三頁九行乃至十四行。

讀心讀して、禪教の眞面目を振ひ起すがよい。

勿論禪宗には、他の諸宗派と異つて、所依の經典と仰ぐものはない。隨つて禪宗は一種の教權に繫縛せられて、身動きもならぬ底の、不自由な宗教とは違ふ。が、世の似而非禪者の中には、此意味を取りそこねて、聖典の研究を無用視し、太甚しきに至つては、經論や祖錄の讀み方すら辨へずに、公案を弄し提唱を翫ぶものがある。以ての外の不心得漢と評せねばならぬ。試みに卿等が最も好んで提唱する祖錄の文字言句の使ひ方に意を注ぎ看よ、蓋し思ひ半に過ぎるものがあるだらう。予は此の項を結ぶに當り、我が恩師、忽滑谷快天先生に謹謝せねばならぬ。それは禪宗と此の經との關係の精髓は、先生の高説を、殆んど全く繼承し拜借したからである。

【飜譯及流傳】此經の漢譯には凡そ四譯ある。一は北凉の沮梁蒙遜、玄始三年、天竺の三藏、(三四)曇無讖が、閑豫宮に於いて譯して四卷となし、「楞伽經」と名けたと言ふが、今は此の譯は存して居ない。

二は劉宋の元嘉十二年、中印度の三藏、(三五)求那跋陀羅が、金陵の草堂寺に於いて譯出し、「楞伽阿跋多羅寶經」と名けたものである。予は脚註に此の經を宋譯と呼んで置いた。

【三四】曇無讖（Dharmarakṣa）
【三五】求那跋陀羅（Guṇabhadra）

三は後魏時代に西來した、(三六)菩提留支三藏が、延昌二年洛陽の汝南王の宅及び鄴都の金華寺に於いて譯して十卷となし、「入楞伽經」と名けたものである。世に之を十卷楞伽と云ひ、予は之を魏譯と呼んで置いた。

四は唐の久視の初、于闐國の三藏、實叉難陀が、嵩嶽の天中寺に於いて譯して七卷となし、題して「大乘入楞伽經」と名けた。故に之を七卷楞伽と云ひ、或は唐譯とも稱するのである。

是の如く本經の飜譯には、四種あるけれども、最も弘く世に用ゐられたものは、宋譯の四卷楞伽である。然しながら現存の三譯中、最も解り易く且つ要を得て居るのは、予が採つて以て此國譯の原本とせる唐譯の七卷楞伽である。求那跋陀羅譯の四卷楞伽は、文辭が簡潔なるばかりでなく、往往聱牙な所があり、幾たび繰り返しても、其の要を掴むことが能きない。而して菩提留支譯の十卷楞伽は、前の宋譯とは反對に、餘り冗漫な點が多く、且つ行文が如何にも難澁で、讀者をして難解に苦しましめ、又倦怠せしむる恐がある。で、譯者は、舊慣傳承の襲踏を重んずる教界の先達から、多少の非難叱責あるべきを覺悟し、比較的に行文の流暢なる唐譯を原本とし、四卷及び十卷の楞伽を參照し、簡なるものは詳かにし、冗なるものは約やかにし、以て專ら佛心の要義を了り、自覺の妙趣を髣髴し

【三六】菩提留支（Bodhiruci）

易からしめんと努めた積りである。

此の經が弘く社會に流傳せられたのは、前に詳說せるが如く、達磨大師が、其の嗣、慧可大師に傳へて、必要の法門とせられた爲であらう。今その流布の有樣を詳かにし、且つ硏究者の參考に資せんがため、左に此の經の註釋論疏の主要なるものを列記しよう。

入楞伽經玄義　法藏
楞伽經通義　善月
楞伽經集註　正受
觀楞伽經記　德清
楞伽經註解　如玘

以上支那選述の主なるもの

楞伽經講翼　光謙
楞伽經論疏折衷　養存
楞伽鄕季潭本別考　未詳
楞伽經講緣　未詳

以上日本選述の主なるもの

是の如く數多の註釋論疏はあるが、こは勿論四卷楞伽を原本とするもので、七卷及び十卷の楞伽經に關する註釋書は一も見當らない。然り而して前記の註釋書は、皆かの四卷楞伽の難解なる點を解し易からしめやうと試みて居るけれども、他經の註釋書の如く成功せるものは一もないやうである。これ蓋し楞伽經そのものの行文が、難解な爲でもあらうが一は如來の自覺の境界を寫し出すことの不可能なのも其の理由となつて居るだらう。卽ち佛陀の大悟界の眞風光は、所謂言詮不及意路不到であつて、殆んど文字言語もて言ひ表はすことの能きない爲であらう。終りに臨んで予が參考に用ゐた註釋書は、主として、法藏の玄義と德淸の觀楞伽經記と養存の論疏折衷であることを一言して置く。就中、論疏折衷より、本經の分段の名を取り、以て分段の名稱を依用し、觀楞伽經記に隨つて解題を書いたのである。

譯者　山上曹源識

凡　例

一、括弧（　）に包める文字は、文章を現代的にし、且つ讀者の了解を容易ならしめんがため、譯者の補へるもの、故に必らずしも拘泥するを要せず。

二、括弧「　」に包める文字は、意味を明かにすると同時に、文章を讀み易からしめんがため、譯者の補へるもの。故に通讀の際は、必らず讀むを宜しとす。

三、譯語は忠實に漢譯の語を用ゐたれども、時に或は原文の文字を略したる場合なきに非ず。例せば而の字の如きは、漢字の所謂「テニヲハ」なれば、『座より起つて、而も佛に白して言さく』とせんよりは、寧ろ『座より起つて、佛に白して言さく』とする方、梵語の原文に照すも妥當なるが如し。

四、斯く譯者が不肖凡夫の身を以て、隨意に先哲の文章を補成し又は省略したれば、一部の人士は必らずや烏滸がましき業なりと責むるならむ。こは予が甘んじて受けむと欲する所、蓋し此の經は斯道の專門的研究者よりは、寧ろ通俗に了解せしむるを旨としたればなり。

國譯大乘入楞伽經

卷の第一

羅婆那王勸請品第一

序分

是の如く我聞けり。佛、一時、大比丘衆及び大菩薩衆と倶に、大海濱の摩羅耶山の頂「に於ける」(一)楞伽城中に住し給ひき。其の諸の菩薩摩訶薩は、悉く已に(二)五法、(三)三性、(四)諸識及び、(五)無我(の義)に通達し。(諸の)境界は自心の所現なることを善知し、無量の自在(六)三昧に遊戲し、神通の諸力もて、衆生の心に隨ひ、種種の形を現じて方便し調伏し給へり。(時に)種種なる諸佛の國土より、此の會に來り給へる一切の諸佛は、手から「親ら」灌頂し給ひぬ。「而して」(七)大慧菩薩摩訶薩は其の上首たりき。

【一】楞伽(Laṅkā)とは今の錫蘭島(Ceylon)のことなり。

【二】五法とは名と相と妄想と正智と如々を云ふ。如々とは眞如卽ち宇宙の本體なり。

【三】三性とは(一)徧計所執性(二)依他起性及び(三)圓成實性なり。(一)は吾人が妄想によりて生ずるもの、(二)は因緣によりて生ずるもの、(三)は獨立自存の眞實在なり。

【四】諸識とは眼耳鼻舌身意の

爾時に世尊は、海の龍王宮に於いて、說法すること七日を過ぎて、大海より出で給へば、無量の梵〔天帝〕釋、護世の諸天、及び龍等ありて、佛を迎へ奉りぬ。爾の時に如來は、目を擧げて摩羅耶山上〔に於ける〕楞伽大城を觀なはし、卽ち微笑して『むかし諸の如來、應〔供〕、正等覺は、皆この城に於て、自ら得る所の聖智の證法を說き給へり。〔これ〕諸の外道の邪見もて臆度し、又は二乘の修行する境界にあらず。我も亦いま當に（八）羅婆那の爲に此の法を開示すべし』とのたまへり。

爾の時に羅婆那夜叉王は佛の神力によりて、佛の音聲を聞き遙に如來の龍宮より出でて、梵〔天帝〕釋、護世の諸天、〔及び〕龍〔等〕に圍繞せられ給ひ、海の波浪を見そなはして、其の衆會の（九）藏識の大海に境界の風動き（一〇）轉識の浪起るを觀〔察〕し給ふと知り、歡喜の心を發し、其城中に於いて、高聲に唱へて言く『我、當に佛〔所〕に詣で、請じて此の城に入り、〔無明〕長夜の中に於ける我及び諸天世人をして、大饒益を得せしむべし』と。是の〔如く〕語り已つて、卽ち〔諸の〕眷屬と與に華の宮殿に乘りて世尊の所に往き、到り已つて殿を下り、右に遶ること三匝し、

六識と末那識と阿賴耶識となり。

【五】無我とは人無我と法無我の二なり。

【六】三昧とは梵語 Samādhi の音譯にて、心の諸作用を一處に集中することなり。

【七】大慧は梵語 Mahāmati の意譯なり。

【八】羅婆那（Rāvaṇa）は古の錫蘭島の王。

【九】藏識とは第八阿賴耶識のことなり。

【一〇】轉識とは眼耳鼻舌身意の六識、及び第七末那識の總稱なり。

衆の妓樂を作して如來を供養しぬ。(而して其)所持せる樂器は、皆これ（一）大青因陀羅の寶(玉)もて［造られ］、瑠璃等の寶を鏤ばめたる無價の上衣を纏ひ、其の聲美妙なる音節と、相和する中に於て、偈を說き、佛を讚して曰く、

『心自性の法藏は無我にして（二）見垢を離る。願くは證智の知しめす所を宣說し給へ。
善法を集めて身と爲し、智を證して常に安樂に、變化自在なる
［佛陀よ］、願くは楞伽城に入り給へ。
過去の(諸)佛(及び)菩薩は、皆曾て此の城に住し給ひき。此の諸
の夜叉衆は、一心に法を聽かんことを願ひたてまつる。』

爾の時に羅婆那楞伽王は、（三）都咤迦音を以て、佛を歌讚し已つて、復た歌聲を以て、頌を誦いて言く、

『世尊は、七日(の間)大海の中に住し、然して後に龍宮を出で、安詳として此岸に升り給ふ。
我は諸の婇女、夜叉の眷屬、（四）輸迦(及び)娑剌那(並に)衆中の聰慧なる者と共に、悉く其の
神力によりて如來の所に往詣し、各華の宮殿を下りて世の尊ぶ所を禮敬しぬ。
復た佛の威神(力)によりて、佛に對ひて己が名を稱ふ。我は是れ羅刹王、十首の羅婆那な

【一】大青因陀羅(Indranila)は、青玉と稱する寶石なり。
【二】見垢とは諸の邪見の垢。
【三】都咤迦(Toṭaka)とは梵詩の音律の一名なり
【四】輸迦(Śuka)も娑剌那(Sāraṇa)も羅婆那王の大臣なり

り。いま佛の所に來詣し奉る。
願くは佛よ、我及び楞伽城中の諸の有ゆる衆生を攝受し給へ。過去の無量の佛は、咸(この)寶山の頂に昇り、楞伽城中に住して、自ら證する所の法を說き給ひき。
世尊も亦まさに爾るべし、彼の寶嚴山に住し、(諸の)菩薩衆に圍遶せられて、淸淨の法を演說し給へ。
我等は今日楞伽(城中)に住する衆(人)と共に、一心に(一五)離言自證の法を(拜)聽せむと欲す。
われ(一六)去來の世を念ふに、有ゆる無量の佛は、(諸の)菩薩に圍遶せられて、楞伽經を演說し給ひき。
此の入楞伽典は、昔の佛の稱讚し給ふ所なり。願くは佛よ、(一七)往尊と同じく、亦衆(人)のために開演し給へ。
請ふ佛よ、無量の夜叉衆を哀愍するが爲に、彼の寶嚴城に入り、此妙なる法門を說き給へ。
此妙なる楞伽城は、種種の寶をもて嚴飾せられ、牆壁は土石にあらず、羅網は悉く珍寶なり。
此の諸の夜叉衆は、昔かつて佛を供養し上り、修行して諸の過を離れ、智を證りて常に

【一五】離言自證の法とは、言語文字もて能く言ひ表はすこと能はざる心的經驗の法なり。
【一六】去來とは、過去未來の略なり。
【一七】往尊とは、過去の世尊と云ふ義なり。

明了なり。

夜叉の男女等は、大乘を渇仰して自ら（一八）摩訶衍を信じ、亦他をして信せしめんことを樂ふ。

唯願くは無上尊よ。諸の羅刹衆（及び）甕耳等の眷屬のために、楞伽城に往詣し給へ。

われ（一九）去來今に於いて、勤めて諸佛を供養し上り、自證の法を〔拜〕聞して、大乘の道を究竟せんことを願ふ。

願くは佛よ、我及び諸の夜叉衆を哀愍して、諸の佛子等と共に此の楞伽城に入り給へ。

我が宮殿も婇女も、及び諸の瓔珞をかけたる愛す可き（二〇）無憂園をも、願くは佛よ、（我を）哀みて納受し給へ。

われ佛菩薩のまへに、喜〔捨〕せざる物あることなし、唯願くは（佛よ、我が）身の給侍をも、哀み納受し玉へ。』

爾の時に世尊は、此の語を聞き已りて、即ち之に告げ言はく、

『夜叉王よ、過去世中の諸の大導師は、咸な汝を哀愍し、汝の勸請を受けて、寶山の中に詣り、（二一）自證の法を說き給ひき。未來の諸佛も亦復是の如くならむ。此は是れ甚深の觀行を修し、法樂を

【一八】摩訶衍（Mahāyāna）とは、梵語、譯して大乘と云ふ。

【一九】去來今とは、過去未來と現在の三世を云ふ。

【二〇】無憂は梵語 Aśoka の意譯なり。

【二一】自證とは自ら悟ること、故に自ら經驗せる大悟の法を自證の法と云ふなり。

現ずるもの丶住する處なり。我及び諸の菩薩は、汝を哀愍するが故に、汝の所請を受けむ。』

是の如く語り已つて、默然として住し給ひぬ。時に羅婆那王は、即ち乘る所の妙花の宮殿を佛に奉施しければ、佛其上に坐し給ふ。(此に於て)王及び諸の菩薩は前に導き後に從ひ、無量の綵女は歌詠し讃歎し、佛を供養し上りつ丶、彼城に往詣しぬ。彼城に到り已つて、羅婆那及び諸の眷屬は、復種種なる上妙の供養を作せり。乃ち夜叉衆中の童男童女は、寶の羅網を以て佛に供養し、羅婆那王は寶の瓔珞を佛菩薩に施し、以て其の頸に掛け上りぬ。爾の時に世尊及び諸の菩薩は、供養を受け已りて、各自ら證れる境界の甚深の法を略說し給へり。時に羅婆那王並に其の眷屬は、復更に大慧菩薩を供養し勸請して言さく、

『我今大士を請して世尊に奉問せしむ。我と夜叉衆と及び此の諸の菩薩は、一心に一切の如
來の自證智の境界を聞んことを願ふ。是の故に咸な(大士を)勸請す。
汝は是れ修行者にして、言論中の最勝なり。是故に咸な(大士に對して)尊敬(の心)を生じ、
汝に勸めて法を問はむことを請ふ。
自證淸淨の法は、究竟して佛地に入り、(三)外道二乘等の一切の過失を離る。』

【三】外道とは六派又は九十五種の佛教以外の哲學宗教の學派のこと。二乘とは聲聞乘と緣覺乘なり。共に佛教の內に屬すれども、小乘の機根なり。

爾の時に世尊は神通力を以て、復更に無量の寶山を化作し、悉く諸天の百千萬億の妙寶を以て嚴飾し、一一の山上に皆佛身を現じ、一一の佛前に皆羅婆那王及び其の衆會あり、十方の有ゆる一切の國土も皆その中に現じ給ふ。(また)一一の國中に悉く如來あり、一一の佛前に皆羅婆那王幷に其の眷屬あり。楞伽の大城(及び)阿輸迦園等、是の如きの莊嚴も(皆)異ることなく、一一に皆大慧菩薩ありて、佛に請問すれば、(佛)爲に自證智の境を開示するに、百千の妙音を以てし給ふ。(而して)此の經を說き已りて、佛及び菩薩は皆空中に隱れて現じ給はず。(此に於いて)羅婆那王は唯自ら身の本宮中に住するを見て思惟すらく、

『向に「見る」者は是れ誰ぞ。誰か其の說(法)を聽きたる。見る所のものは是れ何物なる。誰か能く佛及び國城衆寶等を見たる。山林「其の他」是の如き等の物は今何所にか在る。夢の所作と爲さむか、幻の所成と爲さむか、復猶は〔三〕乾闥婆城の如しとなさむか、翳の所見となさむか、焰の所惑と爲さむか、夢中に石女の子を生むが如しと爲さむか、煙焰或は旋火輪の如しと爲さむか』と。復更に思惟すらく、『一切諸法の性は、皆な是の如く、唯是れ自心の分別の(生ずる)境界のみ、凡夫は迷惑して了解すること能はざるな

【三】乾闥婆城(Gandharva)とは、空中に想像して作れる城廓を云ふ。多分蜃氣樓の如き自然現象の結果として現はれたるものならむ。故に經中には數々實際に存在せざるも、眼には見ゆる存在の例として用ゐらる。

り。能見あるなく亦た所見なし。能說あるなく亦所說なし。見佛聞法みな是れ分別のみ、向に見る所の如くにしては、能く佛を見ること能はず、分別を起さざるは、是れ則ち能見なり」と。時に楞伽王は尋いで卽ち開悟し、諸の雜染を離れて唯自心を證し、無分別に住せり。往昔種る所の善根力によりて、一切の法に於いて如實に見ることを得、他に隨つて悟らず。能く自智を以て善巧に觀察し、永く一切の臆度邪解を離れ、大修行に住して修行師となり、種種の身を現じて能く方便に達し、巧に諸地に增上する進相を知り、常に樂んで心意意識を遠離し、三(種)の相續の見を斷じて外道の執着を離れ、內自ら覺悟し、如來藏に入つて佛地に趣き、虛空及び宮殿の內に咸な聲を出して(下の如く)言ふを聞きぬ。

『善い哉、大王よ、汝が學ぶ所の如く、諸の修行者は、應に是の如く學び、是の如く見るべし。一切の如來は應に是の如く見るべし。一切の諸法[に於いて]若し見を異にする者は、則ち是れ斷見なり。汝は應に永く心意意識を離れ、勤めて一切諸法を觀察すべし。(汝は)應に內行を修して外見に着すること莫れ。二乘及び外道の修する所の句義、見る所の境界及び得べき所の諸の三昧の法に墮すること莫れ。汝は應に戲論談笑を樂しむべからず。汝は應に (三四)圍陀の諸見を起す可

【三四】 圍陀(Veda)とは印度最古の經典にして、又世界最古の書籍なり 之に四種あり、(一)Rigveda (二)Sāmaveda (三)Yajurveda (四)Atharvaveda これなり。

らず、亦た王位の自在なるに著すべからず。亦た應に六定等の中に住すべからず。若し能く是の如くならば、卽ち是れ如實なる修行者の行にして、能く他論を摧き、能く惡見を破り、能く一切の我見の執着を離れ、能く妙慧を以て所依の識を轉じ、能く菩薩の大乘の道を修し、能く如來自證の地に入らむ。汝まさに是の如く勤めて修學を加へ、所得の法をして轉た更に淸淨ならしめ、善く（二五）三昧、三摩鉢底を修して、二乘外道の境界に著するを以て勝樂と爲せる凡［夫の］修（行）者の分別する所の如くなること莫れ。外道は我見を執す［るが故に］我相あり、また（二六）實及び求那に（於いて）取著を生ず。（二七）二乘は無明の行を縁ずることあるを見て、性空の中に於いて亂想分別す。楞伽王よ、此の法は殊勝なり。是の大乘の道は能く自證の聖智を成就せしめ、諸有の中に於いて上妙の生を受けしむ。楞伽王よ、此の大乘の行は、無明の翳を破り、識の波浪を滅して、外道の諸の邪行の中に墮せざるなり。楞伽王よ、外道の行者は我に執著して諸の異論を作す、（故に）能

【二五】三昧（Samādhi）は漢譯して等持と云ひ、三摩鉢底（Samāpatti）は等至と譯す。何れも禪定を修して心的活動の靜平を來す道程の名義なり。

【二六】實（Dravya）求那（Guṇa）は何れも印度六派哲學の一なる勝論學派にて建立する所の七範疇の中の一なり。（一）實とは世界萬有の根本元素とも云ふべきものにして之に九種あり、地、水、火、風、空、時、方、我及び意これなり、（二）求那とは萬物の性質にて之に二十四種あり。今この譯は印度の外道哲學の一なる勝論學派の語に遵はざるゝものを讀むるなり。

【二七】二乘とは聲聞乘と緣覺乘のことにて小乘の機根及び小乘の教理を云ふ。

く執著を離れ、識性を見るの二義を演說すること能はざるなり。善い哉、楞伽王よ、汝まづ佛を見んとせば此の義を思惟せよ、是の如く思惟せば乃ち是れ佛を見む。』

爾の時に羅婆那王は復た念ずらく、

『願くは我さらに如來を見奉つることを得む。如來世尊は觀（察）に於いて自在なり、外道の法を離れて能く自證聖智の境界を說き、諸の化すべき所、作すべき事を超え、如來定に住して三昧の樂に入り給ふ。是の故に大觀行の師と名け、亦た復た大哀愍者と名く。能く煩惱分別の薪を燒き盡して、諸の佛子衆の圍遶する所となり、普く一切衆生の心中に入り、一切の處に徧（滿）し、一切智を具（足）し、永へに一切分別の事相を離れ給ふ。我いま願くは重ねて如來の大神通力を見ることを得む。見ることを得るが故に、未だ得ざる者は得、已に得たるものは退かず、諸の分別を離れて三昧の樂に住し、如來の智地を增長し滿足せむ。』

爾時に世尊は、楞伽王の卽ち當に無生法忍を證悟すべきを知しめして、哀愍のための故に、便ち其の身を現じ、所化の事をして、還た復た本の如くならしめ給ふ。時に十頭の王は曾て覩たる所を見ぬ。（卽ち）無量の山城は悉く寶（玉）もて莊嚴せられ、一一の城中に皆應（供）正等覺あり、三十二相もて其の身を嚴り、其の身は自ら諸佛の前に徧ねく、悉く大慧あり夜叉に圍遶せられて

自證智の所行の法を說くを見、亦た十方の諸佛の國土、是の如き等の事は皆悉く「前と」別(異)あることなきを見ぬ。爾時に世尊は、普く衆會の慧眼の觀を以てし、肉眼の觀にあらざるを觀て師子王の奮迅迴眄するが如く、欣然大笑し給ふ。(而して)其の眉間髀脇腰頸及び肩臂德字の中に於ける一一の毛孔より、皆無量の妙色の光明を放ち給へば、(其の光)虹の輝を放つが如く、日の光を舒るが如く、亦た劫火の猛焔熾然なるが如くなりき。時に梵「天帝」釋四天(王)等は、虛空の中「より」遙に如來の須彌の如き、楞伽山頂に坐し給へるを見て、欣然として大笑せり。

爾の時に諸の菩薩及び諸の天衆は咸な念へらく、

「如來世尊は法に於いて自在なり。何の因緣の故に欣然大笑し、身より光明を放ちて默然として動かず、自證の境に住して三昧の樂に入り、師子王の周廻顧視するが如く、羅婆那の如實の法を念ずるを觀給ふや」と。

爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、先づ羅婆那王の請を受け、復た菩薩衆會の心を知り、及び未來の一切衆生の皆悉く言語文字に樂着し、言に隨ひ義を取つて迷惑を生じ、或は世尊は已に諸識の境界を離れ、何の因緣の故に、欣然大笑し給へるやと念ずるを觀て、彼の疑を斷せんが爲に佛に問ひければ、佛卽ち(大慧)に告げたまはく、

『善い哉、大慧よ、善い哉、大慧よ。汝は世間を觀て、諸の衆生の三世の中に於いて惡見に纏はるるを愍み、(彼等を)開悟せしめんと欲して我に問ふ。諸の智慧ある人は、自他を利せんが爲に此の問を作す。大慧よ、此楞伽王は、曾て過去の一切の如來應(供)正等覺の二種の義を問ひしが、今また問はんと欲す、未來も亦た爾らむ。此の二種の義、差別の相は、一切の二乘及び諸の外道(等)の測る能はざる所なり。』

爾の時に如來は、楞伽王の此の義を問はんと欲するを知り、之に告げたまはく。

『楞伽王よ、汝われに問はんと欲せば、宜しく應に速に問ふべし。我まさに汝が爲に分別解釋して、汝が願ふ所を滿て、汝をして歡喜せしめむ。(汝)能く智慧を以て思惟し觀察し、諸の分別を離れて善く諸地を知り、修習し對治して眞實の義を證し、三昧の樂に入りて諸の如來の攝受する所となり、奢摩他の樂に住して二乘の三昧の過失を遠離し、不動(地)法雲(地)及び菩薩の地に住して、能く如實に諸法の無我なることを知らば、當に大寶蓮花の宮中に於いて、三昧の水を以て其頂に灌がるべし。復た無量の蓮花を現じて、無數の菩薩を圍繞する中に止住し、諸の衆會と與に互に瞻視することあらむ。是の如く(汝の)境界は不可思議なり。楞伽王よ、汝は一の方便行を起して修行地に住し、復た無量の諸の方便行を起さば、汝は定んで上に說く所の不思議の事を

得べし。汝が如來の位に處し、形に隨ひ物に應じて得べき所は、一切の二乘及び諸の梵(天帝)釋等の未だ曾て見ざる所なり。』

爾の時に楞伽王は、佛の許を蒙り已つて、即ち淸淨光明なること、大蓮華の如き、寶山の頂上に於いて座より起ち、諸の婇女衆の圍繞する所となり、無量の種種の色華、種種の色香抹香塗香幢幡懸蓋冠珮瓔珞、及び餘の世間の未だ曾て見聞せざる種種の勝妙なる莊嚴の具を化作し、復欲界の有ゆる種種無量の諸音の樂器を化作せり。それは諸天、龍、乾闥婆等の一切世間の有する所に勝れたり。復た十方の佛土に於て昔かつて見たる所の諸の音樂の器を化作しぬ。又復大寶羅網を化作し、徧く一切の佛菩薩の上を覆ひぬ。復た種種なる上妙の衣服を現じ、幢幡を建立し、以て供養を爲せり。是の事を作し已つて、即ち虛空に昇り、高さ(二八)七多羅樹の虛空の中に於いて、復た種種諸の供養の雲を雨ふらし、諸の音樂を作し、空より下つて即ち第二日の電光明の大蓮華の如くなる寶山の頂上に坐し、歡喜恭敬して言く、

『我いま如來の二義を問はんと欲す。是の如き二義は、我曾て過去の如來應(供)正等覺に問ひ上りしに、彼の佛世尊は、已に我が爲に說き給ひき。我いま亦た是の義を問はんと欲す。唯願

【二八】多羅樹(Tala)は棕櫚科の植物にて最も高きものは七八十尺あり。昔印度にては此の樹を以て物の高さを量る尺度とせり。

くは如來よ、我が爲に宣說し給へ。世尊よ、變化の如來は此の二義を說き給ふ、根本の佛にあらず。根本の佛は三昧の樂境を說き給へども、虛妄分別の所行を說き給はず。善い哉、世尊は法に於て自在なり。唯願くは哀愍して、此の二義を說き給へ。一切の佛子は、心に皆な聞かんことを樂へり。』

爾の時に世尊は彼の王に告げたまはく、

『汝の問に應じて、我まさに汝が爲に說くべし。』

時に夜叉王は更に種種の寶冠瓔珞を著け、諸の莊嚴の具を以て其の身を嚴りて謂つて言く、

『如來は常に「法すら尙ほ捨つべし、何に況んや非法をや」と說き給ふ。云何にしてか此の二種の法を捨つることを得む。何をか是法にして、何をか非法なる。法若し捨つべくんば、云何んが二ある。二あれば卽ち分別相中に墮す。有體無體是實非實、是の如きの一切は皆これ分別にして、阿賴耶識の無差別の相を了知すること能はざるなり。毛輪住の如く、淨智の境にあらず。法性、是の如くんば、云何が捨つべけむ。』

爾の時に佛は楞伽王に告げたまはく、

『楞伽王よ、汝豈に見ずや、瓶等は無常敗壞の法なり。(然るに)凡夫は「その」中に於て妄りに

分別を生ずることを。汝は今何故に是の如き法と非法との差別の相を知らざるか。此は是れ凡夫の分別する所にして聖智の見にあらず。凡夫は種種の相中に墮在す、諸の聖者はしからず。楞伽王よ、宮殿園林を燒ける種種の焰を見るが如し。火性は是れ一なれども、出す所の光焰は、薪力に由るが故に、長短大小各差別あり。汝いま云何にしてか法と非法との差別の相を知らざる。楞伽王よ。一種子の芽莖枝葉及び花果の無量の差別を生むが如し。外法是の如く內法も亦然かなり。謂く、無明を緣となして（二九）蘊界處一切の諸法を生じ、三界の中に於いて諸の趣生を受け、苦樂好醜語默行止各差別あり。又諸の識相は是れ一なりと雖も、境界に隨て上中下、染淨、善惡、種種の差別あるが如し。楞伽王よ、但如上の法は差別あるにあらず、諸の修行者の觀行を修する時、自智の所行によりて亦た復た差別の相あるを見るなり。況に法と非法とに種種の差別分別なからむや。楞伽王よ、法と非法との差別の相は、當に知るべし、悉く是れ相分別の故なることを。楞伽王よ、何をか是れ法なる。謂ゆる二乘及び諸の外道の虛妄に分別して、實等あり諸法の因となると說く。是の如き等の法は應に捨つべく離るべく、その中に於いて分別して相を

【二九】蘊界處とは、吾人が身心の二を色受想行識の五蘊に開き、或は眼耳鼻舌身意色聲香味觸法の十二處に開き、或は眼耳鼻舌身意の六根界と色聲香味觸法の六境界と及び眼耳鼻舌身意の六識界卽ち十八界に開くを云ふ。卽ち蘊界處は五蘊十八界十二處の略。

取るべからず。自心の法性を見れば則ち執着なし。凡愚の取る所の瓶等の諸物は本「來」體あることなし。諸の觀行の人の　(三〇)毘鉢舍那を以て如實に觀察するを諸法を捨つと名く。楞伽王よ、何をか是れ非法なる。所謂諸法は無性無相にして永く分別を離る。如實に見るものは、若くは有若くは無、是の如きの境界は彼みな起さず、是を非法を捨つと名く。謂ゆる兎の角、石女の兒等みな性相なく、分別す可らず。但世俗に隨つて名字ありと說くのみ。瓶等の如く取著す可きに非ず。彼は是れ識の所取に非ざるを以てなり。是の如き分別をも應に捨離すべし。是を法を捨て及び非法を捨つと名く。楞伽王よ、汝の先に問ふ所は我已に說き竟んぬ。楞伽王よ、汝は言ふ、「われ過去の諸の如來の所に於いて、已に此の義を問ひ、彼の諸の如來は已に我が爲に說き給へり」と。楞伽王よ、汝は言ふ、「過去は但是分別(の相)のみ、未來も亦た然かなり」と。我も亦彼に同じし。楞伽王よ、彼の諸佛の法は皆分別を離る。已に一切の分別戲論を出づ、色相の如くならず、唯智を以て能く(之を)證するのみ。衆生をして安樂なることを得せしめむが爲の故に法を演說し、無相の智を以て、說いて如來と名く。(三一)是の故に如來を分別して智身智體となすこと莫れ。心中に分別すること莫れ。意中に我、人、命等を取ること莫れ。何故に能分

(三〇) 毘鉢舍那(Vipasyanā)とは、觀又は正見と譯す
(三一) 此の否定文は魏譯を採れり。

別ならざるか。意識は境界に因つて起り、色の形相を取るを以てなり。是の故に能分別を離れ、亦た所分別を離る。楞伽王よ、譬へば壁上の彩畫の衆生は覺知あることなきが如し。世間の衆生も悉く亦た是の如く、業なく報なし。諸法も亦た然かなり、聞くものなく說くものなし。楞伽王よ、世間の衆生は（三）幻の如し。凡夫外道は（之を）了達すること能はざるなり。楞伽王よ、能く是の如く見るを名けて正見となす。若しこれに異りて見る者は分別の見と名く。分別に由るが故に二に執着す。楞伽王よ、譬へば人あり、水鏡の中に於いて自ら其の像を見、燈月の中に於いて自ら其の影を見、山谷の中に於いて自ら其の響を聞き、便ち分別を生じて取著を起すが如し。此も亦た是の如く、法と非法とは唯是れ分別のみ。分別に由るが故に捨離すること能はず、但更に一切の虚妄を增長して寂滅を得ざるなり。寂滅とは所謂一緣なり。一緣とは是れ最勝三昧なり。此より能く自證聖智を生じ、如來藏を以て境界と爲すなり。

【三】幻は、唐譯には變化に作れども、魏譯より幻の字を取れり。

集一切法品第二の一

爾の時に、大慧菩薩摩訶薩は、摩帝菩薩と倶に、一切諸佛の國土に遊び、佛の神力を承けて座より起ち、偏に右の肩を袒ぬぎ、右の膝を地に著け、佛に向ひ掌を合せ、躬を曲げ、恭敬して、頌を說いて言く、

正宗分

(一)佛は智(慧)と大悲〔とを以て〕、世間は、猶ほ虚空の華の如く、生滅を離れて、有無不可得なりと觀じ給ふ。
佛は智(慧)と大悲〔とを以て〕、一切の法は、幻の如く、心意識を遠離し、有無不可得なりと觀じ給ふ。
佛は智(慧)と大悲〔とを以て〕、世間は猶ほ夢の如く、(二)斷常を遠離し、有無不可得なりと觀じ給ふ。
佛は智(慧)と大悲〔とを以て〕、(三)二無我〔を知れば〕、煩惱障も智障も皆な淸淨(無相)にして、有無不可得なりと觀じ給ふ。
佛は涅槃に住せず、涅槃は佛に住せず、覺と所覺と、若は有と若は非有とを遠離し給ふ。

【一】以下四偈は魏譯を取る。
【二】斷常。因果を撥無して未來の世界なしと主張するを斷見と云ひ、靈魂の永久存在を主張するを常見と云ふ。
【三】二無我とは法無我と人無我となり。法無我とは因緣によりて生ずる一切の事物には一定不變の自性なきを云ひ、人無我とは五蘊假和合の我等の身心は我と認むべき常恒不變のものにあらざるを云ふ。

法身は幻夢の如し。云何が稱讃し上つるべき。性なく生なきを知らば、乃ち佛を稱讃すと名く。佛には　(四)根境の相なし、見ざるを佛を見ると名く。云何ぞ牟尼に於いて、而も能く讃毀あらむや。

若し牟尼を見て寂靜なれば、(是れ則ち)生死を遠離す。是の人は今(世)後世ともに、著を離れて所見なけむ。』

【偈問】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、偈をもて佛を讃し已りて、自ら姓名を説いて「言はく」、

『我が名を大慧と爲す、(我は善く)大乘に通達するものなり。今百八の義を以て、仰いで尊中の上に諮ひ上つる。』

爾の時に　(五)世間解は、是の語を聞き已り、普く衆會を觀(察)して是の言を作さく、

『汝等諸の佛子よ、今皆所問を恣にせよ、我當に汝(等)の爲に自證の境界を説くべし。』

爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、佛の許を蒙り已つて、佛足を頂禮し讃を以て問うて曰く、

『云何にしてか　(六)計度を起し、云何にしてか計度を淨めむ。云何にしてか迷惑を起し、云何に

【四】根境。根とは、吾人の見聞覺知する主觀にして、境とは其の對象なり。

【五】世間解とは、善く世界を了解するものと云ふ意味にして、佛の十號の一なり。

【六】計度とは、英語の Supposition 又は Conjecture にして揣摩、忖度、推量等の義なり。

してか迷惑を清めむ。
云何をか佛子と名け、（何をか）(七)無影及び(八)次第と〔なす〕。
云何んが（諸の）刹土に於いて、〔諸〕相〔の衆生〕及び諸の外道を化す。解脱して何の所にか至り、誰か（能く）縛し、誰か能く解く。
何をか禪の境界と云ふや、何故に三乘ある、彼は何の縁を以てか生ずる、何をか〔所〕作、何にをか能作と云ふや。
誰か二の(九)倶異を說き、云何が(一〇)諸有起り、云何が(一一)無色定及び(一二)滅盡定なる、云何をか(一三)想滅と爲し、云何が定より覺むる。
云何が(一四)所作生なる。〔云何が〕(一五)進去及び(一六)持身ある、云何が諸物を見、云何が諸地に入る。
云何が佛子あり、誰か能く(一七)三有を破し、何の身か何の處に至り、生じて復た何の處にか住する。
云何にしてか神通自在及び三昧を得、三昧の心は何の相ぞ。願く

【七】 無影は梵語、Nirabhasa（ニラーバーサ）の譯語にて或は不現又は無受と譯せらる。蓋し無影とは絶對寂靜平和の意なればなり。
【八】 次第とは梵語、Krama（カラマ）の譯語にて當面の意味は修行の階段たる諸地に入り、住し、出づる次第を言ふ。
【九】 倶異とは外道の學說に於て因と果との一なると、異なると、倶卽ち同時なると、不倶卽ち異時なるとの四句を略したる語ならむ。
【一〇】 諸有とは三界二十五有のことなり。
【一一】 無色定とは無色界の四空處なり。
【一二】 滅盡定とは心の散動を厭ひ靜謐を求めんがために聖者の修する禪定の一なり。
【一三】 想滅とは、聖者が滅盡定

は佛よ、我が爲に說き給へ。
云何をか藏識と名け、云何をか意識と名く。云何にしてか諸見を起し、云何にしてか諸見を退けむ。
云何ぞ（一八）性非性なる、云何が唯是れ心なる。何に因つてか建立の相あり、云何にしてか無我の義を成ずる。
云何が（一九）無衆生なる、云何にしてか（二〇）俗說に隨ふ。云何にしてか常見、及び斷見を起さざることを得る。
云何にしてか佛と外道と、其の相、相違せざる。何故に當來の世に種種の諸の（二一）異部あるか。
云何をか性空となし、云何をか刹那滅となす。（二二）胎藏は云何にして起り、世は云何にして（二三）不動なる。
云何にしてか諸の世間は、幻の如く夢の〔如く〕、乾闥婆城及び陽焰乃至水中の月の如くなる。
何をか菩提分と云ひ、覺分は何より起る。云何にしてか國土亂れ、

に入り、更に六識の心想及び苦樂の二感覺を滅する位に顯はるる心的狀態を云ふ。
【一四】所作生とは定中の變化卽ち定(因)を修して果を感ずるが如きを云ふ。
【一五】遊去とは、是れ定中の神通游戲等なり。
【一六】持身とは、定中の長時の住時なり。
【一七】三有とは欲界と色界と無色界卽ち三界のことなり。
【一八】性とは聲聞と緣覺と菩薩と三乘の性を云ひ非性とは外道の性及び不定種性を云ふ。
【一九】無衆生とは、眞諦卽ち第一義諦より見れば、衆生もなく諸佛もなき、清淨本然なる宇宙の眞實體を云ふ。
【二〇】俗說とは、所謂眞諦に對する俗諦のこと。

何故に諸有を見る。

云何にしてか世法を知り、云何にしてか文字を離る。云何が空華の如く、不生亦た不滅なる。

眞如に幾種か有る、（二四）諸度の心に幾（何）か有る、云何ぞ虚空の如くなる、云何が分別を離る。

云何にしてか（二五）地に次第ある、云何にしてか無影を得む。何をか二無我となす、云何にしてか（二六）所知（障）を淨めむ。

聖智に幾種か有る、衆生を戒しむるに亦た〔幾何の戒か有る〕、摩尼等の諸寶は云何にしてか出づる。

誰か言語と衆生と及び諸物とを起す、（二七）明處と（二八）伎術とは誰の顯示する所なるか。

（二九）伽佗に幾種か有り、（三〇）長行に幾種か有る。道理は幾（何か）不同にして、解釋に幾（何の）差別かある。

飮食は是れ誰か作り、愛欲は云何にしてか起る。

【二一】佛陀の滅後に於いて、佛教に種種の宗旨及び分派起れりしを異部と云ふ。

【二二】胎藏とは、普通に胎生と云ひ、所謂四生の一にして、人畜等の如く母の體內にて適當の發育を遂げ形を整へて母體より生ずるを云ふ。四生の內、他の三生は、卵生と濕生と化生となり。

【二三】不動とは世間は遷流を以て義となす。遷流とは無常の義なり。故に今は其の反對に動かざるもの、變りなきものを擧げたるが如く見る人あるも、予は此の說を取らず。動とは欲界、不動とは色界、無色界のことなれば、今は上二界につきての疑問なり。

【二四】諸度とは、Pāramitā（パーラミター）の譯語にて、迷界の此岸より、悟界の彼岸に度すものと云ふ

云何にしてか　(二一)轉輪王及び諸の小王となり、云何にしてか王は(人民を)守護する。
天衆に幾種の別かある、何をか地となし、何をか日月星宿となす。
解脱に幾種かある。修行師に復た幾(何)かある。何をか阿闍梨と云ひ、弟子に幾(何)の差別かある。
如來に幾種か有り、(二二)本生の事に幾(何)かある。衆魔及び異學、是の如きもの各幾(何)か有る。
自性に幾種の異りかあり、心に幾種の別かある。云何が唯假設なるか。願くは佛ために開演し給へ。
云何をか風雲となし、(二三)念智は何に因つてか有り、(二四)藤樹等の行列は誰か能く此を作る。
(二五)象馬獸は云何にしてか「生じ」、何に因つてか「人は彼等を」捕取する。何をか卑陋の人と云ふ。願くは佛よ、我が爲に說き給へ。
云何にしてか　(二六)六時に攝せらる。何をか　(二七)闡提と云ふ。男女及

義なり。

【二五】地とは、菩薩の修行上の階級に十地あるを言ふ。

【二六】所知障とは、客觀的事物の眞性を知り得ざる惑なり。

【二七】明處とは五明を云ふ。五明とは一に内明即ち佛法、二に因明即ち論理、三に聲明即ち音樂、四に醫方明即ち醫學、五に工巧明即ち工藝美術これなり。

【二八】技術とは五明中の工巧明のことなり。

【二九】伽他(Gāthā)とは、偈即ち頌文を云ふ。

【三〇】長行とは散文の事なり。

【三一】轉輪王とは具には轉輪聖王と云ひ、時に或は略して輪王とも云ふ。梵名 (Cakravartikarāja) の譯にて、四天下を統治する王なり。

び(三八)不男、此等は云何にしてか生ずる。云何にしてか修行進み、云何にしてか修行退く。(三九)瑜伽師に幾(種)か有り、〔而して幾何の〕人をか、其の中に住せしむる。衆生は諸趣に生じて何の形をか〔得〕、何の色相をか〔取る〕。富饒大自在、此は復た何に因つてか得る。何をか釋迦種と云ひ、何をか(四〇)甘蔗種と云ふ。仙人の長き苦行は、是れ誰の教授するところぞ。何に因つてか佛世尊は、一切の(四一)刹中に異名(及び)諸の色類を現じて、佛子衆に圍繞せられ給ふ。何に因つてか肉を食はざる、何に因つてか肉を斷ぜしむる、食肉の諸の衆生は、何の因を以てか故らに食する。何故に諸の國土は、猶は日月の形と、須彌と、蓮華と、卍字及び師子像の如くなる。何故に諸の國土は、(四二)因陀羅網の如く、覆むけると、側だてると、

【三二】本生の事とは、佛陀の前生のことなり。

【三三】念智とは、作意のことにて般若の智を言ふにあらず、魏譯に所謂黠慧は妥當の譯ならむ。

【三四】藤樹等とは、世間にありふれたるものを擧げて無情なる草木の例とせるなり。

【三五】象馬獸とは、前の無情なる草木に異りて、痛さ痒さを知覺するもの、卽ち有情の例として、世間にありふれたるものを擧げたるなり。

【三六】六時。印度にては二ヶ月を一時節となす、故に十二ヶ月は六時節なり。

【三七】闡提とは、梵語 Candala の音譯にして、極惡を意味す。

【三八】不男に五種あり、所謂生と犍と妬と變と半となり。

一切の寶(玉)の成ずる所なる。
何故に諸の國土は、無垢なること日月の光(の如く)、或は花果の形の如く、(或は)箜篌と細腰鼓と(の如くなる)。
何をか (四三)變化佛と云ひ、何をか報(身)佛及び (四四)眞如智慧佛と爲す、願くは我が爲に說き給へよ。
云何が欲界に於いて等正覺を成ぜざる、何故に (四五)色究竟に(於いて) (四六)染を離れて菩提を得るか。
如來滅度の後は、誰か當に正法を持すべき、世尊の(世に)住し給ふこと久しきや(否や)、正法は幾(何の)時をか住せむ。
悉檀に幾種か有り、諸見に復た幾(種)か有る。何故に (四七)毘尼及び諸の比丘を立つる。
一切の諸の佛子、獨覺及び聲聞は、云何にしてか所依を轉じ、云何にしてか無相を得る。
云何にしてか (四八)世通を得、云何にしてか (四九)出世を得、復た何の

【三九】 瑜伽師(Yogi)とは、印度六派哲學中の一學徒を指せる場合と、專ら禪定を修する人を指せる場合とあり。今は後義に解するを宜しとす。

【四〇】 甘蔗とは、印度の種族の一名なり。

【四一】 刹とは、梵語Kṣetraの音譯の略にして、國土と云ふ意味なり。

【四二】 因陀羅網には千珠あり其の光交々相映ず、世界の重重無盡なるに喻ふ。

【四三】 變化佛とは、應身佛即ち歷史上の佛のことなり。

【四四】 眞如智慧佛とは、法身佛のことなり。而して眞如は法身の體にして智慧は其の用なれば、卽ち宇宙の本體と其の妙用となり。

【四五】 色究竟とは、色界の十八

因縁を以てか心七地の中に住する。

(五〇)僧伽に幾種か有ある、云何をか破(戒)の僧となす。云何にしてか衆生の爲に、廣く醫方論を説く。

何故に大牟尼は是の如きの言を唱説し給ふ、(五一)迦葉、拘留孫、拘那含〔牟尼〕は是れ我なりと。

何故に斷常と及び我と無我とを説き給ふ。何ぞ恒に實を説いて、一切は唯是れ心(の所造)なりと〔教へ〕給はざる。

云何にしてか男女林、(五二)訶梨(勒)、菴摩羅、(五三)鷄羅娑(五四)輪圍及び金剛山ある。是の如きの中間に無量の寶(玉)もて莊嚴せる〔ものを〕處き、仙人乾闥婆(等)一切みな充滿せり。これ皆何の因縁なるか。願くは(世)尊よ、我か爲に說き給へ。』

【偈答】爾の時に世尊は其の請ふ所の大乘の微妙なる諸佛の心、最上の法門を開きて、卽ち之に告げ言はく、『善い哉、大慧よ、諦聽せよ、諦聽せよ、汝が問ふ所、(われ)當に次第に說くべし。』

天中最上の世界の名なり。梵名をAkaniṣṭhaと云ふ。

【四六】染。煩惱は白紙の如き人の心を染むるが故に染と云ふ。梵語Raktaの譯語なり。

【四七】毘尼(Vini)とは、戒律のことなり。

【四八】世通とは、世俗の五神通を云ふ。

【四九】出世とは、出世間の六神通を云ふ。

【五〇】僧伽(Saṅgha)は和合衆と譯す。僧侶のことなり。

【五一】迦葉(Kāśyapa)、拘留孫(Krakucchanda)拘那含牟尼(Kanakamuni)

【五二】訶梨勒(Haritaki)と菴摩羅(Āmalaka)とは、何れも果實の名。其の味美甘なり。菴摩羅は現今のマンゴーならむ。

【五三】鷄羅娑(Kailāsa)は山名。

卽ち頌を說き曰はく、

『若くは生と若くは不生と、涅槃と空相と、及び流轉は自性なし。波羅密(多)と佛子と、聲聞と辟支佛、(及び)外道の（五五）無色行[には自性なし』。

須彌と巨海と山と、洲渚と刹土地と、星宿と日月と、天衆と阿修羅と、解脫と自在通力と、禪の諸三昧と滅及び（五六）如意足と（五七）菩提分及び道と禪定と無量の諸蘊、及び往來と乃至滅盡定とは、心の生ずる所にして(執すべき自性なく唯)言說あるのみなり。

心意識も無我も、五法及び自性も、(能)分別も所分別も、能所二種の見も、諸乘及び種性も、金摩尼も眞珠も、一闡提も(四)大種も、荒亂も及び一佛も、智も所智も（五八）敎得も、衆生の有無も、（五九）所作及び能作も、衆林も迷惑も、是の如き眞實の理も、唯心にして境界なし。

諸地に次第なく、無相にして所依を轉ず。醫方明、工巧論、技術、

【五四】輪圍(Cakravāḍa)は、普通に鐵圍山と譯す。

【五五】無色行とは、外道の作[illegible]て、涅槃なりと思惟するものにして、普通に謂ふ所の非想定のことなり。

【五六】如意定とは、智力と定力と平均して、願望する所を皆得るの謂ひなり。

【五七】菩提分とは、定と慧との調はざる心的狀態をして、調へしむる心的作用を云ふ。

【五八】敎得とは、衆生に敎詔して、眞如に趣向することを得せしむるを云ふ。

【五九】此の間に「象馬獸何因、云何而捕取、云何因譬喩、相應成悉檀」の一偈あれども、譯文の上より見て、却て無くもがなと思はるゝが故に省く。

【六〇】微塵とは極微とも云ふ。共に梵語の[illegible]の譯語なり。

諸明處」等、皆是れ法身佛の現量の境界にあらず、唯心の所造のみ」。

須彌の諸山と地と、巨海と日月の量と、(及び)上中下の衆生の身は各幾(六〇)微塵なる。一一の刹は幾(微)塵なる。一一の弓は幾(六一)肘なる幾弓か倶盧舍となる。

半由旬と由旬と、兎毫と隙遊と、蟣と羊毛と穬麥と、半升と一升と是れ各幾穬麥なる。

一斛と及び十斛と、(六二)百萬及び一億乃至(六三)頻婆羅と、是等各幾數かある。

幾(微)塵か芥子を成し、幾芥子か草子を成し、復た幾草子を以てか一豆となす。

幾豆をか一銖をなし、幾銖をか一兩を成す。幾兩をか一斤をなし、幾斤をか須彌を成す。

此等は應に(汝が)問ふべき所なり。(然るに大慧よ、汝は)何に因つてか餘事を問ふ。

聲聞と辟支佛と、諸佛と佛子と、是の如きの身量は各幾微塵かある。火風は各幾塵かある。

現代語にては原子と云ふべし。以下肘、弓、倶盧舍等は原子の積み重なりて次第に增大せるものゝ名なり。詳細を知らんと欲せば倶舍論等を見よ。

【六一】肘はHasta弓はDhanu拘盧舍はKrośa由旬はYojana兎はŚaśaraja　隙遊はVātāyana-cchidraraja蟣はLikṣā羊毛はAviraja穬麥はYavaなり。

【六二】此の一句は魏譯による、唐譯には十萬堅千億とあり。

【六三】頻婆羅(Bimbara)は、億兆以上の大數なり。

一一の根に幾(微塵)かある。眉及び諸の毛孔は、復た各幾(微)塵より成る。是の如き等の諸事を、云何が我に問はざる。
云何にしてか財富を得、云何にしてか轉輪王となり、云何が王は守護すべき、云何にしてか解脱を得む。
何をか長行句と云ひ、婬欲及び飲食「は如何してか生ずる」。何をか男女林、金剛等の諸山、幻、夢、渴愛の、譬と云ふ。
諸雲は何より起り、時節は云何にしてかある。何に因つてか種種の味、女男及び不男、佛菩薩の嚴飾ある。何をか諸妙山、乾闥婆の莊嚴と云ふ。
解脱して何の所にか至る。誰か縛し誰か解脱する。何をか禪の境界、變化及び外道と云ふ。
云何が無因にして作り、云何が有因にして作る。云何が諸見を轉じ、云何が計度を起す。云何が計度を淨ふし、所作は云何にしてか起る。
云何にしてか轉去し、云何にしてか諸想を斷じ、云何にしてか三昧を起す。
三有を破するものは誰ぞ。何れの處にか何れの身となる。云何が我あることなく、云何が俗説に隨ふ。汝が一所問の相は云何、及び(汝が)問ふ所の非我はいかむ。

云何が胎藏及び餘の支分と爲り、何をか斷常の見と云ふ。云何にしてか心は〔四〕定を得る。
何をか言說、智、戒、種性(及び)佛子と云ひ、何をか理釋に稱ふと云ふ。
云何が師、弟子、衆生、種性の別、飮食及び虛空、總明(並に)魔の施設あり、云何が樹の行布ある、是れ汝の問ふ所なり。
何に因つてか一切の刹(土)に種種なる相の不同あり、或は箜篌、腰鼓及び衆花の如きものあり、或は光明を離れたる仙人の長き苦行あり、
或は好族姓ありて、衆生をして尊重せしめ、或は體の卑陋なるものありて、人の爲に輕賤せらる。
云何が欲界の中に修行して成佛せず、而も色究竟に於いて乃ち等正覺に昇る。
云何が世間の人にして能く神通を獲、何に因つてか比丘と稱し、何故に僧伽と名く。
何をか化(身佛)報(身佛)及び眞如智慧佛と云ひ、云何が其の心をして、七地の中に住することを得せしむ。
此(等)及び餘の義に於いて、汝いま咸な我に問ふ。先佛の所說の如く、一百八種の句の一一

〔四〕　唐譯には、云何心一境とあり。心一境とは、心を一つの目的物に集中することなり、故に此處には魏譯を取りて定を得とせり。

の「名」相は「皆よく如實と」相應して、諸見の過を遠離し、亦た世俗の言語によりて成る所の法を離る。我まさに汝が爲に說くべし、佛子應に聽受せよ。

爾の時に大慧菩薩摩訶薩は佛に白して言さく、『世尊よ、何をか是れ一百八句なる。』

佛の言はく、

百八句

『大慧よ、謂ゆる、生句は非生句なり。常句は非常句なり。相句は非相句なり。住異句は非住異句なり。刹那句は非刹那句なり。自性句は非自性句なり。空句は非空句なり。斷句は非斷句なり。心句は非心句なり。中句は非中句なり。緣句は非緣句なり。因句は非因句なり。煩惱句は非煩惱句なり。愛句は非愛句なり。方便句は非方便句なり。善巧句は非善巧句なり。淸淨句は非淸淨句なり。相應句は非相應句なり。譬喩句は非譬喩句なり。弟子句は非弟子句なり。師句は非師句なり。種性句は非種性句なり。三乘句は非三乘句なり。無影像句は非無影像句なり。願句は非願句なり。三輪句は非三輪句なり。標相句は非標相句なり。有句は非有句なり。無句は非無句なり。俱句は非俱句なり。自證智句は非自證智句なり。現法樂句は非現法樂句なり。刹句は非刹句なり。塵句は非塵句なり。水句は非水句なり。弓句は非弓句なり。大種句は非大種句なり。算數句は非算數句なり。神通句は非神通句なり。虛空句は非虛空句なり。雲句は非雲句なり

巧明句は非巧明句なり。技術句は非技術句なり。風句は非風句なり。地句は非地句なり。心句は非心句なり。假立句は非假立句なり。體性句は非體性句なり。蘊句は非蘊句なり。衆生句は非衆生句なり。覺句は非覺句なり。涅槃句は非涅槃句なり。所知句は非所知句なり。外道句は非外道句なり。荒亂句は非荒亂句なり。幻句は非幻句なり。夢句は非夢句なり。陽焔句は非陽焔句なり。影像句は非影像像なり。火輪句は非火輪句なり。乾闥婆句は非乾闥婆句なり。天句は非天句なり。飲食句は非飲食句なり、婬欲句は非婬欲句なり。見句は非見句なり。波羅密多句は非波羅密多句なり。戒句は非戒句なり。日月星宿句は非日月星宿句なり。諦句は非諦句なり。果句は非果句なり。滅句は非滅句なり。滅起句は非滅起句なり。醫方句は非醫方句なり。相句は非相句なり。支分句は非支分句なり。禪句は非禪句なり。迷句は非迷句なり。現句は非現句なり。護句は非護句なり。種族句は非種族句なり。仙句は非仙句なり。王句は非王句なり。攝受句は非攝受句なり。寶句は非寶句なり。記句は非記句なり。一闡提句は非一闡提句なり。女男不男句は非女男不男句なり。味句は非味句なり。作句は非作句なり。身句は非身句なり。計度句は非計度句なり動句は非動句なり。根句は非根句なり。有爲句は非有爲句なり。因果句は非因果句なり。色究竟句は非色究竟句なり。時節句は非時節句なり。樹藤句は非樹藤句なり。種種句は非種種句なり。

演說句は非演說句なり。決定句は非決定句なり。毘尼句は非毘尼句なり。比丘句は非比丘句なり。住持句は非住持句なり。文字句は非文字句なり。大慧よ、此の百八句は皆是れ過去の諸佛の說き給ふ所なり。』

【說識異外分】 爾の時に大慧菩薩摩訶薩は復た佛に白して言さく、

『世尊よ、諸識は幾種の生住滅かある。』

佛の言はく、

（六五）『大慧よ、諸識は二種の生住滅あり、臆度者の能く知る所にあらざるなり。謂ゆる相續生及び相生、相續住及び相住、相續滅及び相滅なり。諸識に三相あり、謂く轉相、業相(及び)眞相(之れ)なり。大慧よ、識は廣說すれば八あり、略すれば則ち唯二となる。謂く（六六）現識及び分別事識(卽ち之)なり。大慧よ、明鏡の中に諸の色像を現ずるが如く、現識も亦た爾なり。大慧よ、現識と分別事識と、此の二識は異相なく、互に因となる。大慧よ、現識は不思議熏變を以て因となし、分別事識は境界を分別すると及び無始の戲論の習氣とを以て因となす。大慧よ、阿賴耶識を虛妄に分別する種々の習氣滅す

【六五】 此の章に說ける事は極めて難解なる佛教心理學の一項なり、故に到底門註を以て解明すること能はず。冀くは研學の士、唯識論と起信論等とを併せ研究せよ。

【六六】 第六意識を分別事識と云ひ、第八阿賴耶識を現識と云ふ。魏譯には略すれば眞識現識及び分別事識の三とせり。蓋し第八識を染分淨分の二に分ちて眞識現識と謂へるものか。或は言ふ、現識とは第七末那識のことなりと。

れば、即ち一切の根識滅す。是れを相滅と名く。大慧よ、相續滅とは、謂く、所依の因滅し及び所緣滅すれば即ち相續滅なり。所依の因とは無始の戲論、虛妄の習氣を謂ひ、所緣とは自心の見る所によりて分別する境界を謂ふ。大慧よ、譬ば泥團と微塵との異に非ず不異に非ざるが如く、又金と莊嚴具との（異に非ず不異に非ざるが）如し。大慧よ、若し泥團と微塵と異らば、彼は應に成ぜざるべし。而かも彼は實に成ず、此の故に異にあらず。若し不異ならば、泥團と微塵とは應に分別なかるべし。大慧よ、轉識と藏識と若し異ならば、藏識は彼の因にあらず。若し不異ならば、轉識滅すれば藏識も亦應に滅すべし。然も彼の眞相は滅せざるなり。大慧よ、識の眞相は滅せず、但業相のみ滅す。若し眞相滅せば、藏識は應に滅すべし。若し藏識滅せば、即ち外道の斷滅の論と異ならず。大慧よ、彼の諸の外道は是の如きの說を作す。（謂く）「境界を取る（所の）相續識滅すれば、即ち無始の相續識滅す」と。大慧よ、彼の諸の外道は、相續識を以て作者より生ずるものなりと說く。（乃ち）眼識は色と光明との和合によりて生ずと說かずして、唯作者を生因となすと說く。〔然らば其の〕作者は何者なりや〔と云ふに〕、彼（等）は（六七）勝性、（六八）丈夫、（六九）自在、

【六七】勝性とは印度正統派の哲學に於ける萬有の大祖父即ちVisnu神のこと、又は數論哲學の自性なりとも云ふ。

【六八】丈夫とは數論哲學に於ける神我（Purusa）のこと。

【六九】自在とは印度の外道哲學の一派にて建立する所の大自在天（Mahesvara）のこと。

(七〇)時或は　(七一)微塵(等)を計して能作者となす。』

【七種性心分】『復た次に大慧よ、七種の自性あり、謂ゆる集自性、性自性、相自性、大種自性因自性、縁自性、成自性(これ)なり。復た次に大慧よ、七種の第一義あり。謂ゆる心所行、智所行、二見所行、超二見所行、超子地所行、如來所行、如來自證聖智所行(之れ)なり。大慧よ、此は是れ過去未來現在に於ける一切の如來、應(供)、正等覺の法の自性の第一義心なり。此の心を以て如來は世間出世間の最上の法を成就し給ひ、聖なる慧眼を以て　(七二)自(相)共相に入り、種種に安立し給ふ。(而して)其の安立し給ふ所は外道の惡見と同じからず。大慧よ、云何をか外道の惡見となす。謂く、境界は分別より現ずと知らず、自性第一義に於いて、有無の見を起てゝ言說す。』

【邪正見異分】『大慧よ、我いま當に說くべし。若し境は幻の如く自心の所現なることを了らば、則ち妄想の三有の苦及び無知の愛業の緣を滅す。大慧よ、諸の沙門(或は)婆羅門あり、非有及び有を妄計して、因果の外に於いて諸物を顯現し、時に依りて住す「となすものあり」。或は　(七三)種界處を計して緣に依りて生住し、有り已れば卽ち滅す「となすあり」。

【七〇】時とは萬物の本源を時間なりとする外道の一派卽ち時論師の說。

【七一】微塵とは矢張り印度哲學の一派にて萬物の根源を微塵卽ち原子となすの說を指す。

【七二】自相とは物それ自體に局る相を云ひ、共相とは自他に通ずる相を云ふ。

【七三】蘊界處とは五蘊十二處十八界なり。

大慧よ、彼(等)は若は相續、若は作用、若は生、若は滅、若は諸有、若は涅槃、若は道、若は業若は果、若は諦に於いて〔如上の計をなす〕、是れ破壞斷滅の論なり。何となれば(一)(七四)現法に反し、(二)根本を見ざるを以てなり。大慧よ、瓶破すれば瓶の〔用〕事を作さゞるが如く、又燋したる種(子)の芽を生ずること能はざるが如し。此も亦是の如く、若し蘊界處の法、過去にも、現在にも、未來にも滅すとせば、應に知るべし、此は則ち相續の生なきことを。〔何となれば〕因なきを以ての故に但是れ自心の虛妄に見る所なればなり。復た次に、大慧よ(七五)本無と(七六)有と(七七)識と三緣合して、〔法を〕生ずとせば、龜は應に毛を生ずべく、沙は應に油を出すべし。汝が(七八)宗は則ち壞る。決定の義に違(反)する〔が故に〕、所作の事業は悉く空にして無益なり。大慧よ、三合を緣となさば是れ因果の性、說いて有と爲す可くむば、過(去)現(在)未來〔に於いて〕無より有を生ずることあらむ。此は覺想地に依住する者の、有ゆる理敎、及び自らの惡見の熏習する餘氣によりて、是の如きの說をなすなり。大慧よ、愚癡の凡夫は惡見の噬する所の邪見に迷醉せり。無智の者は妄りに一切智の說なりと稱す。大慧よ、復沙門婆羅門あり、

【七四】現法とは現在の事實を云ふ。卽ち經驗的事實なり。

【七五】本無とは數論哲學に謂ふ所の冥初の如きものを指す。

【七六】有とは數論哲學の大等の諸法を指す。

【七七】識とは數論に謂ふ所の神我の如きを指す。

【七八】宗とは論理學上の命題なり。

一切の法は、皆自性無しと觀ず。空中の雲の如く、旋火輪の如く、乾闥婆城の如く、幻の如く、焔の如く、水中の月の如く、夢の所見の如く、自心を離れず。無始より來、虚妄の見に由るが故に、取つて以て外と爲す。是の觀を作し已つて、分別の緣を斷じ、亦妄心所取の名義を離れ、身及び物並に所住處(等)一切(のもの)は、皆是れ藏識の境界にして、能(取)なく所取なく、及び生住滅なきことを知り、常恒に是の如き思惟を捨てざるなり。大慧よ、此菩薩摩訶薩は、久からずして當に生死涅槃の二種の平等と、大悲方便無功用の行を得べし。(彼は)衆生は幻の如く影の如く緣に從つて起ると觀じ、一切の境界は心を離れて得ることなきを知り、無相道を行じ漸く諸地に昇つて三昧の境に住し、三界は皆唯自心なりと了達して、如幻定を得て衆の影像を絕し、智慧を成就して無生法を證し、金剛喩三昧に入り、當に佛身を得て恒に如々に住し、諸の變化力通自在を起すべし。大慧よ、(彼は)方便を以て嚴飾となして衆の佛國に遊び、諸の外道及び心意識を離れ、次第に轉進して如來の身を得む。大慧よ、菩薩摩訶薩は佛身を得むと欲せば、當に蘊界處の心、因緣の所作、生、住、滅法の戲論分別を遠離すべし。但心量に住して、三有は無始時來の妄習の起す所なることを觀察し、佛地は無相無性にして、自證の聖法なることを思惟し、心の自在、無功用の行を得て、如意寶の如く、宜に隨つて身を現じ、唯心(の理)を達(了)して、漸

く諸地に入るなり。是の故に大慧よ、菩薩摩訶薩は、自らの（七九）悉檀に於いて應に善く修學すべし。』

【七九】悉檀（Siddhānta）とは梵語にして義宗と譯す。

巻の第二

集一切法品第二の二

【識轉不壞分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、唯願くは我が爲に、心意識、五法、自性の相、衆妙の法門を說き給へ。此は是れ一切の諸佛菩薩、自心の境に入り、所行の相を離れて、眞實の義に稱へる諸佛の敎心なり。唯願くは如來よ、此の山中の諸の菩薩衆の爲に。過去の諸佛に隨順して、藏識の海浪、法身の境界を演說し給へ。』

爾の時に世尊は大慧菩薩摩訶薩に告げ言はく、『四種の因緣ありて眼識は轉ず。何等をか四となす。謂く、〔境界は〕自心の現ずる〔所なること〕を覺らずして執取する(之れ其の一)なり。無始時來の虛妄習氣によりて〔一〕色に取著する(之れ其の二)なり。識の本性(卽ち了別作用)に因ること(之れ其の三)なり。〔心に〕種々の色相を樂見せむとする(之れ其の四)なり。大慧よ、此の四緣を以て、阿賴耶識は、瀑流の水の如く、轉識の浪を生ず。眼識の如く餘(識)も亦た是の如し。轉

【一】色とは物質的の現象卽ち心的作用の對象なり。

識は、一切の諸根、微塵、毛孔、眼等に於いて、或は頓生なり、譬ば明鏡に諸の色像を現ずるが如し。或は漸生なり、譬へば猛風の大海の水を吹くが如し。心海も亦た爾なり、境界の風吹いて諸の識浪を起し相續して絶えず。大慧よ(二)因と(三)所作の相とは一にあらず異にあらず、業(識)と(所作の)生相と相繫はり深く縛して、色等の自性を了知すること能はず、[故に]五識身轉ず。大慧よ、五識と倶に或は差別の境相を了別するに因りて意識の生することあり。然れども彼の諸識は是の念を作さず、「我等同時に展轉して因となり、自心の現ずる所の境界に於て、分別執着し、時を倶にして起れども、差別の相なく各自境を了る」と。大慧よ、諸の修行者は三昧に入りて、習力微に起るも覺知せざるが故に、但是念を作す、「我諸識を滅して三昧に入る」と。(然も)實は識を滅して三昧に入るにあらず、彼は習氣の種を滅せざるが故に、但諸境を取らざるを名げて識滅と爲すのみ。大慧よ、是の如く藏識の行相は微細なり。唯諸佛及び住地の菩薩を除き、其の餘の一切の二乘、及び外道の定慧の力にては皆知ること能はず。唯如實の行を修行する者あり、智慧の力を以て諸地の相を了じ、善く句義に(通)達するなり。無邊の佛の廣く集むる所の善根は、妄りに自心の所見を分別せざるもの丶み能く之を知る。大慧よ、諸の

【二】因とは此所にては藏識のことなり。

【三】所作の相とは七轉識のことなり。

修行の人は山林に宴處し、上中下の修(業)もて、能く自心の分別する流注を見、諸の三昧自在力通を得、諸佛に灌頂せられ、菩薩に圍繞せられて、心意意識の所行の境界を知り、愛業無明の生死の大海を超ゆ。是故に汝等當に諸佛菩薩の、如實に修行する大善知識に親近すべし。』爾の時に世尊は重ねて偈を說き言はく、

『譬へば巨海の浪の猛風に由つて起り、洪波の溟壑を鼓して斷絶する時なきが如く、藏識の海は常住なれども、種種の諸識の浪は、境界の風に動かされて騰躍して轉生ず。

青赤等の諸色と、鹽貝乳石密と、花果と(及び)日月の光とは異に非ず不異に非ず。

應に知るべし、意等の七種の識は、海の波浪と共なるが如く、心と倶に和合して生ずるものなることを。

譬へば海水の動いて、種種の波浪と轉(變)するが如く、藏識も亦た是の如くにして、種々の諸識を生ずるなり。

心意及び意識は識相と爲る。故に說く、「八識は別相なく能相(及)び所相なし」と。

譬へば海と波浪とは、是れ則ち差別なきが如く、諸識と心も是の如し。異(と言ふ)も亦た不可得なり。

(四)心は能く業を積み集め、意は能く廣く積集す、了別の故に識と名け、現(在)の(五)境に對して五と說くなり。』

【別說識眞分】　爾の時に大慧菩薩摩訶薩は頌を以て問ふて曰く、

『靑赤(等)の諸の色像は、衆生の識の顯現なること(猶)浪の如し。〔今それ〕種々の法は云何。願くは佛よ、說き給へ。』

爾の時に世尊は頌を以て答へ曰はく、

『靑赤(等)の諸の色像は、(識)浪中に得べからず。心、衆相を起すと言ふは、諸の凡夫を開悟せしめん〔が爲めなり〕。

而かも彼もと起ることなければ、自心の所取を離る。能取及び所取は、彼の波浪と同じ。

身も資財も安住も衆生の識の現ずる所なり。是故に此に起ると見ゆるも、浪と差別なし。』

爾の時に大慧は復た頌を說いて曰く、

『大海の波浪の性の鼓躍するは分別すべし。藏識〔若し〕是の如くにして起らば、(衆生)は何故に〔之を〕覺知せざるか。』

【四】此の頌は心意識の作用の區別を說く。謂く、心は集起を義とし、諸業を積集發起する作用。意は思量を義とし、諸事を思惟考量する作用。識は了別を義とし、精神活動が對象の總相を取る作用なり。

【五】境とは心的作用の對象なり。

爾の時に世尊は頌を以て答へ曰はく、

阿頼耶(識)は海の如く、轉識は波浪と同じ、凡夫の無智なる爲に譬喩して廣く開演するのみ。』

爾の時に大慧は復た頌を說いて言く、

『譬へば日光の出で〻、上下等しく皆照すが如く、世間の燈(たる如來)も亦た然り、應に愚の爲に實を說き給ふべし。已に能く法を開示す。何ぞ眞實を顯はし給はざる。』

爾の時に世尊は頌を以て答へ曰はく、

『若し眞實を說かんには、(六)彼の心に眞實なし。譬へば海の波浪も鏡中の像も、及び夢(中の事)も、倶時に顯現するが如く、心境界も亦た然かなり。

(七)境界具せざるが故に、次第に轉生す。識は以て能く了知し、

(八)意は復た意に然りと謂ひ、五識は現境を了じ、(九)定まれる次第無し。譬へば (一〇)工畫師及び畫師の弟子の、彩を布いて衆像を圖す

【六】佛は眞實の義を說くを以て本意となし給へども、而も未だ說き給はざるは、衆生の心に眞實なく、眞如の法は一なるを知らず、徒らに心外に法ありと執するが故に、此の頌あるなり。

【七】第七識以下は境界具せす、則ち業識に從つて次第に轉生するなり。

【八】第七の意識は然らざるを然りとし妄心を認めて我となすとの謂ひなり。

【九】五識は五塵に隨つて顯現するが故に、一定の次第順序なく根と塵と合する處に卽ち生ずとの謂ひなり。

【一〇】畫師弟子は佛菩薩に比し彩色等は佛の言說に喩へたるなり。

るが如く、我が說も亦た是の如し。
彩色中に文なく、筆にも非ず亦た素にも非ず、衆生を悅ばしめんが爲に、綺煥して衆像を成すなり。
言說は卽ち變異あり、〔而して〕眞理は（卽ち）文字を離る。我が住する所の〔眞〕實の法は、諸の修行〔者〕の爲に說くなり。
眞實自證の處は、能所の分別を（遠）離す、此は佛子の爲に說く。
（若し）愚夫（の爲め）には別に開演す、種々〔の法〕は皆幻の如く、所見不可得なり。
是の如く種々に說き〔二〕事に隨つて變異す。〔若し我が〕說く所〔聽者の機根に〕應せずむば、彼に於いて〔三〕非說と爲るなり。
譬へば良醫の衆の病人に應じて藥を授くるが如く。如來は衆生の爲に、心に隨ひ量に應じて說き給ふ。
世間の依怙者よ、（如來の）證智所行の處は、外道の（知り得る）境界にあらず、聲聞も亦た復た然かなり。』

【二】機根の事情境遇に隨つて應病與藥的の說法をなすとなり。
【三】非說とは、小根の人に大乘微妙の實法を說けば、彼等は其を了解する能はず、却て大法螺吹き又は大妄語と考ふ、所謂說法不投機なり。

【達心修方分】『復た次に大慧よ、菩薩摩訶薩にして、若し能取所取の分別の境界は、皆これ自心の現ずる所なることを了知せんと欲せば、當に憒閙昏滯睡眠を離れ、初中後夜に、勤めて修習を加へ、曾て聞く(所の)外道の邪論及び二乘の法を遠離し、自心分別の相に通達すべし。』

【勤修三相分】「復た次に大慧よ、菩薩摩訶薩は智慧の心所の住相に住し已らば、上聖智の三相に於いて當に勤めて修學すべし。何をか三と爲す。謂ゆる無影像相、一切諸佛の願持の相、自證聖智所趣の相(卽ち之)なり。諸の修行者は此の相を獲已つて卽ち(三)跛驢の智慧の心相を捨て、菩薩の第八地に入り、此の三相に於いて修行して捨てず。大慧よ、無影像相は、一切の二乘(及び)外道の相を慣習するに由るが故に生起することを得、一切諸佛の願持の相は、諸佛の本願力の加被する所に由るが故に生起することを得、自證聖智の所趣の相は、一切の法相を取らず、諸の如幻三昧を成就して、身、佛地智に趣くに由るが故に生起することを得るなり。大慧よ、是を上聖智の三種の相と名く。若し此の相を得ば、卽ち自證聖智の所行の處に到らむ。汝及び、諸の菩薩摩訶薩は應に勤めて修學すべし。』

【三】跛驢とは第七遠行地なり。跛驢の遠きに行く如く、第八地より見るときは能く大事を擔荷するに耐へざるなり。

【有無想離分】 爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、諸の菩薩の心に念ふ所を知り、一切の佛の威神の力

を承けて、佛に白して言さく、『唯願くは(我等の)爲に百八句の差別の所依、聖智の事、自性の法門を說き給へ。一切の如來、應(供)、等正覺は、諸の菩薩摩訶薩の(一四)自共相に墮する者の爲に、此の妄計の性、差別の義門を說き給ふ。此の義を知り已つて卽ち能く二無我を淨治し、境を觀じて諸地を照明し、一切の二乘(及)び外道の三昧の樂を超越し、諸の如來の不可思議所行の境界を見、畢竟して五法自性を捨離し、一切の佛の法身の智慧を以て自ら莊嚴して如幻の境に入り、一切の刹(土)、兜率天宮(及び)色究竟天に住して、如來の身を成せむ。』佛の言はく、

『大慧よ、一類の外道あり。(一五)一切の法の因に隨つて盡くるを見て分別の解を生じ、兎に角なきを想ふて無の見を起し、兎角の無きが如く、一切の法も亦た悉く是の如し「と觀ず」。復た外道あり。(一六)大種、求那、(微)塵等の諸物の形量分位を見、各差別し已つて兎に角なきを執し、此に於いて牛に角あるの想を生ず。大慧よ、彼(等)は(斷常の)二見に墮して唯心を了せず但自心に於いて分別を增長するのみなり。大慧よ、身も資生も及び器世間等も、一切みな唯分別の現ずる所なり。大慧よ、應に知るべし、兎角は有無を離る、諸法も悉く然り、分別を生ず

(一四) 自共相とは自相共相の略なり。自相とは各自の五蘊の同じからざるを云ひ、共相とは各人みな五蘊より成る邊なるを云ふ。

(一五) これ斷見に墮する外道の一類を斥破するなり。

(一六) 大種、求那、微塵、等の存在を主張する勝論外道の見解を斥破するなり。

ること勿れ。云何が兎角は有無を離る。互に因を待つが故なり。牛角を分析して乃ち微塵に至り其の體を求むるも終に得べからざるなり。聖智の所行は彼(等が如き斷常)の見を遠離す。是の故に此に於いて應に分別すべからず。』

【離見心證分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は復た佛に白して言さく、『世尊よ、彼豈に妄見を以て相を起し、比度觀待して妄りに無と計せざらむや。』

佛の言はく、『分別を以て相待を起すが故に無と言ふにあらず、何となれば彼は分別を以て、生因と爲せばなり。角を以て分別して其の所依と爲す。所依を因とせば異不異を離る。相待に由つて兎に角なきを顯はすに非ず。大慧よ、若し此の分別と兎角と異ならば則ち角は因にあらず、若し不異ならば彼に因つて起る。[是故に同と言ふ可らず]。大慧よ、牛角を分析して乃ち極微に至るも求め得べからず。有角に異なるを無角と言はゞ、是の如き分別は決定して非理なり。二俱に非有ならば誰をか誰に待たむ。若し相待成せず、有を待つが故に兎に角なしと言はゞ、因正しからざるが故に分別すべからざるなり。有無の論者は、有に執し無に著すれども、二俱に成せざるなり。

大慧よ、復た外道あり。色、形狀(及び)虛空の分齊を見て執着を生じ、色は虛空に異なると言

ひ(妄)分別を起す。大慧よ。虚空は是れ色なり〔故に〕色種に入る。大慧よ、色は是れ虚空なり、そは能持と所持とを建立するの性なるを以てなり。色と空との分齊は、應に是の如きものなることを知るべし。大慧よ、〔四〕大種の生ずる時は自相各別なり、虚空の中に住せざれども、彼に虚空なきにあらず。大慧よ、兎角も亦爾かなり、牛角と觀待して彼(兎)に角なしと言ふのみ。大慧よ、牛角を分析して乃ち微塵に至り、又彼の塵を分析すれども其の相現はれず、彼何の待つ所あつてか無しと言ふや。若し餘物を待つも彼も亦た是の如けむ。大慧よ、汝應に兎角、牛角、虚空及び色(等)の有ゆる分別を遠離すべし。汝及び諸の菩薩摩訶薩は應に常に自心所見の分別の相を觀察し、一切の國土に於いて、諸の佛子の爲に、自心を觀察する修行の法を説くべし。』爾の時に世尊は卽ち頌を説き言はく、

『心の所見は〔實〕有にあらず、唯心に依つて起るのみ。身、資、所住、影は、衆生の藏識の現はす所なり。

心意と及び意識と、自性の五種の法と、(並に)二無我の清淨とは、諸の導師の演説するところなり。

(一七)長短有無等は展轉して互に相生ず。有に因るが故に無を成し、無に因るが故に有を成す。

【一七】此の一句は宋譯及び魏譯を取る。

微塵分析の事(に於いて)色の分別(妄)想を起さず、これ唯心の安立する所なり、惡見の者は(之を)信せず。

救世の說き給ふ所の自證の境界は、外道の行ずる處に非ず、聲聞も亦た復た然り。』

【淨流漸頓分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、心の（一八）現流を淨めんが爲に佛に請うて言はく、『世尊よ、云何にしてか諸の衆生は自心の現流を淨めむ。漸次淨となさむか頓淨となさむか。』佛の言はく、『大慧よ、漸淨にして頓にあらず。菴(摩)羅果の漸熟にして頓に非ざるが如し。諸佛如來の、諸の衆生の自心の現流を淨め給ふことも、亦復是の如く漸淨にして頓にあらず。陶師の器を造るは漸成にして頓にあらざるが如し。諸佛如來の、諸の衆生の自心の現流を淨め給ふことも、亦復是の如く、漸にして頓にあらず。譬へば大地の諸の草木を生ずるは、漸生にして頓にあらざるが如し。諸佛如來の、諸の衆生の自心の現流を淨め給ふことも亦復是の如く、漸にして頓にあらず。大慧よ、譬へば人の音樂書畫(及び)種種の技術を學ぶは、漸成にして頓に非ざるが如く、諸佛如來の、衆生の自心の現流を淨め給ふことも、亦た復た是の如く、漸にして頓にあらず。

譬へば明鏡の頓に衆像を現じて分別なきが如く、諸佛如來の、諸の衆生の自心の現流を淨め給

【一八】現流とは自覺の智を以て淨めらるべき煩惱を指す。

ふことも、亦復是の如し。頓に一切無相の境界を現じて分別なし。日月輪の一時に一切の色像を遍照するが如く、諸佛如來の、諸の衆生の自心の過習を淨め給ふことも、亦復是の如し。頓に不可思議なる諸佛如來の智慧の境界を示現し給ふ。譬へば藏識の頓に身、資生、國土、及び一切の境界を現ずるが如く、報佛も亦た爾り。色究竟天に於いて、頓に能く一切衆生を成熟して諸の行を修せしむ。譬へば法佛の頓に報佛及び化佛の光明を照曜せしむるが如く、自證の聖境も亦た復た是の如し。頓に法相を現じて照曜し、一切有無の惡見を離れしむ。』

【三身簡說分】『復た次に大慧よ。法性所流の佛は、一切法の自相共相、自心の現ずる習氣の因相、妄計性の所執の因相、更に相繫屬する種々の幻事は皆自性なし。而も諸の衆生は種種に執着し、取つて以て實と爲せども、悉く不可得なりと說き給ふ。復次に大慧よ、妄計自性は緣起自性に執着して起る。大慧よ、譬へば幻師の幻術の力を以て、草木瓦石に依り、衆生の若干の色像を幻作し、其見者をして種種に分別せしむれども、皆眞實なきが如し。大慧よ、此も亦是の如く、境界を取着する習氣の力に由るが故に。緣起の性中に於いて、妄計の性種々の相現ずることあり。是を妄計性の生と名く。大慧よ、是を法性所流の佛の說法の相と名く。大慧よ、法性佛は自證智の所行を建立し、心の自性の相を離る。大慧よ、化佛は布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧

と蘊界處の法及び諸の解脱と諸識の行相とを説き、建立し差別して外道の見と無色行とを超越し給ふ。復た次に大慧よ、法性佛は攀縁する所に非ず。一切の縁、一切の所作、根量等の相は皆悉く遠離し、凡夫二乘及び外道の執着する我相の取る所の境界に非ず。是故に大慧よ、自證聖智の勝境界の相に於いて、當に勤めて修學し、速かに自心所現の分別の見相を捨離すべし。』

【二種聲聞分】『復た次に大慧よ、聲聞乘には二種の差別の相あり、謂ゆる自證聖智殊勝の相と分別執着自性の相と(卽ち之)なり。何をか自證聖智殊勝の相と云ふ。謂く明に苦、空、無常、無我の諸諦の境界を見て、離欲寂滅なるを以てなり。蘊界處の若は自相若は共相に於いて、(界)外の不壞の相を如實に了知するが故に、心は一境に住す。一境に住し已って禪、解脱、三昧、道果を獲て「生死」を出離し、自證聖智の境界の樂に住すれども、未だ習氣及び不思議の變易の死を離れず。是を聲聞乘の自證聖智の境界の相と名く。菩薩摩訶薩も亦た此の聖智の境界を得と雖も、衆生を憐愍し、本願を所持するが故に、寂滅門及び三昧の樂を證せざるなり。菩薩摩訶薩は、此の自證聖智の樂中に於いて修學すべからず。大慧よ、云何が分別執着自性の相なる。謂ゆる堅濕煖動、青黄赤白等、是の如きの法は、作者の生ずるに非ず。然も教理に依りて、自(相)共相を見て分別し執着す。是を聲聞乘の分別執着の相と名く。菩薩摩訶薩は應に此の法中に於

ふことも、亦復是の如し。頓に一切無相の境界を現じて分別なし。日月輪の一時に一切の色像を遍照するが如く、諸佛如來の、諸の衆生の自心の過習を淨め給ふことも、亦復是の如し。頓に不可思議なる諸佛如來の智慧の境界を示現し給ふ。譬へば藏識の頓に身、資生、國土、及び一切の境界を現ずるが如く、報佛も亦た爾り。色究竟天に於いて、頓に能く一切衆生を成熟して諸の行を修せしむ。譬へば法佛の頓に報佛及び化佛の光明を照曜せしむるが如く、自證の聖境も亦た復た是の如し。頓に法相を現じて照曜し、一切有無の惡見を離れしむ。』

【三身箇說分】『復た次に大慧よ、法性所流の佛は、一切法の自相共相、自心の現ずる習氣の因相、妄計性の所執の因相、更に相繫屬する種々の幻事は皆自性なし。而も諸の衆生は種種に執着し、取つて以て實と爲せども、悉く不可得なりと說き給ふ。復次に大慧よ、妄計自性は緣起自性に執着して起る。大慧よ、譬へば幻師の幻術の力を以て、草木瓦石に依り、衆生の若干の色像を幻作し、其見者をして種種に分別せしむれども、皆眞實なきが如し。大慧よ、此も亦是の如く、境界を取着する習氣の力に由るが故に。緣起の性中に於いて、妄計の性種々の相現ずることあり。是を妄計性の生と名く。大慧よ、是を法性所流の佛の說法の相と名く。大慧よ、法性佛は自證智の所行を建立し、心の自性の相を離る。大慧よ、化佛は布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧

と蘊界處の法及び諸の解脫と諸識の行相とを說き、建立し差別して外道の見と無色行とを超越し給ふ。復た次に大慧よ、法性佛は攀緣する所に非ず。一切の緣、一切の所作、根量等の相は皆悉く遠離し、凡夫二乘及び外道の執着する我相の取る所の境界に非ず。是故に大慧よ、自證聖智の勝境界の相に於いて、當に勤めて修學し、速かに自心所現の分別の見相を捨離すべし。』

【二種聲聞分】『復た次に大慧よ、聲聞乘には二種の差別の相あり、謂ゆる自證聖智殊勝の相と分別執着自性の相と(即ち之)なり。何をか自證聖智殊勝の相と云ふ。謂く明に苦、空、無常、無我の諸諦の境界を見て、離欲寂滅なるを以てなり。蘊界處の若は自相若は共相に於いて、(界)外の不壞の相を如實に了知するが故に、心は一境に住す。一境に住し已つて禪、解脫、三昧、道果を獲て〔生死〕を出離し、自證聖智の境界の樂に住すれども、未だ習氣及び不思議の變易の死を離れず。是を聲聞乘の自證聖智の境界の相と名く。菩薩摩訶薩も亦た此の聖智の境界を得と雖も、衆生を憐愍し、本願を所持するが故に、寂滅門及び三昧の樂を證せざるなり。菩薩摩訶薩は、此の自證聖智の樂中に於いて修學すべからず。大慧よ、云何が分別執着自性の相なる。謂ゆる堅濕煖動、靑黃赤白等、是の如きの法は、作者の生ずるに非ず。然も敎理に依りて、自(相)共相を見て分別し執着す。是を聲聞乘の分別執着の相と名く。菩薩摩訶薩は應に此の法中に於

いて、人無我の見を捨離して、法無我の相に入り、漸く諸地に住すべきことを知るべし。』

【内外常異分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は佛に白して言さく、『世尊よ、如來の説き給ふ所の常不思議なる、自證聖智の第一義の境は、將た諸の外道の所説なる、常不思議の作者と、同じきこと無きや。』

佛の言はく、

『大慧よ、諸の外道の作者は、常不思議を得るに非ず。何となれば諸の外道の常不思議は自相に因つて成ぜざればなり。既に(それ)自相に因つて成ぜずんば、何を以てか常不思議を顯示せむ。大慧よ、外道の説く所の常不思議にして、(若し)自相に因つて成ぜば、彼は則ち常あるべし。(而も)但作者を以て因相となすが故に、常不思議は成ぜざるなり。大慧よ、我が第一義なる常不思議は、第一義の因相を成じて、有無を遠離す、自證聖智の所行の相なるが故に相あり。第一義智を其の因と爲すが故に因あり。有無を離るるが故に作者に非ず。(無爲無作の)虚空の如く涅槃寂滅の法なるが故に常不思議なり。是の故に我が説く所の常不思議は、外道の有らゆる諍論と同じからず。大慧よ、此常不思議は、是れ諸の如來の自ら證し給へる聖智を「以て」行ずる所の眞理なり、是故に菩薩は當に勤めて修學すべし。復た次に大慧よ、外道の常不思議は、無常の異相の

因なるを以ての故に常にして、自相の因力の故に常なるに非ず。大慧よ、外道の常不思議は、所作の法の有り已つて還た無しと見るを以て、無常に比して是れ常なりと知る。我も亦た所作の法は有り已つて還た無しと見る。已に(これ)無常なり、此を以て說いて常となさず。大慧よ、外道は是の如きの因相を以て常不思議を成ず。(而も)此の因相は有に非ず、兎角と同じきが故に、常不思議は唯是れ分別にして、但言說あるのみ。何故に彼の因は兎角に同じきか。(謂く)自因の相なきを以てなり。大慧よ、我が常不思議は、自證を以て因相となす。外法の有り已れば、還た無き無常なるものを以て因となすにあらず。(然るに)外道は之に反し、曾て常不思議の自因の相を知ること能はずして、恒に(此の因を)自證聖智の所行の外に在く。此は說に應せず。』

【聲聞涅槃分】『復た次に大慧よ、諸の聲聞は、生死妄想の苦を畏れて涅槃を求む。(彼等は)生死と涅槃との差別の相は、一切みな是れ妄分別によりて有るのみにして、所有無きことを知らざるが故に、未來の諸根の境を滅するを妄計して以て涅槃と爲す。「故に彼等は」證自智の境界は所依の藏識を轉じて大涅槃と爲すを知らざるなり。(此を以て)彼の愚癡の人には三乘ありと說き、唯心にして境界あること無しと說かざるなり。大慧よ、彼の人は(過)去(未)來現在の諸佛の說き給ふ所の自心の境界を知らず、心外の境を取りて、常に絕えず生死に輪廻すと』

【不生差別分】『復た次に大慧よ、(過)去(未)來現在の諸の如來は、一切の法は不生なりと說き給ふ。何となれば自心の所見は、非有の性にして有無の生を離るゝを以てなり。(一切の諸法は)兎馬等の角の如く(原より有ることなしとは)凡愚の妄取なり。唯自證聖智の所行の處は、諸の愚夫の(一九)二の分別の境に非ず。大慧よ、身、及び資生、器世間等の一切は、皆これ藏識の影像にして、能取所取二種の相の現はれたるものなり。彼の諸の愚夫は生住滅の二見の中に墮するが故に、中に於いて有無の分別を起すのみ。大慧よ、汝此の義に於いて當に勤めて修學すべし。』

【五性分別分】『復た次に大慧よ、五種の種性あり。何等をか五と爲す。謂く、聲聞乘の種性、緣覺乘の種性、如來乘の種性、不定種性及び無種性(即ち之れ)なり。大慧よ、云何にしてか、是れ聲聞乘の種性なることを知る。謂く、若し蘊界處の自相(及び)共相の、若は知、若は證を說くを聞き、擧身の毛を竪て、心に修習することを樂ひ、緣起の相に於いて觀察することを樂はず。應に知るべし、此は是れ聲聞乘の種性なることを。彼は自らの乘に於いて證する所を見已つて、五六地に於いて煩惱の結を斷ずれども煩惱の習を斷せず、不思議の死に住す。正に師子吼して言く、「我が生已に盡き梵行已に立ち所作已に辨じて後有を受けず、人無我を修習し乃至得涅槃の覺を生ず」と。大慧よ、復た衆生あり、

【一九】二の分別とは或は有或は無と妄りに分別すること也。

涅槃を證せんことを求めて、能く我、人、衆生、養者、取者を覺知する、此を是れ涅槃と言ふ。復た説あり、一切の法は作者に依て有りと見る、此を是れ涅槃と言ふ。大慧よ、彼は解脱することなし。何となれば未だ法無我を見ること能はざればなり。此は是れ聲聞乘及び外道の種性にして、未出の中に於て出離の想を生ずるもの、應に勤めて修習して此の惡見を捨つべし。大慧よ云何にしてか是れ緣覺乘の種性なることを知る。謂く、若し緣覺乘の法を説くを聞けば、擧身の毛を竪て悲泣流涙し、慣鬧の緣を離れて染着する所無し。時ありては種々の身を現じて、或は聚或は散、神通變化を説くを聞き、其の心に信受して違逆する所なし。當に知るべし、此は是れ緣覺乘の種性なることを。應に其の爲に緣覺乘の法を説くべし。大慧よ、如來乘の種性は、所證の法に三種あり。謂ゆる自性無自性の法、內身自證聖智の法、外諸佛刹廣大の法(之れ)なり。大慧よ、若し此の一一の法及び自心の現ずる所の身、財、(一〇)器世間(並に)阿賴耶識不思議の境を説くを聞いて、驚かず畏怖せざる者あらば、當に知るべし、此は是如來乘の性なることを。大慧よ、不定種性とは、謂く、彼の三種の法を説くを聞き、時に隨つて、信解を生じ、順じて修學するものなり。大慧よ、初めて地を治す人の爲に種性を説き、其をして無影像地に入らしめむと欲して此の建立を作

【一〇】 唐譯には建立とあれども今は魏譯により器世間を取る。

す。大慧よ、彼の三昧の樂に住する聲聞も。若し能く自ら所依の識を證知して、法無我を見、煩惱の習を淨めば、畢竟して當に如來の身を得べし。』爾の時に世尊は卽ち頌を說いて言はく。

『預流と一來果と、不還と阿羅漢と、是等の諸聖人は、其の心悉く迷惑す。

我か立る所の三乘と、一乘と、及び非乘とは、愚夫少智のもの丶爲にす。

寂を樂ふ諸聖流の第一義の法門は、二取を遠離し無境界に住す、何ぞ三乘を建立せむ。

諸禪及び無量も、無色も三摩提も、乃至受想を滅するも、唯心にして不可得なり。』

【闡提差別分】『復た次に大慧よ、此の中一闡提は、何故に解脫の中に於て欲樂を生ぜざる。大慧よ、(何となれば是れに二種あり一には)一切の善根を捨つるが故に、(二には)無始の衆生の爲に願を起すが故なり。何をか一切の善根を捨つと云ふ。謂く、菩薩藏を謗つて、此は契經に隨順する調伏解脫の說に非ずと言ふ。是く語る時、善根悉く斷じて涅槃に入らず。何をか無始の衆生の爲に願を起すと云ふ。謂く、諸の菩薩は本願の方便を以て、一切の衆生をして悉く涅槃に入らしめむ。若し一衆生の未だ涅槃せざる者あらば、我終に入らずと願ふ。此も亦た一闡提の種に住するもの、此を是れ涅槃種性の相なし「と言ふ」。』大慧菩薩言さく、『世尊よ、此の中何れか、畢竟して涅槃に入らざる。』佛の言はく、『大慧よ、彼の菩薩の一闡提は、一切の法本來涅槃なり

と知る。(彼は)畢竟して(涅槃に)入らざれども善根を捨てず。何となれば(彼の)善根を捨つる一闡提は、佛の威力によるが故に、時ありてか善根を生じて「涅槃に入る」。そは佛は一切の衆生に於いて捨つる時なければなり。是の故に菩薩の一闡提は涅槃に入らず。』

【三自性相分】『復た次に大慧よ、菩薩摩訶薩は當に善く三自性の相を知るべし。何をか三となす。謂ゆる妄計自性、縁起自性、圓成自性(即ち之れ)なり。大慧よ、妄計自性は相に從つて生ず。云何が相に從つて生ず。謂く、彼は縁起事相の種類の顯現に依つて計着を生ずるが故なり。大慧よ、彼の計着の事相には二種の妄計の性ありて生ず。是れ諸の如來の演說し給ふ所にして、名相計着の相、事相計着の相と名く。大慧よ、事計着の相とは、内外の法に計着するを謂ひ、相計着の相とは、即ち彼の内外の法中に「於いて」自共の相に計着するを謂ふ。是を二種の妄計自性の相と名く。大慧よ、所依と所縁より起るもの、是れ縁起の性なり。何をか圓成自性「と云ふ」。謂く、名相事相の一切の分別を離るる、自證聖智の所行の眞如なり。大慧よ、此は是れ圓成自性如來藏心なり。』爾の時に世尊は即ち頌を說いて言はく、

『名相分別は二自性の相、正智眞如は是れ圓成の性なり。』

『大慧よ、是を五法自性の相を觀察する法門と名く。汝及び諸の菩薩は、當に勤めて自證聖智

の所行の境界を修學すべし。』

【二無我相分】『復た次に大慧よ、菩薩摩訶薩は、當に善く二無我の相を觀察すべし。何をか二となす。謂ゆる人無我の相と法無我の相と（即ち之れ）なり。大慧よ。何をか是れ人無我の相「と云ふ」。謂く、蘊界處は我我所を離る。無知愛業の起る所に眼等の識生じて色等を取つて計着を生ず。又自心の所見なる身（及び）器世間は、皆これ藏心の顯現する所、相續變壞して刹那も停まらざることは、河流の如く種子の如く、燈焔の如く迅風の如く浮雲の如し。躁動して安からざることは猿猴の如く、不淨處を樂ふことは飛蠅の如く、厭足を知らざることは猛火の如し。（また）無始の虛僞なる習氣を因となして諸有の趣中に流轉して息まざることは汲水輪の如し。種々の色身の威儀進止は、譬へば死屍の咒力の故に行くが如く、亦た木人の機に因つて運動するが如し。若し能く此に於いて其の相を善知せば、是を人無我の智と名く。大慧よ、何をか法無我の智と云ふ。謂く、蘊界處は是れ妄計の性なりと知る「を云ふ」。蘊界處は我我所を離れ、唯愛業の繩縛積聚によりて、互に緣起を爲す。能作者なきが如く、諸法も亦爾かなり、自共の相を離る。（彼の）虛妄に分別して種種の相を現ずるは、愚夫の分別にして諸の聖者（のなす所）に非ず。是の如く一切の諸法を觀察して、心意意識五法自性を離る。是を菩薩摩訶薩の法無我の智と名く。此の智を

得已つて「心の外に別に」境界なきことを知り、諸地の相を了じて卽ち初地に入り、心に歡喜を生じて次第に漸進し、乃ち善慧(地)及び法雲(地)に至り、諸の有ゆる所作悉く已に辨ず。是の地に住し已れば、大寶蓮花王の衆寶もて莊嚴せるあり。其の花の上なる寶宮殿は、狀蓮花の如し。菩薩は、幻性の法門を修し成就して其の上に坐すれば、同行の佛子(その)前後を圍繞し、一切の佛刹の有ゆる如來は、皆其手を舒べて、轉輪王子の灌頂の法の如く、其の頂に灌ぎ、佛子地を超えて自證の法を獲、如來の自在なる法身を成就す。大慧よ、是を法無我の相を見ると名く。汝及び諸の菩薩摩訶薩は應に勤めて修學すべし。』

【建立誹謗分】 爾の時に大慧菩薩摩訶薩は復た佛に白して言さく、

『世尊よ、願くは(三)建立と誹謗の相を說き、我及び諸の菩薩摩訶薩をして、此の惡見を離れ、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得せしめ、菩提を得已つて建立の常(見)と誹謗の斷見とを破り、正法に於いて毀謗を生ぜざらしめ給へ。』佛は其の請を受けて卽ち頌を說言はく、

『身、資財(及び)所住は皆(これ)唯心の影像のみ。凡愚は(此の理を)了る能はずして、建立(の常見)と誹謗(の斷見)とを起す。起す所も但是れ心、心を離れては(遂に)不可得なり。』

爾の時に世尊は重ねて此の義を明さむと欲して、大慧に告げて言はく、

【三】 建立とは非有を有とする常見にて誹謗とは非無を無とする斷見なり。

『(大慧よ)、(三二)無有の有を建立するもの四種あり。何をか四と爲す。謂ゆる(一)無有の相を建立するの相、(二)無有の見を建立するの見、(三)無有の因を建立するの因、(四)無有の性を建立するの性、これを四となす。大慧よ、誹謗とは、謂く、諸の惡見に於て建立する所の法は求むれども得べからず(而も)善く(之を)觀察せずして遂に誹謗を生ず。此は是れ建立と誹謗との相なり。大慧よ、何をか無有の相を建立するの相と云ふ。謂く、自相と共相とは蘊界處に於て本より有ることとなし、而も計著を生じ、(三三)此は是の如く、此は不異なりと〔言ふ〕。而して此の分別は無始なる種々の惡習より生ずる所なり。是を無有相建立の相と云ふ。何をか無有見建立の見と云ふ。謂く、蘊界處に於て、我、人、衆生等の見を建立す。是を無有見建立の見と名く。何をか無有因建立の因と云ふ。謂く、(三四)初識は前に因なければ生せず、其の初識は本無なり、後に眼色明念等を因と爲して幻の如くに生じ、生じ已つて有、有にして還た滅す、是を無有因建立の因と名く。何をか無有性建立の性と云ふ。謂く、虛空と涅槃と(三五)非數

【三二】無有とは非有と云ふに同じ。

【三三】此は是の如くとは自相を指し此は不異とは共相を指す。

【三四】初識。二乘外道等は藏識の諸法の因たることを知らず、妄りに六識三毒の以て生因たることを計す。故に之を諭して妄念の眞に逆するを名けて初識と爲す。

【三五】非數滅とは新譯(例せば俱舍論の如き)に謂ふ所の非擇滅(Apratisaṃkhyānirodha アプラチサムキヤーニロダー)のことにて、吾人が心的作用の一なる擇力によらず自性本來空寂なるもの、又は闕緣の所顯に名けたる名目なり。

滅との無作の性に於いて執著し建立す。大慧よ。此は性非性を離るるを以て一切の諸法は有無を離るること猶ほ毛輪兎馬等の角の如し。是を無有性建立の性と名く。大慧よ、建立も誹謗も皆これ凡愚の唯心を了せず、分別より生ずるものにして、諸の聖者(のなす所)にあらず。是故に汝等當に勤めて觀察して此の見を遠離すべし。』

【隨類普現分】『大慧よ、菩薩摩訶薩は、善く心意意識五法自性二無我の相を知り已つて、種種の身を作すこと、緣起に依りて妄計の性を起すが如く、亦た摩尼の心に隨つて(種種の)色を現ずるが如く、普く佛會に入りて、佛の「諸法は、幻の如く夢の如く影の如く鏡中の像の如く水中の月の如く、生滅及び斷常を遠離し、聲聞(或は)辟支佛の道に住せず」と說き給ふを聽聞し、聞き已つて無量百千億那由他の三昧を成就し、此の三昧を得已つて、遍く一切諸佛の國土に遊び、諸佛を供養して諸の天上に生れ、三寶を顯揚して佛身を示現し、諸の聲聞(及び)菩薩の大衆の爲に、外の境界は唯是れ心なることを說き、悉く有無等の執を遠離せしむ。』

爾の時に世尊は卽ち頌を說いて言はく、

『佛子は能く世間の、唯是れ心なることを觀見し、種種の身を示現して、所作に障礙なく、
神通力自在に一切皆成就す。』

【空無離性分】　爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に請ふて言く、『願くは我が爲に一切の法の空と無生と無二と無自性の相とを說き給へ。我及び諸の菩薩は此の相を悟るが故に、有無の分別を離れ、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得む。』

佛の言く、『諦聽せよ、(我)當に汝が爲に說くべし。大慧よ、空とは卽ち是れ妄計性の句義なり。大慧よ、妄計の自性に執着する者の爲に、空、無生、無二、無自性と說く。大慧よ。略して空性を說くに七種あり。謂く、相空、自性空、無行空、行空、一切法不可說空、第一義聖智大空(及)び彼彼空(之れ)なり。何をか相空と云ふ。謂く、一切の法は、自相共相(ともに)空なり。(そは)展轉積聚して互に相待つが故なり。分析し推求すれども所有なきを以てなり。自他及び共(相)皆不生にして亦た無住なるを以てなり。是の故に一切の法は自相空と名く。何をか自性空と云ふ。謂く、一切法の自性は不生なり、是を自性空と名く。何をか無行空と云ふ。謂ゆる諸蘊は本來涅槃にして諸行あること無し、是を無行空と名く。何をか行空と云ふ。謂ゆる諸蘊は業及び因の和合に由りて起り、我我所を離る、是を行空と名く。何をか一切法不可說空と云ふ。謂く一切法の妄計の自性は言說すべき無し、是を不可說空と名く。何をか第一義聖智大空と云ふ。謂く自證聖智を得る時、悉く一切諸見の過習を離る、是を第一義聖智大空と名く。何をか彼彼空と云

ふ。謂く、此に於いて彼なし、是を彼彼空と名く。譬へば鹿子の母堂に象馬牛羊等なきが如し。われ彼の堂の空なることを說けども、比丘衆なきにあらず。大慧よ、堂に堂の自性なしと謂ふに非ず、比丘に比丘の自性なしと謂ふに非ず、餘處に象馬牛羊なしと謂ふに非ず。大慧よ、一切諸法の自共相は、彼を彼に求むれども得べからざるなり。是故に說いて彼彼空と名く。是を七種の空と言ふ。大慧よ、此の彼彼空は空の中に〔於いて〕最も麤なり、汝應に遠離すべし。復た次に大慧よ、無生とは、自體不生なり。而も生ぜざるには非ず、三昧に住するを除く、是を無生と名く。大慧よ、無自性とは無生なるが故に密意にして說く。大慧よ、一切の法は自性なし、刹那も住せず、刻々に變異を見るを以てなり、是を無自性と名く。何をか無二相と云ふ。大慧よ、〔一切の法は〕光影の如く、長短の如く、黑白の如く、皆相待立し、獨にては則ち成ぜず。大慧よ、生死の外に涅槃あるに非ず。涅槃の外に生死あるに非ず、生死と涅槃とは相違の相なし。生死と涅槃との如く、一法の法も亦た是の如し。是を無二の相と名く。大慧よ、汝當に空と無生と無二と無自性との相を勤學すべし。』爾の時に世尊は重ねて頌を說いて言はく、

『我は常に空法を說いて、斷常を遠離す。生死は幻夢の如し、然るに〔凡夫は幻夢の中に於いて所作の〕業を壞する能はざるなり。

虛空と涅槃及び滅との（二六）二も亦た是の如し。愚夫は妄に分別して「有無等となせども」諸聖は有無を離るるなり。』

【遮言表義分】　爾の時に世尊は、復た大慧菩薩摩訶薩に告げ言はく、『大慧よ、此の空と無生と無自性と無二相とは、悉く一切諸佛の說き給ふ所の修多羅の中に入る。佛の說き給ふ所の經には皆此の義あり。大慧よ、諸の修多羅は、一切衆生の心に隨順して說き給ふ。而も眞實は言の中に非ず。譬ば陽焰の諸獸を誑惑して水想を生ぜしむれども、而も實には水なきが如く、衆經の所說も亦復是の如し。諸の愚夫の自ら分別する處に隨て歡喜を生ぜしむれども、皆聖智によりて證する所の眞實の法を顯示せず。大慧よ、應に義に隨順して言說に著する事なかるべし。』

【如來藏相分】　爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、佛に白して言さく、『世尊よ、修多羅の中に、「如來藏は本性淸淨なり、常恒にして斷ぜず變易あることなく、三十二相を具し、一切衆生の身中に在りて、蘊界處の垢衣の纏ふ所、貪瞋癡等の妄分別の垢衣の染汚する所と爲ること、無價の寶の垢衣の中にあるが如し」と說けり。（また）外道は、（二七）「我は是れ常作者にして、求那を離れ、自在にして滅なし」と說けり。世尊の說き給ふ所の如來藏の義は、豈に

【二六】　二とは有と無又は生と滅などを云ふ。

【二七】　此の我の教義は優波尼沙土以來印度正統哲學派の唱道する所なれども、特に吠檀多學派に於いて強く主張せり。

外道の我と同じからずや。」佛の言はく、『大慧よ、我が說く所の如來藏は、外道の說く所の我と同じからず。大慧よ、如來應(供)正等覺の、性空と實際と、涅槃と不生と、無相と無願等との諸の句義を以て如來藏を說けるは、愚夫をして無我の怖を離れしめ、無分別無影像の處(これ)如來藏の門なりと說かんが爲なり。未來現在の諸の菩薩摩訶薩は此に於いて我を執著すべからず。大慧よ、譬へば陶師の泥聚中に於いて、人工、水、杖、輪、繩(等)の方便を以て、種種の器を作るが如し如來も亦た爾り、一切の分別の相を遠離する無我の法中に於いて、種種の智慧と善巧の方便とを以て、或は如來藏と說き、或は無我と說き種種の名字を各差別す。大慧よ、我が如來藏を說くは、我に著する諸の外道衆を攝(受)して、妄見を離れ、(三八)三解脫に入り、速に阿耨多羅三藐三菩提を證することを得せしめむが爲なり。是故に諸佛の說き給へる如來藏は、外道所說の我と同じからず。若し外道の見を離れんと欲せば、應に無我と如來藏の義を知るべし。』爾の時に世尊は即ち頌を說き言はく、

『士夫も、相續の蘊も、衆緣も、微塵も、及び勝自在も、作者も、但これ心の分別のみ。』

【三八】 三解脫とは一に心解脫、二に慧解脫、三に倶解脫を云ふ。心解脫とは心が貪愛を離るゝを云ひ、慧解脫とは心が無明を離れたるを云ひ、最後に倶解脫とは慧解脫を實現せるものが滅定の力によりて解脫の障礙となるもの即ち解脫を徹底することを得ざらしむる微劣の闇昧性＝無知＝を解脫するを云ふ。

【修行方便分】爾の時に大慧菩薩は、善く未來の一切衆生を觀じて、復た佛に請ふて言はく、『願くば我が爲に、具さに、諸の菩薩摩訶薩の如く、大修行を成ずる修行の法を說き給へ。』

佛の言はく、『大慧よ、菩薩摩訶薩は四種の法を具して、大修行を成ず。何をか四となす。謂く、(一)自心の所現を觀察すると、(二)生住滅の見を遠離すると、(三)善く外法の無性なることを知ると、(四)專ら自證の聖智を求むると(卽ち之)なり。若し諸の菩薩にして此の四法を成ぜば則ち名けて大修行者となすことを得む。大慧よ、何をか自心の所現を觀察すと云ふ。謂く、三界は唯是れ自心にして、我我所を離れ、動作なく來去なく、無始の執著の過習の薰ずる所なり。三界の種種の色行、名言、繫縛、身資所住は分別隨入の顯現する所なり。菩薩摩訶薩は是の如く、自心の所現を觀察す。大慧よ、云何が生住滅の見を離るゝことを得る。謂ゆる一切の法は幻夢の如くにして生ずと觀ず。〔何となれば〕自〔性〕他〔性〕及び俱〔性〕皆不生なるを以てなり。自〔己〕の心量の現ずる所に隨ふを以てなり。外物の有ることなきを見るが故なり。諸識の起らざることを見るが故なり。衆緣の積もる無き(を見る)が故なり。分別の因緣によりて三界を起すが故なり。是の如く觀ずる時、若は內、若は外の一切の諸法は、皆不可得にして、體實なきを知り、生見を遠離し、如幻の性を證して卽時に無生法忍を逮得し、第八地に住して、心、意、意識、五法、自

性(及び)二無我の境を了り、依止する所を轉じて意生身を獲む。』

大慧言さく、『世尊よ、何の因緣を以てか意生身と名く。』

佛の言はく、『大慧よ、意生身とは、譬へば意の去るに迅速無礙なるが如きを意生身と名く。大慧よ、譬へば心意の無量百千由旬の外に於いて、先に見る所の種種の諸物を憶ひ、念念相續して彼に詣るに、其の身及び山河石壁も能く是が障礙たる能はざるが如く、意生身も亦た復た是の如し。如幻三昧と力通自在と諸相莊嚴とを以つて、衆生(の得度)を成就せむとの本願を憶ふが故に、猶ほ意の去つて一切の諸聖衆の中に生ずるが如くす。是を菩薩摩訶薩の生住滅の見を遠離することを得と名く。大慧よ、云何が外法の無性を觀察せむ。謂く、一切の法は陽焰の如く夢境の如く毛輪の如しと觀察す。そは無始の戲論、種々の執著、虛妄の惡習を其の因となせばなり。是の如く一切の法を觀察する時は、即ち是れ專ら自證の聖智を求むるなり。大慧よ、是を菩薩の四種の法を具して大修行を成ずと名く。汝應に是の如く勤めて修學すべし。』

【緣因俱漸分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に請ふて言さく、『願くは一切法の因緣の相を說き、我及び諸の菩薩をして其の義を了達し、有無の見を離れて、諸法の漸生頓生を妄執せざらしめ給へ。』

佛の言はく、『一切の法の因緣より生ずる「相」に二種あり。謂く、內及び外これなり。外とは瓶の泥團水杖輪繩人工等の緣の和合を以て成ずる「が如き」を謂ふ。泥瓶の如く、縷の疊となり草の席と「なり」、種「子」の芽と「成り」、酪の酥と「成るも」、悉く亦た是の如し。「これを」外緣の前後轉生と云ふ。內とは謂く、無明愛業の蘊界處を生ずるの法、此れ但愚夫の分別する所なり。大慧よ、因に六種あり。謂く、當有因、相屬因、相因、能作因、顯了因、觀待因(これ)なり。大慧よ、當有因とは、內外の法を因と作して果を生ずるを謂ひ、相屬因とは、內外の法を緣と作して蘊種子等の果を生ずるを謂ふ。相因とは無間の相と作りて相續の果を生ずるを謂ひ、能作因とは、增上と作りて果を生ずること、轉輪王の如きを謂ふ。顯了因とは、分別生じて能く境相を顯はすこと、燈の物を照すが如きを謂ひ、觀待因とは、滅する時相續(の緣)を斷じて妄想の生ずること無きを謂ふ。大慧よ、此は是れ愚夫の自ら分別する所にして、漸次の生にも非ず亦た頓生にもあらざるなり。何となれば、大慧よ、若し頓生ならば、則ち作と所作と差別あること無く、其の因相を求むるに不可得なればなり。若し漸生ならば、其の體相を求むるも亦た不可得なり。未だ子を生まざるものを云何が父と名けむ。諸の計度の人は言はく、因緣、所緣緣、無間緣、增上緣等を以て、所生と能生とは相繫屬すと。次第生は「其の」理成ずることを得ず、(そは)皆是れ妄

情執著の相なればなり。大慧よ。漸次〔生〕と頓〔生〕とは皆悉く不生なり。何となれば但心あつて身資等を現じ、外の自〔相〕共相、みな無性なるを以てなり。唯識の自ら分別する見を除く。大慧よ、是故に應に因緣所作和合の相中に〔於いて〕漸〔生〕頓生の見を離るべし。』

爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『一切の法は、生あるなく、復た滅あるなし。彼の諸緣の中に於いて、生滅の相を分別するのみ。

諸緣の會して、是の如くにして滅し、復た生ずるを遮するに非ず、但凡愚妄情の、所著を止むるのみ。

緣中の法の有無は、是れ悉く生あるなし、習氣は心を迷轉して、是より三有を現ずるなり。

〔諸法は〕、本來生あるなく、復た滅あるなし、一切の（法の）有無を觀ずるに、譬へば虛空の花の如し。

能取と所取と、一切迷惑の見を離るれば、能生もなく所生もなく、亦た復た因緣もなく、但世俗に隨ふが故に、生滅ありと說くのみ。』

卷の第三

集一切法品第二の三

【言說相心分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、願くは我が爲に言說分別の相の心の法門を說き給へ。我及び諸の菩薩摩訶薩は、善く此を知るが故に、能說所說の二義に通達し、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得て、一切の衆生をして二義の中に於いて淸淨なることを得せしめむ。』

佛の言はく、

『大慧よ、四種の言說分別の相あり。謂ゆる(一)相言說、(二)夢言說、(三)計著過惡言說、(四)無始妄想言說(卽ち之れ)なり。大慧よ。相言說は、自ら分別する色相に執著するより生じ、夢言說は先に經る所の境界を夢み、覺め已つて憶念するに不實の境より生ず。計著過惡言說は怨讎の先に作す所の業を憶念して生じ、無始妄想言說は無始の戲論妄執の習氣を以て生ず。是を四と爲す。』

大慧復た言さく、『世尊よ、願くは更に我が爲に言說分別所行の相は、何れの處に何の因により、云何にして起るかを說き給へ。』

佛の言はく、『大慧よ、(それは)頭と胸と喉と鼻と脣と齶と齒と舌との和合によりて起る。』

大慧また言さく、『世尊よ、言語と分別とは、異と爲さむか、不異と爲さむか。』

佛の言はく、『大慧よ、異に非ず不異に非ず。何となれば分別を因となして言語を起すを以てなり。若し異ならば、分別は應に因となすべからず。若し不異ならば、言語は應に義を顯はすべからず。是の故に異に非ず、亦た不異に非ず。』

大慧また言さく、『世尊よ、言語を是れ第一義と爲さんか、所說を是れ第一義と爲さむか。』

佛、大慧に告げたまはく、『言語にも非ず、亦た所說にも非ず。何となれば第一義は是れ聖樂の處、言に因つて入れども卽ち是れ言にあらざればなり。第一義は聖智の內に自ら證する境にして言語分別の智の境に非ず。〔是の故に〕言語分別は〔第一義を〕顯示すること能はず。大慧よ、言語は起滅動搖展轉の因緣より生ず。若し展轉の(因)緣より生ぜば、第一義を顯示すること能はず。第一義には自他の相なし、言語には相あり、〔是の故に第一義を〕顯示すること能はず。第一義は但唯自心〔の現量〕なり。種種の外想は皆有ること無し。〔此を以て〕言語分別は〔第一義を〕顯

示すること能はず。是故に大慧よ、應に言語分別を遠離すべし。』

爾の時に世尊は重ねて頌を説き言はく、

『諸法は、自性もなく、亦た言説もなし。愚夫は(一)空空の義を見ざるが故に(三界に)流轉す。
一切の法は、無〔自〕性にして、言語分別を離る。(二)諸有は夢化の如し、〔眞實實際の法は〕生死涅槃にあらず。
王及び長者の、諸子をして喜ばしめむが爲に、先づ相似の物を示して、後に眞實のものを賜ふが如く、我も今また然り、先づ相似の法を説いて、後に乃ち其が爲に自證實際の法を演ぶ。』

【離四句義分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩また佛に白して言さく、『世尊よ、願くは我が爲に一異、倶不倶、有無、非有無(及び)常無常等を離れ、一切の外道の行ずる能はざる自證聖智の所行の境界、(卽ち)妄計の自相共相を遠離し、眞實第一義の境に入り、漸く諸地を淨めて如來の位に入り、無功用の本願力を以ての故に、如意寶(珠)の如く、普く一切無邊の境界を現じ、一切の諸法は皆これ自心所見の差別なることを説き、我及び餘の諸の菩薩等をして、是の如きの法に於いて、妄計自性の自〔相〕共相の見を離れ、速かに阿耨多羅三藐三菩

【一】空空の義とは第一義空のことなり。

【二】諸有とは三界六道に存在する一切の現象を云ふ

提を證せしめ、衆生をして善く一切の功德を具足し圓滿せしめ給へ。』

佛の言はく、

『大慧よ、善い哉、善い哉、汝は世間を哀愍して我に此の義を請ふ。〔そは實に〕利益する所多く、安樂ならしむる所多し。大慧よ、凡夫は無智にして心量を知らず、妄習を因となして外物に執著し、一異、俱不俱、有無、非有無、常無常等、一切の自性を分別す。大慧よ、譬へば群獸の渴に逼られ、熱時の焰に於いて水想を生じ、迷惑馳趣して水に非ざることを知らざるが如し。凡夫も亦た復た是の如く、無始の戲論分別の熏ずる所、三毒もて心を燒きて色の境界を樂み、生住滅を見て內外の法を取り、一異等の執著の中に墮す。大慧よ、乾闥婆城は城に非ず(亦)城に非ざるにも非ざるが如し。無智の人は無始時來城種に執著し、妄習の熏の故に而も城想を作す。外道も亦た爾り、無始(以)來の妄習の熏を以ての故に、自心の所現を了達すること能はずして、一異等の種々の言說に著す。大慧よ、譬へば人あり、夢に男女象馬車步城邑園林種々の嚴飾を見、覺め已つて彼れ實事にあらざることを憶念するが如し。大慧よ、汝云何と意ふ。是の如き人は黠慧なりや不や。』答へて言はく、『不なり。』大慧よ、外道も亦た然り、惡見に噬れて唯心を了せず、一異有無等の見に執著す。大慧よ、譬へば畫像の高なく下なきに、愚夫は妄見して高下の想

を作すが如く。未來の外道も亦た復た是の如し。惡見熏習し妄心増長して一異等と執し、自を壞り他を壞り、有無を離れたる無生の論に於て、亦說いて無と爲し、此に因果を謗り善根の本を拔く。應に知るべし、此の人は有無を分別して自他の見を起し、當に地獄に墮すべきことを。勝法を求めんと欲せば、宜しく速かに〔是の如き惡見を〕遠離すべし。大慧よ、譬へば翳目の毛輪あるを見て互に相謂つて此事は希有なりと言ふが如し。而も毛輪は有に非ず無に非ず。〔何となれば〕見と不見となるを以てなり。外道も亦た爾り、惡見を以て分別して、一異、俱不俱等と執著し、正法を誹謗して自ら陷り他を陷らしむ。譬へば火輪は實に是れ輪に非ざるが如し。愚夫は取著すれども諸の智者は然らず。譬へば水泡の玻瓈珠に似たるが如し。愚夫は實なりと執し、奔馳して取る。然るに彼の水泡は珠に非ず珠にあらざるに非ず。〔何となれば〕取不取なるを以てなり。外道も亦た爾り、惡見分別の習氣に熏せられて、非有を說いて生と爲し(又)緣有を壞す。』

『復た次に大慧よ、[三]三種の量を立て已つて、聖智内に於いて證し、二の自性の法を離れ、(而

【三】三種の量とは一に現量、二に比量、三に聖教量なり。而して現量とは五感官と第六意識とが何等の推量を要せずして、直接に誤りなく對境を認識すること。比量とは一を見て二を知り、此を以て彼を推知するが如く、類推歸納すること。最後に聖教量とは自家の信奉する經典教義を權威とすること。

も)有性の分別を起す。大慧よ、諸の修行者は、心意識を轉じて能(取)所取を離れ、如來地に住して自ら聖法を證し、有及び無に於いて想を起さざるなり。大慧よ、諸の修行者は、若し境界に於いて有無の執を起さば、則ち我人衆生壽者に著す。大慧よ、一切諸法の自相共相は、是れ化佛の說にして、法佛の說に非ず。大慧よ、化佛の說法は、但愚夫の起す所の見に順ひ、爲に自證聖智の、三昧の樂境を顯示せざるなり。大慧よ、譬へば水中に樹影ありて現ずるが如し。かれ影にあらず、影にあらざるにあらず、樹形にあらず、樹形にあらざるにあらず。外道も亦た爾り、諸見に熏せられて自心を了せず、一異等に於いて分別を生ず。大慧よ、譬へば明鏡の分別あるなく、衆緣に隨順して、諸の色像を現ずるが如し。かれ像にあらず、像にあらざるにあらず、而も像なり、非像なりと見、愚夫は分別して像想を作す。外道も亦爾り、自心所現の種々の形像に於て、一異俱不俱の相を執す。大慧よ、譬へば谷響は風水人等の音聲の和合に依りて起るが如し。かれ有にあらず(又)無にあらず。「何となれば」聲なり非聲なりと聞くを以てなり。外道も亦た爾り、自心の分別より「生ずる」熏習の力を以て、一異、俱不俱の見を起す。譬へば大地の草木なき處に日光の照觸すれば、「陽」焔「恰も」水波の動く「と見ゆる」が如し。(而も)かれ有に非ず(又)無に非ず。「何となれば」渴想非想を以て「執して水となせばなり」。愚癡の凡夫も亦復是の如く、無始の

戲論惡習に熏ぜられて、聖智自證の法性の門中に於いて、生、住、滅、一異、有無、俱不俱(等)の性を見るなり。大慧よ、譬へば木人及び〔死〕屍を起すに、毘舍闍の機關力を以てするが故に動搖運轉して云爲絕えず、無智の人は取つて以て實と爲すが如し。愚癡の凡夫も亦た復た是の如く、外道に隨逐して諸の惡見を起し、一異等の虛妄の言說に著す。是の故に大慧よ、當に聖智所證の法中に於いて、生、住、滅、一異、有無、俱不俱等の一切の分別を離るべし。』

爾の時に世尊は重ねて頌を說きて言はく、

『諸識蘊に五あり、猶ほ水(中)の樹影の如く、所見は幻夢の如し、
應に妄りに分別すべからず。
三有は陽焰、幻夢及び毛輪の如し。若し能く是の如く觀せば、究竟して解脫を得む。
譬へば熱時の焰の動轉して心を迷亂せしめ、渴獸の取つて水と爲せども、而も實には水事なきが如し。
是の如く識の種子も、亦た動轉して境界を見る。翳者の所見の如く、愚夫は執著を生ず。
無始の生死の中に〔於いて〕、執著して纏覆せらる。〔是の如き世界を〕㊃退捨する〔心を〕も出

【四】退捨令出離とは、捨離の心をも亦た併せて捨離するを云ふ。

離せしむること、(猶ほ)楔に因つて楔を出すが如くせよ。
世を觀じて、幻呪、機〔關〕の所作、浮雲、夢電光の如くせば、永く三の相續を斷せん。
此の中に所有なきこと、(恰も)空中の陽焰の如し。是の如く諸法を知るをば、則ち(五)所知なしと爲す。
諸蘊は毛輪の如く、(其の)中に於いて妄に分別して(六)唯假りに名を設くるのみ、相を求むるに不可得なり。
〔諸蘊は〕畫ける垂髮の如く、幻、夢の如く、乾闥婆城の如く、火輪の如く、熱時の焰の如く、實には無なるを有と見るなり。
是の如く常無常と、一異と倶不倶とは、無始の繋縛の故に愚夫の妄に分別〔する處〕なり。
明鏡も水も淨眼も摩尼妙寶珠も、〔其の〕中に色像を現ずれども、而も實には所有なし。
心識も亦た是の如く。普く衆色の相を現ずれども、(而も)夢の〔如く〕空中の焰の如く、亦た石女の兒の如し。」

【說法建立分】「復た次に大慧よ、諸佛の說法は四句を離れたり。謂ゆる一異、倶不倶、有無等

【五】所知とは具さには所知障と云ふ。こは一切萬有の體の如幻虛假なることを了得せざる迷障なり。

【六】能詮の言敎も唯是れ假名所詮の諸法も亦た實あるにあらざるを謂ふ。

の建立と誹謗を離るるなり。大慧よ、諸佛の說法は、[眞]諦、緣起、滅道、解脫を以て其の首となす。（七）勝性と自在と宿作と自然と時と微塵等と與に相應ずるものに非ず。大慧よ、諸の說法は、惑と智と二種の障を淨めむが爲に、次第に一百八句の無相の法中に住せしめて、善く諸乘（及び）諸地の相を分別すること、猶（八）商主の善く衆人を導くが如し。』

【四種禪說分】『復た次に大慧よ、四種の禪あり。何等をか四と爲す。謂く、愚夫所行の禪、觀察義の禪、攀緣眞如の禪、諸の如來の禪（之れ）なり。大慧よ、何をか愚夫所行の禪と云ふ。謂く聲聞と緣覺と（九）諸の修行者は、人無我を知り、自他の身は骨鎖相連なり皆是無常苦不淨の相なりと見る。是の如く觀察し堅著して捨てず、漸次に增勝して無想滅定に至る。是を愚夫所行の禪と名く。何をか觀察義禪と云ふ。謂く自共相と人無我を知り已つて、又外道の自他俱作（の見）を離れ、法無我の諸地相の義に於て隨順觀察す、是を觀察義禪と名く。何をか攀緣眞如禪と云ふ。謂く若し無我に二ありと分別すれば是虛妄の念なり。若し如實に知れば彼念起らず、是を攀緣眞如禪と名く。何をか諸の如來禪と云ふ。謂く佛地に入りて自證聖智の三種の樂に住し、諸の衆生の爲に不

【七】勝性以下微塵等は何れも印度外道哲學諸派の執して萬有の根本とする所なり。
【八】商主。昔印度の商人は隊をなして遠方に行商せり。而して其の道路方向を諳んずるもの之が案內者たりき。此の案內者を兼ねたる商人を商主と云ふ。
【九】諸の修行者は他二譯には外道の修行者とあり。

思議の事を作す、是を諸の如來禪と名く。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、
『(禪に)愚夫所行の禪と、觀察義相の禪と、攀緣眞如の禪と、如來清淨の禪とあり。
修行者(若し)定に在りて、日月の形と〔一〇〕波頭摩の深嶮なる「處に在る」と〔一一〕虛空と〔一二〕火燼の如くなると、是の如きの種種の相を觀せば、外道の法に墮ち、亦聲聞辟支佛の境界に墮つ。
此の一切を捨離して無所緣に住せば、是れ則ち如如眞實の相に隨入し、十方の諸の國土の有ゆる、無量の佛は、悉く光明の手を引いて、是の人の頂を摩でむ。』

【諸般涅槃分】 爾時に大慧菩薩摩訶薩、復佛に白して言さく、『世尊よ、諸佛如來の說き給ふ所の涅槃は、何等の法をか涅槃と名く。』佛、大慧に告げたまはく、『我及び諸佛は、一切の識の自性の習氣と、藏識と意と及び意識との見習を轉じ已るを、說いて涅槃と名く。即ち是れ諸法の性空の境界なり。復た次に大慧よ、涅槃とは自證聖智の所行の境界にして、斷常及

【一〇】波頭摩(Padma)は、紅蓮華又は青蓮華とも云ふ。今この頌は外道の一派が神我の如きものを建立し、禪觀の中に於いて、或は日月の碧天に明かなるが如しと云ひ、又は紅蓮華の深嶮谷に生ずるを觀ると云へるを破斥するなり。

【一一】虛空とは聲聞乘の人の有を厭ふて、空に入り、灰身滅智して、猶ほ虛空の如くなるを云ふ。

【一二】火燼とは[illegible]の人の因緣の法を[illegible]に、湛寂に[illegible]な[illegible]することを猶ほ火燼の如くなるを云ふ。

び有無を遠離す。何をか常に非ずと云ふ。謂く、自相共相の諸の分別を離るゝを以てなり。何をか斷に非ずと云ふ。謂く、去來現在の一切の聖者の自證智の所行なるを以てなり。復た次に大慧よ、大般涅槃は不壞不死なり。若し死なれば應に更に生を受くべく、若し壞なれば應に是れ有爲なるべし。是故に涅槃は不壞不死にして諸の修行者の歸趣する所なり。復た次に大慧よ、捨なく得なきが故に、斷に非ず常に非ざるが故に、一にあらず異に非ざるが故に、說いて涅槃と名く。復た次に大慧よ、聲聞(及び)緣覺は、自〔相〕共相を知りて憒鬧を捨離し、顚倒を生ぜず分別を起さず、彼(等)は其の中に於いて涅槃の想をなす。』

【二自性相分】「復た次に大慧よ、二種の自性の相あり、何をか二となす。謂く、(一)言說の自性に執著するの相と、(二)諸法の自性に執著するの相と(卽ち之れ)なり。言說の自性に執著するの相は、無始の戲論と言說に執著する習氣より生ず。諸法の自性に執著するの相は、〔諸法を〕自心の所現なりと覺らざるが故に起る。』

【二種神力分】「復次に大慧よ、諸佛に二種の加持あり、諸の菩薩を持して佛足を頂禮し衆義を請問せしむ。云何が二となす。謂く、三昧に入らしむると、及び身を其前に現じて手を〔以て〕其頂に灌ぐとなり。大慧よ、初地の菩薩摩訶薩は、諸佛の持力を蒙むるが故に、菩薩大乘の光明

定に入る。入り已れば十方の諸佛、普く其の前に現じて、身語加持し給ふ。金剛藏及び餘の是の如きの功徳の相を成就せる菩薩摩訶薩の如き者(即ち)是れなり。大慧よ、此の菩薩摩訶薩は佛の持力を蒙りて三昧に入り已り、百千劫に於て諸の善根を集め、漸く初地に入りて善く能治所治の相に通達し、法雲地に至りて、大蓮花の微妙の宮殿に處し、寶座に坐して同類の菩薩に圍繞せられ、首に寶冠を戴き、身は黄金の如く、瞻蔔の花の色は、滿月の大光明を放つが如し。十方の諸佛、蓮花の手を舒べて、其座上に於て其頂に灌ぎ給ふことは、轉輪王の太子の灌頂を受け已つて自在を得るが如く、此の諸の菩薩も亦是の如し。是を名けて二と爲す。諸の菩薩摩訶薩は二種の持「力」の持する所となるが故に、即ち能く親ら一切の諸佛を見上るなり。(若し)然らざる時は則ち(見ること)能はず。復た次に大慧よ、諸の菩薩摩訶薩は三昧に入りて現通説法す。是の如きは、皆これ諸佛の二種の持力に由るなり。大慧よ、若し諸の菩薩にして、佛の加持を離れて能く説法せば、則ち諸の凡夫も亦た應に能く説くべし。大慧よ、如來の至り給ふ處の、山林草樹城廓宮殿及び諸の樂器すら、佛の「加」持力によりて、尚ほ法音を演ぶ、況んや有心の者をや。聾盲瘖瘂も苦を離れて解脱することを得む。大慧よ、如來の持力は是の如きの廣大なる作用あり。」

大慧菩薩また佛に白して言さく、「何故に如來は其の持力を以て、諸の菩薩をして三昧及び殊

勝の地中に入り、手づから其の頂に灌ぎ給ふや。』

佛の言はく、『大慧よ。そは〔彼の諸の菩薩をして〕魔業及び諸の煩惱を遠離せしめんと欲するを以てなり。聲聞地に墮せざらしめんが爲なり。速に如來地に入らしめんが爲なり。所得の法をして倍増長せしめんが爲なり。是故に諸佛は、加持力を以て諸の菩薩を持し給ふ。大慧よ、若し是の如くならずんば、彼菩薩は便ち外道及び聲聞の魔境中に墮して、無上菩提を得ること能はざらむ。是故に如來は加持力を以て諸の菩薩を攝し給ふ。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『世尊の淸淨の願は、初地〔乃至〕十地の〔中に於ける〕三昧〔に導き〕、及び灌頂を〔施し菩提を滿たしむる〕大加持力あり。』

【因緣同異分】 爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、佛は緣起を說き給ふ。是れ作に由つて起り、自體より起るに非ず。外道も亦た「勝性、自在、時、我、微塵(等)は諸法を生ず」と說く。今(それ)佛世尊は、但異名を以て緣起を作すと說き給へども、(其の)義は(外道と)別あるに非ず。世尊よ、外道も亦た「作者を以ての故に無より有を生ず」と說き、世尊も亦た「因緣を以ての故に、一切の諸法は本無にして而も生じ、生じ已つて滅に歸す」と說き給ふ。佛の所說の如くんば、無明は行乃至老死を緣ず。此れ無因と說き有因と說くに非ず。世尊の

說は、「此れ有るが故に彼あり」と言ふ。若し一時の建立にして、次第相待に非ずんば其の義成せず。是の故に外道の說は勝りて如來の說は劣れり。何となれば、因は緣より生ぜず、而も所生ありと說く。「然るに」世尊の說き給ふ所によれば、果は因を待ち、因は復た因を待つ、是の如く展轉して成ぜば、窮まり無きの過あるを以てなり。又此あるが故に彼あらば、則ち因あるなければなり。』

佛の言はく、『大慧よ、我は諸法は唯心の所現にして能取なく所取なきことを了す。此あるが故に彼ありと說けども、是れ無因及び因緣の過失にあらざるなり。大慧よ、若し諸法は唯心の所現なることを了せずんば、能取及び所取ありと計し、外境は若は有、若は無なりと執著せむ。彼には是の過あれども、我が所說には「是の如き過あるに」非ず。』

【言說無性分】 大慧菩薩また佛に白して言さく、『世尊よ、言說あり、故に必らず諸法あり、若し諸法なくむば、言は何に依てか起らむ。』

佛の言はく、『大慧よ、諸法なしと雖も亦た言說あり。豈に現に龜毛兎角(及び)石女の兒等あるを見ずと雖も、世人は皆(是の如き)言說を起すにあらずや。大慧よ、彼は有に非ず、非有に非ず、而も(たゞ)言說あるのみ。大慧よ、汝が所說の如く、言說あり、故に諸法あらば、此の論は

或は微笑、嚬呻、謦欬、憶念、動搖を示し、是の如き(の事)を以て法を顯はす。大慧よ、不瞬世界妙香世界及び普賢如來の佛土の中の如きは、但瞪視して瞬せず、諸の菩薩をして無生法忍及び諸勝三昧を獲せしむ。大慧よ、言說に由つて諸法あるに非ず、何となれば此の世界の中には蠅蟻等の蟲は言語なしと雖も〔各〕自の事を成ずるを以てなり。』

爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『虛空と兎角と、及び石女の兒の如きは、無にして言說あり、妄計の法も(亦た)是の如し。

因緣和合の中に、愚夫は妄に生と謂ふ。(彼等は)如實に解する能はずして、三有に流轉す。』

【惑亂眞常分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊の說き給ふ所の〔三〕常聲は何の法に依りてか說き給ふ。』

【三】常聲は魏譯には常法に作る。佛已に諸法の無性、言說も亦た無性と說き、卽ち能說所說皆無常なることを說破せらる。而も佛陀所說の眞常の法は何に依つてか說き給ふとの問意なり。蓋し婆娑論によるに佛陀說教の體は語業なり、語業は卽ち聲なれば也。

佛の言はく、『大慧よ、妄法に依つて說く。〔四〕諸の妄法は、聖人も亦た現ずれども、然も顚倒にあらざるを以てなり。大慧よ、譬へば陽焰、火輪、垂髮、乾闥婆城、夢、幻(又は)鏡像の如し。世の無智の者は(此等に於いて)顚倒の解をなせども、有智(の者)は然らず。然も現ぜざるには非ざるなり。大慧よ、妄法の現ずる時は、種種の差別あれども、然も無常にはあらず。何となれば有無を離るゝを以てなり。云何が有無を離る。一切の愚夫は種種に解するが故なり。〔譬へば〕恆河の水の如し、見と不見とあり。餓鬼は〔水を〕見ず、〔故に水〕ありと言ふ可らず。餘の者は〔水ありと〕見るが故に〔水〕無しと言ふ可らず。聖(者)は妄法に於いて顚倒の見を離る。大慧よ、妄法は是れ常なり。〔何となれば〕相異ならざるを以てなり。諸の妄法は差別の相あるにあらず、分別するが故に別異あるなり。是の故に妄法は其の體これ常なり。大慧よ、云何が妄法は眞實なることを得る。謂く、諸の聖者は妄法の中に於いて顚倒を起さず、顚倒の覺をなさず。若し妄法に於いて少分も想あらば則ち聖者にあらず。少(分も)想あるものは、當に知るべし則ち是れ愚夫の戲論にして、聖者の言說にあらざることを。』

〔四〕 何故に妄法に依つて無常の法を說くかとならば、諸聖は但善く自心の現量なりと分別して、倒想にあらざるを以てなり。

【惑亂種性分】『大慧よ、若し妄法は是れ倒非倒なりと分別せば、彼は則ち二種の種性を成就せ

む。謂く、聖種性と凡夫種性と(之れ)なり。大慧よ、聖種性には復た三種あり、何となれば聲聞と緣覺と佛乘との別あるを以てなり。大慧よ、愚夫は云何が妄法を分別して聲聞乘の種性を生ずる。謂く、自相共相に計著して〔生ず〕。大慧よ、何をか愚夫あり、妄法を分別して、緣覺乘の種性を成ずと謂ふ。謂く、卽ち自共相に執着する時、慣鬧を離るゝなり。大慧よ、何をか智人の妄法を分別して、佛乘の種性を成就し得と謂ふ。謂ゆる一切(の法)は、唯是れ自心分別の所見にして外法あるなきを了達するにあり。大慧よ、諸の愚夫あり、妄法を分別して種種の事物となし、決定して是の如し、決定して異はずとなす。これ則ち生死乘の性を成就す。大慧よ、彼の妄法中の種種の事物は、卽ち是れ物に非ず、亦た物にあらざるに非ず。大慧よ、卽ち彼の妄法は諸聖智者の心意意識と、諸惡習氣の自性の法の轉依なるが故に、卽ち妄法を說いて眞如と名く。是故に眞如は心識を離る。我いま明了に此の句を顯示す。分別を離るとは悉く一切の諸の分別を離るゝが故なり。』

【幻惑無著分】 大慧菩薩白して言さく、『世尊の說き給ふ所の妄法は、有と爲さんか無と爲さんか。』

佛の言はく、『(妄法は)幻の如し、執著の相なきを以てなり。若し執著の相は、體これ有なら

ば應に轉ず可らざるべし。則ち諸の緣起は、應に外道の說なる作者の生の如くなるべし。』

大慧又言さく、『若し妄法は幻と同じからば、此れ則ち當に餘の妄の因となるべし。』

佛の言はく、『大慧よ、諸の幻事は妄惑の因となるに非ず、(何となれば)幻は諸の過惡を生ぜざるを以てなり。諸の幻事は無分別なるを以てなり。大慧よ、夫の幻事は他の明咒より生起することを得れども、自らの分別過習の力より起るに非ず。是の故に幻事は過惡を生ぜざるなり。大慧よ、此の妄惑の法は唯是れ愚夫の心の執著する所にして、諸の聖者〔の執著する所〕に非ず。』

> 【一五】唐譯には爲異依此執著顚倒相耶とあれども今は魏譯によりて本文の如く譯せり。

爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『聖(者)は妄法を見ず、中間も亦實に非ず。妄卽眞なるが故に中間も亦眞實なり。

若し妄法を離れて而も相生あらば、此は還て卽ち是れ妄、淸淨ならざること猶翳の如し。』

【如幻相似分】『復た次に大慧よ、諸法は幻に非ざれば相似あるなし、故に一切の法は、幻の如しと說くなり。』

大慧言さく、『世尊よ、種種の幻相に執著するに依つて、一切の法は猶は幻の如しと言ふとせんや。(將た又)　(一五)顚倒の相に執著するが故に、〔諸法は幻の如しと言ふとせんや〕。若し種種の

幻相に執著するに依て、一切の法は猶ほ幻の如しと言はゞ、世尊よ、一切の法は悉く皆幻の如くなるに非ず。何となれば種種の色相を見るに、因無きにあらざるを以てなり。世尊よ、因ある無くして、種種の色相を顯現せしめば、幻の如くならむ。是の故に世尊よ、種種の幻相に執著するに依つて、一切の法は幻と相似なりと言ふ可らず。』

佛の言はく、『大慧よ、種種の幻相に執著するに依つて、一切の法は幻の如しと言ふに非ず。大慧よ、一切の法は不實にして、速に滅すること、電の如くなるが故に、幻の如しと説くなり。大慧よ、譬へば電光の見え已つて即ち滅するが如し。世間の凡愚の、悉く皆一切の諸法を現見し、自らの分別に依りて自共相の現ずるも、亦復是の如し。能く無所有なることを觀察する能はざるが故に、種種の色相に計著するなり。』爾の時に世尊は重ねて頌を説き言はく。

『幻にあらずんば相似(あること)なく、亦た諸法あることなし。不實の〔法の〕速かなること
　電の如き〔が故に〕、應に知るべし(諸法は)幻の如きものなることを。』

【性幻無過分】　爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、佛の先に説き給ふが如くんば、一切の諸法は皆悉く無生なり、〔然るに今〕又幻の如しと言ふ。將た前後の所説相違するに非ずや。』

佛の言はく、『大慧よ、相違あることなし。何となれば我生を了ずるに無生にして、唯これ自心の所見なるを以てなり。若くは有、若くは無なる一切の外法は、無性にして本より不生なることを見るを以てなり。大慧よ、我は、外道の「因によりて生ず」との義を離れんが爲の故に、諸法は皆悉く不生なりと說けり。大慧よ、外道の群聚は共に惡見を興して「一切の法は、有無より生ず」と言ふ。〔彼等は〕自らの執著分別を緣と爲すに非ざるなり。大慧よ、我は諸法は有無の生ずる(所)にあらず、故に無生と名くと說く。大慧よ、〔我が〕諸法を說くは、弟子をして諸業に依りて生死を攝受することを知り、其が無有の斷滅の見を遮せしめんが爲なり。大慧よ、諸法の相は猶ほ幻の如しと說くは、諸法の自性の相を離れしめむが故なり。諸の凡愚の惡見の欲に墮し、諸法は唯心の所現なることを知らざる者の爲に、因緣生起の相に執著するを遠離せしめむが爲に、一切の法は幻の如く夢の如しと說くなり。彼の諸の愚夫は惡見に執著して自他を欺誑し、明かに一切諸法の如實の住處を見ること能はず。大慧よ、一切の法の如實の處を見る者は、能く唯心の所現〔の理〕に了達すと謂ふべし。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『無作の故に無生なり。有法〔を說く〕は生死を攝す。幻の如し等と了達すれば、相に於いて(妄想)分別せざるなり』

【名句形身分】『復た次に大慧よ、我、當に名(身)句(身)文身の相を說くべし。諸の菩薩摩訶薩は善く此の相を觀じ、其の義に了達せば、疾に阿耨多羅三藐三菩提を得、復た能く一切の種生を開悟せしめむ。大慧よ、名身とは、謂く、事に依つて名を立つ、名は卽ち是れ身なり。是を名身と名く。句身とは、謂く、能く義を顯はし決定究竟す。是を句身と名く。文身とは、謂く、此に由つて能く名句を成ず。是を文身と名く。復た次に大慧よ、句身とは謂く、句の事を究竟するなり。名身とは、謂く、諸の字名各差別するなり。(譬へば(一六)阿字より呵字に至るが如し。文身とは、謂く、長短高下(之れ)なり。復た次に句身とは足跡の如き[を言ふ]。衢巷中に[於ける]人畜等の跡の如し。名とは非色の四蘊を謂ふ。名を以て說くが故なり。文とは名の自相を謂ふ。文に由つて顯はすが故なり。是を名句文身と名く。汝應に此の名句文身の相を修學すべし。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『名身と句身と及び字身の差別は、凡愚の計著する所にして、象の深泥に溺るゝが如し。』

【無記止論分】『復た次に大慧よ、未來世の中に諸の邪智惡思の覺者あり、如實の法を離れ、以て一異、俱不俱の相を見、諸の智者に問はんに、彼卽ち答へて言はむ、「此れ正問に非ず」と。

【一六】梵語の字母に四十八字あり。而してアを以て初まりハを以て終る。

謂へらく、「色と無常とは異と爲さんか不異と爲さんか、是の如く涅槃と諸行と、相と所相と、依と所依と、造と所造と、見と所見と、地と微塵と、智と智者とは異と爲さんか不異と爲さんか」と。是の如く計す可らざる事を次第に問はんに、世尊は此を說いて當に(二七)止記答をなすべし、愚夫無智のもの丶能く知る所にあらず。佛は其驚怖する處を離れしめむと欲して爲に記說し給はざるなり。大慧よ、記說せざるは、外道をして永へに作者の見を出離することを得せしめむと欲するを以てなり。大慧よ、諸の外道は衆く作者ありと計して、是の如きの說を作す「命は卽ち是れ身、命と身とは異なり」と。是の如きの說を無記論と名く。大慧よ、外道は癡惑して無記論を說く。「無記論は」我が敎中に非ず。大慧よ、我が敎中には能「取」所取を離れ、分別を起さずと說く。云何をか止す可けむ。大慧よ、若し能取所取に執著して、唯是自心の所見なることを了らざる者あらば彼まさに止すべし。大慧よ、諸佛如來は四種の記論を以て衆生の爲に說法し給ふ。大慧よ、止記論は我別時に說かむ。根未熟なるを以て且らく止說するが故なり。」

【一切法相分】『復た次に大慧よ、何故に一切の諸法は不生なるか。「そは」能作所作を離れ、作者なきを以てなり。何故に一切の法は自性なきか。證智を以て、自相共相は不可得なりと觀ず

【二七】止記答とは因明論に所謂置答とて默して答へざることをいふ。蓋し默よく他說を破するの大說法となるなり

るが故なり。何故に一切の法は去來なきか。〔そは〕自〔相〕共相は來るに所從なく、去るに所至なきを以てなり。何故に一切の法は不滅なるか。謂く、一切の法は性相なく不可得なるを以てなり。何故に一切の法は無常なるか。謂く、諸相は〔倏に〕起り〔倏に滅する〕無常の性なるを以てなり。何故に一切の法は常なるか。謂く、諸相の起るは即ち是れ不起にして、所有なきが故に、無常の性は常なり。是の故に我は一切の法は常なりと說く。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『一向と反問と、分別と置答と、是の如き四種の說は、諸の外道を摧伏す。

(一八)數論と勝論とは、有と非有との生を言ふ。是の如きの諸說は、一切皆無記なり。

智を以て觀察する時は、體性不可得なり。彼說く可きなきを以ての故に無自性なりと說く。』

【四果通相分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は復た佛に白して言さく、

【一八】數論と勝論。數論（Sāṃkhya）學派は、印度の正統派と稱せらるゝ六派哲學の一にして、吠壇多（Vedānta）學派と共に印度思想の代表的哲學と云ふも可なり。蓋し吠壇多派は觀念的一元論の上に立ち主として萬有の存在を研究するに對し、數論派は二元的實在論の上に立ち萬有の生成を論ずるを極めて周密なるを以てなり。印度以來我が佛教にて外道を破するときは大概必らず此の數論派を引き合ひに出さゞるはなし。隨つて佛教と數論派とは、互に批難攻擊しつゝありし間に、其の特色を取り入れたるの觀あり。佛教の唯識論の如きは、蓋し其の好適例と見ることを得む。勝論（Vaiśeṣika）學派も亦印

『世尊よ、願くは我が爲に、諸の須陀洹〔向〕と須陀洹果行の差別の相を說き給へ。我及び諸の菩薩摩訶薩は、此の義を聞くが故に須陀洹、斯陀含、阿那含、阿羅漢の方便の相に於いて皆な善巧を得て、衆生の爲に演說し、彼等をして二無我の法を證得せしめ、二障を淨除し、諸地の相に於いて漸次に通達し、如來の不可思議なる智慧の境界を獲て、衆色の摩尼の如く、普く衆生をして悉く饒益することを得せしめ給へ。』

佛の言はく、『諦聽せよ、（我）當に汝が爲に說くべし。』

大慧言はく、『唯。』

佛の言はく、『諸の須陀洹〔向〕と、須陀洹果との差別に三あり。謂く、下と中と上と（之れ）なり。大慧よ、下は諸有の中に於いて、七たび生を極む。中は三生（或は）五生、上は卽ち此の生に於いて涅槃に入る。大慧よ、此の三種の人は三種の（一九）結を斷ず。〔三種の結とは〕、身見と疑と戒禁取と（之れ）なり。上上は勝進して阿羅漢果を得。大慧

度六派哲學の一にして、數論哲學の教理と共に、佛典中に處々に批評せらるゝ所なり。此の派の祖をカナーダ(Kaṇāda)と云ふ。彼は宇宙萬有を六種に別つて說明せり。之をカナーダの六句義と云ふ。蓋し句義とは範疇の義なり。後この派に十八種の學派起りたるが、其の內最も勝れたるものを惠月(Maticandra)と云ふ彼は西曆第六世紀に雪山の北に生れ、カナーダの六句義を增補開合して十句とせり。玄奘三藏の譯になる勝宗十句義論卽ち之なり。前の數論派は「因中有果說」にて此の勝論派は「因中無果說」なりと云ふ點より今經の本文に、有と非有との生を言ふ、と云へるなり。

【一九】結とは煩惱の異名なり。煩惱は我等の解脫又に安心立

よ、身見に二種あり。謂く、（二〇）俱生及び（二一）分別（之れ）なり。（二二）緣起に依つて妄計の性あるが如し。大慧よ、譬へば（二三）緣起の性に依止するが故に、妄計して生ずる執著の性の如し。彼の法は但これ妄分別の相にして、有に非ず無に非ず、亦有に非ず亦無に非ず。凡夫は愚癡にして橫に執著すること、猶ほ渴獸の妄に「陽焰に於いて」水想を生ずるが如し。此の分別の身見は、智慧なきが故に、久遠に相應し、人無我を見て卽時に捨離す。大慧よ、俱生の身見は、普く自他の身を觀察して「受等の四蘊は色相なく、色は大種に由りて生ずることを得。是諸の大種は相互に因となり色は集まらず」となす。是の如く觀察し已つて、明かに有無を見て卽時に捨離す。身見を捨つるが故に貪は則ち生せず。是を身見の相と名く。大慧よ、疑相とは、所證の法に於いて善く相を見るが故なり。また先の二種の身見の分別を斷ずるが故に、諸法の中に於いて、疑は生ずることを得ず。亦た餘「處に於て」大師の想を生じて、淨不淨と爲さざるなり。是を疑相と名く。大慧よ、何故に須陀洹は戒禁を取らざるか。謂く、明かに生處の苦相を見るが故に取らざるなり。夫れ其の取とは、謂

命の羈靡物たること、恰も縛ばられたるものゝ結んで解けず、爲めに自由なること能はざるが如し。

【二〇】俱生とは二種の我執の中の一なり。身と共に轉するが故に俱生の我執と云ふ。

【二一】分別とは二種の我執の中の一なり。分別し計度して然して後に起る我執なるが故に分別の我執と云ふ。

【二二】俱生の我執を釋する文なり。

【二三】分別の我執を釋する文なり。

く、凡愚は諸行の中に於て世樂に貪著し、苦行し持戒して彼〔處〕に生せむことを願ふなり。〔然るに〕須陀洹の人は是相を取らず、唯證する所の、最勝無漏の無分別の法を求めて、戒品を修行す。是を戒禁取相と名く。大慧よ、須陀洹の人は三結を捨つるが故に貪瞋癡を離るゝなり。』

大慧白して言さく、『貪に多種あり、何等の貪をか捨つる。』

佛の言はく、『大慧よ。女色に於いて纏綿する貪欲を捨つ。此(蓋し)現〔在〕の樂にして〔將〕來の苦を生ずと見るを以てなり。又三昧の殊勝の樂を得るを以てなり。是の故に彼を捨つれども涅槃の貪〔を捨つる〕には非ず。大慧よ、何をか斯陀含果と云ふ。謂く、色相を了せずして色の分別を起し、一たび往來し已つて善く禪行を修し、苦の邊際を盡して般涅槃〔に入る〕。是を斯陀含と名く。大慧よ、何をか阿那含果と云ふ。謂く、過〔去〕未〔來〕現在の色相に於て、有無の見を起せども、分別の過惡隨眠を起さず、永く諸結を捨てて更に還た來らず。是を阿那含果と名く。大慧よ、阿羅漢とは、謂く、諸禪、三昧、解脫、力通悉く已に成就し、煩惱、諸苦、分別永くに盡くす。是を阿羅漢と名く。』

大慧言さく、『阿羅漢に三種あり。謂く、一向に寂に趣くと、菩提の願を退くと、佛の變化する所と(之れ)なり。〔世尊は〕此の〔三種の阿羅漢中〕何れを說き給ふや。』

佛の言はく、大慧よ、此には趣寂〔の阿羅漢〕を說き、其の餘は說かず。大慧よ、餘の二種の人は、已に曾て〔善〕巧方便の願を發し、或は諸佛の衆會を莊嚴せんが爲に彼に於いて生を示せり。大慧よ、虛妄の處に於いて種種の法を說く。謂ゆる證果、禪者及び禪は皆な性を離れ、自心の所見は得果の相なるが故なり。大慧よ、須陀洹の若きは是の如き念を作す「我諸結を離るるに則ち二過あり。謂く、我見及び諸結に墮して斷ぜざるなり」と。復次に大慧よ、若し諸禪と無量と無色界とを超えんと欲せば、應に自心所見の諸相を離るべし。大慧よ、想受滅の三昧は自心所見の境を超ゆと云ふも(實は)然らず。〔何となれば〕心を離れざるを以てなり。』

爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『諸禪と無量と、無色の三摩提と、及び想受滅とは、唯心にして不可得なり。
預流と一來果と、不還と阿羅漢と、是の如き諸の聖人は、悉く心の妄有に依る。
禪者も禪も所緣も、惑を斷じて眞諦を見るも、皆これ〔寂滅性中の〕妄想なり。
〔若し能く悉く無所有なることを〕了知すれば即ち解脫せむ。』

【二覺得地分】『復た次に大慧よ、二種の覺智あり。謂く、觀察智及び取相分別執著建立の智(卽ち之)なり。觀察智とは「一切の法は四句を離れて不可得なり」と觀ずるを謂ふ。四句とは一

異、俱不俱、有非有、常無常等を謂ふ。我は諸法を以て此の四句を離るとなす、是の故に說いて「一切法離」と言ふ。大慧よ、汝は應に是の如きの觀法を修學すべし。何をか取相分別執著建立智と云ふ、謂く、堅濕煖動の諸大種性に於いて、相を取つて執著し、虛妄に分別して〔亖〕宗因喩を以て妄に建立す。是を取相分別執著建立智と名く。是れ(卽ち)二種の覺智の相なり。菩薩摩訶薩は此の智相を知りて、卽ち能く人法の無我に通達し、無相智を以て解行地に於いて善巧に觀察し、初地に入つて百の三昧を得、勝三昧の力を以て百佛(及び)百菩薩を見、前(際)後際の各百劫の事を知り、光明は百佛の世界を照曜し、善く上上の地相を了知し、勝れたる願力を以て變現自在となり、法雲地に至つて灌頂を受け、佛地に入りて十無盡の願もて衆生「の得度」を成熟し、種種に應現して休息あること無く、常に自覺の境界、三昧の勝樂に安住す。』

〔亖〕 宗因喩は印度の論理學たる因明學に立つる三段論法のこと。宗とは斷定、因とは理由、喩とは實例なり、之を三支作法とも云ふ。

【四大不生分】『復た次に大慧よ、菩薩摩訶薩は、當に善く大種の造色を了知すべし。云何が了知せむ。大慧よ、菩薩摩訶薩は應に是の如く觀ずべし。「彼の諸の大種は眞實には不生なり、諸の三界は、但これ分別にして唯心の所現なり、故に外物あることなし」と。是の如く觀ずる時、大種の所造も皆悉く性を離れ、四句を超過して我我所なく、如實の處に住して無生の相を成せ

む。大慧よ、彼の諸の大種は、云何にしてか色を造る。大慧よ、謂く、虚妄に分別する津潤の大種は（二五）内外の水界を成じ、炎盛の大種は内外の火界を成じ、飄動の大種は内外の風界を成じ、色の分段の大種は内外の地界を成ず。虚空を離れ、邪諦に執著するに由つて、五蘊積聚して大種の造色生ず。大慧よ、識は種種の言說の境界に執著し、之を以て因と爲して起る。故に餘趣の中に於いて相續して生を受く。大慧よ、地等の造色は大種の因あり、四大種を大種の因と爲すに非ず。何となれば若し法あり、形相ある者ならば卽ち是所作にして無形の者にあらざればなり。大慧よ、是大種の造色の相は、外道の分別にして、我が說にあらざるなり。』

【諸蘊自分性】『復た次に大慧よ、我、いま當に五蘊の體相を說くべし。（五蘊とは）謂く、色と受と想と行と識と（卽ち之れ）なり。大慧よ、色とは四大及び所造の色を謂ふ。此は各相を異にす。受等は色にあらず。大慧よ、（二六）非色の諸蘊は、猶ほ虚空の如く、四數あることなし。大慧よ、譬へば虚空の數相を超過し、然も分別して、此は是れ虚空なりと言ふが如し。非色の諸蘊も亦た復た是の如く、諸の數相を離る、（そは）有無等の四種の句を離るゝを以てなり。〔是の故に〕數相は愚夫の所說にして、諸の聖者〔の說

【二五】內外。內とは吾人の身中を云ひ、外とは器世界卽ち國土を云ふ。

【二六】非色の諸蘊とは色以外の蘊卽ち受想行識の四蘊を云ふ。

く所」に非ず。諸の聖(者)は〔諸蘊を以て〕但幻の所作の如く、唯假りの施設〔なるが故に〕、異不異を離れ、夢の如く像の如く、別に所有なしと說く。聖智所行の境を了せざるが故に、諸蘊を分別して現前に有りと見るなり。是を諸蘊自性の相と名く。大慧よ。汝は應に是の如きの分別を捨離すべし。此を捨離し已つて寂靜の法を說き、一切の刹(土)の諸の外道の見を斷じ、法無我(の見)を淨めて遠行地に入り、無量の自在三昧を成就し、意生身を獲て如幻三昧力通自在みな悉く具足せば、猶は大地の普く群生を益するが如くならむ。』

【涅槃因識分】『復た次に大慧よ、涅槃に四種あり。何等をか四と爲す。謂く、(一)諸法自性無性涅槃、(二)種種相性無性涅槃、(三)覺自相性無性涅槃、(四)斷諸蘊自共相流注涅槃(之れ)なり。大慧よ、此の四(種の)涅槃は、是れ外道の義にして、我が說く所に非ず。大慧よ、我が說く所は、(三七)分別爾炎の識の滅するを涅槃と名く。』

【三七】分別爾炎の識とは第六意識を指す。

大慧言さく、『世尊よ、(世尊は)豈に八種の識を建立し給はずや。』

佛の言はく、『建立す。』

大慧言さく、『若し建立せば、云何ぞ但意識の滅にして、七識の滅に非ずと說き給ふや。』

佛の言はく、『大慧よ、彼(の意識)を因及び所緣と爲すが故に七識は生ずることを得。大慧よ、意識は分別の境界に執著を起す時、諸の習氣を生じて藏識を長養す。是に由つて意は我我所の執と倶に、思量隨轉して別の體相なく、藏識を因となし所緣と爲すが故に、自心所現の境界に執著して(二八)心聚生起し、展轉して因と爲る。大慧よ、譬へば海浪の如く、自心所現の境界の風吹いて、而も起滅(の浪)あるなり。是の故に意識滅する時は七識も亦た滅す。』

爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『我は自性と及び作相とに於いて分別境識の滅するを以て、是の
如きを涅槃と說くにあらず。
意識は心の因と爲り、心は意の境界と爲り、因及び所緣の故に、諸識の依止は生ず。
大瀑流の盡くれば、波浪は則ち起らざるが如く、是の如く意識滅すれば、種種の識は生せず。』

【二八】聚心とは心の作用の總體を云ふ。

【妄計自性分】　『復た次に大慧よ、我いま當に妄計自性の差別の相を說き、汝及び諸の菩薩摩訶薩をして、善く此の義を知り、諸の妄想を超えて、聖智の境を證り、外道の法を知りて、能取所取の分別を遠離し、他に依つて起る種種の相中に於いて、更に妄りに計する所の相を取著せざらしむべし。大慧よ、何をか妄計自性の差別の相と云ふ。謂ゆる言說分別、所說分別、相分別

財分別、自性分別、因分別、見分別、理分別、生分別、不生分別、相屬分別(及び)縛解分別(之れ)なり。大慧よ、此を是れ妄計自性の差別の相と〔謂ふ〕。何をか言說分別と云ふ。謂く種種の美妙の音詞に執著する、是を言說分別と名く。何をか所說分別と云ふ。謂く所說の事あり、是れ聖智所證の境なりと執し、此に依りて說を起す。是を所說分別と名く。何をか相分別と云ふ。謂く彼の所說の事の中に於いて、渴獸の想ひの如く、堅濕煖動等一切の諸相を分別し執著す。是を相分別と名く何をか財分別と云ふ。謂く種種の金銀等の寶を取著して言說を起す、是を財分別と名く、何をか自性分別と云ふ。(二九)謂く、惡見を以て〔諸法の〕自性を分別し、斯く斯くなり然か然かなりと決定して〔動かず〕、餘〔他の說を容れざるなり〕。是を自性分別と名く。何をか因分別と云ふ。(三〇)謂く、因緣に於て有無を分別し、此の因相を以て能く生ず〔となす〕。是を因分別と名く。何をか見分別と云ふ。謂く、諸の外道は惡見にして、有無、一異、俱不俱等と執著す。是を見分別と名く。何をか理分別と云ふ。謂く我我所の相に執著して言說を起す。是を理分別と名く。何をか生分別と云ふ。謂く、諸法の若くは有、若くは無緣より生ずと計す。是を生分別と名く。何

【二九】凡愚の者は自體の性に天然に本有なりと執して惡見の妄想を堅持するを自性分別と云ふなり。

【三〇】自種を因となし他助を緣となす。何れか因、何れか緣、と有無を分別し、或は因緣生と計し又は自然生と執するが如きを因分別と云ふ。

をか不生分別と云ふ。謂く一切の法は本來不生なり、未だ諸緣あらずして先に體あり、因より起らずと計す。是を不生分別と名く。何をか相屬分別と云ふ。謂く此と彼とは遞相繫屬すること、針と線との如し〔と計す〕。是を相屬分別と名く。何をか縛解分別と云ふ。謂く能縛に因つて所縛ありと執す。(譬へば)人は繩の方便力を以ての故に、縛し已つて復た解くが如し。是を縛解分別と名く、大慧よ、此は是れ妄計(自)性の差別の相なり。一切の凡愚は、中に於いて若くは有、若くは無と執著す。

大慧よ、緣起の中に於いて、種種に妄計自性を執著することは、幻に依つて種種の物を見るが如し。凡愚は分別して幻に異なると見るなり。大慧よ、幻と種種とは、異に非ず不異に非ず。若し異なれば、幻は應に種種の因に非ざるべく、若し一なれば、幻と種種とは應に差別なかるべし。然も差別あるを見る、是の故に異に非ず不異に非ず。大慧よ、汝及び諸の菩薩摩訶薩は、幻の有無に於いて應に著を生ずべからず。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『心は境の爲に縛せらる。覺想の智隨つて轉ずれば、無相と最勝處と平等の智慧生ず。
妄計に在つては、是れ有り、緣起に於いては、則ち無し。妄計は迷惑して取り、緣起は分別を離る。

種種の支分生ずれば、種種の相を現ずれども、幻の成就せざるが如く、妄分別は則ち無し。
彼の相は卽ち是れ過にして皆心の縛より生ず。妄計する者は了せずして緣起の法を分別す。
此の諸の妄計の性は、皆卽ち是れ緣起なり。妄計に種種あり、緣起の中に(於いて)分別す。
世俗と第一義と、第三は無因生なり。〔三一〕妄計は是れ世俗にして、斷ずれば則ち聖の境界なり。
(譬へば)修觀の行者は一に於いて種種を現ずれども、〔三二〕彼に於いて種種なきが如く、妄計の相も(亦た)是の如し。
(譬へば)目に種種の翳あり、妄想して衆色を見るも、彼に色非色なきが如し、緣起を了せざるも(亦た)然り。
(譬へば)金の塵垢を離るるが如く、水の泥濁を離るるが如く、虛空の雲なきが如く、妄想の淨まるも(亦た)是の如し。
妄計の性あること無く、而も緣起と建立及び誹謗あるは、斯れ分別の境に由る。
若し妄計の性なくして、而も緣起する者あらば、無法にして法あり、有法は無より生ぜむ。
妄計に因つて緣起あることを得、相と名とは常に相隨つて妄計を生ず。

〔三一〕上句は眞俗と邪計との三を頌し。下句は二諦及び三自性を結べる頌なり。

〔三二〕二乘外道の禪觀を修するとき、若し青想を觀すれば天地萬物青相を呈す。然も一色の境には本來諸色なし、只定想に依つて諸見を作すのみ。妄計の見も亦た之に類すと云ふ意味なり。

縁起は妄に依るが故に究竟して成就せず、是の時清淨を現ずるを名けて第一義と爲す。
妄計に十二あり、縁起に六種あり。(若し夫れ)自證眞如の境には、彼の差別あることなし。
五法を眞實と爲す、三自性も亦た爾り。修行者これを觀れば、(三三)眞如を越えず。
縁起の相に依つて種種の名を妄計す、彼の諸の妄計の相は、皆縁起に因つて有るなり。
智慧もて善く觀察すれば、縁もなく妄計もなし。眞實中に物なくむば、云何が分別を起さむ。
圓成若し有ならば、此れ則ち有無を離る。既に有無を離る、云何か二性あらむや。
妄計に(三四)二性あり二性は是れ安立す。分別すれば種種を見、淸淨なれば聖の所行となる。
種種の相を妄計するは、縁起中の分別なり。若し此の分別に異にして(別に因を計すれば)、則ち外道の論に墮せむ。
諸の妄見によりて妄計を妄計す、此の二計を離るゝを、即ち眞實の法と爲す。』

【自覺一乘分】　大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、唯願くは(我が)爲に白

【三三】眞如を越えずとは眞如の相に於いて違越せざるの義なり。

【三四】二性とは縁起と圓成との二性なり。妄計の迷相は是れ縁起の性にして妄計の覺相は是れ圓成の性なり。是故に二性安立すと云ふ。

證聖智の行相と一乘の行相とを說き給へ。我及び諸の菩薩摩訶薩は、此の善巧を得ば、佛法の中に於いて、他に由らずして悟らむ。』

佛の言はく、『諦聽せよ。(我)當に汝が爲に說くべし。』

大慧言さく、『唯』。

佛の言はく、『大慧よ、菩薩摩訶薩は、諸の聖教に依りて分別あることなし。獨り閑靜に處して自覺を觀察し、他に由らずして悟り分別の見を離れ、上上に昇進して如來地に入る。是の如く修行するを自證聖智の行相と名く。云何が一乘の行相と名く。謂く一乘の道を證知することを得るが故なり。云何が名けて一乘の道を知ると爲す。謂く能取所取の分別を離れて如實に住するを以てなり。大慧よ、此の一乘の道は、唯如來を除き、外道二乘梵天王等の能く得る所に非ず。』

【三五】此の文唐譯も魏譯も「我說一乘」とあれども今は宋譯によりて「不說一乘」を取りたり。

大慧、佛に白して言さく、『世尊は、何故に三乘ありと說き、一乘を說き給はざる。』

佛の言はく、『大慧よ、聲聞と緣覺とには、自ら般涅槃の法なきが故に(三五)一乘を說かず。彼(等)は但如來の所說に依りて調伏し遠離し、是の如く修行して解脫を得れども、自らの所得にあらざるを以て(一乘を說かず)。又彼(等)は未だ智障及び業の習氣を除滅すること能はず、未だ法無我

を覺らず、未だ不思議變易の死と名けず。是の故に我は三乘の爲に說けり。若し彼能く一切の過習を除き法無我を覺らば、是の時は乃ち三昧の所醉を離れ、無漏界に於いて覺悟を得已つて、出世上上の無漏の界中に於いて諸の功德を修し、普く滿足して不思議自在の法身を獲せしめむ。』

爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『天乘と梵乘と、聲聞〔乘〕と緣覺乘と、諸佛如來乘と、〔此等の〕諸乘は我が說く所なり。

(若し)(三六)心起り(念動くこと)あらば、諸乘未だ究竟にあらず。

(若し)彼の心轉を滅し盡して、乘及び乘者なく、乘の建立あるなくんば、我說いて一乘と爲す。愚夫を攝(受)せむが爲の故に諸乘の差別を說くなり。

解脫に三種あり、謂く、諸の煩惱を離るると、法無我を得ると、平等智解脫と(之れ)なり。

譬へば海中の木の、常に波浪に隨つて轉ずるが如く、聲聞の心も亦然り、相風に漂蕩せられて滅すと雖も煩惱を起し、なほ習氣に縛せられ、三昧の酒に醉はさる。

彼は無漏界に住す〔と雖も、尚ほ〕究竟の趣にあらず、復た亦た退轉せず、三昧の身を得て〔其

【三六】菩提心生じて生滅の心滅するも猶ほ生滅に屬す。起心動念は法體に乖く、情に一念の悟を存せば佛乘と雖も亦た究竟にあらず、況んや余乘なやと云ふ意味なり。即ち悟りの悟り臭く味噌の味噌くさきは上々にあらざるが如し。

の樂に著し」、乃ち劫に至るも覺めざるなり。

譬へば昏醉の人の、酒消えて然して後悟るが如く、聲聞も亦た是の如く、覺めて後當に成佛すべし。』

卷の第四

無常品第三の一

【意成三身分】爾の時に佛、大慧菩薩摩訶薩に告げ言はく、『今當に汝が爲に意成身の差別の相を說くべし。諦聽せよ、諦聽せよ、(而して)善く之を思念せよ。』

大慧言さく、『唯。』

佛の言はく、『大慧よ。意成身に三種あり。何をか三と爲す。謂く、入三昧樂意成身、覺法自性意成身、種類俱生無作行意成身(これ)なり。諸の修行者は、初地に入り已つて、漸次に證得せむ。大慧よ、何をか入三昧樂意成身と云ふ。謂く、三四五地に三昧に入り、種種の心を離れて寂然として動かず。心海に轉識の波浪を起さず、境(界)は心の〔所〕現にして皆無所有なることを了る。是を入三昧樂意成身と名く。何をか覺法自性意成身と云ふ。謂く、八地の中に〔於いて〕法は幻の如く皆相なきことを了り、心の所依を轉じ、如幻の定及び餘の三昧に住し、能く無量自在の神通を現じ、花の開敷するが如く、速疾なること意の如く、幻の如く夢の如く、影の如く像の

如く、四大の造に非ざれども造と相似し、一切の色相を具足し莊嚴して、普く佛刹に入り諸法の性を了る。是を覺法自性意成身と名く。何をか種類倶生無作行意成身と云ふ。謂く諸佛自證の法相を了達す。是を種類倶生無作行意成身と名く。大慧よ、當に勤めて三種の身相を觀察すべし。』

爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『我が大乘は乘に非ず、聲に非ず亦字に非ず、諦に非ず解脫に非ず、亦無相の境にも非ず。

然かも種種の意成身は摩訶衍に乘じて、三摩提自在に、(其相好は)華の如くに莊嚴せり。』

【內外無間分】 爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、

『世尊よ、世尊の所說の如くんば、(世に)五無間の業あり、若し人〔これを〕作し已れば阿鼻獄に墮す〔と謂ふ〕。何をか五と爲す。』

佛の言はく、『諦聽せよ、當に汝が爲に說くべし。』

大慧言さく、『唯。』

佛、大慧に告げたまはく、『五無間とは、謂く、母を殺し、父を殺し、阿羅漢を殺し、和合僧を破り、惡逆の心を懷いて佛身の血を出すなり。大慧よ、何をか衆生の母となす。謂く生を引くの愛は貪喜と倶なり。(譬へば)母の養育の如し。何をか父と爲す。謂ゆる無明は、(一)六處をし

【一】 六處とは眼耳鼻舌身意を云ふ。

て聚落の中に生せしむ。かるが故に、「此の」二の根本を斷ずるを、父母を殺すと名く。何をか阿羅漢を殺すと云ふ。謂く隨眠を怨と爲すこと鼠毒の發するが如し。究竟して彼を斷つ、是故に說いて阿羅漢を殺すと名く。何をか和合僧を破ると云ふ。謂く諸蘊の異相和合して積聚す。究竟して彼を斷ずるを名けて破僧と爲す。何をか惡心を以て佛身の血を出すと云ふ。謂く八識身は妄りに思覺を生じ、自心の外に、自相共相ありと見るなり。此故に三解脫と無漏の惡心を以て、究竟して彼の八識身の佛を斷ず。(是を)惡心を以て佛身の血を出すと名く。大慧よ、是を內の五無間と爲す。若し(之)を作す者あらば即ち無間に實法を現證することを得む。復た次に大慧よ、汝が爲に外の五無間を說き、汝及び餘の菩薩をして此義を聞き已つて、未來世に於いて疑惑を生ぜざらしめむ。何をか外の五無間と云ふ。謂く餘敎の中に說く所の無間(之れ)なり。若し(之を)作す者あらば、三解脫に於いて現證すること能はざらむ。唯如來と諸の菩薩及び大聲聞の、其の無間業を造る者あるを見て、勸發して其をして過を改めしめんと欲するが爲に、神通力を以て其の事を同うし、尋いで即ち悔除せしめ、解脫を證する者を除く。「蓋し」これ皆化現にして實に「無間の業を」造るにあらざればなり。若し實に無間の業を造る者あらば、終に現身にして解脫を得ること無けむ。唯身と資と所住(等)とは、自心の所現なることを覺了し、我我所の分別執見を離

れ、或は來世に於いて餘處に生を受け、善知識に遇うて分別の過を離れ、方に解脫を證するものを除く。』爾の時に世尊は、重ねて頌を說き言はく、

『貪愛を名けて母と爲す、無明は則ち是れ父なり。識の境界を了ずる、此れ則ち名けて佛と爲す。

隨眠は阿羅漢。蘊聚は和合僧、彼を斷じて餘間なし、是を無間の業と名く。』

【如來體性分】 爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、「世尊よ、願くば我が爲に諸佛の體性を說き給へ。」

佛の言はく、『大慧よ、二無我を覺り、二種の障を除き、二種の死を離れ、二つの煩惱を斷ずる、是れ佛の體性なり。大慧よ。聲聞緣覺も此の法を得已れば、亦た名けて佛と爲す。我は此の義を以て但一乘と說くなり。』爾の時に世尊は、重ねて頌を說き言はく、

『善く二無我を知り、二障と二惱と、及び不思議の死を除く、是の故に如來と名く。』

【四平等佛生分】 爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、「世尊よ、如來は何の密意を以てか、大衆の中に於いて是の如く唱へ給ふや、「我は是れ過去一切の諸佛なり」と。又百千の本生の事を說いて、「或る時我は頂生王、大象、鸚鵡、月光妙眼等と作る」と。佛の言はく、

『大慧よ、如來應(供)正等覺は、四平等の秘密の意に依るが故に、大衆の中に於て是の如く言へり、「我は昔時、拘留孫佛、拘那含牟尼佛、迦葉佛と作る」と。何をか四(平等)と爲す。謂く、字平等、語平等、身平等、法平等(これ)なり。何をか字平等と云ふ。謂く、我は佛と名く、一切の如來も亦た佛と名く。佛名に別なし、是を字(平)等と謂ふ。何をか語平等と云ふ。謂く、我は六十四種の梵音の聲語を作す、一切の如來も亦此の語を作し給ふ。迦陵頻伽の梵音聲の性は不増不滅にして差別あることなし。是を語〔平〕等と名く。何をか身平等と云ふ。謂く、我と諸佛の法身の色相及び隨形好と等うして差別なし。(但)種種の衆生を調伏せむが爲に、隨類の身を現ずるものを除く。是を身(平)等と謂ふ。何をか法平等と云ふ。謂く、我と諸佛と皆同じく三十七種の菩提分法を證得す。是を法(平)等と謂ふ。是故に如來應(供)正等覺は、大衆の中に於て是の如くの説を作し給ふなり。』爾の時に世尊は、重ねて頌を說き言はく、

『迦葉と拘留孫と拘那含は是我なりとは、四平等に依るが故に、諸の佛子の爲に說くなり。』

自證本住分

爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、世尊の說き給ふが如くんば、「我某夜に最正覺を成じてより、乃至某夜に當に涅槃に入るまで、其中間に於いて一字を說かず、亦た已說せず、亦た當說せず、不說は是れ佛說なり」とあり。世尊よ、何の密意

に依りてか是の如く語り給ふ。』

佛の言はく、『二の密法に依りて是の如きの說を作すなり。何をか二法と云ふ。謂く自證の法と本住の法と(之れ)なり。何をか自證の法と云ふ。謂く諸佛の證し給ふ所は、我も亦た同じく證して、不增不減なり。(而して)證智の所行は言說の相を離れ、分別の相を離れ、名字の相を離る。(是を自證の法と名く)。何をか本住の法と云ふ。謂く法の本性は、(譬へば)金等の鑛に在るが如し。若し佛の出世あるも、又は佛の出世なきも、法は法位に住して、法界法性皆悉く常住なり。大慧よ。譬へば人あり。曠野の中を行き、古城に向ひ、平坦たる舊道を見て、便ち(其の道に)隨つて城に入り、(其處に)止息し遊戲するが如し。大慧よ、汝云何と意ふ。此道及び城中の種種の物は彼の作る所となすか。』(大慧)言さく、『不。』佛の言はく、『大慧よ、我及び諸佛の證する所の眞如、(即ち)常住の法性も亦た復た是の如し。是故に(我は)說いて、「始め成佛してより涅槃に至るまで、其の中間に於いて、一字を說かず、亦た已說せず、亦た當說せず」と言ふなり。』爾の時に世尊は重ねて頌を說いて言はく、

『某夜に正覺を成じてより、某夜に涅槃するに至るまで、此の二つの中間に於いて、我すべて說く所なし。

自證(の法)と、本住の法との故に、是の密語を作す、「我及び諸の如來は、少しも差別あることなし。』

【有無俱離分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、願くは一切の法の有無の相を說き、我及び諸の菩薩摩訶薩をして、此の相を離れ、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得せしめ給へ。』

佛の言はく、『諦かに聽け、(我)當に汝が爲に說くべし。』

大慧言さく、『唯。』

佛の言はく、『世間の衆生は多く二見に墮す。謂く有見と無見と(之れ)なり。二見に墮するが故に出世の想に非ず。何をか有見と云ふ。謂く實有の因緣ありて(諸法を)生ず、諸法は實有にあらざるに非ず。實有の諸法は因緣より生ず、無法の生に非ず。大慧よ、(三)是の如く說く者を(我は)則ち無因を說く(となすなり)。貪瞋癡を受くるを知り已つて妄計して無と言ふ。大慧よ、又彼は有相を分別して諸法の有を受けず。復た諸の如來聲聞緣覺は貪瞋癡の性なきことを知り、計して非有と爲す(もの)あり。此の中誰か壞者と爲す。大慧白して言さく、『貪瞋癡の性ありと謂ひて後に無を取る者を名けて壞者と爲す。』佛の言はく、『善い哉、

【三】佛は外道の非因を計して因となすか故に之を斥けて無因外道と呼ばるゝなり。

汝わが問を解せり。此の人は(嘗に)貪瞋癡を無みして壞者と爲るのみに非ず、亦た如來聲聞緣覺(の三聖)をも壞するなり。何となれば煩惱は內外不可得なるを以てなり、(又)體性は異にあらず不異に非ざるを以てなり。大慧よ、貪瞋癡の性は、若は內、若は外〔に於いて〕、皆不可得なり、それ體性なく取るべき無きを以てなり。(又)聲聞緣覺及び如來の本性は解脫にして、能縛及び縛因あること無ければなり。大慧よ、若し能縛及び縛因あらば則ち所縛あり、是の如き說を作すものを名けて壞者となす。是を無有の相と爲す。我この義に依つて密意に說かむ、「寧ろ我見を起すこと須彌山の如くなるも、空見を起して增上慢を懷かじ」と。若し此の見を起すものは名けて壞者と爲す。〔彼は〕自〔相〕共〔相〕の見の樂欲に墮して、諸法は唯心の所現なることを了らず、了らざるが故に、外法の無常にして刹那に展轉する差別と、蘊界處の相の相續流轉し、起り已つて還た滅するありと見、虛妄に分別して文字の相を離るゝも亦た壞者となす。」爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

「有無は是れ二邊にして、乃ち心の所行なり、彼の所行を淨除すれば、平等の心〔生じて諸相は〕寂滅ならむ。

境界を取らざるは(境界の)滅にも非ず、(亦)所有にも非ず。(たゞ)眞如の妙物のみ有り、(三)

【三】 此の句は魏譯より取る。

是れ諸聖の境界なり。

もと無にして生あり〔と云ふと〕、生じ已つて復た滅す〔と云ふと〕、是の如き因緣の有と無と〔を計する教〕は、かれ我が法に非ず。

〔一切の法〕は外道〔の作〕にも非ず、佛〔の作〕にも非ず、〔神〕我〔の作〕にも非ず、(四)餘の衆〔因の所造〕にも非ず、能く(因)緣によりて有を成ず、云何ぞ無なることを得む。

誰か〔因〕緣を以て有を成じ、而も復た無と言ふことを得む。惡見のものは說いて生と爲し、妄想して有無を計す。

若し所生なきことを知らば、亦た復た所滅なけむ、世を觀ずるに悉く空寂にして、倶に有無の二〔見〕を離る。』

【宗說自利分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に請ふて言はく、『世尊よ、唯願くば(我が)爲に宗趣の相を說き。我及び諸の菩薩摩訶薩をして、善く此の義に達し、一切の衆邪の妄解に隨はず、疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得せしめ給へ。』

佛の言はく、『諦かに聽け、(我)當に汝が爲に說くべし。』

大慧言さく、『唯。』

【四】勝論外道の說く微塵の如きものを指して餘の衆因と云へるものならん。

佛の言はく、『大慧よ、一切の二乘及び諸の菩薩に二種の宗の法相あり。何をか二と爲す。謂はく(一)宗趣法相と(二)言說法相と(これ)なり。宗趣法相とは、謂く自ら證する所の殊勝の相は文字言語の分別を離れ、無漏界に入りて自地の行を成じ、一切の不正思の覺を超過し、魔外の道を伏して智慧の光を生ず、是を宗趣法相と名く。言說法相とは、謂く九部の種種の教法を說き、一異有無等の相を離れ、(善)巧方便を以て、衆生の心に隨つて此の法に入らしむ。是を言說法相と名く。汝及び諸の菩薩は當に勤めて修學すべし。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『宗趣と言說とは、自證及び教法なり、若し善く知見するものは、他の妄解に隨はず。

愚(人)の分別する所の如きは、是れ眞實の相に非ず、彼豈に度を求めざらむや、(而も)法として得べきなし。

諸の有爲(の法)を觀察するに、生滅等相續す。「然るに外道は二見を增長して、顚倒して知る所なし。

涅槃は心意を離る、唯此の一法のみ實なり。世を觀ずるに悉く虛妄にして、幻(の如く)夢(の如く)芭蕉の如し。

貪瞋癡あるなく、亦た復た人あるなし、諸蘊は愛より生じて、夢に見る所の如し』

【妄想心量分】 爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、願くは我が爲に虚妄分別の相を説き給へ。此の虚妄分別は云何にしてか生じ、（五）何に因つてか生ずる、誰か生み出し、（又）何故に名けて虚妄分別と爲すや。』

佛の言はく、『大慧よ、善い哉、善い哉、汝世間の天人を哀愍するが爲に此の義を問ふ。（こは）利益する所多く安樂ならしむる所多し。諦かに聽け、（而して）善く之を思念せよ、（我）當に汝が爲に説くべし。』

大慧言さく、『唯。』

佛の言はく、『大慧よ、一切の衆生は、種種の境に於いて、自心の所現なることを了達する能はず、能（取）所取を計して虚妄に執著し、諸〻の分別を起して有無の見に墮し、外道の妄見習氣を增長し、心心所の法、相應して起る時、外義に種種の得べきものありと執し、我及び我所を計著す。是の故に名けて虚妄分別と爲す。』

大慧白して言さく、『若し是の如くんば、外の種種の義性は、有無等の諸の見相を起すことを離る。世尊の第一義諦も亦た復た是の如く、諸根と量と宗と因と喩とを離る。世尊は何故に種種の義に於いては分別を起すと言ひ、第一義の中には（分別を）起さずと言ふか。將た世尊の言ふ所

【五】此の間に「是何而生」の一句あれども意義も通ぜず又不必要にも見ゆるが故に削除せり。

は理に乖くこと無きか。(そは)一處には起ると言ひ、一〔處〕には起らずと言へばなり。世尊は又虚妄分別は有無の見に墮す、譬へば種種の幻事の實に非ざるが如く、分別も亦爾り、有無の相を離ると說き給ふ。云何が二見に墮すと說くか。此の說は豈に世の見に墮せざるか。』

佛の言はく、『大慧よ、分別は不生不滅なり。何となれば有無分別の相を起さざるを以てなり。所見の外法は皆有ることなく、唯自心の所現のみと了るを以てなり。但愚夫は、自心に種種の諸法を分別し、種種の相に著するを以て是の說を作す。「所見は皆是自心なることを知り、我我所の一切の見著を斷じ、作所作の諸の惡因緣を離れ、唯心(の理)を覺るが故に其の意樂を轉じ、善く諸地を明めて佛境界に入り、五法自性(等)の諸の分別の見を捨てしめよ」と。是故に我は虚妄分別は自心の所現なる諸の境界に執著して生ずと說くなり、如實に了知せば則ち解脫することを得む。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『諸の因と緣と、此より世間を生ず、(若し)四句と相應せば、我が法を知らざるなり。

世は有無の生に非ず、亦た俱不俱にも非ず (六)云何が諸の愚夫の分別する因緣より起らむ。

有に非ず、亦無に非ず、亦復有無に非ず、是の如く世間を觀せば、心轉じて無我を證せむ。

【六】愚夫は因緣の法に於いて有無等の四見に著す、故に愚夫の考ふる因緣と聖の謂ゆる因緣とは相違あるなり。

一切の法は不生なり、そは縁より生ずるを以てなり。〔一切の法は〕諸縁の所作なり、所作の法は生に非ず。

果は自ら果を生ぜず、〔そは〕二果の失あるを以てなり。二果あることなきが故に、性の得べきあるに非ず。

諸の有爲法を觀ずるに、能緣と所緣とを離る。決定して唯是れ心のみ、かるが故に我は心量なりと說く。

量の自性の處は、〔能〕緣〔の心〕も、〔所緣の〕法も、二つながら倶に離る、妙淨の事を究竟するを、我は說いて心量と名く。

假名の我を施設するも、而も實は不可得なり、諸蘊は蘊の假名のみ、亦みな實事なし。

(世に)四種の平等あり、相と因と及び所生と、(而して)無我を第四と爲す、修行者は(此の理を)觀察せよ。

一切の諸見、及び能所の分別を離るれば、得も無く亦た生も無けむ、(而も)我は是を心量なりと說く。

有に非ず亦た無に非ず、有無二つながら倶に離れ、是の如きの心も亦た離る、(而も)我は是

を心量なりと說く。
眞如も、空も、實際も、涅槃も、法界も、及び種種の意生身も、我は是を心量なりと說く。
妄想と習氣の縛は、種種(みな)心より生ず、(然るを)衆生は見て外(法)となす、「故に」我は是を心量なりと說く。
外(界)に見らるるものは「實」有に非ず。心は種種に現じて、身資及び所住(等)となる、「故に」我は是を心量と說くなり。』

【善語義相分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩、復た佛に白して言さく、『世尊よ、如來は說き言ふ、「汝及び諸の菩薩は、我が所說を(解するに)、語に依らずして、應に其の義を取るべし」と。世尊よ、何故に語に依らずして、應に其義を取るべきか。何をか語と爲し、何をか義と爲す。』
佛の言はく、『諦聽せよ、(我)當に汝が爲に說くべし。』
大慧言さく、『唯。』
佛の言はく、『大慧よ、語は謂ゆる分別習氣を其の因となす。(而して)喉舌唇齶齒の輔に依りて種種の音聲文字を出す、相對談說是を名けて語となす。何をか義と云ふ。(謂く)、菩薩摩訶薩は獨り靜處に住し、聞思修の慧を以て、涅槃の道に向ひ、自智の境界を思惟し觀察し、諸の習氣

を轉じて、諸地の種種の行相を行ず、是を名けて義と爲す。復次に大慧よ、菩薩摩訶薩は、善く語義に於いて、語と義とは一にあらず異にあらず、義と語とも亦た復た是の如しと知る。若し義と語と異れば、則ち語に因つて義を顯はすべからず。而も語に因つて義を見るは、燈の色を照すが如し。大慧よ、譬へば人あり、燈を持して物を照し、此の物は是の如く、是の如き處にありと知るが如し。菩薩摩訶薩も亦復是の如く、言語の燈に因つて、言説を離るゝ自證の境界に入るなり。復た次に大慧よ、若し不生不滅、自性、涅槃、三乘、一乘、五法(及び)諸心の自性等に於いて、言の如く義を取るものあらば、則ち建立及び誹謗の見に墮せむ。(そは)彼に異なりて分別を起すを以てなり。(譬へば)幻事を見て、計して以て實となすが如し。是れ愚夫の見にして、賢聖(の見)に非ざるなり。』爾の時に世尊は重ねて頌を説いて言はく。

『若し言に隨つて義を取らば諸法を建立す、彼は建立を以ての故に死して地獄の中に墮せむ。

蘊中に我あるなく、蘊卽ち是れ我なるにも非ず、彼が分別の如くなるにもあらず、亦た復た我なきにも非ず。

愚の分別する所の如くんば、一切皆性ありとす、若し彼が所見の如くんば、皆應に眞實を見るべし。

一切の染淨の法は、皆悉く體性なし、彼が所見の如くにもあらず。亦た所有なきにも非ず。』

【智識諸相分】『復た次に大慧よ、我當に汝が爲めに智識の相を說くべし。汝及び諸の菩薩摩訶薩にして、若し善く智識の相を了知せば、則ち能く疾かに阿耨多羅三藐三菩提を得む。大慧よ、智に三種あり。謂く(一)世間智、(二)出世間智、(三)出世間上上智(卽ち之れ)なり。何をか世間智と云ふ。一切の外道(及び)凡愚の、有無の法を計するを謂ふ。何をか出世間智と云ふ。一切の二乘の、自(相)共相に著するを謂ふ。何をか出世間上上智と云ふ。謂く諸佛菩薩の、一切の法を觀じて皆無有の相を離れ、不生不滅なり、非有非無なりとなし、法無我を證して如來地に入るを謂ふ。大慧よ、復た三種の智あり。謂く(一)自相共相を知るの智、(二)生滅を知るの智、(三)不生不滅を知るの智(卽ち之れ)なり。復た次に大慧よ、生滅は是れ識にして、不生滅は是れ智なり。相無相及び有無種種の相の因に墮するは是れ識にして、相無相及び有無の因を離るるは是れ智なり。積集の相あるは是れ識にして、積集の相なきは是智なり。境界の相に著するは是れ識にして、境界の相に著せざるは是れ智なり。三和合相應して生ずるは是れ識にして、無礙相應自性の相は是れ智なり。有得の相は是れ識にして、無得の相は是れ智なり。(そは)自證聖智の所得の境界は、水中の月の如く、不入不出なるを以てなり。』爾の時に世尊は、重ねて頌を說き言

はく、

『業を採集するを心と爲し、法を觀察するを智となす。慧は能く無相を證し、自在の威光を逮得す。

境界に縛せらるるを心と爲し、覺想生ずるを智となす。無相及び增勝の智慧は、(其の)中に於いて起る。

心意と識との、諸の分別の相を離れて、無分別の法を得るものは、佛子にして聲聞に非ず。

寂滅殊勝の忍たる如來清淨の智は、善勝の義より生じて、諸の所行を遠離す。

我に三種の智あり、聖者は能く明照して、諸相を分別し、一切の法を開示す。

我が智は諸相を離れて二乘を超過す、(そは)聲聞(等)は諸法の有に執著すれども、如來の智は無垢にして、唯心を了達するを以てなり。』

【外道轉變論分】『復た次に大慧よ、外道に九種の轉變の見あり。謂ゆる(一)形轉變、(二)相轉變、(三)因轉變、(四)相應轉變、(五)見轉變、(六)生轉變、(七)物轉變、(八)明了轉變、(九)所作明了轉變、是を九(轉變)と爲す。一切の外道は是の見に因るが故に、有無轉變の論を起す。此の中、形轉變とは、謂く形別異見なり、譬へば金を以て莊嚴の具を作るに、環釧瓔珞種種同じか

らず。形狀殊あるも金體は易はること無きが如く、一切法の變も亦た復た是の如し。諸の外道は種種に計著すれども、皆是の如きにも非ず亦た別異にもあらず、但分別するが故なり。一切の轉變は、是の如く應に知るべし。譬へば乳酪酒果の熟するが如き、外道は此皆轉變なりと言ふ。而も實は自心の所見にして外物なきが故に、若は有若は無なる者なし。此の如きは皆是愚迷の凡夫の自ら分別する習氣より起る(所にして)、實は一法の若は生若は滅なるもの(あること)無し。(譬へば)幻夢に因つて見る所の諸色の如く、(又は)石女の兒に生死ありと說くが如し。」

【七】此の偈は宋譯を取りて譯せり

爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『形は處と時に〔隨つて〕轉變す〔と言ふ〕と、〔四〕大種及び諸根は、
中有に漸次に生ず〔と說く〕とは、妄想にして明智に非ず。
(七)諸佛の緣起に於けるや、彼の〔外道の〕妄想の如くならず、但世間の緣起は、乾闥婆城の如し。』

【深密解脫分】 爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、唯願くは我が爲に、一切の法に於ける深密の義、及び解義の相を解說し、我及び諸の菩薩摩訶薩をして、善く此の法を知り、說の如くに義を取り、深密の執著に墮せず、文字言語の虛妄の分別を離れしめ、普

く一切諸佛の國土に入り、力通自在に總持の印する所、佛慧善く十無盡の願に住し、無功用を以て種種に變現し、光明照曜して、日月摩尼地水火風の如く、諸地に住して分別の見を離れ、一切の法は、幻の如く夢の如くなることを知り、如來地に入りて普く衆生を化し、諸法の虚妄にして不實なることを知らしめ給へ。』

佛の言はく、『諦聽せよ、(我)當に汝が爲に說くべし。大慧よ、一切の法に於いて、言の如くに義を取り、執著深密なるもの其の數無量なり。謂ゆる相執著、緣執著、有非有執著、生非生執著、滅非滅執著、乘非乘執著、爲無爲執著、地地自相執著、自分別現證執著、外道の宗の有無品執著、三乘一乘執著、(卽ち之れ)なり。大慧よ、此等の密執に無量の種あり。皆これ凡愚の自ら分別し深密に執著する〔所〕なり。此諸の分別は、蠶の繭を作るが如く、妄想の絲を以て自らを纏し他を纏す。(是の如く)有無に執著するの欲樂は、堅くして密なり。大慧よ、此の中實に密非密の相なし。そは菩薩摩訶薩は、一切の法を見るに、寂靜に住し、分別なきを以てなり。若し諸法は唯心の所見にして外物あるなく、皆同じく無相なることを了り、隨順に觀察せば、若は有若は無の分別密執に於いて、悉く寂靜なるを見む。是故に密非密の相ある無し。大慧よ、此の中には縛もなく亦た解あること無し。實を了らざる者のみ縛解を見るなり。何となれば一切の

諸法は、若くは有なるも若くは無なるも、其の體性を求むるに不可得なるを以てなり。復た次に大慧よ、愚癡の凡夫には三種の密縛あり。謂く貪恚癡及び愛と、衆生の貪喜と倶なり。此の密縛を以て諸の衆生をして五趣に續生せしむ。密縛若し斷ずれば、則ち密非密の相あること無し。復た次に大慧よ、若し三和合の縁に執著することあらんか、諸識の密縛は次第に起らむ。執著あるが故に則ち密縛あり。若し三の解脱を見ば、三和合の識を離れ、一切の諸の密は悉く生ぜざらむ。』爾の時に世尊は重ねて頌を説きて言はく、

『不實の妄分別、是を名けて密相と爲す。若し能く實の如くに知らば、諸の密網みな斷ぜむ。
凡愚は(唯心の理を)了ること能はずして、言に隨つて義を取る。譬へば蠶の繭(の中)に處るが如く、妄想して自ら纏縛するなり。』

【如實空法分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、世尊の説き給ふが如くんば、種種の心に由りて諸法を分別すれども、諸法は自性あるに非ず、此れ但妄計のみ。世尊よ、若し但妄計のみにして諸法なくむば、染淨の法も將た悉く壞すること無けむ。』

佛の言はく、『大慧よ、然り、然り、汝が所説の如し。一切の凡愚は諸法を分別す、而も諸法は是の如く有なるに非ず、これ但妄執のみにして性相あることなし。然れども諸の聖者は、聖慧の

眼を以て如實に諸法の自性あることを知見す。」

大慧白して言さく。「諸〻の聖人のごときは、聖慧の眼を以て諸法の性ありと見るも、これ天眼肉眼[を以てする]に非ず、凡愚の分別する所と同じからざるなり。凡愚は諸聖の法を覺了する能はず、云何ぞ分別を離るゝことを得む。世尊よ、彼は顚倒にも非ず、不顚倒にも非ず。何となれば彼は聖人所見の法を見ざるを以てなり。聖見は有無の相を遠離するを以てなり。聖(人)も亦凡(夫)の分別する所の如く、是の如くなるを得ざるを以てなり。自ら行ずる所の境界の相に非ざるを以てなり。世尊よ、(八)彼も亦た諸法に性相あり、虛妄の性の如くに顯現すと見るを以てなり。有因及び無因と說かざるを以てなり。諸法の性相の見に墮するを以てなり。世尊よ、其の餘の境界も既に此に同じからず。是の如くなれば則ち無窮の失あり。孰か能く法に於いて性相を了知せむや。世尊よ、諸法の性相は分別に依らず。云何ぞ分別を以ての故に諸法ありと言ふや。世尊よ、分別の相異なれば諸法の相異なる。(而も)因は相似せず、云何が諸法は分別に由らむ。復た何を以ての故に凡愚の分別は是の如く有にあらざるに、而も「衆生をして分別を捨てしめむが爲の故に、分別所見の法相の如く、是の如きの法なしと說く」との言を作し給ふや。世尊よ、何故に諸の衆生をして有無の見に執著する

【八】 彼とは聖智を指す。

所の法を離れしめて、而も復た聖智の境界に執著し、有見に墮せしめ給ふや。そは寂靜空無の法を說かずして、聖智の自性の事を說き給ふを以てなり。』

佛の言はく、『大慧よ、我は寂靜の空法を說かざれども、有見に墮するには非ず。何となれば已に聖智の自性の事を說くを以てなり。我は衆生の無始時より以來、有に計著するが爲に、寂靜の法に於いて聖事を以て說き、其をして聞き已つて恐怖を生ぜず、能く如實に寂靜の空法を知り、惑亂の相を離れて唯識の理に入り、其の見る所の外法は、有にあらざることを知り、三解脫門を悟りて、如實の印を獲、法の自性を見て、聖の境界を了り、有無(等)の一切の諸著を遠離せしむ。』

【不生如幻分】『復た次に大慧よ、菩薩摩訶薩は、一切の諸法を皆悉く不生なりと成立すべからず。何となれば一切の法は本(來)有ること無く、又彼の宗は生相に因るを以てなり。復た次に大慧よ、一切の法は不生なり「と謂はば」、此の言は自ら壞す。何となれば彼の宗は待ありて生ずるを以てなり。又彼の宗は卽ち一切法の中に入る。そは不生の相も亦た不生なるを以てなり。又彼の宗は諸分にして成ずるを以てなり。又彼の宗の「有無の法は皆不生なり」とは、此宗にては卽ち一切法の中に入る。そは有無の相も亦た不生なるを以てなり。是の故に「一切の法は不生なり」

と〔言ふ〕、此宗は自ら壞す。諸分に過多く、展轉の因は異相なるが故に、應に是の如く立すべからず。不生の如く、一切法の空無自性も亦是の如し。大慧よ、菩薩摩訶薩は、應に一切の法は幻の如く夢の如しと說くべし。そは見れども見えず、一切皆是惑亂の相なるを以てなり。(又)、愚夫をして、恐怖を生ずる〔の念〕を除かしめむが爲なるを以てなり。大慧よ、凡夫は愚癡にして有無の見に墮す、彼に於いて驚恐を生じ、大乘を遠離せしむること莫れ。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『自性も無く說も無く、事もなく依處も無しとは、(是れ)凡愚の妄分別にして、死屍の如き惡覺なり。

一切の法は不生なりとは、外道の成立する所なり。彼が所有の生は緣の所成にあらざるが故に、〔斷滅の邪見なり〕。

智者は、「一切の法は不生なり」と分別せず、彼の宗は生相に因るが故に、覺者は便ち壞す。

譬へば目に翳あるものの、妄想して毛輪を見るが如し、諸法も亦た是の如く、凡愚の妄分別なり。

三有は唯假名のみ、實の法體ある無し、(凡愚は)此の假の施設に由りて、分別して妄に計度

す。

假名の諸の事相は、心識を動亂す、佛子は悉く(是を)超過し、遊行するに分別なきなり。

水なきに水相を取るは、これ渇愛に由りて起る、凡愚の法を見るも(亦た)爾り、諸聖は則ち然らず。

聖人の見は清淨にして、三解脱を生じ、生滅を遠離して、常に無相の境を行く。

無相の境を修行して(九)亦た復た有無なく、有無悉く平等なり、是の故に聖果を生ず。

云何が法の有無に[計著する]。云何が平等を成ずる。(謂く)若し心に法を了らざれば、內(身)外(境)ここに動亂し、了り已れば則ち平等にして亂相卽時に滅す。』

【九】但だ有を離るるのみならず、無相なるも亦た離るるを云ふ。

【無智是智分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、佛の所說の如きは、若し境界は但是れ假名にして、都て不可得なりと知らば、則ち所取なし。所取なきが故に亦た能取なし、能取所取二ながら無きが故に、分別を起さゞるを名けて智と爲すなり。世尊よ、何故に彼の智は境を得ざる。一切諸法の自相共相一異の義を了ること能はざるが故に得ずと言ふか。諸法の自相共相は種種不同にして、更に相隱蔽するを以て得ずと爲すか。山巖石壁簾幔帷帳

の覆隔する所となるが爲に得ずと爲すか。極遠極近老小盲冥にして諸根の不具なるが爲に得ずと爲すか。若し諸法の自相共相一異の義を了らざるが故に得ずと言はば、此れ智と名けず、應に是無智なるべし。そは境界あり、而も(其を)知らざるを以てなり。若し諸法の自相共相は、種種不同にして、更に相隱蔽するが故に得ずと言はば、これ亦た智に非ず。そは境を知るを以て智と名け、知らざるは〔智と〕名けざるを以てなり。若し山巖石壁簾幔帷帳の爲に覆隔せられ、(又は)極遠極近老小盲冥の爲に知らずんば、彼また智に非ず。(そは)境界あり、(而も)智の具足せざるが爲に知らざるを以てなり。』

佛の言はく、『此は實に是れ智なり、汝の說の如くにあらず、我が說く所は隱覆の說に非ず。我、「境界は唯是れ假名にして不可得なり」と言ふは、但是自心の所見なることを了ずるが故に、外法の有無の智慧は、畢竟して得ること無し。得ること無きが故に爾焰は起らず、三脫門に入りて智體も亦忘ず。一切の覺想は、無始より已來、凡夫の戲論熏習によりて、外法の若くは有、若くは無、(又は)種種の形相に計著するが如くならず。是の如くして知るを名けて、諸法は唯心の所現なることを了らず知らずと爲す。我我所を分別する境智に著して、外法は是れ有是れ無なりと知らず、其の心斷見の中に住するを以て、是の如きの分別を捨離せしめむが爲に、一切の法は

唯心の建立と說くなり。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、
『若し所緣あるに、智慧もて觀見せざれば、彼は無智にして、智にあらざるなり、是を妄計著と名く。
無邊と相互に隱すと、障礙と遠近と〔の爲に〕、智慧もて見ること能はずと(言はば)、是を名けて邪智と爲す。
老小の諸根冥する〔が爲め〕、實には境界あれども、〔其を知る所の〕、智慧を生ずる能はずと(言はば)、是を名けて邪智と爲す。

【宗說利他分】『復た次に大慧よ、愚癡の凡夫は、無始の虛僞邪惡の分別に幻惑せられ、如實及び言說の法を了る能はず、心外の相を計して方便の說に著し、淸淨眞實にして四句を離れたる法を修習する能はざるなり。』

大慧白して言さく、『然なり、然なり、誠に尊敎の如し。願くは我が爲に如實の法及び言說の法を說き、我及び諸菩薩摩訶薩をして、此の二法に於いて、善巧を得せしめ給へ。(そは)外道(及び)二乘の能く入る所にあらざればなり。』

佛の言はく、『諦かに聽け、(我)當に汝が爲に說くべし。大慧よ、三世の如來に二種の法あり。

謂く、(一)言說の法及び(二)如實の法(之れ)なり。言說の法とは、衆生の心に隨つて、種種なる方便の敎を說く〱を謂ふ。如實の法とは、謂く、修行者は心の所現に於いて諸の分別を離れ、一異俱不俱の品に墮せず、一切の心意意識を超過し、自覺聖智の所行の境界に於いて、諸の因緣に相應する見相を離る。(これ)一切の外道、聲聞(及び)緣覺の(如く)二邊に墮するもの丶知ること能はざる所なり。是を如實の法と名く。汝及び諸の菩薩は、當に此の二種の法を修學すべし。』爾の時に世尊は復た頌を說きて言はく、

『我は二種の法を說く、言敎と及び如實となり、敎法は凡夫に示し、(如)實は修行者の爲にす。

【世論戒愼分】 爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、如來は一時(一〇)盧迦耶陀の呪術詞論の、但能く世間の財利を攝取し、法利を得ざるものに、親近し承事し供養すべからずと說き給ふ。世尊よ、何故に是の如く說き給ふや。』

佛の言はく、『大慧よ、盧迦耶陀の有ゆる詞論は、但文句を飾りて凡愚を誑惑し、世間の虛妄の言說に隨順し、義の如くならず理に稱はず、眞實の境界に證入すること能はず、一切の諸法を

【一〇】 盧伽耶陀(Lokāyata)は、印度哲學中の順世派と稱する極端なる肉慾充足主義物質主義無神主義の名なれども、此にては只『世俗の間に普通に行はるると』云ふ意味に解して可なり。

覺了すること能はず、恆に二邊に墮して自ら正道を失し亦た他をして失せしめ、諸趣に輪廻して永く出離すること能はざるなり。何となれば諸法は唯心の所現なることを了らず、外境に執著して、分別を增すのみなるを以てなり。是の故に我は「世論の文句因喩は莊嚴にして、但愚夫を誑はし、生老病死の憂悲等の患を解脱せしむること能はず」と說くなり。大慧よ（一）釋提桓因は廣く衆論を解して自ら聲論を造れり。彼の世論者に一弟子あり、現じて龍身と作り、釋天宮に詣でて論宗を立し、要言すらく（二）「憍尸迦よ、我、汝と共に論ぜむ。汝もし我に如かずんば當に汝が千輻の輪を破るべく、我もし（汝に）如かずんば一一の頭を斷て以て所屈を謝せむ」と。是の語を說き已つて、即ち論法を以て帝釋を摧伏し、千輻の輪を（破）壞して還た人間に來れり。大慧よ、世間の言論は因喩もて莊嚴し、乃至能く龍形を現じ、妙なる文詞を以て諸天及び阿修羅をすら迷惑せしめ、其をして生滅等の見に執著せしむ、況んや人に於いてをや。是の故に大慧よ、「世論者に」親近し承事し供養すべからず。「蓋し」彼は能く苦の因を生ずるを以てなり。大慧よ、世論は唯身覺の境界を說くのみなり。大慧よ、彼の世論に百千の字句あり、後の末世の中に（於して）惡見乖離し邪衆崩散して、分れて多部と成り各自因を執す。大慧よ、餘の外道は能く

【一】釋提桓因（Śakrodevendra）とは帝釋天（Indra）の異名なり。
【二】憍尸迦（Kauśika）も亦帝釋天の異名なり。

教法を立するに非ず、唯盧迦耶陀は百千の句を以て、廣く無量の差別の因相を說く。〔而も彼が說く所は〕如實の理にあらず、亦た自ら是れ世法を惑はすことを知らざるなり。〕』

【佛法外道說異分】 爾の時に大慧、(佛に)白して言さく、『世尊よ、若し盧迦耶陀の所造の論は、種種の文字因喩もて莊嚴し、自宗に執著する〔が故に如實の法に〕非ず、これを外道と名くべくんば、世尊も亦世間の事を說き給ふ。謂く、種種の文句言詞を以て廣く說き給ふに、十方一切の國土の天人等衆く來り集會せり。〔此の時の所說は〕、是れ自智所證の法に非ず。〔然れば則ち〕世尊(の所說)も亦外道と同じからずや。』

佛の言はく、『大慧よ、我が〔敎は〕世說にあらず、亦(三)來去なし、我は諸法の不來不去を說く。大慧よ、來るものは集生し、去るものは壞滅す。不來不去これ卽ち名けて不生不滅と爲す。大慧よ、我が所說は、外道の分別に墮する(說)と同じからず。何となれば外法の有無に著することなく、唯自心〔の所現なること〕を了りて二取を見ず、相境を行せず分別を生せず、空、無相、無願の門に入りて、解脫するを以てなり。大慧よ、憶ひ〔起せば〕、我、ある時、一處に住したりしに、世論の婆羅門あり、我が〔住〕所に來至し、遽に我に問ふて言く、

【三】 彼の外道は人天の來去の相を說けども我は不來不去を說くとの意味なり。維摩の所謂善く來れり文殊よ、汝は不來の相にして來り、不見の相にして見るとは卽ち之なり。

「瞿曇よ、一切は是れ所作なるか」と。我、時に報じて言はく、「婆羅門よ、一切は所作なりとは是れ（一四）（最）初の世論なり」と。又我に問ふて言はく、「一切は非所作なるか」と。我、時に答へて言はく、「一切は非所作なり［と言ふは］、是第二の世論なり」と。彼復問ふて言はく、「一切は常なるか、一切は無常なるか、一切は生なるか、一切は不生なるか」と。われ時に答へて言はく、「是れ第六の世論なり」と。彼復た問ふて言はく、「一切は一なるか、一切は異なるか、一切は倶なるか、一切は不倶なるか、一切は皆種種の因縁によりて生を受くるか」と。われ時に答へて言はく、「是れ第十一の世論なり」と。彼復た問ふて言はく、「一切は有記なるか、一切は無記なるか。我ありや、我なきや。此世ありや、此の世なきや。他世ありや、他世なきや。解脱ありや、解脱なきや。是れ刹那なるか、刹那にあらざるか。虚空と、涅槃と、及び非擇滅とは、是れ所作なるか、非所作なるか。中有ありや、中有なきや」と。われ時に答へて言はく、「是の如きは是皆汝の世論にして、我が所説に非ざるなり。婆羅門よ、我は無始の戯論と諸悪の習氣に因りて三有を生ずと説く。（若し夫れ）唯是れ自心の所現なることを了せずして外法を取らば實に得べきなし。外道の説の如くんば、我と根と境との三、和合して［三有を］生ず。（而も）我が（説）は是の如くなら

【一四】以下外道の問案として世論の三十種を擧ぐ、而して今は其の最初第一なり。

す、我は因を說かず、無因を說かず、唯妄心に緣りて能〔取〕所取を〔計するを〕以て、緣起を說くのみ。汝及び餘の〔外道の〕我に取著する者の能く測る所にあらざるなり」と。大慧よ、虛空も涅槃も及び非擇滅も、但三數のみありて本(來)體性なし、何に況んや作と非作とを說かんや。大慧よ、爾の時に世論の婆羅門は、復我に問ふて言はく、「無明愛業を因緣と爲すが故に三有あるか。(或)は因無しと爲るか」と。我(答へて)言はく、「此の二も、亦た是れ世論なり」と。又我に問ふて言はく、「一切の諸法は皆自相共相に入るか」と。われ時に答へて言はく、「これ亦た世論なり。婆羅門よ、乃至少しにても心識の流動するありて外境を分別せば、皆これ世論なり」と。大慧よ、爾の時、彼の婆羅門は復た我に問ふて言はく、「〔世に〕頗る是れ世論にあらざる者ありや、否や。一切の外道の有ゆる詞論、種種の文句(及び)因喩の莊嚴は皆我が法中より出でざるものなし」と。われ答へて言はく、「有り、(こは)汝か所許にあらず、(而も)世の不許にあらず、種種の文句を說かざるにあらず、義理相應すれば不相應にあらず」と。彼また問ふて言はく、「豈に世の許す(所)にして世論に非ざるものあらんや」と。われ答へて言はく、「有り、但汝及び一切の外道の能く知る(所)にあらず。何となれば〔汝等は〕外法に於いて、虛妄に分別して執著を生ずるを以てなり。若し能く有無等の法は、一切みな是れ自心の所現なることを了達せば、分別を生せず

外境を取らず、自處に於いて住することを得む。自處に住すとは是れ不起の義なり。何に於いてか不起なる。謂く分別を起さざるなり。此は是れ我が法にして汝が有する所にあらざるなり。婆羅門よ、略して之を言へば、何處かの中に隨つて心識往來し死生求戀し、若くは受、若くは見、若くは觸、若くは住〔に於いて〕種種の相を取り、和合相續して、愛と因とに於いて計著を生ずるは、皆(これ)汝が世論にして我が法にあらざるなり」と。大慧よ、世論の婆羅門は是の如きの問を作せしに、我は是の如く答へき。〔然るに彼は〕我が自宗の實法を問はずして、默然として去り、下の如く念ふて言はく、「沙門瞿曇は尊重すべきなし、(彼は)一切の法は、無生なり無相なり、無因なり無緣なり、唯これ自心分別の所見のみ、若し能くこれを了らば分別は生ぜずと說く」と。大慧よ、汝も今亦た復た我に此の義を問へ、「何故に諸の世論に親近するものは、唯財利を得て法利を得ざるか」と。』

【攝受可不分】大慧白して言さく、『言ふ所の財法とは是れ何等の義なるか。』

佛の言はく、『善い哉、汝は卽ち能く未來の衆生の爲に是の義を思惟す。諦聽せよ、諦聽せよ、(我)當に汝が爲に說くべし。大慧よ、謂ゆる財とは、觸るべく受くべく取るべく味ふべし。〔そは人をして外境に著し二邊に墮在し、貪愛と生老病死の憂悲苦惱を增長せしむ。我及び諸佛

は(此を)說いて財利と名く。これ世論に親近する者の獲得する所なり。何をか法利と云ふ。謂く法は是れ心なることを了りて、二無我を見、相を取らず、分別あるなく、善く諸地を知りて心意識を離れ、一切の諸佛の共に灌頂する所となり、十無盡の願を具足し受行し、一切の法に於いて悉く自在を得る、是を法利と名く。是を以て一切諸見の戲論分別に墮せず、常に二邊を斷ずるなり。大慧よ、外道の世論は、諸の癡人をして、二邊に墮在せしむ。〔二邊とは〕、謂く常及び斷(卽ち之れ)なり。無因論を受けては、卽ち常見を起し、因の壞滅を以ては、卽ち斷見を生ず。われ生住滅を見ざるを說いて、法利を得ると名く。是を財法の二差別の相と名く。汝及び諸の菩薩摩訶薩は應に勤めて觀察すべし。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『(我は)衆生を調伏し、攝受し、戒を以て諸の惡を降し、智慧を〔以て〕諸の〔邪〕見を滅ぼし、解脫を增長することを得。

外道の虛妄の說は、皆これ世俗の論なり。(彼等は)作と所作とを橫計して、自ら〔宗とする所を〕成立すること能はず。

唯わが(立つる所の)一宗のみは、能所に著せず、諸弟子の爲に說いて、世論を離れしむ。能取所取の法は、唯心にして所有なく、二種皆心の現ずる〔所にして〕、斷常ともに不可得

なり。
少も心の流動するあらば、是れ即ち世論と爲す。分別を起さざるものにして、〔初めて〕自心を見む。
來とは事の生ずる〔を言ひ〕、去とは事の現ぜざる〔を謂ふ〕。明かに來去を了知せば、分別は(遂に)起らざるなり。
有常と無常と、所作と無所作と、此世と他世等と〔を説く〕は、皆これ世論の法なり。』

【内外涅槃分】　爾の時に大慧菩薩摩訶薩は復た佛に白して言さく、『世尊よ、佛は涅槃を説き給ふ。何等の法を説いてか、名けて涅槃と爲し給ふ。而して(又)諸の外道は〔何等の法を説いてか〕種種に分別して〔涅槃と爲すか〕』佛の言はく、『大慧よ、諸の外道の分別する涅槃の如きは、皆涅槃の相に隨順せず。諦聽せよ、諦聽せよ、(我)當に汝が爲に説くべし。大慧よ、(一五)或は外道あり、法の無常を見て境界を貪らず、蘊界處を滅して心心所の法をも現在前せず、過(去)現(在)未來の境界を念はず、燈の盡くるが如く、種の敗するが如く、火の滅するが如くにして、諸取起らず分別生ぜざるを涅槃なりと想

【一五】 以下大乘佛教以外の涅槃論を列擧して之を批評し破斥するなり。第一に小乘の涅槃論を擧ぐ。

へり。大慧よ、壞を見るを以て名けて涅槃と爲さず。或は謂く(一六)方より方に至るを涅槃を得と名くと。(一七)〔或は謂ふ〕、境界の想を離るること猶ほ風の止むが如し、〔是を涅槃となすと〕。或は謂ふ、能覺所覺を見ざるを名けて涅槃と爲すと。或は〔諸法〕を分別して常無常の見を起さざるを涅槃を得と名くと。或は説をなすものあり、諸相を分別して苦を發生す、而も自心の所現なることを知る能はず、知らざるを以ての故に相を怖畏して無相を求め、深く愛業を生じ執つて、涅槃と爲すと言ふ。或は謂く、内外の諸法は、自相共相〔ともに〕、(過)去(未)來現在〔の三世に亙りて〕不壞の性あることを覺知するを涅槃なりと想ふと。或は我、人、衆生、壽命及び一切の法は壞滅あることなしと計するを涅槃なりと想ふと。復た外道あり、智慧あるなく、(唯)自性及び(一八)士夫のみあり、(一九)求那轉變して一切の物と作ることを計して以て涅槃と爲す。或は外道あり福と非福の盡くるを計し、或は智慧に由らずして、諸の煩惱の盡くるを計し、或は自在は是れ實の作者なりと計して以て涅槃と爲す。或は謂く衆生は展轉して相生

【一六】 宋譯にも唐譯にも從方の二字なけれど今は魏譯に隨つて『方より』を加ふ。此は外道中の方論師の説。其要に謂く、最初に方を生じ、方より人を、人より天地萬物を生ず、天地も人も滅すれば還た方に歸す。是故に萬有の歸する所を涅槃と見たるものなり。

【一七】 此は外道中の風仙論師の説なり。

【一八】 士夫とは數論派にて主張する萬有成立の二元の一なる神我(Puruṣa)の異譯なり。

【一九】 求那(Guṇa)とは德と譯す。現代語にて云へば『事物の性質』のことなり。

ず、此を以て因と爲す更に異因なしと。彼は無智なるが故に〔正理〕を覺了すること能はず、了ずること能はざるが故に執して涅槃となすなり。或は諦道を證する虛妄分別を計して涅槃と爲す。或は求那と求那とは共に和合して一性なり異性なり倶なり不倶なりと計し執して涅槃と爲す。或は諸物は自然より生ずと計するものあり。〔卽ち其の說に謂く〕孔雀の文彩、棘針銛利、(及び)寶の生處より種種の寶を出すなど、是の如き事(物)は、誰か能く作るものぞと、卽ち自然を執して以て涅槃と爲すなり。或は謂く、能く二十五諦を解すれば卽ち涅槃を得と。或は說をなすものあり、言く、時は世間を生ず〔故に〕時は卽ち涅槃なりと。或は有物を執して以て涅槃と爲し、或は無物を計して以て涅槃と爲す。或は有物無物を計著して涅槃と爲す者あり。或は諸物と涅槃とは別なしと計して涅槃と想ふ者あり。

大慧よ、〔我が涅槃は〕また彼の外道の所說に異なるものあり。一切智を以て大師子吼して說かん、〔一切の諸法は〕、能く唯心の所現なることを了達して、外境を取らず、四句を遠離して、如實の見に住し、二邊に墮せずして、能取所取を離れ、諸量に入らず眞實に著せず、聖智の現はす所の證法に住し、二無我を悟りて二煩惱を離れ、二種の障を淨め轉じて諸地を修して佛地に入り、如幻等の諸の大三昧を得て永へに心意及び意識を超ゆ、(是を)涅槃を得と名く。大慧よ、彼

の諸の外道の虚妄なる計度は、理の如くならず智者の棄つる所なり。(彼等は)皆二邊に墮して涅槃の想を作せり。此に於いて若くは住若くは出あるなし。彼の諸の外道は皆自宗に依つて妄覺を生じ、理に違背して「涅槃を」成就する所なく、唯心意をして馳散往來せしめ、悉く涅槃を得る者あることなし。汝及び諸の菩薩は宜しく應に遠離すべし。』

爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『外道の涅槃の見は、各分別を異にす。彼(等)は唯これ妄想のみにして、解脱の方便なきなり。

諸の方便を遠離し、無縛の處に至らずして、解脱の想を作す、而も實には解脱なし。

外道の成立する所は、衆智各趣を異にす、彼(等)は悉く解脱なし、愚癡の妄分別のみ。

一切の(愚)癡なる外道は、妄りに作と所作とを見て、悉く有無の論に著す、是の故に解脱なきなり。

凡愚なるものは、分別を樂ひ、眞實の慧を生ぜず。言說は三苦の本にして、眞實は苦を滅するの因なり。

譬へば鏡中の像の如く、現ずと雖も實に非ず、凡愚は習氣の心鏡に於いて、二ありと見るな

り。

〔諸法は〕唯心の〔所〕現なることを了ぜざるが故に二の分別を起す、若し唯これ心なることを知らば、分別は卽ち生ぜざるなり。

心は卽ち是れ種種〔の法〕なれども、（而も）相と所相とを遠離す、（彼の）愚（夫）の分別する所の如きは、見ると雖も而も（實には）見ること無きなり。

三有は唯（これ）分別にして、外境は悉く有ること無く、妄想〔のため〕に種種に現ずれども、凡愚は（之を）覺ること能はざるなり。

諸經に分別を說くは、唯これ名字を異にするのみ、（されど）若し言語を離るれば、其義また不可得ならむ。』

卷の第五

無常品第三の二

【如來自性分】 爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、願くは(一)如來(二)應(供)正等覺の自覺の性を說き、我及び諸の菩薩摩訶薩をして、善巧を得て自ら悟り、他をも悟らしめ給へ。』

佛の言はく、『大慧よ、汝が所問の如く、(我)當に汝が爲に說くべし。』

大慧言さく、『唯、世尊よ、如來、應(供)、正等覺「の自覺」の性は(三)作と爲んか非作と爲んか、果と爲んか因と爲んか、相と爲んか所相と爲んか、說となさんか所說と爲んか、覺となさんか所覺と爲さんか、是の如きの(名辭に)異なるとせんか異ならずとせんか。』

【一】 如來自性とは、法身を云ふ法身とは宇宙の本體なり。或は之を眞如法性とも云ふ。

【二】 應供も正等覺も如來の十號の一なり。應供は梵語(Arhat)の譯名にて他より施さるゝ供養に應ずる資格ある人と云ふ義なり。正等覺も亦梵語の(Sammyaksambudha)の譯語にて或は正徧智とも云ふ中道を觀ずるを正と云ひ、三諦普く照すを徧と云ひ、三諦を知るが故に知と云ふ。斯る註釋には更に註釋せざれば普通の人には解らざるべし。要

佛の言はく、『大慧よ。如來、應(供)正等覺は、作に非ず非作にあらず、果に非ず因に非ず、相に非ず所相に非ず、說に非ず所說に非ず、覺に非ず所覺に非ざるなり。何となれば俱に過あるを以てなり。大慧よ、若し如來は是れ作ならば、則ち是れ無常なり。若し是れ無常ならば、一切の㊃作法は、應に是れ如來なるべし。我及び諸佛は皆可すに忍びざるなり。若し作法に非ずんば、則ち體性なく、所修の方便は、悉く空となり。無益とならむ。(これ)兎の角(又は)石女の子に同じ。そは因によつて成るにあらざればなり。若し因にも非ず、果にも非ずんば、則ち有にも非ず無にも非ず。若し有にも非ず無にも非ずんば、則ち四句を超過す。四句を言ふは但世間に隨ふの言說なり。若し四句を超過せば、唯言說あるのみ、則ち石女の如し。

大慧よ、石女の兒とは、唯言說あるのみにして四句に墮せず。墮せざるを以ての故に度量す可らず。諸の有智の者は應に是の如く一切の如來の有らゆる句義を知るべし。大慧よ、我が所說の諸法無我とは、諸法の中に我性あること無きを以ての故に無我と說くなり。是諸法の自性なきを

するに正しくして凡ての場合な盡せる智慧ある人卽ち全知者と云はんが如しと思へば大過なし。

【三】 作とは修持造作の意なり卽ち佛の自覺の性は修行の功を積んで作られたるものなりや、將た又修行の功も何にも要せず先天的に存するもの卽ち非作のものなりや、と云ふ問ひなり。

【四】 作法とは造られたる物と云ふ意味なり。佛教哲學には多くの場合に於いて法は物の義に用ゐらる。諸法無我と云ふ時の法は卽ち之れなり。

言ふに非ず。應に知るべし、如來の句義も亦然ることを。大慧よ、譬へば牛に馬性なく、馬に牛性なきが如く、自性なきに非ず、一切の諸法も、亦復た是の如く、自性なきに非ず。而も非有にして卽ち有なり。(こは)諸の凡愚の能く知る所に非ず。何となれば分別を以ての故に知らざるなり。一切の法の空なるも、一切の法の無生なるも、一切の法の無自性なるも悉く亦た是の如し。大慧よ、如來と蘊とは異に非ず不異に非ず。若し不異なれば應に是れ無常なるべし。(そは)五蘊の諸法は是れ作られたるものなるを以てなり。若し異ならば、牛の二角の如く、異不異あらむ。(そは)互に相似なるが故に異ならず、長短別なるが故に異あり。牛の右角は左に異なり、左角は右に異なり、長短同じからず、色相各別なるが如し。然も亦不異なり。蘊に於けるが如く、界處等に於ける一切の法も亦是の如し。大慧よ、如來とは解脫(の德)に依つて說く。如來と解脫とは異にあらず不異にあらず。若し異ならば如來は便ち色相と相應せむ。色相と相應せば卽ち是れ無常ならむ。若し不異ならば、修行者の(五)得相は應に差別なかるべし、然も差別あるが故に不異にあらず。是の如く知と所知とは異に非ず不異に非ず。若し異に非ず不異に非ずんば、則ち常に非ず無常に非ず、作に非ず所作に非ず、爲に非ず無爲に非ず、覺に非ず所覺に非ず、相に非ず所相に非ず。蘊に非ず異蘊に非ず、說に非ず

【五】得相の二字は宋譯による
唐譯には只見とあり。

所説に非ず、一に非ず異に非ず、俱に非ず不俱に非ず。是の義を以ての故に、一切の量を超ゆ。一切の量を超ゆるが故に、唯言説のみあり。唯言説のみあるが故に、則ち生ある無きが故に則ち滅ある無し。滅ある無きが故に則ち虚空の如し。大慧よ、虚空は作に非ず所作に非ず。作に非ず所作に非ざるが故に攀縁を遠離す。攀縁を遠離するが故に一切の諸の戲論の法を出過す。一切の諸の戲論の法を出過するは則ち是れ如來なり。如來は卽ち是れ正等覺の體なり。正等覺者は、永へに一切諸根の境界を離る。』爾の時に世尊は重ねて頌を説き言はく、

『〔如來は〕諸根の量を出過し、果に非ず亦た因に非ず、相及び所相等、是の如きは悉く皆離れ給ふ。

蘊縁と正覺との一異は、能く見るものなし、既に見者なければ、云何が分別を起さむ。

作に非ず非作に非ず、因に非ず非因に非ず、蘊に非ず不蘊に非ず、亦餘物を離れず。

彼の分別の見の如く、一法の體あるに非ず、(當に知るべし)、また是れ無に非ず、諸法の性も是の如し。

有を待つが故に無を成じ、無を待つが故に有を成ず。無既に取る可らずんば、有も亦説くべからざるなり。

我の無我を了せずして、但だ言語に著すれば、二邊に溺れて、自らを壞し世間を壞せむ。若し能く此の法を見ば、則ち一切の過を離れむ、是を名けて正觀にして、大導師を毀たざるものと爲す。』

【如來異名分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、佛經中に、不生不滅を分別し攝取するが如きは、此れ卽ち如來の異名を言へるものなりや。世尊よ、願くは我が爲に說き給へ。不生不滅ならば、此れ則ち無法なり。云何ぞ是を如來の異名なりと說かん。世尊の說き給ふが如くんば、一切の諸法は不生不滅なり。當に知るべし、此れ則ち有無の見に墮することを。世尊よ、法もし不生ならば、則ち取る可らず、少法あるなし、誰か是れ如來なる。唯願くは世尊よ、我が爲に宣說し給へ。』

佛の言はく、『諦かに聽け。(我)當に汝が爲に說くべし。大慧よ、我が說く如來は是れ無法に非ず。亦不生不滅を攝取するに非ず。亦緣を待たず亦義なきに非ず。我は無生は卽ち是れ如來の意生法身の別名なりと說く。一切の外道も聲聞も獨覺も(及び)七地の菩薩も其の義を了せざるなり。大慧よ、譬へば帝釋地及び虛空乃至手足の、一一の物に隨つて各〻多名あり、(而も)名多きを以て多體あるに非ず、亦體なきにもあらざるが如し。大慧よ、我も亦是の如く。此の娑婆世界

に於いて、三阿僧祇百千の名號あり。諸の凡愚の人は聞くと雖も是れ如來の異名なることを知らざるなり。其の中或は(我を)如來なりと知る者あり、(或は我を)無師なりと知る者あり、(或は)導師なりと知る者あり、(或は我を)勝導なりと知る者あり、(或は我を)普導なりと知る者あり、(或は)是れ佛なりと知る者あり、(或は)牛王なりと知る者あり(或は)梵王なりと知る者あり、(或は)〔六〕毘紐王なりと知る者あり、(或は)自在なりと知る者あり、(或は)是れ勝なりと知る者あり、(或は)〔七〕迦毘羅なりと知る者あり、(或は)眞實邊なりと知る者あり、(或は)無盡なりと知る者あり、(或は)瑞相なりと知る者あり、(或は)風の如しと知るものあり、(或は)火の如しと知るものあり、(或は)〔八〕倶毘羅の如しと知る者あり、(或は)月の如しと知るものあり、(或は)日の如しと知る者あり、(或は)王の如しと知る者あり、(或は)仙の如しと知るものあり、(或は)〔九〕戍迦なりと知る者あり。(或は)〔一〇〕因陀羅なりと知る者あり、(或は)明星なりと知る者あり、(或は)大力なりと知る

【六】毘紐(Visnu)とは現代印度教の一派なる毘紐宗に於て最上神として崇拜す。されど吠陀時代に於いては其は第一級の神にあらずして寧ろ二流以下の神なりき。マハー・バーラタ及びプラーナ書によれば其は古代のプラジャパティ即ち創造主の位置を占有せり。

【七】迦毘羅(Kapila)は普通には數論哲學の祖なれども、此處にては「シュヴェーターシュヴァタラ・ウパニシャッド」(五、二)に於けるが如く、[illegible]たる金胎神(Hiranyagarbha)の異名と見る方妥當ならん。

【八】倶毘羅(Kubera)は毘沙門天の一名。

【九】戍迦(Suka)は鸚鵡の義にして、時に或は乾闥婆の王名

者あり、(或は)水の如しと知るものあり、(或は)無滅なりと知るものあり、(或は)無生なりと知る者あり、(或は)性空なりと知るものあり、(或は)眞如なりと知るものあり、(或は)是れ諦なりと知る者あり、(或は)實性なりと知るものあり、(或は)實際なりと知るものあり、(或は)法界なりと知るものあり、(或は)涅槃なりと知るものあり、(或は)常住なりと知るものあり、(或は)平等なりと知るものあり、(或は)無二なりと知るものあり、(或は)無相なりと知る者あり、(或は)寂滅なりと知る者あり。(或は)具相なりと知るものあり。(或は)因緣なりと知るものあり、(或は)佛性なりと知るものあり、(或は)教導なりと知るものあり、(或は)解脱なりと知るものあり、(或は)道路なりと知る者あり、(或は)一切なりと知る者あり、(或は)最勝なりと知るものあり、(或は)意成身なりと知る者あり、(我は)是の如き等の三阿僧祇百千の名號を滿足して不增不滅なり。(而して)此の「世界」及び餘の諸の世界の中に於いて、能く我を、水中の月の如く、不入不出なりと知るものあり。但諸の凡愚は心、二邊に沒して能く(之を)了解すること能はざるなり。然も亦た(彼等は我を)尊重し承事し供養すれども(尚ほ)善く(我が)名字句義を解せず、言教に執著して眞實に昧く、無生無滅は是れ體性なしと謂ふ。(蓋し)是れ佛の差別の名

或は婆羅門苦行者の名又は佛陀の異名、或は武士の名として用ゐらる。【一〇】因陀羅(Indra)は帝釋天の異名。

號は、(二)因陀羅釋揭羅等の如きことを知らず、言教を信じて眞實に昧く、一切の法に於いて言の如くに義を取るを以てなり。』

【言義差別分】『彼の諸の凡愚は、義は言說の如く、義と[言]說とは異なし、何となれば義は體なきが故なりと言へり。是の人は言音の自性を了せず、言は卽ち義にして、義と體とは別なしと謂ふ。大慧よ、彼の人は愚癡にして、言說は是れ生、是れ滅なるも、義は生滅にあらざることを知らざるなり。大慧よ、一切の言說は、文字に墮すれども、義は則ち墮せず。そは有を離れ無を離れ、生なく體なきを以てなり。大慧よ、如來は文字に墮するの法を說き給はず。(そは)文字は有無不可得なるが故なり。唯文字に墮せざるものを除く。大慧よ、若し人あり法を說いて文字に墮するあらば、皆これ誑說なり。何となれば諸法の自性は文字を離るるを以てなり。是の故に大慧よ、我が經中に、我は諸佛及び諸菩薩と與に一字を說かず一字を答へずと說く。何となれば一切の諸法は文字を離るるが故に、義に隨はずして分別して說くに非ざればなり。大慧よ、若し說かずんば教法は則ち斷せむ。教法斷すれば則ち聲聞緣覺菩薩(及び)諸佛なからむ。若し總て無ければ、誰か說き誰の爲にかせむ。是の故に大慧よ、菩薩摩訶薩は、應に文字に著せず、宜に隨つて說法すべし。

【二】因陀羅(Indra)も釋揭羅(Śakra)も同一神の異名なり。

我及び諸佛は、皆衆生の煩惱と(了)解と欲(樂)の種種不同なるに隨つて、〔彼等の〕爲に開演し、諸法は自心の所見にして、外に境界あるに非ざることを知らしめ、二の分別を離れ、心意識を轉せしむ。これ聖自證の處を成立せんが爲には非ざるなり。大慧よ、菩薩摩訶薩は應に義に隨ふべく文字に依ることなかるべし。文字に依る者は惡見に墮し、自ら宗とする〔所に〕執著して言說を起し、善く一切の法相及び、文辭章句を了〔解〕すること能はず。既に自ら損壞し、亦た他を壞し人をして心に悟解を得せしむること能はざるなり。若し善く一切の法相(及び)文辭章句の義を知り悉く皆通達せば、則ち能く自身をして無相の樂を受けしめ、亦た他をして大乘に安住せしむ〔ることを得む〕。若し能く他をして大乘に安住せしめば、則ち一切の諸佛聲聞緣覺及び諸菩薩の攝受する所とならむ。若し諸佛聲聞緣覺及び諸菩薩の攝受する所となることを得ば、則ち能く一切の衆生を攝受せむ。若し能く一切の衆生を攝受せば、則ち能く一切の正法を攝受せむ。若し能く一切の正法を攝受せば、則ち佛種を斷せざらしめむ。若し佛種を斷せずんば、則ち勝妙の處を得む。大慧よ、菩薩摩訶薩は勝妙の處に生じて、衆生をして大乘に安住せしめんと欲し、十自在力を以て諸の色像を現じ、其宜しき所に隨つて、眞實の法を演べ給ふ。眞實の法は、無異無別不來不去にして、一切の戲論皆悉く息滅す。是の故に大慧よ、善男子善女人は應に言の如く義に

執著すべからず。何となれば眞實の法は文字を離るゝを以てなり。大慧よ、譬へば人あり、指を以て物を指さんに、小兒は指を觀て物を觀ざるが如く、愚癡の凡夫も亦復是の如し。言說の指に隨つて執著を生じ、命盡るに至るまで、文字の指を捨てず、第一義を取ること能はざるなり。大慧よ、譬へば嬰兒の應に熟食を食はしむべきに、人あり、成熟の方便を解せず、生を食はしめば、則ち狂亂を發するが如く、不生不滅「の深義を領せしむるも」亦復是の如し。方便を以て修治せざれば、則ち不善を爲る。是故に宜しく應に方便を修し、言說に隨つて指端を觀るが如くすること莫るべし。大慧よ、實義は微妙寂靜にして、是れ涅槃の因なり。言說は妄想と合して生死に流轉す。大慧よ、實義は多聞より得らる。多聞とは、謂く、義を善くすることにして、言說を善くすることにあらず。義を善くするとは、一切の外道の惡見に隨はざることとなり。身自ら隨はざるのみならず、他をして隨はしめざる是則ち名けて「義に於いて多聞なり」と曰ふ。義を求めむと欲するものは、當に親近すべく、此と相違し文字に著するものは宜しく速に捨離すべし。』

【不生滅異分】 爾の時に大慧菩薩摩訶薩は佛の威神「力」を承けて、復た佛に白して言さく、「世尊よ、如來の不生不滅を演說し給ふは奇特なるに非ず。何となれば一切の外道も亦【三】作者は不生

【三】作者とは世界の創造主のことなり。

不滅なりと說き、世尊も亦虛空と涅槃と及び非數滅とは不生不滅なりと說き給へばなり。(又)外道は作者の因緣によりて世間を生ずと說き、世尊も亦無明愛業より諸の世間を生ずと說き給ふ。倶に是れ因緣にして但名の別あるのみ。外物の因緣も亦復是の如し。是の故に佛の說と外道の說とは差別あることなけむ。外道は說いて言はく、「微塵、勝妙、自在(及び)生主等の如き(三)九物は不生不滅なり」と。世尊も亦、「一切の諸法は不生不滅にして、若くは有若くは無みな不可得なり」と說き給ふ。世尊よ、(外道は又)(四)大種は不壞なり、其の自相は不生不滅なるを以て、諸趣に周流して自性を捨てず(と言ふ)。世尊の分別は稍(彼等の所說と)變異ありと雖も、一切(みな)外道の已に說かざるは無し。是の故に佛法は外道に同じ。若し不同ならば、願くは佛よ、我が爲に何の所をか佛說を以て勝れりと爲すかを演べ給へ。若し別異なくんば、外道は卽ち佛「道」ならむ。「そは彼も」亦不生不滅を說くを以てなり。世尊は常に一世界中には多佛あることなしと說き給ふ。(而も)向に說く所の如くんば、是れ則ち應に「多佛」あるべし。(何となれば外道と佛とは差別なければなり)。』

佛の言はく、『我が說く所の不生不滅は、外道(所說)の不生不滅不生無常論と同じからず。

【三】九物とは微塵と勝妙と自在と梵天と時と方と虛空と四大と神我となり是等は皆外道哲學の各派に於て宇宙の本體又は根源とするものなり。

【四】大種とは地水火風の四大種なり。

何となれば外道の説く所は、「實の性相あり不生不變なり」と「言へども」、我は是の如く有無の品に墮せざるを以てなり。我が所説の法は、有に非ず無に非ず、生を離れ滅を離る。云何が無に非ざる。（そは）幻夢の色の種種に見ゆるが如くなるを以てなり。云何が有に非ざる。色相の自性は是れ有にあらず、（一五）見にして不見、取にして不取なるを以てなり。是の故に我は、一切の諸法は有に非ず無に非ずと説くなり。若し「諸法は」唯是れ自身の所見なることを覺り、自性に住して分別を生ぜずんば、世間の所作は皆悉く永く息まむ。分別は是れ凡愚の事にして賢聖（の事）にあらず。大慧よ、妄心は不實の境界を分別す、乾闥婆城の如く（又は）幻人の如し。大慧よ、譬へば小兒の乾闥婆城又は幻人の商賈に出入するを見て、迷心もて分別して實事ありと言ふが如く、凡愚の見る所の生も不生も有爲も無爲も亦悉く是の如し。幻人の生の如く、幻人の滅（の）如し。幻人は其の實は不生不滅なり、諸法も亦爾り、（みな）生滅を離る。大慧よ、凡夫は虚妄に生滅の見を起す、（されど）諸の聖人は然らず。虚妄と言ふは法性の如くならずして顛倒の見を起す（を謂ふ）。顛倒の見とは法の有性を執して寂滅を見ず、寂滅を見ざるが故に虚妄の分別を遠離する能はざる「を謂ふ」。是の故に大慧よ、無相の見は勝る。是れ相見に非ず。相は是れ生

【一五】見不見取不取とは如幻の色相に現ずと雖も實は現にあらず、吾人の感官もて認取すと雖も觀取する實物の存在するに非ざるを云ふなり。

の因、若し有相なくんば則ち分別なし。不生不滅は則ち是れ涅槃なり。大慧よ、涅槃と言ふは如實の處を見、分別(及び)心心所の法を捨離し、如來の內證の聖智を獲るにあり。我は此を是れ寂滅涅槃とは說くなり。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『有生の執を除き、無生の義を成立せしめむが爲に、我は無因論を說く、〔これ〕愚(夫)の能く了る所に非ず。

一切の法は無生なり、〔而も〕亦是れ無法に非ず、乾〔闥婆〕城の〔如く、或は〕幻夢の如し、有りと雖も、而も因なきなり。

〔諸法〕は云何が空、無生、無性なりや、(願くは)我が爲に說き給へ。〔曰く外〕諸の和合の緣を離れ、〔內〕智慧の見る能はざる〔所〕、是の故に我は空、無生、無性と說くなり。

(二六)一一の緣和合して、現ずと雖も而も有に非ず、(二七)分析するに和合なし、〔故に〕外道の見の如くに非ず。

夢及び垂髮と、野馬と乾〔闥〕婆城との、無因にして妄に現ずるが如く、世事みな是の如し。

〔我は〕有因論を折伏して、無生の旨を申述す。無生の義もし存せば、法眼恒に滅せず、われ

(二六) 此句は外道の常見を破す。

(二七) 此句は外道の斷見を斥く。

無因論を說けば、外道咸な驚怖す。』

〔爾の時に大慧は偈を以て問ふて曰く〕

『〔諸因は必ず〕何らのをか因とする所(ありて生じ)、復何等かの故を以て生じ、何處かに於て和合す。而るを〔佛は何故に〕無因論を作し給ふや。』

〔爾の時に世尊も復た偈を以て答へたまはく、〕

『〔われ〕有爲の法を觀察するに、有因に非ず無因に非ず、〔故に〕彼の生滅論者の所見は是より滅せむ。』

〔爾の時に大慧は偈を以て問ふて曰く、〕

『無なるが故に不生とせんか。衆緣を待つて〔不生の法あり〕とせんか、名あるも義なしとせんか、願はくは我が爲に說き給へ。』

〔爾の時に世尊、復偈を以て答へたまはく、〕

一法無くして不生なるに非ず、亦た緣を待つて〔別に不生の法〕あるに非ず、物あつて名くるに非ず、亦名けて義なきに非ず。

此の無生の相は、一切の諸の外道、聲聞及び緣覺、(並びに)七地の(菩薩の)所行に非ず。

諸の因緣を遠離し、能作者あるなく、唯心の建立する所なり、我は是を無生なりと說く。

諸法は因生に非ず、無に非ず亦有に非ず、能所の分別を離る、我は是を無生なりと說く。

其の心に外物の有と非有と（の相）を取ること無くむば、一切の〔邪〕見咸く斷ぜむ、此を是れ無生の相〔とは謂ふ〕なり。

空（或は）無性等の句は、其の義みな是の如し、空を以ての故に空なるに非ず、無生の故に空と說くなり。

因緣はともに集會す、是の故に生滅あり、因緣分散すれば、卽ち生滅あることなし。

若し諸の因緣を離るれば、則ち更に法あるなし、一性及び異性は凡愚の分別する所なり。

「不生の法の（一八）有無倶非（を說く）も亦復然り。唯衆緣の會する〔處に〕起滅ありと見るを除く。

俗に隨つて假りに言說すれば、因緣は遞に鉤鎖となる、若し因緣の鎖を離るれば、生の義は得べからず。

我は唯鉤鎖を說く、生なきが故に不生なり、（これ）諸の外道の過を離る、凡愚の了る所にあ

【一八】有無倶非。別に不生法なるもの有りと見るも、或は無しと見るも、又は不生の法は有にして無なり（倶）なりと觀ずるも、若くは不生の法を有に非ず無に非ずと見るも、皆これ外道の妄見なりとなり。

らざるなり。

若し縁の（一九）鉤鎖を離れて別に生法あらば、是れ則ち無因論にして鉤鎖の義を破壊す。

（二〇）燈の能く物を照すが如く、若し鉤鎖の現ずるも〔亦〕然らば、これ則ち鉤鎖を離れて別に諸法あらむ。

無生なれば則ち無性なり、體相は（猶ほ）虚空の如し、鉤鎖を離れて法を求むるは、愚夫の分別する所なり。

復た餘の無生あり、衆聖の得る所の法なり。彼の〔四相の〕生に〔即〕して無生なるもの、是れ則ち無生忍なり。

一切の諸の世間は、是の鉤鎖に非ざるは無し。若し能く是の如く解せば、此の人は心に定を得む。

無明と愛業とは、是れ即ち内の鉤鎖なり。種子（及び）泥輪等を名けて外〔の鉤鎖〕と爲す。

若し他法あり、而して因縁より生ずと言はゞ、鉤鎖の義を離る、此則ち教理に非ざるなり。

生法もし非有ならば、彼れ誰が爲にか因縁とならむ。展轉して相生す、此は（則ち）是れ因縁の義なり。

〔一九〕鉤鎖とは、因縁の連續せる狀態を喩へたるなり。

〔二〇〕燈を生法に喩へ、像を諸法に喩へ、暗中の像の燈に因つて顯はるゝを、諸法の生法に因つて成ずるに喩へたるなり。

堅濕煖動等を「生因となすは」、凡愚の分別する所なり。但緣のみにして、「別に生」法あるなし、故に自性なしと說くなり。

(譬へば)醫の衆病を療ずるが如く、其の「本」論に差別なし。病同じからざるを以ての故に、方藥に種種の殊あるのみ。

我は諸の衆生の煩惱の病を滅除せんが爲に、其の根の勝劣を知りて、諸の法門を演說す。

煩惱の根異り、而して種種の法あるにあらず、唯一大乘ありて、八支の道清凉なり。』

【七種無常分】　爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、一切の外道は妄に無常を說く、世尊も亦「諸行は無常にして是れ生滅の法なり」と言ふ。未だ知らず、孰れか邪にして孰れが正なるか、復た謂ゆる無常に幾種あるかを。』

佛の言はく、『大慧よ、外道の說に七種の無常あり、是れ我が法に非ず。何等をか七と爲す。謂く(一)或は說あり、「始め起りて卽ち捨す是を無常と名く。そは生じ已れば生ぜず、無常の性なればなり」と。(二)或は言はく、「形處の變壞これを無常と名く」と。(三)或は謂ふ、「色卽ち(これ)無常なり」と。(四)或は謂ふ、「色の變異これを無常と名く。一切の諸法は相續して斷ぜず能く變異して自然に滅に歸せしむ。猶ほ乳酪の前後變異あるが如く、見る可らずと雖も、然も法

中に在りて一切の法を壞す」と。(五)或は物の無常を說き、(六)或は(二)物無物の無常を說き、(七)或は不生無常と說いて、偏く一切諸法の中に住すと「言ふ」。

其の中物無物無常とは、謂く、能造所造は其の相滅壞し、大種の自性は本來起ること無しと。不生無常とは、謂く、常と無常と有無等の法と、是の如き一切は皆起ることあることなく、乃至分析して微塵に至るも亦た見ゆる所なしと。「然れば則ち」起らざるを以ての故に(三)無生と名く「べし」。此「無生」は是れ「外道の執する」不生無常の相なり。若し此を了らずんば、則ち外道の生の無常の義に墮せむ。

有物の無常の義とは、謂く、非常非無常の處に於て自ら分別を生す。其の義云何。彼は無常(それ)自らは滅壞せず、「而も」能く諸法を壞すと立つ。若し無常が一切の法を壞する無くむば、法は終に滅せずして無有を成せむ。(譬へば)杖槌瓦石の能く物を壞して、而も自ら壞せざるが如く、此「の無常」も亦是の如し。大慧よ、現見の無常と一切法とは、能作所作の差別あることなし。「何となれば」此は是れ無常、此は是れ所作と「言ふが如き」差別なければなり。能作所作は倶に是れ常なるべし、「それは」有因を見ずして

【二】物とは萬物の體性にて、無物とは其の反對、即ち體性なきものを云ふ。

【三】無生。或る外道の執する不生無常とは、諸法の有無二つながら不生なりとの謂ひにあらず。彼は偏に生法を分析して極微に至り名けて不生と謂ふ。故に宜しく無生と謂ふ可く不生と謂ふ可らずと破斥するなり。

能く諸法をして無を成せしむを以てなり。大慧よ、諸法の壞滅には實に亦た因あり、但凡愚の能く了ずる所に非ず。大慧よ、異因は異果を生ずべからず。若し能く生せば、一切の異法は應に相竝びて生ずべく、彼法と此法と能生と所生とは應に別あることなかるべし。「而も」現見は別あり、云何が異因より異果を生ぜむ。大慧よ、若し無常の性これ有法ならば、應に同所作は自ら是れ無常なるべし。自ら無常の故に、所無常の法は皆應に是の性なるべし。大慧よ、若し無常の性にして諸法の中に住せば、同じ諸法は三世に墮すべし。（卽ち）過去の色と同時に已に滅し、未來は生せず、現在は俱に壞せむ。一切の外道は四大種の體性は不壞なりと許す。色は卽ち是れ大種にして大種の造色を差別す。異不異を離るゝが故に、其自性も亦た壞滅せず。大慧よ、三有の中（に於いて）能造所造は、皆これ生住滅の相にあらざるはなし。豈に更に別に無常の性あつて、能く物を生じ、而も「自ら」滅せざらむや。

始造卽捨の無常とは、大種は互に大種を造るにあらず、その各別なるを以てなり。自相の造にあらず、そは異なるなきを以てなり。復共造にあらず、そは乖離するを以てなり。當に知るべし、是は始造の無常にあらざることを。

形狀壞の無常とは、これ能造及び所造の壞にあらず、但形狀の壞するのみ、其の義云何。謂く

色を分析して乃ち微塵に至るも、但形狀長短等の見を滅するのみにして、能造所造の色體を滅せず。此の見は墮して數論の中にあり。

色卽ち是無常とは、謂く、此は卽ち是れ形狀の無常にして、大種の性にあらず。若し大種の性も亦無常ならば、則ち世事なし。世事なければ、當に知るべし、則ち盧迦耶陀の見に墮することを。〔こゝは〕一切の法は自相の生にして唯言說あるのみなることを見るを以てなり。

轉變の無常とは、謂く、色體の變にして大種の變にあらず。譬へば金を以て莊嚴具を作るに、嚴具には變あれども、而も金には改〔變〕なきが如く、此も亦是の如し。

大慧よ、是の如く種種の外道は虛妄に分別して無常の性を見、說をなして言はく、「火は諸の火の自相を燒くこと能はず。但各分散するのみ。若し能く燒かば、能造も所造も卽ち斷滅せむ」と。大慧よ、我は諸法の非常無常を說けり。何となれば外法を取らざればなり。三界は唯心〔の所現〕なるを以てなり。諸相を說かざるを以てなり。大種の性處、種種の差別は、不生不滅なるを以てなり。能造所造に非ざるを以てなり。能取所取の二種の體性は、みな分別より起るを以てなり。如實に二の取性を知るを以てなり。唯これ自心の〔所〕現なることを了達するを以てなり。外〔法〕の有無の二種の見を離るゝを以てなり。有無の見を離るれば、則ち能造所造を分別せざるを

以てなり。大慧よ、世間と出世間と出世間の上上の諸法は、唯これ自心にして、常にあらず無常にあらず。〔此の理を〕了達すること能はずんば、(則ち)外道の二邊の惡見に墮せむ。大慧よ、一切の外道は此の三種の法を了解すること能はず、自らの分別に依つて言說を起し無常の法に著す。大慧よ、此の三種の法は、有ゆる言語分別の境界〔に非ず〕、又諸の凡愚の能く知る所にあらざるなり。爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『始造卽捨と、形狀の轉變あると、色と物等の無常〔を說く〕は、外道の妄分別のみ。

諸の法は壞滅すること無く、諸大の自性は〔常〕住なりと、外道は種種の見〔を立て〕、是の如くして無常を說く。

彼の外道の衆は、皆〔諸法は〕不生〔不〕滅なり、諸大の性は自ら常なりと說く、〔然れば則ち〕何等の法か是れ無常なるものあらむ。

能取も及び所取も、一切は唯是れ心なり、二種は心より現ず、〔故に〕我我所あること無し。

梵天等の諸法は、われ唯心なりと說く、若し心を離るれば、一切不可得なり。』

現證品第四

【入滅次第分】 爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、願くは我が爲に、一切の聲聞(及び)緣覺の入滅の次第相續の相を說き、我及び諸の菩薩摩訶薩をして善く此を知り滅盡三昧の樂に於いて、心に所惑なく、二乘及び諸の外道の錯亂の中に墮せざらしめ給へ。』

佛の言はく、『諦かに聽け、我、汝が爲に說くべし。大慧よ、菩薩摩訶薩の六地に至れると、聲聞及び緣覺とは滅(盡)定に入り、七地の菩薩は念念に恒に入る。[彼は既に]一切の法の自性の相を離るるが故に諸の二乘には非ず。二乘は作ありて能(取)所取に墮し諸法無差別の相を得ず、善不善の自相共相を了りて滅定に入る。是故に二乘は、念念に恒に入ること能はざるなり。大慧よ、八地の菩薩摩訶薩は、聲聞緣覺の心意意識の分別の想を滅す。(彼は)始め初地より六地に至るまでに、三界は一切たゞ是れ心意意識の自ら分別して起すものなることを觀察し、我我所を離れて外法の種種の諸相を見ざるなり。凡愚は(之を)知らず、無始より來、過惡の熏習に由りて、自心內に於いて遍じて能取所取の相を作つて執著を生ず。大慧よ、八地の菩薩の所得の三昧は、諸の聲聞緣覺の涅槃に同じ。諸佛の力に加持せらるゝを以ての故に、三昧門に於いて涅槃に入

らざるなり。若し持せざれば便ち一切衆生を化度せず、如來の地を滿足する能はず、亦た則ち如來の種性を斷絶せむ。是の故に諸佛は如來不可思議の諸の大功德を說きて、其をして究竟して涅槃に入らざらしむ。聲聞緣覺は三昧の樂に著す。是の故に其の中に於いて涅槃の想を生ず。大慧よ、七地の菩薩は、善く心意意識、我我所の執する生法の無我、若くは生若くは滅の自相共相(及び)四無礙辯を觀察して善巧に決定し、三昧門に入りて自在を得、漸く諸地に入りて菩提分法を具す。大慧よ、我は諸の菩薩の善く自相共相を了知せず、諸地の相續の次第を知らず、外道の惡見中に墮せんことを恐るゝが故に是の如く說くなり。大慧よ、彼は實に若くは生若くは滅あること無し。諸地の次第、三界の往來は、一切みな是れ自心の所見のみ。而も諸の凡愚は之を了知すること能はず。知らざるを以ての故に、我及び諸佛は〔彼等が〕爲に是の如く說くなり。』

【夢覺無次分】『大慧よ、聲聞緣覺は菩薩の第八地中に至れば、三昧の樂の昏醉する所となり、未だ善く自心の所見なることを了る能はず、其心を自〔相〕共相の習〔氣〕に纏覆せられて、二無我に著し、涅槃の覺を生ずれども寂滅の慧に非ず。大慧よ、諸の菩薩摩訶薩は、寂滅三昧の樂門を見、卽ち本願の大悲を憶念して、十無盡の句を具足し修行す。是故に卽ち涅槃に入らず。涅槃に入れば果を生せざるを以てなり。能〔取〕所取を離るるを以てなり。唯心(の理)に通達するを以て

なり。一切の法に於て無分別なるを以てなり。心意及び意識は、外法の性相の執著の中に墮せざるを以てなり。然れども佛法の正因を起さゞるには非ず、智慧の行に隨つて是の如く起すなり。如來の自證の地を得るを以てなり。大慧よ、人の夢中に河を度り、未だ度らざるに、便ち覺むるが如し。覺め已つて思惟すらく、「向に見る所は、是れ眞實となさむか、是れ虛妄と爲さむか」と。復た自ら念言すらく、「實に非ず妄に非ず」と。是の如きは但是れ曾て見聞覺知せる所を、更に「再起」する分別の習氣にして、有無の念を離れたる意識の夢中の所現のみ。大慧よ、菩薩摩訶薩も亦復是の如し。始め初地より七地に至り、乃至增進して第八(地)に入りて無分別を得、一切の法は幻夢等の如しと見て能「取」所取を離れ、心心所の廣大の力用を見、勤めて佛法を修して未證のものを證せしめ、心意意識の妄分別の想を離れて無生忍を獲、此は是れ菩薩の得る所の涅槃にして滅壞にあらざるなり。大慧よ、第一義の中には次第あるなく、亦た相續もなく、一切境界の分別を遠離す。此を則ち名けて寂滅の法と爲す。』

爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『諸住及び佛地は、唯心にして影像なし、此は是れ去來今「に於ける」諸佛の所說なり。

七地には是れ心あり、八地には影像なし、此の二地を住と名く、餘は則ち我が所得なり。

自證と及び清淨と、こは則ち是れ我が地なり。(三三)自在最勝の地は、清淨にして妙に莊嚴せり。
譬へば大火聚の熾然たる光焰を發するが如し。
(菩薩は)三有に化現し、悅意にして清涼なり。或は現(在)の變化あり、或は先時の化あり、彼に於いて諸乘を說く、皆これ如來の地なり。
十地を則ち八地となし、初を則ち八地となす。第九を則ち七(地)となし、第七を復た八と爲す。
第二を第三となし、第四を第五となし、第三を第六となす、無相「なるところに」何の次「第」かあらむ。』

【三三】原本には摩醯最勝とあれども、今は魏譯によつて自在とせり。又原本には色究竟とあれども魏譯より清淨妙莊嚴の句を採る。

如來常無常品第五

爾の時に大慧菩薩摩訶薩は復た佛に白して言さく、『世尊よ、如來應(供)正等覺は、常と爲さんか、無常と爲さんか。』

【不二如來分】 佛の言はく、『大慧よ、如來應(供)正等覺は、常にあらず無常に非ず。何となれば「常となすも無常となすも」俱に過あるを以てなり。大慧よ、若し如來は常ならば能作の過あり。そは一切の外道は、能作を常なりと說けばなり。若し(又)無常ならば、所作の過あり。そは諸蘊と同じく相所相と爲り、畢竟するに斷滅して無有と成ればなり。然も佛如來は實に斷滅にあらず。大慧よ、一切の所作は、瓶衣等の如く、皆これ無常なり。「故に若し佛を所作となさば」、是れ則ち如來に無常なるの過あり、修する所の福智は悉く空にして益なからむ。又諸の作法は、應にこれ如來なるべし、そは異因なきを以てなり。是の故に如來は常に非ず無常にあらず。』

『復た次に大慧よ、如來は常に非ず。若し是れ常ならば、應に虚空の因を待たずして成ずるが如くなるべし。大慧よ、譬へば虚空の常にあらず無常に非ざるが如し。何となれば「如來は」常無常、若くは一若くは異、「若くは」俱「若くは」不俱等の諸の過失を離るゝを以てなり。復た次に大

慧よ。如來は常に非ず。若し是れ常ならば、則ち是れ不生にして、兎、馬、魚、蛇等の角と同じからむ。』

『復た次に大慧よ、別義を以ての故に亦た常と言ふことを得。何となれば現智を以て常法を證す。(然るに)證法は是れ常なるが故に、如來も亦常なればなり。大慧よ、諸佛如來の所證の法性は、[縱令]如來世に出で給ふとも若くは世に出で給はずとも、法は法位に住して常住不易なり。一切の二乘外道の所得の法中にも在り、是れ空無にあらず。然も凡愚の能く知る所にあらず。大慧よ、如來は淸淨の慧を以て、內に法性を證して其の名を得、心意意識蘊界處の法の妄習を以て名を得たるには非ざるなり。一切の三界は、皆虛妄分別より生ずれども、如來は(虛)妄分別より生せず。大慧よ、若し有常無常の二あるとも、如來には二なし。そは一切法の無生の相を證するを以てなり。是故に[如來は]常にあらず無常にあらず。大慧よ、若し少かも言說分別ありて生ぜば、則ち常無常の過あり。是の故に應に二の分別の覺を除いて、少かも在らしむることなかるべし。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『常無常を遠離して、而も常無常を現ず、是の如く恒に佛を觀ば、惡見を生ぜざらむ。

若し常無常ならば、集むる所[の功德]は皆無益とならむ。(我は)分別の覺を除かむが爲に、

常無常と說かざるなり。

若し立する所あらば、一切みな錯亂せむ。〔されど〕若し〔萬法は〕唯自心〔の所現〕なりと見ば。是れ則へつ違諍なけむ。』

刹那品第六

【淨識藏名分】　爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復佛に白して言さく、『世尊よ、唯願くば我が爲に、蘊界處生滅の相を說き給へ。若し我あるなくんば、誰か生じ誰か滅せむ。而も諸の凡夫は生滅に依つて、苦を盡すことを求めず、涅槃を證せざるなり。』

佛の言はく、『大慧よ、諦聽せよ諦聽せよ、當に汝が爲に說くべし。大慧よ、如來藏は是れ善不善の因なり、能く徧く一切の趣生を興造す。譬へば伎兒の諸趣を變現して我我所を離るゝが如し。〔諸識みな幻なることを〕覺らざるが故に、三緣和合して果を生ずることあり。外道は〔此の理を〕知らず執して作者〔に依つて生ず〕と爲す。無始の虛僞惡習の熏ずる所を名けて藏識となす。〔而して此の藏識は〕七識と無明の住地を生ず。譬へば大海の波浪あり、其の體相續して恒に住して斷えざるが如し。〔藏識は〕本性淸淨にして無常の過を離れ我論を離る。其の餘の七識〔卽ち〕意〔及び〕意識等は念念に生滅して、妄想を因と爲し境相を緣となし和合して生ず。〔然り而して〕色等は自心の所現なることを了せず、名相に計著して苦樂の愛を起し名相に纏縛せられ、既に貪より生じて復た貪を生ず。若し因及び所緣は、諸取の根滅すれば、相續を生ぜず。自ら慧をもて

苦樂の受者を分別して、或は滅定を得、或は四禪を得、或は復た諸體の解脱に入り、便ち妄に解脱を得たるの想を生ず。而も實には未だ如來藏中の藏識の名を捨てず轉せず、若し藏識なければ七識は則ち滅す。何となれば「諸識は」彼及び所縁に因つて生ずることを得ればなり。然も(これ)一切の外道(及び)二乘の諸の修行者の知る所の境界にあらず。彼は唯人無我を了ずるを以て蘊界處に於いて自相及び共相を取るを以てなり。若し如來藏の五法、自性、諸法の無我を見ば、「七識の流轉は」地に隨つて次第に漸く轉滅し、外道の惡見の爲に動されず、不動地に住して十種の三昧の樂門を得、三昧力の爲に諸佛に持せられ、不思議の佛法及び本願力を觀察して、實際及び三昧の樂に住せず、自證智を獲て二乘及び諸の外道と共ならず、十聖の種性の道及び意生の智身を得て諸行を離れしむ。是の故に大慧よ、菩薩摩訶薩は勝法を得んと欲せば、應に如來藏の藏識の名を淨むべし。大慧よ、若し如來藏の藏識と名くる者なくんば、則ち生滅無からむ。然も諸の凡夫及び聖人は、悉く生滅あり。是故に一切の修行者は、內境界を見て現法樂に住すと雖も、而も勇猛精進を捨てざるなり。大慧よ、此の如來藏の藏識は、本性淸淨なれども、客塵に染められて不淨と爲る。一切の二乘及び諸の外道は臆度して見を起し現證すること能はざるなり。(而も)如來は此に於いて分明に現見すること、掌中の菴摩勒果を觀るが如し。大慧よ、我は勝鬘

夫人及び餘の深妙淨智の菩薩の爲には、如來藏は藏識と名け、七識と俱に起ると說き、諸の聲聞には法無我を見せしむ。大慧よ、勝鬘夫人の爲には佛の境界を說く、是れ外道（及び）二乘の境界に非ざればなり。大慧よ、此如來藏の藏識は、是佛の境界なり。汝等と此の淨智菩薩〔の如く〕義に隨順する者の（一）智慧の境界にして、是は一切の文字に執著する外道二乘の智慧の境界に非ず。是の故に汝及び諸の菩薩摩訶薩は當に勸めて如來藏の藏識を觀察すべし。但聞き已れば足るとの想を生ずること勿れ。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『甚深の如來藏は七識と俱なり、執著すれば（二）二種生ず。〔されど〕
了知すれば則ち遠離す。
無始の習氣に熏ぜられて、像〔の鏡に於けるが如く〕心に現ず、若し能く如實に觀ずれば、境相悉く有ることなし。
愚の月を指せるを見、指を觀て月を觀ざるが如く、文字に計著するものは、我が眞實〔の法〕を見ず。
心は工伎兒の如く、意は和伎者の如く、五識は伴侶たり、妄想は伎を觀るの衆なり。』

【五法諸說分】　爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、願くは我が爲に

【一】智慧の境界の五字は宋譯より採る。唐譯には所行の處とあり。

【二】二種とは能取と所取となり唯識論の術語を以て云へば見分と相分となり。

五法と自性と諸識と無我との差別の相を說き給へ。我及び諸の菩薩摩訶薩は、善く此を知り已つて漸く諸地を修し、諸佛の法を具して如來自證の位に至らむ。』

佛の言はく、『諦かに聽け、(我)當に汝が爲に說くべし。大慧よ、五法と自性と諸識と無我とは、謂ゆる名、相、分別、正智、如如(卽ち之れ)なり。若し修行者にして此の法を觀察せば、如來自證の境界に入り。斷常(及び)有無等の見を遠離し、現法樂の深甚三昧を得む。大慧よ、凡愚は五法と自性と諸識と無我と(の眞義)を了らず、心の所現に於て外物ありと見て分別を起す、(されど)諸の聖人は(則ち)然らず。』

大慧白して言さく、『云何が了らずして分別を起す。』

佛の言はく、『大慧よ、凡愚は名は是れ假立なることを知らず、心の流に隨ひ動きて種種の相を見、我我所を計して色に染著し、聖智を覆障して貪瞋癡を起し、諸業を造ること蠶の繭を作るが如く、妄想もて自ら纏ひ、諸趣の生死の大海に墮すること、汲水輪の循環して絕へざるが如し。諸法は幻の如く焰の如く、水中の月の如く、自心の所見にして、(虛)妄の分別より起り、能(取)所取及び生住滅を離るゝものなることを知らず、自在、時節、微塵、(或は)勝性より生ずと謂ひ名相の流に墮す。

大慧よ、此の中、相とは、謂く眼識の見る所之を名けて色と爲し、耳鼻舌身意識の得るもの、之を名けて聲香味觸法と爲す。是の如きものを我は說いて相と爲す。分別とは衆名を假設して諸相を顯示す。(譬へば)象馬車步の男女等の名を以て其の相を顯はし、此の事は是の如し、決定して異はずと謂ふ「が如し」、是を分別と名く。正智とは、名相は互に其客と爲り、識心は起らず、斷ならず、常ならずと觀て、外道(及び)二乘の地に墮せざるを謂ふ。是を正智と名く。大慧よ、菩薩摩訶薩は其正智を以て、名相は有に非ず無に非ずとなし、損益二邊の惡見を遠離し、名相及び識は本來起らずと觀察す。我は此の法を說いて如如と名く。大慧よ、菩薩摩訶薩は如如に住して、已に無照の現境を得、歡喜地に昇つて外道の惡趣を離れ、出世の法に入りて法相淳熟し、一切の法は猶ほ幻等の如く、自ら證する「所の」聖智所行の法を知り、臆度の見を離れ、是の如く次第して乃ち法雲(地)に至る。法雲(地)に至れば、已に三昧の諸力もて、自在の神通を開敷し滿足して如來を成ず。如來を成じ已つて衆生の爲の故に、水中の月の如く、普く其の身を現し、其欲樂に隨つて說法を爲す。(而して)其の身は淸淨にして心意識を離れ、弘誓の甲を被て十無盡の願を具足し成滿するなり。是を菩薩摩訶薩の如如に入りて獲得する所と名く。』

爾の時に大慧菩薩摩訶薩は復た佛に白して言さく、『世尊よ、三性は五法の中に入ると爲さん

か、各自相ありと爲さんか。』

佛の言はく、『大慧よ、三性も八識も及び二無我も悉く五法(の中)に入る。其中(に於いて)名及び相は是れ妄計の性なり。彼の分別に依りて、心心所の法は時を倶にして起る。日と光との如きは是れ緣起の性にして、如如は壞す可らざるが故に是れ圓成の性なり。大慧よ、自心の所現に於て執著を生ずる時は、八種の分別ありて起る。此の差別の相は、皆これ不實にして唯妄計の性なり。若し能く二種の我執を捨離せば、二無我の智卽ち生長することを得む。大慧よ、聲聞も緣覺も菩薩も、如來の自證聖智も、諸地の位次も、(及び)一切の佛法も、皆悉く此の五法の中に攝入するなり。』

『復た次に大慧よ、五法とは、謂ゆる相と名と分別と如如と正智となり。此の中、相とは、謂く所見の色等(及び)形狀各別なり、是を名けて相と爲す。彼の諸相に依りて瓶等の名を立て、此は是の如く、此は異はず「と謂ふ」。是を名けて名と爲す。衆名を施設して諸相(及び)心心所の法を顯示す、これを分別と名く。「然も」彼の名(及び)彼の相は、畢竟じて有ることなく、但是れ妄心の展轉する分別のみ。是の如く觀察して、乃ち「能」覺をも滅するに至る、是を如如と名く。大慧よ、眞實に決定して、根本の自性を究竟せば、是の如如の相を得べし。我及び諸佛は隨順に證入

して其の實相の如くに開示し演說す。若し能く此に於いて隨順に悟解せば、斷を離れ常を離れ、分別を生ぜずして自證の處に入り、外道二乘の境界を出でむ。是を正智と名く。大慧よ、三性も八識も、二無我も及び一切の佛法も、皆普く此の五種の法に攝盡せらる。汝は應に自智を以て善巧に通達し、亦た他人を勸めて其をして通達せしむべし。此に通達し已らば、心は則ち決定し他に隨つて轉ぜざらむ。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『五法には、三自性も八種の識も、及び二種の無我の法をも、普く大乘を攝す。

名と相と及び分別とは、二種の自性の攝にして、正智と如如とは、是れ則ち圓成の相なり。』

【恒河沙喩分】 爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、經中に說き給ふが如くむば、過去未來現在の諸佛は恒河の沙の如しと。此は當に云何に〔解〕すべきか。言の如くに受〔領〕せんか、（將た）別に義ありと爲さんか。』

佛、大慧に告げ言はく、『大慧よ、言の如くに受〔領〕する勿れ、三世の諸佛は恒〔河〕沙の如くなるにあらず。何となれば如來は最勝にして諸の世間を超え、與等の者なく喩の及ぶ所にあらざればなり。唯少分を以て其喩とするのみ。我は凡愚の諸の外道等の、心恒に常無常に執著して惡見を增長し生死に輪廻するを以て、其をして厭離せしめ勝れたる希望を發せしめん〔が爲に〕、佛

は成じ易しと云ひ、又は佛は逢ひ易し〔と謂ふ〕。若し遇ひ難きこと優曇華の如しと言はゞ、彼便ち退怯して精進を勤めざらむ。是故に我、〔諸佛は〕恒河沙の如しと說く。復我は時に化を受くるものを觀て、佛の値ひ難きことは優曇華の如しと說く。大慧よ、優曇華は曾て見たる者、現に見る者、當に見るべき者なし。〔然も〕如來は則ち已に見たる者、當に見るべき者あり。大慧よ、是の如く譬喩は(十分に)自法を說〔明〕せず。自法は內證聖智の所行の境界にして、世間に等しき者なく諸の譬喩を超ゆ、一切の凡愚は能く(之を)信受すること能はず。大慧よ、眞實の如來は、心意意識の所見の相を超ゆ、(故に)中に於いて譬喩を立つ可らず。然も亦た時ありてか建立して恒河の沙〔の如し〕等と言ふ、〔これ蓋し理に〕相違する〔過〕あることなし。大慧よ、譬へば恒河の沙は、龜魚象馬(等)の踐蹋する所となるも、(毫も)分別を生せずして、恒に淨無垢なるが如し。如來の聖智は、彼の恒河の如く、力通自在を以て其の沙と爲す。外道の魚龜(等)競ひ來りて擾亂すれども、而も佛は一念の分別をも起さゞるなり。何となれば如來は本願〔の故に〕三昧の樂を以て普く衆生を安んずること、(恰も)恒河の沙の愛憎あるなく分別なきが如くなるを以てなり。大慧よ、譬へば恒〔河の〕沙の如きは、是れ地の自性なり。そは劫盡て燒くる時一切の地を燒けども、而も彼の地大は本性を捨てず、恒に火大と時を倶にして生ず。諸の凡愚は、地燒かると謂ふも、

而も火の因る所なるが故に實には燒けざるなり。如來の法身も亦た恒河の沙の如く、終に壞滅せざるなり。大慧よ、恒河の沙は限量あるなし。如來の光明も亦た復た是の如く、無量の衆生〔の利濟〕を成就せむと欲するが爲に、普く一切諸佛の大會を照し給ふ。大慧よ、譬へば恒〔河の〕沙は、沙の自性に住して、更に改變して餘物と作らざるが如く、如來も亦た爾り、世間の中に於いて、諸の有生の因は已に悉く斷ずるが故に、不生不滅なり。大慧よ、譬へば恒〔河の〕沙の取れども減ずることを知らず、投ずれども增すことを見ざるが如く、諸佛も亦た爾かなり。方便の智を以て、衆生を成熟せしむるとも、減ることなく增すこともなし。何となれば如來の法身は身あることなければなり。大慧よ、身あるを以ての故に滅壞あり。(今それ)法身は身なきが故に滅壞なきなり。大慧よ、譬へば恒〔河の〕沙に強き壓力を加へて、蘇油を求めむと欲すと雖も、終に得べからざるが如く、如來も亦た爾なり。衆生の衆苦の壓する所と爲ると雖も、若し蠢動の未だ盡く涅槃を得ざれば、法界の中に於て深心の願樂を捨離すること能はず。何となれば大悲の心を具足し成就するを以てなり。大慧よ、譬へば恒〔河の〕沙の水に隨つて流れ、終に(三)逆流せざるが如く、如來も亦た爾り。〔其〕有らゆる說法は涅槃の流に隨順せざるはなし。是を以て諸佛如來は恒河の沙の如しと說くなり。大慧よ、如來の

〔三〕此の句は魏譯に隨へり。

說法は趣に隨はず、趣は是れ壞の義なり。生死の本際は知ることを得べからず、既に知る可らずんば、云何が趣と說かむ。大慧よ、趣の義は是れ斷なり、凡愚は知ることなし。』

大慧菩薩また佛に白して言さく、『若し生死の本際は知る可らずんば、云何が衆生は生死中に在つて解脫すること得む。』

佛の言はく、『大慧よ、無始の虛僞の過習の因を滅し、外境は自心の所現なることを了知して分別を轉依するを名けて解脫と爲す、(卽ち)滅壞にあらざるなり。是の故に無邊際と言ふことを得ず。大慧よ、無邊際とは、但これ分別の異名のみ。大慧よ、分別の心を離るれば、別に衆生なし。智を以て內外の諸法を觀察するに、知と所知と皆悉く寂滅なり。大慧よ、一切の諸法は、唯これ自心の分別の所見のみ。〔此の理を〕了知せざるが故に、分別の心起る、〔之を〕了ずれば心則ち滅す。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『諸の導師を觀察するに、譬へば恒河の沙の如く、壞に非ず趣に非ず、是人は能く佛を見む。
譬へば恒河の沙の悉く一切の過を離れて、而も恒に流に隨順するが如く、佛體も亦た是の如し。』

【刹那不壞分】 爾の時に大慧菩薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、願くば我が爲に、一切

諸法の刹那の壞相を說き給へ。何等の諸法をか刹那なりと名けむか。』

佛の言はく、『大慧よ、一切の法とは、謂ゆる善法と不善法と、有爲法と無爲法と、世間の法と出世間の法と、有漏の法と無漏の法と、有受の法と無受の法となり。大慧よ、要を擧げて之を言へば、五取蘊の法は、心意意識の習氣を因となして增長することを得、凡愚は此に於いて分別を生じ、善不善と謂ふ。聖人は現に三昧の樂住を證す、是れ則ち名けて善無漏の法と爲すなり。

復た次に大慧よ、善不善とは、謂ゆる八識(卽ち之れ)なり。何等をか八と爲す。謂く、如來藏を藏識と名け、意及び意識併に五識身(之れ)なり。大慧よ、彼の五識身は、意識と倶に善不善の相を展轉し差別し相續して斷せず、異體の生なく生じ已れば卽ち滅す。境は自心の所現なることを了せず、次第に滅する時、別識生起す。意識は彼の五識と共に種種差別の形相を取り、刹那も住せざるなり。我は此等を說いて刹那の法と名く。大慧よ、如來藏は藏識と名く。これに與みする所の意等の諸の習氣は是れ刹那の法にして、無漏の習氣は刹那の法にあらず。此は凡愚の刹那論者の能く知る所に非ざるなり。彼は一切の諸法に、刹那と非刹那とあることを知る能はざるが故に、無爲〔法〕を計して、同じく諸法を壞し〔以て〕斷見に墮す。大慧よ、五識身は流轉に非ず、苦樂を受けず、涅槃の因に非ず。如來藏は苦樂を受け、因と倶に生滅あり、四種の習氣の迷覆する

所となるなり。而も諸の凡愚は、分別を以て心に熏じて、〔此の理を〕了知する能はず、刹那の見を起せり。大慧よ、(譬へば)金と金剛と佛の舍利は、是奇特の性にして終に損壞せざるが如し。若し證法を得る〔者に〕刹那〔壞〕あらば、聖は(應に)聖にあらざるべし。而も彼の聖人は未だ曾て聖にあらずんばあらず。金と金剛の劫を經て住すと雖も稱量減せざるが如し。云何ぞ凡愚は我秘密の法を解せず、一切の法に於て刹那の想を作すか。』爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

『(凡)愚は有爲を分別して、空、無常、刹那となし、刹那の義を分別して、河〔流の如く〕、燈〔火の如く〕、種子の如しとなす。

一切の法は不生なり、寂靜にして所作なし、諸事の性みな離る、是れ我が刹那の義なり。

生じて無間にして卽ち滅す、凡愚の爲には、無間相續の法を說かず。

諸趣は分別より起る、無明を其の因となし、心は則ち彼より生ず、未だ能く色の來るを了せず、中間は何れの處にか住せむ。

無間に相續して滅し、而も別心あり〔彼に隨つて〕起る。〔心もし〕色に住せざる時は、何の所緣よりか生ぜむ。

若し彼に緣て起らば、其因は則虛妄なり、體は妄に因て成らず、云何が刹那の滅相を知む。

修行者の正受と、金剛と佛舍利と及び光音(天)宮とは、世間の不壞の事なり。
如來圓滿の智、及び比丘の證得する諸の法性は常住なり、云何が刹那なりと見む。
乾(闥婆)城と、幻等の色は、何故に刹那にあらざるか、大種は
實性なし、云何が能造と說かむ。』(四)

【六波羅蜜多分】　大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊は常に若し六つの波羅蜜多を滿足することを得ば、便ち正覺を成ぜむと說き給ふ。何をか六となし、云何が滿足せむ。』

佛の言はく、『大慧よ、波羅蜜多は差別すれば三あり。謂ゆる世間〔の波羅蜜多〕出世間〔の波羅蜜多〕及び出世間上上〔の波羅蜜多之れ〕なり。大慧よ、世間の波羅蜜多とは、諸の凡愚は我々所に著して二邊を執取し、諸有の身を求めて色等の境を貪る。是の如くにして檀那波羅蜜多(及び)持戒忍辱精進禪定(等の諸の波羅蜜多)を修行し、神通を成就して梵世に生ずるを謂ふ。大慧よ、出世間の波羅蜜多とは、謂く聲聞と緣覺とは涅槃に執著して自樂を希求す。是の如くにして諸の波羅蜜多を修習するを出世間

【四】　譯者曰く、以上九偈は三譯ともに次の六波羅蜜多の長行の次に置けども、何等六度に關する意義あるを見ず。卽ち重ねて頌を說き言はくの意と合せざるなり。想ふに此の偈文は刹那の釋義の長行に附せらるべきものを、其の昔梵本を印度にて書寫せしむる時、筆生の誤つて遺脫或は貝葉の表裏に書しある經文の孰れかの一面を脫せるものにあらざるなきか。これ予が敢て此の偈文を玆に編入する所以なり。

の波羅蜜多と云ふ。大慧よ、出世間の上上の波羅蜜多とは、謂く、菩薩摩訶薩は自心の二法に於いて、唯これ分別の所現なることを了知し、妄想を起さず、執著を生ぜず、色相を取らず、一切の衆生を利樂せむと欲するが爲に、恒に檀那波羅蜜多を修行す。諸の境界に於て分別を起さず、これ則ち尸羅波羅蜜多の修行なり。分別を起さゞるの時に於いて、能取所取の自性を忍知す、是れ則ち名けて羼提波羅蜜多と爲す。初中後夜に勤修して懈ることなく、實解に隨順して分別を生ぜず、是れ則ち名けて毘梨耶波羅蜜多と爲す。分別を生ぜずして、外道の涅槃の見を起さず、是れ則ち名けて禪那波羅蜜多と爲す。智を以て心を觀察して分別なく二邊に墮せず、淨所依を轉じて壞滅せず、聖智内證の境界を獲る、是れ則ち名けて般若波羅蜜多と爲す。」

卷の第六

變化品第七

【法身離過分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、如來は何故に阿羅漢に阿耨多羅三藐三菩提の記を授け給ふや。何故に復般涅槃の法なき衆生の佛道を成ずることを得と說き給ふや。又何故に初め佛たることを得てより般涅槃に至るまで、其の中間に於いて、一字をも說かずと說き給ふや。又言く、如來は常に定に在りて覺なく觀なしと。又言く、佛事は皆これ化作なりと。又言く、諸の識は刹那に變壞すと。又言く、金剛神、常に隨(侍)し衞護すと。又言く、前際は知る可らず、而も涅槃ありと說くと。又餘報あり、謂く(一)旃遮婆羅門の女と孫陀利外道の女と及び空鉢にして還る等の事と、世尊は既に是の如き業障あり、云何が一切種智を成ずることを得ん。

【一】旃遮(Ciñcā)と孫陀利(Sundarī)。旃遮は釋尊を中傷せんと企てたる一美人なり。彼女は或る時舍衞城の人々が祇園精舍にて釋尊の說法を聞いて歸る頃を見計らひ、美衣を著け衆華を執りて祇園精舍に向ひ竊に外道の寺院に宿し、翌朝城下の人々が、禮拜の爲め祇園に參詣する頃、精舍の方面より歸り、人の彼女に問へるに、「昨夜釋尊の室に眠れり」と答へたり。後八九ヶ月にして木盆を腹部に懷き帶を以て之を纏ひ、一夜釋尊が

既に已に一切種智を成せば、云何が是の如きの諸の過を離れざる。』

佛の言はく、『諦かに聽け、（我）當に汝が爲に說くべし。大慧よ、我は無餘涅槃界の爲の故に、密に勸めて、彼をして菩薩の行を修せしむ。此の［世］界と他土とに諸の菩薩あり、心に聲聞の涅槃を樂求す、此の心を捨て、進んで大行を修せしめんが爲の故に是說を作す。又變化佛は化を聲聞に與へて記莂を授く、（これ）法性の佛にあらず。大慧よ、聲聞に記を授くるは是れ祕密の說なり。大慧よ、佛と二乘と差別なしとは、惑障を斷じて、解脫の一味なるに據る。智障［の斷］を謂ふには非ず。智障［を斷ずる］の要は、法無我の性を見て、乃ち淸淨なるにあり。煩惱障［を斷ずる］は、人無我を見て、意識を捨離す［るにあり］。是時初めて藏識の習を斷じ、法障を滅して解脫し、方に永く（淸）淨なることを得るなり。大慧よ、我は本住の法に依つて此の密語を作す。［蓋し］前佛と異なり後更に說あり、先づ是の如きの諸の文字を具するに非ざればなり。大慧よ、如來は正知にして妄念あること無く、

精舍の高座に登りて、熱心に說法し給ふに際し、姙婦の姿を粧へる旃遮は聽衆の中に加り、突然起立して「大沙門よ、卿は法を說いて舌流るゝが如し、而も妾は卿の子を孕み、今に至りて尙ほ産室を造らず、何ぞ夫れ無情なるや」と大聲に叫べり。時に聽衆驚ける に當り、旃遮が懷ける木盆脚下に落つ。旃遮忽ち色を失して精舍の外に隱る、之を旃遮の中傷となす。

孫陀利も釋尊を中傷せんとの企に利用せられたる一美人なり。彼女は諸の外道に利用せられ、旃遮と同じ筆法にて「釋尊の香殿に眠れり」と欺けり、數日の後、諸の外道は博徒數名を賴み、孫陀利を路に擁して暗殺し、屍を精舍の附近の塵丘の中に棄てしめ、自ら孫

思慮を待つて然して後に說法するにあらず。如來は久しく已に四種の習を斷じ、二種の死を離れて二種の障を除き給ふ。大慧よ、意及び眼識等の七は習氣を因と爲す、是刹那の性なり。無漏の善を離れ、流轉の法にあらず。大慧よ、如來藏とは、生死流轉及び涅槃苦樂の因なり。凡愚は(此の理を)知らずして妄に空に著す。大慧よ、變化の如來には金剛力士常に隨〔侍〕し衞護す。〔これ〕眞實の佛には非ず。眞實の如來は諸の限量を離れ給ふ。〔そは〕二乘外道の知ること能はざる所なり。〔彼は〕現法の樂に住して智忍を成就し、金剛力士の所護を假らざるなり。一切の化佛は業より生ぜず。卽ち是れ佛にあらず、亦佛にあらざるにもあらず。譬へば陶師の衆事を和合して所作あるが如く、化佛も亦た爾り、衆相具足して法を演說す。然も自證聖智の所行の境を說くこと能はず。復た次に大慧よ、諸の凡愚の人は六識の滅するを見て斷見を起し、藏識を了せずして常見を起す。大慧よ、自心は其の本際を分別するが故に不可得なり。此の分別を離るれば則ち解脫を得、

陀利の搜索を法廷に訴へ、然る後精舍の附近より屍を發見して、これ釋尊が孫陀利を私し衆僧等の事を發覺せん事を恐れて之を暗殺せりとなす。釋尊此に於いて比丘をして城下の人々に告げしめて曰く、「妄語は地獄に近づく、之を作して作さずと云はば、二罪後に倶に受く、自ら作して自ら牽き行くなり」と。王命じて犯人を嚴探せしむ。偶博徒等が報酬を得て酒を飮み、醉ふて相爭ひ口論するに及んで警吏の知る所となり、悉く捕へられて法廷に至り、事實の眞相を自白したれば、王命じて諸の外道を嚴刑に處せり。之を孫陀利の謀殺となす。

四種の習を斷じて一切の過を離れむ。」爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、
『二乘も非乘も及び佛の涅槃もあることなし。(而も)悉く如來の記を授け、衆〻の過惡を離ると說けるは、怯劣の人を誘進して、究竟の智と無餘涅槃とを成就せしめんが〔爲めのみ〕、(是故に)此は密意に依るの說なり。
諸佛の所得の智〔を以て〕、是の如きの道を演說し給へるは、(三)衆生の依りて道に入らん〔が爲めのみ〕、故に二乘には涅槃なきなり。
欲と色と有と諸の見と、是の如き四種の習〔氣〕は、意識のよりて生ずる所、藏も意も亦た〔其の〕中にあり。
意識眼等の無常を見るが故に斷と說く、意と藏とに迷うて常〔見〕を起し、邪智を(呼んで)涅槃と謂ふ。』

【三】此の二句は魏譯を採れり。

斷食肉品第八

【制肉諸食分】爾の時に大慧菩薩摩訶薩は、復た佛に白して言さく、『世尊よ、願くば我が爲に食肉と不食肉との功德と過失とを說き給へ。我及び諸の菩薩は其の義を知り已つて未來現在の報習に熏ぜらるゝ衆生の爲に之を演說し、肉味を捨てゝ法味を求め、一切の衆生に於いて大慈心を起し、更に相親愛して一子の如き想ひをなし、菩薩地に住して阿耨多羅三藐三菩提を得せしめむ。或は二乘の地に暫時止習し、究竟して當に無上正覺を成ずべし。世尊よ、(一)路迦耶等の諸の外道輩の、有無の見を起して、斷常に執著する者すら、尙ほ遮禁ありて食肉を聽さず、何に況んや如來應(供)正等覺は、大悲心に富み世の依怙する所となり給ふもの、自他俱に肉を食ふことを許し給はんや。善い哉、世尊は大慈悲を具して世間を哀愍し、等しく衆生を觀給ふこと猶ほ一子の如し。願くは食肉の過惡と不食の功德とを解說し、我及び諸の菩薩等をして聞き已つて奉行し、廣く他の爲に說かしめ給へ。』爾の時に大慧菩薩は重ねて頌を說いて言さく、

『菩薩摩訶薩は無上覺を志求するもの、酒肉及び葱を食ふとなさんか、食はずと爲さんか。

【一】路迦耶（Lokāyata）は譯して順世外道と云ふ。印度哲學中の肉慾充足を旨とする快樂學派なり。

愚夫は貪つて肉を嗜み、臭穢にして名稱なく、彼の惡獸と同じ、「學佛のもの」云何が「肉を」食ふ可けんや。』
『食へば何の過かあり、食はざれば何の(功)德かある、願くは最勝尊よ、我が爲に具さに開演し給へ。』
爾の時に佛は、大慧菩薩摩訶薩に告げ言はく、『大慧よ、諦聽せよ、諦聽せよ、(而して)善く之を思念せよ、吾當に汝が爲に分別し解說すべし。大慧よ、一切の諸肉は無量の緣あり。菩薩はその中に於いて當に悲愍を生ずべく、應に噉食すべからず。我今汝が爲に其の少分を說くべし。大慧よ、一切の衆生は、無始より來、生死の中に在りて輪廻して息まず、曾て父母兄弟男女眷屬乃至朋友親愛侍使と作り、生を易へて鳥獸等の身を受けざるは靡し。云何ぞ中に於いて之を取つて食はんや。大慧よ、菩薩摩訶薩は諸の衆生を觀て己が身に同うし、肉は皆有命の中より來ることを念ふ。云何か(之を)食ふに「忍びむや」。大慧よ、諸の羅刹等すら、我が此說を聞いて尚ほ應に肉を斷つ、況んや法を樂しむ人をや。大慧よ、菩薩摩訶薩は、在在生處に(於いて)、諸の衆生を觀て慈念をもて、皆これ親屬乃至一子の如くに想ふ。是の故に應に一切の肉を食ふべからず。大慧よ、衢路市肆に(於いて)諸の肉を賣る人は、或は犬馬人牛等の肉を得て、利を求めんが爲の

故に而も之を販鬻す。是の如き雜穢云何が食ふ可けむや。大慧よ、一切の諸肉は皆これ精血汗穢より成る所なり。清淨を求むる人にして、云何ぞ取つて(之を)食ふべけむや。大慧よ、衆生は肉を食ふ人を見て皆悉く驚怖す。悲心を修むるもの、云何ぞ肉を食はむや。大慧よ、譬へば獵師及び【四】旃陀羅の如き、魚を捕へ鳥を網する諸の惡人等「あらんに」、狗は「彼等を」見て驚吠し、獸は彼等を見て奔走す。空を飛び水に住する一切衆生の、若し「彼等を」見ることあらんか、咸な是の念を作さむ、「此の人は氣息猶ほ羅刹の如し、今來つて此に至る必らず當に我を殺すべし」と。(斯くて)命を護らんが爲の故に皆悉く走避す。肉を食ふ人も亦た復た是の如し。菩薩は慈行を修せんが爲に肉を食ふべからず。大慧よ、夫れ肉を食ふ者は、身體臭穢し惡名流布す、賢聖の人は用ゐて親狎せず。是故に菩薩は應に肉を食ふべからず。大慧よ、夫れ血肉は衆仙の棄る所にして、群聖は(決して)食はず。是故に菩薩は應に肉を食ふべからず。大慧よ、菩薩は衆生の信心を護らんが爲に、佛法に於いて譏謗を生ぜざらしめ、慈愍を以ての故に應に肉を食ふべからず。大慧よ、若し我が弟子にして肉を噉食せば、諸の世人をして悉く譏謗を懷きて、是言を作さしめむ、「云何ぞ沙門の淨行を修する人にして、天仙の食する所の味を棄捨し、酒を「呑み」

【四】旃陀羅(Caṇḍāla)は、印度社會に於ける最下級の職業即ち獸類の屠殺に從事せるものを云ふ。

惡獸の如く肉を食ひ、滿腹して世間を遊行し、諸の衆生をして驚怖を懷かしめ、清淨の行を壞り沙門の道を失はしむるや」と。是の故に當に知るべし、〔食肉は〕佛法の中に〔於いて〕調伏の行にあらず。菩薩は慈愍して衆生を護り、是の如きの心を生ぜざらしめんが爲に、應に肉を食ふべからず。大慧よ、人の肉を燒けば、其の氣臭穢なるが如く、餘肉を燒くも、(亦)等うして差別なし。云何が中に於いて食不食あらむや。是の故に都て清淨を樂ふものは應に肉を食ふべからず。

大慧よ、諸の善男子の塚間樹下(五)阿蘭若の處に(於いて)寂靜に修行するものにして、或は悲心に住し、或は呪術を持し、或は解脱を求め或は大乘に趣かんに、肉を食ふが故に都て障礙せられて、〔目的を〕成就することを得ず。是の故に菩薩は、自他を利せむと欲せば、應に肉を食ふべからず。大慧よ、夫れ肉を食ふものは、其形色を見て、則ち已に滋味を貪ぼるの心を生ず。菩薩は、一切衆生を慈念すること猶ほ己が身の如くす、云何か之を見て食想をなさんや。是故に菩薩は應に肉を食ふべからず。大慧よ、夫れ肉を食ふ者は、諸天遠離し、口氣常に臭にして、睡夢安からず、覺め了つて憂悚し、夜叉惡鬼その精氣を奪ひ、心に驚怖多く、食足ることを知らず、疾病を增長して瘡癬を生じ易く、恆に諸蟲の唼食する所となり、食に於て深く厭離を生ずること能はず。大慧よ我は

【五】阿蘭若(Araṇya)は、印度の聖者の修行し、冥想する森林なり。

常に說いて言ふ、「凡そ食噉する所は〔恰も〕子の肉を〔食ふが如き〕想ひを作せ」と。餘〔に對して〕すら尙ほ然り、云何が弟子に肉を食ふことを聽さんや。大慧よ、肉は美好にあらず、肉は淸淨にあらず、諸の罪惡を生じ、諸の功德を敗る。（これ）諸仙聖人の棄捨する所なり、云何ぞ弟子に食ふことを許さんや。若し食ふことを許すと言はゞ、此の人は我を謗るものなり。

大慧よ、淨美の食とは應に知るべし、則ち是秔米粟米大小の麥豆酥油石蜜等の類なることを。此は是過去の諸佛の許し給ふ所にして、（亦た）我が稱說する所なり。我が種姓中の諸の善男女は心に淨信を懷きて久しく善根を植ゑ、身命（及び）財に於いて貪著を生せず、一切を慈愍すること猶ほ己が身の如くす。（これ）是の如き人の應に食すべき所にして、諸惡〔を行し〕虎狼の性を習ふ者の心に愛重する所にあらず。大慧よ、昔、師子生と名くる王ありき。（かれ）肉味に耽著して種種の肉を食ひ、是の如くして已まず、遂に人を食ふに至れり。〔此に於いて〕人民は堪ゆる能はず皆悉く離叛し、〔王は〕國位を亡失して大苦惱を受けぬ。大慧よ、釋提桓因は（曾て）天王の位に處たるが、過去に肉を食へる餘習を以て、身を變じ鷹となりて鴿を逐へり。われ時に尸毗と名くる王と作り、其の鴿を愍念して、自ら身の肉を割き以て其の命に代れり。大慧よ、帝釋の餘習すら尙ほ衆生を惱ます、況んや餘の無慚にして常に肉を食ふ者に於いてをや。當に知るべし、肉を

食ふ者は自ら惱み他を惱ますことを。是の故に菩薩は應に肉を食ふべからず。大慧よ、昔、一王ありき。〔かれ或る日〕馬に乘りて遊獵せしに、馬驚き奔逸して山險に入り、既に歸路なく又人居を絶す〔る處に到りぬ〕。〔然るに其處に一の〕牡師子あり、〔王は其の師子〕と與に同〔居〕遊處し、遂に醜行を行じて諸の子息を生めり。其の最長子を名けて班足と曰ふ。〔彼は〕後に王となることを得て七億の家を領せしが、肉を食ふの餘習〔によりて〕肉に非ざれば食はず、初め禽獸を食ひ後乃ち人〔を食ふ〕に至りぬ。〔而して其の〕生む所の男女は悉く是れ羅刹なりしが、此の身を轉じ已つて、復た師子豺狼虎豹鵰鷲等の中に生れ、人身たらんことを求めんと欲せしかども、終に得べからざりき、況んや生死を出づる涅槃の道をや。

大慧よ、夫れ肉を食ふものは、是の如きの無量の過失あり。斷じて食はずんば大功德を獲む。凡愚は是の如きの損益を知らざるなり。是故に我いま汝が爲に開演す、「凡そ是肉は悉く應に食ふべからず」と。大慧よ、凡そ生を殺す者〔ある〕は、多くは人の食ふが爲なり。若し人にして〔肉を〕食はずんば亦た殺事なけむ。肉を食ふ者は殺す者と罪を同うす。奇なる哉、世間〔の人〕は肉味に貪著して、人身の肉をすら尚ほ取つて之を食ふ者あり、況んや鳥獸〔の肉〕を食はざるものあらむや。味を貪るを以ての故に廣く方便を設けて、罝羅網罟を處處に安施し、水陸飛行〔の動物〕

皆殺害せらる。設ひ自ら食はざるも、價直を貪らんが爲に此の事を作すなり。大慧よ、世に復た人あり、心に悲愍なく、專ら慘暴を行ふこと、猶ほ羅刹の如し。若し衆生の其身充盛なるを見ては、便ち肉想を生じて言はく、「此は食するに可なり」と。大慧よ、世に肉の自殺に非ず他殺に非ず、(又)心に疑はず殺して食ふべきものあることなし。是の義を以ての故に我は聲聞に是の如きの肉を食ふことを許せり。大慧よ、未來の世に愚癡の人あり、我が法中に於いて出家となり、妄りに毗尼を說いて正法を壞亂し、我を誹謗して、「肉を食ふことを聽し亦た自らも曾て食へり」と言ふ。大慧よ、我もし聲聞に肉を食ふことを許さば、我は則ち是れ慈心に住する者、觀行を修するもの、頭陀を行ずるもの(及び)大乘に趣くものにあらず。云何が諸の善男子と善女人とを勸めて、諸の衆生に於いて、一子の(如き)想ひを生ぜしめ、一切の肉を斷ぜむや。大慧よ、われ處處に於いて、十種を遮し、三種を許すと說けるは、是れ漸く禁斷し、其をして修學せしめ「んが爲なりしが」、今この經中に「於いて」、自死他殺、凡そ是肉なるものは一切悉く斷ぜり。大慧よ、われ曾て弟子に肉を食ふことを許さざりき。亦た現に許さず、亦た當に許さざるべし。大慧よ、凡そ是れ肉食は出家の人に於いて悉く不淨なり。

大慧よ、若し癡人あり、「我を」謗りて、「如來は肉を食ふことを聽許せり、亦た自らも食へり」

と言はば、當に知るべし、是の人は惡業に纏はされて、當に永く不饒益の處に墮せむことを。大慧よ、我が有ゆる聖弟子は、凡夫の段食すら尚ほ食はず、況んや血肉不淨の食を食はんや。大慧よ、聲聞緣覺及び諸の菩薩すら尚ほ唯㈥法食のみ、豈に況んや如來をや。大慧よ、如來の法身は雜食の身にあらず。大慧よ、我は已に一切の煩惱を斷除す。我は已に一切の習氣を浣滌す、我は已に諸心の智慧を擇び、大悲平等にして、普く衆生を觀るに猶ほ一子の如くす。云何ぞ聲聞の弟子の、肉を食ふことを許さんや。何に況んや自ら食はんや。是の說を作す者は、是の處あることなし」と。爾の時に世尊は重ねて頌を說き言はく、

「(一)〔一切の衆生は〕悉く曾て親屬たり、〔一切の肉は〕衆穢の成長する所なり、〔又肉を食ふ者は〕諸の含生をして恐怖せしむ。是の故に應に一切の肉と葱と韮蒜と及び諸の酒とは〔是れを飮〕食すべからず。

修行者は是の如き不淨物を遠離し、亦常に麻油及び諸の穿孔ある牀を離れよ。(そは)彼を用ゆれば、其の中に於ける諸の細蟲を、大いに驚怖せしむればなり。

〔酒肉の〕飮食は放逸を生じ、放逸は邪覺を生じ、〔邪〕覺は貪を生ず、是の故に飮食すべからず。邪覺は貪を生ずるが故に、心は貪の爲に醉はさる。(而して)心醉は愛欲を長じ、生死を

【六】法食とは、如法の食物、卽ち佛敎の法制に隨へる食物なり。

解脱せず、利の爲に衆生を殺すも、財を以て諸肉を取るも、二倶に是れ惡業なり、死して叫喚〔地〕獄に墮せむ。

想はず、敎へず、求めざる、此の三種を淨(肉)と名く。(而も)世に是の如き肉なし、我は食者を訶責す。

更に互に相噉食して、死しては惡獸の中に墮し、臭穢にして癲狂なり、是の故に肉を食ふべからず。

獵師の旃荼羅と、屠兒の羅刹娑と、此等の種中に生るるは、斯れ皆肉を食ふの報なり。

食し已つて慚愧なくんば、生生常に癲狂せむ。〔これ〕諸佛、菩薩、及び聲聞の嫌忌し給ふ所なり。

象脇〔經〕と大雲〔經〕と、涅槃〔經〕と、央掘摩〔經〕と、及び此の楞伽經とには、われ皆斷肉を制す。

先に見聞の疑ひを解き、已に一切の肉を斷ず、其の惡習を以ての故に、愚者は妄に分別す。

貪障の解脱〔に於けるが〕如く、肉等も亦た復た然り、若し之を食ふものは、聖道に入ること能はず。

未來世の衆生は、肉に於いて愚癡なるが「爲に」說いて、「此は淨なり罪なし、佛は我等に食ふことを聽し給へり」と言ふ。

淨食は尙ほ藥の如く、（亦た）猶ほ子の肉を「食ふが」如き想を「作せ」、是の故に修行者は、量を知りて乞を行ぜよ。

肉を食へば解脫に背き、及び聖（人）の表相に違ひ、衆生をして怖を生ぜしむ、是の故に應に食すべからず。

慈心に安住するものには、我常に「貪味を」厭離せよと說く。「若し能く是の如くならば」師子及び虎狼「と雖も」、應に（彼と）共に同じく遊止すべし。

若し一切みな酒肉等を飲食せずんば、必らず賢聖の中に生じて、財豐にして智慧具はらむ。」

陀羅尼品第九

【護持陀羅尼分】 爾の時に佛は、大慧菩薩摩訶薩に告げて言はく、『大慧よ、過去未來現在の諸佛は、此の經を持ち擁護せんと欲する者の爲に、皆楞伽經の呪を演說し給へり。我も今また當に(汝が爲に)說かむ、汝當に受持すべし。』卽ち呪を說き曰く、

怛姪他一 覩吒覩吒二 杜吒吐吒三 鉢吒鉢吒四 葛吒葛吒五 訶麼羅阿麼隸六 毘麼隸毘麼隸七 你謎你謎八 嚫謎嚫謎九 縛謎縛謎十 葛隸葛隸十一 揭羅葛隸十二 阿吒末吒十三 折吒咄吒十四 耆若吒薩耆吒十五 葛地剌地十六 鉢地十七 嚫謎隸謎十八 第謎十九 折隸折隸二十 鉢利利鉢二十一 畔第畔第二十二 案制滿制二十三 主荼嚫二十四 杜荼鉢二十五 鉢荼嚫二十六 過計過計二十七 末計末計二十八 斫結斫結二十九 地謎地謎三十 嚫謎嚫謎三十一 黠黠黠黠三十二 楮楮楮楮三十三 杜杜杜三十四 杜虎杜虎杜虎杜虎三十五 莎婆訶三十六

大慧よ、未來世の中に、若し善男子善女子あり。此の陀羅尼を受持し讀誦して、他の爲に解說せば、當に知るべし、此の人は、一切の人と非人と、(及び)諸の鬼神等の、便を得る所とならざるべきことを。若し復人あり、卒かに惡に中り、其の爲に一百八徧(此呪を)誦念せば、惡鬼は卽時に疾走して去らむ。大慧よ、われ更に汝が爲に陀羅尼を說かむ。卽ち呪を說き曰はく。

怛姪他一鉢頭摩第鞞二鉢頭迷三醯泥醯禰醯泥四羅主羅主隸五虎隸虎隸虎隸六庾隸庾隸七跛隸跛隸跛瞋八瞋第瞋第九畔逝末第十尼羅迦隸十一莎婆訶十二

大慧よ、若し善男子善女子あり、此陀羅尼を受持し讀誦して、他の爲に解說せば、一切の天、龍、夜叉、人、非人等、及び諸の惡鬼神の、便を得る所とならず。われ諸の羅刹を禁止せんが爲の故に此の神呪を說く。若し此の呪を持せば、則ち入楞伽經の一切の文句を受持し、悉く已に具足すとなさむ。

偈頌品第十の一

爾の時に世尊は、重ねて此の修多羅中の諸の廣義を宣べんと欲するが故に、頌を説き言はく、

『諸法は堅固ならず、皆分別より生ず、分別は卽ち空なるが故に、分別せらるるものも亦た有に非ず。

虚妄の分別に由りて、是に則ち識の生ずるあり、(一)八九の識と種種の〔識〕とは、(恰も)海と衆の波浪との如し。

(二)種子の法を熏ずるに依りて、常に堅固に身を縛す、心は境界に隨つて流るること、(恰も)鐵の磁石に於けるが如し。

衆生の所依の性は、諸の計度を遠離し、智及び所知を離る、依を轉ずれば卽ち解脱することを得む。

(また)如幻三昧を得て、十地を超過し、心王を觀見する時は、想も識も皆遠離す。

爾の時に心は依を轉ず、是れを卽ち常住と爲す、(彼は)蓮花宮の幻境の起る所に在り。

既に彼の宮に住し已れば、自在無功用にして諸の衆生を利益すること、(恰も)衆色の摩尼の

【一】八九識。第八識は唯識論に説かるれども、第九識は唯識宗以外の建つる所なり。以て此の經の立脚地を察すべし。

【二】此の二句は魏譯を採る。

如し。

〔其處には〕有爲も〔無く亦〕無爲も無く、虚妄の分別は〔全く〕除かる。愚夫の迷ふて執取するは、（譬へば）石女の子を〔生むことを〕夢みるが如し。

應に知るべし　㈢補伽羅も〔五〕蘊も〔十八〕界も、悉く空にして無自性なることを。

我は諸の方便を以て、無生、有、非有（等）と説けども、而も實に相あることなし。愚夫は〔虚〕妄に〔分別して〕　㈣能相及び所相を執取するなり。

一切の知は知にあらず、一切は（亦た）一切にあらず。佛には、愚夫の分別する所の〔如く〕、自他を覺すること無し。

諸法は、幻夢の如く、無生と〔言ふも亦た〕無自性と〔言ふも〕、性みな空なるを以ての故に、有無は（畢竟）不可得なり。

我は唯一性を説く、〔そは虚〕妄の計度を離る。自性に二あること無し、〔これ〕衆聖の行ずる所なり。

四大不調にして、變吐して螢光を見るが如く、所見は皆有にあらず、（一切の）世間も亦た是の如し。

【三】補伽羅（Pudgala）は、人、衆生、又は有情と譯す。

【四】能相所相。二法相對する時、自ら働く法を能と云ひ、働きかけられる法を所と云ふ。而して相とは其の法の特性特徴なり。

(また)猶ほ幻の所現の如く、草木瓦礫等は、かれ(皆)幻にして所有あるなし、(一切の)諸法も亦た是の如し。

〔能〕取にあらず、所取にあらず、〔能〕縛にあらず、所縛にあらず、幻の如く、陽焔の如く、夢の如く、亦た翳の如し。

若し眞實を觀んと欲せば、諸の分別の取〔著〕を離れて、應に眞實觀を修すべし、〔此に於いて〕見佛せんこと必ず疑なし。

世間は夢に等し、色〔法〕も資〔財〕も〔器〕具も亦た爾り。若し能く是の如く見ば、身は世〔人〕の爲に尊ばれむ。

三界は心に由りて起り、迷惑して〔虛〕妄に見はす所のみ、〔虛〕妄を離れて世間なし、〔是を〕知り已らば染依を轉ぜむ。

愚夫は〔心の〕所見を〔執して〕、妄に生滅ありと謂ふも、智者は如實に觀て、「不生にして亦た不滅なり」となす。

〔智者は〕常に行じて分別なく、心心〔所〕の法を遠離し、色究竟天に住して、諸の過失の處を離る。

〔智者は〕彼〔處〕に於いて正覺を成じ、力通自在と及び諸の勝三昧を具〔足〕し、此〔の土〕に於いて現化を成ず。

化身は無量億にして、徧く一切の處に遊び、響の（聲に應ずるが）如く、愚夫をして難思の法を聞くことを得せしむ。

〔化身は〕初中後を遠離し、亦た有無を離る。〔渠は〕多に非ずして多を現じ、不動にして普徧なり。

衆生の身中に覆ふ所の眞性〔あり〕と說き、迷惑して幻有ならしむ、幻の迷惑と爲に非ざるなり。

心の迷惑に由るが故に、一切は皆悉く有となる、此の（虛妄の）相の繫縛を以て、藏識は（諸の）世間を起すなり。

是の如く諸の世間は、唯假の施設あるのみ。諸見は瀑流の如く、人法の中に行はる。

若し能く是の如く知らば、是れ則ち(五)所依を轉じて我が眞子となり、隨順の法を成就せしむ。

愚夫の分別する所の(六)堅濕煖動の法は、（唯）假名のみにして實あることなく、〔能〕相もなく亦た所相もなし。

【五】所依とは、依らるるものゝ義。草木の大地に於ける、草木は能依にて、大地は所依なり。

【六】堅濕煖動、堅は地の性、濕は水の性、煖は火の性、而して動は風の性なり。

身形及び諸根は、皆八物を以て成る。凡愚は色を妄計して、身の籠檻に迷惑するなり。
凡愚は因緣の和合より生ずる眞實の相を了せず、〔虛〕妄に分別して三有に流轉す。
識中の諸の種子は、能く心の境界を現ず。〔然るに〕愚夫は分別を起して二取を妄計す。
諸心は無明と及び愛業とによりて生ず。是を以て我は〔彼等を〕了知して依他起性と爲す。
妄に有無を分別して(七)心を(其の)境界に迷惑せしむ。此の分別は都て無なり、迷つて妄計して有と爲す。
心は諸緣の爲に縛せられて衆生を生起す、諸緣もし遠離すれば、我は所見なしと說く。
已に衆緣を離るれば、分別せらるゝ〔諸法の〕自相は、身中に復た起らず、我は〔これを〕所行なしと爲す。
衆生の心に起す所の、能取も所取も、及び所見も皆無相なり、(そは)愚夫の妄分別のみ。
阿賴耶識を顯示する、殊勝の藏識の、能取所取を離れたるを、我は說いて眞如と爲す。
蘊の中に人あるなく、我もなく(亦た)衆生も無し。生は唯これ識の生じたるのみにて、滅も亦た唯識の滅するのみ。

【七】唐譯には迷惑心所行とあり、今は魏譯を採る。

猶ほ畫ける高下の如く、見ゆと雖も所有なし。諸法も亦た是の如し、見ゆと雖も有に非ず。

乾闥婆城の如く、亦熱時の燄の如く、所見は常に是の如し、智を以て觀ずるに不可得なり。

因緣及び譬喩はこれを以て宗を立つるなり、乾「闥婆」城、夢、火輪、陽焰、日月の光、火焰(及び)毛「輪」等の喩は、此を以て無生を顯はすなり。

世(人)の分別は皆空なり、迷惑は幻夢の如し。諸有は不生にして、三界は所依なしと見よ。內外また是の如し「と見ば」

(八)無生忍を成就して、如幻三昧と及び意生身と、種種の神通と、諸力及び自在とを得む。

諸法は本「來」無生なり、空にして自性あること無し。諸の因緣に迷惑して、而も生滅ありと謂ふなり。

愚夫は「虛」妄に分別して、心を以て心を現はし、亦外「界」の色「法」を現はす、而も實には所有なきなり。

定力の觀見の如く、佛像と骨鎖と及び分析せる大種とは、假に施設せる世間のみ。

身と資(財)と及び所住と、此三を所取と爲し、意と取と及び分別と、此三を能取と爲す。

迷ひ惑ふて妄計するものは、能所の分別を以て、但文字の境に隨つて眞實を見ざるなり。

【八】無生忍とは、無生法忍の略。生滅を遠離せる眞如實相の理體を無生の法と云ひ、此の理に安住して動かざるものを無生法忍と云ふ。

行者は〔智〕慧を以て、諸法は自性なしと觀せば、此時無相に住して、一切皆休息せむ。
墨を以て雞を塗るが如く、無智の者は妄に取れども、實には三乘ある無し、愚夫の了ること能はざるのみ。
若し諸の聲聞と及び辟支佛は、皆〔これ〕大悲の菩薩の變化の所現にして、三界は唯これ心なりと見ば、分別の二自性は依を轉じて人法を離れむ、是を則ち眞如と爲す。
日月も燈も光焔も、大種も及び摩尼〔寶珠〕も〔皆これ〕無分別にして用を作す、諸佛も亦た是の如し。
諸法は毛輪の如く、生住滅を遠離し、亦た常無常を離る、(九)染淨も亦た是の如し。
(10)陀都の藥を著るが如く、地を見れば金色を作せども、而も實は彼地中に本金相ある無し。
愚夫も亦た是の如く、無始より〔來〕、迷亂せる心を以て、妄に諸有を取つて實〔在〕となせども、〔實は〕幻の如く陽焔の如きものなり。
應に觀ずべし、一種子は非種と與に同〔法〕印にして、一種は一切の種なることを、是を心の種種と名く。

【九】染淨。愛著の念及び愛著せらるゝものを染と云ひ、解脱の念、及び所解脱の法を淨と云ふ。
【10】陀都(Dhatu)とは。粗金の礦物なり。昔藥物として用ゐられしものならむ。

〔淸〕淨の種子を一と爲し、依を轉ずるを非種と爲す、〔これ皆〕平等にして法印を同うし、悉く皆無分別なり。

種種の諸の種子は、能く諸の趣生を感ず、種種の衆の雜苦を一切の種子と名く。

諸法の自性を觀ずれば迷惑は遣ることを待たず、物の〔實〕性は本〔來〕無生なり、〔之を〕了知すれば卽ち解脫を得む。

定者は世間の衆色は、心より起ると觀ず。無始より來、心は迷惑して〔實有なり〕と分別すれども〕實は色も無く(亦た)心も無し。

幻、乾〔闥婆〕城、毛輪、及び陽焰の、非有にして有と現ずるが如く、諸法も亦た是の如し。

一切の法は不生なり、唯迷惑の所見のみ。迷妄より生じたる〔諸法を〕以て、愚は妄計して二に著す。

種種の習氣に由りて、諸の波浪の心を生ず。若し彼の習〔氣〕を斷ずるときは、心の〔波〕浪は復た起らず。

心は諸境を緣じて起ること、(恰も)畫の壁に依るが如し。〔若し〕爾らずんば、何ぞ虛空中に畫を起さざらむ。

若し少分も相を縁じて心を起すことを得せしめば、心は既に縁より起る、〔いかでか〕唯心の義を成ずることを得む。

心性は本〔來〕清　淨なること、猶は淨らかなる虚空の若し。〔而も〕心をして還て心を取らしむるは、異因あるが爲に非ず、〔唯〕習〔氣〕に由りてなり。

自心の現〔ずる所〕に執　著し、心をして起さしむることを得、〔されば〕所見は實に外に〔あるに〕あらず、是の故に唯心と説くなり。

藏識を説いて心と名け、思量する〔作用〕を意と爲し、能く諸の境界を了〔別〕する〔作用〕を名けて識と爲す。

心は常に（一）無記にして、意は（二）二種の行を具し、現在の識は通じて善と不善等とを具す。

證は乃ち定時なく、地及諸刹を超え、亦心量を越て無相果に住す。

所見の有と無と、及び種種の相とは、皆これ諸の愚夫の顚倒して執著する所なり。

智若し分別を離るれば（三）物の有は則ち相應せず。心に由るが故に色なし、是故に無分別なり。

【一】無記とは、讃毀すべきに非ざるものを云ふ。蓋し佛教にては、讃すべきものを善と云ひ、毀すべきものを惡と云ひ、無記とは非善非惡のものを意味すればなり。

【二】二種の行とは、佛教心理學に謂ゆる心相應行と心不相應行とを指せるものならむ。詳くは倶舍論等を看よ。

【三】唐譯には物有則相違とあり、而して魏譯には不相應とあり。今は兩譯を斟酌して採る。

諸根は猶ほ幻の如く、境界は悉く夢の如し。能作も及び所作も、一切みな有に非ず。
世〔俗〕諦によれば、一切有にして、第一義〔諦〕によれば、即ち無なり。〔そは〕諸法無性の性を說いて第一義〔諦〕と爲せばなり。
諸〻の言說に因るが故に、無自性の中に於いて、而も物の起るあり、是を名けて俗諦と爲す。
若し言說あること無くんば、所起の物も亦た〔有ること〕無けむ。世諦の中には言ありて事なきものあることなし。〔これ〕顚倒虚妄の法にして實に不可得なり。
若し倒是れ有ならば、則ち無も(亦た)無自性ならむ。〔そは〕有無の性なるを以てなり。而も彼は顚倒の法にして、一切の諸の所有は是れ皆不可得なり。
惡習の心に熏じて現ずる所の種種の相に迷惑して、〔心外の實在〕と謂ひ、妄に諸色の像を取り、無分別を分別す、分別は是れ斷ずべし。
無分別にして能く實性を見ば、(則ち)眞空を證することをえむ。
無明の心に熏じて現ずる所の諸の衆生は、幻の象馬等、又は樹葉を金と爲すが如し。
猶は瞖目の者の迷惑して毛輪を見るが如く、愚夫の諸の境界を妄取するも亦た是の如し。
分別と所分別と、及び分別を起す者と、轉と所轉と(及び)轉の因と、此の六の解脫に因る。

妄計に由るが故に、地も無く、諸諦も無く、亦た諸の刹土、化佛及び二乘もなし。
心は一切の法を起せども、一切處も身も心性も實に無相なり。(然るに)無智のものは種々に分別して迷惑の相を取る、是を依他起(性)と名け、相中所有の名、是を則ち妄計と爲す。
諸緣の法和合して名相を分別す、(而も)此等は皆不生なり、是を則ち圓成實性と名く。
十方の諸の刹土〔に於ける〕、衆生の菩薩の中の、有らゆる法報佛も、化身も及び變化も、皆無量壽の極樂界中より出づ。
方廣經中に於いて應に密意の說を知るべし。有らゆる佛子の說と及び諸の導師の說は、悉く是れ化身の說なり、是れ實報の佛に非ず。
諸法は生あることなし、〔而も〕彼〔等〕は亦た非有にあらず。幻の如く亦た夢の如く、化の如く〔亦た〕乾〔闥婆〕城の如し。
種種は心に由つて起り、種種は心に由つて脫す。心生ずるは更に餘〔物を生ずる〕に非ず、心滅するも亦た是の如し。
衆生の分別を以て現ずる所の虛妄の相は、唯心にして實に境なし。〔是の故に〕分別を離るれば(則ち)解脫することを得む。

無始より來、積集する分別に由り、諸の戲論の惡習に熏せられて、此に虛妄の境を起すは、妄に自性を計するが故なり。

諸法は皆無生にして緣起に依止す。衆生は迷ひて分別すれども、(若し)分別相應せざれば、依他(起性)は卽ち淸淨なり。所住に分別を離れて、依を轉ずれば卽ち眞如なり。

妄りに虛妄を計すること勿れ、妄計は卽ち實なし、迷惑して妄りに[能]取所取を分別すれども(彼等は)皆無なり。分別を以て外境ありと見るは、是れ自性を妄計するのみ。

此の虛妄の計に由つて、緣起の自性生ず。邪見も諸の外境も、(又は)境なし[と見るも]但是れ心のみ。

理の如くに正しく觀察すれば、能[取]も所取も皆滅す。愚の分別する所の如き外境は、實に有るにあらざるなり。

習氣は心を擾濁し外境に似て轉ず、已に二つの分別を滅すれば、智は眞如に契はむ。

無影像を起すは、難思の聖の所行なり。父母の和合によるは、酥の瓶に在るが如し。

阿賴耶と意とは俱に赤白をして增長せしむ。(二四)閉尸と及び(二五)稠胞、穢業は種種に生ず。

【二四】閉尸(Pesi)とは、母胎に於ける初期の肉片を意味す。

【二五】胞稠は多分、梵語Arbuda(アルブダ)の譯語ならん、Arbudaは託胎後第二の七日に於ける胎兒の狀態なり。

業風は四大を增し、出生は果の熟するが如し。五と五と及び五と、瘡竅に九種あり。爪甲齒毛具さに滿足すれば卽ち生る。初生は猶ほ糞蟲のごとし。亦人の睡より覺め、眼を開きて色を見るが如く、分別漸く增長す。

分別決了し已れば、脣齶等和合して、始めて言語を發すること、猶ほ鸚鵡等の如し。

衆生の意樂に隨つて大乘を安立す、〔これ〕惡見の行處に非ず、外道の受る能はざるところなり。自內所證の乘は、計度の所行にあらず。

願くは說き給へよ、「佛の滅後、誰か能く此の〔法〕を受持せむ。」大慧よ、汝應に知るべし、善逝の涅槃の後、未來世に當に我が法を持する者あるべきことを。

〔彼は〕南天竺國の中〔に生る〕大名德の比丘にして、その號を龍樹と謂へるものなり。〔彼は〕能く有無の宗を破し、世間の中に我が無上の大乘の法を顯〔揚〕し、初め歡喜地を得て安樂國に往生せむ。

衆緣の起す所の義は有無倶に不可なり。緣中に物〔あり〕と妄計し、(又)有無を分別す、是の如きは外道の見にして、我が法を遠離す。

一切法の名字を生處に常に隨逐して、已習と及び現習と共に展轉して分別〔の基〕をなす。

若し名を説かずんば、世間は皆迷惑せむ、「その」迷惑を除かんが爲の故に名言を立す。
愚(夫)は諸法を分別して、名字及び諸緣の生に迷惑す。是の三種の分別は、不生不滅なるを以て、本性は虛空の如し、自性の所有なき、是を妄計の相と名く。
「諸法は」幻、影、陽焰、鏡像、夢、火輪、響、及び乾「闥婆」城の如し、是を則ち依他起「性」と「名く」。
眞如と空と不二と、實際と及び法性とは、皆分別あること無し。我は是を説いて圓成「實性と名く」。
言語と心の所行は虛妄にして二邊に墮す、「ただ」實諦なるは慧の分別のみ。「蓋し」是の慧は無分別「なるを以て」なり。
「此の慧は」智者にありて現ずる所にして、愚者にありては則ち現せず。是の如くにして現ずる所の一切の法は、無相なることを知る。
愚(人)は金に非ざる假金の瓔珞を金なりと謂へるが如く、外道の妄に計度する諸法も亦た是の如し。
諸法は無始「無」終にして眞實の相に住す。世間は皆作るものなし、「愚人は」妄計して「此の

理を〕了ずること能はず。

過去の有らゆる法も、未來及び現在の一切の法も、皆悉く是れ無生なり。

諸緣和合の故に法ありと說く、若し〔諸緣の〕和合を離るれば、生ぜず亦た滅せざるなり。

而も諸の緣起の法は、一なりとも異なりとも謂ふ可らず。〔是故に〕略說して以て生と爲し、廣說して則ち滅と爲す。

一は是れ不生空にして、一は復た是れ生空なり。不生空は勝れ、生空は則ち壞滅す。

眞如と、空と、實際と、涅槃又は法界と、〔或は〕種種の意生身とは、皆我が說く〔所の一法の〕異名なり。

〔學佛者は〕諸の經律論に於いて、〔應に〕淨分別を起すべし。若し無我を了らずんば、則ち教に依りて義に依らざるものなり。

衆生の妄に分別して見る所は、〔譬へば〕兎の角の如し。〔また〕分別の〔人を〕迷惑せしむることは、〔恰も〕渴獸の焰を逐ふが如し。

分別は〔虛〕妄の執著に由りて起る、若し妄執の因を離るれば、分別は則ち起らず。

甚深の大方廣は、諸刹自在を知ると說く、これ佛子の爲にして諸の聲聞の爲にあらず。

我は諸の聲聞の爲に、三有は空なり、無常なり、我我所を遠離すと說く、是の如きは總相の說なり。

一切の法に著せず、寂靜にして獨り行ずる所の、辟支〔佛〕の果を思念せよとは、われ彼の人の爲に說くなり。

身は是れ依他起〔の性〕なり、迷惑して自ら見えず、分別の外に自性〔ありとし〕、心をして妄起せしむ。

報得と及び加持と、諸趣の種類生と及び夢中の所得とは、是れ神通の四種なり。

夢中の所得と、及び佛の威力と、諸趣の種類等とは、皆（これ）報得通にあらず。

習氣、心に熏じて、物に似て影を起す、凡愚は〔此の理を〕悟ること能はず、是の故に說いて生と爲す。

妄分別に隨つて、(二六)諸法の相を成就す、爾の時心は悶沒して自心の迷を見ず。

(二七)何故に生と說き、何故に無見と說く。不可見にして見〔とは何の謂ひぞや〕。願くは〔佛〕我

〔二六〕此の二句は魏譯を採る。唐譯には「外相幾時有、爾所時增妄」とあり。

〔二七〕此の偈は全部魏譯によれり。

が爲に說き給へよ。

何等の人の爲にか何等の法は有なりと說き、何等の人の爲にか何等の法は無なりと說く。

心の體は本自ら淨にして、意及び諸識と倶なり、習氣の常に熏ずるが故に諸の濁亂を作す。

藏識は身を捨し、意は乃ち諸趣を求め、(一八)意識は境界を取り、迷惑して見て貪り取る。

所見は唯自心にして外境は不可得なり、若し是の如きの觀を修せば妄を捨てて眞如を念ぜむ。

諸の定者の境界と業及び佛の威力と、此の三不思議は、難思智の所行なり。

我は世俗に隨つて、過〔去及び〕未〔來〕の補伽羅と、虛空及び涅槃とを說く、眞諦は文字を離る。

二乘と及び外道とは、同じく諸見に依止し、唯心に迷惑して、妄に外境を分別す。

羅漢と辟支佛と、及び佛菩提の種子は堅し、成就すれば佛、夢に其の頂に灌ぎ給ふ。

心は幻にして寂靜に趣く、何すれぞ有無と說き、何の處、誰の爲め、何故なるか、願くは爲に說き給へ。

唯心に迷惑するが故に幻〔の如く〕有無と說く、生滅の相、相應すれば相と所相と平等なり。

分別を意識と名く、〔意識は〕五識と倶に、影像の如く瀑流の如く、心の種子より起る。

【一八】此の偈も魏譯に據れり。

若し心と意と、及び諸識と起らずんば、即ち意生身を得、亦た佛地を得む。

諸縁も及び蘊界も、人法の自相も、皆心〔の所現にして〕假の施設のみ、夢及び毛輪の如し。

世は幻夢の如しと觀じて眞實に依止せよ。眞實は諸相を離れ、亦た因の相應を離る。

（二九）聖者は〔自ら心〕内に證する所〔の境界に住して〕、常に諸の妙行を觀じ、迷惑斟量の因を覆して、世間をして實〔際〕を〔了〕解せしむ。

一切の戲論滅すれば、迷惑は則ち生ぜず。迷ひの分別あるに隨つて疑心常に現起す。

諸法は空にして無性なり。（然るを）是は常なり無常なりと〔謂ふ〕は、生論者の所見にして、是れ無生論にはあらざるなり。

【二九】此の偈は主として魏譯に據れり。

〔外道は諸法を〕一なり異なり、倶なり不倶なり〔と觀じ、或は〕世間を分別して自然、自在、時、微塵若くは勝性〔の生ずる所〕となす。

識は生死の種たり、種あるが故に生あり。（譬へば）畫の壁に依るが如し、〔此の理を〕了知すれば〔生死の種は〕即ち滅す。

譬へば幻人を見て、幻の生死ありと〔思ふが〕如し、凡愚も亦た是の如く、〔愚〕癡なるが故に縛脫を起す。

修行者は、內外二種の法と、彼の因緣とは、皆無相に住すと觀察せよ。

習氣は心を離れず、亦た心と俱ならず、習の爲に纏はらると雖も、心相は差別なし。

心は白色の衣の如く、意識の習を垢となし、垢習の汚す所となり、心をして顯現せしめず。

我は、虛空の有にあらず、亦た無にあらざるが如く、藏識も亦た皆有無を遠離すと說く。

意識若し依を轉せば、心は則ち濁亂を離る。我は心を佛となす、心は一切の法を覺了して、

永く三〔種の〕相續を斷じ、亦四句を離れ、有無皆捨離すと說く。

諸有は恒に幻の如し、前七地の心起るが故に二〔種の〕自性あり、

餘地及び佛地は、悉く是れ圓成實〔性〕なり。

欲(界)も色(界)も無色(界)も及び涅槃も皆これ心の境界にして、

〔三〇〕身中を離れざるなり。

其の所得あるに隨つて、是に則ち迷惑起る。若し自心を覺り已れば、迷惑は則ち生せず。

我は二種の法を立つ、諸相と及び證となり。四種の理趣を以て方便の說成就す。

種種の名相を見るに、是れ迷惑分別のみ。若し名相を離るれば、自性〔淸〕淨なる聖の〔三一〕

境界とならむ。

【三〇】此の一句は魏譯を採れり

【三一】唐譯には「所行」とあれども今は魏譯によりて「境界」とせり。

能所の分別に隨へば、則ち妄計の相あり、若し彼の分別を離るれば、(則ち)實體は性の境界たらむ。

心もし解脫する時は、則ち常恆に眞實となり、種性、法性及び眞如は分別を離れむ。

清淨の心あるが故に、雜染〔の法〕現ずることあり、無淨なれば則ち無染にして、眞淨は聖の境界なり。

世間は緣より生じて分別を增長す、かれ(若し)幻夢の如しと觀ずれば、是の時は卽ち解脫〔を得む〕。

〔心は〕種種の惡習氣と和合するが故に、衆生は外境を見て、心の法性を見ざるなり。

心性は本淸淨にして諸の迷惑を生ぜず、迷は惡習に從つて起る、是故に〔衆生は〕心〔の本性〕を見ず。

唯迷惑卽ち眞なり、眞實は(決して)餘處にあるにあらず、そは諸行は行に非ず、(亦)餘處に見えざるを以てなり。

若し諸の有爲の法は、〔能〕相所相を遠離すと觀せば、衆相を離るるが故に世は唯自心〔の所現なり〕と見む。

唯心に安住して、外境を分別せず、〔常に〕眞如に住せば、所緣は心量を超過せむ。

若し心量を超過せば、亦た無相を超〔過〕せむ。〔そは〕無相に住するものは、大乘を見ざるを以てなり。

寂に行じて、無功用に諸の大願を淨修せよ、われ最勝智は無相なるが故に〔外境を〕見ず。

應に心の所行を觀ずべし、亦た(應に)智の所行を觀ずべし、慧の所行を觀見せば、相に於いて迷惑なし。

心の所行は苦諦にして、智の所行は是れ集〔諦なり〕、(而して)餘の二及び佛地は皆これ慧の所行なり。

得果と、涅槃と、八聖道と、及び一切の法を覺了するは、是れ佛の淸淨智なり。

衆生の眼識は、眼根と色境と空と明と作意と(の和合)によりて、藏識より生ずることを得。

取者も、能〔取〕も所取も、名事ともに有ること無し、妄に無因を分別する、是を無智者とす。

名も義も互に生ぜず、名義の別も亦た爾なり、〔有〕因無因の生を計するも、(亦た)分別を離れざるなり。

妄に實諦に住すと謂ふは、見に隨つて施設せる說のみ、一性五不成は諦の義を捨離す。

應に有無を戲論する〔が如き〕此等の魔〔業〕を超ゆべし。〔聖者は〕無我を見るが故に、妄に諸有を求めざるなり。

作者を計して常と爲し、呪術を〔行〕じて諍論を興す。實諦は言說を離れ、而も寂滅の法を見る。藏識に依るが故に意轉あることを得、心意を依と爲すが故に諸識の生あるなり。

定者は、虛妄所立の法と、心性と及び眞如と、是の如きものを觀じて、唯心の性に通達す。

〔定者は〕意と相と事とを觀じて、常無常及び生不生を念はず。(又)二義を分別せず。

阿賴耶(識)より諸識を生起し、終に一義に於いて二種の心を生ぜず。

〔諸法は〕自心〔の所現なりと〕見るに由るが故に、空にあらず言說にあらず。若し自心を見ずんば、見網の爲に縛せられむ。

諸緣は生あることなく、諸根は所有なく、貪なく蘊界なく、悉く諸の有爲もなし。

本より諸の業報なく、作も無く有爲も無く、執著は本來無なり、〔是の故に〕縛もなく亦た脫もなし。

有〔記法〕も無く、無記法もなく、法も非法も皆無なり。時に非ず、涅槃にあらず、法性は不可得なり。

佛に非ず、眞諦に非ず、因に非ず亦果に非ず、倒に非ず涅槃に非ず、生に非ず亦滅に非ず。亦た十二支も無く、邊無邊も有るに非ず、一切の見みな(悉く)斷ず、我は是を唯心なりと說くなり。

煩惱業と身と、及び業と得果とは皆焰の如く、夢の如く、乾闥婆城の如し。

唯心に住するを以ての故に、諸相みな捨離し、唯心に住するを以ての故に、能く斷常を見るなり。

涅槃には諸蘊なく、我も無く亦相もなく、唯心に入るを以て、依を轉じて解脫することを得るなり。

惡習を因となすが故に、外に大地及び諸の衆生を現ず、唯心なれば(則ち)所見なし。

身も資〔財〕も土〔地〕も影像も、(皆)衆生の習の所現のみ。心は有無にあらず、(而も)習氣は〔心の本性を〕顯はれざらしむ。

垢は淨中に現ずれども淨は垢を現せず、雲の虛空を翳ずるが如く心の現せざるも亦爾なり。

妄計の性は〔諸法を〕有と爲せども、緣起には則ち無し、妄計の迷執〔を以てすれば諸法は有なれども〕、緣起には分別なし。

所造は皆色にあらず、色あれば所造に非ず、夢、幻、焔、乾城、此等は所造にあらず。
若し緣生の法に於いて、實或は不實と謂はば、此人は決定して、一異等の諸見に依るなり。
聲聞に三種あり、顯生と變化と及び貪瞋等を離るるとなり。法の所生に從ふ。
菩薩にも亦た三種あり、（謂く）未だ諸佛の相にあらざると、衆生を思念すると、佛像を現せざるとなり。
衆生の心の現はす所は皆習氣より生ず、種種の諸の影像は星雲日月の如し。
若し大種これ有ならば所造の生あるべし、〔而も〕大種は無性なるが故に、能相も〔無く〕所相も無し。
大種は是れ能造にして地等は是れ所造なり、大種は本より無性なり、故に所造の色なきなり。
假實等の諸色、及び幻の起す所の色、夢色及び乾〔闥婆〕城の色、焔色を第五と爲す。一闡提に五種あり。種性の五も亦た然り。五乘及び非乘の涅槃に六種あり、諸蘊は二十四あり、諸色に八種あり、佛に二十四あり。
佛子に二種あり、法門に百八あり、聲聞に三種あり、諸佛の刹〔土〕は唯一なり、佛の一なることも亦た復た然り。

解脱に三種あり、心の流注に四あり、無我に六種あり、所知に亦た四あり。
內の自證は不動にして、作者を遠離し、また諸見の過を離る、是れ無上の大乘なり。
生と不生とに八種九種あり、一念と漸次とに證得する〔所の〕宗は唯(これ)一なり。
無色界に八種あり、禪の差別に六あり、辟支(佛)と、諸佛子の出離に七種あり。
三世は悉く有ることなく、常無常も亦た無なり、作業及び果報は、皆夢中の事の如し。
諸佛は本より不生なり、聲聞の佛(弟)子の心に恆に見ること能はざるが爲に、幻等の法の如きが故に、ことさらに一切の刹に於いて、兜率より胎に入り給ふ。
(その)初めて生るるや生處より生せず、流轉の衆生の爲に、出家して而も涅槃を說き、諸諦及び諸刹〔に於いて〕機に隨つて覺悟せしめ給ふ。
世間の洲も樹林も無我も外道の行も、禪乘も阿賴耶も、果境の不思議も、星宿月(等)の種類も諸王も諸天種も、乾闥〔婆〕も夜叉の種〔族〕も、
皆愛業に因つて生じ、不思(議)變易の死ありて、猶ほ習氣と倶なり、若し死永へに盡る時は、煩惱の網已に斷ず。
〔佛弟子は〕財穀と金銀と、田宅と及び僮僕と、象馬牛羊等とを畜ふべからず。

穿孔ある床に臥せず、亦た泥をもて地を塗ることを得ざれ、金銀銅鉢等を畜ふべからず。土石及び鐵、鑞或は玻璃器、(二二)是の如きの鉢は畜ふことを聽す、〔ただ〕(二三)摩竭量を以て滿足せよ。

常に靑等の色の牛糞、泥、果葉〔等を染料として〕白色を染壞せる(二四)欽婆羅等〔の布〕を以て袈裟を作らしめよ。

修行者には衣を割截するが爲に、半月の形をなせる(二五)四指量の刀子を畜ふことを聽す。

〔修行者は〕工巧明を學ぶこと勿れ、亦た應に〔市に於いて〕賣買すべからず、若し〔物を購はば〕須らく(二六)淨人を使ふべし。

常に諸根を守護し、善く經律の義を解して、諸の俗人に狎はざれ、是を修行者と名く。

修行者は應に樹下及び巖穴、野屋と塚間と、艸窟と及び露地〔等の如き處〕に住すべし。塚間及び餘處にあるには常に三衣を身に隨へよ。若し衣服闕くる時、來つて施す者あらば應に〔之を〕受くべし。

【二二】此の二句は藏譯より採れり。

【二三】摩竭量とは、幾何量なるや譯者これを見出すこと能はず。

【二四】欽婆羅(Kambala)とは、毛と糸とを雜へたる織物の名。

【二五】藏譯には四寸の刀とあり。共に長さを意味す。

【二六】淨人とは給仕人のこと。

乞食に出でて遊行するに(當りて)は、前に一尋の地を視て、念を攝して行乞し、猶ほ蜂の花を採るが如くせよ。

鬧衆の集まる處、(又は)衆雜の比丘尼の俗と交りて活命するものより食を乞ふべからず。

修行者は、食を乞はんが爲に、諸王及び王子、大臣又は長者(等)に親近すべからず。

修行者は、生家及び死家、親友(或は)所愛の家、(若くは)僧尼の和雜せる處にて食を「取る」べからず。

修行者は、寺中に煙を斷たずして作られたる種種の食、又は故に「人の」爲に作られたるものを食ふべからず。

行者は、世間の能相と所相と、皆悉く生滅を離れ、亦た有無を離るることを觀ぜよ。

卷の第七

偈頌品第十の二

「若し諸の修行者にして分別を起さずんば、久しからずして、三昧と（一）力通と及び自在とを得む。

修行者は、應に（二）微塵、時、勝性（又は）作者（等）に緣つて、世間を生ずと妄執すべからず。

世「間」は自ら分別する、種種の習氣より生ず、修行者は應に觀るべし、諸有は（皆）夢幻の如くなることを。

恒常に（三）誹謗及び建立を遠離し、身、資及び所住に「於いて」三有を分別せざれ。

飲食を思想せず、正念端身にして住し、數諸佛及び菩薩を禮「拜」し恭敬せよ。

善く經律中「に說ける所」の眞實理趣の法、五法（及び）二無我「の義」を解し、亦た自心を思惟

【一】力通とは、神通力の如き靈妙の力を云ふ。
【二】微塵、時、勝性、作者等とは、印度の外道哲學の諸派に於て、萬有の根本なりと執するものなり。詳くは「優波尼沙土」または提婆菩薩著の「外道小乘二十涅槃論」を見よ。
【三】誹謗とは、建立建設の反對なる破壞の義なり。

せよ。
修行者は、〔如來の〕內證の〔淸〕淨の法性と、諸地及び佛地を修習して蓮華灌頂に處れ。
〔修行者は〕諸趣の中に沈淪する諸有を遠離し、塚間(等)の靜處に住して、諸の觀行を修習せよ。
或は有物は無因にして生ず〔と說き〕、妄に斷常を離ると謂ひ、亦た有無を離ると謂ひ、妄計して中道と爲す。
〔或は〕無因論を妄計するあり、無因は是れ斷見なり。外物を了せざるが故に、中道を壞滅す。
〔或は〕斷見に墮せんことを恐れて所執の法を捨てず、建立と誹謗とを以て、妄に說いて中道と爲す。
唯心なりと覺了するを以て、外法を捨離し、亦た妄分別を離る、此行は(則ち)中道に契ふ。
唯心にして(四)境あるなく、境なければ心生せず、我及び諸の如來は、此を說いて中道と爲す。
若は生、若は不生、自性と無自性と、有無等とは皆空なり、〔決して〕二を分別すべからず。

【四】境とは、內界に對する外界、主觀に對する客觀と云はんが如し。

愚夫は分別を起す能はざるを解脱と謂ふ。〔若し〕心に覺智の生ずるなくんば、豈に能く二執を斷ぜんや。

自心を覺するを以ての故に、能く二の所執を斷ず。〔然り〕、了知するが故に能く斷ず、分別すること能はざるには非ざるなり。

心の所現を了知すれば、分別は則ち起らず、分別起らざるが故に、心は轉依して眞如となる。

若し起る所の法を見て、諸の外道の過を離るれば、是れ智者の取る所の涅槃にして、壞滅には非ざるなり。

我及び諸佛は、此を覺るを即ち成佛なりと說く。若し更に〔之に〕異なる分別をなさば、是れ則ち外道の論なり。

不生にして而も生を現じ、不滅にして而も滅を現ず。普く諸億の刹〔土〕に於て、頓に現ずることは、水〔中〕の月の如し。

一身にして多身と爲り、火を燃やし、雨を注ぎ、(五)機の心中に隨つて現ず、是の故に唯心と說くなり。

心も亦た是れ唯心、心は非心にして亦た種種の色相を起す、通達すれば皆これ唯心なり。

【五】機とは、機類又は機根の義なり。

諸佛と聲聞と、緣覺等の形相、及び餘の種種の色は、皆これ唯心なりと說く。

〔如來〕は無色界より乃至地獄の中に至るまで、普く衆生の爲に〔其の身を〕現じ給ふ、皆これ唯心の〔所〕作なり。

如幻(等)の諸の三昧も及び(六)意生身も、十地と(及び)自在も、皆轉依に由りて得らる。

愚夫は相の爲に縛せられ、見聞覺知に隨ひ、自ら分別し顚倒して、戲論の動かす所となる。

一切は空にして無生なり、我は實に涅槃せず、化佛は諸の刹〔土〕に於いて、三乘(又は)一乘を演べ給ふ。

佛に三十六あり、復た各十種あり、衆生の心器に隨つて、而も諸の刹土に現じ給ふ。

法佛の世間に於けるや、猶ほ妄計の性の如し、種種ありと見ゆと雖も、而も實には所有なきなり。

法佛は是れ眞佛にして、餘は皆これ化佛なり。衆生の種子に隨つて、佛の現じ給ふ所の身を見るなり。

諸相に迷惑するを以て分別を起し、分別は眞と異ならず、相は分別に卽せざるなり。

【六】意生身とは、衆生濟度の爲に意の如く生を受け得る身と云ふ義。菩薩の修行の階級たる十地の內、初地以上の菩薩の身を云ふ。

自性と及び受用と、化身と復た現化と、佛德に三十六〔あるは〕皆〔これ〕自性の所成なり。

〔愚夫は〕外より (七)熏習する〔所の〕種〔子〕に由りて分別を生じ、眞實を取らずして、妄に執する所を取るなり。

迷惑は內心を依とし、及び外境を緣とす、但此二に由りて起り、更に第三緣なし。

迷惑は、內外に依つて生起することを得るのみ、故に我は六十二〔見或は〕十八を說いて心となすなり。

但根境あるのみと知れば、則ち (八)我執を離れ、〔唯〕心にして境界なしと悟れば則ち (九)法執を離る。

(一〇)本識に由り依るが故に諸識の生あり、內處に由り依るが故に、外に似て影の現ずることあるなり。

無智〔の〕ものは、恒に (一一)有爲及び無爲を分別すれども、皆悉く不可得なること〔恰も〕夢星毛輪の如し。

【七】熏習とは、身と口とにて現はす善惡の行、又は意に現はるゝ善惡の思想が、起るに隨て、其の氣分を眞如或は阿賴耶識に留むること、香の衣に熏じ附くが如きを云ふ。其の身口意に現はれたるを現行法と云ひ、眞如或は阿賴耶識に氣分の留まりたるを種子又は習氣と云ふ。故に現行法が眞如又は阿賴耶識に其の種子又は習氣を留むる作用これ卽ち熏習なり。

【八】我執とは、我見の執着と云ふ意味にて、おれが〳〵と小我を執して動かざる我見なり。之を佛教哲學にて人我の見と云ふ。

【九】法執とは、心外に有爲無爲の實在せる法ありと固執する妄念を云ふ。佛教のうちに

また乾闥婆城の如く、幻の如く、焰水の如く、非有にして有と見ゆ、緣起の法も亦た然なり。

我は三種の心に依つて、假りに相と境と我とを說けども、而も彼の心意識の自性は所有なきなり。

心と意と識と、二種の無我と、五法と及び自性とは、是れ諸佛の境界なり。

〔一二〕習氣の因は一なれども而も三相を成ず、(譬へば)一彩色を以て壁に畫けども種種に見ゆるが如し。

五法も二(種の)無我も、自性も心意識も、佛の種性の中に於いては、皆悉く不可得なり。

心意識を遠離し、亦た五法を離れ、復た自性を離る、是を佛の種性となす。

若し身〔業〕語〔業〕及び意業〔に於いて〕、白淨の法を修せずんば、如來の〔淸〕淨の種性は、則ち現行を離れむ。

ても、小乘の人は我執を斷ずるも、此の法執を絕つこと能はず、大乘の菩薩に於いて漸く之を斷ずと云ふ。

【一〇】本識とは、阿賴耶識の十八名の一、有爲、無爲一切諸法の根本なるが故に本識と云ふ。

【一一】有爲、無爲。爲とは造作の義にして、造作を有するものを有爲法と云ふ。卽ち因緣所生の事物は盡く有爲法なり。無爲は之に反し、造作を有せざるもの、卽ち本來自存のものにして、因緣所生にあらざるものを云ふ。

【一二】習氣、佛敎にては妄惑を分ちて現行と種子と習氣の三となす。既に現行を摧伏し、且つ惑の種子を斷ずるも、尙ほ惑の氣分ありて、惑相を現

神通力と自在と、三昧と淨莊嚴と、種種の意生身は、是れ佛の淨種性なり。

內自證の無垢なると、因相を遠離せると、(三)八地と及び佛地とは、「これ」如來の性の成ずる所なり。

遠行「地」と善慧「地」と、法雲「地」と及び佛地とは、皆これ佛の種性にして、餘は悉く二乘の攝なり。

如來は心自在なり、諸の愚夫の心相差別せるが爲の故に、七種の地を說き給ふ。

第七地にては、身、語(及び)意の過失を起さず、第八地の所依は、夢に河を渡る等の如し。

八地及び五地にては、工巧明を解了し、諸の佛子は能く諸有の中の王と作る。

智者は、若くは生と若くは不生と、空と及び不空と、自性と(又は)無自性とを分別せず、但唯これ心量にして、而も實に不可得なり。

此は實なり此は虛妄なりと說けるは、諸の二乘の爲にして、諸の佛子の爲にはあらざるなり、故に應に分別すべからず。

有も非有も悉く非なり、亦た剎那の相もなく、假實の法も亦た無し、「故に」唯心にして不可

するを習氣と云ふ。

【三】八地とは辟支佛地なり。

得なり。

(四)有法は是れ俗諦にして、無性は(則ち)第一義〔諦〕なり、無性に迷惑するもの、是を則ち世俗となす。

一切の法は皆空なり、我は諸の凡愚の爲に、俗に隨つて假に施設す、而も彼には眞實なし。

言に由りて起る所の法は、則ち所行の義あり。言の所生を觀見するに、皆悉く不可得なり。

壁を離れて畫なきが如く、質を離れて亦た影なし。藏識若し淸淨なれば、諸識の浪は生ぜず。

法身に依つて報〔身〕あり報〔身〕より化身を起す、此を根本の佛となす、餘は皆化の所現のみ。

應に妄に空と不空とを分別すべからず、有無を妄計せば言義〔ともに〕不可得なり。

凡愚は妄に德、實、塵聚の色を分別すれども、一一の塵は皆なし、是の故に境界なきなり。

衆生の外想を見るは、皆自心の現ずるに由る。所見既に非有なるが故に諸の外境なし。

象の深泥に溺れて復た移動すること能はざるが如く、聲聞の三昧に住して、昏墊するも亦た

【四】有法とは、龜毛兎角の如き體性都て無きものを無法と云へるに對する術語にて、他の事物の如き、體用ともに有るものを云ふ。此の有法は因緣の和合によりて假りに現在せるものなるが故に、第二義即ち俗諦なりと云ふなり。

復た然り。

若し諸の世間は習氣を以て因と爲し、有無(及び)俱非を離ると見ば、法無我[を得て]解脱せむ。

自性を(二五)妄計と名け、緣起は是れ依他[起性]、眞如は(則ち)是れ圓成[實性]なりとは、我が經中に常に說く所なり。

心と意と及び識と、分別と表示と、本識は三有と作る、[而も]皆これ心の異名のみ。

壽も(二六)煖も識も、阿賴耶も(二七)命根も意及び意識も、皆分別の異名なり。

心は能く身を持ち、意は恒に審に思慮し、意識は諸識と俱に自心の境界を了ず。

若し實に我體あらば、異蘊及び蘊中に於いて、我體を求むれども、畢竟するに不可得なり。

一一に世間を觀じて、皆これ自心の現なりとなさば、煩惱(二八)隨眠

【二五】妄計、依他、圓成等の解釋は、本編一[illegible]ページを見よ。

【二六】煖とは、人の熱氣を云ふ。人間は生ける間は、此の熱氣あり。

【二七】命根、命は即ち壽なり、故に命根とは壽命の根本と云ふに同じ。然るに此の術語は、(一)小乘に用ゐる場合と(二)大乘に用ゐる時とに於いて、其の意味多少の相異あり。(一)人には非物非心の體ありて、過去の業により生じ、以て一期の間、煖と識とを維持す。之を命根と名け、壽は、煖と識とを維持するが故に根と名く。(二)命根は第八識の種子に於いて住識の功能あり、以て一期の間、物心を相續せしむる上に假りに名く、別に實體あるにあらず。

に於いて、苦を離れて解脱することを得む。
聲聞は盡智と爲し、緣覺は寂靜の智にして、如來の智慧は生起するに窮盡あることなし。
外には實に色あること無く、唯自心の所現のみ。愚夫は〔此の理を〕覺知せず、妄に有爲を分別す。
愚夫は、外の境界の種種は皆自心〔の所現〕なることを知らず、(一九)
智者は、境界は悉く自心の〔所〕現なることを了知す、〔故に〕宗因喩四句を以て成立す。
因喩の諸句を以て成立せず。
分別と所分別とは是れ妄計の相なり、妄計に依止して復た分別を起し、展轉して互に相依るは、皆一の習氣に因る。此の二は倶に客たり、衆生の心の起るに非ず。
三界の中に安住する、心心所の分別の起す所は境界に似たり、是れ妄計の自性なり。

【一八】隨眠とは、煩惱の異名なり。されど(一)小乘教の場合と(二)大乘教の場合にては、其意味多少の異あり。(一)貪瞋等の煩惱は、生物に隨逐して離れざるが故に隨と云ひ、煩惱の狀態は幽微にして了知し難きこと、猶ほ睡眠の狀態の如くなるが故に眠と云ふ。(二)諸惑の種子は人に隨逐して、阿賴耶識の中に眠伏するが故に隨逐と名け、又諸惑の種子は人に隨逐して益過失を增すこと、恰も人の眠に耽つて益眠を長ずるが如くなるが故に隨眠と云ふ。

【一九】因喩とは、印度の論理學なる因明論の術語。因は命題提出の理由、喩は命題を立證せんが爲の實例なり。

影像と種子と合して十二處と爲り、所依と所緣と合して所作の事ありと說く。
猶ほ鏡中の像の如く、（又）翳眼の毛輪を見る〔が如し〕。習氣に覆はれて凡愚の妄見を起すことも亦た然り。
〔彼等は〕自ら分別する境に於いて、而も分別を起せども、外道の分別の如く、外境は〔畢竟ずるに〕不可得なり。
愚の繩なることを了らずして、妄取して以て蛇と爲すが如く、自心の〔所〕現なることを了らずして、妄に外境を分別す。
是の如く繩の自體は、一異（等）の性みな離るれども、但自心の倒惑〔によりて〕、妄に繩の分別を起すのみ。
妄計し分別すれども彼の性は有に非ず、云何ぞ非有を見て、而も分別を起さんや。
色性は所有なし、瓶衣等も亦た然り、但分別に由りて生ずれども、所見は終に有ること無きなり。
無始より來、有爲の中に、迷惑して分別を起す。（而も）何の法か〔能く〕迷惑せしむるや、願くは佛よ、我が爲に說き給へ。

諸法は自性なし、但唯心の所現のみ。自心を了せず、是の故に分別を生ずるなり。愚の分別する所の如く、妄計は實に有にあらず、彼は此の所有に異りては、知ること能はざるなり。

諸の聖者の所有は、愚の分別する所にあらず、若し聖と凡と同じければ、聖も〔亦た〕應に虚妄なるべし。

聖は淨く心を治む、是の故に迷惑なし、〔然るに〕凡愚の心は淨からず、是の故に〔虚〕妄の分別あるなり。

〔譬へば〕母の嬰兒に〔對ひ〕、「汝啼泣する勿れ。空中に果ありて來る、種種のもの、〔何れも〕汝が取るに任かす」と語るが如し。

我衆生の爲に說く、「種種の妄計の果は、彼をして愛樂せしむるのみ、法は實に有無を離るゝなり」と。

諸法は先に有なるに非ず、因緣は和合せず、本〔來〕不生にして而も生ず、〔而して〕自性は無所有なり。

未生の法は生せず、緣を離れて生處なし、現〔在〕の生法も亦た爾り、緣を離れては不可得な

り。

實に緣起の要〔諦〕を觀ずるに、有にあらず亦た無にあらず、有無俱に非ざるに非ず、〔是の故に〕智者は分別せず。

外道の諸の愚夫は、妄に一異の性を說いて諸の緣起を了らず、世間は幻夢の如し。

我が無上の大乘は、名言を超越して、其の義甚だ明了なれども、(而も)愚夫は〔之を〕覺知せざるなり。

聲聞と及び外道の所說は、皆妄計より起れる慳悋〔の法〕なり、〔故に其の敎〕義をして悉く改變せしめざるべからず。

〔諸の愚夫は〕諸法と及び自體と、形狀及び名と、此の四種を攀緣して、而も諸の分別を起す。

梵〔天〕と自在〔天〕とを計して、一身と多身と、及び日月の運行とを作るとなするもの、彼は是わが〔弟〕子にあらず。

聖見を具足して、如實の法に通達し、善巧に諸想を轉ぜば、(終に)識の彼岸に到らむ。

此の解脫の印を以て、永く有無を離れ、又去來を離る、是れ我が法中の〔弟〕子なり。

若し色識轉滅するとき、諸業も(共に)失壞せば、是れ則ち生死なく、亦た常無常も無けむ。

而かも彼轉滅するとき、色處を捨離すと雖も、業は阿賴耶〔識〕に住して、有無の過失を離る。色識は轉滅すと雖も、而も業は失壞せず、〔そは〕諸有の中に於いて、色識をして復た相續せしむればなり。

若し彼の諸の衆生の起す所の業にして失壞せば、是れ則ち生死なく亦た涅槃あることなけむ。業と色識とは時を倶にして滅壞し、若し生死の中に生ぜば、色〔識〕と業とは應に(區)別なかるべし。

色心と分別とは、異にあらず(亦た)不異にあらず、愚夫は滅壞すと謂ふも、而も實は有無を離る。

緣起と妄計とは、展轉して別相なし。色と無常との如く、展轉して生ずるも亦た爾なり。既に異と非異とを離る、妄計しては知るべからず。色〔に於ける〕無常の性の如し、云何が有無と說かむ。

善く妄計〔の意義〕に達せば、緣起は則ち不生ならむ。緣起を見るに由りて、妄計は則ち眞如なり。

若し妄計の性を滅せば、是れ則ち法眼を壞するなり。便ち我が法中に於いて、建立及び誹謗

をなすなり。

是の如き色類の人は、常に正法を毀謗す、彼は皆非法を以て、我が法眼を滅壞するなり。

智者は(彼と)共に語ること勿れ、(彼は)比丘の事をも亦た棄つ、〔そは〕妄計を滅壞し、建立し誹謗するを以てなり。

若し分別に隨つて有無の見を起すも、そは幻〔の如く〕、毛輪〔の如く〕、夢〔の如く〕、焰〔の如く〕、乾(闥婆)城の如くならむ。

彼は佛法を學ぶにあらず、應に〔彼と〕與に同住すべからず、そは〔彼〕自ら二邊に墮し、亦他を壞するを以てなり。

若し修行者あり、妄計の性を觀じ、寂靜にして有無を離れなば、攝取して、彼と與に同住せよ。

世間の〔或る〕處より金摩尼珠を出さんに、それを造作するものなしと雖も、而も衆生の受用するが如し。

業性も亦た是の如く、種種の性を遠離して、所見の業は非有なれども、諸趣に生ぜざるには非ず。

聖の了知する所の如くむば、法は皆所有なし、愚夫の分別する所の妄計の法は無にあらず。
若し愚夫の分別する所の彼の法にして非有ならば、既に一切の法も無く、衆生に雜染もなけむ。
〔而も〕雜染の法あるを以て、無明と愛とに繫がれ、能く生死の身を起し、諸根悉く具足するなり。
若し愚〔夫〕の分別して、此の法は皆無なりと謂はば、則ち諸根の生も無けむ、〔故に〕彼は正しき修行者にあらず。
若し此の法あることなくして、而も生死の因とならば、愚夫は修〔行〕を待たずして、自然に解脫せむ。
若し彼の法あるなくんば、云何にしてか凡聖を別たむ。亦た則ち聖人無くんば、〔誰か能く〕三解脫を修行せむ。
諸蘊及び人法の自〔相〕共相の無相なると、諸緣及び諸根とは、われ(是を)聲聞の爲に說く。
唯心と及び非因と、諸地と自在と(及び)內證の淨眞如とは、われ(是を)佛子の爲に說く。
未來世に〔於いて〕、身に袈裟を著け〔ながら〕、妄に有無を說いて我が正法を毀壞するものあ

らむ。
縁起の法は無性なりとは、是れ諸聖の所行なり、妄計の性には(二〇)法體なしとは、計度者の分別のみ。

未來〔世〕に愚癡なる揭那の諸の外道あり、無因論を說き、惡見〔に墮して〕世間を壞せむ。

〔或は外道あり〕諸の世間は、微塵より生ず〔と〕妄說すれども、而も彼の塵は無因なり。

〔或は〕九種の實物は常なり、實能く實を生じ、德能く德を生ず〔と謂ふも〕、眞〔の〕法性は此と異なる、毀謗して說いて無と言ふ。

若し本より無にして而も生ぜば、世間は則ち始あらむ。〔されど〕生死には前際なしとは、是れ我が說く所なり。

〔若し〕三界の一切の物にして、本〔來〕無にして而も生ぜば、駝、驢及び狗に角の生ずることも、亦た應に疑あることなかるべし。

眼、色〔及び〕識は、本〔來〕無にして、而も今生あらば、衣冠及び席等は、應に泥團より生ずべし。

疊中に席なきが如く、蒲中にも亦席なくんば、何ぞ諸緣の中に一一に皆席を生ぜざらむ。

【二〇】唐譯には妄計性無物と云ひ、魏譯には分別無法體とあり。今は物字の代りに法體の二字を採れり。

若し彼の命者と身とは、本〔來〕無にして而も生ずと云ふは、我先に已に彼は皆これ外道論なりと說けり。

我が先に說く所の宗は、彼の〔外道の〕意を遮せんが爲めなり。既に彼を遮し已つて然して後に自宗を說く。

諸の弟子衆の、有無の宗に迷著せんことを恐る、是の故に我は其〔等〕の爲に外道論を說かむ。

(二)伽毘羅は惡慧もて、諸の弟子の爲に、勝性は世間を生じ、求那に轉變せらると說く。

諸緣あるなきが故に、已生にあらず現生にあらず、諸緣既に緣にあらずんば、生にあらず不生に非ず。

我が宗は有無を離れ、亦た諸の因緣を離れ、生滅及び所相、一切みな遠離す。

世間は幻夢の如く、因緣は皆無性なり、常に是の如き觀を作さば、分別は永へに起らざらむ。

若し諸有は、焰及び毛輪の如く、亦た(三)尋香城の如しと觀ぜば常に有無を離れ、因緣ともに捨離し、心をして悉く淸淨ならしめむ。

〔二〕此の偈は數論哲學の骨髓を破斥するを目的とす。

〔三〕尋香城とは、乾闥婆城のことにて、空中の蜃氣樓の如きものを云ふ。

若し外境なく、而も唯心ありと言はゞ、境なければ則ち心も〔亦た〕無し、云何が唯識〔の義〕を成ぜむ。

所縁の境あるを以て、衆生の心は起ることを得、(若し)因なくんば心は(則ち)生ぜず、云何か唯識を成ぜむ。

眞如と及び唯識とは、是れ衆聖の所行なり、(若し)此の有は非有なりと言はゞ、彼は我が法を解せざるなり。

能取と所取とによりて、心は生起することを得、世間の心は是の如し、故に是れ唯心〔の義〕にあらず。

身、資〔財〕、〔刹〕土、影像は夢の如く心より生ず、心は二分と成ると雖も、而も心には二相なし。

刀の自ら割かざるが如く、指の自ら觸れざるが如く、心の自らを見ざる事も亦た是の如し。

影像處あること無ければ、則ち依他起〔の性〕なく、妄計の性も亦た無く、五法一心も盡きむ。

能生及び所生は、皆これ自心の相なり、密意に能生と說けども、實には自性無きなり。

種種の境〔及び〕形狀、若し妄計に由りて生ぜば、虛空、兎角も亦た應に境相を成ずべし。

境は心より起るが故に、此の境は妄計にあらず、然も彼の妄計の境は、心を離れては不可得なり。

無始の生死の中の境界は悉く有にあらず、心の起る處あるなくんば、云何が影像を成せむ、若し物なくして生あらば、兎の角は應に生あるべし。〔されど〕物なくんば生ず可らず。

而も分別を起さば(恰も)鏡の非有を現ず〔と謂ふ〕が如し、彼則ち先づ無し、云何ぞ心は無境の中に境を緣じて起らんや。

眞如も空も實際も、涅槃及び法界も、一切の法は(悉く)不生なり、是を第一義の性となす。

愚夫は有無の分別に墮して、諸の因緣によりて諸有あることを知る能はず。

無生なれば作者なく、無始の心の所因なれば、唯心にして所見無し。

既に無始の境なくんば、心は何の所よりか生ぜむ。物なくして生ずることを得ば、貧は應に是れ富なるべし。

無境にして而も心を生ず〔る理由は如何〕、願くは、佛よ、我が爲に說き給へ。

一切若し因なくんば、心もなく亦た境も無けむ。心既に生所なくんば三有の所作を離れむ。

(譬へば)瓶衣の角等に因つて、兎の角なきを說く〔が如し〕、是故に彼の相は因法なしと言ふ

べからず。

無因は有なるが故に無と謂はば、是の無は無を成せず、有の無を待つも亦た爾り、展轉の相に因つて起る。

若し少法に依止して、少法の起るあらば、是れ則ち前の所依は無因にして自有なり。

若し彼別に依あらば、彼の依には復た依あり、是の如きは則ち無窮なり、亦た少法の有ること無けむ。

木葉等に依りて種種の幻相を現ずるが如し。衆生も亦た是の如く、事に依つて種種を現ず。

幻師の力に依りて愚をして幻相を見せしむ、而も木葉等に於いては實に幻の得べきなし。

若し事に依止せば、此の法は便ち壞す、所見既に二なし、何ぞ少かも分別あらむ。

分別にして妄計なくんば、分別も亦た有ること無し、分別なきを以ての故に、生死涅槃なきなり。

所分別なくんば、分別は則ち起らず、云何ぞ心起らずして、而も唯心あることを得む。

意の差別は無量なれども、皆眞實の法なし、實なきが故に解脫もなく、亦た諸の世間もなきなり。

愚〔夫〕の分別する所の如き、外の所見は皆無なり、習氣の心を擾濁して、影像に似て現ぜしむるのみ。

有無等の諸法は、一切みな不生なり、但唯自心の現ずるのみにして、分別を遠離す。

諸法は緣より〔生ず〕と說けるは、愚の爲にして智者〔の爲〕には非ず。心の自性は解脫にして淨心は聖の住する所なり。

數〔論〕も勝〔論〕も及び露形〔外道〕も、梵志も自在〔天〕も、皆無見に墮して、寂靜の義を遠離せり。

無生にして無自性、垢を離れて空なること幻の如し、諸佛及び今佛は、誰が爲にか是の如く說き給ふ。

淨心の修行者は、諸見の計度を離る、諸佛は彼が爲に說き給ふ、我も亦た是の如く說かむ。

若し一切みな心ならば、世間は何れの處にか住す、〔また〕何に因つてか大地を見る。

衆生に去來あり、鳥の虛空に遊ぶが如く、分別に隨つて去〔來〕す、〔彼等は〕依もなく亦た住もなし。

地を履んで行くが如く、衆生も亦た是の如く、〔虛〕妄の分別に隨つて、自心に遊履するは、

鳥の虚空にあるが如し。

佛は、身、資、國土、影は唯心の起すものなりと説き給ふ。願くは影と唯心とは何に因つて、(又)云何にして起るかを説き給へ。

身も資も國土も影も、皆習氣に由りて轉ず、亦た不如理に因りて分別の生ずる所なり。

外境は是れ妄計なり、心は彼の境を縁じて生ず。(若し)境は是れ唯心なることを了せば、分別は則ち起らず。

若し妄計の性は名と義と和合せざるを見ば、覺所覺を遠離して諸の有爲を解脱せむ。

名と義と皆捨離す、此は是れ諸佛の法なり。若し此に異りて悟を求めば、彼は自覺もなく亦た他覺もなし。

若し能く世間は能覺所覺を離ると見ば、是の時は則ち名、所名の分別を起さず。

自心を見るに由るが故に、妄作の名字滅す、(若し)自心を見ざれば、則ち彼の分別を起さむ。

四蘊は色相なく、彼の數は不可得なり。大種の性は各異なる、云何が共に色を生ぜむ。

諸相を離るるに由るが故に、能造所造は非有なり、異色なれば則ち有相、諸蘊は何ぞ不生なる。

若し無相を見ば、蘊處皆捨離せむ、是の時、心も亦離る、そは法無我を見るを以てなり。
根境の差別によりて八種の識を生ず、彼の無相の中に於いては、是の三相は皆離る。
意は阿賴耶を緣じて我我所の執と、識の二執取を起す、了知すれば皆遠離す。
觀見して一異を離るれば、是れ則ち動ずる所なく、我我所を離るるなり。
二種の妄分別にして生ずるなくんば、增長するなく亦た識の因とならず、旣に能所の相を離る、滅し已れば復た生せず。
世間は能作なく、また能〔相〕所相を離る。妄計と及び唯心〔との關係〕は云何。願くは〔我が〕爲に說き給へ。
自心は、種種に分別して、諸の形相を現ず。〔愚夫は〕心の所現を了せずして、妄取して心外と謂ふ。
智覺なきに由るが故に、無の見を起す。云何が有性に於いて、而も心に著を生ぜざらんや。
分別は有無にあらず、故に有に於いては不生なり。所見は唯心なることを了ずれば、分別は則ち起らず。
分別起らざるが故に、依を轉じて著する所なく、〔こゝに〕則ち四宗を遮す。

謂く、法は因あり等と〔言ふは〕、此れ但異名の別のみにして、立つる所〔の宗〕は成ぜず。應に知るべし、能作の因も亦た復た成立せざることを。能作を遮せんが爲には因縁の和合を說き、常の過を遮せんが爲には、縁これ無常と說く。愚夫は無常と謂ふも、而も實には生滅せず。滅壞の法を見ずして、能く所作あり、何ぞ無常の法あつて、而も能く所生あらんや。

天、人、阿修羅、鬼、畜、閻魔等の衆生は、中にありて生ず、我は(之を)說いて六道と爲す。

業の上中下に由りて、中に於いて受生し、諸の善法を守護して、勝解脫を得るなり。

佛は、諸の比丘の爲に、所受の生は念念に皆生滅すと說き給ふ、請ふ我が爲に宣說し給へ。

〔二三〕色色は暫くも停らず、〔二四〕心心も亦た生滅す。われ弟子の爲に、受生は念念に遷謝すと說く。色色の中における、分別の生滅も、亦た復た然り。分別は是れ衆生、分別を離れては非有なり。我この縁の爲に、念念の生を說く。若し取著の色を離るれば、不生にして亦た不滅なり。

【二三】色色とは、物質の本體と其の作用とを云ふ。
【二四】心心とは、心王と心所、卽ち精神の體と其の現象となり

緣生と非緣生と、無明と眞如等とは、二法の故に起るなり、無二は卽ち眞如なり。

若し彼の緣と非緣との生法に差別あらば、常等と諸緣とには、能作所作あらむ。

是れ則ち大牟尼及び諸佛の所說なり。〔若し〕能作所作あらば、(則ち)外道と異なるなし。

(二五)我は弟子の爲に、身は是れ苦の世間にして、亦た是れ世間の集と滅と道と皆悉く具すと說く。

凡夫は〔虛〕妄に分別して、(二六)三の自性を取るが故に、能〔取〕所取(及び)世、出世の法ありと見るなり。

我は先に觀待するが故に、自性を取ると說き、今は諸見を遮せんが爲に、應に〔虛〕妄に分別すべからず〔と說く〕。

過を求むるを非法と爲し、亦た心をして不定ならしむるは、皆二取に由りて起る、無二は卽ち眞如なり。

若し無明愛業にして識等を生せば、邪念も復た因あり、是に則ち無窮の過あるなり。

無智〔のもの〕は、諸法に四種の生滅ありと說き、妄に二の分別を起せども、法は實に有無を離れ、四句を遠離し、亦た二見を離る。

【二五】此の偈は苦集滅道の四諦を明かせるなり。

【二六】三の自性とは、妄計性と緣起性と眞實性となり。凡夫は此の三つに各々獨立不變の自性ありと見るなり。

分別の起る所は二、〔これを〕了り已れば復た生ぜず、不生の中に生を知り、生の中に亦た不生を知る。

彼の法は同等の故に、應に分別を起すべからず、願くは佛よ、我が爲に說きて、二見の理を遮し、

我及び餘衆をして、恒に有無に墮せず、諸の外道に雜はらず、亦た二乘を離れしめ給へ。

諸佛〔自〕證の所行は、佛子不退の處なり。解脫の因は因にあらず、同一にして無生の相なり

迷ふが故に異名を執す、智者は應に常に離るべし。

法は分別より生じて、毛輪〔の如く〕、幻〔の如く〕、焰の如し。〔然るを〕外道は〔虛〕妄に分別して、世は自性より生ず〔と謂ふ〕。

無生及び眞如と、性空と實際と、此等は(皆)異名の說なり、執して無と爲すべからず。

手に多名あるが如く、帝釋も亦た爾なり、諸法も亦た是の如し、執して無と爲すべからず。

色と空とは異なるなし、無生も亦た復た然り、應に執して異となし、諸見の過失を成ずべからず。

總分別と別分別と、及び徧分別を以ての故に、諸事の相なる長短方圓等に執著す。

總分別は是れ心にして偏分別を意と爲す、別分別は是れ識なり、皆能〔相〕所相を離る。

我が法中に見を起すと、及び外道の無生〔を說く〕とは、皆これ〔虛〕妄の分別のみ、過失は等うして異なることなし。

若し能く我が說く所の無生と、及び無生の所爲とを解了するものあらば、是の人は我が法を解するなり。

諸見を破して、無生と無住處と、此の二義を知らしめんが爲の故に、我は無生を說くなり。

佛の說き給へる無生の法は、若は是れ有、〔若は〕是れ無ならば、則ち諸の外道の無因不生論に同じからむ。

我が說く唯心の量は有無を遠離す、若くは生と若くは不生と、是の〔如きの〕見は應に皆離るべし。

無因論の不生は、生ずれば則ち作者に著し、作は則ち諸見を雜え、無なれば則ち自然の生ならむ。

佛は諸方便を說き給ふ、若し正見、大願等一切の法無なれば、道場は何の成ずる所ぞ。

能取所取を離るれば、生に非ず亦滅に非ざるなり。所見の法は法に非ず、皆自心より起る。

牟尼の所說は前後自ら相違す、云何が諸法を說いて、〔今〕復た不生と言ふや。衆生は〔その理由を〕知ること能はざらむ。

願くは佛よ、我が爲に說き、外道の過及び顚倒の因を離るることを得せしめ給へ。

唯願くは勝說者よ、生と滅とを說き、皆有無を離れて、而も因果を壞せざらしめ給へ。

世間は二邊に墮し、諸見の迷惑する所なり、唯願くは(二七)靑蓮眼よ、諸地の次第を說き給へ。

生(又は)不生等を取り、寂滅の因を了せずんば、道場は所得なく、我も亦た所說なけむ。

刹那の法は皆空にして、無性なり、無自性なり、諸佛は已に二を淨め給ふ、二あれば卽ち過を成ず。

惡見の覆ふ所の分別は如來にあらず、〔而も〕妄に生滅を計す、願くは我等が爲に說き給へ。

戲論を積集して、和合の生ずる所、其の類に隨つて現前して色境みな具足す。

外色を見已つて分別を起す、若し此を了知すれば、則ち眞實の義を見む。

若し大種を離れては、諸物は皆成ぜず、大種旣に唯心なれば、當に知るべし所生なきことを。

【二七】靑蓮眼とは、佛陀のことなり。靑蓮は梵名(Utpala)にて、靑色の蓮華なり。其の葉修くして廣し、靑白分明にして大人の眼目の相あり。故に取つて佛の眼に譬ふ。

此の心も亦た不生なれば、則ち聖の種性に順ず、分別を分別することなかれ、無分別は是れ(則ち)智なり。

分別を分別する、是の二は涅槃にあらず。若し無生の宗を立せば、則ち幻法を壞せむ、亦た因なきに幻を起さば、自宗を損減せむ。

〔諸法は〕猶ほ鏡中の像の如く、一異の性を離ると雖も、所見は是れ無にあらず。

生相も亦た是の如し、乾〔闥婆〕城又は幻等の如く、悉く因縁を待つてあり、諸法も亦た是の如し。

是の生は不生にあらず。人と法とを分別して、而して二種の我を起つ、此は但世俗の說なり。

愚夫は願と緣集とによりて自力及び最勝、聲聞法の第五たる〔阿〕羅漢等あることを覺知せざるなり。

時隔と及び滅壞と、勝義と遞遷とは、是れ四種の無常なり。愚〔夫〕の分別は智にあらず、愚夫は二邊に墮す。

德と〔微〕塵と自性の作とは、有無の宗を取るを以て、解脫の因を知らざるなり。

大種は互に相違す、安んぞ能く色を起さんや。但これ大種の性にして、大〔種〕には所造の色

なし。
火は乃ち色を燒き、水は復た瀾壞を爲し、風は能く散滅せしむ、云何が色を生ずることを得む。
色蘊と及び識蘊と（二八）唯此の二にして五にあらず、餘は但これ異名のみ、〔故に〕我は彼〔等〕を說いて怨の如しとなす。
心心所は差別して現法を起さ、諸色を分析すれば、唯心にして所造なし、靑白等の相待つて〔存するが如し〕。
作、所作も亦た然り。所生及び生空、冷、熱、〔能〕相、所相、有、無等の一切は、妄計にして成立せず。
心と意と及び餘の六の諸識とは共に相應し、皆藏識に因つて生ず、〔彼等は〕一に非ず異に非ず。
數〔論〕も勝〔論〕も及び露形〔外道〕も、自在〔又は〕能生を計して、皆有無の宗に墮し、寂靜の義を遠離せり。
大種は形相を生ずれども、大種を生ずるに非ず。〔而も〕外道は大種を說いて、大種及び色を

【二八】色受想行識の五蘊の中、色蘊は物質にして、他の四蘊は精神なるが故に、受想行の三蘊は識の中に含むと云ふ意味なり。

生ず〔となす〕。

外道は無生の法の外に於いて、作者ありと計し、有無の宗に依止す、〔然るに〕愚夫は〔之を〕覺知せず。

淸淨眞實の相は、大智と倶なり、但〔そは〕心と共に相應すれども、意等と和合するにあらず。

若し業皆色を生ぜば、則ち諸蘊の因に違ふ、衆生は應に無取、無有住、無色なるべし。

色を說いて無と爲さば、衆生も亦た應に無なるべし、無色論は是れ斷にして、諸識は應に生ぜざるべし。

識は四種に依つて住す、無色云何が成ぜむ。內外既に成ぜずんば、識も亦た應に起らざるべし。

衆生の識若し無なるも、自然に解脫を得むとは、必らず是れ外道の論、妄計者は知らざるなり。

或は樂執に隨つて有り、中有の中の諸蘊は、無色を生ずるが如しとなすものあり、(而も)無色は云何が有なる。

無色中の色は、彼は是れ可見にあらず、無色は則ち宗に違す、(これ)乘及び乘者に非ず。

識は習氣より生じて諸根と和合し、八種は刹那に於いて、取れども皆不可得なり。

若し諸識起らずんば、諸根は則ち根にあらず、是の故に世尊は說き給ふ、根と色とは(二八)刹膩迦なりと。

云何が色を了せずして、識の生あることを得む。云何が識生せずして、而も生死を受くることを得む。

聖者は、諸根及び根境の義を取り、愚癡(且つ)無智の者は、妄執して其の名を取る。

應に第六に執すべからず、有取と及び無取と、諸の過失を離れしめんが爲に、聖者には定說なし。

諸の外道は、無智にして、斷常を怖畏し、有爲と無爲とを計して、我と差別なしとなす。

或は心と一なりと計し、或は意等と異なりと[計]す。一性の有を取るべくんば、異性の有も亦た然らむ。

若し取は是れ決了して、名けて心心所となさば、此取は何ぞ一生を決了すること能はざる。

【二八】刹膩迦、梵語 Kṣaṇika の音譯。刹那代謝瞬時も止まらざるの義なり。

有と取と及び作業とによりて受生し得べく、猶ほ火の所成の如く、理趣は似て非似なり。
火の頓に燒く時、〔三〇〕然と可然と皆具はるが如く、妄取の我も亦た然り、云何が所取なけむ。
若くは生、若くは不生「と言ふも」心性は常に清淨なり。〔三一〕外道は我を立つ、何ぞ說喩せざらむや。
識の稠林に迷惑し、妄計して眞法を離れ、我論を樂ふが故に、彼此を馳求す。
內證智の所行は、清淨なる眞我の相にして、これ卽ち如來藏なり、外道の知る所にあらず。
諸蘊と、能取及び所取を分別して、能く此の相を知らば、則ち眞實の智を生せむ。
是の諸の外道等は、〔阿〕賴耶識の處に於いて、意と我とは俱なりと計す、此は諸佛の所說にあらず。
若し能く此を辯了せば、解脫して眞諦を見、見〔惑〕修〔惑〕の諸の煩惱を斷除して、悉く清淨ならむ。
本性清淨の心は、衆生の迷惑する所なり、無垢の如來藏は、邊無邊を遠離す。
本識は蘊の中にあり、（譬へば）金銀の鑛にありて、陶冶鍊冶し已れば、金銀みな顯現するが

〔三〇〕然は燃に同じ。
〔三一〕此二句は魏譯に隨へり。

如し。

佛は人にあらず蘊にあらず、但是れ無漏智もて了知して常に寂靜、是れ我が歸する所なり。本性の清淨心は、隨煩惱と意等と及び我と與に相應す、願くは佛よ、(我が)爲に解說し給へ。

(三)心の自性は清淨なり、意等は是れ因緣なり、彼は能く諸業を作る、「是の故に彼に二種の染あり。

意等と我と煩惱とは淨心を染汚すること、猶ほ彼の淨衣に諸の垢染あるが如し。

衣の垢を離るゝことを得、(或は)金の鑛を出づれば、衣も金も倶に不壞なるが如く、心の過を離るゝも亦た然り。

無智の者は、箜篌蠡鼓等を推求して妙音聲を覔む、蘊中の我「を覔むる」も亦た然り。

猶ほ伏藏せる寶の如く、亦た地下の水の如し、有りと雖も見えず、蘊中の我も亦た然なり。

心心所の功能は、聚集の蘊と相應すれども、無智の者は取ること能はず、蘊中の我も亦た爾なり。

【三】此の偈は全く魏譯を採る。唐譯には、「自性清淨心、意等以爲他、彼所積集業、雜業故爲二」とあり。

女〔子〕の懷胎せるが如く、有りと雖も見る可からず、蘊中の眞實の我も、無智の者は知ること能はざるなり。

藥中の勝力の如く、亦た木中の火の如し、無智の者は、蘊中の眞實の我を知ること能はざるなり。

諸法の中の空性、及び無常の性〔の如く〕、無智の者は、蘊中の眞實の我を知ること能はざるなり。

若し此の眞實の我なくんば、諸地(及び)自在通、灌頂(並びに)勝三昧等は、皆悉く無ならむ。

人あり破壞して、「若し〔眞我〕あらば應に我に示すべし」と言はゞ、智者は應に答へて、「汝が分別を我に示せ」と言ふべし。

眞我なしと說く者は、法を謗りて有無に著す。〔三〕比丘の業を作さんものは、應に(彼を)擯弃して共に語るべからず。

眞我の說は熾然たること、猶ほ刧火の起るが如く、無我の稠林を燒いて、諸の外道の過を離る。

【三】唐譯には「比丘應羯磨」とあり、今は魏譯の「作比丘業者」を採る。

(又)酥、酪、石蜜、及び麻油等は、皆悉く味あれども、未だ嘗めざる者は、「其の味を」知らざるが如く、〔眞我も亦た是の如し」。

諸蘊の中に於いて、五種に我が推求すれども、愚者は(之を)了ずること能はず、智「者」は「之を」見て卽ち解脫す。

明智の立つる所の喩すら、猶ほ未だ心を顯はさず、豈に能く其の中に集むる所の義を明了ならしめんや。

計度者は、諸法の別異の相の、唯一心なることを了せずして、無因及び無起なりと妄執す。

定者は心を觀じて、心は心を見ず、見は所見より生ず、所見は何に因てか起る「と究尋す」。

我が姓は〔三四〕迦旃延にして、淨居天中より出で、衆生の爲に說法し、「彼等をして」涅槃の城に入らしむ。

我及び諸の如來は、本住の法を緣じ、三千經中に於いて、廣く涅槃の法を說く。

「佛は」欲界及び無色「界」に於いては成佛せず、色界の究竟天「に於いて」、欲を離れて菩提を得るなり。

【三四】迦旃延 Katyayana カツチヤーヤナ

境界は「繫」縛の因にあらず、因は境界を縛す、修行の利智の劍を「以て」彼の煩惱を割斷せよ。

無我ならば云何が幻等の法の有無あらん。愚も若し眞如を顯はさば、云何が眞我なからむ。

已作と未作の法とは、皆因の起す所にあらず、一切は悉く無生なり、愚夫の(此を)了る能はざるのみ。

能作者は不生にして、所作及び諸緣、この二は皆無生なり、云何が能作を計せむ。

妄計者は、(若は)先、(若は)後、(若は)一時の因ありと說き、(或は)瓶、(又は)弟子等を顯はして、諸物の生起を說く。

佛は是れ有爲にあらず、具する所の諸の相好は是れ輪王の功德にして、此を如來と名くるには非ず。

佛は智を以て相と爲し、諸見を遠離す、(斯くて)自内證の所行は、一切の過みな斷じ給ふ。

聾盲瘖瘂等も、老少及び怨を懷くもの、是等尤も重き者は、皆梵行の分「齋」なし。

隨好を隱くすを天と爲し、相を隱くすを輪王と爲す、此の二者は放逸なり、唯顯はす者は出家なり。

わが釋迦の滅後、當に毘耶娑、迦那梨沙婆、劫比羅等の出づることあるべし。

我が滅して百年の後、毘耶婆の所說、婆羅多等の論〔出で〕、次に半擇婆、憍拉婆囉摩あり。次に冒狸王難陀及毱多あり、次に篦利車王〔あり〕、後に刀兵を起さむ。次に極惡時あり、彼の時諸の世間は正法を修行せざらむ。

是の如き等を過ぎて後、世間は輪轉の如く、日火ともに和合して、欲界を焚燒せむ。復た諸天を立て、世間は還び諸王及び四姓を成就し、諸仙法化を垂れ、當に韋陀祠施等の法を興すことあるべし。

談論戲笑の法、長行と解釋と、我は是の如く聞けり等〔とを起して〕、世間を迷惑せむ。

受くる所の種種の衣は、若し正色あらば、靑泥牛糞等をもて之を染めて壞色ならしめ、服する所の一切の衣は、外道の相を離れしめよ。修行者は諸佛の幢相を現はし、亦た腰絛を繫け、水は漉して飲用せよ。(而して)次第に食を乞ふて、三五 非處に至らざれ。

勝妙天に生じ、また人中に生じ、寶相を具足する者は、天及び人王に生じ、王となりては四天下を有し、法教もて久しく臨御し、貪に由りて皆退失す。

【三五】 非處とは、相應はしからざる場處の義、例せば淫女屋等の如し。

〔時には〕純善〔時〕、三時、二時、幷びに極惡〔時の四時あり〕。餘佛は善時に出で、釋迦は惡世に出づ。

わが涅槃の後に於いて、釋種の悉達多、毘紐、大自在〔及び諸の〕外道等は倶に、如是我聞等の釋師子の所說、談古及び笑話、(並に)毘夜娑仙の說を出さむ。

我が涅槃の後に於て、毘紐大自在は是の如きの言を說かむ、(謂く)「我能く世間を作る。

我は離塵佛と名く、姓は迦多衍那、父は世間主と名け、母の號を具財と爲す。

我は瞻婆國に生れ、我が先祖の父は月種より出づ、故に號して月藏と爲す。

出家して苦行を修し、千の法門を演說し、大慧に記を授け、然る後に當に滅度すべし」と。

大慧は達摩に付し、次に彌佉梨に付す。彌佉梨〔の時〕は惡時にして、劫盡きて法は當に滅すべし。

迦葉、拘留孫、拘那含牟尼、及び我離塵垢は、皆純善時に出づ。

純善時漸く減ずる時、導師あり慧と名く、大勇猛を成就して、五法を覺悟せむ。

二時(又は)三時にあらず、亦た極惡時にあらず、彼は純善時に於いて、現に等正覺を成ぜむ。

衣は割縷せずと雖も、雜碎して補成し、孔雀の尾目の如く、人の侵奪するもの有ることなし。或は二指(又は)三指に間錯して補成せよ、(三五)若し是の如くならざれば、愚夫をして貪著を生ぜしめむ。

唯(三六)三衣を畜へて、恒に貪欲の火を滅し、沐するに智慧の水を以てし、日夜三時に修「行」せよ。「修行は」放箭の勢極まつて、一たび墜ち、還た一を放つが如くせよ、亦桿酪の水の如くせよ、善不善も亦然り。

若し一能く多を生ぜば、則ち別異の相あり。施者は應に田の如くなるべく、受者は應に風の如くなるべし。

若し一能く多を生ぜば、一切は無因にし有なるべく、所作の因は滅壞せむ。是れ(則ち)妄計の所立なり。

若し妄計の所立ならば、燈「の如く」又種子の如くならむ。若し一能く多を生ぜば、但相似にして多に非ず。

胡麻は豆を生ぜず、稻は穬麥の因にあらず、小豆は穀類にあらず、云何か一多を生ぜむ。

名主は聲論を作り、廣主は王論を造り、順世論の妄說は、當に梵藏中に生ずべし。

【三五】 此の一句は魏譯より採る、唐譯には「異此之所作」とあり。

【三六】 三衣。衣とは袈裟のこと。これに三種あり、(一)僧伽梨衣、(二)鬱多羅僧衣、(三)安陀衣なり。

迦多延は經を造り、樹皮仙は祀を說き、鵂鶹は天文を出し、惡世時は當におるべし。
世間の諸の衆生は、福力もて王を感じ、如法に一切を御して、國土を守護せむ。
靑蟻及び赤豆、側僻と馬行と、此等の大福仙は、未來世に當に出づべし。
釋子悉達多、步多五髻者、口力及び聰慧も亦た未來に於いて出でむ。
われ林野に在るに、梵王來りて我に惠むに、鹿皮、三岐杖、膊條及び軍持を「以てせり」。
(又)此の大修行者は、當に離垢尊と成り、眞解脫を說くべし。(彼は)牟尼の幢相「ありと言はむ」。
(又)梵王と梵衆と、諸天及び天衆とは、我に鹿皮の衣を施して自在宮に還歸せむ。
われ林樹の間に在れば、帝釋四天王は、我に妙なる衣服と乞食の鉢とを施さむ。
若し不生論を立てゝ、是の因生は復た生じ、是の如くして無生を立す「と言はゞ」、唯是れ虛妄の說なり。
無始より積集する所の無明を心因と爲し、生滅して而も相續すとは妄計の分別する所のみ。
僧佉論に二あり、勝性と及び變異と(之れ)なり、勝「性」の中に所作あらば、所作は應に自成なるべし。

勝性と物とは倶なり、求那は差別と說く。(斯くて)〔能〕作と所作との種種の變異は不可得なり。

水銀の性淨にして、塵垢の染むること能はざるが如く、藏識の淨きことも亦た然り、衆生の依止する所となる。

興渠の惡氣と、鹽味及び胎藏の如く、種子も亦た是の如し、云何が不生ならむ。

一性及び異性、倶不倶も亦た然り、所取は有にあらず、無にあらず、(亦た)有爲にあらず。

馬中には牛性を離る、蘊中の我も亦た然り。說く所の〔有〕爲無爲は、皆悉く無自性なり。

理敎等に我を求むるは、是れ妄垢の惡見のみ、不了の故に有と說き、唯妄取して餘りなし。

諸蘊中の我は一異みな成ぜず、彼の過失は顯然たり、妄計者は覺らざるのみ。

水鏡及び眼に種種の影を現ずれども、一異の性を遠離するが如く、蘊中の我も亦た然り。

行者は定を修し、諦及び道を見て、此の三種を勤修し、諸の惡見を解脫す。

猶は孔隙の中より電光の速に滅するを見るが如く、法の變遷も亦た然り、應に分別を起すべからず。

愚夫は心迷惑して、涅槃の有無を取る。若し聖見を得たるものは、如實に能く了るなり。

應に知るべし、變異の法は生滅を遠離し、亦た有無及び能〔相〕所相を離るることを。
應に知るべし、變異の法は外道の論を遠離し、亦名相を離れ、內の我見も亦滅することを。
諸天の樂身に觸れ、地獄の苦身に逼るとも、若し彼なくんば諸識有るも生ずることを得ず。
應に知るべし、諸趣中にある胎〔生〕卵〔生〕濕生等の種種なる衆生の身は、皆中有に隨つて生あることを。

聖教の正理を離れて、惑を滅せんと欲すれば反つて增す、(三七)智慧ある者は諸の外道の浪言を取ること莫れ。

(三八)先づ我を觀察して、(然して)後に因緣を觀ぜよ。有を知らずして有と說く、寧ろ石女の兒に及ばんや。

我は肉眼を離れ、天眼と慧眼とを以て、諸の衆生の身を見るに、諸行(及び)諸蘊を離る。
諸行の中を觀見するに、好色なるあり、惡色なるあり、解脫せるあり、解脫せざるあり、(又は)天中に住するあり。
諸趣に受くる所の身は、唯われ能く了達するのみ、〔此は〕世の知る所を超過して、計度の境界にあらざるなり。

〔三七〕此の二句は魏譯を採る。唐譯には「是外道狂言、智者不應說」とあり。
〔三八〕此の偈は全く魏譯を取れり、但し最後の一句は意譯なりと知れ。

無我にして心を生ず、此の心は云何が生ずる。豈に心生は河燈種子の如しと説かざらむや。
若し無明等なくんば、心識は則ち生せず、無明を離れては識なし、云何が生を相續せむ。
妄計者の所説は、三世及び非世なり。第五の不可説は諸佛の知る所なり。
諸行、取、所住は、彼亦智の因となす、應に智慧を説くべからず、而も名けて諸行となす。
此の因緣あるが故に、則ち此の法の生あり、別に作者あることなし、是れ我が説く所なり。
風に火を生ずること能はず、而も火をして熾然たらしむ、「火は」亦た風に由つて滅す、云何が我に喩へむ。
説く所の「有」爲無爲は、皆諸の取を離る。云何ぞ愚は分別して、火を以て我を成立せんとはする。
諸縁展轉の力あり、是の故に能く火を生ず。若し分別して火の如しと云はゞ、是の我は誰より生ずるか。
意等を因と爲すが故に、諸の蘊處は積集す。無我の商主は、常に心と倶に起る。
此の二は常に日の如く。能「作」所作を遠離す。火の能く成立する「所」に非ず、妄計者は知らざるなり。

衆生心たる涅槃は本性常に淸淨にして、無始の習染を〔超〕過し、無異なること虚空の如し。
象臥等の外道は諸見に雜染せられ、意識の覆ふ所となり、火等を計して淨と爲す。
若し如實の見を得ば、便ち能く煩惱を斷じ、邪を捨て稠林を踰え、聖の所行の處に到らむ。
智所知の差別は、各〻異なりて分別す、無智の者は知らず、應に說くべからざる所を說く。
愚の異材を執りて栴檀沈水を作るが如く、當に知るべし、妄計と眞智とも亦た復た然り。
食し訖らば鉢を持して歸り、洗濯して淸淨ならしめ、口の餘味を澡漱し、應に是の如く修すべし。

若し此の法門に於いて、理の如くに正しく思惟し、淨信にして分別を離れ、最勝定を成就し、著を離れて義に住し、金光の法燈と成らば、有無を分別し若くは諸の惡見の網なる三毒等は皆離れ、佛手づからの灌頂を得む。
外道は能作を執じて、方に迷ひ又は無因〔に著し〕、緣起に於いて驚怖し、斷見に墮して聖性を無みす。
諸の果報を變起するを諸識及び意と謂ふ。意は〔阿〕賴耶より生じ、識は末那に依つて起る。
〔阿〕賴耶〔識〕の諸心を起すことは、(譬へば)海の波浪を起すが如し、習氣を以て因と爲し、

縁に隨つて生起す。
刹那の相の鉤鎖は、自心の境界として種種の諸の形相を取り、「ここに」意根等の識生ず。
無始の惡習に由りて、外境に似て生ずれども、所見は唯自心のみ、「これ」外道の了ずる處にあらざるなり。
彼を因として彼を縁じ、而して餘識を生ず。是の故に諸見を起して、生死に流轉す。
諸法は幻夢「の如く」、（また）水月「の如く」、焔の如く、乾「闥婆」城の如し。當に知るべし、一切の法は唯これ自らの分別なることを。
正智は眞如に依つて、如幻首楞嚴等の諸の三昧を起し、諸地に入りて、自在及び神通を得、如幻の智を成就すれば、諸佛その頂に灌ぎ給ふ。
世間の虚妄なることを見れば、是の時心は依を轉じて、歡喜地、諸地、及び佛智を獲得す。
既に轉依を得已れば、衆色の摩尼の如く、諸の衆生を利益せんが「爲に」、應現すること水月の如し。
有無の見及び倶不倶を捨離し、二乘の行を超え、亦た第七地を超ゆ。
自ら內「心」に法「の本體」を現證して地地を修治し、諸の外道を遠離す、應に說くべし、是れ

(則ち)大乘なりと。

〔此に於いて〕解脫の法門を說き、兎角〔の如く〕摩尼の如く、分別を捨離して、死及び遷滅を離る。

敎は理に由るが故に成り、理は敎に由るが故に顯はる。當に此の敎理に依りて、更に餘の分別をなすことなかるべし』

國譯大乘入楞伽經　終

本經明分爲二卷經題經下明有卷上二字譯號唐上三本俱無大字三藏同作沙門

大方廣圓覺修多羅了義經

〔麗使〕〔宋可〕〔元可〕〔明難〕

大唐罽賓三藏佛陀多羅譯

如是我聞。一時婆伽婆。入於神通大光明藏。三昧正受。一切如來。光嚴住持。是諸衆生淸淨覺地。身心寂滅。平等本際。圓滿十方。不二隨順。於不二境。現諸淨土。與大菩薩摩訶薩十萬人俱。其名曰文殊師利菩薩。普賢菩薩。普眼菩薩。金剛藏菩薩。彌勒菩薩。淸淨慧菩薩。威德自在菩薩。辯音菩薩。淨諸業障菩薩。普覺菩薩。圓覺菩薩。賢善首菩薩等。而爲上首。與諸眷屬。皆入三昧。同住如來平等法會。於是文殊師利菩薩。在大衆中。卽從座起。頂禮佛足。右遶三帀。長跪叉手。而白佛言。大悲世尊。願爲此會諸來法衆。說於如來本起淸淨因地法行。及說菩薩於大乘中發淸淨心。遠離諸病。能使未來末世衆生求大乘者。不墮邪見。作是語已。五體投地。如是三請。終而復始。爾時世尊。告文殊師利菩薩言。善哉善哉。善男子。汝等乃能爲諸菩薩。諮詢如來因地法行。及爲末世一切衆生求大乘者。得正住持。不墮邪見。汝今諦聽。當爲汝說。時文殊師利菩薩。奉敎歡喜。及諸大衆。默然而聽。善男子。無上法王。有大陀羅尼門。名爲圓覺。流出一切淸淨眞如菩提涅槃及波羅蜜。敎授菩薩。一切如來。本起因地。皆依圓照淸淨覺相。永斷無明。方成佛道。云何無明。善男子。一切衆生。從無始來。種種顚倒。猶如迷人四方易處。妄認四大爲自身相。六塵緣影爲自心相。譬彼病目見空中華及第二月。善男子。空實無華。病者妄執。由妄執故。非唯惑此虛空自性。亦復迷彼實華生處。由此妄有輪轉生死。故名無明。善男子。此無明者。非實有體。如夢中人夢時非無。及至於醒了無所得。如衆空華。滅於虛空。不可說言有定滅處。何以故。無生處故。一切衆生。於無生中。妄見生滅。是故說名輪轉生死。善男子。如來因地。修圓覺者。知是空華。卽無輪轉。亦無身心受彼生死。非作故無。本性無故。彼知覺者。猶如虛空。知虛空者。卽空華相。亦不可說無知覺性。有無俱遣。是則名爲淨覺隨順。何以故。虛空性故。常不動故。如來藏中。無起滅故。無知見故。如法界性。究竟圓滿。徧十方故。是則名爲因地法行。菩薩因此。於大

明校譌曰則流行作卽

乘中.發清淨心.末世衆生.依此修行.不墮邪見.爾時世尊.欲重宣此義.而說偈言

文殊汝當知　一切諸如來　從於本因地　皆以智慧覺　了達於無明　知彼如空華　卽能免流轉

又如夢中人　醒時不可得　覺者如虛空　平等不動轉　覺徧十方界　卽得成佛道　衆幻滅無處

成道亦無得　本生圓滿故　菩薩於此中　能發菩提心　末世諸衆生　修此免邪見

於是普賢菩薩.在大衆中.卽從座起.頂禮佛足.右遶三帀.長跪叉手.而白佛言.大悲世尊.願爲此會諸菩薩衆.及爲末世一切衆生修大乘者.聞此圓覺清淨境界.云何修行.世尊.若彼衆生.知如幻者.身心亦幻.云何以幻還修於幻.若諸幻性.一切盡滅.則無有心.誰爲修行.云何復說修行如幻.若諸衆生.本不修行.於生死中.常居幻化.曾不了知如幻境界.令妄想心云何解脫.願爲末世一切衆生.作何方便.漸次修習.令諸衆生永離諸幻.作是語已.五體投地.如是三請.終而復始.爾時世尊.告普賢菩薩言.善哉善哉.善男子.汝等乃能爲諸菩薩.及末世衆生.修習菩薩如幻三昧方便.漸次令諸衆生得離諸幻.汝今諦聽.當爲汝說.時普賢菩薩.奉教歡喜.及諸大衆.默然而聽.善男子.一切衆生.種種幻化.皆生如來圓覺妙心.猶如空華從空而有.幻華雖滅.空性不壞.衆生幻心.還依幻滅.諸幻盡滅.覺心不動.依幻說覺.亦名爲幻.若說有覺.猶未離幻.說無覺者.亦復如是.是故幻滅名爲不動.善男子.一切菩薩及末世衆生.應當遠離一切幻化虛妄境界.由堅執持遠離心故.心如幻者.亦復遠離.遠離爲幻.亦復遠離.離遠離幻.亦復遠離.得無所離.卽除諸幻.譬如鑽火.兩木相因.火出木盡.灰飛煙滅.以幻修幻.亦復如是.諸幻雖盡.不入斷滅.善男子.知幻卽離.不作方便.離幻卽覺.亦無漸次.一切菩薩及末世衆生.依此修行.如是乃能永離諸幻.爾時世尊.欲重宣此義.而說偈言

普賢汝當知　一切諸衆生　無始幻無明　皆從諸如來　圓覺心建立　猶如虛空華　依空而有相

空華若復滅　虛空本不動　幻從諸覺生　幻滅覺圓滿　覺心不動故　若彼諸菩薩　及末世衆生

常應遠離幻　諸幻悉皆離　如木中生火　木盡火還滅　覺則無漸次　方便亦如是

於是普眼菩薩.在大衆中.卽從座起.頂禮佛足.右遶三匝.長跪叉手.而白佛言.大悲世尊.願爲此會諸菩薩衆及

則明作郎

爲末世一切衆生。演說菩薩修行漸次。云何思惟。云何住持。衆生未悟作何方便普令開悟。世尊。若彼衆生。無正方便及正思惟。聞佛如來說此三昧。心生迷悶。則於圓覺不能悟入。願興慈悲。爲我等輩及末世衆生假說方便。作是語已。五體投地。如是三請。終而復始。爾時世尊告普眼菩薩言。善哉善哉。善男子。汝等乃能爲諸菩薩及末世衆生。問於如來修行漸次思惟住持乃至假說種種方便。汝今諦聽。當爲汝說。時普眼菩薩。奉敎歡喜。及諸大衆默然而聽。善男子。彼新學菩薩及末世衆生。欲求如來淨圓覺心。應當正念遠離諸幻。先依如來奢摩他行。堅持禁戒。安處徒衆。宴坐靜室。恒作是念。我今此身四大和合。所謂髮毛爪齒皮肉筋骨髓腦垢色皆歸於地。唾涕膿血津液涎沫痰淚精氣大小便利皆歸於水。暖氣歸火。動轉歸風。四大各離。今者妄身。當在何處。卽知此身畢竟無體和合爲相。實同幻化。四緣假合。妄有六根。六根四大。中外合成。妄有緣氣。於中積聚似有緣相假名爲心。善男子。此虛妄心若無六塵則不能有。四大分解無塵可得。於中緣塵各歸散滅。畢竟無有緣心可見。善男子。彼之衆生幻身滅故幻心亦滅。幻心滅故幻塵亦滅。幻塵滅故幻滅亦滅。幻滅滅故非幻不滅。譬如磨鏡垢盡明現。善男子。當知身心皆爲幻垢。垢相永滅十方清淨。善男子。譬如清淨摩尼寶珠暎於五色隨方各現。諸愚癡者見彼摩尼實有五色。善男子。圓覺淨性現於身心隨類各應。彼愚癡者。說淨圓覺實有如是身心自相亦復如是。由此不能遠於幻化。是故我說身心幻垢對離幻垢說名菩薩。垢盡對除卽無對垢及說名者。善男子。此菩薩及末世衆生證得諸幻滅影像故。爾時便得無方清淨。無邊虛空覺所顯發。覺圓明故顯心清淨。心清淨故見塵清淨。見清淨故眼根清淨。根清淨故眼識清淨。識清淨故聞塵清淨。聞清淨故耳根清淨。根清淨故耳識清淨。識清淨故覺塵清淨。如是乃至鼻舌身意亦復如是。善男子。根清淨故色塵清淨。色清淨故聲塵清淨。香味觸法亦復如是。善男子。六塵清淨故。地大清淨。地清淨故水大清淨。火大風大亦復如是。善男子。四大清淨故十二處十八界二十五有清淨。彼清淨故。十力四無所畏。四無礙智。佛十八不共法。三十七助道品清淨。如是乃至八萬四千陀羅尼門一切清淨。善男子。一切實相性清淨故一身清淨。一身清淨故多身清淨。多身清淨故如是乃至十方衆生圓覺清淨。善男子。一世界清淨故多世界清淨。多世界清淨故如是乃至盡於虛空圓裹三世一切平等清淨

不動。善男子。虛空如是平等不動。當知覺性平等不動四大不動故。當知覺性平等不動。如是乃至八萬四千陀羅尼門平等不動。當知覺性平等不動。善男子。覺性遍滿清淨不動。圓無際故。當知六根遍滿法界。根遍滿故當知六塵遍滿法界。塵遍滿故當然四大遍滿法界。如是乃至陀羅尼門遍滿法界。善男子。由彼妙覺性遍滿故。根性塵性無壞無雜。根塵無壞故如是乃至陀羅尼門無壞無雜。如百千燈光照一室。其光遍滿無壞無雜。善男子。覺成就故。當知菩薩。不與法縛。不求法脫。不厭生死不愛涅槃。不敬持戒。不憎毀禁。不重久習。不輕初學。何以故一切覺故。譬如眼光曉了前境。其光圓滿得無憎愛。何以故光體無二無憎愛故。善男子。此菩薩及末世衆生。修習此心。得成就者。於此無修亦無成就。圓覺普照寂滅無二。於中百千萬億不可說阿僧祇恒河沙諸佛世界。猶如空華亂起亂滅。不即不離無縛無脫。始知衆生本來成佛生死涅槃猶如昨夢。善男子。如昨夢故當知生死及與涅槃無起無滅無來無去。其所證者無得無失無取無捨。其能證者無住無止無作無滅。於此證中無能無所畢竟無證亦無證者。一切法性平等不壞。善男子。彼諸菩薩。如是修行。如是漸次。如是思惟。如是住持。如是方便。如是開悟。求如是法。亦不迷悶。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言

普眼汝當知　一切諸衆生　身心皆如幻　身相屬四大　心性歸六塵　四大體各離　誰爲和合者
如是漸修行　一切悉清淨　不動徧法界　無作止任滅　亦無能證者　一切佛世界　猶如虛空華
三世悉平等　畢竟無來去　初發心菩薩　及末世衆生　欲求入佛道　應如是修習

於是金剛藏菩薩。在大衆中。卽從座起。頂禮佛足。右遶三帀。長跪叉手。而白佛言。大悲世尊。善爲一切諸菩薩衆。宣揚如來圓覺清淨大陀羅尼因地法行漸次方便。與諸衆生開發蒙昧。在會法衆。承佛慈誨。幻翳朗然。慧目清淨。世尊。若諸衆生本來成佛。何故復有一切無明。若諸無明。衆生本有。何因緣故。如來復說本來成佛。十方異生。本成佛道。後起無明。一切如來。何時復生一切煩惱。唯願不捨無遮大慈。爲諸菩薩開祕密藏。及爲末世一切衆生。得聞如是修多羅敎了義法門。永斷疑悔。作是語已。五體投地。如是三請。終而復始。爾時世尊。告金剛藏菩薩言。善哉善哉。善男子。汝等乃能爲諸菩薩及末世衆生。問於如來甚深秘密究竟方便。是諸菩薩最上敎誨了義

不可說阿僧祇　明俱元作阿僧祇不可說
無住三本俱作無作　無作○作同作任

辨明作辯〇猶三本俱作由〇患瞖同作幻翳次亦同

辨明作辯

大乘。能使十方修學菩薩及諸末世一切衆生。得決定信。永斷疑悔。汝今諦聽。當爲汝說。時金剛藏菩薩奉敎歡喜。及諸大衆默然而聽。善男子。一切世界始終生滅。前後有無。聚散起止。念念相續。循環往復。種種取捨。皆是輪廻。未出輪廻。而辨圓覺。彼圓覺性卽同流轉。若免輪廻。無有是處。譬如動目能搖湛水。又如定眼。猶廻轉火。雲駛月運。舟行岸移。亦復如是。善男子。諸旋未息。彼物先住。尙不可得。何況輪轉生死垢心。曾未淸淨。觀佛圓覺而不旋復。是故汝等便生三惑。善男子。譬如患瞖妄見空華。患瞖若除。不可說言。此瞖已滅何時更起一切諸瞖。何以故。瞖華二法非相待故。亦如空華滅於空時。不可說言虛空何時更起空華。何以故。空本無華非起滅故。生死涅槃同於起滅。妙覺圓照離於華瞖。善男子。當知虛空非是暫有。亦非暫無。況復如來圓覺隨順。而爲虛空平等本性。善男子。如銷金鑛。金非銷有。旣已成金。不重爲鑛。經無窮時。金性不壞。不應說言本非成就。如來圓覺亦復如是。善男子。一切如來妙圓覺心。本無菩提及與涅槃。亦無成佛及不成佛。無妄輪廻及非輪廻。善男子。但諸聲聞所圓境界。身心語言皆悉斷滅。終不能至彼之親證所現涅槃。何況能以有思惟心。測度如來圓覺境界。如取螢火燒須彌山。終不能著。以輪廻心生輪廻見。入於如來大寂滅海。終不能至。是故我說。一切菩薩及末世衆生。先斷無始輪廻根本。善男子。有作思惟從有心起。皆是六塵妄想緣起。非實心體。已如空華。用此思惟辨於佛境。猶如空華復結空果。展轉妄想。無有是處。善男子。虛妄浮心。多諸巧見。不能成就圓覺方便。如是分別。非爲正問。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言

金剛藏當知　如來寂滅性　未曾有終始　若以輪廻心　思惟卽旋復　但至輪廻際　不能入佛海
譬如銷金鑛　金非銷故有　雖復本來金　終以銷成就　一成眞金體　不復重爲鑛　生死與涅槃
凡夫及諸佛　同爲空華相　思惟猶幻化　何況詰虛妄　若能了此心　然後求圓覺

於是彌勒菩薩。在大衆中。卽從座起。頂禮佛足。右遶三帀。長跪叉手。而白佛言。大悲世尊。廣爲菩薩開祕密藏。令諸大衆深悟輪廻。分別邪正。能施末世一切衆生無畏道眼。於大涅槃生決定信。無復重隨輪轉境界。起循環見。世尊。若諸菩薩及末世衆生。欲遊如來大寂滅海。云何當斷輪廻根本。於諸輪廻有幾種性。修佛菩提。幾等差別。

廻入塵勞。當設幾種教化方便度諸衆生。唯願不捨救世大悲。令諸修行一切菩薩及末世衆生慧目肅清照曜心鏡。圓悟如來無上知見。作是語已。五體投地。如是三請終而復始。爾時世尊告彌勒菩薩言。善哉善哉。善男子。汝等乃能爲諸菩薩及末世衆生。請問如來深奥秘密微妙之義。令諸菩薩潔清慧目。及令一切末世衆生永斷輪廻心悟實相具無生忍。汝今諦聽。當爲汝說。時彌勒菩薩奉教歡喜。及諸大衆默然而聽。善男子。一切衆生從無始際由有種種恩愛貪欲故有輪廻。若諸世界一切種性。卵生胎生濕生化生。皆因婬欲而正性命。當知輪廻愛爲根本。由有諸欲助發愛性。是故能令生死相續。欲因愛生。命因欲有。衆生愛命還依欲本。愛欲爲因愛命爲果。由於欲境起諸違順。境背愛心而生憎嫉造種種業。是故復生地獄餓鬼。知欲可厭愛厭業道。捨惡樂善。復現天人。又知諸愛可厭惡故。棄愛樂捨。還滋愛本。便現有爲增上善果。皆輪廻故不成聖道。是故。衆生欲脫生死免諸輪廻先斷貪欲及除愛渴。善男子。菩薩變化示現世間非愛爲本。但以慈悲令彼捨愛。假諸貪欲而入生死。若諸末世一切衆生能捨諸欲及除憎愛永斷輪廻。勤求如來圓覺境界。於清淨心便得開悟。善男子。一切衆生由本貪欲。發揮無明。顯出五性差別不等。依二種障而現深淺。云何二障。一者理障礙正知見。二者事障續諸生死。云何五性。善男子若此二障未得斷滅名未成佛。若諸衆生永捨貪欲先除事障。未斷理障但能悟入聲聞緣覺。未能顯住菩薩境界。善男子。若諸末世一切衆生。欲泛如來大圓覺海。先當發願勤斷二障。二障已伏。即能悟入菩薩境界。若事理障已永斷滅。即入如來微妙圓覺。滿足菩提及大涅槃。善男子。一切衆生皆證圓覺。逢善知識依彼所作因地法行。爾時修習便有頓漸。若遇如來無上菩提正修行路。根無大小皆成佛果。若諸衆生雖求善友遇邪見者未得正悟。是則名爲外道種性。邪師過謬非衆生咎。是名衆生五性差別。善男子。菩薩唯以大悲方便入諸世間開發未悟。乃至示現種種形相逆順境界。與其同事化令成佛。皆依無始清淨願力。若諸末世一切衆生於大圓覺起增上心。當發菩薩清淨大願。應作是言。願我今者住佛圓覺求善知識。莫値外道及與二乘。依願修行漸斷諸障。障盡願滿。便登解脫清淨法殿。證大圓覺妙莊嚴域。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言

彌勒汝當知　一切諸衆生　不得大解脫　皆由貪欲故　墮落於生死　若能斷憎愛　及與貪瞋癡

提明作薩

一切諸來同作諸來一切

爲下三本俱無諸菩薩及四字

辨明作辯

不因差別性　皆得成佛道　二障永銷滅　求師得正悟　隨順菩提願　依止大涅槃　十方諸菩薩
皆以大悲願　示現入生死　現在修行者　及末世衆生　勤斷諸愛見　便歸大圓覺

於是淸淨慧菩薩.在大衆中.卽從座起.頂禮佛足.右繞三帀.長跪叉手.而白佛言.大悲世尊.爲我等輩.廣說如是不思議事.本所不見本所不聞.我等今者蒙佛善誘.身心泰然得大饒益.願爲一切諸來法衆.重宣法王圓滿覺性.一切衆生及諸菩薩.如來世尊所證所得云何差別.令末世衆生聞此聖敎隨順開悟漸次能入.作是語已.五體投地.如是三請.終而復始.爾時世尊.告淸淨慧菩薩言.善哉善哉.善男子.汝等乃汝爲諸菩薩及末世衆生請問如來漸次差別.汝今諦聽.當爲汝說.時淸淨慧菩薩.奉敎歡喜.及諸大衆默然而聽.善男子.圓覺自性.非性性有.循諸性起.無取無證.於實相中實無菩薩及諸衆生.何以故.菩薩衆生皆是幻化.幻化滅故無取證者.譬如眼根不自見眼.性自平等無平等者.衆生迷倒未能除滅一切幻化.於滅未滅妄功用中便顯差別.若得如來寂滅隨順實無寂滅及寂滅者.善男子.一切衆生從無始來由妄想我及愛我者.曾不自知念念生滅.故起憎愛.耽著五欲.若遇善友敎令開悟淨圓覺性.發明起滅.卽知此生性自勞慮.若復有人勞慮永斷得法界淨.卽彼淨解爲自障故.故於圓覺而不自在.此名凡夫隨順覺性.善男子.一切菩薩見解爲礙.雖斷解礙猶住見覺.覺礙爲礙而不自在.此名菩薩未入地者隨順覺性.善男子.有照有覺俱名障礙.具故菩薩常覺不住.照與照者同時寂滅.譬如有人自斷其首.首已斷故無能斷者.則以礙心自滅諸礙.礙已斷滅無滅礙者.修多羅敎如標月指.若復見月了知所標畢竟非月.一切如來種種言說開示菩薩亦復如是.此名菩薩已入地者隨順覺性.善男子.一切障礙卽究竟覺.得念失念無非解脫.成法破法皆名涅槃.智慧愚癡通爲般若.菩薩外道所成就法同是菩提.無明眞如無異境界.諸戒定慧及婬怒癡俱是梵行.衆生國土同一法性.地獄天宮皆爲淨土.有性無性齊成佛道.一切煩惱畢竟解脫.法界海慧照了諸相猶如虛空.此名如來隨順覺性.善男子.但諸菩薩及末世衆生.居一切時不起妄念.於諸妄心亦不息滅.住妄想境不加了知.於無了知不辨眞實.彼諸衆生聞是法門.信解受持.不生驚畏.是則名爲隨順覺性.善男子.汝等當知.如是衆生已曾供養百千萬億恒河沙諸佛及大菩薩.植衆德本.佛說是

人名爲成就一切種智。爾時世尊。欲重宣此義。而說偈言

清淨慧當知　圓滿菩提性　無取亦無證　無菩薩衆生　覺與未覺時　漸次有差別　衆生爲解礙
菩薩未離覺　入地永寂滅　不住一切相　大覺悉圓滿　名爲遍隨順　末世諸衆生　心不生虛妄
佛說如是人　現世卽菩薩　供養恒沙佛　功德已圓滿　雖有多方便　皆名隨順智

於是威德自在菩薩。在大衆中。卽從座起。頂禮佛足。右遶三匝。長跪叉手。而白佛言。大悲世尊。廣爲我等。分別如是隨順覺性。令諸菩薩覺心光明承佛圓音。不因修習而得善利。世尊。譬如大城外有四門。隨方來者非止一路。一切菩薩莊嚴佛國及成菩提非一方便。唯願世尊。廣爲我等。宣說一切方便漸次并修行人總有幾種。令此會菩薩及末世衆生求大乘者。速得開悟遊戲如來大寂滅海。作是語已。五體投地。如是三請。終而復始。爾時世尊。告威德自在菩薩言。善哉善哉。善男子。汝等乃能爲諸菩薩及末世衆生。問於如來如是方便。汝今諦聽。當爲汝說。時威德自在菩薩奉敎歡喜。及諸大衆默然而聽。善男子。無上妙覺徧諸十方出生如來。與一切法同體平等。於諸修行實無有二。方便隨順其數無量。圓攝所歸循性差別當有三種。善男子。若諸菩薩悟淨圓覺。以淨覺心。取靜爲行。由澄諸念。覺識煩動。靜慧發生。身心客塵從此永滅。便能內發寂靜輕安。由寂靜故十方世界諸如來心於中顯現。如鏡中像。此方便者名奢摩他。善男子。若諸菩薩悟淨圓覺。以淨覺心。知覺心性及與根塵皆因幻化。卽起諸幻。以除幻者。變化諸幻而開幻衆。由起幻故便能內發大悲輕安。一切菩薩從此起行漸次增進。彼觀幻故非同幻者。非同幻觀皆是幻故幻相永離。是諸菩薩所圓妙行如土長苗。此方便者名三摩鉢提。善男子。若諸菩薩悟淨圓覺。以淨覺心不取幻化及諸淨相。了知身心皆爲罣礙。無知覺明不依諸礙。永得超過礙無礙境。受用世界及與身心相在塵域如器中鍠聲出於外。煩惱涅槃不相留礙。便能內發寂滅輕安。妙覺隨順寂滅境界。自他身心所不能及。衆生壽命皆爲浮想。此方便者名爲禪那。善男子。此三法門皆是圓覺親近隨順十方如來。因此成佛十方菩薩種種方便。一切同異皆依如是三種事業。若得圓證卽成圓覺。善男子。假使有人修於聖道。敎化成就百千萬億阿羅漢辟支佛果。不如有人聞此圓覺無礙法門一刹那頃隨順修習。爾時世尊。欲重宣

明於是以下爲下卷

淨三本俱作靜

於同作于下同

後三本俱作復

提下元明俱無及修二字

在三本俱作住

此義。而說偈言。

威德汝當知　無上大覺心　本際無二相　隨順諸方便　其數即無量　如來總開示　便有三種類

寂靜奢摩他　如鏡照諸像　如幻三摩提　如苗漸增長　禪那唯寂滅　如彼器中鍠　三種妙法門

皆是覺隨順　十方諸如來　及諸大菩薩　因此得成道　三事圓證故　名究竟涅槃

於是辯音菩薩。在大衆中。卽從座起。頂禮佛足。右繞三帀。長跪叉手。而白佛言。大悲世尊。如是法門甚爲希有。世尊。此諸方便一切菩薩於圓覺門有幾修習。願爲大衆及末世衆生。方便開示令悟實相。作是語已。五體投地。如是三請。終而復始。爾時世尊。告辯音菩薩言。善哉善哉。善男子。汝等乃能爲諸大衆及末世衆生問於如來如是修習。汝今諦聽當爲汝說時辯音菩薩奉敎歡喜。及諸大衆默然而聽。善男子。一切如來圓覺清淨本無修習及修習者。一切菩薩及末世衆生依於未覺幻力修習。爾時便有二十五種清淨定輪。若諸菩薩唯取極靜。由靜力故永斷煩惱究竟成就。不起于座便入涅槃。此菩薩者名單修奢摩他。若諸菩薩唯觀如幻以佛力故變化世界種種作用。備行菩薩清淨妙行。於陀羅尼不失寂念及諸靜慧。此菩薩者名單修三摩鉢提。若諸菩薩唯滅諸幻不取作用獨斷煩惱。煩惱斷盡便證實相。此菩薩者名單修禪那。若諸菩薩先取至靜。以靜慧心照諸幻者。便於是中起菩薩行。此菩薩者名先修奢摩他後修三摩鉢提。若諸菩薩以靜慧故證至靜性。便斷煩惱永出生死。此菩薩者名先修奢摩他後修禪那。若諸菩薩以寂靜慧復現幻力種種變化度諸衆生。後斷煩惱而入寂滅。此菩薩者名先修奢摩他中修三摩鉢提。後修禪那若諸菩薩以至靜力斷煩惱已後起菩薩清淨妙行度諸衆生。此菩薩者名先修奢摩他中修禪那後修三摩鉢提若諸菩薩以至靜力心斷煩惱後度衆生建立世界。此菩薩者名先修奢摩他齊修三摩鉢提及修禪那。若諸菩薩以至靜力資發變化後斷煩惱。此菩薩者名齊修奢摩他三摩鉢提後修禪那。若諸菩薩以至靜力用資寂滅後起作用變化世界。此菩薩者名齊修奢摩他禪那後修三摩鉢提。若諸菩薩以變化力種種隨順而取至靜。此菩薩者名先修三摩鉢提後修奢摩他。若諸菩薩以變化力種種境界而取寂滅。此菩薩者名先修三摩鉢提後修禪那。若諸菩薩以變化力而作佛事安在寂靜而斷煩惱。此

菩薩者名先修三摩鉢提中修奢摩他後修禪那.若諸菩薩以變化力無礙作用.斷煩惱故安住至靜.此菩薩者名先修三摩鉢提中修禪那後修奢摩他.若諸菩薩以變化力方便作用至靜寂滅二俱隨順.此菩薩者名先修三摩鉢提齊修奢摩他禪那.若諸菩薩以變化力種種起用資於至靜後斷煩惱.此菩薩者.名齊修三摩鉢提奢摩他後修禪那.若諸菩薩以變化力資於寂滅住住清淨無作靜慮.此菩薩者名齊修三摩鉢提禪那後修奢摩他若諸菩薩以寂滅力而起至靜住於清淨.此菩薩者.名先修禪那後修奢摩他.若諸菩薩以寂滅力而起作用.於一切境寂用隨順.此菩薩者名先修禪那後修三摩鉢提.若諸菩薩以寂滅力種種自性安於靜慮而起變化此菩薩者.名先修禪那中修奢摩他後修三摩鉢提.若諸菩薩以寂滅力無作自性起於作用.清淨境界歸於靜慮.此菩薩者.名先修禪那中修三摩鉢提後修奢摩他.若諸菩薩以寂滅力種種清淨而住靜慮起於變化.此菩薩者.名先修禪那齊修奢摩他三摩鉢提.若諸菩薩以寂滅力資於至靜而起變化.此菩薩者.名齊修禪那奢摩他後修三摩鉢提.若諸菩薩以寂滅力資於變化.而起至靜清明境慧.此菩薩者.名齊修禪那三摩鉢提後修奢摩他.若諸菩薩以圓覺慧圓合一切.於諸性相無離覺性.此菩薩者.名爲圓修三種自性清淨隨順.善男子.是名菩薩二十五輪一切菩薩修行.如是若諸菩薩及末世衆生依此輪者.當寂靜思惟求哀懺悔.經三七日.於二十五輪.各安標記.至心求哀.隨手結取.依結開示.便知頓漸.一念疑悔.持梵行即不成就.爾時世尊.欲重宣此義.而說偈言

辯音汝當知　一切諸菩薩　無礙清淨慧　皆依禪定生　所謂奢摩他　三摩提禪那　三法頓漸修
有二十五種　十方諸如來　三世修行者　無不因此法　而得成菩提　唯除頓覺人　幷法不隨順
一切諸菩薩　及末世衆生　常當持此輪　隨順勤修習　依佛大悲力　不久證涅槃

於是淨諸業障菩薩.在大衆中.即從座起頂禮佛足.右繞三帀.長跪叉手.而白佛言.大悲世尊.爲我等輩廣說如是不思議事一切如來因地行相.令諸大衆得未曾有.覩見調御歷恒沙劫.勤苦境界一切功用猶如一念.我等菩薩深自慶慰.世尊.若此覺心本性清淨.因何染汙.使諸衆生迷悶不入.唯願如來廣爲我等開悟法性.令此大

說明作作

則三本俱作卽

以元明俱作認

衆及末世衆生作將來眼。說是語已。五體投地。如是三請。終而復始。爾時世尊。告淨諸業障菩薩言。善哉善哉。善男子。汝等乃能爲諸大衆及末世衆生。諮問如來如是方便。汝今諦聽。當爲汝說。時淨諸業障菩薩奉敎歡喜。及諸大衆默然而聽。善男子。一切衆生從無始來妄想執有我人衆生及與壽命。認四顚倒爲實我體。由此便生憎愛二境。於虛妄體重執虛妄。二妄相依生妄業道。有妄業故妄見流轉。厭流轉者妄見涅槃。由此不能入淸淨覺。非覺違拒諸能入者。有諸能入非覺入故。是故動念及與息念皆歸迷悶。何以故。由有無始本起無明爲己主宰。一切衆生生無慧目。身心等性皆是無明。譬如有人。不自斷命。是故當知。有愛我者我與隨順。非隨順者。便生憎怨。爲憎愛心養無明故。相續求道皆不成就。善男子。云何我相。謂諸衆生心所證者。善男子。譬如有人百骸調適忽忘我身四支絃緩攝養乖方微加鍼艾則知有我。是故證取方現我體。善男子。其心乃至證於如來畢竟了知淸淨涅槃皆是我相。善男子。云何人相。謂諸衆生心悟證者。善男子。悟有我者不復認我。所悟非我悟亦如是。悟已超過一切證者悉爲人相。善男子。其心乃至圓悟涅槃俱是我者。心存少悟備殫證理皆名人相。善男子。云何衆生相。謂諸衆生心自證悟所不及者。善男子。譬如有人。作如是言我是衆生。則知彼人說衆生者非我非彼。云何非我。我是衆生則非是我。云何非彼。我是衆生非彼我故。善男子。但諸衆生了證了悟皆爲我人而我人相所不及者存有所了名衆生相。善男子。云何壽命相。謂諸衆生心照淸淨覺所了者。一切業智所不自見猶如命根。善男子。苦心照見一切覺者皆爲塵垢。覺所覺者不離塵故。如湯銷冰無別有冰知冰銷者。存我覺我亦復如是。善男子。末世衆生不了四相。雖經多劫勤苦修道但名有爲。終不能成一切聖果。是故名爲正法末世。何以故。認一切我爲涅槃故。有證有悟名成就故。譬如有人以賊爲子其家財寶終不成就。何以故。有我愛者亦愛涅槃。伏我愛根爲涅槃相。有憎我者亦憎生死。不知愛者眞生死故。別憎生死名不解脫。云何當知法不解脫。善男子。彼末世衆生習菩提者。以己微證爲自淸淨猶未能盡我相根本。若復有人讚歎彼法卽生歡喜便欲濟度。若復誹謗彼所得者便生瞋恨。則知我相堅固執持潛伏藏識遊戲諸根曾不間斷。善男子。彼修道者不除我相。是故不能入淸淨覺。善男子。若知我空無毀我者。有我說法我未斷故。衆生壽命亦復如是。善男子。末世衆生說病爲法。

是故名爲可憐愍者。雖勤精進增益諸病。是故不能入淸淨覺。善男子。末世衆生不了四相。以如來解及所行處爲自修行終不成就。或有衆生未得謂得未證謂證。見勝進者心生嫉妬。由彼衆生未斷我愛。是故不能入淸淨覺。善男子。末世衆生。希望成道無令求悟。唯益多聞增長我見。但當精勤降伏煩惱。起大勇猛。未得令得未斷令斷。貪瞋愛慢諂曲嫉妬。對境不生。彼我恩愛一切寂滅。佛說是人漸次成就。求善知識不墮邪見。若於所求別生憎愛則不能入淸淨覺海。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言

淨業汝當知　一切諸衆生　皆由執我愛　無始妄流轉　未除四種相　不得成菩提　愛憎生於心
諂曲存諸念　是故多迷悶　不能入覺城　若能歸悟刹　先去貪瞋癡　法愛不存心　漸次可成就
我身本不有　憎愛何由生　此人求善友　終不墮邪見　所求別生心　究竟非成就

於是普覺菩薩在大衆中。卽從座起。頂禮佛足。右繞三帀。長跪叉手。而白佛言。大悲世尊。快說禪病。令諸大衆得未曾有心意蕩然獲大安隱。世尊。末世衆生去佛漸遠。賢聖隱伏邪法增熾。使諸衆生求何等人依何等法行何等行除去何病。云何發心令彼群盲不墮邪見。作是語已。五體投地。如是三請。終而復始。爾時世尊。告普覺菩薩言。善哉善哉。善男子。汝等乃能諮問如來如是修行。能施末世一切衆生無畏道眼。令彼衆生得成聖道。汝今諦聽。當爲汝說。時普覺菩薩奉敎歡喜。及諸大衆默然而聽。善男子。末世衆生將發大心。求善知識欲修行者。當求一切正知見人。心不住相。不著聲聞緣覺境界。雖現塵勞心恒淸淨。示有諸過讚歎梵行。不令衆生入不律儀。求如是人。卽得成就阿耨多羅三藐三菩提。末世衆生見如是人。應當供養不惜身命。彼善知識四威儀中常現淸淨。乃至示現種種過患。心無憍慢。況復搏財妻子眷屬。若善男子於彼善友不起惡念。卽能究竟成就正覺。心華發明照七方刹。善男子。彼善知識所證妙法。應離四病。云何四病。一者作病。若復有人作如是言。我於本心作種種行。欲求圓覺。彼圓覺性非作得故。說名爲病。二者任病。若復有人作如是言。我等今者不斷生死不求涅槃。涅槃生死無起滅念。任彼一切隨諸法性。欲求圓覺。彼圓覺性非任有故。說名爲病。三者止病。若復有人作如是言。我今自心永息諸念。得一切性寂然平等。欲求圓覺。彼圓覺性非止合故。說名爲病。四者滅病。若復有人作如是

言。我今永斷一切煩惱身心畢竟空無所有。何況根塵虛妄境界一切永寂欲求圓覺。彼圓覺性非寂相故說名爲病。離四病者。則知清淨。作是觀者名爲正觀。若他觀者名爲邪觀。善男子。末世衆生欲修行者。應當盡命供養善友事善知識。彼善知識欲來親近應斷憍慢。若復遠離應斷瞋恨。現逆順境猶如虛空。了知身心畢竟平等。與諸衆生同體無異。如是修行方入圓覺。善男子。末世衆生不得所道。由有無始自他憎愛一切種子故未解脫。若復有人觀彼怨家如己父母心無有二即除諸病。於諸法中自他憎愛亦復如是。善男子。末世衆生欲求圓覺。應當發心作如是言。盡於虛空一切衆生我皆令入究竟圓覺。於圓覺中無取覺者。除彼我人一切諸相。如是發心不墮邪見。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言

善覺汝當知　末世諸衆生　欲求善知識　應當求正覺　心遠二乘者　法中除四病　謂作止任滅

親近無憍慢　遠離無瞋恨　見種種境界　心當生希有　還如佛出世　不犯非律儀　戒根永清淨

度一切衆生　究竟入圓覺　無彼我人相　常依止智慧　便得超邪見　證覺般涅槃

於是圓覺菩薩在大衆中。即從座起。頂禮佛足。右遶三匝。長跪叉手。而白佛言。大悲世尊。爲我等輩。廣說淨覺種種方便。令末世衆生有大增益。世尊。我等今者已得開悟。若佛滅後末世衆生未得悟者。云何安居修此圓覺清淨境界。此圓覺中三種淨觀以何爲首。唯願大悲爲諸大衆及末世衆生施大饒益。作是語已。五體投地。如是三請。終而復始。爾時世尊告圓覺菩薩言。善哉善哉。汝男子。汝等乃能問於如來如是方便。以大饒益施諸衆生。汝今諦聽。當爲汝說。時圓覺菩薩奉教歡喜。及諸大衆默然而聽。善男子。一切衆生。若佛住世。若佛滅後。若法末時。有諸衆生具大乘性信佛秘密大圓覺心欲修行者。若在伽藍安處徒衆。有緣事故隨分思察。如我已說。若復無有他事因緣。即建道場當立期限。若立長期百二十日。中期百日。下期八十日安置淨居。若佛現在當正思惟。若佛滅後施設形像。心存目想生正憶念。還同如來常住之日。懸諸幡華。經三七日。稽首十方諸佛名字。求哀懺悔遇善境界得心輕安。過三七日一向攝念。若經夏首三月安居。當爲清淨菩薩止住。心離聲聞不假徒衆。至安居日即於佛前作如是言。我比丘比丘尼優婆塞優婆夷某甲。踞菩薩乘衆寂滅行同入清淨實相住持。以大圓覺

覺三本俱作見
常同作當〇止同作正

爲我伽藍身心安居。平等性智涅槃自性無繫屬故。今我敬請不依聲聞。當與十方如來及大菩薩三月安居。爲修菩薩無上妙覺大因緣故不繫徒衆。善男子。此名菩薩示現安居過三期日隨往無礙。善男子。若彼末世修行衆生求菩薩道入三期者。非彼所聞一切境界終不可取。善男子。若諸衆生修奢摩他。先取至靜不起思念靜極便覺。如是初靜從於一身至一世界覺亦如是。善男子。若覺徧滿一世界者。一世界中有一衆生起一念者皆悉能知。百千世界亦復如是。非彼所聞一切境界終不可取。善男子。若諸衆生修三摩鉢提。先當憶想十方如來十方世界一切菩薩。依種種門漸次修行勤苦三昧廣發大願自薰成種。非彼所聞一切境界終不可取。善男子。若諸衆生。修於禪那先取數門。心中了知生住滅念分齊頭數。如是周徧四威儀中分別念數無不了知。漸次增進乃至得知百千世界一滴之雨。猶如目覩所受用物。非彼所聞一切境界終不可取。是名三觀初首方便。若諸衆生。徧修三種勤行精進。卽名如來出現于世。若後末世鈍根衆生心欲求道不得成就由昔業障。當勤懺悔常起希望先斷憎愛嫉妬諂曲求勝上心。三種淨觀隨學一事。此觀不得復習彼觀。心不放捨漸次求證。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言。

圓覺汝當知　一切諸衆生　欲行無上道　先當結三期　懺悔無始業　經於三七日　然後正思惟
非彼所聞境　畢竟不可取　奢摩他至靜　三摩正憶持　禪那明數門　是名三淨觀　若能勤修習
是名佛出生　鈍根未成者　常當勤心懺　無始一切罪　諸障若銷滅　佛境便現前

於是賢善首菩薩。什大衆中。卽從座起頂禮佛足。右遶三帀。長跪叉手。而白佛言大悲世尊。廣爲我等及末世衆生。開悟如是不思議事。世尊。此大乘敎名字何等。云何奉持。衆生修習得何功德。云何使我護持經人。流布此敎至於何地。作是語已。五體投地。如是三請。終而復始。爾時世尊。告賢善首菩薩言。善哉善哉。善男子。汝等乃能爲諸菩薩及末世衆生。問於如來如是經敎功德名字。汝今諦聽。當爲汝說。時賢善首菩薩奉敎歡喜。及諸大衆默然而聽。善男子。是經百千萬億恒河沙諸佛所說。三世如來之所守護。十方菩薩之所歸依。十二部經清淨眼目。是經名大方廣圓覺陀羅尼。亦名修多羅了義。亦名祕密王三昧。亦名如來決定境界。亦名如來藏自性差別。汝

齊明作劑
行三本俱作求
銷明作消

百下三本俱無千字

足下明有右繞三帀四字

梵下同無天字

經題經下同有卷下二字

當奉持.善男子.是經唯顯如來境界.唯佛如來能盡宣說.若諸菩薩及末世衆生依此修行漸次增進至於佛地.善男子.是經名爲頓教大乘.頓機衆生從此開悟.亦攝漸修一切群品.譬如大海不讓小流乃至蚊虻及阿修羅飲其水者皆得充滿.善男子.假使有人純以七寶積滿三千大千世界以用布施.不如有人聞此經名及一句義.善男子.假使有人敎百千恒河沙衆生得阿羅漢果.不如有人宣說此經分別半偈.善男子.若復有人聞此經名信心不惑.當知是人.非於一佛二佛種諸福慧.如是乃至盡恒河沙一切佛所種諸善根聞此經敎.汝善男子.當護末世是修行者.無令惡魔及諸外道惱其身心令生退屈.爾時會中.有火首金剛摧碎金剛尼藍婆金剛等八萬金剛幷其眷屬.卽從座起.頂禮佛足.而白佛言.世尊.若後末世.一切衆生.有能持此決定大乘.我當守護如護眼目乃至道場所修行處.我等金剛自領徒衆晨夕守護.令不退轉.其家乃至永無災障.疫病銷滅.財寶豐足常不乏少.爾時大梵天王二十八天王幷須彌山王護國天王等.卽從座起.頂禮佛足.右繞三帀而白佛言.世尊.我亦守護是持經者.常令安隱心不退轉.爾時有大力鬼王名吉槃茶.與十萬鬼王.卽從座起.頂禮佛足右繞三帀.而白佛言.世尊.我亦守護是持經人.朝夕侍衛令不退屈.其人所居一由旬內.若有鬼神侵其境界.我當使其碎如微塵.佛說此經已.一切菩薩天龍鬼神八部眷屬及諸天王梵王等一切大衆.聞佛所說.皆大歡喜.信受奉行.

大方廣圓覺修多羅了義經

經題下明無夾
註〇譯號宋元
俱作神龍元年
歲次乙巳五月
己卯朔二十三
日辛丑於廣州
制止道場譯出
天竺沙門般刺
蜜諦譯三十七
字明作唐天竺
沙門般刺密帝
譯十字〇諫宋
明俱作議〇授
三本俱作受〇
烏長乃至譯語
十字同在譯號
次行

軋同作犍

途宋明俱作塗
下同

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經
卷第一

一名中印度那蘭陀大道場經於灌頂部錄出別行　〔麗絲〕〔宋染〕〔元染〕〔明盖〕

大唐神龍元年龍集乙巳五月己卯朔廿三日辛丑中天竺沙門般刺蜜帝於廣州制止道場譯出

菩薩戒弟子前正諫大夫同中書門下平章事淸河房融筆授

烏長國沙門彌伽釋迦譯語

如是我聞.一時佛在室羅筏城祇桓精舍.與大比丘衆千二百五十人俱.皆是無漏大阿羅漢.佛子住持善超諸有.能於國土成就威儀.從佛轉輪妙堪遺囑.嚴淨毗尼弘範三界.應身無量度脫衆生.拔濟未來越諸塵累.其名曰大智舍利弗.摩訶目犍連.摩訶拘絺羅.富樓那彌多羅尼子.須菩提.優波尼沙陀等而爲上首.復有無量辟支無學幷其初心.同來佛所.屬諸比丘休夏自恣.十方菩薩諮決心疑.欽奉慈嚴將求密義.卽時如來敷座宴安.爲諸會中宣示深奧.法筵淸衆得未曾有.迦陵仙音徧十方界.恒沙菩薩來聚道場.文殊師利而爲上首.時波斯匿王爲其父王諱日營齋.請佛宮掖自迎如來.廣設珍羞無上妙味.兼復親延諸大菩薩.城中復有長者居士.同時飯僧佇佛來應.佛勅文殊分領菩薩及阿羅漢應諸齋主.唯有阿難先受別請.遠遊未還不遑僧次.旣無上座及阿闍黎.途中獨歸其日無供.卽時阿難執持應器.於所遊城次第循乞.心中初求最後檀越以爲齋主.無問淨穢剎利尊姓及旃陀羅.方行等慈不擇微賤.發意圓成一切衆生無量功德.阿難已知如來世尊.訶須菩提及大迦葉.爲阿羅漢心不均平.欽仰如來開闡無遮度諸疑謗.經彼城隍徐步郭門.嚴整威儀肅恭齋法

爾時阿難因乞食次經歷婬室。遭大幻術摩登伽女。以娑毗迦羅先梵天咒攝入婬席。婬躬撫摩將毀戒體。如來知彼婬術所加。齋畢旋歸。王及大臣長者居士。俱來隨佛願聞法要。于時世尊頂放百寶無畏光明。光中出生千葉寶蓮。有佛化身結跏趺坐。宣說神咒。勅文殊師利將咒往護。惡咒銷滅。提獎阿難及摩登伽歸來佛所。阿難見佛頂禮悲泣。恨無始來一向多聞未全道力。殷勤啓請十方如來得成菩提。妙奢摩他三摩禪那最初方便。於時復有恒沙菩薩及諸十方大阿羅漢辟支佛等。俱願樂聞。退坐默然承受聖旨

佛告阿難汝我同氣。情均天倫當初發心。於我法中見何勝相。頓捨世間深重恩愛。阿難白佛我見如來三十二相。勝妙殊絕形體映徹猶如瑠璃。常自思惟此相非是欲愛所生。何以故欲氣麤濁腥臊交遘膿血雜亂。不能發生勝淨妙明紫金光聚。是以渴仰從佛剃落。佛言善哉阿難。汝等當知一切衆生。從無始來生死相續。皆由不知常住眞心性淨明體。用諸妄想。此想不眞故有輪轉。汝今欲研無上菩提眞發明性。應當直心詶我所問。十方如來同一道故。出離生死皆以直心。心言直故。如是乃至終始地位中間。永無諸委曲相。阿難我今問汝。當汝發心緣於如來三十二相。將何所見誰爲愛樂。阿難白佛言世尊如是愛樂用我心目。由目觀見。來如勝相心生愛樂。故我發心願捨生死。佛告阿難如汝所說。眞所愛樂因于心目。若不識知心目所在。則不能得降伏塵勞。譬如國王爲賊所侵。發兵討除。是兵要當知賊所在。使汝流轉心目爲咎。吾今問汝唯心與目今何所在

阿難白佛言世尊。一切世間十種異生。同將識心居在身內。縱觀如來青蓮華眼亦在佛面。我今觀此浮根四塵秖在我面。如是識心實居身內

佛告阿難汝今現坐如來講堂。觀祇陀林今何所在。世尊此大重閣清淨講堂在給孤園。今祇陀林實在堂外。阿難汝今堂中先何所見。世尊我在堂中。先見如來次觀大衆。如是外望方矚林園。阿難汝矚林園因何

有見。世尊此大講堂戶牖開豁。故我在堂得遠瞻見

爾時世尊在大衆中。舒金色臂摩阿難頂。告示阿難及諸大衆。有三摩提名大佛頂首楞嚴王具足萬行十方如來一門超出妙莊嚴路。汝今諦聽。阿難頂禮伏受慈旨

佛告阿難如汝所言身在講堂。戶牖開豁遠矚林園。亦有衆生在此堂中。不見如來見堂外者。阿難答言世尊在堂。不見如來能見林泉。無有是處。阿難汝亦如是。汝之心靈一切明了。若汝現前所明了心實在身內。爾時先合了知內身。頗有衆生先見身中後觀外物。縱不能見心肝脾胃。爪生髮長筋轉脈搖。誠合明了如何不知。必不內知云何知外。是故應知汝言覺了能知之心住在身內無有是處。阿難稽首而白佛言。我聞如來如是法音。悟知我心實居身外。所以者何譬如燈光然於室中。是燈必能先照室內。從其室門後及庭際。一切衆生不見身中獨見身外。亦如燈光居在室外不能照室。是義必明將無所惑。同佛了義得無妄耶。佛告阿難是諸比丘。適來從我室羅筏城。循乞摶食歸祇陀林。我已宿齋。汝觀比丘一人食時諸人飽不。阿難答言不也世尊。何以故是諸比丘。雖阿羅漢軀命不同。云何一人能令衆飽。佛告阿難若汝覺了知見之心實在身外。身心相外自不相干。則心所知身不能覺。覺在身際心不能知。我今示汝兜羅緜手。汝眼見時心分別不。阿難答言如是世尊佛告阿難若相知者云何在外。故是應知汝言覺了能知之心住在身外。無有是處

阿難白佛言世尊如佛所言不見內故不居身內。身心相知不相離故不在身外。我今思惟知在一處。佛言處今何在。阿難言此了知心。既不知內而能見外。如我思忖潛伏根裏。猶如有人取瑠璃椀合其兩眼。雖有物合而不留礙。彼根隨見隨即分別。然我覺了能知之心。不見內者爲在根故。分明矚外無障礙者潛根內故

佛告阿難如汝所言.潛根內者猶如瑠璃.彼人當以瑠璃籠眼.當見山河見瑠璃不.如是世尊.是人當以瑠璃籠眼實見瑠璃.佛告阿難汝心若同瑠璃合者.當見山河何不見眼.若見眼者眼卽同境不得成隨.若不能見云何說言此了知心.潛在根內如瑠璃合.是故應知汝言覺了能知之心.潛伏根裏如瑠璃合.無有是處

阿難白佛言世尊我今又作如是思惟.是衆生身府藏在中竅穴居外.有藏則暗有竅則明.今我對佛開眼見明名爲見外.閉眼見暗名爲見內.是義云何

佛告阿難汝當閉眼見暗之時.此暗境界爲與眼對爲不對眼.若與眼對暗在眼前云何成內.若成內者居暗室中無日月燈.此室暗中皆汝焦府.若不對者云何成見.若離外見內對所成.合眼見暗名爲身中.開眼見明何不見面.若不見面內對不成.見面若成.此了知心及與眼根.乃至虛空何成在內.若在虛空自非汝體卽應如來今見汝面亦是汝身.汝眼已知身合非覺.必汝執言身眼兩覺應有二知.卽汝一身應成兩佛.是故應知汝言見暗名見內者無有是處.阿難言我常聞佛開示四衆.由心生故種種法生.由法生故種種心生.我今思惟卽思惟體實我心性.隨所合處心則隨有.亦非內外中間三處

佛告阿難汝今說言由法生故種種心生.隨所合處心隨有者.是心無體則無所合.若無有體而能合者.則十九界因七塵合是義不然.若有體者如汝以手自挃其體.汝所知心爲復內出爲從外入.若復內出還見身中.若從外來先合見面

阿難言見是其眼心知非眼爲見非義.佛言若眼能見汝在室中門能見不.則諸已死尚有眼存應皆見物.若見物者云何名死.阿難又汝覺了能知之心若必有體.爲復一體爲有多體.今在汝身爲復徧體爲不徧體.若一體者.則汝以手挃一肢時.四肢應覺.若咸覺者挃應無在.若挃有所則汝一體自不能成.若多體者

府三本俱作腑次同

肢三本俱作支次同

指三本俱作詣

則成多人何體爲汝。若徧體者同前所拄。若不徧者當汝觸頭亦觸其足。頭有所覺足應無知。今汝不然。是
故應知隨所合處心則隨有無有是處
阿難白佛言。世尊我亦聞佛與文殊等諸法王子談實相時。世尊亦言心不在內亦不在外。如我思惟內無
所見外不相知。內無知故在內不成。身心相知在外非義。今相知故復內無見當在中間
佛言汝言中間。中必不迷非無所在。今汝推中中何爲在。爲復在處爲當在身。若在身者在邊非中在中同
內。若在處者爲有所表爲無所表。無表同無表則無定。何以故如人以表表爲中時。東看則西南觀成北。表
體旣混心應雜亂
阿難言我所說中非此二種。如世尊言眼色爲緣生於眼識。眼有分別色塵無知。識生其中則爲心在。佛言
汝心若在根塵之中。此之心體爲復兼二爲不兼二。若兼二者物體雜亂。物非體知成敵兩立云何爲中。兼
二不成非知不知卽無體性中何爲相。是故應知當在中間無有是處
阿難白佛言世尊。我昔見佛與大目連須菩提富樓那舍利弗四大弟子共轉法輪。常言覺知分別心性。旣
不在內亦不在外。不在中間俱無所在。一切無著名之爲心。則我無著名爲心不
佛告阿難汝言覺知分別心性俱無在者。世間虛空水陸飛行。諸所物象名爲一切。汝不著者爲在爲無。無
則同於龜毛兎角云何不著。有不著者不可名無。無相則無非無則相。相有則在云何無著。是故應知一切
無著。名覺知心無有是處
爾時阿難在大衆中卽從座起。偏袒右肩右膝著地。合掌恭敬而白佛言。我是如來最小之弟。蒙佛慈愛雖
今出家猶恃憍憐。所以多聞未得無漏。不能折伏娑毗羅呪。爲彼所轉溺於婬舍。當由不知眞際所指。惟願
世尊。大慈哀愍。開示我等奢摩他路。令諸闡提隳彌戾車。作是語已五體投地。及諸大衆傾渴翹佇欽聞示

誨

爾時．世尊從其面門放種種光．其光晃耀如百千日．普佛世界六種震動．如是十方微塵國土．一時開現．佛之威神令諸世界合成一界．其世界中所有一切諸大菩薩．皆住本國合掌承聽

佛告阿難一切衆生．從無始來種種顚倒．業種自然如惡叉聚．諸修行人不能得成無上菩提．乃至別成聲聞緣覺．及成外道諸天魔王及魔眷屬．皆由不知二種根本錯亂修習．猶如煑沙欲成嘉饌．縱經塵刧終不能得．云何二種．阿難一者無始生死根本．則汝今者與諸衆生．用攀緣心爲自性者．二者無始菩提涅槃元清淨體．則汝今者識精元明．能生諸緣緣所遺者．由諸衆生遺此本明．雖終日行而不自覺枉入諸趣

阿難汝今欲知奢摩他路願出生死．今復問汝．即時如來擧金色臂屈五輪指．語阿難言汝今見不．阿難言見．佛言汝何所見．阿難言我見如來擧臂屈指．爲光明拳曜我心目．佛言汝將誰見．阿難言我與大衆同將眼見

佛告阿難汝今答我．如來屈指爲光明拳．耀汝心目汝目可見．以何爲心當我拳耀阿難言如來現今徵心所在．而我以心推窮尋逐．即能推者我將爲心

佛言咄阿難此非汝心．阿難矍然避座合掌起立白佛．此非我心當名何等．佛告阿難此是前塵虛妄相想惑汝眞性．由汝無始至于今生認賊爲子．失汝元常故受輪轉

阿難白佛言世尊我佛寵弟．心愛佛故令我出家．我心何獨供養如來．乃至徧歷恒沙國土．承事諸佛及善知識發大勇猛．行諸一切難行法事皆用此心．縱令謗法永退善根亦因此心．若此發明不是心者．我乃無心同諸土木．離此覺知更無所有．云何如來說此非心．我實驚怖兼此大衆無不疑惑．惟垂大悲開示未悟

爾時世尊開示阿難及諸大衆．欲令心入無生法忍．於師子座摩阿難頂而告之言．如來常說諸法所生唯

見下三本俱無以我眼根四字

心所現。一切因果世界微塵因心成體。阿難若諸世界一切所有。其中乃至草葉縷結。詰其根元咸有體性。縱令虛空亦有名貌。何況清淨妙淨明心性一切心而自無體。若汝執悋分別覺觀。所了知性必為心者。此心卽應離諸一切色香味觸。諸塵事業別有全性。如汝今者承聽我法。此則因聲而有分別。縱滅一切見聞覺知。內守幽閑猶為法塵分別影事。我非勅汝執為非心。但汝於心。微細揣摩若離前塵有分別性卽真汝心。若分別性離塵無體。斯則前塵分別影事。塵非常住若變滅時。此心則同龜毛兎角。則汝法身同於斷滅。其誰修證無生法忍。卽時阿難與諸大衆默然自失。佛告阿難世間一切諸修學人。現前雖成九次第定。不得漏盡成阿羅漢。皆由執此生死妄想誤為真實。是故汝今雖得多聞不成聖果。阿難聞已重復悲淚五體投地。長跪合掌而白佛言。自我從佛發心出家恃佛威神。常自思惟無勞我修。將謂如來惠我三昧。不知身心本不相代。失我本心。雖身出家心不入道。譬如窮子捨父逃逝。今日乃知雖有多聞。若不修行與不聞等。如人說食終不能飽。世尊我等今者二障所纏。良由不知寂常心性。惟願如來哀愍窮露。發妙明心開我道眼

卽時如來從胷卍字涌出寶光。其光晃昱有百千色。十方微塵普佛世界一時周徧。徧灌十方所有寶剎諸如來頂。旋至阿難及諸大衆。告阿難言吾今為汝建大法幢。亦令十方一切衆生。獲妙微密性淨明心得清淨眼。阿難汝先答我見光明拳。此拳光明因何所有。云何成拳汝將誰見。阿難言由佛全體閻浮檀金赩如寶山。清淨所生故有光明。我實眼觀五輪指端。屈握示人故有拳相

佛告阿難如來今日實言告汝。諸有智者要以譬喻而得開悟。阿難譬如我拳。若無我手不成我拳。若無汝眼不成汝見。以汝眼根例我拳理。其義均不。阿難言唯然世尊。既無我眼不成我見。以我眼根例如來拳事義相類

自三本俱作有次同〇辮同作盻次同〇何因明倒

食宿明倒

佛告阿難汝言相類是義不然.何以故如無手人拳畢竟滅.彼無眼者非見全無.所以者何汝試於途詢問盲人汝何所見.彼諸盲人必來答汝.我今眼前唯見黑暗更無他矚.以是義觀前塵自暗見何虧損

阿難言諸盲眼前.唯覩黑暗云何成見.佛告阿難諸盲無眼唯觀黑暗.與有眼人處於暗室.二黑有別爲無有別.如是世尊此暗中人與彼群盲.二黑校量曾無有異.阿難若無眼人全見前黑.忽得眼光還於前塵.見種種色名眼見者.彼暗中人全見前黑.忽獲燈光亦於前塵.見種種色應名燈見.若燈見者燈能有見自不名燈.又則燈觀何關汝事.是故當知燈能顯色.如是見者是眼非燈.眼能顯色.如是見性是心非眼

阿難雖復得聞是言.與諸大衆口已默然心未開悟.猶冀如來慈音宣示.合掌淸心佇佛悲誨

爾時世尊舒兜羅綿網相光手開五輪指.誨勑阿難及諸大衆.我初成道於鹿園中.爲阿若多五比丘等及汝四衆言.一切衆生不成菩提及阿羅漢.皆由客塵煩惱所誤.汝等當時因何開悟今成聖果

時憍陳那起立白佛.我今長老於大衆中獨得解名.因悟客塵二字成果.世尊譬如行客投寄旅亭.或宿或食食宿事畢.俶裝前途不遑安住.若實主人自無攸往.如是思惟不住名客住名主人.以不住者名爲客義.又如新霽淸暘昇天光入隙中.發明空中諸有塵相.塵質搖動虛空寂然.如是思惟澄寂名空搖動名塵.以搖動者名爲塵義.佛言如是

卽時如來於大衆中屈五輪指.屈已復開開已又屈.謂阿難言汝今何見.阿難言我見如來百寶輪掌衆中開合.佛告阿難汝見我手衆中開合.爲是我手有開有合.爲復汝見有開有合.阿難言世尊寶手衆中開合.我見如來手自開合.非我見性有開有合.佛言誰動誰靜.阿難言佛手不住而我見性.尚無有靜誰爲無住.佛言如是.如來於是從輪掌中.飛一寶光在阿難右.卽時阿難迴首右辮.又放一光在阿難左.阿難又則迴首左辮.佛告阿難汝頭今日何因搖動.阿難言我見如來出妙寶光來我左右.故左右觀頭自搖動.阿難汝

瞻佛光左右動頭。為汝頭動為復見動。世尊我頭自動而我見性。尚無有止誰為搖動。佛言如是

於是如來普告大衆。若復衆生以搖動者名之為塵。以不住者名之為客。汝觀阿難頭自動搖神無所動。又汝觀我手自開合見無舒卷。云何汝今以動為身以動為境。從始洎終念念生滅。遺失真性顚倒行事。性心失真認物為己。輪廻是中自取流轉

未題頂下三本俱有如來密因修證了義諸菩薩十一字下卷皆同

大佛頂萬行首楞嚴經卷第一

以下三本俱無經題下夾註唐號宋元俱無五字帝作諸但亦七字兩卷麗作諸譯語筆受三本俱如前有之但元無正議大夫同五字

波上三本俱有時字

存同作在

年同作歲

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經卷第二

一名中印度那蘭陀大道場經於灌頂部錄出別行　〔麗絲〕〔宋染〕〔元染〕〔明羔〕

唐天竺沙門般剌蜜帝譯

爾時阿難及諸大衆。聞佛示誨身心泰然。念無始來失却本心。妄認緣塵分別影事。今日開悟如失乳兒忽遇慈母。合掌禮佛。願聞如來顯出身心眞妄虛實。現前生滅與不生滅二發明性

波斯匿王起立白佛。我昔未承諸佛誨勅。見迦旃延毘羅胝子。咸言此身死後斷滅名爲涅槃。我雖値佛今猶狐疑。云何發揮證知此心不生滅地。今此大衆諸有漏者咸皆願聞

佛告大王。汝身現存今復問汝。汝此肉身爲同金剛常住不朽。爲復變壞。世尊我今此身終從變滅

佛言大王。汝未曾滅云何知滅。世尊我此無常變壞之身。雖未曾滅我觀現前。念念遷謝新新不住。如火成灰漸漸銷殞。殞亡不息。決知此身當從滅盡

佛言如是大王。汝今生齡已從衰老。顏貌何如童子之時。世尊我昔孩孺膚腠潤澤。年至長成血氣充滿。而今頹齡迫於衰耄。形色枯悴精神昏昧。髮白面皺逮將不久。如何見比充盛之時

佛言大王。汝之形容應不頓朽。王言世尊變化密移我誠不覺。寒暑遷流漸至於此。何以故我年二十雖號年少。顏貌已老初十年時。三十之年又衰二十。于今六十又過于二。觀五十時宛然強壯。世尊我見密移雖此殂落。其間流易且限十年。若復令我微細思惟。其變寧唯一紀二紀實爲年變。豈唯年變亦兼月化。何直月化兼又日遷。沈思諦觀刹那刹那。念念之間不得停住。故知我身終從變滅

言同作吉〇知汝同倒

精三本俱作睛

佛言大王汝見變化遷改不停悟知汝滅亦於滅時知汝身中有不滅耶波斯匿王合掌白佛我實不知佛言我今示汝不生滅性大王汝年幾時見恒河水王言我生三歲慈母携我謁耆婆天經過此流爾時卽知是恒河水佛言大王如汝所說二十之時衰於十歲乃至六十日月歲時念念遷變則汝三歲見此河時至年十三其水云何王言如三歲時宛然無異乃至于今年六十二亦無有異佛言汝今自傷髮白面皺其面必定皺於童年則汝今時觀此恒河與昔童時觀河之見有童耄不王言不也世尊佛言大王汝面雖皺而此見精性未曾皺皺者爲變不皺非變變者受滅彼不變者元無生滅云何於中受汝生死而猶引彼末伽棃等都言此身死後全滅王聞是言信知身後捨生趣生與諸大衆踊躍歡喜得未曾有阿難卽從座起禮佛合掌長跪白佛世尊若此見聞必不生滅云何世尊名我等輩遺失眞性顚倒行事願興慈悲洗我塵垢卽時如來垂金色臂輪手下指示阿難言汝今見我母陀羅手爲正爲倒阿難言世間衆生以此爲倒而我不知誰正誰倒佛告阿難若世間人以此爲倒卽世間人將何爲正阿難言如來豎臂兜羅綿手上指於空則名爲正佛卽豎臂告阿難言若此顚倒首尾相換諸世間人一倍瞻視則知汝身與諸如來淸淨法身比類發明如來之身名正徧知汝等之身號性顚倒隨汝諦觀汝身佛身稱顚倒者名字何處號爲顚倒

于時阿難與諸大衆瞪瞢瞻佛目睛不瞬不知身心顚倒所在佛興慈悲哀愍阿難及諸大衆發海潮音徧告同會諸善男子我常說言色心諸緣及心所使諸所緣法唯心所現汝身汝心皆是妙明眞精妙心中所現物云何汝等遺失本妙圓妙明心寶明妙性認悟中迷晦昧爲空空晦暗中結暗爲色色雜妄想想相爲身聚緣內搖趣外奔逸昏擾擾相以爲心性一迷爲心決定惑爲色身之內不知色身外洎山河虛空大地咸是妙明眞心中物譬如澄淸百千大海棄之唯認一浮漚體目爲全潮窮盡瀛渤汝等卽是迷中倍人如我垂手等無差別如來說爲可憐愍者

誨明作悔

埻宋作燉次同

阿難承佛悲救深誨。垂泣叉手而白佛言。我雖承佛如是妙音。悟妙明心元所圓滿常住心地。而我悟佛現說法音。現以緣心允所瞻仰。徒獲此心未敢認爲本元心地。願佛哀愍宣示圓音。拔我疑根歸無上道

佛告阿難汝等尙以緣心聽法。此法亦緣非得法性。如人以手指月示人。彼人因指當應看月。若復觀指以爲月體。此人豈唯亡失月輪亦亡其指。何以故以所標指爲明月故。豈唯亡指。亦復不識明之與暗。何以故卽以指體爲月明性。明暗二性無所了故。汝亦如是若以分別我說法音爲汝心者。此心自應離分別音有分別性。譬如有客寄宿旅亭。暫止便去終不常住。而掌亭人都無所去名爲亭主。此亦如是若眞汝心則無所去。云何離聲無分別性。斯則豈唯聲分別心。分別我容離諸色相無分別性。如是乃至分別都無非色非空。拘舍離等昧爲冥諦離諸法緣無分別性。則汝心性各有所還云何爲主

阿難言若我心性各有所還。則如來說妙明元心云何無還。惟垂哀愍爲我宣說

佛告阿難且汝見我見精明元。此見雖非妙精明心。如第二月非是月影。汝應諦聽。今當示汝無所還地。阿難此大講堂洞開東方。日輪昇天則有明輝。中夜黑月雲霧晦瞑則復昏暗。戶牖之隙則復見通。牆宇之間則復觀擁。分別之處則復見緣。頑虛之中徧是空性。鬱埻之象則紆昏塵。澄霽斂氛又觀淸淨。阿難汝咸看此諸變化相。吾今各還本所因處。云何本因。阿難此諸變化明還日輪。何以故無日不明明因屬日。是故還日暗還黑月。通還戶牖。擁還牆宇。緣還分別頑虛還空。鬱埻還塵淸明還霽。則諸世間一切所有不出斯類。汝見八種見精明性。當欲誰還。何以故若還於明。則不明時無復見暗。雖明暗等種種差別見無差別。諸可還者自然非汝。不汝還者非汝而誰。則知汝心本妙明淨。汝自迷悶喪本受輪。於生死中常被漂溺。是故如來名可憐愍

阿難言我雖識此見性無還。云何得知是我眞性

佛告阿難吾今問汝.今汝未得無漏清淨.承佛神力見於初禪得無障礙.而阿那律見閻浮提.如觀掌中菴摩羅菓.諸菩薩等見百千界.十方如來窮盡微塵清淨國土無所不矚.衆生洞視不過分寸.阿難且吾與汝觀四天王所住宮殿.中間徧覽水陸空行.雖有昏明種種形像.無非前塵分別留礙.汝應於此分別自他.今吾將汝擇於見中.誰是我體誰爲物象.阿難極汝見源.從日月宮是物非汝.至七金山周徧諦觀.雖種種光亦物非汝.漸漸更觀雲騰鳥飛.風動塵起樹木山川.草芥人畜咸物非汝.阿難是諸近遠諸有物性.雖復差殊同汝見精清淨所矚.則諸物類自有差別見性無殊.此精妙明誠汝見性.若見是物則汝亦可見吾之見.若同見者名爲見吾.吾不見時何不見吾不見之處.若見不見自然非彼不見之相.若不見吾不見之地.自然非物云何非汝.又則汝今見物之時.汝旣見物物亦見汝.體性紛雜則汝與我.幷諸世間不成安立.阿難若汝見時是汝非我.見性周徧非汝而誰.云何自疑汝之眞性.性汝不眞取我求實.阿難白佛言世尊.若此見性必我非餘.我與如來觀四天王勝藏寶殿居日月宮.此見周圓徧娑婆國.退歸精舍只見伽藍.清心戶堂但瞻簷廡.世尊此見如是.其體本來周徧一界.今在室中唯滿一室.爲復此見縮大爲小.爲當牆宇夾令斷絕.我今不知斯義所在.願垂弘慈爲我敷演

佛告阿難一切世間大小內外.諸所事業各屬前塵.不應說言見有舒縮.譬如方器中見方空.吾復問汝此方器中所見方空.爲復定方爲不定方.若定方者別安圓器空應不圓.若不定者在方器中應無方空.汝言不知斯義所在.義性如是云何爲在.阿難若復欲令入無方圓.但除器方空體無方.不應說言更除虛空方相所在.若如汝問入室之時.縮見令小仰觀日時.汝豈挽見齊於日面.若築牆宇能夾見斷.穿爲小竇寧無竇迹.是義不然.一切衆生從無始來迷己爲物.失於本心爲物所轉.故於是中觀大觀小.若能轉物則同如來.身心圓明不動道場.於一毛端徧能含受十方國土

令同作今
辨宋元俱作別
有三本俱作其
精見元明俱倒
爲三本俱作見

阿難白佛言世尊。若此見精必我妙性。令此妙性現在我前。見必我眞。我今身心復是何物。而今身心分別有實。彼見無別分辨我身。若實我心令我今見見性實我而身非我。何殊如來先所難言物能見我。惟垂大慈開發未悟

佛告阿難今汝所言。見在汝前是義非實。若實汝前汝實見者。則此見精既有方所非無指示。且今與汝坐祇陀林。徧觀林渠及與殿堂。上至日月前對恆河。汝今於我師子座前。擧手指陳是種種相。陰者是林明者是日。礙者是壁。通者是空。如是乃至草樹纖毫大小雖殊。俱可有形無不指著。若必有見現在汝前。汝應以手確實指陳何者是見。阿難當知若空是見。既已見成何者是空。若物是見。既已是見何者爲物。汝可微細披剝萬象。析出精明淨妙見元指陳示我。同彼諸物分明無惑

阿難言我今於此重閣講堂。遠洎恒河上觀日月。擧手所指縱目所觀。指皆是物無是見者。世尊如佛所說。況我有漏初學聲聞。乃至菩薩亦不能於萬物象前剖出精見。離一切物別有自性。佛言如是如是

佛復告阿難。如汝所言無有精見。離一切物別有自性。則汝所指是物之中無是見者。今復告汝汝與如來。坐祇陀林更觀林苑。乃至日月種種象殊。必無見精受汝所指。汝又發明此諸物中何者非見。阿難言我實徧見此祇陀林。不知是中何者非見。何以故若樹非見云何見樹。若樹卽見復云何樹。如是乃至若空非見云何爲空。若空卽見復云何空。我又思惟是萬象中。微細發明無非見者。佛言如是如是

於是大衆非無學者。聞佛此言茫然不知是義終始。一時惶悚失其所守。如來知其魂慮變慴心生憐愍。安慰阿難及諸大衆。諸善男子無上法王是眞實語。如所如說不誑不妄。非末伽梨四種不死矯亂論議。汝諦思惟無忝哀慕

是時文殊師利法王子愍諸四衆。在大衆中卽從座起。頂禮佛足合掌恭敬。而白佛言世尊。此諸大衆。不悟

性同作生
同同作因

如來發明二種精見色空是非是義．世尊若此前緣色空等象．若是見者應有所指．若非見者應無所矚．而今不知是義所歸故有驚怖．非是疇昔善根輕鮮．惟願如來大慈發明此諸物象．與此見精元是何物．於其中間無是非是

佛告文殊及諸大衆．十方如來及大菩薩．於其自住三摩地中．見與見緣幷所想相．如虛空華本無所有．此見及緣元是菩提妙淨明體．云何於中有是非是．文殊吾今問汝．如汝文殊更有文殊．是文殊者爲無文殊．如是世尊我眞文殊無是文殊．何以故若有是者則二文殊．然我今日非無文殊．於中實無是非二相．佛言此見妙明與諸空塵．亦復如是本是妙明．無上菩提淨圓眞心．妄爲色空及與聞見．如第二月誰爲是月又誰非月．文殊但一月眞．中間自無是月非月．是以汝今觀見與塵．種種發明名爲妄想．不能於中出是非是．由是精眞妙覺明性．故能令汝出指非指

阿難白佛言世尊．誠如法王所說覺緣徧十方界．湛然常住性非生滅．與先梵志娑毗迦羅所談冥諦．及投灰等諸外道種．說有眞我徧滿十方．有何差別．世尊亦曾於楞伽山．爲大慧等敷演斯義．彼外道等常說自然．我說因緣非彼境界．我今觀此覺性自然非生非滅．遠離一切虛妄顚倒．似非因緣與彼自然．云何開示不入群邪．獲眞實心妙覺明性．佛告阿難我今如是開示方便．眞實告汝．汝猶未悟惑爲自然．阿難若必自然．自須甄明有自然體．汝且觀此妙明見中以何爲自．此見爲復以明爲自以暗爲自．以空爲自以塞爲自．阿難若明爲自應不見暗．若復以空爲自體者應不見塞．如是乃至諸暗等相以爲自者．則於明時見性斷滅云何見明

阿難言必此妙見性非自然．我今發明是因緣性．心猶未明諮詢如來．是義云何合因緣性．佛言汝言因緣吾復問汝．汝今同見見性現前．此見爲復因明有見因暗有見．因空有見因塞有見．阿難若因明有應不見

暗．如因暗有應不見明．如是乃至因空因塞同於明暗．復次阿難此見又復緣明有見緣暗有見．緣空有見緣塞有見．阿難若緣空有應不見塞．若緣塞有應不見空．如是乃至緣明緣暗同於空塞．當知如是精覺妙明非因非緣．亦非自然非不自然．無非不非無是非是．離一切相卽一切法．汝今云何於中措心．以諸世間戲論名相而得分別．如以手掌撮摩虛空．只益自勞．虛空云何隨汝執捉

阿難白佛言世尊．必妙覺性非因非緣．世尊云何常與比丘宣說見性具四種緣．所謂因空因明因心因眼是義云何．佛言阿難我說世間諸因緣相非第一義．阿難吾復問汝．諸世間人說我能見．云何名見云何不見．阿難言世人因於日月燈光．見種種相名之為見．若復無此三種光明則不能見．阿難若無明時名不見者．應不見暗．若必見暗此但無明云何無見．阿難若在暗時不見明故名為不見．今在明時不見暗相還名不見．如是二相俱名不見．若復二相自相欲奪．非汝見性於中暫無．如是則知二俱名見．云何不見．是故阿難汝今當知．見明之時見非是明．見暗之時見非是暗．見空之時見非是空．見塞之時見非是塞．四義成就汝復應知．見見之時見非是見．見猶離見見不能及．云何復說因緣自然及和合相．汝等聲聞狹劣無識．不能通達清淨實相．吾今誨汝當善思惟．無得疲怠妙菩提路

阿難白佛言世尊．如佛世尊為我等輩．宣說因緣及與自然．諸和合相與不和合．心猶未開．而今更聞見見非見重增迷悶．伏願弘慈施大慧目．開示我等覺心明淨．作是語已悲淚頂禮承受聖旨

爾時世尊憐愍阿難及諸大衆．將欲敷演大陀羅尼諸三摩提妙修行路．告阿難言汝雖強記但益多聞．於奢摩他微密觀照心猶未了．汝今諦聽吾今為汝分別開示．亦令將來諸有漏者獲菩提果．阿難．一切衆生輪迴世間．由二顛倒分別見妄．當處發生當業輪轉．云何二見．一者衆生別業妄見．二者衆生同分妄見

云何名妄別業妄見．阿難如世間人目有赤眚夜見燈光．別有圓影五色重疊．於意云何此夜燈明所現圓

欲 三本俱作陵

今 同作當

蝕三本俱作適
勃同作孛
現似元明俱作似前

光。爲是燈色。爲當見色。阿難此若燈色。則非眚人何不同見。而此圓影唯眚之觀。若是見色見已成色。則彼眚人見圓影者名爲何等。復次阿難若此圓影離燈別有。則合傍觀屏帳几筵有圓影出。離見別有應非眼矚。云何眚人目見圓影。是故當知色實在燈見病爲影。影見俱眚見眚非病。終不應言是燈是見。於是中有非燈非見。如第二月非體非影。何以故第二之觀揑所成故。諸有智者不應說言此揑根元是形非形離見非見。此亦如是目眚所成。今欲名誰是燈是見。何況分別非燈非見

云何名爲同分妄見。阿難此閻浮提除大海水。中間平陸有三千洲。正中大洲東西括量。大國凡有二千三百。其餘小洲在諸海中。其間或有三兩百國。或一或二至于三十四十五十。阿難若復此中有一小洲秪有兩國。唯一國人同感惡緣。則彼小洲當土衆生。覩諸一切不祥境界。或見二日或見兩月。其中乃至暈蝕珮玦彗勃飛流負耳虹蜺種種惡相。但此國見彼國衆生。本所不見亦復不聞。阿難吾今爲汝。以此二事進退合明。阿難如彼衆生別業妄見。矚燈光中所現圓影雖現似境。終彼見者目眚所成。眚卽見勞非色所造。然見眚者終無見咎。例汝今日以目觀見山河國土及諸衆生。皆是無始見病所成。見與見緣似現前境。元我覺明見所緣眚。覺見卽眚本覺明心。覺緣非眚覺所覺眚。覺非眚中此實見見。云何復名覺聞知見。是故汝今見我及汝幷諸世間十類衆生皆卽見眚。非見眚者彼見眞精。性非眚者故不名見。阿難如彼衆生同分妄見。例彼妄見別業一人。一病目人同彼一國。彼見圓影眚妄所生。此衆同分所現不祥。同見業中瘴惡所起。俱是無始見妄所生。例閻浮提三千洲中兼四大海娑婆世界。幷洎十方諸有漏國及諸衆生。同是覺明無漏妙心。見聞覺知虛妄病緣。和合妄生和合妄死。若能遠離諸和合緣及不和合。則復滅除諸生死因。圓滿菩提不生滅性。淸淨本心本覺常住

阿難汝雖先悟本覺妙明。性非因緣非自然性。而猶未明如是覺元。非和合生及不和合。阿難吾今復以前

死生三本俱倒

精同作睛

塵問汝。汝今猶以一切世間妄想和合諸因緣性。而自疑惑證菩提心和合起者。則汝今者妙淨見精。爲與明和爲與闇和。爲與通和爲與塞和。若明和者且汝觀明。當明現前何處雜見。見相可辨雜何形像。若非見者云何見明。若卽見者云何見見。必見圓滿何處和明。若明圓滿不合見和。見必異明雜則失彼性明名字。雜失明性和明非義。彼暗與通及諸群塞亦復如是

復次阿難又汝今者妙淨見精。爲與明合爲與暗合。爲與通合爲與塞合。若明合者至於暗時明相已滅。此見卽不與諸暗合云何見暗。若見暗時不與暗合。與明合者應非見明。既不見明云何明合。了明非暗彼暗與通。及諸群塞亦復如是

阿難白佛言世尊。如我思惟此妙覺元。與諸緣塵及心念慮非和合耶。佛言汝今又言覺非和合。吾復問汝此妙見精非和合者。爲非明和爲非暗和。爲非通和爲非塞和。若非明和則見與明必有邊畔。汝且諦觀何處是明何處是見。在見在明自何爲畔。阿難若明際中必無見者則不相及。自不知其明相所在。畔云何成。彼暗與通及諸群塞亦復如是。又妙見精非和合者。爲非明合爲非暗合。爲非通合爲非塞合。若非明合則見與明性相乖角。如耳與明了不相觸。見且不知明相所在。云何甄明合非合理。彼暗與通及諸群塞亦復如是。阿難汝猶未明一切浮塵諸幻化相。當處出生隨處滅盡。幻妄稱相。其性眞爲妙覺明體。如是乃至五陰六入。從十二處至十八界。因緣和合虛妄有生。因緣別離虛妄名滅。殊不能知生滅去來。本如來藏常住妙明。不動周圓妙眞如性。性眞常中求於去來。迷悟死生了無所得

阿難云何五陰本如來藏妙眞如性。阿難譬如有人。以清淨目觀睛明空。唯一精虛逈無所有。其人無故不動目睛。瞪以發勞則於虛空別見狂華。復有一切狂亂非相。色陰當知亦復如是。阿難是諸狂華。非從空來非從目出。如是阿難若空來者。既從空來還從空入。若有出入卽非虛空。空若非空自不容其華相起滅。如

卽同作則

阿難體不容阿難．若目出者既從目出還從目入．卽此華性從目出故當合有見．若有見者去既華空旋合見眼．若無見者出既翳空旋當翳眼．又見華時目應無翳．云何晴空號淸明眼．是故當知色陰虛妄．本非因緣非自然性．阿難譬如有人手足宴安百骸調適．忽如妄生性無違順．其人無故以二手掌於空相摩．於二手中妄生澁滑冷熱諸相．受陰當知亦復如是．阿難是諸幻觸．不從空來不從掌出．如是阿難若空來者．既能觸掌何不觸身．不應虛空選擇來觸．若從掌出應非待合．又掌出故．合則掌知離卽觸入．臂腕骨髓應亦覺知入時蹤跡．必有覺心知出知入．自有一物身中往來．何待合知要名爲觸．是故當知受陰虛妄．本非因緣非自然性

阿難譬如有人．談說醋梅口中水出．思蹋懸崖足心酸澁．想陰當知亦復如是．阿難如是酢說．不從梅生非從口入．如是阿難若梅生者．梅合自談何待人說．若從口入自合口聞何須待耳．若獨耳聞此水何不耳中而出．想蹋懸崖與說相類．是故當知想陰虛妄．本非因緣非自然性

阿難譬如暴流波浪相續．前際後際不相踰越．行陰當知亦復如是．阿難如是流性．不因空生不因水有．亦非水性非離空水．如是阿難若因空生．則諸十方無盡虛空成無盡流．世界自然俱受淪溺．若因水有．則此暴流性應非水．有所有相今應現在．若卽水性則澄清時應非水體．若離空水．空非有外水外無流．是故當知行陰虛妄．本非因緣非自然性．阿難譬如有人取頻伽瓶．塞其兩孔滿中擎空．千里遠行用餉他國．識陰當知亦復如是．阿難如是虛空．非彼方來非此方入．如是阿難若彼方來．則本瓶中既貯空去．於本瓶地應少虛空．若此方入開孔倒瓶應見空出．是故當知識陰虛妄．本非因緣非自然性

大佛頂萬行首楞嚴經卷第二

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經卷第三

一名中印度那蘭陀大道場經於灌頂部錄出別行　〔麗綠〕、〔宋染〕〔元染〕〔明善〕

唐天竺沙門般刺蜜帝譯

復次阿難云何六入本如來藏妙眞如性。阿難卽彼目精瞪發勞者。兼目與勞同是菩提瞪發勞相因于明暗。二種妄塵發見居中。吸此塵象名爲見性。此見離彼明暗二塵畢竟無體。如是阿難當知是見非明暗來。非於根出不於空生。何以故若從明來。暗卽隨滅應非見暗。若從暗來。明卽隨滅應無見明。若從根生必無明暗。如是見精本無自性。若於空出前矚塵象歸當見根。又空自觀何關汝入。是故當知眼入虛妄。本非因緣非自發性。阿難譬如有人以兩手指急塞其耳。耳根勞故頭中作聲。兼耳與勞同是菩提瞪發勞相因于動靜。二種妄塵發聞居中。吸此塵象名聽聞性。此聞離彼動靜二塵畢竟無體。如是阿難當知是聞非動靜來。非於根出不於空生。何以故若從靜來。動卽隨滅應非聞動。若從動來。靜卽隨滅應無覺靜。若從根生必無動靜。如是聞體本無自性。若於空出。有聞成性卽非虛空。又空自聞何關汝入。是故當知耳入虛妄。本非因緣非自然性

阿難譬如有人。急畜其鼻畜久成勞。則於鼻中聞有冷觸。因觸分別通塞虛實。如是乃至諸香臭氣。兼鼻與勞同是菩提瞪發勞相因于通塞。二種妄塵發聞居中。吸此塵象名齅聞性。此聞離彼通塞二塵畢竟無體。當知是聞非通塞來。非於根出不於空生。何以故若從通來。塞自隨滅云何知塞。如因塞有通則無聞。云何發明香臭等觸。若從根生必無通塞。如是聞體本無自性。若從空出。是聞自當迴齅汝鼻。空自有聞何關汝

精三本俱作睛

自隨三本俱作則聞○體同作機

入是。故當知鼻入虛妄。本非因緣非自然性

阿難譬如有人。以舌舐吻。熟舐令勞。其人若病則有苦味。無病之人微有甜觸。由甜與苦顯此舌根。不動之時淡性常在。兼舌與勞同是菩提。瞪發勞相因甜苦淡。二種妄塵發知居中。吸此塵象名知味性。此知味性離彼甜苦及淡二塵畢竟無體。如是阿難當知如是嘗苦淡知。非甜苦來非因淡有。又非根出不於空生。何以故若甜苦來。淡即知滅。云何知淡。若從淡出。甜即知亡。復云何知甜苦二相。若從舌生。必無甜淡及與苦塵。斯知味根本無自性。若於空出虛空自味非汝口知。又空自知何關汝入。是故當知舌入虛妄。本非因緣非自然性

阿難譬如有人。以一冷手觸於熱手。若冷勢多熱者從冷。若熱功勝冷者成熱。如是以此合覺之觸顯於離知。涉勢若成因于勞觸。兼身與勞同是菩提。瞪發勞相因于離合。二種妄塵發覺居中。吸此塵象名知覺性。此知覺體離彼離合違順二塵畢竟無體。如是阿難當知是覺。非離合來非違順有。不於根出又非空生。何以故若合時來。離當已滅云何覺離。違順二相亦復如是。若從根出。必無離合違順四相。則汝身知元無自性。必於空出。空自知覺何關汝入。是故當知身入虛妄。本非因緣非自然性

阿難譬如有人。勞倦則眠睡熟便寤。覽塵斯憶失憶為忘。是其顛倒生住異滅。吸習中歸不相踰越稱意知根。兼意與勞同是菩提。瞪發勞相因于生滅。二種妄塵集知居中。吸撮內塵見聞逆流。流不及地名覺知性。此覺知性離彼寤寐。生滅二塵畢竟無體。如是阿難當知如是覺知之根。非寤寐來非生滅有。不於根出亦非空生。何以故若從寤來。寐即隨滅將何為寐。必生時有。滅即同無令誰受滅。若從滅有。生即滅無孰知生者。若從根出。寤寐二相隨身開合。離斯二體此覺知者。同於空華畢竟無性。若從空生。自是空知何關汝入。是故當知意入虛妄。本非因緣非自然性

復次阿難。云何十二處本如來藏妙眞如性。阿難汝且觀此祇陀樹林及諸泉池。於意云何。此等爲是色生眼見。眼生色相。阿難若復眼根生色相者。見空非色色性應銷。銷則顯發一切都無。色相旣無誰明空質。空亦如是。若復色塵生眼見者。觀空非色見卽銷亡。亡則都無誰明空色。是故當知見與色空倶無處所。卽色與見二處虛妄。本非因緣非自然性

阿難汝更聽此祇陀園中食辦擊鼓。衆集撞鐘。鐘鼓音聲前後相續。於意云何。此等爲是聲來耳邊耳往聲處。阿難若復此聲來於耳邊。如我乞食室羅筏城。在祇陀林則無有我。此聲必來阿難耳處。目連迦葉應不倶聞。何況其中一千二百五十沙門。一聞鐘聲同來食處。若復汝耳往彼聲邊。如我歸住祇陀林中。在室羅城則無有我。汝聞鼓聲。其耳已往擊鼓之處。鐘聲齊出應不倶聞。何況其中象馬牛羊種種音響。若無來往亦復無聞。是故當知聽與音聲倶無處所。卽聽與聲二處虛妄。本非因緣非自然性

阿難汝又齅此鑪中栴檀。此香若復然於一銖。室羅筏城四十里內同時聞氣。於意云何。此香爲復生栴檀木。生於汝鼻。爲生於空。阿難若復此香生於汝鼻。稱鼻所生當從鼻出。鼻非栴檀。云何鼻中有栴檀氣。稱汝聞香當於鼻入。鼻中出香説聞非義。若生於空。空性常恒香應常在。何藉鑪中爇此枯木。若生於木則此香質因爇成煙。若鼻得聞合蒙煙氣。其煙騰空未及遙遠。四十里內云何已聞。是故當知香臭與聞倶無處所。卽齅與香二處虛妄。本非因緣非自然性

阿難汝常二時衆中持鉢。其間或遇酥酪醍醐名爲上味。於意云何。此味爲復生於空中。生於舌中。爲生食中。阿難若復此味生於汝舌。在汝口中秖有一舌。其舌爾時已成酥味。遇黑石蜜應不推移。若不變移不名知味。若變移者舌非多禮。云何多味一舌之知。若生於食食非有識。云何自知。又食自知卽同他食。何預於汝名味之知。若生於空汝噉虛空當作何味。必其虛空若作鹹味。旣鹹汝舌亦鹹汝面。則此界人同於海魚。旣常受鹹了不知淡。若不識淡亦不覺鹹。必無所知云何名味。是

已宋作得○臭三本倶作鼻

故當知味舌與嘗俱無處所.卽嘗與味二俱塵妄.本非因緣非自然性

阿難汝常晨朝以手摩頭.於意云何.此摩所知誰爲能觸.能爲在手爲復在頭.若在於手.頭則無知云何成觸.若在於頭.手則無用云何名觸.若各各有則汝阿難應有二身.若頭與手一觸所生.則手與頭當爲一體.若一體者觸則無成.若二體者觸誰爲在.在能非所在所非能.不應虛空與汝成觸.是故當知覺觸與身俱無處所.卽身與觸二俱虛妄.本非因緣非自然性

阿難汝常意中所緣善惡無記三性生成法則.此法爲復卽心所生.爲當離心別有方所

阿難若卽心者.法則非塵非心所緣云何成處.若離於心別有方所.則法自性爲知非知.知則外心異汝非塵.同他心量.卽汝卽心.云何汝心更二於汝.若非知者此塵既非色聲香味離合冷煖及虛空相當於何在.今於色空都無表示.不應人間更有空外.心非所緣處從誰立.是故當知法則與心俱無處所.則意與法二俱虛妄.本非因緣非自然性

復次阿難云何十八界本如來藏妙眞如性.阿難如汝所明.眼色爲緣生於眼識.此識爲復因眼所生以眼爲界.因色所生以色爲界.阿難若因眼生.既無色空無可分別.縱有汝識欲將何用.汝見又非靑黃赤白.無所表示從何立界.若因色生.空無色時汝識應滅.云何識知是虛空性.若色變時汝亦識其色相遷變.汝識不遷界從何立.從變則變界相自無.不變則恒既從色生.應不識知虛空所在.若兼二種眼色共生.合則中離離則兩合.體性雜亂云何成界.是故當知眼色爲緣生眼識界.三處都無.則眼與色及色界三.本非因緣非自然性

阿難又汝所明.耳聲爲緣生於耳識.此識爲復因耳所生以耳爲界.因聲所生以聲爲界

阿難若因耳生.動靜二相既不現前.根不成知必無所知.知尙無成識何形貌.若取耳聞.無動靜故聞無所

則宋明俱作即

成.云何耳形雜色觸塵名爲識界.則耳識界復從誰立.若生於聲.識因聲有則不關聞.無聞則亡聲相所在.識從聲生.許聲因聞而有聲相.聞應聞識不聞非界.聞則同聲.識已被聞誰知聞識.若無知者終如草木.不應聲聞雜成中界.界無中位.則內外相復從何成.是故當知耳聲爲緣生耳識界.三處都無.則耳與聲及聲界三.本非因緣非自然性

阿難又汝所明.鼻香爲緣生於鼻識.此識爲復因鼻所生以鼻爲界.因香所生以香爲界

阿難若因鼻生.則汝心中以何爲鼻.爲取肉形雙爪之相.爲取齅知動搖之性.若取肉形肉質乃身身知即觸.名身非鼻名觸即塵鼻尚無名云何立界.若取齅知.又汝心中以何爲知.以肉爲知.則肉之知元觸非鼻.以空爲知.空則自知肉應非覺.如是則應虛空是汝.汝身非知.今日阿難應無所在.以香爲知.知自屬香何預於汝.若香臭氣必生汝鼻.則彼香臭二種流氣不生伊蘭及栴檀木.二物不來汝自齅鼻爲香爲臭.臭則非香香應非臭.若香臭二俱能聞者.則汝一人應有兩鼻.對我問道有二阿難誰爲汝體.若鼻是一香臭無二.臭既爲香香復成臭.二性不有界從誰立.若因香生識因香有.如眼有見不能觀眼.因香有故應不知香.知則非生不知非識.香非知有香界不成.識不知香因界則非從香建立.既無中間不成內外.彼諸聞性畢竟虛妄.是故當知鼻香爲緣生鼻識界三處都無.則鼻與香及香界三.本非因緣非自然性

阿難又汝所明.舌味爲緣生於舌識.此識爲復因舌所生以舌爲界.因味所生以味爲界

阿難若因舌生.則諸世間甘蔗烏梅黃連石鹽細辛薑桂都無有味.汝自嘗舌爲甜爲苦.若舌性苦誰來嘗舌.舌不自嘗孰爲知覺.舌性非苦味自不生云何立界.若因味生識自爲味.同於舌根應不自嘗.何何識知是味非味.又一切味非一物生.味既多生識應多體.識體若一體必味生.鹹淡甘辛和合俱生.諸變異相同爲一味應無分別.分別既無則不名識.云何復名舌味識界.不應虛空生汝心識.舌味和合即於是中元無

卽元明俱作則

汝今明倒

自性云何界生。是故當知舌味爲緣生舌識界三處都無。則舌與味及舌界三。本非因緣非自然性

阿難又汝所明。身觸爲緣生於身識。此識爲復因身所生以身爲界。因觸所生以觸爲界

阿難若因身生必無合離。二覺觀緣身何所識。若因觸生必無汝身。誰有非身知合離者。阿難物不觸知身知有觸。知身卽觸知觸卽身。卽觸非身卽身非觸。身觸二相元無處所。合身卽爲身自體性。離身卽是虛空等相。內外不成中云何立。中不復立內外性空。卽汝識生從誰立界。是故當知身觸爲緣生身識界三處都無。則身與觸及身界三。本非因緣非自然性

阿難又汝所明。意法爲緣生於意識。此識爲復因意所生以意爲界。因法所生以法爲界

阿難若因意生於汝意中。必有所思發明汝意。若無前法意無所生。離緣無形識將何用。又汝識心與諸思量。兼了別性爲同爲異。同意卽意云何所生。異意不同應無所識。若無所識云何意生。若有所識云何識意。唯同與異二性無成界云何立。若因法生。世間諸法不離五塵。汝觀色法及諸聲法香法味法。及與觸法相狀分明。以對五根非意所攝。汝識決定依於法生。汝今諦觀法法何狀。若離色空動靜通塞合離生滅。越此諸相終無所得。生則色空諸法等生。滅則色空諸法等滅。所因既無。因生有識作何形相。相狀不有界云何生。是故當知意法爲緣生意識界三處都無。則意與法及意界三。本非因緣非自然性

阿難白佛言世尊。如來常說和合因緣。一切世間種種變化。皆因四大和合發明。云何如來因緣自然二俱排擯。我今不知斯義所屬。惟垂哀愍開示衆生。中道了義無戲論法

爾時世尊告阿難言。汝先厭離聲聞緣覺諸小乘法。發心勤求無上菩提。故我今時爲汝開示第一義諦。如何復將世間戲論妄想因緣而自纏繞。汝雖多聞如說藥人。眞藥現前不能分別。如來說爲眞可憐愍。汝今諦聽。吾當爲汝分別開示。亦令當來修大乘者通達實相。阿難默然承佛聖旨

予明作於

阿難如汝所言四大和合。發明世間種種變化。阿難若彼大性體非和合。則不能與諸大雜和。猶如虛空不和諸色。若和合者同於變化。始終相成生滅相續。生死死生生生死死。如旋火輪未有休息。阿難如水成冰冰還成水。汝觀地性。麤為大地細為微塵。至鄰虛塵析彼極微色邊際相七分所成。更析鄰虛即實空性。阿難若此鄰虛析成虛空。當知虛空出生色相。汝今問言由和合故。出生世間諸變化相。汝且觀此一鄰虛塵。用幾虛空和合而有。不應鄰虛合成鄰虛。又鄰虛塵折入空者。用幾色相合成虛空。若色合時合色非空。若空合時合空非色。色猶可析空云何合。汝元不知如來藏中。性色真空性空真色。清淨本然周徧法界。隨衆生心應所知量。循業發現世間無知。惑為因緣及自然性。皆是識心分別計度。但有言說都無實義

阿難火性無我寄於諸緣。汝觀城中未食之家欲炊爨時。手執陽燧日前求火。阿難名和合者。如我與汝一千二百五十比丘今為一衆。衆雖為一詰其根本各各有身。皆有所生氏族名字。如舍利弗婆羅門種。優盧頻螺迦葉波種。乃至阿難瞿曇種姓。阿難若此火性因和合有。彼手執鏡於日求火。此火為從鏡中而出。為從艾出為於日來。阿難若日來者。自能燒汝手中之艾。來處林木皆應受焚。若鏡中出自能於鏡。出然于艾鏡何不鎔。紆汝手執尚無熱相云何融泮。若生於艾何藉日鏡。光明相接然後火生。汝又諦觀鏡因手執。日從天來艾本地生。火從何方遊歷於此。日鏡相遠非和非合。不應火光無從自有。汝猶不知如來藏中。性火真空性空真火。清淨本然周徧法界。隨衆生心應所知量。阿難當知世人一處執鏡一處火生。徧法界執滿世間起。起徧世間寧有方所。循業發現世間無知。惑為因緣及自然性。皆是識心分別計度。但有言說都無實義

阿難水性不定流息無恒。如室羅城迦毗羅仙斫迦羅仙。及鉢頭摩訶薩多等諸大幻師。求太陰精用和幻藥。是諸師等於白月晝。手執方諸承月中水。此水為復從珠中出。空中自有為從月來。阿難若從月來。尚能

珠三本俱作諸
陷同作滔
盤元作槃
彼三本俱作被
性宋明俱作心
空虛三本俱倒

遠方令珠出水。所經林木皆應吐流。流則何待方珠所出。不流明水非從月降。若從珠出則此珠中常應流水。何待中宵承白月晝。若從空生空性無邊水當無際。從人洎天皆同陷溺。云何復有水陸空行。汝更諦觀月從天陟珠因手持。承珠水盤本人敷設。水從何方流注於此。月珠相遠非和非合。不應水精無從自有。汝尚不知如來藏中。性水眞空性空眞水。淸淨本然周徧法界。隨衆生心應所知量。一處執珠一處水出。徧法界執滿法界生。生滿世間寧有方所。循業發現世間無知。惑爲因緣及自然性。皆是識心分別計度。但有言說都無實義

阿難風性無體動靜不常。汝常整衣入於大衆。僧伽梨角動及傍人。則有微風拂彼人面。此風爲復出袈裟角。發於虛空生彼人面。阿難此風若復出袈裟角。汝乃披風。其衣飛搖應離汝體。我今說法會中垂衣。汝看我衣風何所在。不應衣中有藏風地。若生虛空。汝衣不動何因無拂。空性常住風應常生。若無風時虛空當滅。滅風可見滅空何狀。若有生滅不名虛空。名爲虛空云何風出。若風自生彼拂之面。從彼面生當應拂汝。自汝整衣云何倒拂。汝審諦觀。整衣在汝面屬彼人。虛空寂然不參流動。風自誰方鼓動來此。風空性隔非和非合。不應風性無從自有。汝宛不知如來藏中。性風眞空性空眞風。淸淨本然周徧法界。隨衆生心應所知量。阿難如汝一人微動服衣。有微風出。徧法界拂滿國土生。周徧世間寧有方所。循業發現世間無知。惑爲因緣及自然性。皆是識心分別計度。但有言說都無實義

阿難空性無形因色顯發。如室羅城去河遙處。諸刹利種及婆羅門。毘舍首陀兼頗羅墮旃陀羅等。新立安居鑿井求水。出土一尺於中則有一尺虛空。如是乃至出土一丈。中間還得一丈虛空。空虛淺深隨出多少。此空爲當因土所出。因鑿所有無因自生。阿難若復此空無因自生。未鑿土前何不無礙。唯見大地迥無通達。若因土出則土出時應見空入。若土先出無空入者。云何虛空因土而出。若無出入則應空土元無異因

非元作無
暗明元明俱倒

無異則同。則土出時空何不出。若因鑿出。則鑿出空應非出土。不因鑿出。鑿自出土云何見空。汝更審諦諦審諦觀。鑿從人手隨方運轉土因地移。如是虛空因何所出。鑿空虛實不相爲用非和非合。不應虛空無從自出。若此虛空性圓周徧本不動搖。當知現前地水火風。均名五大性眞圓融。皆如來藏本無生滅。阿難汝心昏迷。不悟四大元如來藏。當觀虛空爲出爲入爲非出入。汝全不知如來藏中。性覺眞空性空眞覺。清淨本然周徧法界。隨衆生心應所知量

阿難如一井空空生一井。十方虛空亦復如是。圓滿十方寧有方所。循業發現世間無知。惑爲因緣及自然性。皆是識心分別計度。但有言說都無實義

阿難見覺無知因色空有。如汝今者在祇陀林朝明夕昏。設居中宵白月則光黑月便暗。則明暗等因見分析。此見爲復與明暗相幷太虛空。爲同一體爲非一體。或同非同或異非異。阿難此見若復與明與暗及與虛空元一體者。則明與暗二體相亡。暗時無明明時非暗。若與暗一明則見亡。必一於明暗時當滅。滅則云何見明見暗。若暗明殊見無生滅一云何成。若此見精。與暗與明非一體者。汝離明暗及與虛空。分析見元作何形相。離明離暗及離虛空。是見元同龜毛兎角。明暗虛空三事俱異從何立見。明暗相背云何或同。離三元無云何或異。分空分見本無邊畔云何非同。見暗見明性非遷改云何非異。汝更細審微細審詳審諦審觀。明從太陽暗隨黑月。通屬虛空壅歸大地。如是見精因何所出。見覺空頑非和非合。不應見精無從自出。若見聞知性圓周徧。本不動搖當知無邊。不動虛空幷其動搖。地水火風均名六大。性眞圓融皆如來藏本無生滅。阿難汝性沈淪。不悟汝之見聞覺知本如來藏。汝當觀此見聞覺知。爲生爲滅爲同爲異。爲非生滅爲非同異。汝曾不知如來藏中。性見覺明覺精明見。清淨本然周徧法界。隨衆生心應所知量。如一見根見周法界。聽齅嘗觸覺觸覺知。妙德瑩然徧周法界。圓滿十虛寧有方所。循業發現世間無知。惑爲因緣及

自然性。皆是識心分別計度。但有言說都無實義

阿難識性無源。因於六種根塵妄出。汝今徧觀此會聖衆。用目循歷其目周視。但如鏡中無別分析。汝識於中次第標指。此是文殊此富樓那。此目犍連此須菩提此舍利弗。此識了知爲生於見。爲生於相爲生虛空。爲無所因突然而出。阿難若汝識性生於見中。如無明暗及與色空。四種必無元無汝見。見性尙無從何發識。若汝識性生於相中。不從見生。旣不見明亦不見暗。明暗不矚卽無色空。彼相尙無識從何發。若生於空非相非見。非見無辯。自不能知明暗色空。非相滅緣。見聞覺知無處安立。處此二非。空非同無有非同物。縱發汝識欲何分別。若無所因突然而出。何不日中別識明月。汝更細詳微細詳審。見託汝睛相推前境。可狀成有不相成無。如是識緣因何所出。識動見澄非和非合。聞聽覺知亦復如是。不應識緣無從自出。若此識心本無所從。當知了別見聞覺知。圓滿湛然性非從所。兼彼虛空地水火風。均名七大性眞圓融。皆如來藏本無生滅。阿難汝心麤浮不悟見聞。發明了知本如來藏。汝應觀此六處識心。爲同爲異爲空爲有。爲非同異爲非空有。汝元不知如來藏中。性識明知覺明眞識。妙覺湛然徧周法界。含吐十虛寧有方所。循業發現世間無知。惑爲因緣及自然性。皆是識心分別計度。但有言說都無實義

爾時阿難及諸大衆。蒙佛如來微妙開示。身心蕩然得無罣礙。是諸大衆。各各自知心徧十方見十方空。如觀掌中所持葉物。一切世間諸所有物。皆卽菩提妙明元心。心精徧圓含裹十方。反觀父母所生之身。猶彼十方虛空之中。吹一微塵若存若亡。如湛巨海流一浮漚。起滅無從了然自知。獲本妙心常住不滅。禮佛合掌得未曾有。於如來前說偈讚佛

妙湛總持不動尊　首楞嚴王世希有　銷我億劫顚倒想　不歷僧祇獲法身

願今得果成寶王　還度如是恆沙衆　將此深心奉塵刹　是則名爲報佛恩

犍三本俱作揵

辯同作辨○非三本俱作則

徧周元倒

掌三本俱作手

寶元作實

伏請世尊爲證明　五濁惡世誓先入　如一衆生未成佛　終不於此取泥洹
大雄大力大慈悲　希更審除微細惑　令我早登無上覺　於十方界坐道場
舜若多性可銷亡　爍迦囉必無動轉

囉三本俱作羅

大佛頂萬行首楞嚴經卷第三。

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經卷第四

一名中印度那蘭陀大道場經於灌頂部錄出別行　〔麗餘〕〔宋染〕〔元染〕〔明善〕

唐天竺沙門般剌蜜帝譯

淩三本俱作陵下同

爾時富樓那彌多羅尼子.在大衆中卽從座起.偏袒右肩右膝著地合掌恭敬而白佛言.大威德世尊善爲衆生.敷演如來第一義諦.世尊常推說法人中我爲第一.今聞如來微妙法音.猶如聾人逾百步外聆於蚊蚋.本所不見何況得聞.佛雖宣明令我除惑.今猶未詳斯義究竟無疑惑地.世尊如阿難輩.雖則開悟習漏未除.我等會中登無漏者.雖盡諸漏今聞如來所說法音.尙紆疑悔.世尊若復世間一切根塵陰處界等.皆如來藏淸淨本然.云何忽生山河大地.諸有爲相次第遷流終而復始.又如來說地水火風本性圓融.周徧法界湛然常住.世尊若地性徧云何容水.水性周徧火則不生.復云何明.水火二性俱徧虛空不相淩滅.世尊地性障礙空性虛通.云何二俱周徧法界.而我不知是義攸往.惟願如來宣流大慈.開我迷雲及諸大衆.作是語已五體投地.欽渴如來無上慈誨

爾時世尊告富樓那及諸會中.漏盡無學諸阿羅漢.如來今日普爲此會.宣勝義中眞勝義性.令汝會中定性聲聞.及諸一切未得二空.迴向上乘阿羅漢等.皆獲一乘寂滅場地.眞阿練若正修行處.汝今諦聽當爲汝說.富樓那等欽佛法音默然承聽

佛言富樓那.如汝所言淸淨本然.云何忽生山河大地.汝常不聞如來宣說性覺妙明本覺明妙.富樓那言唯然世尊.我常聞佛宣說斯義.佛言汝稱覺明爲復性明稱名爲覺.爲覺不明稱爲明覺.富樓那言若此不

無同作所
蒸明作烝
炎三本俱作燄
囉同作羅
債汝三本俱倒

明名爲覺者則無無明．佛言若無所明則無明覺．有所非覺無所非明．無明又非覺湛明性．性覺必明妄爲明覺．覺非所明因明立所．所既妄立生汝妄能．無同異中熾然成異．異彼所異因異立同．同異發明．因此復立無同無異．如是擾亂相待生勞．勞久發塵自相渾濁．由是引起塵勞煩惱．起爲世界靜成虛空．虛空爲同世界爲異．彼無同異眞有爲法．覺明空昧相待成搖．故有風輪執持世界．因空生搖堅明立礙．彼金寶者明覺立堅．故有金輪保持國土．堅覺寶成搖明風出．風金相摩．故有火光爲變化性．寶明生潤火光上蒸．故有水輪含十方界．火騰水降交發立堅．溼爲巨海乾爲洲潭．以是義故彼大海中火光常起．彼洲潭中江河常注．水勢劣火結爲高山．是故山石擊則成炎．融則成水．土勢劣水抽爲草木．是故林藪遇燒成土因絞成水．交妄發生遞相爲種．以是因緣世界相續

復次富樓那明妄非他覺明爲咎．所妄既立明理不踰．以是因緣聽不出聲見不超色．色香味觸六妄成就．由是分開見覺聞知．同業相纏合離成化．見明色發明見想成．異見成憎同想成愛．流愛爲種納想爲胎．交遘發生吸引同業．故有因緣生羯囉藍遏蒱曇等．胎卵溼化隨其所應．卵唯想生胎因情有．溼以合感化以離應．情想合離更相變易．所有受業逐其飛沈．以是因緣衆生相續

富樓那想愛同結愛不能離．則諸世間父母子孫相生不斷．是等則以欲貪爲本．貪愛同滋貪不能止．則諸世間卵化溼胎．隨力強弱遞相吞食．是等則以殺貪爲本．以人食羊羊死爲人人死爲羊．如是乃至十生之類．死死生生互來相噉．惡業俱生窮未來際．是等則以盜貪爲本．汝負我命我還債汝．以是因緣經百千劫常在生死．汝愛我心我憐汝色．以是因緣經百千劫常在纏縛．唯殺盜婬三爲根本．以是因緣業果相續．富樓那如是三種顚倒相續．皆是覺明明了知性．因了發相從妄見生．山河大地諸有爲相次第遷流．因此虛妄終而復始．富樓那言若此妙覺本妙覺明．與如來心不增不減．無狀忽生山河大地諸有爲相．如來今得

所明作而

妙空明覺．山河大地有為習漏何當復生

佛告富樓那譬如迷人．於一聚落惑南為北．此迷為復因迷而有因悟所出．富樓那言如是迷人．亦不因迷又不因悟．何以故迷本無根云何因迷．悟非生迷云何因悟．佛言彼之迷人正在迷時．倏有悟人指示令悟．富樓那於意云何．此人縱迷．於此聚落更生迷不．不也世尊．富樓那十方如來亦復如是．此迷無本性畢竟空．昔本無迷似有迷覺．覺迷迷滅覺不生迷．亦如翳人見空中華．翳病若除華於空滅．忽有愚人．於彼空華所滅空地待華更生．汝觀是人為愚為慧．富樓那言空元無華妄見生滅．見華滅空已是顛倒．敕令更出斯實狂癡．云何更名如是狂人為愚為慧．佛言如汝所解云何問言．諸佛如來妙覺明空．何當更出山河大地．又如金鑛雜於精金．其金一純更不成雜．如木成灰不重為木．諸佛如來菩提涅槃亦復如是

富樓那又汝問言．地水火風本性圓融周徧法界．疑水火性不相欻滅．又徵虛空及諸大地．俱徧法界不合相容．富樓那譬如虛空體非群相．而不拒彼諸相發揮．所以者何．富樓那彼太虛空日照則明．雲屯則暗．風搖則動．霽澄則清．氣凝則濁．土積成霾．水澄成映．於意云何．如是殊方諸有為相．為因彼生為復空有．若彼所生．富樓那且日照時既是日明．十方世界同為日色．云何空中更見圓日．若是空明空應自照．云何中宵雲霧之時不生光耀．當知是明非日非空不異空日．觀相元妄無可指陳．猶邀空華結為空果．云何詰其相欻滅義．觀性元真唯妙覺明．妙覺明心先非水火．云何復問不相容者．真妙覺明亦復如是．汝以空明則有空現．地水火風各各發明則各各現．若俱發明則有俱現．云何俱現．富樓那如一水中現於日影．兩人同觀水中之日．東西各行則各有日．隨二人去一東一西．先無準的不應難言．此日是一云何各行．各日既雙云何現一．宛轉虛妄無可憑據

富樓那汝以色空相傾相奪於如來藏．而如來藏隨為色空周徧法界．是故於中風動空澄日明雲暗．眾生

鉢三本俱作般

鉢元明俱作般

即俱三本俱倒

迷悶背覺合塵．故發塵勞有世間相．我以妙明不滅不生合如來藏．而如來藏唯妙覺明圓照法界．是故於中一爲無量無量爲一．小中現大大中現小．不動道場徧十方界．身含十方無盡虛空．於一毛端現寶王刹．坐微塵裏轉大法輪．滅塵合覺故發眞如妙覺明性．而如來藏本妙圓心．非心非空．非地非水非風非火．非眼非耳鼻舌身意．非色非聲香味觸法．非眼識界如是乃至非意識界．非明無明明無明盡．如是乃至非老非死非老死盡．非苦非集非滅非道．非智非得非檀那非尸羅．非毗黎耶非羼提非禪那．非鉢剌若非波羅蜜多．如是乃至非怛闥阿竭．非阿羅訶三耶三菩．非大涅槃非常非樂非我非淨．以是俱非世出世故．即如來藏元明心妙．即心即空．即地即水即風即火．即眼即耳鼻舌身意．即色即聲香味觸法．即眼識界如是乃至即意識界．即明無明明無明盡．如是乃至即老即死即老死盡．即苦即集即滅即道．即智即得即檀那即尸羅．即毗黎耶即羼提即禪那．即鉢剌若即波羅蜜多．如是乃至即怛闥阿竭．即阿羅訶三耶三菩．即大涅槃即常即樂即我即淨．以是即俱世出世故．即如來藏妙明心元．離即離非是即非即．如何世間三有衆生及出世間聲聞緣覺．以所知心測度如來無上菩提．用世語言入佛知見．譬如琴瑟箜篌琵琶雖有妙音．若無妙指終不能發．汝與衆生亦復如是．寶覺眞心各各圓滿．如我按指海印發光．汝暫擧心塵勞先起．由不勤求無上覺道．愛念小乘得少爲足

富樓那言我與如來寶覺圓明．眞妙淨心無二圓滿．而我昔遭無始妄想久在輪迴．今得聖乘猶未究竟．世尊諸妄一切圓滅獨妙眞常．敢問如來一切衆生何因有妄．自蔽妙明受此淪溺．佛告富樓那汝雖除疑餘惑未盡．吾以世間現前諸事．今復問汝汝豈不聞．室羅城中演若達多．忽於晨朝以鏡照面愛鏡中頭眉目可見．瞋責己頭不見面目．以爲魑魅無狀狂走．於意云何此人何因無故狂走

富樓那言是人心狂更無他故．佛言妙覺明圓本圓明妙．既稱爲妄云何有因．若有所因云何名妄．自諸妄

想展轉相因。從迷積迷以歷塵劫。雖佛發明猶不能返。如是迷因因迷自有。識迷無因妄無所依。尚無有生欲何爲滅。得菩提者如寤時人。說夢中事心縱精明。欲何因緣取夢中物。況復無因本無所有。如彼城中演若達多。豈有因緣自怖頭走。忽然狂歇頭非外得。縱未歇狂亦何遺失。富樓那妄性如是因何爲在。汝但不隨分別世間。業果衆生三種相續。三緣斷故三因不生。則汝心中演若達多。狂性自歇。歇卽菩提。勝淨明心本周法界。不從人得何藉劬勞肯綮修證

譬如有人於自衣中。繫如意珠不自覺知。窮露他方乞食馳走。雖實貧窮珠不曾失。忽有智者指示其珠。所願從心致大饒富。方悟神珠非從外得

卽時阿難在大衆中。頂禮佛足起立白佛。世尊現說殺盜婬業。三緣斷故三因不生。心中達多狂性自歇。歇卽菩提不從人得。斯則因緣皎然明白。云何如來頓棄因緣。我從因緣心得開悟。世尊此義何獨我等年少有學聲聞。今此會中大目建連。及舍利弗須菩提等。從老梵志聞佛因緣。發心開悟得成無漏。今說菩提不從因緣。則王舍城拘舍梨等。所說自然成第一義。惟垂大悲開發迷悶

佛告阿難卽如城中演若達多。狂性因緣若得滅除。則不狂性自然而出。因緣自然理窮於是。阿難演若達多頭本自然。本自其然無然非自。何因緣故怖頭狂走。若自然頭因緣故狂。何不自然因緣故失。本頭不失狂怖妄出。曾無變易何藉因緣。本狂自然本有狂怖。未狂之際狂何所潛。不狂自然頭本無妄。何爲狂走。若悟本頭識知狂走。因緣自然俱爲戲論。是故我言三緣斷故卽菩提心。菩提心生生滅心滅。此但生滅。滅生俱盡無功用道。是有自然。如是則明自然心生。生滅心滅此亦生滅。無生滅者名爲自然。猶如世間諸相雜和成一體者名和合性。非和合者稱本然性。本然非然和合非合。合然俱離離合俱非。此句方名無戲論法。菩提涅槃尚在遙遠。非汝歷劫辛勤修證。雖復憶持十方如來。十二部經清淨妙理。如恒河沙秖益戲論。汝

因三本俱作須
喉下同無羅字
以三本俱作與
必同作畢
薩同作提

雖談說因緣自然決定明了。人間稱汝多聞第一。以此積劫多聞熏習。不能免離摩登伽難。何因待我佛頂神呪。摩登伽心婬火頓歇得阿那含。於我法中成精進林。愛河乾枯令汝解脫。是故阿難汝雖歷劫。憶持如來祕密妙嚴。不如一日修無漏業。遠離世間憎愛二苦。如摩登伽宿爲婬女。由神呪力銷其愛欲。法中今名性比丘尼。與羅睺羅母耶輸陀羅同悟宿因。知歷世因貪愛爲苦。一念熏修無漏善故。或得出纏或蒙授記。如何自欺尙留觀聽

阿難及諸大衆聞佛示誨。疑惑銷除心悟實相。身意輕安得未曾有。重復悲淚頂禮佛足。長跪合掌而白佛言。無上大悲清淨寶王善開我心。能以如是種種因緣方便提獎。引諸沈冥出於苦海。世尊我今雖承如是法音知如來藏。妙覺明心徧十方界。含育如來十方國土。淸淨寶嚴妙覺王刹。如來復責多聞無功不逮修習。我今猶如旅泊之人。忽蒙天王賜以華屋。雖獲大宅要因門入。唯願如來不捨大悲。示我在會諸蒙暗者。捐捨小乘必獲如來無餘涅槃本發心路。令有學者從何攝伏疇昔攀緣。得陀羅尼入佛知見。作是語已五體投地。在會一心佇佛慈旨

爾時世尊哀愍會中緣覺聲聞。於菩提心未自在者。及爲當來佛滅度後。末法衆生發菩薩心。開無上乘妙修行路。宣示阿難及諸大衆。汝等決定發菩提心。於佛如來妙三摩提不生疲惓。應當先明發覺初心二決定義。云何初心二義決定。阿難第一義者汝等若欲捐捨聲聞。修菩薩乘入佛知見。應當審觀因地發心。與果地覺爲同爲異。阿難若於因地。以生滅心爲本修因。而求佛乘不生不滅。無有是處。以是義故汝當照明諸器世間。可作之法皆從變滅。阿難汝觀世間。可作之法誰爲不壞。然終不聞爛壞虛空。何以故空非可作。由是始終無壞滅。故則汝身中堅相爲地。潤濕爲水。煖觸爲火。動搖爲風。由此四纏分汝湛圓妙覺明心。爲視爲聽爲覺爲察。從始入終五疊渾濁。云何爲濁。阿難譬如淸水淸潔本然。卽彼塵土灰沙之倫。本質留礙

伏明作復

淨三本俱作靜

相形三本俱倒

倒位方同倒

傍明作旁

二體法爾性不相循。有世間人取彼土塵投於淨水。土失留礙水亡清潔。容貌汨然名之爲濁。汝濁五重亦復如是。阿難汝見虛空徧十方界空見不分。有空無體有見無覺相織妄成。是第一重名爲劫濁。汝身現摶四大爲體。見聞覺知壅令留礙。水火風土旋令覺知相織妄成。是第二重名爲見濁。又汝心中憶識誦習性發知見容現六塵。離塵無相離覺無性相織妄成。是第三重名煩惱濁。又汝朝夕生滅不停。知見每欲留於世間。業運每常遷於國土。相織妄成是第四重名衆生濁。汝等見聞元無異性。衆塵隔越無狀異生。性中相知用中相背。同異失準相織妄成。是第五重名爲命濁。阿難汝今欲令見聞覺知。遠契如來常樂我淨。應當先擇死生根本。依不生滅圓湛性成。以湛旋其虛妄滅生。伏還元覺得元明覺。無生滅性爲因地心。然後圓成果地修證。如澄濁水貯於淨器。靜深不動沙土自沈淸水現前。名爲初伏客塵煩惱。去泥純水名爲永斷根本無明。明相精純一切變現不爲煩惱。皆合涅槃淸淨妙德

第二義者。汝等必欲發菩提心。於菩薩乘生大勇猛。決定棄捐諸有爲相。應當審詳煩惱根本。此無始來發業潤生誰作誰受。阿難汝修菩提。若不審觀煩惱根本。則不能知虛妄根塵。何處顚倒處尙不知。云何降伏取如來位。阿難汝觀世間解結之人。不見所結云何知解。不聞虛空被汝隳裂。何以故空無相形無結解故。則汝現前眼耳鼻舌及與身心。六爲賊媒自劫家寶。由此無始衆生世界生纏縛故。於器世間不能超越。阿難云何名爲衆生世界。世爲遷流界爲方位。汝今當知東西南北。東南西南東北西北上下爲界。過去未來現在爲世。位方有十流數有三。一切衆生織妄相成。身中貿遷世界相涉。而此界性。設雖十方定位可明。世間秖目東西南北。上下無位中無定方。四數必明與世相涉。三四四三宛轉十二。流變三疊一十百千。總括始終六根之中。各各功德有千二百。阿難汝復於中克定優劣。如眼觀見後暗前明。前方全明後方全暗。左右傍觀三分之二。統論所作功德不全。三分言功一分無德。當知眼唯八百功德。如耳周聽十方無遺。動若

舌三本俱作身

劑明作齊

粘三本俱作黏
同下

邇遙靜無邊際。當知耳根圓滿一千二百功德。如鼻齅聞通出入息。有出有入而闕中交。驗於鼻根三分闕一。當知鼻唯八百功德。如舌宣揚盡諸世間出世間智。言有方分理無窮盡。當知舌根圓滿一千二百功德。如身覺觸識於違順。合時能覺離中不知。離一合雙。驗於舌根三分闕一。當知身唯八百功德。如意默容十方三世。一切世間出世間法。唯聖與凡無不苞容盡其涯際。當知意根圓滿一千二百功德。阿難汝今欲逆生死欲流。返窮流根至不生滅。當驗此等六受用根。誰合誰離誰深誰淺。誰爲圓通誰不圓滿。若能於此悟圓通根。逆彼無始織妄業流。得循圓通與不圓根日劫相倍。我今備顯六湛圓明。本所功德數量如是。隨汝詳擇其可入者。吾當發明令汝增進。十方如來於十八界一一修行皆得圓滿無上菩提。於其中間亦無優劣。但汝下劣未能於中圓自在慧。故我宣揚令汝但於一門深入。入一無妄。彼六知根一時清淨

阿難白佛言世尊。云何逆流深入一門。能令六根一時清淨

佛告阿難汝今已得須陀洹果。已滅三界衆生世間見所斷惑。然猶未知根中積生無始虛習。彼習要因修所斷得。何況此中生住異滅分劑頭數。今汝且觀現前六根爲一爲六

阿難若言一者。耳何不見目何不聞。頭奚不履足奚無語。若此六根決定成六。如我今會與汝宣揚微妙法門。汝之六根誰來領受。阿難言我用耳聞。佛言汝耳自聞何關身口。口來問義身起欽承。是故應知非一終六非六終一。終不汝根元一元六。阿難當知是根非一非六。由無始來顚倒淪替。故於圓湛一六義生。汝須陀洹雖得六銷猶未亡一。如太虛空參合群器。由器形異名之異空。除器觀空說空爲一。彼太虛空云何爲汝成同不同。何況更名是一非一。則汝了知六受用根亦復如是。由明暗等二種相形。於妙圓中粘湛發見。見精映色結色成根。根元目爲清淨四大。因名眼體如蒲萄朶。浮根四塵流逸奔色。由動靜等二種相擊。於妙圓中粘湛發聽。聽精映聲卷聲成根。根元目爲清淨四大。因名耳體如新卷葉。浮根四塵流逸奔聲。由通

覽明作攬
暗明三本俱倒次同
有同作覺
辯同作辨

塞等二種相發。於妙圓中粘湛發齅。齅精映香納香成根。根元目為清淨四大。因名鼻體如雙垂爪。浮根四塵流逸奔香。由恬變等二種相參。於妙圓中粘湛發嘗。嘗精映味絞味成根。根元目為清淨四大。因名舌體如初偃月。浮根四塵流逸奔味。由離合等二種相摩。於妙圓中粘湛發覺。覺精映觸摶觸成根。根元目為清淨四大。因名身體如腰鼓顙。浮根四塵流逸奔觸。由生滅等二種相續。於妙圓中粘湛發知。知精映法覽法成根。根元目為清淨四大。因名意思如幽室見。浮根四塵流逸奔法。阿難如是六根。由彼覺明有明明覺。失彼精了粘妄發光。是以汝今離暗離明無有見體。離動離靜元無聽質。無通無塞齅性不生。非變非恬嘗無所出。不離不合覺觸本無。無滅無生了知安寄。汝但不循動靜合離恬變通塞生滅暗明。如是十二諸有為相。隨拔一根脫粘內伏。伏歸元眞發本明耀。耀性發明。諸餘五粘應拔圓脫。不由前塵所起知見。明不循根寄根明發。由是六根互相為用。阿難汝豈不知。今此會中阿那律陀無目而見。跋難陀龍無耳而聽。殑伽神女非鼻聞香。驕梵鉢提異舌知味。舜若多神無身有觸。如來光中映令暫現。既為風質其體元無。諸滅盡定得寂聲聞。如此會中摩訶迦葉。久滅意根圓明了知不因心念。阿難今汝諸根若圓拔已內瑩發光。如是浮塵及器世間。諸變化相如湯銷冰。應念化成無上知覺。阿難如彼世人聚見於眼。若令急合暗相現前。六根黯然頭足相類。彼人以手循體外繞。彼雖不見頭足一辯知覺是同。緣見因明暗成無見。不明自發則諸暗相永不能昏。根塵既銷。云何覺明不成圓妙

阿難白佛言。世尊如佛說言。因地覺心欲求常住。要與果位名目相應。世尊如果位中菩提涅槃眞如佛性菴摩羅識空如來藏大圓鏡智。是七種名稱謂雖別。清淨圓滿體性堅凝。如金剛王常住不壞。若此見聽離於暗明動靜通塞。畢竟無體。猶如念心離於前塵本無所有。云何將此畢竟斷滅以為修因。欲獲如來七常住果。世尊若離明暗見畢竟空。如無前塵念自性滅。進退循環微細推求。本無我心及我心所。將誰立因求

無上覺。如來先說湛精圓常。違越誠言終成戲論。云何如來眞實語者。惟垂大慈開我蒙恡。佛告阿難汝學多聞未盡諸漏。心中徒知顚倒所因。眞倒現前實未能識。恐汝誠心猶未信伏。吾今試將塵俗諸事當除汝疑。卽時如來勑羅睺羅擊鐘一聲。問阿難言汝今聞不。阿難大衆俱言我聞。鐘歇無聲佛又問言汝今聞不。阿難大衆俱言不聞。時羅睺羅又擊一聲。佛又問言汝今聞不。阿難大衆又言俱聞。佛問阿難汝云何聞云何不聞。阿難大衆俱白佛言。鐘聲若擊則我得聞。擊久聲銷音響雙絕則名無聞。如來又勑羅睺擊鐘。問阿難言爾今聲不。阿難言聲。少選聲銷佛又問言。爾今聲不。阿難大衆答言無聲。有頃羅睺更來撞鐘。佛又問言爾今聲不。阿難大衆俱言有聲。佛問阿難汝云何聲云何無聲。阿難大衆俱白佛言。鐘聲若擊則名有聲。擊久聲銷音響雙絕則名無聲。佛語阿難及諸大衆。汝今云何自語矯亂。大衆阿難俱時問佛。我今云何名爲矯亂。佛言我問汝聞汝則言聞。又問汝聲汝則言聲。唯聞與聲報答無定。如是云何不名矯亂。阿難聲銷無響汝說無聞。若實無聞聞性已滅同于枯木。鐘聲更擊汝云何知。知有知無自是聲塵。或無或有豈彼聞性爲汝有無。聞實云無誰知無者。是故阿難聲於聞中自有生滅。非爲汝聞聲生聲滅。令汝聞性爲有爲無。汝尙顚倒惑聲爲聞。何怪昏迷以常爲斷。終不應言離諸動靜。閉塞開通說聞無性。如重睡人眠熟牀枕。其家有人於彼睡時擣練舂米。其人夢中聞舂擣聲別作他物。或爲擊鼓或復撞鐘。卽於夢時自怪其鐘爲木石響。於時忽寤遄知杵音。自告家人我正夢時。惑此舂音將爲鼓響。阿難是人夢中。豈憶靜搖開閉通塞。其形雖寐聞性不昏。縱汝形銷命光遷謝。此性云何爲汝銷滅。以諸衆生從無始來。循諸色聲逐念流轉。曾不開悟性淨妙常。不循所常逐諸生滅。由是生生雜染流轉。若棄生滅守於眞常常光現前。塵根識心應時銷落。想相爲塵識情爲垢二俱遠離。則汝法眼應時淸明。云何不成無上知覺

言三本俱作大衆俱言有五字

復同作爲

塵根同倒

大佛頂萬行首楞嚴經卷第四

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經卷第五

一名中印度那蘭陀大道場經於灌頂部錄出別行　〔麗絲〕〔宋染〕〔元染〕〔明羔〕

唐天竺沙門般刺蜜諦譯

阿難白佛言世尊。如來雖說第二義門。今觀世間解結之人。若不知其所結之元。我信是人終不能解。世尊我及會中有學聲聞亦復如是。從無始際與諸無明俱滅俱生。雖得如是多聞善根名爲出家。猶隔日瘧。惟願大慈哀愍淪溺。今日身心云何是結。從何名解。亦令未來苦難衆生。得免輪廻不落三有。作是語已普及大衆。五體投地雨淚翹誠。佇佛如來無上開示

爾時世尊憐愍阿難。及諸會中諸有學者。亦爲未來一切衆生。爲出世因作將來眼。以閻浮檀紫光金手摩阿難頂。即時十方普佛世界六種振動。微塵如來住世界者。各有寶光從其頂出。其光同時於彼世界。來祇陀林灌如來頂。是諸大衆得未曾有。於是阿難及諸大衆。俱聞十方微塵如來。異口同音告阿難言。善哉阿難汝欲識知俱生無明。使汝輪轉生死結根。唯汝六根更無他物。汝復欲知無上菩提。令汝速登安樂解脫寂靜妙常。亦汝六根更非他物。阿難雖聞如是法音心猶未明。稽首白佛云何令我生死輪廻安樂妙常同是六根更非他物。佛告阿難根塵同源縛脫無二。識性虛妄猶如空華。阿難由塵發知因根有相。相見無性同於交蘆。是故汝今知見立知卽無明本。知見無見斯卽涅槃。無漏眞淨。云何是中更容他物。爾時世尊欲重宣此義。而說偈言

眞性有爲空　緣生故如幻　無爲無起滅　不實如空華　言妄顯諸眞　妄眞同二妄

光金元明俱倒
振三本俱作震
登同作證

覽三本俱作攬

辯元明俱辨
○言下三本俱有如是二字

猶非眞非眞　云何見所見　中間無實性　是故若交蘆　結解同所因　聖凡無二路
汝觀交中性　空有二俱非　迷晦卽無明　發明便解脫　解結因次第　六解一亦亡
根選擇圓通　入流成正覺　陀那微細識　習氣成暴流　眞非眞恐迷　我常不開演
自心取自心　非幻成幻法　不取無非幻　非幻尙不生　幻法云何立　是名妙蓮華
金剛王寶覺　如幻三摩提　彈指超無學　此阿毗達磨　十方薄伽梵　一路涅槃門

於是阿難及諸大衆。聞佛如來無上慈誨祇夜伽陀。雜糅精瑩妙理淸徹。心目開明歎未曾有。阿難合掌頂禮白佛。我今聞佛無遮大悲性淨妙常眞實法句。心猶未達六解一亡舒結倫次。惟垂大慈再愍斯會及與將來。施以法音洗滌沈垢

卽時如來於師子座。整涅槃僧斂僧伽梨。覽七寶机引手於机。取劫波羅天所奉華巾。於大衆前綰成一結。示阿難言此名何等。阿難大衆俱白佛言此名爲結。於是如來綰疊華巾又成一結。重問阿難此名何等。阿難大衆又白佛言此亦名結。如是倫次綰疊華巾。總成六結一一結成。皆取手中所成之結。持問阿難此名何等。阿難大衆亦復如是。次第酬佛此名爲結。佛告阿難我初綰巾汝名爲結。此疊華巾先實一條。第二第三云何汝曹復名爲結。阿難白佛言世尊。此寶疊華緝績成巾。雖本一體如我思惟。如來一綰得一結名。若百綰成終名百結。何況此巾秖有六結。終不至七亦不停五。云何如來秖許初時。第二第三不名爲結。佛告阿難此寶華巾。汝知此巾元止一條。我六綰時名有六結。汝審觀察巾體是同因結有異。於意云何初綰結成名爲第一。如是乃至第六結生。吾今欲將第六結名成第一不。不也世尊。六結若存。斯第六名終非第一。縱我歷生盡其明辯。如何令是六結亂名。佛言六結不同。循顧本因一巾所造。令其雜亂終不得成。則汝六根亦復如是。畢竟同中生畢竟異。佛告阿難汝必嫌此六結不成。願樂一成復云何得。阿難言此結若存。是

成解同佛

憍三本俱作憍次同

非鋒起於中自生。此結非彼彼結非此。如來今日若總解除。結若不生則無彼此。尚不名一六云何成。佛言六解一亡亦復如是。由汝無始心性狂亂。知見妄發發妄不息。勞見發塵如勞目睛。則有狂華於湛精明。無因亂起一切世間。山河大地生死涅槃。皆即狂勞顛倒華相。阿難言。此勞同結云何解除。如來以手將所結巾偏掣其左。問阿難言。如是解不。不也世尊。旋復以手偏牽右邊。又問阿難。如是解不。不也世尊。佛告阿難吾今以手左右各牽竟不能解。汝設方便云何成解。阿難白佛言世尊。當於結心解即分散。佛告阿難。如是如是。若欲除結當於結心。阿難我說佛法從因緣生。非取世間和合麤相。如來發明世出世法。知其本因隨所緣出。如是乃至恒沙界外一滴之雨亦知頭數。現前種種松直棘曲鵠白烏玄。皆了元由。是故阿難隨汝心中選擇六根。根結若除塵相自滅。諸妄銷亡不眞何待。阿難吾今問汝。此劫波羅巾六結現前。同時解縈得同除不。不也世尊。是結本以次第綰生。今日當須次第而解。六結同體結不同時。則結解時云何同除。佛言六根解除亦復如是。此根初解先得人空。空性圓明成法解脫。解脫法已俱空不生。是名菩薩從三摩地得無生忍

阿難及諸大衆蒙佛開示。慧覺圓通得無疑惑。一時合掌頂禮雙足。而白佛言。我等今日身心皎然。快得無礙。雖復悟知一六亡義。然猶未達圓通本根。世尊我輩飄零積劫孤露。何心何慮預佛天倫。如失乳兒忽遇慈母。若復因此際會道成。所得密言還同本悟。則與未聞無有差別。惟垂大悲惠我祕嚴。成就如來最後開示。作是語已五體投地。退藏密機冀佛冥授

爾時世尊普告衆中諸大菩薩。及諸漏盡大阿羅漢。汝等菩薩及阿羅漢。生我法中得成無學。吾今問汝最初發心悟十八界誰爲圓通。從何方便入三摩地

憍陳那五比丘即從座起。頂禮佛足而白佛言。我在鹿苑及於雞園。觀見如來最初成道。於佛音聲悟明四

諦.佛問比丘我初稱解.如來印我名阿若多妙音密圓.我於音聲得阿羅漢.佛問圓通如我所證音聲爲上

優波尼沙陀即從座起.頂禮佛足而白佛言.我亦觀佛最初成道.觀不淨相生大厭離.悟諸色性以從不淨白骨微塵歸於虛空.空色二無成無學道.如來印我名尼沙陀.塵色既盡妙色密圓.我從色相得阿羅漢.佛問圓通如我所證色因爲上

香嚴童子即從座起.頂禮佛足而白佛言.我聞如來敎我諦觀諸有爲相.我時辭佛宴晦淸齋.見諸比丘燒沈水香.香氣寂然來入鼻中.我觀此氣非木非空非煙非火.去無所著來無所從.由是意銷發明無漏.如來印我得香嚴號.塵氣倏滅妙香密圓.我從香嚴得阿羅漢.佛問圓通如我所證香嚴爲上

藥王藥上二法王子.幷在會中五百梵天即從座起.頂禮佛足而白佛言.我無始劫爲世良醫.口中嘗此娑婆世界草木金石.名數凡有十萬八千.如是悉知苦醋鹹淡甘辛等味.幷諸和合俱生變異.是冷是熱有毒無毒悉能徧知.承事如來了知味性非空非有.非即身心非離身心.分別味因從是開悟.蒙佛如來印我昆季藥王藥上二菩薩名.今於會中爲法王子.因味覺明位登菩薩.佛問圓通如我所證味因爲上

跋陀婆羅幷其同伴十六開士即從座起.頂禮佛足而白佛言.我等先於威音王佛.聞法出家於浴僧時.隨例入室忽悟水因.既不洗塵亦不洗體.中間安然得無所有.宿習無忘乃至今時從佛出家今得無學.彼佛名我跋陀婆羅.妙觸宣明成佛子住.佛問圓通如我所證觸因爲上

摩訶迦葉及紫金光比丘尼等即從座起.頂禮佛足而白佛言.我於往劫於此界中.有佛出世名日月燈.我得親近聞法修學.佛滅度後供養舍利然燈續明.以紫光金塗佛形像.自爾已來世世生生.身常圓滿紫金光聚.此紫金光比丘尼者.即我眷屬同時發心.我觀世間六塵變壞.唯以空寂修於滅盡.身心乃能度百千劫猶如彈指.我以空法成阿羅漢.世尊說我頭陀爲最.妙法開明銷滅諸漏.佛問圓通如我所證法因爲上

今明作令

者三本俱作等

返元明俱作反

阿那律陀卽從座起.頂禮佛足而白佛言.我初出家常樂睡眠.如來訶我爲畜生類.我聞佛訶啼泣自責.七日不眠失其雙目.世尊示我樂見照明金剛三昧.我不因眼觀見十方.精眞洞然如觀掌果.如來印我成阿羅漢.佛問圓通如我所證.旋見循元斯爲第一

周利槃特迦卽從座起.頂禮佛足而白佛言.我闕誦持無多聞性.最初值佛聞法出家.憶持如來一句伽陀.於一百日得前遺後得後遺前.佛愍我愚敎我安居調出入息.我時觀息微細窮盡.生住異滅諸行剎那.其心豁然得大無礙.乃至漏盡成阿羅漢.住佛座下印成無學.佛問圓通如我所證.返息循空斯爲第一

驕梵鉢提卽從座起.頂禮佛足而白佛言.我有口業於過去劫輕弄沙門.世世生生有牛呞病.如來示我一味清淨心地法門.我得滅心入三摩地.觀味之知非體非物.應念得超世間諸漏.內脫身心外遺世界.遠離三有如鳥出籠.離垢銷塵法眼清淨成阿羅漢.如來親印登無學道.佛問圓通如我所證.還味旋知斯爲第一

畢陵伽婆蹉卽從座起.頂禮佛足而白佛言.我初發心從佛入道.數聞如來說諸世間不可樂事.乞食城中心思法門.不覺路中毒刺傷足.擧身疼痛我念有知.知此深痛雖覺覺痛.覺清淨心無痛痛覺.我又思惟如是一身寧有雙覺.攝念未久身心忽空.三七日中諸漏虛盡成阿羅漢.得親印記發明無學.佛問圓通如我所證.純覺遺身斯爲第一

須菩提卽從座起.頂禮佛足而白佛言.我曠劫來心得無礙.自憶受生如恆河沙.初在母胎卽知空寂.如是乃至十方成空.亦令衆生證得空性.蒙如來發性覺眞空.空性圓明得阿羅漢.頓入如來寶明空海.同佛知見印成無學.解脫性空我爲無上.佛問圓通如我所證.諸相入非非所非盡.旋法歸無斯爲第一

舍利弗卽從座起.頂禮佛足而白佛言.我曠劫來心見清淨.如是受生如恆河沙.世出世間種種變化.一見

則通獲無障礙。我於路中逢迦葉波。兄弟相逐宣說因緣。悟心無際從佛出家。見覺明圓得大無畏。成阿羅漢爲佛長子。從佛口生從法化生。佛問圓通如我所證。心見發光光極知見斯爲第一

普賢菩薩卽從座起。頂禮佛足而白佛言。我已曾與恆沙如來爲法王子。十方如來教其弟子。菩薩根者修普賢行從我立名。世尊我用心聞。分別衆生所有知見。若於他方恆沙界外。有一衆生心中發明普賢行者。我於爾時乘六牙象。分身百千皆至其處。縱彼障深未合見我。我與其人暗中摩頂。擁護安慰令其成就。佛問圓通我說本因。心聞發明分別自在斯爲第一

孫陀羅難陀。卽從座起。頂禮佛足。而白佛言。我初出家從佛入道。雖具戒律於三摩提。心常散動未獲無漏。世尊教我及俱絺羅觀鼻端白。我初諦觀經三七日。見鼻中氣出入如煙。身心內明圓洞世界。徧成虛淨猶如瑠璃。煙相漸銷。鼻息成白心開漏盡。諸出入息化爲光明照十方界得阿羅漢。世尊記我當得菩提。佛問圓通。我以銷息息久發明。明圓滅漏斯爲第一

富樓那彌多羅尼子卽從座起。頂禮佛足而白佛言。我曠劫來辯才無微。宣說苦空深達實相。如是乃至恆沙如來。祕密法門我於衆中。微妙開示得無所畏。世尊知我有大辯才。以音聲輪教我發揚。我於佛前助佛轉輪。因師子吼成阿羅漢。世尊印我說法無上。佛問圓通我以法音。降伏魔怨銷滅諸漏斯爲第一

優波離卽從座起。頂禮佛足而白佛言。我親隨佛踰城出家。親觀如來六年勤苦。親見如來降伏諸魔制諸外道。解脫世間貪欲諸漏承佛教戒。如是乃至三千威儀八萬微細。性業遮業悉皆清淨。身心寂滅成阿羅漢。我是如來衆中綱紀。親印我心持戒修身衆推無上。佛問圓通我以執身身得自在。次第執心心得通達。然後身心一切通利斯爲第一。大目犍連卽從座起。頂禮佛足而白佛言。我初於路乞食逢遇優樓頻螺耶那提三迦葉波。宣說如來因緣深義。我頓發心得大通達。如來惠我袈裟著身鬚髮自落。我遊十方得無

路中明倒

今三本俱作得

提元明俱作地下同

無明作爲

罣礙。神通發明推為無上。成阿羅漢寧唯世尊。十方如來歎我神力。圓明清淨自在無畏。佛問圓通我以旋湛心光發宣。如澄濁流久成清瑩斯為第一

烏芻瑟摩於如來前。合掌頂禮佛之雙足。而白佛言。我常先憶。久遠劫前性多貪欲。有佛出世名曰空王。說多婬人成猛火聚。教我徧觀百骸四[骨*支]。諸冷煖氣神光內凝。化多婬心成智慧火。從是諸佛皆呼召我名為火頭。我以火光三昧力故成阿羅漢。心發大願諸佛成道。我為力士親伏魔怨。佛問圓通我以諦觀身心煖觸。無礙流通諸漏既銷。生大寶燄登無上覺斯為第一

持地菩薩即從座起。頂禮佛足而白佛言。我念往昔普光如來。出現於世我為比丘。常於一切要路津口。田地險隘有不如法。妨損車馬我皆平填。或作橋梁或負沙土。如是勤苦經無量佛出現於世。或有眾生於闤闠處。要人擎物我先為擎。至其所詣放物即行不取其直。毘舍浮佛現在世時。世多饑荒我為負人。無問遠近唯取一錢。或有車牛被於陷溺。我有神力為其推輪拔其苦惱。時國大王筵佛設齋。我於爾時平地待佛。毘舍如來摩頂謂我。當平心地。則世界地一切皆平。我即心開見身微塵與造世界所有微塵等無差別。微塵自性不相觸摩。乃至刀兵亦無所觸。我於法性悟無生忍成阿羅漢。迴心今入菩薩位中。聞諸如來宣妙蓮華佛知見地。我先證明而為上首。佛問圓通以我諦觀身界二塵等無差別。本如來藏虛妄發塵。塵銷智圓成無上道斯為第一

月光童子即從座起。頂禮佛足而白佛言。我憶往昔恒河沙劫。有佛出世名為水天。教諸菩薩修習水精入三摩地。觀於身中水性無奪。初從涕唾如是窮盡。津液精血大小便利。身中漩澓水性一同。見水身中與世界外浮幢王剎。諸香水海等無差別。我於是時初成此觀。但見其水未得無身。當為比丘室中安禪。我有弟子窺窗觀室。唯見清水徧在屋中了無所見。童稚無知取一瓦礫投於水內。激水作聲顧盼而去。我出定後

[骨*支]宋元俱作支明作肢
陷三本俱作泥
筵同作延
精同作觀
漩澓同作旋復
窺明作闚○屋三本俱作室

無明作分

丁覺三本俱倒

合宋作令

頓覺心痛.如舍利弗遭遠害鬼.我自思惟今我已得阿羅漢道久離病緣.云何今日忽生心痛.將無退失爾時童子捷來我前說如上事.我則告言汝更見水.可即開門入此水中除去瓦礫.童子奉教後入定時.還復見水瓦礫宛然.開門除出.我後出定身質如初.逢無量佛.如是至於山海自在通王如來.方得亡身.與十方界諸香水海.性合眞空無二無別.今於如來得童眞名預菩薩會.佛問圓通我以水性一味流通.得無生忍圓滿菩提斯爲第一

瑠璃光法王子.即從座起.頂禮佛足而白佛言.我憶往昔經恒沙劫.有佛出世名無量聲.開示菩薩本覺妙明.觀此世界及衆生身.皆是妄緣風力所轉.我於爾時觀界安立觀世動時.觀身動止觀心動念.諸動無二等無差別.我時了覺此群動性.來無所從去無所至.十方微塵顚倒衆生同一虛妄.如是乃至三千大千.一世界內所有衆生.如一器中貯百蚊蚋啾啾亂鳴.於分寸中鼓發狂鬧.逢佛未幾得無生忍.爾時心開.乃見東方不動佛國.爲法王子事十方佛.身心發光洞徹無礙.佛問圓通我以觀察風力無依.悟菩提心入三摩地.合十方佛傳一妙心斯爲第一

虛空藏菩薩.即從座起.頂禮佛足而白佛言.我與如來定光佛所得無邊身.爾時手執四大寶珠.照明十方微塵佛刹化成虛空.又於自心現大圓鏡.內放十種微妙寶光.流灌十方.盡虛空際諸幢王刹.來入鏡內涉入我身.身同虛空不相妨礙.身能善入微塵國土.廣行佛事得大隨順.此大神力由我諦觀.四大無依妄想生滅.虛空無二佛國本同.於同發明得無生忍.佛問圓通我以觀察虛空無邊入三摩地.妙力圓明斯爲第一

彌勒菩薩.即從座起.頂禮佛足而白佛言.我憶往昔經微塵劫.有佛出世名日月燈明.我從彼佛而得出家.心重世名好遊族姓.爾時世尊教我修習唯心識定入三摩地.歷劫已來以此三昧事恒沙佛.求世名心歇

提三本俱作地

滅無有。至然燈佛出現於世。我乃得成無上妙圓識心三昧。乃至盡空如來國土淨穢有無。皆是我心變化所現。世尊我了如是唯心識故。識性流出無量如來。今得授記次補佛處。佛問圓通。我以諦觀十方唯識。識心圓明入圓成實。遠離依他及徧計執。得無生忍。斯爲第一

大勢至法王子。與其同倫五十二菩薩。即從座起。頂禮佛足而白佛言。我憶往昔恒河沙劫。有佛出世名無量光。十二如來相繼一劫。其最後佛名超日月光。彼佛教我念佛三昧。譬如有人一專爲憶一人專忘。如是二人若逢不逢或見非見。二人相憶二憶念深。如是乃至從生至生。同於形影不相乖異。十方如來憐念衆生如母憶子。若子逃逝雖憶何爲。子若憶母如母憶時。母子歷生不相違遠。若衆生心憶佛念佛。現前當來必定見佛去佛不遠。不假方便自得心開。如染香人身有香氣。此則名曰香光莊嚴。我本因地以念佛心入無生忍。今於此界攝念佛人歸於淨土。佛問圓通我無選擇都攝六根淨念相繼得三摩提斯爲第一

大佛頂萬行首楞嚴經卷第五

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經卷第六

一名中印度那蘭陀大道場經於灌頂部錄出別行　〔麗絲〕〔宋染〕〔元染〕〔明羔〕

唐天竺沙門般刺蜜帝譯

爾時觀世音菩薩卽從座起.頂禮佛足而白佛言.世尊憶念我昔無數恒河沙劫.於時有佛出現於世名觀世音.我於彼佛發菩提心.彼佛教我從聞思修入三摩地.初於聞中入流亡所.所入旣寂動靜二相了然不生.如是漸增聞所聞盡.盡聞不住覺所覺空.空覺極圓空所空滅.生滅旣滅寂滅現前.忽然超越世出世間.十方圓明獲二殊勝.一者上合十方諸佛本妙覺心.與佛如來同一慈力.二者下合十方一切六道衆生.與諸衆生同一悲仰

世尊由我供養觀音如來.蒙彼如來授我如幻聞熏聞修金剛三昧.與佛如來同慈力故.令我身成三十二應入諸國土.世尊若諸菩薩入三摩地.進修無漏勝解現圓.我現佛身而爲說法令其解脫.若諸有學寂靜妙明勝妙現圓.我於彼前現獨覺身.而爲說法令其解脫.若諸有學斷十二緣.緣斷勝性勝妙現圓.我於彼前現緣覺身.而爲說法令其解脫.若諸有學得四諦空.修道入滅勝性現圓.我於彼前現聲聞身.而爲說法令其解脫.若諸衆生欲心明悟.不犯欲塵欲身淸淨.我於彼前現梵王身.而爲說法令其解脫.若諸衆生欲爲天主統領諸天.我於彼前現帝釋身.而爲說法令其成就.若諸衆生欲身自在遊行十方.我於彼前現自在天身.而爲說法令其成就.若諸衆生欲身自在飛行虛空.我於彼前現大自在天身.而爲說法令其成就.若諸衆生愛統鬼神救護國土.我於彼前現天大將軍身.而爲說法令其成就.若諸衆生愛統世界救護衆

獨元作緣

其三本俱作自　子宋明俱作人　復三本俱作有　陀元明俱作那文同

生。我於彼前現四天王身。而爲說法令其成就。若諸衆生愛生天宮驅使鬼神。我於彼前現四天王國太子身。而爲說法令其成就。若諸衆生樂爲人主。我於彼前現人王身。而爲說法令其成就。若諸衆生愛主族姓世間推讓。我於彼前現長者身。而爲說法令其成就。若諸衆生愛談名言淸淨其居。我於彼前現居士身。而爲說法令其成就。若諸衆生愛治國土剖斷邦邑。我於彼前現宰官身。而爲說法令其成就。若諸衆生愛諸數術攝衞自居。我於彼前現婆羅門身。而爲說法令其成就。若有男子好學出家持諸戒律。我於彼前現比丘身。而爲說法令其成就。若有女子好學出家持諸禁戒。我於彼前現比丘尼身。而爲說法令其成就。若有男子樂持五戒。我於彼前現優婆塞身。而爲說法令其成就。若復女子五戒自居。我於彼前現優婆夷身。而爲說法令其成就。若有女人內政立身以修家國。我於彼前現女主身。及國夫人命婦大家。而爲說法令其成就。若有衆生不壞男根。我於彼前現童男身。而爲說法令其成就。若有處女愛樂處身不求侵暴。我於彼前現童女身。而爲說法令其成就。若有諸天樂出天倫。我現天身而爲說法令其成就。若有諸龍樂出龍倫。我現龍身而爲說法令其成就。若有藥叉樂度本倫。我於彼前現藥叉身。而爲說法令其成就。若乾闥婆樂脫其倫。我於彼前現乾闥婆身。而爲說法令其成就。若阿脩羅樂脫其倫。我於彼前現阿脩羅身。而爲說法令其成就。若緊陀羅樂脫其倫。我於彼前現緊陀羅身。而爲說法令其成就。若摩呼羅伽樂脫其倫我於彼前現摩呼羅伽身。而爲說法令其成就。若諸衆生樂人修人。我現人身而爲說法令其成就。若諸非人有形無形。有想無想樂度其倫。我於彼前皆現其身。而爲說法令其成就。是名妙淨三十二應入國土身。皆以三昧聞熏聞修。無作妙力自在成就

世尊我復以此聞熏聞修金剛三昧無作如力。與諸七方三世六道。一切衆生同悲仰故。令諸衆生於我身心。獲十四種無畏功德。一者由我不自觀音以觀觀者。令彼十方苦惱衆生。觀其音聲卽得解脫。二者知見

旋復。令諸衆生設入大火火不能燒。三者觀聽旋復。令諸衆生大水所漂水不能溺。四者斷滅妄想。心無殺害。令諸衆生入諸鬼國鬼不能害。五者熏聞成聞。六根銷復同於聲聽。能令衆生臨當被害刀段段壞。使其兵戈猶如割水。亦如吹光性無搖動。六者聞熏精明明徧法界。則諸幽暗性不能全。能令衆生藥叉羅刹鳩槃茶鬼。及毘舍遮富單那等。雖近其傍目不能視。七者音性圓銷。觀聽返入離諸塵妄。能令衆生禁繫枷鎖所不能著。八者滅音圓聞徧生慈力。能令衆生經過嶮路賊不能劫。九者熏聞離塵色所不劫。能令一切多婬衆生遠離貪欲。十者純音無塵。根境圓融無對所對。能令一切忿恨衆生離諸瞋恚。十一者銷塵旋明法界身心。猶如瑠璃朗徹無礙。能令一切昏鈍性障。諸阿顛迦永離癡暗。十二者融形復聞。不動道場涉入世間。不壞世界能徧十方。供養微塵諸佛如來。各各佛邊爲法王子。能令法界無子衆生。欲求男者誕生福德智慧之男。十三者六根圓通。明照無二含十方界。立大圓鏡空如來藏。承順十方微塵如來。祕密法門受領無失。能令法界無子衆生。欲求女者誕生端正福德柔順。衆人愛敬有相之女。十四者此三千大千世界百億日月。現住世間諸法王子。有六十二恒河沙數修法垂範。教化衆生隨順衆生。方便智慧各各不同。由我所得圓通本根發妙耳門。然後身心微妙含容徧周法界。能令衆生持我名號。與彼共持六十二恒河沙諸法王子。二人福德正等無異。世尊我一號名與彼衆多名號無異。由我修習得眞圓通。是名十四施無畏力福備衆生

世尊我又獲是圓通修證無上道故。又能善獲四不思議無作妙德。一者由我初獲妙妙聞心心精遺聞。見聞覺知不能分隔。成一圓融清淨寶覺。故我能現衆多妙容。能說無邊祕密神呪。其中或現一首三首。五首七首九首十一首。如是乃至一百八首。千首萬首八萬四千爍迦囉首。二臂四臂六臂八臂。十臂十二臂十四十六十八二十至二十四。如是乃至一百八臂千臂萬臂。八萬四千母陀羅臂。二目三目四目九目。如是

徧周元明俱倒
號名三本俱倒
囉明作羅

提　元作地次同

從　三本俱作依

乃至一百八首千目萬目。八萬四千清淨寶目。或慈或威或定或慧。救護衆生得大自在。二者由我聞思脫出六塵。如聲度垣不能爲礙。故我妙能現一一形。誦一一咒。其形其咒。能以無畏施諸衆生。是故十方微塵國土。皆名我爲施無畏者。三者由我修習本妙圓通淸淨本根。所遊世界。皆令衆生。捨身珍寶求我哀愍。四者我得佛心證於究竟。能以珍寶種種供養十方如來。傍及法界六道衆生。求妻得妻求子得子。求三昧得三昧。求長壽得長壽。如是乃至求大涅槃得大涅槃。佛問圓通我從耳門圓照三昧。緣心自在因入流相。得三摩提成就菩提斯爲第一。世尊彼佛如來。歎我善得圓通法門。於大會中授記法爲觀世音號。由我觀聽十方圓明。故觀音名徧十方界

爾時世尊於師子座。從其五體同放寶光。遠灌十方微塵如來。及法王子諸菩薩頂。彼諸如來亦於五體同放寶光。從微塵方來灌佛頂。并灌會中諸大菩薩及阿羅漢。林木池沼皆演法音。交光相羅如寶絲網。是諸大衆得未曾有。一切普獲金剛三昧。卽時天雨百寶蓮華。靑黃赤白間錯紛糅。十方虛空成七寶色。此娑婆界大地山河俱時不現。唯見十方微塵國土合成一界。梵唄詠歌自然敷奏。於是如來告文殊師利法王子汝今觀此二十五無學諸大菩薩及阿羅漢。各說最初成道方便。皆言修習眞實圓通。彼等修行實無優劣前後差別。我今欲令阿難開悟。二十五行誰當其根。兼我滅後此界衆生。入菩薩乘求無上道。何方便門得易成就。文殊師利法王子奉佛慈旨。卽從座起頂禮佛足。承佛威神說偈對佛

覺海性澄圓　圓澄覺元妙　元明照生所　所立照性亡　迷妄有虛空　依空立世界
想澄成國土　知覺乃衆生　空生大覺中　如海一漚發　有漏微塵國　皆從空所生
漚滅空本無　況復諸三有　歸元性無二　方便有多門　聖性無不通　順逆皆方便
初心入三昧　遲速不同倫　色想結成塵　精了不能徹　如何不明徹　於是獲圓通

音聲雜語言　但伊名句味　一非含一切　云何獲圓通　香以合中知　離則元無有
不恆其所覺　云何獲圓通　味性非本然　要以味時有　其覺不恆一　云何獲圓通
觸以所觸明　無所不明觸　合離性非定　云何獲圓通　法稱爲內塵　憑塵必有所
能所非徧涉　云何獲圓通　見性雖洞然　明前不明後　四維虧一半　云何獲圓通
鼻息出入通　現前無交氣　支離匪涉入　云何獲圓通　舌非入無端　因味生覺了
味亡了無有　云何獲圓通　身與所觸同　各非圓覺觀　涯量不冥會　云何獲圓通
知根雜亂思　湛了終無見　想念不可脫　云何獲圓通　識見雜三和　詰本稱非相
自體先無先　云何獲圓通　心聞洞十方　生于大因力　初心不能入　云何獲圓通
鼻想本權機　秖令攝心住　住成心所住　云何獲圓通　說法弄音文　開悟先成者
名句非無漏　云何獲圓通　持犯但束身　非身無所束　元非徧一切　云何獲圓通
神通本宿因　何關法分別　念緣非離物　云何獲圓通　若以地性觀　堅礙非通達
有爲非聖性　云何獲圓通　若以水性觀　想念非眞實　如如非覺觀　云何獲圓通
若以火性觀　厭有非眞離　非初心方便　云何獲圓通　若以風性觀　動寂非無對
對非無上覺　云何獲圓通　若以空性觀　昏鈍先非覺　無覺異菩提　云何獲圓通
若以識性觀　觀識非常住　存心乃虛妄　云何獲圓通　諸行是無常　念性無生滅
因果今殊感　云何獲圓通　我今白世尊　佛出娑婆界　此方眞教體　清淨在音聞
欲取三摩提　實以聞中入　離苦得解脫　良哉觀世音　於恆沙劫中　入微塵佛國
得大自在力　無畏施衆生　妙音觀世音　梵音海潮音　救世悉安寧　出世獲常住

無同作元

悞三本俱作誤
返元作反下同

我今啓如來　如觀音所説　譬如人靜居　十方俱擊鼓　十處一時聞　此則圓眞實
目非觀障外　口鼻亦復然　身以合方知　心念紛無緒　隔垣聽音響　遐邇俱可聞
五根所不齊　是則通眞實　音聲性動靜　聞中爲有無　無聲號無聞　非實聞無性
聲無既無滅　聲有亦非生　生滅二圓離　是則常眞實　縱令在夢想　不爲不思無
覺觀出思惟　身心不能及　今此娑婆國　聲論得宣明　衆生迷本聞　循聲故流轉
阿難縱強記　不免落邪思　豈非隨所淪　旋流獲無妄　阿難汝諦聽　我承佛威力
宣説金剛王　如幻不思議　佛母眞三昧　汝聞微塵佛　一切祕密門　欲漏不先除
畜聞成過悞　將聞持佛佛　何不自聞聞　聞非自然生　因聲有名字　旋聞與聲脫
能脫欲誰名　一根既返源　六根成解脫　見聞如幻翳　三界若空華　聞復翳根除
塵銷覺圓淨　淨極光通達　寂照含虛空　却來觀世間　猶如夢中事　摩登伽在夢
誰能留汝形　如世巧幻師　幻作諸男女　雖見諸根動　要以一機抽　息機歸寂然
諸幻成無性　六根亦如是　元依一精明　分成六和合　一處成休復　六用皆不成
塵垢應念銷　成圓明淨妙　餘塵尚諸學　明極即如來　大衆及阿難　旋汝倒聞機
反聞聞自性　性成無上道　圓通實如是　此是微塵佛　一路涅槃門　過去諸如來
斯門已成就　現在諸菩薩　今各入圓明　未來修學人　當依如是法　我亦從中證
非唯觀世音　誠如佛世尊　詢我諸方便　以救諸末劫　求出世間人　成就涅槃心
觀世音爲最　自餘諸方便　皆是佛威神　即事捨塵勞　非是長修學　淺深同説法
頂禮如來藏　無漏不思議　願加被未來　於此門無惑　方便易成就　堪以教阿難

石沙三本倶倒
途同作塗次同

及末劫沈淪　但以此根修　圓通超餘者　眞實心如是

於是阿難及諸大衆。身心了然得大開示。觀佛菩提及大涅槃。猶如有人因事遠遊未得歸還。明了其家所歸道路。普會大衆天龍八部有學二乘。及諸一切新發心菩薩。其數凡有十恆河沙皆得本心。遠塵離垢獲法眼淨。性比丘尼聞說偈已成阿羅漢。無量衆生皆發無等等阿耨多羅三藐三菩提心

阿難整衣服。於大衆中合掌頂禮。心迹圓明悲欣交集。欲益未來諸衆生故。稽首白佛大悲世尊。我今已悟成佛法門。是中修行得無疑惑。常聞如來說如是言。自未得度先度人者菩薩發心。自覺已圓能覺他者如來應世。我雖未度願度末劫一切衆生。世尊此諸衆生去佛漸遠。邪師說法如恆河沙欲攝其心入三摩地。云何令其安立道場遠諸魔事。於菩提心得無退屈

爾時世尊於大衆中稱讚阿難。善哉善哉如汝所問。安立道場救護衆生末劫沈溺。汝今諦聽當爲汝說。阿難大衆唯然奉教

佛告阿難汝常聞我毗奈耶中。宣說修行三決定義。所謂攝心爲戒因戒生定因定發慧。是則名爲三無漏學。阿難云何攝心我名爲戒。若諸世界六道衆生其心不婬。則不隨其生死相續。汝修三昧本出塵勞。婬心不除塵不可出。縱有多智禪定現前。如不斷婬必落魔道。上品魔王中品魔民下品魔女。彼等諸魔亦有徒衆。各各自謂成無上道。我滅度後末法之中。多此魔民熾盛世間。廣行貪婬爲善知識。令諸衆生。落愛見坑失菩提路。汝教世人修三摩地先斷心婬。是名如來先佛世尊。第一決定淸淨明誨。是故阿難若不斷婬修禪定者。如蒸沙石欲其成飯。經百千劫祇名熱沙。何以故此非飯本石沙成故。汝以婬身求佛妙果。縱得妙悟皆是婬根。根本成婬輪轉三途必不能出。如來涅槃何路修證。必使婬機身心俱斷斷性亦無。於佛菩提斯可希冀。如此我說名爲佛說。不如此說卽波旬說

卽同作則○尙同作當
神鬼同倒

薩三本俱作提

擯同作裨
提元明俱作地

挹三本俱作揖

阿難。又諸世界六道衆生。其心不殺。則不隨其生死相續。汝修三昧本出塵勞。殺心不除塵不可出。縱有多智禪定現前。如不斷殺必落神道。上品之人爲大力鬼。中品卽爲飛行夜叉諸鬼帥等。下品尙爲地行羅剎。彼諸鬼神亦有徒衆。各各自謂成無上道。我滅度後末法之中。多此神鬼熾盛世間。自言食肉得菩提路。阿難我令比丘食五淨肉。此肉皆我神力化生本無命根。汝婆羅門地多蒸溼。加以沙石草菜不生。我以大悲神力所加。因大慈悲假名爲肉。汝得其味。奈何如來滅度之後。食衆生肉名爲釋子。汝等當知是食肉人。縱得心開似三摩地。皆大羅剎。報終必沈生死苦海。非佛弟子。如是之人相殺相吞相食未已。云何是人得出三界。汝教世人修三摩地次斷殺生。是名如來先佛世尊第二決定淸淨明誨。是故阿難若不斷殺修禪定者。譬如有人自塞其耳。高聲大叫求人不聞。此等名爲欲隱彌露。淸淨比丘及諸菩薩。於岐路行不踏生草。況以手拔。云何大悲取諸衆生血肉充食。若諸比丘不服東方絲綿絹帛。及是此土靴履裘毳乳酪醍醐。如是比丘於世眞脫。酬還宿債不遊三界。何以故服其身分皆爲彼緣。如人食其地中百穀。足不離地。必使身心。於諸衆生若身身分。身心二途不服不食。我說是人眞解脫者。如我此說名爲佛說。不如此說卽波旬說。

阿難又復世界六道衆生其心不偷。則不隨其生死相續。汝修三昧本出塵勞。偷心不除塵不可出。縱有多智禪定現前。如不斷偷必落邪道。上品精靈中品妖魅。下品邪人諸魅所著。彼等群邪亦有徒衆。各各自謂成無上道。我滅度後末法之中。多此妖邪熾盛世間。潛匿姧欺稱善知識。各自謂已得上人法。詃惑無識恐令失心。所過之處其家耗散。我教比丘循方乞食。令其捨貪成菩薩道。諸比丘等不自熟食。寄於殘生旅泊三界。示一往還去已無返。云何賊人假我衣服。擯販如來造種種業。皆言佛法。却非出家具戒比丘爲小乘道。由是疑誤無量衆生墮無間獄。若我滅後其有比丘發心決定修三摩提。能於如來形像之前。身然一燈燒一指節。及於身上爇一香炷。我說是人無始宿債一時酬畢。長挹世間永脫諸漏。雖未卽明無上覺路。是

人於法已決定心。若不爲此捨身微因。縱成無爲必還生人酬其宿債。如我馬麥正等無異。汝教世人修三摩地後斷偷盜。是名如來先佛世尊第三決定清淨明誨。是故阿難若不斷偷修禪定者。譬如有人水灌漏巵欲求其滿。縱經塵劫終無平復。若諸比丘衣鉢之餘分寸不畜。乞食餘分施餓衆生。於大集會合掌禮衆。有人捶罵同於稱讚。必使身心二俱捐捨。身肉骨血與衆生共。不將如來不了義說。廻爲已解以誤初學。佛印是人得眞三昧。如我所說名爲佛說。不如此說卽波旬說

阿難如是世界六道衆生。雖則身心無殺盜婬三行已圓。若大妄語卽三摩提不得清淨。成愛見魔失如來種。所謂未得謂得未證言證。或求世間尊勝第一。謂前人言。我今已得須陀洹果斯陀含果阿那含果。阿羅漢道辟支佛乘。十地地前諸位菩薩。求彼禮懺貪其供養。是一顚迦銷滅佛種。如人以刀斷多羅木。佛記是人永殞善根無復知見。沈三苦海不成三昧。我滅度後勅諸菩薩及阿羅漢。應身生彼末法之中。作種種形度諸輪轉。或作沙門白衣居士。人王宰官童男童女。如是乃至婬女寡婦姦偸屠販。與其同事稱歎佛乘。令其身心入三摩地。終不自言我眞菩薩眞阿羅漢。泄佛密因輕言未學。唯除命終陰有遺付。云何是人惑亂衆生成大妄語。汝教世人修三摩地。後復斷除諸大妄語。是名如來先佛世尊第四決定清淨明誨。是故阿難若不斷其大妄語者。如刻人糞爲栴檀形。欲求香氣無有是處。我教比丘直心道場。於四威儀一切行中尚無虛假。云何自稱得上人法。譬如窮人妄號帝王自取誅滅。況復法王如何妄竊。因地不直果招紆曲。求佛菩提如噬臍人。欲誰成就。若諸比丘心如直絃。一切眞實入三摩提永無魔事。我印是人成就菩薩無上知覺。如我是說名爲佛說。不如此說卽波旬說

大佛頂萬行首楞嚴經卷第六

罵同作詈
提元作地次同
歎三本俱作讃
泄元明俱作洩
直宋明俱作眞
絃三本俱作弦
是同作所

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經卷第七

一名中印度那蘭陀大道場經於灌頂部錄出別行　〔麗綵二〕〔宋染〕〔元染〕〔明盖〕

唐天竺沙門般剌蜜諦譯

阿難汝問攝心。我今先說入三已地。修學妙門求菩薩道。要先持此四種律儀。皎如冰霜。自不能生一切枝葉。心三口四生必無因。阿難如是四事若不失遺。心尚不緣色香味觸。一切魔事云何發生。若有宿習不能滅除。汝教是人一心誦我佛頂光明摩訶薩怛多般怛囉無上神呪。斯是如來無見頂相無爲心佛從頂發輝坐寶蓮華所說心呪。且汝宿世與摩登伽歷劫因緣恩愛習氣。非是一生及與一劫。我一宣揚愛心永脫成阿羅漢。彼尚婬女無心修行。神力冥資速證無學。云何汝等在會聲聞。求最上乘決定成佛。譬如以塵揚于順風有何艱險。若有末世欲坐道場。先持比丘清淨禁戒。要當選擇戒清淨者第一沙門以爲其師。若其不遇眞清淨僧。汝戒律儀必不成就。戒成已後著新淨衣然香閑居。誦此心佛所說神呪一百八徧。然後結界建立道場。求於十方現住國土無上如來。放大悲光來灌其頂。阿難如是末世清淨比丘若比丘尼白衣檀越。心滅貪婬持佛淨戒。於道場中發菩薩願。出入澡浴六時行道。如是不寐經三七日。我自現身至其人前。摩頂安慰令其開悟

阿難白佛言世尊。我蒙如來無上悲誨。心已開悟自知修證無學道成。末法修行建立道場云何結界。合佛世尊清淨軌則

佛告阿難若末世人願立道場。先取雪山大力白牛。食其山中肥膩香草。此牛唯飲雪山清水其糞微細。可

蜜下三本俱無及諸乃至等食十六字

饗同作享

知同作胝

七下同無日字

阿上同無及字○恆上同有號字○繞同作圍○羅元作囉○七上三本俱無四字

取其糞和合栴檀以泥其地。若非雪山其牛臭穢不堪塗地。別於平原穿去地皮五尺已下。取其黃土。和上栴檀沈水蘇合薰陸鬱金白膠青木零陵甘松及雞舌香。以此十種細羅為粉。合土成泥以塗場地。方圓丈六為八角壇。壇心置一金銀銅木所造蓮華。華中安鉢。鉢中先盛八月露水。水中隨安所有華葉。取八圓鏡各安其方圍繞華鉢。鏡外建立十六蓮華。十六香鑪間華鋪設。莊嚴香鑪純燒沈水無令見火。取白牛乳置十六器。乳為煎餅并諸沙糖油餅乳糜酥合蜜薑純酥純蜜。及諸菓子飲食葡萄石蜜種種上妙等食於蓮華外各各十六圍繞華外。以奉諸佛及大菩薩。每以食時若在中夜取蜜半升用酥三合。壇前別安一小火鑪。以兜樓婆香煎取香水。沐浴其炭然令猛熾。投是酥蜜於炎鑪內。燒令煙盡饗佛菩薩。令其四外徧懸幡華。於壇室中四壁敷設十方如來及諸菩薩所有形像。應於當陽張盧舍那。釋迦彌勒阿閦彌陀。諸大變化觀音形像。兼金剛藏安其左右。帝釋梵王烏芻瑟摩。并藍地迦諸軍茶利。與毘俱知四天王等頻那夜迦。張於門側左右安置。又取八鏡覆懸虛空。與壇場中所安之鏡方面相對。使其形影重重相涉。於初七日中。至誠頂禮十方如來。諸大菩薩及阿羅漢。恆於六時誦呪繞壇至心行道。一時常行一百八徧。第二七中一向專心。發菩薩願。心無間斷。我毘奈耶先有願教。第三七中於十二時。一向持佛般怛羅呪。至第四七日十方如來一時出現。鏡交光處承佛摩頂。即於道場修三摩地。能令如是末世修學。身心明淨猶如琉璃。阿難若此比丘本受戒師。及同會中十比丘等。其中有一不清淨者。如是道場多不成就。從三七後端坐安居。經一百日有利根者。不起于座得須陀洹。縱其身心聖果未成。決定自知成佛不謬。汝問道場建立如是。阿難頂禮佛足而白佛言。自我出家恃佛憍愛。求多聞故未證無為。遭彼梵天邪術所禁。心雖明了力不自由。賴遇文殊令我解脫。雖蒙如來佛頂神呪。冥獲其力尚未親聞。惟願大悲重為宣說。悲救此會諸修行輩。末及當來在輪迴者。承佛密音身意解脫。于時會中一切大眾普皆作禮。佇聞如來祕密章句

恃怙同作哀祈

宣說神呪欠行同無大佛乃至神呪四十三字

此陀羅尼與三本大異故附載卷末

爾時世尊從肉髻中涌百寶光．光中涌出千葉寶蓮．有化如來坐寶華中．頂放十道百寶光明．一一光明皆徧示現十恒河沙金剛密跡．擎山持杵徧虛空．界大衆仰觀畏愛兼．抱求佛恃怙一心聽佛無見頂相放光如來宣說神呪

大佛頂如來放光悉怛多鉢怛囉菩薩萬行品灌頂部錄出一名中印度那蘭陀曼茶羅灌頂金剛大道場神呪

南无薩怛他蘇伽哆耶(歸命一切諸佛一) 阿囉訶帝三藐三菩陀耶(歸命一切如來應正等覺二) 娜牟薩婆勃陀(敬禮一切諸佛三) 勃地薩哆吠弊(歸命菩薩毗耶反四) 娜牟颯哆喃三藐三菩陀俱胝喃(敬禮正遍知五) 薩失囉(引)皤(去)迦僧伽喃(敬禮辟支佛及四果人六) 娜牟嚧雞阿囉喝哆喃(歸命羅漢等衆七) 娜牟蘇嚕哆半那喃(八) 娜牟塞翔喇(合二)陀(引)伽(去經)彌喃(敬禮斯陀含阿那含衆九) 娜牟盧雞三藐伽哆喃(敬禮過去未來十) 娜牟三藐鉢囉(合二)底半那(去)喃(一十) 娜牟提婆喇史喃(敬禮三十三天及一切諸仙天等十二) 娜牟微悉陀耶微(呼入)地也(合二)陀囉喃(敬禮呪仙十三) 娜牟悉陀微地也(合二)陀囉喋史喃(敬禮持呪成就仙人十四) 舍波(去)拏揭囉訶娑訶摩囉陀(合二)喃(攝善作惡十五) 娜牟皤囉(合二)訶摩(合二)湿(歸命梵天十六) 娜牟因(去)陀囉(合二)耶(歸命帝釋十七) 娜牟婆伽嚩帝(歸命世尊十八) 嚕陀囉(引二合)耶(大自在天十九) 烏摩鉢底(天后)婆薩夜耶(及眷屬等二十) 娜牟婆伽筏(蒱反)帝(世尊二十一) 那囉延拏耶(地祇衆二十二) 半遮摩訶沒陀囉(大印二十三) 娜牟塞訖唎(二合)多牟(二合)(頂禮世尊二十四) 娜牟婆伽(上呼)筏帝摩訶迦囉耶(大黑天神二十五) 底哩(合二)補囉那伽(上)囉(二十六) 毗陀囉皤拏迦囉耶(二十七) 阿底目多迦戶摩舍那縛悉泥(尸陀林中二十八) 摩怛唎(合二)伽拏(鬼神衆二十九) 娜牟塞訖唎多耶(三十) 娜牟婆伽筏帝(世尊) 怛他揭多俱囉耶(歸命如來族三十一) 娜牟鉢頭摩(合二)俱囉耶(歸命蓮華族三十二) 娜牟筏折囉俱囉(半音同下)耶(歸命金剛族三十三) 娜牟摩尼俱囉耶(歸命寶族三十四) 娜牟伽(上)闍俱囉耶(歸命象族三十五) 娜牟婆伽筏帝(三十六) 地唎(合二)茶輸囉晒那(三十七) 鉢囉(合二)訶囉拏囉(引)闍耶(大軍衆持器仗人三十八) 怛他揭多耶(如來三十九) 娜牟婆伽筏帝(四十) 阿彌陀(引)婆(引)耶(無量壽佛四十一) 怛他揭多耶(四十二) 阿囉訶帝三藐三菩陀耶(應正等覺四十三) 娜牟婆伽筏帝(四十四) 阿芻鞞也(阿閦如來四十五) 怛他揭多耶(十四

六阿羅訶帝三藐三菩陀耶四十七 娜牟婆伽筏帝四十八 毗沙闍俱嚕二合吠瑠璃喇耶藥師如來四十九 鉢囉二合婆囉引
闍耶光王五十 怛他揭多耶五十一 阿囉訶帝三藐三菩陀耶五十二 娜牟婆伽筏帝五十三 三布瑟畢多娑囉囉引闍
夜婆羅花王五十四 怛他揭多耶五十五 阿囉訶帝三藐三菩陀引耶五十六 娜牟婆伽筏帝五十七 舍揭也二合 母娜曳釋迦牟尼
佛五十八 怛他揭多耶五十九 阿囉訶帝三藐三菩陀引耶六十 娜牟婆伽筏帝六十一 囉怛那俱蘇摩寶花六十二 雞都囉
引闍耶寶幢王如來六十三 怛他揭多耶六十四 阿囉訶帝三藐三菩陀引耶帝瓢六十五 娜牟塞訖哩二合多醯嚩摩合婆伽
筏多六十六 薩怛他揭都烏瑟尼衫如來佛頂六十七 悉怛多引鉢怛藍二合華蓋六十八 娜牟阿波引囉支單半音[illegible]是[illegible]時六十九 鉢羅登
登飯反擬擬異反囉七十 薩嚩部多揭囉二合訶迦囉尼一切神衆作罰七十一 波囉微入地也二合 掣車反曳陀輕呼儞能寫他呪七十二 阿哥引
囉輕呼微哩入二合駐橫死七十三 波喇怛囉耶引 那揭喇救取七十四 薩嚩畔陀那帽乞叉那迦喇一切禁縛作解駐七十五 薩嚩突瑟
吒二合除一切惡七十六上 突莎般那儞縛囉尼惡夢七十七 者都囉引 室底喃八萬四千衆神七十八 揭囉訶娑訶娑囉引喃七十九 微陀防娑
引 那羯哩打破八十 阿瑟吒冰設底喃去聲呼皆同八十一 諾剎怛囉喃八十二 鉢囉二合娑引陀那羯哩正行 阿瑟吒二合喃八十三
摩訶揭囉訶喃辰八十四 微陀防二合 薩那羯哩打破八十五 薩嚩舍都嚕二合 儞嚩囉尼除一切惡八十六 巨去 囉喃八十七 突室乏
二合 鉢那難遮那舍尼除却毀惡八十八 毗沙設薩怛囉器仗八十九 阿祁尼火九十 烏陀迦囉尼水九十一 阿波引囉視多具囉
勝嚴九十二 摩訶跋囉戰拏大力眞怒九十三 摩訶提哆火天九十四 摩訶當闍大熾九十五 摩訶稅尾二合多太白九十六 什伐二合囉光焰九十七能苻
摩訶跋羅大力九十八 半茶囉嚩引 悉儞內拂九十九 阿喇耶多囉聖者一百 毗哩二合 俱知制嚩毗闍耶最勝菩一百一 筏折囉二合
摩禮底毗輸嚕多摧碎金剛百二 鉢踏罔迦降伏百三 跋折囉兒幾反曳 訶縛者金剛力士百四 摩囉制縛[illegible]百五 般囉室多金剛神杵
百六 跋折囉時熱反上 囉二合 檀持金剛神杵百七 毗舍囉摩遮天神力士百八 扇多舍毗提嚩 布室哆 蘇摩嚕波參辰日月天子二十八宿百九 及摩訶
引 稅尾二合多引太白星百十 阿喇耶多囉百十一 摩訶引 跋囉阿波囉百十二 跋折囉二合 商羯囉制婆金剛連鎖百十三 怛他天可反
跋折囉俱摩喇迦金剛童女百十四 俱藍盧普反 咃喇金剛童子百十五 跋折囉訶薩哆者二合金剛手百十六 微地也大明呪藏百十七 乾遮那摩引 喇

鬼一百九十五塞揵陀揭囉訶鳩摩羅童天子百九十六阿婆娑摩囉揭囉合二訶羊頭鬼百九十七烏檀摩陀揭囉合二訶熱鬼百九十八車耶揭囉合二
訶影鬼百九十九梨婆底揭囉訶除[illegible]鬼二百闍底訶唎泥食初產鬼二百一羯囉婆訶唎泥食懷孕鬼二百二嚧地囉訶唎泥食血鬼二百三芒
娑訶唎泥食肉鬼二百四計陀訶唎泥食脂鬼二百五摩闍訶唎[illegible]呼去聲泥食髓鬼二百六闍多訶唎泥食氣鬼二百七視吠哆訶唎泥食壽命鬼
二百八婆多訶唎泥食風鬼二百九皤多訶唎喃阿輸遮訶唎泥食不淨鬼二百一十質多訶唎泥食心鬼二百十一帝釤薩鞞釤如是等衆二百十二薩
嚩揭囉訶喃一切執祖鬼二百十三毗地也明呪藏二百十四嗔陀夜彌斬伐罪者二百十五枳囉夜彌二百十六波唎䟦囉者迦羅外道二百十七訖唎離枳
反上擔微地也明明藏二百十八嗔陀夜彌二百十九枳囉夜彌捕鬪二百二十茶枳尼狐魅鬼二百二十一訖唎擔微地也明呪二百二十二嗔陀夜彌枳
囉夜彌二百二十三摩訶鉢拏天底夜二百二十四嚕微囉大自在天二百二十五訖唎䟽微地也明呪二百二十六嗔陀夜彌枳囉夜彌二百
二十七那囉耶拏耶天神二百二十八訖唎䟽微地也明呪二百二十九嗔陀夜彌枳囉夜彌二百三十怛怛嚩伽上嚕茶金翅鳥王二百三十一訖
唎䟽微地也二百三十二嗔陀夜彌枳囉夜彌二百三十三摩訶迦羅大黑天神二百三十四摩怛囉伽拏訖唎離枳反上䟽微地也二百
三十五嗔陀夜彌枳羅夜彌二百三十六迦波唎迦髑髏外道二百三十七訖唎䟽微地也二百三十八嗔陀夜彌枳囉夜彌二百三十九
閣夜羯囉二百四十曼度羯囉二百四十一薩婆囉他娑達儞持一切物二百四十二訖唎䟽微地也二百四十三嗔陀夜彌枳囉夜彌
二百四十四者都嘌利吉反薄祁儞姊妹神女二百四十五訖唎䟽微地也二百四十六嗔吒夜彌二百四十七枳囉夜彌二百四十八毖去儀
唎知鬪戰勝神并器仗二百四十九難泥外道雞首婆囉孔雀王器仗二百五十伽那鉢底毗那夜迦王二百五十一娑醯夜野叉王兄弟三人各領二十八萬衆二百五十二訖唎䟽微
地也二百五十三嗔陀夜彌二百五十四枳囉夜彌二百五十五那延那室囉引婆拏裸形外道二百五十六訖唎離吉反皆同䟽微地也二百
五十七嗔陀夜彌二百五十八枳囉夜彌二百五十九阿囉訶多羅漢二百六十訖唎䟽微地也二百六十一嗔陀夜彌二百六十二枳囉
夜彌二百六十三微怛多音囉引迦起尸鬼二百六十四訖唎䟽微地也二百六十五嗔陀夜彌二百六十六枳囉夜彌二百六十七䟦折時熱反
囉波儞熱金剛神二百六十八䟦折囉婆重呼尼二百六十九具醯夜迦密跡力士二百七十地鉢底總管二百七十一訖唎䟽微地也二百七十二嗔陀夜
彌枳羅夜彌二百七十三囉叉囉叉罔一切諸佛菩薩天仙龍神方護二百七十四薄伽梵佛二百七十五印兔那麼麼寫某乙寫二百七十六婆伽梵薩怛

他揭都烏瑟尼沙二百七十七 悉怛多鉢怛囉華蓋二百七十八 南無𠹕上都上𢇃頂禮二百七十九 阿悉多那引囉引 囉迦白光分明二百八十
鉢囉婆毗薩普吒二百八十一 毗迦悉怛多二百八十二 鉢底唎二百八十三 什嚩囉什嚩囉光焰二百八十四 陀囉陀囉二百八十五 頻
陀囉頻陀囉二百八十六 嗔陀嗔陀二百八十七 合吽合吽二百八十八 泮泮泮二百八十九 泮吒泮吒二百九十 莎嚩訶二百九十一 醯
醯泮二百九十二 阿牟伽耶泮不空大使二百九十三 阿鉢囉底訶多泮無障礙二百九十四 嚩囉鉢囉合二陀泮與願二百九十五 阿素囉毗陀囉嚩
迦泮修羅破壞二百九十六 薩嚩提吠弊泮一切天衆二百九十七 薩嚩那伽弊泮一切龍衆二百九十八 薩嚩藥叉弊泮一切勇鬼神二百九十九 薩嚩乹闥
婆弊泮一切音樂神三百 薩嚩阿素囉弊泮三百一 薩嚩揭嚕茶弊泮三百二 薩嚩緊那羅弊泮三百三 薩嚩摩護囉伽弊泮
三百四 薩嚩囉刹娑弊泮三百五 薩嚩摩努曬弊泮三百六 薩嚩阿摩努曬弊泮三百七 薩嚩布單那弊泮三百八 薩嚩
迦吒布丹那弊泮三百九 薩嚩突瀾枳帝弊泮一切[illegible]三百十 薩嚩突瑟吒畢㗚乞史帝弊泮一切[illegible]三百十一 薩嚩什嚩囉弊
泮一切疫熱三百十二 薩嚩阿波薩麼㘑弊泮一切外道出三百十三 薩嚩舍羅婆拏弊泮三百十四 薩嚩底㗚雞弊泮三百十五 薩嚩怛
波提弊泮一切鬼惡三百十六 薩嚩徵地也囉誓遮梨弊泮一切持呪博士三百十七 闍耶羯囉摩度羯囉三百十八 薩婆囉他娑陀雞弊
泮一切物呪博士三百十九 徵地也遮唎曳弊泮三百二十 者咄囉南薄祁儞弊泮四姉妹神女三百二十一 跋折囉俱摩唎迦弊泮金剛童子三百二十二
跋折囉俱藍陀利弊泮三百二十三 徵地也囉引闍弊泮呪王等三百二十四 摩訶鉢囉登耆㗚弊泮三百二十五 跋折囉商羯囉
引夜泮金剛連鎖三百二十六 鉢囉登祁囉囉引闍引耶泮三百二十七 摩訶揭囉耶泮大黑天神三百二十八 摩訶摩怛唎合二伽拏耶泮
鬼衆三百二十九 娜牟塞揭唎合二多耶泮三百三十 毗瑟拏尼曳泮梵釋天子三百三十一 嚩囉詳摩尼曳泮梵王三百三十二 阿耆尼曳泮火天三百
三十三 摩訶迦唎曳泮大黑天女三百三十四 迦囉檀特曳泮大鬼閻羅使神三百三十五 蔑泥唎曳泮帝釋三百三十六 遮文遲曳泮三百三十七 嘮怛
唎曳泮三百三十八 迦囉引怛唎曳泮三百三十九 迦波唎曳泮三百四十 阿地目枳多迦尸摩舍那嚩悉儞曳泮三百四十一
曳醫者那薩怛薩怛嚩若有衆生三百四十二 突瑟吒質多惡心鬼三百四十三 滿持囉質多三百四十四 烏闍訶囉食精氣鬼三百四十五 揭婆訶囉
食胎藏鬼三百四十六 嚧地囉訶囉食血鬼三百四十七 芒娑訶囉食肉鬼三百四十八 摩社訶囉食脂鬼三百四十九 社多訶囉三百五十 視徵多訶囉食壽命鬼三百五十一

皤畧耶訶囉食祭鬼三百五十二健陀訶囉食香鬼三百五十三布瑟波訶囉食花鬼三百五十四破囉訶囉食五果子鬼三百五十五薩寫訶囉食五穀種子鬼三百五十六[illegible]
波質多突瑟吒知諫反質多惡心鬼三百五十七嘮陀囉質多嗔心鬼三百五十八陀囉質多藥叉揭囉訶三百五十九囉剎娑揭囉訶三百六十
閉隸多揭囉訶毗舍遮揭囉訶三百六十一部多揭囉訶神衆三百六十二鳩槃茶揭囉訶三百六十三塞健陀揭囉訶三百六十四
烏怛摩陀揭囉訶三百六十六車夜揭囉訶影鬼三百六十六阿波娑摩囉揭囉訶羊嗔鬼田野狐三百六十七侘斯阿反上長平呼迦茶祁尼揭囉
訶魅鬼魅女鬼三百六十八嚟婆底揭囉訶如狗惱小鬼三百六十九闍彌迦揭囉訶如鳥鬼三百七十舍俱尼揭囉訶如馬鬼三百七十一漫怛囉難提迦揭囉
訶如猫兒三百七十二阿藍皤揭囉訶如蛇三百七十三訶奴建度波尼揭囉訶如雞三百七十四什入音皤囉壯熱虐鬼翳迦醯迦一日一發德吠底迦
二日一發三百七十五帝哩帝藥迦三日一發折咄嘌他迦四日一發三百七十六眤底夜什囉皤常壯熱鬼三百七十七毗沙摩什皤囉壯熱三百七十八皤底
迦風病鬼背底迦黃病鬼三百七十九室隸瑟彌迦痰飲三百八十娑儞波底迦痢病三百八十一薩皤什皤囉一切壯熱三百八十二室嚕喝囉底頭痛三百八十三
阿羅陀皤帝半頭痛三百八十四阿乞史嚧劒飢不食鬼三百八十五目佉嚧鉗口痛三百八十六謁唎突嚧鉗愁鬼三百八十七羯囉訶輸藍咽喉痛三百八十八
羯拏輸藍耳痛三百八十九檀多輸藍齒痛三百九十頡哩馱耶輸藍心痛三百九十一末摩輸藍盧鉗反三百九十二跋囉訶婆輸藍肋痛三百九十三背哩
瑟吒輸藍背痛三百九十四烏馱囉輸藍盧紺反腹痛三百九十五羶知輸藍腰痛三百九十六跋悉帝輸藍裸骨痛三百九十七鄔上嚧輸藍髖髀痛三百九十八常伽
輸藍腕痛三百九十九喝薩多輸藍手痛四百波陀輸藍脚痛四百一頞伽鉢囉登輸藍四支節痛四百二部多吠怛茶起尸鬼四百三茶枳呼嗔反上
尼魅鬼四百四什皤囉陀突盧建紐四百五吉知蜘蛛婆路多丁瘡四百六吠薩囉波嚕訶徒淫瘡凌里孕反伽赤瘡四百七輸沙多
引囉娑那迦囉毗沙喻迦上坎四百八阿祁尼火烏陀迦水摩囉吠囉建多囉四百九阿迦囉蜜嘌合二駐橫死四百十怛
嚟部迦地哩囉吒毗失脂迦蝎四百十一薩囉波蛇四百十二那俱囉虎狼四百十三僧思孕反伽師子四百十四吠也揭囉大虫四百十五怛
乞叉猪熊四百十六怛囉乞叉末囉馬熊視皤帝衫此等四百十七薩毗衫薩毗衫一切此說者四百十八悉怛多鉢怛囉花蓋四百十九摩訶跋
折嚕大金剛藏四百二十瑟尼衫摩訶鉢囉登祁藍四百二十一夜婆埵陀舍喻祉那乃至十二由旬成界地四百二十二便怛囒拏毗入聲地夜畔
馱迦嚧彌云我大明呪十二由旬結界禁縛莫入四百二十三帝殊畔陀迦居邪反嚧彌佛頂光聚縛結不得入界四百二十四波囉微地也途迦反畔陀迦囒彌能縛一切

羅元作囉下同

難下宋無風水火難四字水火元明俱倒

蓮三本俱作聯

趣向乃至菩提十字同作取阿

羅漢四字〇惛同作惛

惡嗔鬼四百二十五怛地他即說呪曰四百二十六唵四百二十七阿那隸毗舍提四百二十八鞞囉四百二十九跋折囉四百三十阿唎畔陀四百三十一毗陀彌四百三十二跋折波囉尼泮四百三十三虎吽四百三十四都嚧吽三合四百三十五莎婆訶四百三十六唵吽四百三十七毗嚧提四百三十八莎婆訶四百三十九

右此呪句總有四百三十九句

阿難是佛頂光聚悉怛多般怛羅祕密伽陀微妙章句．出生十方一切諸佛．十方如來因此呪心．得成無上正徧知覺．十方如來執此呪心．降伏諸魔制諸外道．十方如來乘此呪心．坐寶蓮華應微塵國．十方如來含此呪心．於微塵國轉大法輪．十方如來持此呪心．能於十方摩頂授記．自果未成亦於十方蒙佛授記．十方如來依此呪心．能於十方拔濟群苦．所謂地獄餓鬼畜生盲聾瘖瘂．怨憎會苦愛別離苦．求不得苦五陰熾盛．大小諸橫同時解脫．賊難兵難王難獄難．風水火難飢渴貧窮應念銷散．十方如來隨此呪心．能於十方事善知識．四威儀中供養如意．恒沙如來會中推爲大法王子．十方如來行此呪心．能於十方攝受親因．令諸小乘聞祕密藏不生驚怖．十方如來誦此呪心．成無上覺坐菩提樹入大涅槃．十方如來傳此呪心．於滅度後付佛法事究竟住持．嚴淨戒律悉得清淨．若我說是佛頂光聚般怛羅呪．從旦至暮音聲相連．字句中間亦不重疊．經恒沙劫終不能盡．亦說此呪名如來頂．汝等有學未盡輪迴．發心至誠趣向阿耨多羅三藐三菩提．不持此呪而坐道場．令其身心遠諸魔事無有是處

阿難若諸世界隨所國土．所有衆生隨國所生．樺皮貝葉紙素白氎．書寫此呪貯於香囊．是人心惛未能誦憶．或帶身上或書宅中．當知是人盡其生年．一切諸毒所不能害

阿難我今爲汝更說此呪．救護世間得大無畏．成就衆生出世間智．若我滅後末世衆生．有能自誦若敎他誦．當知如是誦持衆生．火不能燒水不能溺．大毒小毒所不能害．如是乃至龍天鬼神．精祇魔魅所有惡呪．

魘同作厭〇毒心同倒〇毗元明俱作頻

屬下三本俱有晝夜隨侍四字

德下三本俱有無有異也四字

生同作孕〇鉢同作般〇速同作卽

皆不能著心得正受。一切咒詛魘蠱毒藥。金毒銀毒草木蟲蛇萬物毒氣。入此人口成甘露味。一切惡星幷諸鬼神磣毒心人。於如是人不能起惡。毗那夜迦諸惡鬼王幷其眷屬。皆領深恩常加守護。阿難當知。是呪常有八萬四千那由他恒河沙俱胝金剛藏王菩薩種族。一一皆有諸金剛衆而爲眷屬。設有衆生於散亂心。非三摩地心憶口持。是金剛王常隨從彼諸善男子。何況決定菩提心者。此諸金剛菩薩藏王。精心陰速發彼神識。是人應時心能記憶八萬四千恒河沙劫。周徧了知得無疑惑。從第一劫乃至後身生生不生藥叉羅刹及富單那。迦吒富單那鳩槃茶。毗舍遮等幷諸餓鬼。有形無形有想無想。如是惡處是善男子。若讀若誦若書若寫。若帶若藏諸色供養。劫劫不生貧窮下賤不可樂處。此諸衆生縱其自身不作福業。十方如來所有功德悉與此人。由是得於恒河沙阿僧祇不可說不可說劫。常與諸佛同生一處。無量功德如惡叉聚。同處熏修永無分散。是故能令破戒之人戒根清淨。未得戒者令其得戒。未精進者令得精進。無智慧者令得智慧。不清淨者速得清淨。不持齋戒自成齋戒。阿難是善男子持此呪時。設犯禁戒於未受時。持呪之後衆破戒罪。無問輕重一時銷滅。縱經飮酒食噉五辛種種不淨。一切諸佛菩薩金剛天仙鬼神不將爲過。設著不淨破弊衣服。一行一住悉同清淨。縱不作壇不入道場。亦不行記誦持此呪。還同入壇行道功德。若造五逆無間重罪。及諸比丘比丘尼四棄八棄。誦此呪已如是重業。猶如猛風吹散沙聚。悉皆滅除更無毫髮

阿難若有衆生。從無量無數劫來。所有一切輕重罪障。從前世來未及懺悔。若能讀誦書寫此呪身上帶持。若安住處莊宅園館。如是積業猶湯銷雪。不久皆得悟無生忍

復次阿難若有女人未生男女欲求生者。若能至心憶念斯呪。或能身上帶此悉怛多鉢怛羅者。便生福德智慧男女。求長命者速得長命。欲求果報速圓滿者速得圓滿。身命色力亦復如是。命終之後隨願往生十

提元作地下同持三本俱作於

菩下元無提永無魔事五字

方國土。必定不生邊地下賤。何況雜形。阿難若諸國土州縣聚落饑荒疫癘。或復刀兵賊難鬭諍。兼餘一切厄難之地。寫此神咒安城四門。幷諸支提或脫闍上。令其國土所有衆生奉迎斯咒。禮拜恭敬一心供養。令其人民各各身佩。或各各安所居宅地。一切災厄悉皆銷滅

阿難在在處處國土衆生隨有此咒。天龍歡喜風雨順時。五穀豐殷兆庶安樂。亦復能鎭一切惡星。隨方變怪災障不起。人無橫夭。杻械枷鎖不著其身。晝夜安眠常無惡夢。阿難是娑婆界。有八萬四千災變惡星。二十八大惡星而爲上首。復有八大惡星以爲其主。作種種形出現世時。能生衆生種種災異。有此咒地悉皆銷滅。十二由旬成結界地。諸惡災祥永不能入。是故如來宣示此咒。於未來世保護初學諸修行者入三摩提。身心泰然得大安隱。更無一切諸魔鬼神。及無始來寃橫宿殃。舊業陳債來相惱害。汝及衆中諸有學人。及未來世諸修行者。依我壇場如法持戒。所受戒主逢淸淨僧。持此咒心不生疑悔。是善男子於此父母所生之身。不得心通。十方如來便爲妄語。說是語已會中無量百千金剛一時佛前合掌頂禮而白佛言。如佛所說我當誠心保護如是修菩提者

爾時梵王幷天帝釋四天大王。亦於佛前同時頂禮而白佛言。審有如是修學善人。我當盡心至誠保護。令其一生所作如願。復有無量藥叉大將。諸羅刹王富單那王。鳩槃茶王毗舍遮王。頻那夜迦諸大鬼王及諸鬼帥。亦於佛前合掌頂禮。我亦誓願護持是人。令菩提心速得圓滿。復有無量日月天子。風師雨師雲師雷師幷電伯等。年歲巡官諸星眷屬。亦於會中頂禮佛足而白佛言。我亦保護是修行人。安立道場得無所畏。復有無量山神海神。一切土地水陸空行萬物精祇。幷風神王無色界天。於如來前同時稽首而白佛言。我亦保護是修行人得成菩提永無魔事。爾時八萬四千那由他恒河沙俱胝金剛藏王菩薩。在大會中卽從座起。頂禮佛足而白佛言。世尊如我等輩。所修功業久成菩提。不取涅槃常隨此咒。救護末世修三摩提正

恒同作常　以同作已

修行者。世尊如是修心求正定人。若在道場及餘經行。乃至散心遊戲聚落。我等徒衆常當隨從侍衛此人。縱令魔王大自在天。求其方便終不可得。諸小鬼神去此善人十由旬外。除彼發心樂修禪者。世尊如是惡魔若魔眷屬。欲來侵擾是善人者。我以寶杵殞碎其首猶如微塵。恒令此人所作如願

阿難卽從座起。頂禮佛足而白佛言。我輩愚鈍好爲多聞。於諸漏心未求出離。蒙佛慈誨得正熏修。身心快然獲大饒益。世尊如是修證佛三摩提未到涅槃。云何名爲乾慧之地。四十四心至何漸次得修行目。詣何方所名入地中。云何名爲等覺菩薩。作是語已五體投地。大衆一心佇佛慈音瞪瞢瞻仰

爾時世尊讚阿難言善哉善哉。汝等乃能普爲大衆。及諸末世一切衆生。修三摩提求大乘者。從於凡夫終大涅槃。懸示無上正修行路。汝今諦聽當爲汝說。阿難大衆合掌刳心默然受敎

佛言阿難當知。妙性圓明離諸名相。本來無有世界衆生。因妄有生因生有滅。生滅名妄滅妄名眞。是稱如來無上菩提。及大涅槃二轉依號。阿難汝今欲修眞三摩地。直詣如來大涅槃者。先當識此衆生世界二顚倒因。顚倒不生斯則如來眞三摩地。阿難云何名爲衆生顚倒。阿難由性明心性明圓故。因明發性性妄見生。從畢竟無成究竟有。此有所有非因所因。住所住相了無根本。本此無住建立世界及諸衆生。迷本圓明是生虛妄。妄性無體非有所依。將欲復眞欲眞已非眞眞如性。非眞求復宛成非相。非生非住非心非法。展轉發生生力發明。熏以成業同業相感。因有感業相滅相生。由是故有衆生顚倒

阿難云何名爲世界顚倒。是有所有分段妄生因此界立。非因所因無住所住。遷流不住因此世成。三世四方和合相涉。變化衆生成十二類。是故世界因動有聲因聲有色。因色有香因香有觸。因觸有味因味知法。六亂妄想成業性故。十二區分由此輪轉。是故世間聲香味觸。窮十二變爲一旋復。乘此輪轉顚倒相故。是有世界卵生胎生濕生化生。有色無色有想無想。若非有色若非無色。若非有想若非無想

軟三本俱作煖

阿難由因世界虛妄輪迴動顛倒故.和合氣成八萬四千飛沈亂想.如是故有卵羯邏藍流轉國土.魚鳥龜蛇其類充塞

由因世界雜染輪迴欲顛倒故.和合滋成八萬四千橫豎亂想.如是故有胎遏蒲曇流轉國土.人畜龍仙其類充塞

由因世界執著輪迴趣顛倒故.和合軟成八萬四千飜覆亂想.如是故有濕相蔽尸流轉國土.含蠢蠕動其類充塞

由因世界變易輪迴假顛倒故.和合觸成八萬四千新故亂想.如是故有化相羯南流轉國土.轉蛻飛行其類充塞

由因世界留礙輪迴障顛倒故.和合著成八萬四千精耀亂想.如是故有色相羯南流轉國土.休咎精明其類充塞

由因世界銷散輪迴惑顛倒故.和合暗成八萬四千陰隱亂想.如是故有無色羯南流轉國土.空散銷沈其類充塞

由因世界罔象輪迴影顛倒故.和合憶成八萬四千潛結亂想.如是故有想相羯南流轉國土.神鬼精靈其類充塞

由因世界愚鈍輪迴癡顛倒故.和合頑成八萬四千枯槁亂想.如是故有無想羯南流轉國土.精神化爲土木金石其類充塞

由因世界相待輪迴僞顛倒故.和合染成八萬四千因依亂想.如是故有非有色相成色羯南流轉國土.諸水母等以蝦爲目其類充塞

怨下元有平聲夾註

此陀羅尼明本今以宋元對校之○羅元作囉次同○弊下同無夾註○囉宋作羅○耶下記數元在瓢下○南同作喃下同○寫下夾註誦呪乃至受持十三字同作誦者至此稱某甲受持九字○寫下夾註至此乃至某甲十五字同作至此依前稱某甲受持九字○囉宋元俱作囉○寫下夾註至此乃至某人十字元作至此依前稱名六字

由因世界相引輪廻性顚倒故。和合呪成八萬四千呼召亂想。由是故有非無色相無色羯南流轉國土。呪咀厭生其類充塞

由因世界合妄輪廻罔顚倒故。和合異成八萬四千廻互亂想。如是故有非有想相成想羯南流轉國土彼蒱盧等異質相成其類充塞

由因世界怨害輪廻殺顚倒故。和合怪成八萬四千食父母想。如是故有非無想相無想羯南流轉國土如土梟等附塊爲兒。及破鏡鳥以毒樹果抱爲其子。子成父母皆遭其食其類充塞。是名衆生十二種類

南無薩怛他蘇伽多耶阿羅訶帝三藐三菩陀寫 一 薩怛他佛陀俱胝瑟尼釤 二 南無薩婆勃陀勃地薩跢鞞弊 三 毗迦切 南無薩多南三藐三菩陀俱知南 四 娑舍囉婆迦僧伽喃 五 南無盧雞阿羅漢跢喃 六 南無蘇盧多波那喃 七 南無婆羯唎陀伽彌喃 八 南無盧雞三藐伽跢喃 九 三藐伽波囉底波多那喃 十 南無提婆離瑟赧 十一 南無悉陀耶毗地耶陀囉離瑟赧 十二 舍波奴揭囉訶娑訶娑囉摩他喃 十三 南無跋囉訶摩泥 十四 南無因陀囉耶 十五 南無婆伽婆帝 十六 嚧陀囉耶 十七 烏摩般帝 十八 娑醯夜耶 十九 南無婆伽婆帝 二十 那囉野拏耶 二十一 槃遮摩訶三莫陀囉 二十二 南無悉羯唎多耶 二十三 南無婆伽婆帝 二十四 摩訶迦羅耶 二十五 地唎般刺那伽囉 二十六 毗陀囉波拏迦囉耶 二十七 阿地目帝 二十八 尸摩舍那泥婆悉泥 二十九 摩怛唎伽拏 三十 南無悉羯唎多耶 三十一 南無婆伽婆帝 三十二 多他伽跢俱囉耶 三十三 南無般頭摩俱囉耶 三十四 南無跋闍羅俱囉耶 三十五 南無摩尼俱囉耶 三十六 南無伽闍俱囉耶 三十七 南無婆伽婆帝 三十八 帝唎茶輸囉西那 三十九 波囉訶囉拏囉闍耶 四十 跢他伽多耶 四十一 南無婆伽婆帝 四十二 南無阿彌多婆耶 四十三 哆他伽多耶 四十四 阿囉訶帝 四十五 三藐三菩陀耶 四十六 南無婆伽婆帝 四十七 阿芻鞞耶 四十八 跢他伽多耶 四十九 阿囉訶帝 五十 三藐三菩陀耶 五十一 南無婆伽婆帝 五十二 鞞沙闍耶俱盧吠柱唎耶 五十三 般囉婆囉闍耶 五十四 跢他伽多耶 五十五 南無婆伽婆帝 五十六

三補師毖多五十七薩憐捺囉刺闍耶五十八跢他伽多耶五十九阿囉訶帝六十三藐三菩陀耶六十一南無婆伽婆
帝六十二舍雞野母那曳六十三跢他伽多耶六十四阿囉訶帝六十五三藐三菩陀耶六十六南無婆伽婆帝六十七刺
怛那雞都囉闍耶六十八跢他伽多耶六十九阿囉訶帝七十三藐三菩陀耶七十一帝瓢南無薩羯唎多七十二翳曇
婆伽婆多七十三薩怛他伽都瑟尼釤七十四薩怛多般怛七十五南無阿婆囉視耽七十六般囉帝揚歧囉七十七
薩囉婆部多揭囉訶七十八尼羯囉訶揭迦囉訶尼七十九跋囉毖地耶叱陀儞八十阿迦囉蜜唎柱八十一般唎怛
囉耶儜揭唎八十二薩囉婆槃陀那目叉尼八十三薩囉婆突瑟吒八十四突悉乏般那儞伐囉尼八十五赭都囉失
帝南八十六羯囉訶娑訶薩囉若闍八十七毗多崩娑那羯唎八十八阿瑟吒冰舍帝南八十九那叉剎怛囉若闍九十
波囉薩陀那羯唎九十一阿瑟吒南九十二摩訶揭囉訶若闍九十三毗多崩薩那羯唎九十四薩婆舍都嚧儞婆囉
若闍九十五呼藍突悉乏難遮那舍尼九十六毖沙舍悉怛囉九十七阿吉尼烏陀迦囉若闍九十八阿般囉視多具
囉九十九摩訶般囉戰持一百摩訶疊多一百一摩訶帝闍二摩訶稅多闍婆囉三摩訶跋囉槃陀囉婆悉儞四阿
唎耶多囉五毗唎俱知一百六誓婆毗闍耶七跋闍囉摩禮底八毗舍嚧多九勃騰罔迦十跋闍囉制喝那阿遮
一百十一摩囉制婆般囉質多十二跋闍囉擅持十三毗舍囉遮十四扇多舍鞞提婆補視多十五蘇摩嚧波十六摩訶稅多
十七阿唎耶多囉十八摩訶婆囉阿般囉十九跋闍囉商羯囉制婆二十跋闍囉俱摩唎一百二十一俱藍陀唎二十二跋闍
囉喝薩多遮二十三毗地耶乾遮那摩唎迦二十四啒蘇母婆羯囉跢那二十五鞞嚧遮那俱唎耶二十六夜囉菟瑟
尼釤二十七毗折藍婆摩尼遮二十八跋闍囉迦那迦波囉婆二十九嚧闍那跋闍囉頓稚遮一百三十稅多遮迦摩囉
一百三十一剎奢尸波囉婆三十二翳帝夷帝三十三母陀囉羯拏三十四娑鞞囉懺三十五掘梵都三十六印兔那麼麼寫一百三十
七〇誦呪者至此句稱弟子某甲受持烏絣三十八唎瑟揭拏三十九般剌舍悉多四十薩怛他伽都瑟尼釤一百四十一虎絣四十二都嚧雍一百四十
三瞻婆那四十四虎絣四十五都嚧雍四十六悉耽婆那四十七虎絣四十八都嚧雍四十九波羅瑟地耶三般叉拏羯囉

五十虎𤙖一百五十一都嚧雍五十二薩婆藥叉喝囉剎娑五十三揭囉訶若闍五十四毘騰崩薩那羯囉五十五虎𤙖五十六都嚧雍五十七者都囉尸底南五十八揭囉訶娑訶薩囉南五十九毘騰崩薩那囉六十虎𤙖一百六十一都嚧雍六十二囉叉六十三婆伽梵六十四薩怛他伽都瑟尼釤六十五波囉點闍吉唎六十六摩訶娑訶薩囉六十七勃樹娑訶薩囉室唎沙六十八俱知娑訶薩泥帝㘑六十九阿弊提視婆唎多七十吒吒甖迦一百七十一摩訶跋闍嚧陀囉七十二帝唎菩婆那七十三曼茶囉七十四烏𤙖七十五莎悉帝薄婆都七十六麼麼七十七印兔那麼麼寫七十八○至此句準前稱名若俗人稱弟子某甲囉闍婆夜七十九主囉跋夜八十阿祇尼婆夜一百八十一烏陀迦婆夜八十二毘沙婆夜八十三舍薩多囉婆夜八十四婆囉斫羯囉婆夜八十五突瑟叉婆夜八十六阿舍儞婆夜八十七阿迦囉蜜唎柱婆夜八十八陀囉尼部彌劍波伽波陀婆夜八十九烏囉迦婆多婆夜九十剌闍壇茶婆夜一百九十一那伽婆夜九十二毘條怛婆夜九十三蘇波囉拏婆夜九十四藥叉揭囉訶九十五囉叉私揭囉訶九十六畢唎多揭囉訶九十七毘舍遮揭囉訶九十八部多揭囉訶九十九鳩槃茶揭囉訶二百補丹那揭囉訶二百一迦吒補丹那揭囉訶二悉乾度揭囉訶三阿播悉摩囉揭囉訶四烏檀摩陀揭囉訶五車夜揭囉訶六醯唎婆帝揭囉訶七社多訶唎南八揭婆訶唎南九嚧地囉訶唎南十忙娑訶唎南二百十一謎陀訶陀南十二摩闍訶唎南十三闍多訶唎女十四視比多訶唎南十五毘多訶唎南十六婆多訶唎南十七阿輸遮訶唎女十八質多訶唎女十九帝釤薩鞞釤二十薩婆揭囉訶南二百二十一毘陀耶闍嗔陀夜彌二十二雞囉夜彌二十三波唎跋囉者迦訖唎擔二十四毘陀夜闍嗔陀夜彌二十五鷄囉夜彌二十六茶演尼訖唎擔二十七毘陀夜闍嗔陀夜彌二十八雞囉夜彌二十九摩訶般輸般怛夜三十嚧陀囉訖唎擔二百三十一毘陀夜闍嗔陀夜彌三十二雞囉夜彌三十三那囉夜拏訖唎擔三十四毘陀夜闍嗔陀夜彌三十五雞囉夜彌三十六怛埵伽嚧茶西訖唎擔三十七毘陀夜闍嗔陀夜彌三十八雞囉夜彌三十九摩訶迦囉摩怛唎伽拏訖唎擔四十毘陀夜闍嗔陀夜彌二百四十一雞囉夜彌四十二迦波唎迦訖唎擔四十三毘陀夜闍嗔陀夜彌四十四雞囉夜彌四十五闍耶羯囉摩度羯囉四十六薩婆

囉他婆達那訖唎擔四十七 毗陀夜闍瞋陀夜彌四十八 雞囉夜彌四十九 赭咄囉婆耆儞訖唎擔五十 毗陀夜闍瞋陀夜彌五十一 雞囉夜彌五十二 毗唎羊訖唎知五十三 難陀雞沙囉伽拏般帝五十四 索醯夜訖唎擔五十五 毗陀夜闍瞋陀夜彌五十六 雞囉夜彌五十七 那揭那舍囉婆拏訖唎擔五十八 毗陀夜闍瞋陀夜彌五十九 雞囉夜彌六十 阿羅漢訖唎擔毗陀夜闍瞋陀夜彌六十一 雞囉夜彌六十二 毗多囉伽訖唎擔六十三 毗陀夜闍瞋陀夜彌六十四 鷄囉夜彌跋闍囉波儞六十五 具醯夜具醯夜六十六 迦地般帝訖唎擔六十七 毗陀夜闍瞋陀夜彌六十八 雞囉夜彌六十九 囉叉罔七十 婆伽梵七十一 印兎那麼麼寫七十二〇至此依前稱弟子名 婆伽梵七十三 薩怛多般怛囉七十四 南無粹都帝七十五 阿悉多那囉剌迦七十六 波囉婆悉普吒七十七 毗迦薩怛多鉢帝唎七十八 什佛囉什佛囉七十九 陀囉陀囉八十 頻陀囉頻陀囉瞋陀瞋陀八十一 虎𤙖八十二 虎𤙖八十三 泮吒八十四 泮吒泮吒泮吒泮吒八十五 娑訶八十六 醯醯泮八十七 阿牟迦耶泮八十八 阿波囉提訶多泮八十九 婆囉波囉陀泮九十 阿素囉毗陀囉波迦泮九十一 薩婆提鞞弊泮九十二 薩婆那伽弊泮九十三 薩婆藥叉弊泮九十四 薩婆乾闥婆弊泮九十五 薩婆補丹那弊泮九十六 迦吒補丹那弊泮九十七 薩婆突狼枳帝弊泮九十八 薩婆突澀比㗚訖瑟帝弊泮九十九 薩婆什婆唎弊泮一百 薩婆阿播悉摩㗚弊泮一百一 薩婆舍囉婆拏弊泮二 薩婆地帝雞弊泮三 薩婆怛摩陀繼弊泮四 薩婆毗陀耶囉誓遮㗚弊泮五 闍夜羯囉摩度羯囉六 薩婆囉他娑陀雞弊泮七 毗地夜遮唎弊泮八 者都囉縛耆儞弊唎九 跋闍囉俱摩唎十 毗陀夜囉誓弊泮一百十一 摩訶波囉丁羊乂耆唎弊泮十二 跋闍囉商羯囉夜十三 波囉丈耆囉闍耶泮十四 摩訶迦囉夜十五 摩訶末怛唎迦拏十六 南無娑羯唎多夜泮十七 毖瑟拏婢曳泮十八 勃囉訶牟尼曳泮十九 阿耆尼曳泮二十 摩訶羯唎曳泮唎泮一百二十一 羯囉檀遲曳泮二十二 蔑怛唎曳泮二十三 嘮怛唎曳泮二十四 遮文茶曳泮二十五 羯邏囉怛唎曳泮二十六 迦般唎曳泮二十七 阿地目質多迦尸摩舍那二十八 婆私儞曳泮二十九 演吉質三十 薩埵婆寫一百三十一 麼麼印兎那麼麼寫三十二〇至此句依前稱弟子某人 突瑟吒質多三十三 阿末怛唎質多三十四

烏闍訶囉三十五 伽婆訶囉三十六 嚧地囉訶囉三十七 婆娑訶囉三十八 摩闍訶囉三十九 闍多訶囉四十 視毖多訶囉三百四十一 跋畧夜訶囉四十二 乾陀訶囉四十三 布史波訶囉四十四 頗囉訶囉四十五 婆寫訶囉四十六 般波質多四十七 突瑟吒質多四十八 嘮陀囉質多四十九 藥叉揭囉訶五十 囉刹娑揭囉訶三百五十一 閉隸多揭囉訶五十二 毗舍揭囉訶五十三 部多揭囉訶五十四 鳩槃茶揭囉訶五十五 悉乾陀揭囉訶五十六 烏怛摩陀揭囉訶五十七 車夜揭囉訶五十八 阿播薩摩囉揭囉訶五十九 宅袪革茶耆尼揭囉訶六十 唎佛帝揭囉訶三百六十一 闍彌迦揭囉訶六十二 舍俱尼揭囉訶六十三 姥陀囉難地迦揭囉訶六十四 阿藍婆揭囉訶六十五 乾度波尼揭囉訶六十六 什伐囉堙迦醯迦六十七 墜帝藥迦六十八 怛隸帝藥迦六十九 者突託迦七十 呢提什伐囉毖釤摩什伐囉三百七十一 薄底迦七十二 鼻底迦七十三 室隸瑟蜜迦七十四 娑儞般帝迦七十五 薩婆什伐囉七十六 室嚧吉帝七十七 末陀鞞達嚧制劒七十八 阿綺嚧鉗七十九 目佉嚧鉗八十 羯唎突嚧鉗三百八十一 揭囉訶揭藍八十二 羯拏輸藍八十三 憚多輸藍八十四 迄唎夜輸藍八十五 末麼輸藍八十六 跋唎室婆輸藍八十七 毖栗瑟吒輸藍八十八 烏陀囉輸藍八十九 羯知輸藍九十 跋悉帝輸藍三百九十一 鄔嚧輸藍九十二 常伽輸藍九十三 喝悉多輸藍九十四 跋陀輸藍九十五 娑房盎伽般囉丈伽輸藍九十六 部多毖路茶九十七 茶耆尼什婆囉九十八 陀突嚧迦建咄嚧吉知婆路多毗九十九 薩般嚧訶凌伽四百 輸沙怛囉娑那羯囉四百一 毗沙喻迦二 阿耆尼烏陀迦三 末囉鞞囉建路囉四 阿迦囉蜜唎咄怛斂部迦五 地栗刺吒六 毖唎瑟質迦七 薩婆那俱囉八 肆引伽弊揭囉唎藥叉怛囉芻九 末囉視吠帝釤娑鞞釤十 悉怛多鉢怛囉四百十一 摩訶跋闍嚧瑟尼釤十二 摩訶般賴丈耆藍十三 夜波突陀舍喻闍那十四 辮怛隸拏十五 毗陀耶槃曇迦嚧彌十六 帝殊槃曇迦嚧彌十七 般囉毗陀槃曇迦嚧彌十八 哆姪他十九 唵二十 阿那隸四百二十一 毗舍提二十二 鞞囉跋闍囉陀唎二十三 槃陀槃陀儞二十四 跋闍囉謗尼泮二十五 虎𤙖都嚧甕泮二十六 莎婆訶二十七

大佛頂萬行首楞嚴經卷第七

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經卷第八

一名中印度那爛陀大道場經於灌頂部錄出別行　〔麗綵〕〔宋染〕〔元染〕〔明羔〕

唐天竺沙門般剌蜜帝譯

阿難如是衆生一一類中。亦各各具十二顛倒。猶如揑目亂華發生。顚倒妙圓眞淨明心。具足如斯虛妄亂想。汝今修證佛三摩提。於是本因元所亂想。立三漸次方得除滅。如淨器中除去毒蜜。以諸湯水幷雜灰香。洗滌其器後貯甘露。云何名爲三種漸次。一者修習除其助因。二者眞修刳其正性。三者增進違其現業

云何助因。阿難如是世界十二類生。不能自全依四食住。所謂段食觸食思食識食。是故佛說一切衆生皆依食住。阿難一切衆生。食甘故生。食毒故死。是諸衆生求三摩提。當斷世間五種辛菜。是五種辛。熟食發婬生啖增恚。如是世界食辛之人。縱能宣說十二部經。十方天仙嫌其臭穢。咸皆遠離。諸餓鬼等因彼食次。舐其脣吻。常與鬼住。福德日銷。長無利益。是食辛人修三摩地。菩薩天仙十方善神不來守護。大力魔王得其方便。現作佛身來爲說法。非毀禁戒讚婬怒癡。命終自爲魔王眷屬。受魔福盡墮無間獄。阿難修菩提者永斷五辛。是則名爲第一增進修行漸次。云何正性

阿難如是衆生入三摩地。要先嚴持清淨戒律。永斷婬心不飡酒肉。以火淨食無啖生氣。阿難是修行人若不斷婬及與殺生。出三界者無有是處。當觀婬欲猶如毒蛇。如見怨賊。先持聲聞四棄八棄。執身不動。後行菩薩清淨律儀。執心不起。禁戒成就。則於世間永無相生相殺之業。偷劫不行無相負累。亦於世間不還宿債。是清淨人修三摩地。父母肉身不須天眼。自然觀見十方世界。覩佛聞法親奉聖旨。得大神通遊十方界。

明元作室

揮三本俱作暉

宿命淸淨得無艱險.是則名爲第二增進修行漸次

云何現業.阿難如是淸淨持禁戒人心無貪婬.於外六塵不多流逸.因不流逸旋元自歸.塵旣不緣根無所偶.反流全一六用不行.十方國土皎然淸淨.譬如琉璃內懸明月.身心快然妙圓平等獲大安隱.一切如來密圓淨妙皆現其中.是人卽獲無生法忍.從是漸修隨所發行安立聖位.是則名爲第三增進修行漸次

阿難是善男子欲愛乾枯根境不偶.現前殘質不復續生.執心虛明純是智慧.慧性明圓瑩十方界.乾有其慧名乾慧地.欲習初乾未與如來法流水接.卽以此心中中流入圓妙開敷從眞妙圓.重發眞妙妙信常住.一切妄想滅盡無餘.中道純眞名信心住.眞信明了一切圓通.陰處界三不能爲礙.如是乃至過去未來.無數劫中捨身受身.一切習氣皆現在前.是善男子皆能憶念.得無遺忘名念心住.妙圓純眞眞精發化.無始習氣通一精明.唯以精明進趣眞淨名精進心.心精現前純以智慧名慧心住.執持智明周徧寂湛.寂妙常凝名定心住.定光發明明性深入.唯進無退名不退心.心進安然保持不失.十方如來氣分交接名護法心.覺明保持能以妙力.廻佛慈光向佛安住.猶如雙鏡光明相對.其中妙影重重相入名廻向心.心光密廻獲佛常凝.無上妙淨安住無爲.得無遺失名戒心住.住戒自在能遊十方.所去隨願名願心住

阿難是善男子以眞方便發此十心.心精發揮十用成入.圓成一心名發心住.心中發明如淨瑠璃內現精金.以前妙心履以成地名治地住.心地涉知俱得明了.遊履十方得無留礙名修行住.行與佛同受佛氣.如中陰身自求父母.陰信冥通入如來種名生貴住.旣遊道胎親奉覺胤.如胎已成人相不缺名方便具足住.容貌如佛心相亦同名正心住.身心合成日益增長名不退住.十身靈相一時具足名童眞住.形成出胎親爲佛子名法王子住.表以成人如國大王.以諸國事分委太子.彼剎利王世子長成.陳列灌頂名灌頂住

阿難是善男子成佛子已.具足無量如來妙德.十方隨順名歡喜行.善能利益一切衆生名饒益行.自覺覺

除明作諸

名下三本俱有眞字

他得無違拒名無瞋恨行。種類出生窮未來際。三世平等十方通達名無盡行。一切合同種種法門。得無差誤名離癡亂行。則於同中顯現群異。一一異相各各見同名善現行。如是乃至十方虛空滿足微塵。一一塵中現十方界。現塵現界不相留礙名無著行。種種現前咸是第一波羅蜜多名尊重行。如是圓融能成十方諸佛軌則名善法行。一一皆是清淨無漏。一眞無爲性本然故名眞實行

阿難。是善男子滿足神通成佛事已。純潔精眞遠諸留患。當度衆生滅除度相。迴無爲心向涅槃路。名救護一切衆生離衆生相迴向。壞其可壞遠離諸離。名不壞迴向。本覺湛然覺齊佛覺。名等一切佛迴向。精眞發明地如佛地。名至一切處迴向。世界如來互相涉入得無罣礙。名無盡功德藏迴向。於同佛地地中各各生清淨因。依因發揮取涅槃道。名隨順平等善根迴向。眞根既成十方衆生皆我本性。性圓成就不失衆生。名隨順等觀一切衆生迴向。卽一切法離一切相。唯卽與離二無所著。名如相迴向。眞得所如十方無礙。名無縛解脫迴向。性德圓成法界量滅。名法界無量迴向。阿難是善男子盡是清淨四十一心。次成四種妙圓加行。卽以佛覺用爲己心。若出未出猶如鑽火。欲然其木名爲煖地。又以己心成佛所履。若依非依如登高山身入虛空下有微礙。名爲頂地。心佛二同善得中道。如忍事人非懷非出。名爲忍地。數量銷滅迷覺中道。二無所目名世第一地

阿難是善男子。於大菩提善得通達。覺通如來盡佛境界。名歡喜地。異性入同同性亦滅。名離垢地。淨極明生名發光地。明極覺滿名焰慧地。一切同異所不能至名難勝地。無爲眞如性淨明露名現前地。盡眞如際名遠行地。一眞如心名不動地。發眞如用名善慧地

阿難是諸菩薩從此已往。修習畢功功德圓滿。亦目此地名修習位。慈陰妙雲覆涅槃海名法雲地。如來逆流如是菩薩順行而至覺際入交名爲等覺。阿難從乾慧心至等覺已。是覺始獲金剛心中初乾慧地。如是

囉明作羅下同

意三本俱作心

重重單複十二。方盡妙覺成無上道。是種種地皆以金剛。觀察如幻十種深喻。奢摩他中。用諸如來毗婆舍那。清淨修證漸次深入。阿難如是皆以三增進故。善能成就五十五位眞菩提路。作是觀者名爲正觀。若他觀者名爲邪觀

爾時文殊師利法王子。在大衆中卽從座起。頂禮佛足而白佛言。當何名是經。我及衆生云何奉持。佛告文殊師利。是經名大佛頂悉怛多般怛囉無上寶印十方如來清淨海眼。亦名救護親因度脫阿難。及此會中性比丘尼。得菩提心入徧知海。亦名如來密因修證了義。亦名大方廣妙蓮華王十方佛母陀羅尼呪。亦名灌頂章句諸菩薩萬行首楞嚴。汝當奉持

說是語已。卽時阿難及諸大衆。得蒙如來開示密印般怛囉義。兼聞此經了義名目。頓悟禪那修進聖位。增上妙理心慮虛凝。斷除三界修心六品微細煩惱。卽從座起頂禮佛足。合掌恭敬而白佛言。大威德世尊慈音無遮。善開衆生微細沈惑。令我今日身意快然得大饒益。世尊若此妙明眞淨妙心本來徧圓。如是乃至大地草木。蠕動含靈本元眞如。卽是如來成佛眞體。佛體眞實。云何復有地獄餓鬼畜生脩羅人天等道。世尊此道爲復本來自有。爲是衆生妄習生起。世尊如寶蓮香比丘尼。持菩薩戒私行婬欲。妄言行婬非殺非偸無有業報。發是語已先於女根生大猛火。後於節節猛火燒然墮無間獄。瑠璃大王善星比丘。瑠璃爲誅瞿曇族姓。善星妄說一切法空。生身陷入阿鼻地獄。此諸地獄爲有定處。爲復自然。彼彼發業各各私受。惟垂大慈發開童蒙。令諸一切持戒衆生。聞決定義歡喜頂戴謹潔無犯

佛告阿難快哉此問。令諸衆生不入邪見。汝今諦聽當爲汝說。阿難一切衆生實本眞淨。因彼妄見有妄習生。因此分開內分外分。阿難內分卽是衆生分內。因諸愛染發起妄情。情積不休能生愛水。是故衆生心憶珍羞口中水出。心憶前人或憐或恨目中淚盈。貪求財寶心發愛涎擧體光潤。心著行婬男女二根自然流

磨三六俱作摩

液。阿難諸愛雖別流結是同。潤溼不昇自然從墜此名內分

阿難外分卽是衆生分外。因諸渴仰發明虛想。想積不休能生勝氣。是故衆生心持禁戒擧身輕淸。心持呪印顧盼雄毅。心欲生天夢想飛擧。心存佛國聖境冥現。事善知識自輕身命。阿難諸想雖別輕擧是同。飛動不沈自然超越。此名外分

阿難一切世間生死相續。生從順習死從變流。臨命終時未捨煖觸。一生善惡俱時頓現。死逆生順二習相交。純想卽飛必生天上。若飛心中兼福兼慧及與淨願。自然心開見十方佛。一切淨土隨願往生。情少想多輕擧非遠。卽爲飛仙大力鬼王。飛行夜叉地行羅刹。遊於四天所去無礙。其中若有善願善心護持我法。或護禁戒隨持戒人。或護神呪隨持呪者。或護禪定保綏法忍。是等親住如來座下。情想均等不飛不墜生於人間。想明斯聰情幽斯鈍。情多想少流入橫生。重爲毛群輕爲羽族。七情三想沈下水輪生於火際。受氣猛火身爲餓鬼。常被焚燒水能害己。無食無飲經百千劫。九情一想下洞火輪。身入風火二交過地。輕生有間重生無間二種地獄。純情卽沈入阿鼻獄。若沈心中有謗大乘。毀佛禁戒誑妄說法。虛貪信施濫膺恭敬。五逆十重。更生十方阿鼻地獄。循造惡業雖則自招。衆同分中兼有元地

阿難此等皆是彼諸衆生自業所感。造十習因受六交報。云何十因。阿難一者婬習交接。發於相磨研磨不休。如是故有大猛火光於中發動。如人以手自相磨觸煖相現前。二習相然故有鐵牀銅柱諸事。是故十方一切如來。色目行婬同名欲火。菩薩見欲如避火坑。二者貪習交計。發於相吸吸攬不止。如是故有積寒堅氷於中凍冽。如人以口吸縮風氣有冷觸生。二習相陵故有吒吒波波囉囉青赤白蓮寒氷等事。是故十方一切如來。色目多求同名貪水。菩薩見貪如避瘴海

三者慢習交陵。發於相恃馳流不息。如是故有騰逸奔波積波爲水。如人口舌自相綿味因而水發。二習相

融元作鎔　橛宋作桎　誷宋明俱作罔○次誷三本俱作罔　于元作於○撲同作幞　戒禁作倒○返元明俱作反　押元作壓　影下元明俱有二習相陳四字

鼓故有血河灰河熱沙毒海融銅灌呑諸事．是故十方一切如來．色目我慢名飲癡水．菩薩見慢如避巨溺

四者瞋習交衝．發於相忤忤結不息．心熱發火鑄氣爲金．如是故有刀山鐵橛劍樹劍輪斧鉞鎗鋸．如人銜寃殺氣飛動．二習相擊故有宮割斬斫剉刺槌擊諸事．是故十方一切如來．色目瞋恚名利刀劍．菩薩見瞋如避誅戮

五者詐習交誘．發於相調引起不住．如是故有繩木絞校．如水浸田草木生長．二習相延故有杻械枷鎖鞭杖檛棒諸事．是故十方一切如來．色目姦僞同名讒賊．菩薩見詐如畏豺狼

六者誑習交欺．發於相誷誣誷不止．飛心造姦如是故有塵土屎尿穢汙不淨．如塵隨風各無所見．二習相加故有沒溺騰擲飛墜漂淪諸事．是故十方一切如來．色目欺誑同名劫殺．菩薩見誑如踐蛇虺

七者怨習交嫌．發于銜恨．如是故有飛石投礰匣貯車檻甕盛囊撲．如陰毒入懷抱畜惡．二習相呑故有投擲擒捉擊射拋撮諸事．是故十方一切如來．色目怨家名違害鬼．菩薩見怨如飲鴆酒

八者見習交明．如薩迦耶見戒禁取邪悟諸業．發於違拒出生相返．如是故有王使主吏證執文藉．如行路人來往相見．二習相交故有勘問權詐考訊推鞫察訪披究照明善惡童子手執文簿辭辯諸事．是故十方一切如來．色目惡見同名見坑．菩薩見諸虛妄徧執如入毒壑

九者枉習交加．發於誣謗．如是故有合山合石碾磑耕磨．如讒賊人逼枉良善．二習相排故有押捺搥按蹙漉衡度諸事．是故十方一切如來．色目怨謗同名讒虎．菩薩見枉如遭霹靂

十者訟習交諠．發於藏覆．如是故有鑒見照燭．如於日中不能藏影．故有惡友業鏡火球披露宿業對驗諸事．是故十方一切如來．色目覆藏同名陰賊．菩薩觀覆如戴高山履於巨海．云何六報．阿難．一切衆生六識造業．所招惡報從六根出．云何惡報從六根出．一者見報招引惡果．此見業交則臨終時．先見猛火滿十方

火下元有燒見能爲熱砂熱灰八字

糞三本俱作糞

涌同作踴

炎同作燄

雨元作雨

槍三本俱作鎗

界。亡者神識飛墜乘煙。入無間獄發明二相
一者明見。則能徧見種種惡物生無量畏。二者暗見。寂然不見生無量恐。如是見火。燒聽能爲鑊湯洋銅。燒息能爲黑煙紫燄。燒味能爲燋丸鐵糜。燒觸能爲熱灰爐炭。燒心能生星火迸灑煽鼓空界
二者聞報招引惡果。此聞業交則臨終時。先見波濤沒溺天地。亡者神識降注乘流。入無間獄發明二相。一者開聽。聽種種鬧精神愁亂。二者閉聽。寂無所聞幽魄沈沒。如是聞波。注聞則能爲責爲詰。注見則能爲雷爲吼爲惡毒氣。注息則能爲雨爲霧。灑諸毒蟲周滿身體。注味則能爲膿爲血種種雜穢。注觸則能爲畜爲鬼爲糞爲尿。注意則能爲電爲雹摧碎心魄
三者齅報招引惡果。此齅業交則臨終時。先見毒氣充塞遠近。亡者神識從地涌出。入無間獄發明二相。一者通聞。被諸惡氣熏極心擾。二者塞聞。氣掩不通悶絕於地。如是齅氣。衝息則能爲質爲履。衝見則能爲火爲炬。衝聽則能爲沒爲溺爲洋爲沸。衝味則能爲餒爲爽。衝觸則能爲綻爲爛爲大肉山。有百千眼無量咂食。衝思則能爲灰爲瘴。爲飛砂礰擊碎身體
四者味報招引惡果。此味業交則臨終時。先見鐵網猛炎熾烈周覆世界。亡者神識下透挂網倒懸其頭。入無間獄發明二相。一者吸氣。結成寒氷凍裂身肉。二者吐氣。飛爲猛火燋爛骨髓。如是嘗味。歷嘗則能爲承爲忍。歷見則能爲然金石。歷聽則能爲利兵刀。歷息則能爲大鐵籠彌覆國土。歷觸則能爲弓爲箭爲弩爲射。歷思則能爲飛熱鐵從空雨下
五者觸報招引惡果。此觸業交則臨終時。先見大山四面來合無復出路。亡者神識見大鐵城。火蛇火狗虎狼師子。牛頭獄卒馬頭羅剎。手執槍矟驅入城門。向無間獄發明二相。一者合觸。合山逼體骨肉血潰。二者離觸。刀劍觸身心肝屠裂。如是合觸。歷觸則能爲道爲觀爲廳爲案。歷見則能爲燒爲爇。歷聽則能爲撞爲

擊爲㓷爲射.歷息則能爲括爲袋爲拷爲縛.歷嘗則能爲耕爲鉗爲斬爲截.歷思則能爲墜爲飛爲煎爲炙
六者思報.招引惡果.此思業交則臨終時.先見惡風吹壞國土.亡者神識被吹上空旋落乘風.墮無間獄發
明二相.一者不覺.迷極則荒奔走不息.二者不迷.覺知則苦無量煎燒痛深難忍.如是邪思.結思則能爲方
爲所.結見則能爲鑒爲證.結聽則能爲大合石.爲氷爲霜爲土爲霧.結息則能爲大火車火船火檻.結嘗則
能爲大叫喚爲悔爲泣.結觸則能爲大爲小.爲一日中萬生萬死爲偃爲仰

阿難是名地獄十因六果.皆是衆生迷妄所造.若諸衆生惡業圓造.入阿鼻獄受無量苦經無量劫.六根各
造及彼所作兼境兼根.是人則入八無間獄.身口意三作殺盜婬.是人則入十八地獄.三業不兼中間或爲
一殺一盜.是人則入三十六地獄.見見一根單犯一業.是人則入一百八地獄.由是衆生別作別造.於世界
中入同分地.妄想發生非本來有

復次阿難是諸衆生非破律儀.犯菩薩戒毀佛涅槃.諸餘雜業歷劫燒然.後還罪畢受諸鬼形.若於本因.貪
物爲罪是人罪畢.遇物成形名爲怪鬼.貪色爲罪是人罪畢.遇風成形名爲魃鬼.貪惑爲罪是人罪畢.遇畜
成形名爲魅鬼.貪恨爲罪是人罪畢.遇蟲成形名蠱毒鬼.貪憶爲罪是人罪畢.遇衰成所名爲癘鬼.貪傲爲
罪是人罪畢.遇氣成形名爲餓鬼.貪罔爲罪是人罪畢.遇幽爲形名爲魘鬼.貪明爲罪是人罪畢.遇精爲形
名魍魎鬼.貪成爲罪是人罪畢.遇明爲形名役使鬼.貪黨爲罪是人罪畢.遇人爲形名傳送鬼.阿難是人皆
以純情墜落.業火燒乾上出爲鬼.此等皆是自妄想業之所招引.若悟菩提則妙圓明本無所有

復次阿難鬼業既盡.則情與想二俱成空.方於世間.與元負人怨對相值.身爲畜生酬其宿債.物怪之鬼物
銷報盡.生於世間多爲梟類.風魃之鬼風銷報盡.生於世間多爲咎徵一切異類.畜魅之鬼畜死報盡.生於
世間多爲狐類.蟲蠱之鬼蠱滅報盡.生於世間多爲毒類.衰癘之鬼衰窮報盡.生於世間多爲蛔類.受氣之

㓷明作㓷　拷三本俱作考
圓同作同
罔元作誷○魘宋作厭
生同作主
蠱三本俱作蠱

於三本俱作爲
妄慮同倒
返元明俱作反
於元作其
仙種元明俱倒

鬼氣銷報盡．生於世間多爲食類．綿幽之鬼幽銷報盡．生於世間多爲服類．和精之鬼和銷報盡．生於世間多爲應類．明靈之鬼明滅報盡．生於世間多爲休徵一切諸類．依人之鬼人亡報盡．生於世間多於循類．阿難是等皆以業火乾枯．酬其宿債傍爲畜生．此等亦皆自虛妄業之所招引．若悟菩提．則此妄緣本無所有．如汝所言寶蓮香等．及瑠璃王善星比丘．如是惡業本自發明．非從天降．亦非地出．亦非人與．自妄所招還自來受．菩提心中皆爲浮虛妄想凝結

復次阿難從是畜生酬償先債．若彼酬者分越所酬．此等衆生還復爲人返徵其剩．如彼有力兼有福德．則於人中不捨人身酬還彼力．若無福者還爲畜生償彼餘直．阿難當知若用錢物．或役其力償足自停．如於中間殺彼身命．或食其肉．如是乃至經微塵劫．相食相誅猶如轉輪．互爲高下無有休息．除奢摩他及佛出世不可停寢．汝今應知彼梟倫者酬足復形．生人道中參合頑類．彼咎徵者酬足復形．生人道中參合愚類．彼狐倫者酬足復形．生人道中參於佷類．彼毒倫者酬足復形．生人道中參合庸類．彼蛔倫者酬足復形．生人道中參合微類．彼食倫者酬足復形．生人道中參合柔類．彼服倫者酬足復形．生人道中參合勞類．彼應倫者酬足復形．生人道中參於文類．彼休徵者酬足復形．生人道中參合明類．彼諸循倫酬足復形．生人道中參於達類．阿難是等皆以宿債畢酬復形人道．皆無始來業計顚倒相生相殺．不遇如來不聞正法．於塵勞中法爾輪轉．此輩名爲可憐愍者

阿難復有從人不依正覺修三摩地．別修妄念．存想固形遊於山林．人不及處有十仙種．阿難彼諸衆生．堅固服餌而不休息．食道圓成名地行仙．堅固草木而不休息．藥道圓成名飛行仙．堅固金石而不休息．化道圓成名遊行仙．堅固動止而不休息．氣精圓成名空行仙．堅固津液而不休息．潤德圓成名天行仙．堅固精色而不休息．吸粹圓成名通行仙．堅固呪禁而不休息．術法圓成名道行仙．堅固思念而不休息．思憶圓成

名照行仙。堅固交遘而不休息。感應圓成名精行仙。堅固變化而不休息。覺悟圓成名絕行仙。阿難是等皆於人中鍊心不循正覺。別得生理壽千萬歲。休止深山或大海島絕於人境。斯亦輪廻妄想流轉不修三昧。報盡還來散入諸趣

阿難諸世間人不求常住。未能捨諸妻妾恩愛。於邪婬中心不流逸澄瑩生明。命終之後鄰於日月。如是一類名四天王天。於己妻房婬愛微薄。於淨居時不得全味。命終之後超日月明居人間頂。如是一類名忉利天。逢欲暫交去無思憶。於人間世動少靜多。命終之後於虛空中朗然安住。日月光明上照不及。是諸人等自有光明。如是一類名須燄摩天。一切時靜。有應觸來未能違戾。命終之後上升精微。不接下界諸人天境。乃至劫壞三災不及。如是一類名兜率陀天。我無欲心應汝行事。於橫陳時味如嚼蠟。命終之後生越化地。如是一類名樂變化天。無世間心同世行事。於行事交了然超越。命終之後徧能出超化無化境。如是一類名他化自在天。阿難如是六天。形雖出動心跡尙交。自此已還名爲欲界

感宋作惑

循三本俱作修

不下宋無得字

世元作事

自下宋無此已還三字

大佛頂萬行首楞嚴經卷第八

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經

卷第九

一名中印度那蘭陀大道場經於灌頂部錄出別行　〔麗絲〕〔宋染〕〔元染〕〔明羔〕

唐天竺沙門般剌蜜帝譯

慾三本俱作欲

懸同作懸

次復同割

阿難世間一切所修心人。不假禪那無有智慧。但能執身不行婬慾。若行若坐想念俱無。愛染不生無留欲界。是人應念身爲梵侶。如是一類名梵衆天。欲習既除離欲心現。於諸律儀愛樂隨順。是人應時能行梵德。如是一類名梵輔天。身心妙圓威儀不缺。清淨禁戒加以明悟。是人應時能統梵衆爲大梵王。如是一類名大梵天。阿難此三勝流。一切苦惱所不能逼。雖非正修眞三摩地。清淨心中諸漏不動。名爲初禪

阿難其次梵天。統攝梵人圓滿梵行。澄心不動寂湛生光。如是一類名少光天。光光相然照耀無盡。映十方界徧成瑠璃。如是一類名無量光天。吸持圓光成就教體。發化清淨應用無盡。如是一類名光音天。阿難此三勝流。一切憂懸所不能逼。雖非正修眞三摩地。清淨心中麤漏已伏。名爲二禪

阿難如是天人。圓光成音披音露妙。發成精行通寂滅樂。如是一類名少淨天。淨空現前引發無際。身心輕安成寂滅樂。如是一類名無量淨天。世界身心一切圓淨。淨德成就勝託現前歸寂滅樂。如是一類名徧淨天。阿難此三勝流具大隨順。身心安隱得無量樂。雖非正得眞三摩地。安隱心中歡喜畢具。名爲三禪

阿難次復天人。不逼身心苦因已盡。樂非常住久必壞生。苦樂二心俱時頓捨。麤重相滅淨福性生。如是一類名福生天。捨心圓融勝解清淨。福無遮中得妙隨順。窮未來際。如是一類名福愛天。阿難從是天中有二岐路。若於先心無量淨光。福德圓明修證而住。如是一類名廣果天。若於先心雙厭苦樂。精研捨心相續不

斷。圓窮捨道身心俱滅。心慮灰凝經五百劫。是人既以生滅爲因。不能發明不生滅性。初半劫滅後半劫生。如是一類名無想天。阿難此四勝流一切世間諸苦樂境所不能動。雖非無爲眞不動地。有所得心功用純熟名爲四禪

阿難此中復有五不還天。於下界中九品習氣俱時滅盡。苦樂雙亡下無卜居。故於捨心衆同分中安立居處。阿難苦樂兩滅鬬心不交。如是一類名無煩天。機括獨行研交無地。如是一類名無熱天。十方世界妙見圓澄。更無塵象一切沈垢。如是一類名善見天。精見現前陶鑄無礙。如是一類名善現天。究竟群幾窮色性性入無邊際。如是一類名色究竟天

阿難此不還天。彼諸四禪四位天王。獨有欽聞不能知見。如今世間曠野深山聖道場地。皆阿羅漢所住持故。世間麤人所不能見。阿難是十八天獨行無交未盡形累。自此已還名爲色界

復次阿難從是有頂色邊際中。其間復有二種岐路。若於捨心發明智慧。慧光圓通便出塵界。成阿羅漢入菩薩乘。如是一類名爲迴心大阿羅漢。若在捨心捨厭成就。覺身爲礙銷礙入空。如是一類名爲空處。諸礙既銷無礙無滅。其中唯留阿賴耶識。全於末那半分微細。如是一類名爲識處。空色既亡識心都滅。十方寂然迥無攸往。如是一類名無所有處。識性不動以滅窮研。於無盡中發宣盡性。如存不存若盡非盡。如是一類名爲非想非非想處。此等窮空不盡空理。從不還天聖道窮者。如是一類名不迴心鈍阿羅漢。若從無想諸外道天窮空不歸。迷漏無聞便入輪轉。阿難是諸天上各各天人。則是凡夫業果酬答答盡入輪。彼之天王即是菩薩。遊三摩提漸次增進。迴向聖倫所修行路。阿難。是四空天身心滅盡。定性現前無業果色。從此逮終名無色界。此皆不了妙覺明心。積妄發生妄有三界。中間妄隨七趣沈溺。補特伽羅各從其類。復次阿難是三界中復有四種阿脩羅類。若於鬼道以護法力成通入空。此阿脩羅從卵而生鬼趣所攝。若於天中

提元作地次同

降德貶墜。其所卜居鄰於日月。此阿脩羅從胎而出人趣所攝。有脩羅王執持世界力洞無畏。能與梵王及天帝釋四天爭權。此阿脩羅因變化有天趣所攝。阿難別有一分下劣脩羅。生大海心沈水穴口。旦遊虛空暮歸水宿。此阿脩羅因溼氣有畜生趣攝

阿難如是地獄餓鬼畜生人及神仙。天洎脩羅精研七趣。皆是昏沈諸有爲想。妄想受生妄想隨業。於妙圓明無作本心。皆如空華元無所有。但一虛妄更無根緒。阿難此等衆生。不識本心受此輪迴。經無量劫不得眞淨。皆由隨順殺盜婬故。反此三種又則出生無殺盜婬。有名鬼倫無名天趣。有無相傾起輪迴性。若得妙發三摩提者則妙常寂。有無二無無二亦滅。尚無不殺不偷不婬。云何更隨殺盜婬事。阿難不斷三業各各有私。因各各私衆私同分。非無定處自妄發生。生妄無因無可尋究。汝勗修行欲得菩提要除三惑。不盡三惑縱得神通。皆是世間有爲功用。習氣不滅落於魔道。雖欲除妄倍加虛僞。如來說爲可哀憐者。汝妄自造非菩提咎。作是說者名爲正說。若他說者卽魔王說

卽時如來將罷法座。於師子牀攬七寶机。迴紫金山再來凭倚。普告大衆及阿難言。汝等有學緣覺聲聞。今日迴心趣大菩提無上妙覺。吾今已說眞修行法。汝猶未識修奢摩他毗婆舍那微細魔事。魔境現前汝不能識。洗心非正落於邪見。或汝陰魔或復天魔。或著鬼神或遭魑魅。心中不明認賊爲子。又復於中得少爲足。如第四禪無聞比丘妄言證聖。天報已畢衰相現前。謗阿羅漢身遭後有。墮阿鼻獄。汝應諦聽吾今爲汝子細分別。阿難起立幷其會中同有學者。歡喜頂禮伏聽慈誨

佛告阿難及諸大衆。汝等當知有漏世界十二類生。本覺妙明覺圓心體。與十方佛無二無別。由汝妄想迷理爲咎。癡愛發生生發徧迷。故有空性化迷不息。有世界生。則此十方微塵國土非無漏者。皆是迷頑妄想安立。當知虛空生汝心內。猶如片雲點太淸裏。況諸世界在虛空耶。汝等一人發眞歸元。此十方空皆悉銷

想三本俱作相

有同作著

机同作几

湛宋作泯次同

神鬼明倒〇浪三本俱作湯〇近宋作迷元作摧〇雖三本俱作唯〇祇元作只

若三本俱作互

魂同作魄

忽下同無然字

殞。云何空中所有國土而不振裂。汝輩修禪飾三摩地。十方菩薩及諸無漏大阿羅漢。心精通湛當處湛然。一切魔王及與鬼神諸凡夫天。見其宮殿無故崩裂。大地振坼水陸飛騰。無不驚慴。凡夫昏暗不覺遷訛。彼等咸得五種神通唯除漏盡。戀此塵勞。如何令汝摧裂其處。是故神鬼及諸天魔魍魎妖精。於三昧時僉來惱汝。然彼諸魔雖有大怒。彼塵勞內汝妙覺中。如風吹光如刀斷水了不相觸。汝如沸浪彼如堅冰。煖氣漸鄰不日銷殞。徒恃神力但為其客。成就破亂。由汝心中五陰主人。主人若迷客得其便。當處禪那覺悟無惑。則彼魔事無奈汝何。陰銷入明則彼群邪咸受幽氣。明能破暗近自銷殞。如何敢留擾亂禪定。若不明悟被陰所迷。則汝阿難必為魔子成就魔人。如摩登伽殊為眇劣。彼雖呪汝破佛律儀。八萬行中祇毀一戒。心清淨故尚未淪溺。此乃隳汝寶覺全身。如宰臣家忽逢籍沒。宛轉零落無可哀救

阿難當知汝坐道場。銷落諸念其念若盡。則諸離念一切精明。動靜不移憶忘如一。當住此處入三摩提。如明目人處大幽暗。精性妙淨心未發光。此則名為色陰區宇。若目明朗十方洞開。無復幽黯名色陰盡。是人則能超越劫濁。觀其所由堅固妄想以為其本

阿難當在此中精研妙明四大不織。少選以間身能出礙。此名精明流溢前境。斯但功用暫得如是。非為聖證不作聖心名善境界。若作聖解即受群邪

阿難復以此心精研妙明其身內徹。是人忽然於其身內拾出蟯蛔。身相宛然亦無傷毀。此名精明流溢形體。斯但精行暫得如是。非為聖證不作聖心名善境界。若作聖解即受群邪

又以此心內外精研。其時魂魄意志精神。除執受身餘皆涉入。若為賓主。忽於空中聞說法聲。或聞十方同敷密義。此名精魂遞相離合。成就善種暫得如是。非為聖證不作聖心名善境界。若作聖解即受群邪

又以此心澄露皎徹內光發明。十方徧作閻浮檀色。一切種類化為如來。于時忽然見毗盧遮那踞天光臺。

千宋作十

踰三本俱作逾

肢同作體

卽明作則

千佛圍繞百億國土.及與蓮華俱時出現.此名心魂靈悟所染.心光研明照諸世界.暫得如是非爲聖證.不作聖心名善境界.若作聖解卽受群邪

又以此心精研妙明觀察不停.抑按降伏制止超越.於時忽然十方虛空.成七寶色或百寶色.同時徧滿不相留礙.青黃赤白各各純現.此名抑按功力踰分.暫得如是非爲聖證.不作聖心名善境界.若作聖解卽受群邪

又以此心研究澄徹精光不亂.忽於夜合在暗室內.見種種物不殊白晝.而暗室物亦不除滅.此名心細密澄其見所視洞幽.暫得如是非爲聖證.不作聖心名善境界.若作聖解卽受群邪

又以此心圓入虛融.四肢忽然同於草木.火燒刀斫曾無所覺.又則火光不能燒爇.縱割其肉猶如削木.此名塵併排四大性一向入純.暫得如是非爲聖證.不作聖心名善境界.若作聖解卽受群邪

又以此心成就清淨.淨心功極忽見大地.十方山河皆成佛國.具足七寶光明徧滿.又見恒沙諸佛如來徧滿空界樓殿華麗.下見地獄上觀天宮得無障礙.此名欣厭凝想日深想久化成.非爲聖證不作聖心名善境界.若作聖解卽受群邪

又以此心研究深遠.忽於中夜遙見遠方.市井街巷親族眷屬或聞其語.此名迫心逼極飛出故多隔見.非爲聖證不作聖心名善境界.若作聖解卽受群邪

又以此心研究精極.見善知識形體變移.少選無端種種遷改.此名邪心含受魑魅.或遭天魔入其心腹.無端說法通達妙義.非爲聖證不作聖心魔事銷歇.若作聖解卽受群邪

阿難如是十種禪那現境.皆是色陰用心交互故現斯事.衆生頑迷不自忖量.逢此因緣迷不自識謂言登聖.大妄語成墮無間獄.汝等當依如來滅後.於末法中宣示斯義.無令天魔得其方便.保持覆護成無上道

府元明俱作腑

腑宋作府下同

阿難彼善男子．修三摩提奢摩他中．色陰盡者見諸佛心．如明鏡中顯現其像．若有所得而未能用．猶如魘人手足宛然．見聞不惑．心觸客邪而不能動．此則名爲受陰區宇．若魘咎歇．其心離身．返觀其面．去住自由．無復留礙．名受陰盡．是人則能超越見濁．觀其所由．虛明妄想以爲其本

阿難彼善男子．當在此中得大光耀．其心發明．內抑過分．忽於其處發無窮悲．如是乃至觀見蚊虻．猶如赤子．心生憐愍．不覺流淚．此名功用抑摧過越．悟則無咎．非爲聖證．覺了不迷．久自銷歇．若作聖解．則有悲魔入其心府．見人則悲．啼泣無限．失於正受．當從淪墜

阿難又彼定中諸善男子．見色陰銷．受陰明白．勝相現前．感激過分．忽於其中生無限勇．其心猛利．志齊諸佛．謂三僧祇一念能越．此名功用淩率過越．悟則無咎．非爲聖證．覺了不迷．久自銷歇．若作聖解．則有狂魔入其心腑．見人則誇．我慢無比．其心乃至上不見佛．下不見人．失於正受．當從淪墜

又彼定中諸善男子．見色陰銷．受陰明白．前無新證．歸失故居．智力衰微．入中隳地．迥無所見．心中忽然生大枯渴．於一切時沈憶不散．將此以爲勤精進相．此名修心無慧自失．悟則無咎．非爲聖證．若作聖解．則有憶魔入其心腑．旦夕撮心懸在一處．失於正受．當從淪墜

又彼定中諸善男子．見色陰銷．受陰明白．慧力過定．失於猛利．以諸勝性懷於心中．自心已疑是盧舍那．得少爲足．此名用心亡失恒審．溺於知見．悟則無咎．非爲聖證．若作聖解．則有下劣易知足魔入其心腑．見人自言我得無上第一義諦．失於正受．當從淪墜

又彼定中諸善男子．見色陰銷．受陰明白．新證未獲．故心已亡．歷覽二際．自生艱險．於心忽然生無盡憂．如坐鐵牀．如飲毒藥．心不欲活．常求於人令害其命．早取解脫．此名修行失於方便．悟則無咎．非爲聖證．若作聖解．則有一分常憂愁魔入其心腑．手執刀劍自割其肉．欣其捨壽．或常憂愁．走入山林．不耐見人．失於正

清輕三本俱倒

謗後元明俱作誤衆

入人元倒

受當從淪墜

又彼定中諸善男子。見色陰銷受陰明白。處清淨中心安隱後。忽然自有無限喜生。心中歡悅不能自止。此名輕安無慧自禁。悟則無咎非爲聖證。若作聖解則有一分好喜樂魔入其心腑。見人則笑於衢路傍自歌自舞。自謂已得無礙解脫。失於正受當從淪墜

又彼定中諸善男子。見色陰銷受陰明白。自謂已足。忽有無端大我慢起。如是乃至慢與過慢。及慢過慢或增上慢。或卑劣慢一時俱發。心中尚輕十方如來。何況上位聲聞緣覺。此名見勝無慧自救。悟則無咎非爲聖證。若作聖解則有一分大我慢魔入其心腑。不禮塔廟摧毀經像。謂檀越言。此是金銅或是土木。經是樹葉或是疊華。肉身眞常不自恭敬。却崇土木實爲顚倒。其深信者從其毀碎埋棄地中。疑誤衆生入無間獄。失於正受當從淪墜

又彼定中諸善男子。見色陰銷受陰明白。於精明中圓悟精理得大隨順。其心忽生無量輕安。已言成聖得大自在。此名因慧獲諸輕清。悟則無咎非爲聖證。若作聖解則有一分好清輕魔入其心腑。自謂滿足更不求進。此等多作無聞比丘。疑謗後生墮墜鼻獄。失於正受當從淪墜

又彼定中諸善男子。見色陰銷受陰明白。於明悟中得虛明性。其中忽然歸向永滅。撥無因果一向入空。空心現前乃至心生長斷滅解。悟則無咎非爲聖證。若作聖解則有空魔入其心腑。乃謗持戒名爲小乘。菩薩悟空有何持犯。其人常於信心檀越。飲酒噉肉廣行婬穢。因魔力故攝其前人不生疑謗。鬼心久入或食屎尿與酒肉等一種俱空。破佛律儀誤入人罪。失於正受當從淪墜

又彼定中諸善男子。見色陰銷受陰明白。味其虛明深入心骨。其心忽有無限愛生。愛極發狂便爲貪欲。此名定境安順入心。無慧自持誤入諸欲。悟則無咎非爲聖證。若作聖解則有欲魔入其心腑。一向說欲爲菩

死生三本俱倒

提道。化諸白衣平等行欲。其行婬者名持法子。神鬼力故於末世中。攝其凡愚其數至百。如是乃至一百二百。或五六百多滿千萬。魔心生厭離其身體。威德既無陷於王難。疑誤衆生入無間獄。失於正受當從淪墜。阿難如是十種禪那現境。皆是受陰用心交互故現斯事。衆生頑迷不自忖量。逢此因緣迷不自識。謂言登聖。大妄語成墮無間獄。汝等亦當將如來語。於我滅後傳示末法。徧令衆生開悟斯義。無令天魔得其方便。保持覆護成無上道阿難彼善男子。修三摩提受陰盡者。雖未漏盡心離其形。如鳥出籠已能成就。從是凡身上歷菩薩六十聖位。得意生身隨往無礙。譬如有人熟寐寱言。是人雖則無別所知。其言已成音韻倫次。令不寐者咸悟其語。此則名爲想陰區宇。若動念盡浮想銷除。於覺明心如去塵垢。一倫死生首尾圓照名想陰盡。是人則能超煩惱濁。觀其所由融通妄想以爲其本

阿難彼善男子。受陰虛妙不遭邪慮。圓定發明三摩地中。心愛圓明銳其精思貪求善巧。爾時天魔候得其便。飛精附人口說經法。其人不覺是其魔著。自言謂得無上涅槃。來彼求巧善男子處敷座說法。其形斯須或作比丘。令彼人見或爲帝釋。或爲婦女或比丘尼。或寢暗室身有光明。是人愚迷惑爲菩薩。信其教化搖蕩其心。破佛律儀潛行貪欲。口中好言災祥變異。或言如來某處出世。或言劫火或說刀兵。恐怖於人令其家資無故耗散。此名怪鬼年老成魔惱亂是人。厭足心生去彼人體。弟子與師俱陷王難。汝當先覺不入輪迴。迷惑不知墮無間獄

阿難又善男子。受陰虛妙不遭邪慮。圓定發明三摩地中。心愛遊蕩飛其精思貪求經歷

爾時天魔候得其便。飛精附人口說經法。其人亦不覺知魔著。亦言自得無上涅槃。來彼求遊善男子處。敷座說法自形無變。其聽法者忽自見身坐寶蓮華。全體化成紫金光聚。一衆聽人各各如是得未曾有。是人愚迷惑爲菩薩。婬逸其心破佛律儀潛行貪欲。口中好言諸佛應世。某處某人當是某佛化身來此。某人卽

是某菩薩等來化人間.其人見故心生傾渴.邪見密興種智銷滅.此名魅鬼年老成魔惱亂是人.厭足心生去彼人體.弟子與師俱陷王難.汝當先覺不入輪迴.迷惑不知墮無間獄

又善男子.受陰虛妙不遭邪慮.圓定發明三摩地中.心愛綿湣澄其精思貪求契合.爾時天魔候得其便.飛精附人口說經法.其人實不覺知魔著.亦言自得無上涅槃.來彼求合善男子處敷座說法.其形及彼聽法之人.外無遷變.令其聽者未聞法前心自開悟.念念移易或得宿命.或有他心.或見地獄.或知人間好惡諸事.或口說偈或自誦經.各各歡喜得未曾有.是人愚迷惑爲菩薩.綿愛其心.破佛律儀潛行貪欲.口中好言佛有大小.某佛先佛某佛後佛.其中亦有眞佛假佛.男佛女佛菩薩亦然.其人見故.洗滌本心易入邪悟.此名魅鬼年老成魔惱亂是人.厭足心生去彼人體.弟子與師俱陷王難.汝當先覺不入輪迴.迷惑不知墮無間獄

又善男子.受陰虛妙不遭邪慮.圓定發明三摩地中.心愛根本窮覽物化性之終始.精爽其心貪求辯析.爾時天魔候得其便.飛精附人口說經法.其人先不覺知魔著.亦言自得無上涅槃.來彼求元善男子處敷座說法.身有威神摧伏求者.令其座下雖未聞法自然心伏.是諸人等將佛涅槃菩提法身.即是現前我肉身上.父父子子遞代相生.即是法身常住不絕.都指現在即爲佛國.無別淨居及金色相.其人信愛忘失先心.身命歸依得未曾有.是等愚迷惑爲菩薩.推究其心破佛律儀潛行貪欲.口中好言眼耳鼻舌皆爲淨土.男女二根即是菩提涅槃眞處.彼無知者信是穢言.此名蠱毒魘勝惡鬼年老成魔惱亂是人.厭足心生去彼人體.弟子與師俱陷王難.汝當先覺不入輪迴.迷惑不知墮無間獄

又善男子.受陰虛妙不遭邪慮.圓定發明三摩地中.心愛懸應周流精研貪求冥感.爾時天魔候得其便.飛精附人口說經法.其人元不覺知魔著.亦言自得無上涅槃.來彼求應善男子處敷座說法.能令聽衆暫見

喜三本俱作娛

辯元明俱作辨

忘三本俱作亡

粘同作黏

克三本俱作尅

多同作俱

策同作冊

膳同作饌

彼同作是

其身如百千歲.心生愛染不能捨離.身爲奴僕四事供養不覺疲勞.各各令其座下人心.知是先師本善知識別生法愛.粘如膠漆得未曾有.是人愚迷惑爲菩薩.親近其心破佛律儀潛行貪欲.口中好言我於前世.於某生中先度某人.當時是我妻妾兄弟.今來相度與汝相隨.歸某世界供養某佛.或言別有大光明天佛於中住.一切如來所休居地.彼無知者信是虛誑遺失本心.此名癘鬼年老成魔惱亂是人.厭足心生去彼人體.弟子與師俱陷王難.汝當先覺不入輪迴.迷惑不知墮無間獄

又善男子.受陰虛妙不遭邪慮.圓定發明三摩地中.心愛深入克己辛勤.樂處陰寂貪求靜謐.爾時天魔候得其便.飛精附人口說經法.其人本不覺知魔著.亦言自得無上涅槃.來彼求陰善男子處敷座說法.令其聽人各知本業.或於其處語一人言.汝今未死已作畜生.勅使一人於後踏尾.頓令其人起不能得.於是一衆傾心欽伏.有人起心已知其肇.佛律儀外重加精苦.誹謗比丘罵詈徒衆.訐露人事不避譏嫌.口中好言未然禍福.及至其時毫髮無失.此大力鬼年老成魔惱亂是人.厭足心生去彼人體.弟子與師多陷王難.汝當先覺不入輪迴.迷惑不知墮無間獄

又善男子.受陰虛妙不遭邪慮.圓定發明三摩地中.心愛知見勤苦研尋貪求宿命.爾時天魔候得其便.飛精附人口說經法.其人殊不覺知魔著.亦言自得無上涅槃.來彼求知善男子處敷座說法.是人無端於說法處得大寶珠.其魔或時化爲畜生.口銜其珠及雜珍寶.簡策符牘諸奇異物.先授彼人後著其體.或誘聽人藏於地下.有明月珠照耀其處.是諸聽者得未曾有.多食藥草不飡嘉膳.或時日飡一麻一麥.其形肥充魔力持故.誹謗比丘罵詈徒衆不避譏嫌.口中好言他方寶藏.十方聖賢潛匿之處.隨其後者往往見有.奇異之人.此名山林土地城隍川嶽鬼神年老成魔.或有宣婬破佛戒律.與承事者潛行五欲.或有精進純食草木.無定行事惱亂彼人.厭足心生去彼人體.弟子與師多陷王難.汝當先覺不入輪迴.迷惑不知墮無間

上水元明俱倒

樹三本俱作木

妍三本俱作研

相元作想

獄

又善男子．受陰虛妙．不遭邪慮．圓定發明．三摩地中．心愛神通種種變化．研究化元．貪取神力．爾時天魔候得其便．飛精附人．口說經法．其人誠不覺知魔著．亦言自得無上涅槃．來彼求通善男子處．敷座說法．是人或復手執火光．手撮其光．分於所聽四衆頭上．是諸聽人頂上火光．皆長數尺．亦無熱性．曾不焚燒．或上水行如履平地．或於空中安坐不動．或入瓶內．或處囊中．越牖透垣．曾無障礙．唯於刀兵不得自在．自言是佛．身著白衣．受比丘禮．誹謗禪律．罵詈徒衆．訐露人事．不避譏嫌．口中常說神通自在．或復令人傍見佛土．鬼力惑人．非有真實．讚歎行婬．不毀麤行．將諸猥媟以為傳法．此名天地大力山精．海精．風精．河精．土精．一切草樹積劫精魅．或復龍魅．或壽終仙．再活為魅．或仙期終．計年應死．其形不化．他怪所附．年老成魔．惱亂是人．厭足心生．去彼人體．弟子與師．多陷王難．汝當先覺．不入輪迴．迷惑不知．墮無間獄

又善男子．受陰虛妙．不遭邪慮．圓定發明．三摩地中．心愛入滅．妍究化性．貪求深空．爾時天魔候得其便．飛精附人．口說經法．其人終不覺知魔著．亦言自得無上涅槃．來彼求空善男子處．敷座說法．於大衆內．其形忽空．衆無所見．還從虛空突然而出．存沒自在．或現其身洞如瑠璃．或垂手足．作栴檀氣．或大小便．如厚石蜜．誹毀戒律．輕賤出家．口中常說無因無果．一死永滅．無復後身．及諸凡聖．雖得空寂．潛行貪欲．受其欲者．亦得空心．撥無因果．此名日月薄蝕精氣．金玉芝草．麟鳳龜鶴．經千萬年不死為靈．出生國土．年老成魔．惱亂其人．厭足心生．去彼人體．弟子與師．多陷王難．汝當先覺．不入輪迴．迷惑不知．墮無間獄

又善男子．受陰虛妙．不遭邪慮．圓定發明．三摩地中．心愛長壽．辛苦研幾．貪求永歲．棄分段生．頓希變易細相常住．爾時天魔候得其便．飛精附人．口說經法．其人竟不覺知魔著．亦言自得無上涅槃．來彼求生善男子處．敷座說法．好言他方往還無滯．或經萬里．瞬息再來．皆於彼方取得其物．或於一處．在一宅中．數步之

間令其從東詣至西壁。是人急行累年不到。因此心信疑佛現前。口中常說十方衆生皆是吾子。我生諸佛。我出世界我是元佛。出世自然不因修得。此名住世自在天魔使其眷屬。如遮文茶及四天王毗舍童子未發心者利其虛明。食彼精氣或不因師。其修行人親自觀見。稱執金剛與汝長命。現美女身盛行貪欲。未逾年歲肝腦枯竭。口兼獨言聽若魃魅。前人未詳多陷王難。未及遇刑先已乾死。惱亂彼人以至殂殞。汝當先覺不入輪迴。迷惑不知墮無間獄

阿難當知是十種魔於末世時。在我法中出家修道。或附人體或自現形。皆言已成正徧知覺。讚歎婬欲破佛律儀。先惡魔師與魔弟子婬婬相傳。如是邪精魅其心腑。近則九生多踰百世。令眞修行總爲魔眷。命終之後畢爲魔民。失正徧知墮無間獄。汝今未須先取寂滅。縱縱無學留願入彼末法之中起大慈悲。救度正心深信衆生。令不著魔得正知見。我今度汝已出生死。汝遵佛語名報佛恩

阿難如是十種禪那現境。皆是想陰用心交互故現斯事。衆生頑迷不自忖量。逢此因緣迷不自識謂言登聖。大妄語成墮無間獄。汝等必須將如來語。於我滅後傳示末法。徧令衆生開悟斯義。無令天魔得其方便。保持覆護成無上道

魃三本俱作妖

畢同作必

大佛頂萬行首楞嚴經卷第九

提元作地下同
河山三本俱倒
○粘同作黏

大佛頂如來密因修證了義諸菩薩萬行首楞嚴經卷第十

一名中印度那蘭陀大道場經於灌頂部錄出別行　〔麗絲〕〔宋染〕〔元染〕〔明羔〕

大唐神龍元年龍集乙巳五月己卯朔二十三日辛丑中天竺沙門般剌蜜帝於廣州制止道場譯出

菩薩戒弟子前正諫大夫同中書門下平章事清河房融筆授

烏長國沙門彌伽釋迦譯語

阿難彼善男子．修三摩提想陰盡者．是人平常夢想銷滅．寤寐恒一．覺明虛靜猶如晴空．無復麤重前塵影事．觀諸世間大地河山如鏡鑑明．來無所粘過無蹤跡．虛受照應了罔陳習．唯一精眞．生滅根元從此披露．見諸十方十二衆生．畢殫其類．雖未通其各命由緒．見同生基．猶如野馬熠熠清擾．爲浮根塵究竟樞穴．此則名爲行陰區宇．若此清擾熠熠元性．性入元澄一澄元習．如波瀾滅化爲澄水．名行陰盡．是人則能超衆生濁．觀其所由．幽隱妄想以爲其本

阿難當知是得正知奢摩他中．諸善男子凝明正心．十類天魔不得其便．方得精研窮生類本．於本類中生元露者．觀彼幽清圓擾動元．於圓元中起計度者．是人墜入二無因論．一者是人見本無因．何以故．是人既得生機全破．乘于眼根八百功德．見八萬劫所有衆生．業流灣環死此生彼．祇見衆生輪迴其處．八萬劫外冥無所觀．便作是解．此等世間十方衆生．八萬劫來無因自有．由此計度亡正遍知．墮落外道惑菩提性．二者是人見末無因．何以故．是人於生既見其根．知人生人悟鳥生鳥．烏從來黑鵠從來白．人天本豎畜生本橫．白非洗成黑非染造．從八萬劫無復改移．今盡此形亦復如是．而我本來不見菩提．云何更有成菩提事．

當知今日一切物象皆本無因.由此計度亡正徧知.墮落外道惑菩提性.是則名爲第一外道立無因論

阿難是三摩中諸善男子.凝明正心魔不得便.窮生類本觀彼幽清常擾動元.於圓常中起計度者.是人墜入四徧常論.一者是人窮心境性二處無因.修習能知二萬劫中.十方衆生所有生滅.咸皆循環不曾散失.計以爲常.二者是人窮四大元四性常住.修習能知四萬劫中.十方衆生所有生滅.咸皆體恒不曾散失.計以爲常.三者是人窮盡六根.末那執受心意識中本元由處性常恒故.修習能知八萬劫中.一切衆生循環不失本來常住窮不失性.計以爲常.四者是人旣盡想元.生理更無流止運轉.生滅想心今已永滅.理中自然成不生滅.因心所度計以爲常.由此計常亡正徧知.墮落外道惑菩提性.是則名爲第二外道立圓常論

又三摩中諸善男子.堅凝正心魔不得便.窮生類本.觀彼幽清常擾動元.於自他中起計度者.此人墜入四顚倒見.一分無常一分常論.一者是人觀妙明心徧十方界.湛然以爲究竟神我.從是則計我徧十方凝明不動.一切衆生於我心中自生自死.則我心性名之爲常.彼生滅者眞無常性.二者是人不觀其心.徧觀十方恒沙國土.見劫壞處名爲究竟無常種性.劫不壞處名究竟常.三者此人別觀我心.精細微密猶如微塵.流轉十方性無移改.能令此身卽生卽滅.其不壞性名我性常.一切死生從我流出名無常性.四者是人知想陰盡見行陰流.行陰常流計爲常性.色受想等今已滅盡名爲無常.由此計度一分無常一分常故.墮落外道惑菩提性.是則名爲第三外道一分常論

又三摩中諸善男子.堅凝正心魔不得便.窮生類本.觀彼幽清常擾動元.於分位中生計度者.是人墜入四有邊論.一者是人心計生元流用不息.計過未者名爲有邊.計相續心名爲無邊.二者是人觀八萬劫.則見衆生八萬劫前寂無聞見.無聞見處名爲無邊.有衆生處名爲有邊.三者是人計我徧知得無邊性.彼一切人現我知中.我曾不知彼之知性.名彼不得無邊之心但有邊性.四者是人窮行陰空.以其所見心路籌度.

此明作是

惑元明俱作或

後同作復

一切衆生一身之中。計其咸皆半生半滅。明其世界一切所有。一半有邊一半無邊。由此計度有邊無邊。墮落外道惑菩提性。是則名爲第四外道立有邊論

又三摩中諸善男子。堅凝正心魔不得便。窮生類本。觀彼幽清常擾動元。於知見中生計度者。是人墜入四種顚倒。不死矯亂徧計虛論。一者是人觀變化元。見遷流處名之爲變。見相續處名之爲恒。見所見處名之爲生。不見見處名之爲滅。相續之因性不斷處名之爲增。正相續中中所離處名之爲滅。各各生處名之爲有。互互亡處名之爲無。以理都觀用心別見。有求諸人來問其義。答言我今亦生亦滅。亦有亦無亦增亦減。於一切時皆亂其語。令彼前人遺失章句。二者是人諦觀其心。互互無處因無得證。有人來問唯答一字。但言其無。除無之餘無所言說。三者是人諦觀其心。各各有處因有得證。有人來問唯答一字。但言其是。除是之餘無所言說。四者是人有無俱見。其境枝故其心亦亂。有人來問答言亦有即是亦無。亦無之中不是亦有。一切矯亂無容窮詰。由此計度矯亂虛無。墮落外道惑菩提性。是則名爲第五外道四顚倒性。不死矯亂徧計虛論

又三摩中諸善男子。堅凝正心魔不得便。窮生類本。觀彼幽清常擾動元。於無盡流生計度者。是人墜入死後有相發心顚倒。或自固身云色是我。或見我圓含徧國土云我有色。或彼前緣隨我迴復云色屬我。或復我依行中相續云我在色。皆計度言死後有相。如是循環有十六相。從此惑計畢竟煩惱畢竟菩提。兩性並驅各不相觸。由此計度死後有故。墮落外道惑菩提性。是則名爲第六外道立五陰中死後有相心顚倒論

又三摩中諸善男子。堅凝正心魔不得便。窮生類本。觀彼幽清常擾動元。於先除滅色受想中生計度者。是人墜入死後無相發心顚倒。見其色滅形無所因。觀其想滅心無所繫。知其受滅無後連綴。陰性銷散。縱有生理而無受想與草木同。此質現前猶不可得。死後云何更有諸相。因之勘校死後相無。如是循環有八無

或宋作惑

心三本俱作語○深宋作沈

悟同作晤○後元作候○外宋作內

相。從此或計涅槃因果一切皆空。徒有名字究竟斷滅。由此計度死後無故。墮落外道惑菩提性。是則名爲第七外道。立五陰中死後無相心顛倒論。又三摩中諸善男子。堅凝正心魔不得便窮生類本。觀彼幽清常擾動元。於行存中兼受想滅。雙計有無自體相破。是人墜入死後俱非起顛倒論。色受想中見有非有。行遷流內觀無不無。如是循環窮盡陰界。八俱非相隨得一緣。皆言死後有相無相。又計諸行性遷訛故。心發通悟有無俱非虛實失措。由此計度死後俱非。後際昏瞢無可道故。墮落外道惑菩提性。是則名爲第八外道。立五陰中死後俱非心顛倒論

又三摩中諸善男子。堅凝正心魔不得便窮生類本。觀彼幽清常擾動元。於後後無生計度者。是人墜入七斷滅論。或計身滅。或欲盡滅。或苦盡滅。或極樂滅。或極捨滅。如是循環窮盡七際。現前銷滅滅已無復。由此計度死後斷滅。墮落外道惑菩提性。是則名爲第九外道。立五陰中死後斷滅心顛倒論

又三摩中諸善男子。堅凝正心魔不得便窮生類本。觀彼幽清常擾動元。於後後有生計度者。是人墜入五涅槃論。或以欲界爲正轉依。觀見圓明生愛慕故。或以初禪性無憂故。或以二禪心無苦故。或以三禪極悅隨故。或以四禪苦樂二亡。不受輪廻生滅性故。迷有漏天作無爲解。五處安隱爲勝淨依。如是循環五處究竟。由此計度五現涅槃。墮落外道惑菩提性。是則名爲第十外道。立五陰中五現涅槃心顛倒論

阿難如是十種禪那狂解。皆是行陰用心交互故現斯悟。衆生頑迷不自忖量。逢此現前以迷爲解自言登聖。大妄語成墮無間獄。汝等必須將如來心。於我滅後傳示末法。徧令衆生覺了斯義。無令心魔自起深孽。保持覆護消息邪見。敎其身心開覺眞義。於無上道不遭枝岐。勿令心祈得少爲足。作大覺王清淨標指

阿難彼善男子。修三摩提行陰盡者。諸世間性幽清擾動同分生機倏然隳裂。沈細綱紐補特伽羅。酬業深脉感應懸絕。於涅槃天將大明悟。如鷄後鳴瞻顧東方已有精色。六根虛靜無復馳逸。內外湛明入無所入。

溜同作淈

深達十方十二種類受命元由。觀由執元諸類不召。於十方界已獲其同。精色不沈發現幽祕。此則名爲識陰區宇。若於群召已獲同中。銷磨六門合開成就。見聞通鄰互用清淨。十方世界及與身心。如吠琉璃內外明徹名識陰盡。是人則能超越命濁。觀其所由罔象虛無。顛倒妄想以爲其本

阿難當知是善男子窮諸行空。於識還元已滅生滅。而於寂滅精妙未圓。能令己身根隔合開。亦與十方諸類通覺。覺知通溜能入圓元。若於所歸立眞常因生勝解者。是人則墮因所因執。娑毗迦羅所歸冥諦成其伴侶。迷佛菩提亡失知見。是名第一立所得心。成所歸果違遠圓通。背涅槃城生外道種

阿難又善男子。窮諸行空已滅生滅。而於寂滅精妙未圓。若於所歸覽爲自體。盡虛空界十二類內所有衆生。皆我身中一類流出生勝解者。是人則墮能非能執。摩醯首羅現無邊身。成其伴侶。迷佛菩提亡失知見。是名第二立能爲心。成能事果違遠圓通。背涅槃城生大慢天我徧圓種

又善男子。窮諸行空已滅生滅。而於寂滅精妙未圓。若於所歸有所歸依。自疑身心從彼流出。十方虛空咸其生起。即於都起所宣流地。作眞常身無生滅解。在生滅中早計常住。既惑不生亦迷生滅。安住沈迷生勝解者。是人則墮常非常執。計自在天成其伴侶。迷佛菩提亡失知見。是名第三立因依心。成妄計果違遠圓通。背涅槃城生倒圓種

又善男子。窮諸行空已滅生滅。而於寂滅精妙未圓。若於所知知徧圓故。因知立解十方草木。皆稱有情與人無異。草木爲人人死還成十方草樹。無擇徧知生勝解者。是人則墮知無知執。婆吒霰尼執一切覺成其伴侶。迷佛菩提亡失知見。是名第四計圓知心。成虛謬果違遠圓通。背涅槃城生倒知種

又善男子。窮諸行空已滅生滅。而於寂滅精妙未圓。若於圓融根互用中已得隨順。便於圓化一切發生求火光明樂水清淨。愛風周流觀塵成就。各各崇事以此群塵發作本因立常住解。是人則墮生無生執。諸迦

相三本俱作想

于明作於

途元明俱作塗○依或三本俱作依迷惑於四字

葉波并婆羅門。勤心役身事火崇水。求出生死成其伴侶。迷佛菩提亡失知見。是名第五計著崇事。迷心從物立妄求因。求妄冀果違遠圓通。背涅槃城生顛化種

又善男子窮諸行空已滅生滅。而於寂滅精妙未圓。若於圓明計明中虛。非滅群化以永滅依。爲所歸依生勝解者。是人則墮歸無歸執。無相天中諸舜若多成其伴侶。迷佛菩提亡失知見。是名第六圓虛無心。成空亡果違遠圓通。背涅槃城生斷滅種

又善男子窮諸行空已滅生滅。而於寂滅精妙未圓。若於圓常固身常住同于精圓長不傾逝生勝解者。是人則墮貪非貪執。諸阿斯陀求長命者成其伴侶。迷佛菩提亡失知見。名名等七執著命元立固妄因。趣長勞果違遠圓通。背涅槃城生妄延種

又善男子窮諸行空已滅生滅。而於寂滅精妙未圓。觀命互通却留塵勞恐其銷盡。便於此際坐蓮華宮廣化七珍多增寶媛。縱恣其心生勝解者。是人則墮眞無眞執。吒枳迦羅成其伴侶。迷佛菩提亡失知見。是名第八發邪思因。立熾塵果違遠圓通。背涅槃城生天魔種

又善男子窮諸行空已滅生滅。而於寂滅精妙未圓。於命明中分別精麤。疎決眞僞因果相酬。唯求感應背清淨道。所謂見苦斷集證滅修道居滅已休。更不前進生勝解者。是人則墮定性聲聞。諸無聞僧增上慢者成其伴侶。迷佛菩提亡失知見。是名第九圓精應心成趣寂果違遠圓通。背涅槃城生纏空種

又善男子窮諸行空已滅生滅。而於寂滅精妙未圓。若於圓融清淨覺明發研深妙卽立涅槃。而不前進生勝解者。是人則墮定性辟支。諸緣獨倫不迴心者成其伴侶。迷佛菩提亡失知見。是名第十圓覺湣心成湛明果違遠圓通。背涅槃城生覺圓明不化圓種

阿難如是十種禪那中途成狂因依。或未足中生滿足證。皆是識陰用心交互故生斯位。衆生頑迷不自忖

少乏元倒

坐元明俱作座

明明作淨

量。逢此現前各以所愛。先習迷心而自休息。將爲畢竟所歸寧地。自言滿足無上菩提。大妄語成外道邪魔。所感業終墮無間獄。聲聞緣覺不成增進。汝等存心秉如來道。將此法門於我滅後傳示末世。普令衆生覺了斯義。無令見魔自作沈孽。保綏哀救消息邪緣。令其身心入佛知見。從始成就不遭岐路。如是法門先過去世。恒沙劫中微塵如來。乘此心開得無上道。識陰若盡則汝現前諸根互用。從互用中能入菩薩金剛乾慧。圓明精心於中發化。如淨瑠璃內含寶月。如是乃超十信十住十行十迴向四加行心。菩薩所行金剛十地。等覺圓明入於如來妙莊嚴海。圓滿菩提歸無所得。此是過去先佛世尊。奢摩他中毗婆舍那。覺明分析微細魔事。魔境現前汝能諳識。心垢洗除不落邪見。陰魔銷滅天魔摧碎。大力鬼神褫魄逃逝。魑魅魍魎無復出生。直至菩提無諸少乏。下劣增進。於大涅槃心不迷悶。若諸末世愚鈍衆生。未識禪那不知說法。樂修三昧汝恐同邪。一心勸令持我佛頂陀羅尼呪。若未能誦寫於禪堂或帶身上。一切諸魔所不能動。汝當恭欽十方如來。究竟修進最後垂範。

阿難卽從坐起。聞佛示誨。頂禮欽奉憶持無失。於大衆中重復白佛。如佛所言五陰相中。五種虛妄爲本想心。我等平常未蒙如來微細開示。又此五陰爲倂銷除爲次第盡。如是五重詣何爲界。惟願如來發宣大慈。爲此大衆淸明心目。以爲末世一切衆生作將來眼。佛告阿難。精眞妙明本覺圓淨。非留死生及諸塵垢。乃至虛空。皆因妄想之所生起。斯元本覺妙明眞精。妄以發生諸器世間。如演若多迷頭認影。妄元無因。於妄想中立因緣性。迷因緣者稱爲自然。彼虛空性猶實幻生。因緣自然皆是衆生妄心計度。阿難知妄所起說妄因緣。若妄元無。說妄因緣元無所有。何況不知推自然者。是故如來與汝發明五陰本因同是妄想。汝體先因父母想生。汝心非想則不能來想中傳命。如我先言心想醋味口中涎生。心想登高足心酸起。懸崖不有。醋物未來。汝體必非虛妄通倫。口水如何因談醋出。是故當知汝現色身名爲堅固第一妄想。卽此所說

運宋作轉

想明作妄〇合開同倒〇無宋元俱作元〇細微明倒

臨高想心．能令汝形眞受酸澀．由因受生能動色體．汝今現前順益違損二現驅馳．名爲虛明第二妄想．由汝念慮使汝色身．身非念倫汝身何因．隨念所使種種取像．心生形取與念相應．寤卽想心寐爲諸夢．則汝想念搖動妄情．名爲融通第三妄想．化理不住運運密移．甲長髮生氣銷容皺．日夜相代曾無覺悟．阿難此若非汝云何體遷．如必是眞汝何無覺．則汝諸行念念不停．名爲幽隱第四妄想．又汝精明湛不搖處名恆常者．於身不出見聞覺知．若實精眞不容習妄．何因汝等曾於昔年覩一奇物．經歷年歲憶忘俱無．於後忽然覆覩前異．記憶宛然曾不遺失．則此精了湛不搖中．念念受熏有何籌算．阿難當知此湛非眞．如急流水望如恬靜．流急不見非是無流．若非想元寧受想習．非汝六根互用合開此之妄想無時得滅．故汝現在見聞覺知中串習幾．則湛了內罔象虛無．第五顚倒細微精想

阿難是五受陰五妄想成．汝今欲知因界淺深．唯色與空是色邊際．唯觸及離是受邊際．唯記與忘是想邊際．唯滅與生是行邊際．湛入合湛歸識邊際．此五陰元重疊生起．生因識有滅從色除．理則頓悟乘悟併銷．事非頓除因次第盡．我已示汝刼波巾結．何所不明再此詢問．汝應將此妄想根元心得開通．傳示將來末法之中諸修行者．令識虛妄深厭自生．知有涅槃不戀三界

阿難若復有人徧滿十方．所有虛空盈滿七寶．持以奉上微塵諸佛．承事供養心無虛度．於意云何是人以此施佛因緣得福多不．阿難答言虛空無盡珍寶無邊．昔有衆生施佛七錢．捨身猶獲轉輪王位．況復現前虛空旣窮．佛土充徧皆施珍寶．窮刼思議尚不能及．是福云何更有邊際

佛告阿難諸佛如來語無虛妄．若復有人身具四重十波羅夷．瞬息卽經此方他方．阿鼻地獄乃至窮盡．十方無間靡不經歷．能以一念將此法門．於末刼中開示未學．是人罪障應念銷滅．變其所受地獄苦因成安樂國．得福超越前之施人．百倍千倍千萬億倍．如是乃至筭數譬喻所不能及．阿難若有衆生．能誦此經能

持此呪。如我廣說窮劫不盡。依我教言如教行道。直成菩提無復魔業

佛說此經已。比丘比丘尼優婆塞優婆夷。一切世間天人阿脩羅。及諸他方菩薩二乘聖仙童子。幷初發心大力鬼神。皆大歡喜作禮而去

大佛頂萬行首楞嚴經卷第十

大乘入楞伽經卷第一

〔麗髮〕〔宋四〕〔元四〕〔明養〕

大周于闐國三藏法師實叉難陀奉勅譯

譯號大周宋元俱作大唐明作唐宋無于闐國三字藏下三本俱無法師二字明有沙門二字陀下宋元俱無奉勅二字元有第四二字勅明作制以下皆同

羅婆那王勸請品第一

如是我聞。一時佛住大海濱摩羅耶山頂楞伽城中。與大比丘衆及大菩薩衆俱。其諸菩薩摩訶薩。悉已通達五法三性諸識無我。善知境界自心現義。遊戲無量自在三昧神通諸力。隨衆生心現種種形方便調伏。一切諸佛手灌其頂。皆從種種諸佛國土而來此會。大慧菩薩摩訶薩爲其上首。爾時世尊於海龍王宮說法。過七日已從大海出。有無量億梵釋護世諸天龍等奉迎於佛。爾時如來擧目觀見摩羅耶山楞伽大城。即便微笑而作是言。昔諸如來應正等覺。皆於此城說自所得聖智證法。非諸外道臆度邪見及以二乘修行境界。我今亦當爲羅婆那王開示此法。爾時羅婆那夜叉王。以佛神力聞佛言音。遙知如來從龍宮出。梵釋護世天龍圍遶。見海波浪。觀其衆會藏識大海境界風動轉識浪起。發歡喜心。於其城中高聲唱言。我當詣佛請入此城。令我及與諸天世人於長夜中得大饒益。作是語已。即與眷屬乘花宮殿往世尊所。到已下殿右遶三帀。作衆伎樂供養如來。所持樂器皆是大青因陀羅寶。琉璃等寶以爲間錯。無價上衣而用纏裹。其聲美妙音節相和。於中說偈而讚佛曰

琉明作瑠

心自性法藏　無我離見垢　證智之所知　願佛爲宣說
善法集爲身　證智常安樂　變化自在者　願入楞伽城
過去佛菩薩　皆曾住此城　此諸夜叉衆　一心願聽法

爾時羅婆那楞伽王。以都咤迦音歌讚佛已。復以歌聲而說頌言

知三本俱作智○住明作信○惟三本俱作唯次同

世尊於七日　住摩竭海中　然後出龍宮　安詳昇此岸　我與諸婇女　及夜叉眷屬
輸迦娑刺那　衆中聰慧者　悉以其神力　往詣如來所　各下花宮殿　禮敬世所尊
復以佛威神　對佛稱己名　我是羅刹王　十首羅婆那　今來詣佛所　願佛攝受我
及楞伽城中　所有諸衆生　過去無量佛　咸昇寶山頂　住楞伽城中　說自所證法
世尊亦應爾　住彼寶嚴山　菩薩衆圍遶　演說淸淨法　我等於今日　及住楞伽衆
一心共欲聞　離言自證法　我念去來世　所有無量佛　菩薩共圍遶　演說楞伽經
此入楞伽典　昔佛所稱讃　願佛同往尊　亦爲衆開演　請佛爲哀愍　無量夜叉衆
入彼寶嚴城　說此妙法門　此妙楞伽城　種種寶嚴飾　牆壁非土石　羅網悉珍寶
此諸夜叉衆　昔曾供養佛　修行離諸過　證知常明了　夜叉男女等　渴仰於大乘
自信摩訶衍　亦樂令他住　惟願無上尊　爲諸羅刹衆　甕耳等眷屬　往詣楞伽城
我於去來今　勤供養諸佛　願聞自證法　究竟大乘道　願佛哀愍我　及諸夜叉衆
共諸佛子等　入此楞伽城　我宮殿婇女　及以諸瓔珞　可愛無憂園　願佛哀納受
我於佛菩薩　無有不捨物　乃至身給侍　惟願哀納受

爾時世尊聞是語已．卽告之言．夜叉王．過去世中諸大導師．咸哀愍汝受汝勸請．詣寶山中說自證法．未來諸佛亦復如是．此是修行甚深觀行現法樂者之所住處．我及諸菩薩哀愍汝故受汝所請．作是語已默然而住．時羅婆那王．卽以所乘妙花宮殿奉施於佛．佛坐其上．王及諸菩薩前後導從．無量婇女歌詠讃歎．供養於佛往詣彼城．到彼城已．羅婆那王及諸眷屬．復作種種上妙供養．夜叉衆中童男童女．以寶羅網供養於佛．羅婆那王施寶瓔珞奉佛菩薩以掛其頸．爾時世尊及諸菩薩受供養已．各爲略說自證境界甚深之

與明作於

惟同作唯

於明作于

法.時羅婆那王幷其眷屬.復更供養大慧菩薩.而勸請言

我今請大士　奉問於世尊　一切諸如來　自證智境界　我與夜叉衆　及此諸菩薩
一心願欲聞　是故咸勸請　汝是修行者　言論中最勝　是故生尊敬　勸汝請問法
自證淸淨法　究竟入佛地　離外道二乘　一切諸過失

爾時世尊以神通力.於彼山中復更化作無量寶山.悉以諸天百千萬億妙寶嚴飾.一一山上皆現佛身.一一佛前皆有羅婆那王.及其衆會十方所有一切國土皆於中現.一一國中悉有如來.一一佛前咸有羅婆那王幷其眷屬.楞伽大城阿輸迦園.如是莊嚴等無有異.一一皆有大慧菩薩而興請問.佛爲開示自證智境.以百千妙音說此經已.佛及諸菩薩皆於空中隱而不現.羅婆那王唯自見身住本宮中.作是思惟.向者是誰誰聽其說.所見何物是誰能見.佛及國城衆寶山林.如是等物今何所在.爲夢所作爲幻所成.爲復猶如乾闥婆城.爲翳所見.爲燄所惑.爲如夢中石女生子.爲如煙焰旋火輪耶.復更思惟.一切諸法性皆如是.唯是自心分別境界.凡夫迷惑不能解了.無有能見亦無所見.無有能說亦無所說.見佛聞法皆是分別.如向所見不能見佛.不起分別是則能見.時楞伽王尋卽開悟.離諸雜染證唯自心.住無分別.往昔所種善根力故.於一切法得如實見.不隨他悟.能以自智善巧觀察.永離一切臆度邪解.住大修行爲修行師.現種種身善達方便.巧知諸地增上進相.常樂遠離心意意識.斷三相續見離外道執著.內自覺悟入如來藏.趣於佛地.聞虛空中及宮殿內咸出聲言.善哉大王.如汝所學.諸修行者應如是學.應如是見.一切如來應如是見.一切諸法若異見者則是斷見.汝應永離心意意識.應勤觀察一切諸法.應修內行莫著外見.莫墮二乘及以外道.所修句義所見境界.及所應得諸三昧法.汝不應樂戲論談笑.汝不應起圍陀諸見.亦不應著王位自在.亦不應住六定等中.若能如是.卽是如實修行者行.能摧他論能破惡見.能捨一切我見執著.能以

邪三本俱作見

盻明作眄

拖元作放

妙慧轉所依識。能修菩薩大乘之道。能入如來自證之地。汝應如是勤加修學。令所得法轉更清淨。善修三昧三摩鉢底。莫著二乘外道境界以爲勝樂。如凡修者之所分別。外道執我見有我相。及實求那而生取著。二乘見有無明緣行。於性空中亂想分別。楞伽王。此法殊勝是大乘道。能令成就自證聖智。於諸有中受上妙生。楞伽王。此大乘行破無明翳。滅識波浪不墮外道諸邪行中。楞伽王。外道行者執著於我作諸異論不能演說離執著見識性二義。善哉楞伽王。汝先見佛思惟此義。如是思惟乃是見佛。爾時羅婆那王。復作是念。願我更得奉見如來。如來世尊於觀自在。離外道法能說自證聖智境界。超諸應化所應作事。住如來定入三昧樂。是故說名大觀行師。亦復名爲大哀愍者。能燒煩惱分別薪盡。諸佛子衆所共圍遶。普入一切衆生心中。徧一切處具一切智。永離一切分別事相。我今願得重見如來大神通力。以得見故。未得者得已得不退。離諸分別住三昧樂。增長滿足如來智地。爾時世尊。知楞伽王即當證悟無生法忍。爲哀愍故便現其身令所化事還復如本。時十頭王見所曾覩。無量山城悉寶莊嚴。一一城中皆有如來應正等覺三十二相以嚴其身。自見其身遍諸佛前。悉有大慧夜叉圍遶。說自證智所行之法。亦見十方諸佛國土。如是等事悉無有別。爾時世尊普觀衆會。以慧眼觀非肉眼觀。如師子王奮迅迴盻欣然大笑。於其眉間髀脇腰頸。及以肩臂德字之中。一一毛孔皆放無量妙色光明。如虹拖輝如日舒光。亦如劫火猛焰熾然。時虛空中梵釋四天。遙見如來坐如須彌楞伽山頂欣然大笑。爾時諸菩薩及諸天衆。咸作是念。如來世尊於法自在。何因緣故欣然大笑。身放光明默然不動。住自證境入三昧樂。如師子王周迴顧視。觀羅婆那念如實法。爾時大慧菩薩摩訶薩。先受羅婆那王請。復知菩薩衆會之心。及觀未來一切衆生。皆悉樂著語言文字。隨言取義而生迷惑。執取二乘外道之行。或作是念。世尊已離諸識境界。何因緣故欣然大笑。爲斷彼疑。而問於佛。佛即告言。善哉大慧。善哉大慧。汝觀世間愍諸衆生。於三世中惡見所纏。欲令開悟而問於我。諸智慧人爲利自

種明作等

他。能作是問。大慧。此楞伽王。曾問過去一切如來應正等覺二種之義。今亦欲問。未來亦爾。此二種義差別之相。一切二乘及諸外道皆不能測。爾時如來。知楞伽王欲問此義。而告之曰。楞伽王。汝欲問我宜應速問。我當爲汝分別解釋。滿汝所願令汝歡喜。能以智慧思惟觀察。離諸分別善知諸地。修習對治證眞實義。入三昧樂爲諸如來之所攝受。住奢摩他樂遠離二乘三昧過失。住於不動善慧法雲菩薩之地。能如實知諸法無我。當於大寶蓮花宮中。以三昧水而灌其頂。復現無量蓮花圍繞。無數菩薩於中止住。與諸衆會遞相瞻視。如是境界不可思議。楞伽王汝起一方便行住修行地。復起無量諸方便行。汝定當得如上所說不思議事。處如來位隨形應物。汝所當得。一切二乘及諸外道梵釋天等所未曾見。爾時楞伽王。蒙佛許已。即於清淨光明如大蓮華寶山頂上。從座而起。諸婇女衆之所圍繞。化作無量種種色花。種種色香。末香塗香。幢幡幰蓋。冠珮瓔珞。及餘世間未曾見聞。種種勝妙莊嚴之具。又復化作欲界所有種種無量諸音樂器。過諸天龍乾闥婆等一切世間之所有者。又復化作十方佛土昔所曾見諸音樂器。又復化作大寶羅網。遍覆一切佛菩薩上。復現種種上妙衣服。建立幢幡以爲供養。作是事已即昇虛空。高七多羅樹。於虛空中。復雨種種諸供養雲。作諸音樂。從空而下。即坐第二日電光明如大蓮花寶山頂上。歡喜恭敬而作是言。我今欲問如來二義。如是二義。我已曾問過去如來應正等覺。彼佛世尊已爲我說。我今亦欲問於是義。唯願如來爲我宣說。世尊。變化如來說此二義。非根本佛。根本佛說三昧樂境。不說虛妄分別所行。善哉世尊於法自在。唯願哀愍說此二義。一切佛子心皆樂聞。爾時世尊告彼王言。汝應問我當爲汝說。時夜叉王。更著種種寶冠瓔珞諸莊嚴具以嚴其身。而作是言。如來常說。法尚應捨何況非法。云何得捨此二種法。何者是法何者非法。法若應捨云何有二。有二即墮分別相中。有體無體是實非實。如是一切皆是分別。不能了知阿賴耶識無差別相。如毛輪住非淨智境。法性如是云何可捨。爾時佛告楞伽王言。楞伽王。汝豈不見瓶等無常敗

證三本俱作聖
次同〇牙同作芽
取本明作本取
兎同作兔次同
於同作于下同

壞之法.凡夫於中妄生分別.汝今何故不如是知法與非法差別之相.此是凡夫之所分別.非證智見.凡夫墮在種種相中.非諸證者.楞伽王.如燒宮殿園林見種種焰火性是一.所出光焰由薪力故.長短大小各各差別.汝今云何不如是知法與非法差別之相.楞伽王.如一種子生牙莖枝葉及以花果無量差別.外法如是內法亦然.謂無明爲緣生蘊界處一切諸法.於三界中受諸趣生.有苦樂好醜語默行止各各差別.又如諸識相雖是一.隨於境界有上中下染淨善惡種種差別.楞伽王.非但如上法有差別.諸修行者修觀行時.自智所行亦復見有差別之相.況法與非法.而無種種差別分別.楞伽王.法與非法差別相者.當知悉是相分別故.楞伽王.何者是法.所謂二乘及諸外道.虛妄分別說有實等爲諸法因.如是等法應捨應離.不應於中分別取相.見自心法性則無執著.瓶等諸物凡愚所取本無有體.諸觀行人以毘鉢舍那如實觀察.名捨諸法.楞伽王.何者是非法.所謂諸法無性無相永離分別.如實見者.若有若無如是境界彼皆不起.是名捨非法.復有非法.所謂兎角石女兒等.皆無性相不可分別.但隨世俗說有名字.非如瓶等而可取著.以彼非是識之所取.如是分別亦應捨離.是名捨法及捨非法.楞伽王汝先所問我已說竟.楞伽王.汝言我於過去諸如來所已問是義.彼諸如來已爲我說.楞伽王.汝言過去但是分別.未來亦然.我亦同彼.楞伽王.彼諸佛法皆離分別.已出一切分別戲論.非如色相唯智能證.爲令衆生得安樂故而演說法.以無相智說名如來.是故如來以智爲體.智爲身故不可分別.不可以所分別.不可以我人衆生相分別.何故不能分別.以意識因境界起取色形相.是故離所分別.亦離所分別.楞伽王.譬如壁上彩畫衆生無有覺知.世間衆生悉亦如是無業無報.諸法亦然無聞無說.楞伽王.世間衆生猶如變化.凡夫外道不能了達.楞伽王.能如是見名爲正見.若他見者名分別見.由分別故取著於二.楞伽王.譬如有人於水鏡中自見其像.於燈月中自見其影.於山谷中自聞其響.便生分別而起取著.此亦如是法與非法唯是分別.由分別故不能捨離.但更增長一

品目上同無大乘入楞伽經六字下同

不三本俱作所

見同作取

說同作作

頌同作偈

切虛妄不得寂滅。寂滅者所謂一緣。一緣者是最勝三昧。從此能生自證聖智。以如來藏而爲境界

大乘入楞伽經集一切法品第二之一

爾時大慧菩薩摩訶薩與摩帝菩薩。俱遊一切諸佛國土。承佛神力從座而起。偏袒右肩右膝著地。向佛合掌曲躬恭敬而說頌言

世間離生滅　譬如虛空花　智不得有無　而興大悲心　一切法如幻　遠離於心識
智不得有無　而興大悲心　世間恒如夢　遠離於斷常　智不得有無　而興大悲心
知人法無我　煩惱及爾焰　常淸淨無相　而興大悲心　佛不住涅槃　涅槃不住佛
遠離覺不覺　若有若非有　法身如幻夢　云何可稱讚　知無性無生　乃名稱讚佛
佛無根境相　不見名見佛　云何於牟尼　而能有讚毀　若見於牟尼　寂靜遠離生
是人今後世　離著無所見

爾時大慧菩薩摩訶薩偈讚佛已。自說姓名

我名爲大慧　通達於大乘　今以百八義　仰諮尊中上

時世間解聞是語已。普觀衆會而說是言

汝等諸佛子　今皆恣所問　我當爲汝說　自證之境界

爾時大慧菩薩摩訶薩蒙佛許已。頂禮佛足以頌問曰

云何起計度　云何淨計度　云何起迷惑　云何淨迷惑　云何名佛子　及無影次第
云何刹土化　相及諸外道　解脫至何所　誰縛誰能解　云何禪境界　何故有三乘

彼以何緣生　何作何能作　誰說二俱異　云何諸有起　云何無色定　及與滅盡定
云何爲想滅　云何從定覺　云何所作生　進去及持身　云何見諸物　云何入諸地
云何有佛子　誰能破三有　何處身云何　生復住何處　云何得神通　自在及三昧
三昧心何相　願佛爲我說　云何名藏識　云何名意識　云何起諸見　云何退諸見
云何姓非姓　云何唯是心　何因建立相　云何成無我　云何無衆生　云何隨俗說
云何得不起　常見及斷見　云何佛外道　其相不相違　何故當來世　種種諸異部
云何爲性空　云何刹那滅　胎藏云何起　云何世不動　云何諸世間　如幻亦如夢
乾城及陽焰　乃至水中月　云何菩提分　覺分從何起　云何國土亂　何故見諸有
云何知世法　云何離文字　云何如空花　不生亦不滅　眞如有幾種　諸度心有幾
云何如虛空　云何離分別　云何地次第　云何得無影　何者二無我　云何所知淨
聖智有幾種　戒衆生亦然　摩尼等諸寶　斯竝云何出　誰起於語言　衆生及諸物
明處與伎術　誰之所顯示　伽他有幾種　長行句亦然　道理幾不同　解釋幾差別
飲食是誰作　愛欲云何起　云何轉輪王　及以諸小王　云何王守護　天衆幾種別
地日月星宿　斯等竝是何　解脫有幾種　修行師復幾　云何阿闍梨　弟子幾差別
如來有幾種　本生事亦然　衆魔及異學　如是各有幾　自性幾種異　心有幾種別
云何唯假設　願佛爲開演　云何爲風雲　念智何因有　藤樹等行列　此竝誰能作
云何象馬獸　何因而捕取　云何卑陋人　此竝誰能作　云何六時攝　云何一闡提
女男及不男　此竝云何生　云何修行進　云何修行退　瑜伽師有幾　令人住其中

姓明作性次同
何世宋作邪故
摩明作牟
伎元明俱作技下同
梨明作黎
此竝誰能作三本俱作願佛爲我說

果宋作菓

緣三本俱作故○心宋作言○牟三本俱作摩○是心宋明俱作心造

言三本俱作曰

修宋作脩

衆生生諸趣　何形何色相　富饒大自在　此復何因得　云何釋迦種　云何甘蔗種

仙人長苦行　是因之教授　何誰佛世尊　一切刹中現　異名諸色類　佛子衆圍遶

何因不食肉　何因令斷肉　食肉諸衆生　以何因故食　何故諸國土　猶如日月形

須彌及蓮花　卍字師子像　何故諸國土　如因陀羅網　覆住或側住　一切寶所成

何故諸國土　無垢日月光　或如花果形　箜篌細腰鼓　云何變化佛　云何爲報佛

眞如智慧佛　願皆爲我說　云何於欲界　不成等正覺　何故色究竟　離染得菩提

如來滅度後　誰當持正法　世尊住久如　正法幾時住　悉檀有幾種　諸見復有幾

何故立毘尼　及以諸比丘　一切諸佛子　獨覺及聲聞　云何轉所依　云何得無相

云何得世通　云何得出世　復以何因緣　心住七地中　僧伽有幾種　云何成破僧

云何爲衆生　廣說醫方論　何故大牟尼　唱說如是言　迦葉拘留孫　拘那含是我

何故說斷常　及與我無我　何不恒說實　一切唯是心　云何男女林　訶梨菴摩羅

雞羅娑輪圍　及以金剛山　如是處中間　無量寶莊嚴　仙人乾闥婆　一切皆充滿

此皆何因緣　願尊爲我說

爾時世尊。聞其所請大乘微妙諸佛之心最上法門。卽告之言。善哉大慧。諦聽諦聽。如汝所問當次第說。卽說頌言

若生若不生　涅槃及空相　流轉無自性　波羅蜜佛子　聲聞辟支佛　外道無色行

須彌巨海山　洲渚刹土地　星宿與日月　天衆阿修羅　解脫自在通　力禪諸三昧

滅及如意足　菩提分及道　禪定與無量　諸蘊及往來　乃至滅盡定　心生起言說

見三本俱作性○智同作知

穬元明俱作𪍿次同○升宋作斗次同○千三本俱作于

種明作衆

心意識無我　五法及自性　分別所分別　能所二種|見　諸乘種性處　金摩尼眞珠
一闡提大種　荒亂及一佛　智所|智教得　衆生有無有　象馬獸何因　云何而捕取
云何因譬喩　相應成悉檀　所作及能作　衆林與迷惑　如是眞實理　唯心無境界
諸地無次第　無相轉所依　醫方工巧論　|伎術諸明處　須彌諸山地　巨海日月量
上中下衆生　身各幾微塵　一一刹幾塵　一一弓幾肘　幾弓俱盧舍　半由旬由旬
|兎毫與隙遊　蟻羊毛|穬麥　半|升與一|升　是各幾|穬麥　一斛及十斛　十萬暨|千億
乃至頻婆羅　是等各幾數　幾塵成芥子　幾芥成草子　復以幾草子　而成於一豆
幾豆成一銖　幾銖成一兩　幾兩成一斤　幾斤成須彌　此等所應請　何因問餘事
聲聞辟支佛　諸佛及佛子　如是等身量　各有幾微塵　火風各幾塵　一一根有幾
眉及諸毛孔　復各幾塵成　如是等諸事　云何不問我　云何得財富　云何轉輪王
云何王守護　云何得解脫　云何長行句　婬欲及飮食　云何男女林　金剛等諸山
幻夢渴愛譬　諸雲從何起　時節云何有　何因種種味　女男及不男　佛菩薩嚴飾
云何諸妙山　仙闥婆莊嚴　解脫至何所　誰縛誰解脫　云何禪境界　變化及外道
云何無因作　云何有因作　云何轉諸見　云何起計度　云何淨計度　所作云何起
云何而轉去　云何斷諸想　云何起三昧　破三有者誰　何處身云何　云何無有我
云何隨俗說　汝問相云何　及所問非我　云何爲胎藏　及以餘支分　云何斷常見
云何心一境　云何言說智　戒|種性佛子　云何稱理釋　云何師弟子　衆生種性別
飮食及虛空　聰明魔施設　云何樹行布　是汝之所問　何因一切刹　種種相不同

緣句上三本俱有恆句非恆句五字
摽元明俱作標次同

或有如瑩僕　腰鼓及衆花　或有離光明　仙人長苦行　或有好族姓　令衆生尊重
或有體卑陋　爲人所輕賤　云何欲界中　修行不成佛　而於色究竟　乃昇等正覺
云何世間人　而能獲神通　何因稱比丘　何故名僧伽　云何化及報　眞如智慧佛
云何使其心　得住七地中　此及於餘義　汝今咸問我　如先佛所說　一百八種句
一一相相應　遠離諸見過　亦離於世俗　言語所成法　我當爲汝說　佛子應聽受

爾時大慧菩薩摩訶薩白佛言.世尊.何者是一百八句.佛言大慧.所謂生句非生句.常句非常句.相句非相句.住異句非住異句.剎那句非剎那句.自性句非自性句.空句非空句.斷句非斷句.心句非心句.中句非中句.緣句非緣句.因句非因句.煩惱句非煩惱句.愛句非愛句.方便句非方便句.善巧句非善巧句.清淨句非清淨句.相應句非相應句.譬喻句非譬喻句.弟子句非弟子句.師句非師句.種性句非種性句.三乘句非三乘句.無影像句非無影像句.願句非願句.三輪句非三輪句.摽相句非摽相句.有句非有句.無句非無句.俱句非俱句.自證聖智句非自證聖智句.現法樂句非現法樂句.剎句非剎句.塵句非塵句.水句非水句.弓句非弓句.大種句非大種句.算數句非算數句.神通句非神通句.虛空句非虛空句.雲句非雲句.巧明句非巧明句.伎術句非伎術句.風句非風句.地句非地句.心句非心句.假立句非假立句.體性句非體性句.蘊句非蘊句.衆生句非衆生句.覺句非覺句.涅槃句非涅槃句.所知句非所知句.外道句非外道句.荒亂句非荒亂句.幻句非幻句.夢句非夢句.陽焰句非陽焰句.影像句非影像句.火輪句非火輪句.乾闥婆句非乾闥婆句.天句非天句.飲食句非飲食句.婬欲句非婬欲句.見句非見句.波羅蜜句非波羅蜜句.戒句非戒句.日月星宿句非日月星宿句.諦句非諦句.果句非果句.滅句非滅句.滅起句非滅起句.醫方句非醫方句.相句非相句.支分句非支分句.禪句非禪句.迷句非迷句.現句非現句.護句非護句.種族句非種族句.仙句非仙句.王

說下三本俱無夾註

依因明作因依

正同作證

句非王句。攝受句非攝受句。實句非實句。記句非記句。一闡提句非一闡提句。女男不男句非女男不男句。味句非味句。作句非作句。身句非身句。計度句非計度句。動句非動句。根句非根句。有爲句非有爲句。因果句非因果句。色究竟句非色竟究句。時節句非時節句。樹藤句非樹藤句。種種句非種種句。演說句非演說句。決定句非決定句。毘尼句非毘尼句。比丘句非比丘句。住持句非住持句。文字句非文字句。大慧。此百八句。皆是過去諸佛所說。(上正列中少二句應訪尋)爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。諸識有幾種生住滅。佛言。大慧。諸識有二種生住滅。非臆度者之所能知。所謂相續生及相生。相續住及相住。相續滅及相滅。諸識有三相。謂轉相業相眞相。大慧。識廣說有八。略則唯二。謂現識及分別事識。大慧。如明鏡中現諸色像。現識亦爾。大慧。現識與分別事識。此二識無異相互爲因。大慧。現識以不思議熏變爲因。分別事識。以分別境界及無始戲論習氣爲因。大慧。阿賴耶識虛妄分別種種習氣滅。卽一切根識滅。是名相滅。大慧。相續滅者。謂所依因滅及所緣滅。卽相續滅。所依因者。謂無始戲論虛妄習氣。所緣者。謂自心所見分別境界。大慧。譬如泥團與微塵非異非不異。金與莊嚴具亦如是。大慧。若泥團與微塵異者。應非彼成而實彼成。是故不異。若不異者。泥團微塵應無分別。大慧。轉識藏識若異者。藏識非彼因。若不異者。轉識滅藏識亦應滅。然彼眞相不滅。大慧。識眞相不滅但業相滅。若眞相滅者藏識應滅。若藏識滅者。卽不異外道斷滅論。大慧。彼諸外道作如是說。取境界相續識滅。卽無始相續識滅。大慧。彼諸外道說相續識從作者生。不說眼識依色光明和合而生。唯說作者爲生因故。作者是何。彼計勝性丈夫自在時及微塵。爲能作者。復次大慧。有七種自性。所謂集自性。性自性。相自性。大種自性。因自性。緣自性。成自性。復次大慧。有七種第一義。所謂心所行。智所行。二見所行。超二見所行。超子地所行。如來所行。如來自證聖智所行。大慧。此是過去未來現在一切如來應正等覺。法自性第一義心。以此心成就如來世間出世間最上法。以聖慧眼入自共相種種安立。其所安立不與外

牙元明俱作芽

觀下明有諸字〇而三本俱作無

善明作擅

道惡見共。大慧。云何爲外道惡見。謂不知境界自分別現。於自性第一義。見有見無而起言說。大慧。我今當說。若了境如幻自心所現。則滅妄想三有苦及無知愛業緣。大慧。有諸沙門婆羅門。妄計非有及有於因果外顯現諸物。依時而住。或計蘊界處依緣生住。有已即滅。大慧。彼於若相續若作用若生若滅若諸有若涅槃若道若業若果若諦。是破壞斷滅論。何以故。不得現法故。不見根本故。大慧。譬如瓶破不作瓶事。又如燋種不能生|牙。此亦如是。若蘊界處法已現當滅。應知此則無相續生。以無因故。但是自心虛妄所見。復次大慧。若本無有識三緣合生。龜應生毛沙應出油。汝宗則壞。違決定義。所作事業悉空無益。大慧。三合爲緣是因果性可說爲有。過現未來從無生有。此依住覺想地者。所有理教及自惡見熏習餘氣。作如是說。大慧。愚癡凡夫惡見所噬。邪見迷醉。無智妄稱一切智說。大慧。復有沙門婆羅門。觀一切法皆無自性。如空中雲。如旋火輪。如乾闥婆城。如幻如焰。如水中月。如夢所見。不離自心。由無始來虛妄見故取以爲外。作是觀已斷分別緣。亦離妄心所取名義。知身及物幷所住處一切皆是藏識境界。無能所取及生住滅。如是思惟恒住不捨。大慧。此菩薩摩訶薩不久當得生死涅槃二種平等大悲方便無功用行。|觀衆生如幻如影從緣|而起。知一切境界離心無得。行無相道漸昇諸地住三昧境。了達三界皆唯自心。得如幻定絕衆影像。成就智慧證無生法。入金剛喩三昧。當得佛身恒住如如。起諸變化力通自在。大慧。方便以爲嚴飾遊衆佛國。離諸外道及心意識。轉依次第成如來身。大慧。菩薩摩訶薩欲得佛身。應當遠離蘊界處心因緣所作生住滅法戲論分別。但住心量觀察三有無始時來妄習所起。思惟佛地無相無生自證聖法。得心自在無功用行。如如意寶隨宜現身。令達唯心漸入諸地。是故大慧。菩薩摩訶薩於自悉檀應|善修學。

大乘入楞伽經卷第二

〔麗髮〕〔宋四〕〔元四〕〔明養〕

大周于闐國三藏法師實叉難陀奉勅譯

集一切法品第二之二

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言.世尊.唯願爲我說心意意識五法自性相衆妙法門.此是一切諸佛菩薩.入自心境離所行相稱眞實義諸佛敎心.唯願如來爲此山中諸菩薩衆.隨順過去諸佛.演說藏識海浪法身境界.爾時世尊.告大慧菩薩摩訶薩言.有四種因緣眼識轉.何等爲四.所謂不覺自心現而執取故.無始時來取著於色虛妄習氣故.識本性如是故.樂見種種諸色相故.大慧.以此四緣阿賴耶識如瀑流水.生轉識浪.如眼識餘亦如是.於一切諸根微塵毛孔眼等.轉識或頓生.譬如明鏡現衆色像.或漸生.猶如猛風吹大海水.心海亦爾.境界風吹起諸識浪.相續不絕.大慧.因所作相非一非異.業與生相相繫深縛.不能了知色等自性.五識身轉.大慧.與五識俱.或因了別差別境相有意識生.然彼諸識不作是念.我等同時展轉爲因.而於自心所現境界.分別執著俱時而起.無差別相各了自境.大慧.諸修行者入於三昧.以習力微起而不覺知.但作是念.我滅諸識入於三昧.實不滅識而入三昧.以彼不滅習氣種故.但不取諸境名爲識滅.大慧.如是藏識行相微細.唯除諸佛及住地菩薩.其餘一切二乘外道.定慧之力皆不能知.唯有修行如實行者.以智慧力了諸地相善達句義.無邊佛所廣集善根.不妄分別自心所見能知之耳.大慧.諸修行人宴處山林上中下修.能見自心分別流注.得諸三昧自在力通.諸佛灌頂菩薩圍繞.知心意意識所行境界.超愛業無明生死大海.是故汝等應當親近諸佛菩薩如實修行大善知識.爾時世尊重說頌言

瀑元明俱作暴

自宋作目

頌明作偈

由同作田

果元作菓

諸元明俱作識

波明作浪

無智二字宋本缺○言同作曰

譬如巨海浪　斯由猛風起　洪波鼓溟壑　無有斷絕時　藏識海常住　境界風所動
種種諸識浪　騰躍而轉生　青赤等諸色　鹽貝乳石蜜　花果日月光　非異非不異
意等七種識　應知亦如是　如海共波浪　心俱和合生　譬如海水動　種種波浪轉
藏識亦如是　種種諸識生　心意及意識　爲諸相故說　八識無別相　無能相所相
譬如海波浪　是則無差別　諸識心如是　異亦不可得　心能積集業　意能廣積集
了別故名識　對現境說五

爾時大慧菩薩摩訶薩、以頌問曰

青赤諸色像　衆生識顯現　如浪種種法　云何願佛說

爾時世尊、以頌答曰

青赤諸色像　浪中不可得　言心起衆相　開悟諸凡夫　而彼本無起　自心所取離
能取及所取　與彼波浪同　身資財安住　衆生識所現　是故見此起　與浪無差別

爾時大慧復說頌言

大海波浪性　鼓躍可分別　藏識如是起　何故不覺知

爾時世尊、以頌答曰

阿賴耶如海　轉識同波浪　爲凡夫無智　譬喩廣開演

爾時大慧復說頌言

譬如日光出　上下等皆照　世間燈亦然　應爲愚說實　已能開示法　何不顯眞實

爾時世尊、以頌答曰

波浪明作浪波

覩下宋明俱無境字

若說眞實者　彼心無眞實　譬如海波浪　鏡中像及夢　俱時而顯現　心境界亦然
境界不具故　次第而轉生　識以能了知　意復意謂然　五識了現境　無有定次第
譬如工畫師　及畫師弟子　布彩圖衆像　我說亦如是　彩色中無文　非筆亦非素
爲悅衆生故　綺煥成衆像　言說則變異　眞實離文字　我所住實法　爲諸修行說
眞實自證處　能所分別離　此爲佛子說　愚夫別開演　種種皆如幻　所見不可得
如是種種說　隨事而變異　所說非所應　於彼爲非說　譬如衆病人　良醫隨授藥
如來爲衆生　隨心應量說　世間依怙者　證智所行處　外道非境界　聲聞亦復然

復次大慧。菩薩摩訶薩若欲了知能取所取分別境界。皆是自心之所現者。當離憒鬧昏滯睡眠初中後夜勤加修習。遠離曾聞外道邪論及二乘法。通達自心分別之相。復次大慧。菩薩摩訶薩住智慧心所住相已。於上聖智三相當勤修學。何者爲三。所謂無影像相。一切諸佛願持相自證聖智所趣相。諸修行者獲此相已。即捨跛驢智慧心相。入菩薩第八地。於此三相修行不捨。大慧。無影像相者。謂由慣習一切二乘外道相故而得生起。一切諸佛願持相者。謂由諸佛自本願力所加持故而得生起。自證聖智所趣相者。謂由不取一切法相成就如幻諸三昧身。趣佛地智故而得生起。大慧。是名上聖智三種相。若得此相即到自證聖智所行之處。汝及諸菩薩摩訶薩應勤修學。爾時大慧菩薩摩訶薩知諸菩薩心之所念。承一切佛威神之力。白佛言。唯願爲說百八句差別所依聖智事自性法門。一切如來應正等覺爲諸菩薩摩訶薩墮自共相者。說此妄計性差別義門。知此義已。即能淨治二無我觀境照明諸地。超越一切二乘外道三昧之樂。見諸如來不可思議所行境界。畢竟捨離五法自性。以一切佛法身智慧而自莊嚴入如幻境。住一切刹兜率陀宮色究竟天。成如來身。佛言。大慧。有一類外道。見一切法隨因而盡。生分別解想兎無角。起於無見如兎角無。

大宋作如

由元作內明作四

淨下三本俱有自字

一切諸法悉亦如是.復有外道.見大種求那塵等諸物形量分位.各差別已執兎無角.於此而生牛有角想.大慧.彼墮二見不了唯心.但於自心增長分別.大慧.身及資生器世間等.一切皆唯分別所現.大慧應知兎角離於有無.諸法悉然勿生分別.云何兎角離於有無.互因待故.分拆牛角乃至微塵.求其體相終不可得.聖智所行遠離彼見.是故於此不應分別.爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言.世尊.彼豈不以妄見起相.比度觀待妄計無耶.佛言.不以分別起相待以言無.何以故.彼以分別爲生因故.以角分別爲其所依.所依爲因離異不異.非由相待顯兎角無.大慧.若此分別異兎角者則非角因.若不異者因彼而起.大慧.分拆牛角乃至極微求不可得.異於有角言無角者.如是分別決定非理.二俱非有誰待於誰.若相待不成.待於有故言兎角無.不應分別.不正因故.有無論者執有執無二俱不成.大慧.復有外道.見色形狀虛空分齊而生執著.言色異虛空起於分別.大慧.虛空是色隨入色種.大慧.色是虛空.能持所持建立性故.色空分齊應如是知.大慧.大種生時自相各別.不住虛空中.非彼無虛空.大慧.兎角亦爾.觀待牛角言彼角無.大慧.分拆牛角乃至微塵.又拆彼塵其相不現.彼何所待而言無耶.若待餘物彼亦如是.大慧.汝應遠離兎角牛角虛空及色所有分別.汝及諸菩薩摩訶薩.應常觀察自心所見分別之相.於一切國土爲諸佛子說觀察自心修行之法.爾時世尊即說頌言

心所見無有　唯依心故起　身資所住影　衆生藏識現　心意及與識　自性五種法
二無我清淨　諸導師演說　長短共觀待　展轉互相生　因有故成無　因無故成有
微塵分拆事　不起色分別　唯心所安立　惡見者不信　外道非行處　聲聞亦復然
救世之所說　自證之境界

爾時大慧菩薩摩訶薩.爲淨心現流故而請佛言.世尊.云何淨諸衆生自心現流.爲漸次淨爲頓淨耶.佛言

伎元明俱作技

作下相字三本俱無

大慧.漸淨非頓.如菴羅果漸熟非頓.諸佛如來淨諸衆生自心現流.亦復如是漸淨非頓.如陶師造器漸成非頓.諸佛如來淨諸衆生自心現流.亦復如是漸而非頓.譬如大地生諸草木漸生非頓.諸佛如來淨諸衆生自心現流.亦復如是漸而非頓.大慧.譬如人學音樂書畫種種|伎術漸成非頓.諸佛如來淨諸衆生自心現流.亦復如是漸而非頓.譬如明鏡頓現衆像而無分別.諸佛如來淨諸衆生自心現流.亦復如是.頓現一切無相境界而無分別.如日月輪一時遍照一切色像.諸佛如來淨諸衆生自心過習.亦復如是.頓爲示現不可思議諸佛如來智慧境界.譬如藏識頓現於身及資生國土一切境界.報佛亦爾.於色究竟天.頓能成熟一切衆生令修諸行.譬如法佛頓現報佛及以化佛光明照曜.自證聖境亦復如是.頓現法相而爲照曜.令離一切有無惡見.復次大慧.法性所流佛說一切法自相共相.自心現習氣因相妄計性所執因相.更相繫屬種種幻事皆無自性.而諸衆生種種執著取以爲實.悉不可得.復次大慧.妄計自性執著緣起自性起.大慧.譬如幻師以幻術力.依草木瓦石幻作衆生若干色像.令其見者種種分別.皆無眞實.大慧.此亦如是.由取著境界習氣力故.於緣起性中.有妄計性種種相現.是名妄計性生.大慧.是名法性所流佛說法相.大慧.法性佛者.建立自證智所行.離心自性相.大慧.化佛說施戒忍進禪定智慧蘊界處法及諸解脫諸識行相.建立差別越外道見超無色行.復次大慧.法性佛非所攀緣.一切所緣一切所作|相根量等相悉皆遠離.非凡夫二乘及諸外道執著我相所取境界.是故大慧.於自證聖智勝境界相當勤修學.於自心所現分別見相當速捨離.復次大慧.聲聞乘有二種差別相.所謂自證聖智殊勝相.分別執著自性相云.何自證聖智殊勝相.謂明見苦空無常無我諸諦境界.離欲寂滅故.於蘊界處若自若共外不壞相.如實了知故心住一境.住一境已獲禪解脫三昧道果而得出離.住自證聖智境界樂.未離習氣及不思議變易死.是名聲聞乘自證聖智境界相.菩薩摩訶薩雖亦得此聖智境界.以憐愍衆生故.本願所持故.不證寂滅門及三昧樂.諸

此因明作因此

菩薩摩訶薩於此自證聖智樂中不應修學。大慧。云何分別執著自性相。所謂知堅濕煖動靑黃赤白如是等法非作者生。然依敎理見自共相分別執著。是名聲聞乘分別執著相。菩薩摩訶薩於此法中應知。應捨離人無我見入法無我相漸住諸地。爾時大慧菩薩摩訶薩白佛言。世尊。如來所說常不思議自證聖智第一義境。將無同諸外道所說常不思議作者耶。佛言。大慧。非諸外道作者得常不思議。所以者何。諸外道常不思議因自相不成。既因自相不成。以何顯示常不思議。大慧。外道所說常不思議。若因自相成彼則有常。但以作者爲因相故。常不思議不成。大慧。我第一義常不思議。第一義因相成。遠離有無。自證聖智所行相故有相。第一義智爲其因故有因。離有無故非作者。如虛空涅槃寂滅法故常不思議。是故我說常不思議。不同外道所有諍論。大慧。此常不思議。是諸如來自證聖智所行眞理。是故菩薩當勤修學。復次大慧。外道常不思議。以無常異相因故常。非自相因力故常。大慧。外道常不思議。以見所作法有已還無。無常已比知是常。我亦見所作法。有已還無。無常已不因此說爲常。大慧。外道以如是因相成常不思議。此因相非有。同於兎角故。常不思議唯是分別但有言說。何故彼因同於兎角。無自因相故。大慧。我常不思議以自證爲因相。不以外法有已還無無常爲因。外道反此。曾不能知常不思議自因之相。而恒在於自證聖智所行相外。此不應說。復次大慧。諸聲聞畏生死妄想苦而求涅槃。不知生死涅槃差別之相一切皆是妄分別有。無所有故。妄計未來諸根境滅以爲涅槃。不知證自智境界轉所依藏識爲大涅槃。彼愚癡人說有三乘。不說唯心無有境界。大慧。彼人不知去來現在諸佛所說自心境界。取心外境常於生死輪轉不絕。復次大慧。去來現在諸如來說一切法不生。何以故。自心所見非有性故。離有無生故。如兎馬等角凡愚妄取。唯自證聖智所行之處。非諸愚夫二分別境。大慧。身及資生器世間等。一切皆是藏識影像。所取能取二種相現。彼諸愚夫。墮生住滅二見中故。於中妄起有無分別。大慧。汝於此義當勤修學。復次大慧。有五種種性。何等爲五。謂

竪明作堅下同

聲聞乘種性．緣覺乘種性．如來乘種性．不定種性．無種性．大慧．云何知是聲聞乘種性．謂若聞說於蘊界處自相共相．若知若證．舉身毛竪．心樂修習．於緣起相不樂觀察．應知此是聲聞乘種性．彼於自乘見所證已．於五六地斷煩惱結．不斷煩惱習．住不思議死．正師子吼言．我生已盡．梵行已立．所作已辦．不受後有．修習人無我．乃至生於得涅槃覺．大慧．復有衆生求證涅槃．言能覺知我人衆生養者取者．此是涅槃．復有說言．見一切法因作者有．此是涅槃．大慧．彼無解脫．以未能見法無我故．此是聲聞乘及外道種性．於未出中生出離想．應勤修習捨此惡見．大慧．云何知是緣覺乘種性．謂若聞說緣覺乘法．舉身毛竪．悲泣流淚．離憒鬧緣．無所染著．有時聞說現種種身．或聚或散．神通變化．其心信受無所違逆．當知此是緣覺乘種性．應爲其說緣覺乘法．大慧．如來乘種性所證法有三種．所謂自性無自性法．內身自證聖智法．外諸佛刹廣大法．大慧．若有聞說此一一法及自心所現身財建立阿賴耶識不思議境．不驚不怖不畏．當知此是如來乘性．大慧．不定種性者．謂聞說彼三種法時．隨生信解而順修學．大慧．爲初治地人而說種性．欲令其入無影像地．作此建立．大慧．彼住三昧樂聲聞．若能證知自所依識．見法無我淨煩惱習．畢竟當得如來之身．爾時世尊卽說頌言

預流一來果　不還阿羅漢　是等諸聖人　其心悉迷惑　我所立三乘　一乘及非乘
爲愚夫少智　樂寂諸聖說　第一義法門　遠離於二取　住於無境界　何建立三乘
諸禪及無量　無色三摩提　乃至滅受想　唯心不可得

復次大慧．此中一闡提．何故於解脫中不生欲樂．大慧．以捨一切善根故．爲無始衆生起願故．云何捨一切善根．謂謗菩薩藏言．此非隨順契經調伏解脫之說．作是語時．善根悉斷不入涅槃．云何爲無始衆生起願．謂諸菩薩以本願方便願．一切衆生悉入涅槃．若一衆生未涅槃者我終不入．此亦住一闡提趣．此是無涅

知明作之

槃種性相。大慧菩薩言。世尊。此中何者畢竟不入涅槃。佛言。大慧。彼菩薩一闡提。知一切法本來涅槃。畢竟不入非捨善根。何以故。捨善根一闡提。以佛威力故。或時善根生。所以者何。佛於一切衆生無捨時故。是故菩薩一闡提不入涅槃。復次大慧。菩薩摩訶薩當善知三自性相。何者爲三。所謂妄計自性。緣起自性。圓成自性。大慧。妄計自性從相生。云何從相生。謂彼依緣起事相種類顯現。生計著故。大慧。彼計著事相。有二種妄計性生。是諸如來之所演說。謂名相計著相。事相計著相。大慧。事計著相者。謂計著內外法。相計著相者。謂卽彼內外法中計著自共相。是名二種妄計自性相。大慧。從所依所緣起。是緣起性。何者圓成自性。謂離名相事相一切分別。自證聖智所行眞如。大慧。此是圓成自性如來藏心。爾時世尊卽說頌言

名相分別　二自性相　正智眞如　是圓成性

大慧。是名觀察五法自性相法門。自證聖智所行境界。汝及諸菩薩摩訶薩當勤修學。復次大慧。菩薩摩訶薩當善觀察二無我相。何者爲二。所謂人無我相。法無我相。大慧。何者是人無我相。謂蘊界處離我我所。無知愛業之所生起。眼等識生。取於色等而生計著。又自心所見身器世間。皆是藏心之所顯現。刹那相續變壞不停。如河流。如種子。如燈焰。如迅風。如浮雲。躁動不安如猨猴。樂不淨處如飛蠅。不知厭足如猛火。無始虛僞習氣爲因。諸有趣中流轉不息。如汲水輪。種種色身威儀進止。譬如死屍呪力故行。亦如木人因機運動。若能於此善知其相。是名人無我智。大慧。云何爲法無我智。謂知蘊界處是妄計性。如蘊界處離我我所。唯共積聚愛業繩縛。互爲緣起無能作者。蘊等亦爾離自共相。虛妄分別種種相現。愚夫分別非諸聖者。如是觀察一切諸法。離心意意識五法自性。是名菩薩摩訶薩法無我智。得此智已知無境界。了諸地相卽入初地。心生歡喜次第漸進。乃至善慧及以法雲。諸有所作皆悉已辦。住是地已有大寶蓮花王衆寶莊嚴。於其花上有寶宮殿狀如蓮花。菩薩往修幻性法門之所成就。而坐其上。同行佛子前後圍遶。一切佛刹所有

如來皆舒其手.如轉輪王子灌頂之法而灌其頂.超佛子地獲自證法.成就如來自在法身.大慧.是名見法無我相.汝及諸菩薩摩訶薩應勤修學.爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言.世尊.願說建立誹謗相.令我及諸菩薩摩訶薩離此惡見疾得阿耨多羅三藐三菩提.得菩提已破建立常誹謗斷見.令於正法不生毀謗.佛受其請卽說頌言.

身資財所住　皆唯心影像　凡愚不能了　起建立誹謗　所起但是心　離心不可得

爾時世尊欲重說此義.告大慧言.有四種無有有建立.何者爲四.所謂無有相建立相.無有見建立見.無有因建立因.無有性建立性.是爲四.大慧.誹謗者.謂於諸惡見所建立法求不可得.不善觀察遂生誹謗.此是建立誹謗相.大慧.云何無有相建立相.謂於蘊界處自相共相本無所有.而生計著.此如是此不異.而此分別從無始種種惡習所生.是名無有相建立相.云何無有見建立見.謂於蘊界處.建立我人衆生等見.是名無有見建立見.云何無有因建立因.謂初識前無因不生.其初識本無.後眼色明念等爲因如幻生.生已有有還滅.是名無有因建立因.云何無有性建立性.謂於虛空涅槃非數滅無作性.執著建立.大慧.此離性非性.一切諸法離於有無.猶如毛輪兎馬等角.是名無有性建立性.大慧.建立誹謗.皆是凡愚不了唯心而生分別.非諸聖者.是故汝等當勤觀察遠離此見.大慧.菩薩摩訶薩善知心意意識五法自性二無我相已.爲衆生故作種種身.如依緣起起妄計性.亦如摩尼隨心現色.普入佛會聽聞佛說.諸法如幻如夢如影.如鏡中像如水中月.遠離生滅及以斷常.不住聲聞辟支佛道.聞已成就無量百千億那由他三昧.得此三昧已.遍遊一切諸佛國土.供養諸佛生諸天上.顯揚三寶示現佛身.爲諸聲聞菩薩大衆.說外境界皆唯是心.悉令遠離有無等執.爾時世尊卽說頌言

佛子能觀見　世間唯是心　示現種種身　所作無障礙　神通力自在　一切皆成就

說三本俱作明

時同作待

譬下三本俱無如字

刹明作殺

二三本俱作度

爾時大慧菩薩摩訶薩復請佛言．願爲我說一切法空無生無二無自性相．我及諸菩薩悟此相故離有無分別．疾得阿耨多羅三藐三菩提．佛言．諦聽當爲汝說．大慧．空者卽是妄計性句義．大慧．爲執著妄計自性故．說空無生無二無自性．大慧．畧說空性有七種．謂相空自性空無行空行空一切法不可說空第一義聖智大空彼彼空．云何相空．謂一切法自相共相空．展轉積聚互相待故．分析推求無所有故．自他及共皆不生故．自共相無生亦無住．是故名一切法自相空．云何自性空．謂一切法自性不生．是名自性空．云何無行空．所謂諸蘊本來涅槃無有諸行．是名無行空．云何行空．所謂諸蘊由業及因和合而起．離我我所．是名行空．云何一切法不可說空．謂一切法妄計自性無可言說．是名不可說空．云何第一義聖智大空．謂得自證聖智時．一切諸見過習悉離．是名第一義聖智大空．云何彼彼空．謂於此無彼．是名彼彼空．譬如鹿子母堂無象馬牛羊等．我說彼堂空非無比丘衆．大慧．非謂堂無堂自性．非謂比丘無比丘自性．非謂餘處無象馬牛羊．大慧．一切諸法自共相．彼彼求不可得．是故說名彼彼空．是名七種空．大慧．此彼彼空空中最麤．汝應遠離．復次大慧．無生者．自體不生而非不生．除住三昧．是名無生．大慧．無自性者．以無生故密意而說．大慧．一切法無自性．以刹那不住故．見後變異故．是名無自性．云何無二相．大慧．如光影如長短如黑白．皆相待立．獨則不成．大慧．非於生死外有涅槃．非於涅槃外有生死．生死涅槃無相違相．如生死涅槃．一切法亦如是．是名無二相．大慧．空無生無二無自性相．汝當勤學．爾時世尊重說頌言

我常說空法　遠離於斷常　生死如幻夢　而業亦不壞　虛空及涅槃　滅二亦如是

愚夫妄分別　諸聖離有無

爾時世尊復告大慧菩薩摩訶薩言．大慧．此空無生無自性無二相．悉入一切諸佛所說修多羅中．佛所說經皆有是義．大慧．諸修多羅隨順一切衆生心說．而非眞實在於言中．譬如陽焰誑惑諸獸令生水想而實

無水。衆經所說亦復如是。隨諸愚夫自所分別令生歡喜。非皆顯示聖智證處眞實之法。大慧。應隨順義莫著言說。爾時大慧菩薩摩訶薩白佛言。世尊。修多羅中說如來藏本性淸淨。常恒不斷無有變易。具三十二相。在於一切衆生身中。爲蘊界處垢衣所纏。貪恚癡等妄分別垢之所汙染。如無價寶在垢衣中。外道說我是常作者。離於求那自在無滅。世尊所說如來藏義。豈不同於外道我耶。佛言。大慧。我說如來藏。不同外道所說之我。大慧。如來應正等覺。以性空實際涅槃不生無相無願等諸句義。說如來藏。爲令愚夫離無我怖。說無分別無影像處如來藏門。未來現在諸菩薩摩訶薩。不應於此執著於我。大慧。譬如陶師於泥聚中以人功水杖輪繩方便作種種器。如來亦爾。於遠離一切分別相無我法中。以種種智慧方便善巧。或說如來藏。或說爲無我。種種名字各各差別。大慧。我說如來藏。爲攝著我諸外道衆。令離妄見入三解脫。速得證於阿耨多羅三藐三菩提。是故諸佛說如來藏。不同外道所說之我。若欲離於外道見者。應知無我如來藏義。

爾時世尊卽說頌曰

士夫相續蘊　衆緣及微塵　勝自在作者　此但心分別

爾時大慧菩薩觀未來一切衆生。復請佛言。願爲我說具修行法。如諸菩薩摩訶薩成大修行。佛言。大慧。菩薩摩訶薩具四種法成大修行。何者爲四。謂觀察自心所現故。遠離生住滅見故。善知外法無性故。專求自證聖智故。若諸菩薩成此四法。則得名爲大修行者。大慧。云何觀察自心所現。謂觀三界唯是自心。離我我所。無動作無來去。無始執著過習所熏。三界種種色行名言繫縛身資所住分別隨入之所顯現。菩薩摩訶薩如是觀察自心所現。大慧。云何得離生住滅見。所謂觀一切法如幻夢生。自他及俱皆不生故。隨自心量之所現故。見外物無有故。見諸識不起故。及衆緣無積故。分別因緣起三界故。如是觀時。若內若外一切諸法皆不可得。知無體實遠離生見。證如幻性。卽時逮得無生法忍。住第八地。了心意意識五法自性二無

功明作工次同

曰三本俱作言

薩下三本俱有摩訶薩三字

爲元作無　牙元明俱作芽○名上三本俱有是字○作下同有所字　惟明作唯　三明作生

我境。轉所依止獲意生身。大慧言。世尊。以何因緣名意生身。佛言。大慧。意生身者。譬如意去速疾無礙。名意生身。大慧。譬如心意於無量百千由旬之外。憶先所見種種諸物。念念相續疾詣於彼。非是其身及山河石壁所能爲礙。意生身者亦復如是。如幻三昧力通自在諸相莊嚴。憶本成就衆生願故。猶如意去生於一切諸聖衆中。是名菩薩摩訶薩得遠離於生住滅見。大慧。云何觀察外法無性。謂觀察一切法。如陽焰如夢境如毛輪。無始戲論種種執著。虛妄惡習爲其因故。如是觀察一切法時。卽是專求自證聖智。大慧。是名菩薩具四種法成大修行。汝應如是勤加修學。爾時大慧菩薩摩訶薩復請佛言。願說一切法因緣相。令我及諸菩薩摩訶薩了達其義離有無見。不妄執諸法漸生頓生。佛言。大慧。一切法因緣生有二種。謂內及外。外者謂以泥團水杖輪繩人功等緣。和合成瓶。如泥瓶縷疊草席種牙酪蘇。悉亦如是。名外緣前後轉生。內者謂無明愛業等生蘊界處法。是爲內緣起。此但愚夫之所分別。大慧。因有六種。謂當有因相屬因相因能作因顯了因觀待因。大慧。當有因者。謂內外法作因生果。相屬因者。謂內外法作緣生果。蘊種子等。相因者。作無間相生相續果。能作因者。謂作增上而生於果如轉輪王。顯了因者。謂分別生能顯境相如燈照物。觀待因者。謂滅時相續斷。無妄想生。大慧。此是愚夫自所分別。非漸次生亦非頓生。何以故。大慧若頓生者。則作與所作無有差別。求其因相不可得故。若漸生者。求其體相亦不可得。如未生子云何名父。諸計度人言以因緣所緣緣無間緣增上緣等。所生能生互相繫屬。次第生者理不得成。皆是妄情執著相故。大慧。漸次與頓皆悉不生。但有心現身資等故。外自共相皆無性故。惟除識起自分別見。大慧。是故應離因緣所作和合相中漸頓生見。爾時世尊重說頌言

一切法無生　亦復無有滅　於彼諸緣中　分別生滅相　非遮諸緣會　如是滅復生
但止於凡愚　妄情之所著　緣中法有無　是悉無有生　習氣迷轉心　從是三有現

本來無有生　亦復無有滅　觀一切有爲　譬如虛空花　離能取所取　一切迷惑見
無能生所生　亦復無因緣　但隨世俗故　而說有生滅

爲宋明倶作無

大乘入楞伽經卷第三

〔麗髮〕〔宋四〕〔元四〕〔明養〕

大周于闐國三藏法師實叉難陀奉勅譯

集一切法品第二之三

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。願爲我說言說分別相心法門。我及諸菩薩摩訶薩善知此故。通達能說所說二義。疾得阿耨多羅三藐三菩提。令一切衆生於二義中而得淸淨。佛言。大慧。有四種言說分別相。所謂相言說。夢言說。計著過惡言說。無始妄想言說。大慧。相言說者。所謂執著自分別色相生。夢言說者。謂夢先所經境界覺已憶念。依不實境生。計著過惡言說者。謂憶念怨讎先所作業生。無始妄想言說者。以無始戲論妄執習氣生。是爲四。大慧復言。世尊。願更爲說言語分別所行之相。何處何因云何而起。佛言。大慧。依頭胷喉鼻脣齶齒舌和合而起。大慧復言。世尊。言語分別爲異不異。佛言。大慧。非異非不異。何以故。分別爲因起言語故。若異者分別不應爲因。若不異者語言不應顯義。是故非異亦非不異。大慧復言。世尊。爲言語是第一義。爲所說是第一義。佛告大慧。非言語是亦非所說。何以故。第一義者是聖樂處因言而入。非卽是言。第一義者是聖智內自證境。非言語分別智境。言語分別不能顯示。大慧。言語者起滅動搖展轉因緣生。若展轉緣生於第一義不能顯示。第一義者無自他相。言語有相不能顯示。第一義者但唯自心。種種外想悉皆無有。言語分別不能顯示。是故大慧。應當遠離言語分別。爾時世尊重說頌言

諸法無自性　亦復無言說　不見空空義　愚夫故流轉　一切法無性　離語言分別
諸有如夢化　非生死涅槃　如王及長者　爲令諸子喜　先示相似物　後賜眞實者

喉下宋元俱無鼻字

想三本俱作相

翳明作瞖下同

我今亦復然　先說相似法　後乃爲其演　自證實際法

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言世尊.願爲我說離一異俱不俱有無非有無常無常等.一切外道所不能行.自證聖智所行境界.遠離妄計自相共相.入於眞實第一義境.漸淨諸地入如來位.以無功用本願力故.如如意寶普現一切無邊境界.一切諸法皆是自心所見差別.令我及餘諸菩薩等於如是等法.離妄計自性自共相見.速證阿耨多羅三藐三菩提.普令衆生具足圓滿一切功德.佛言.大慧.善哉善哉.汝哀愍世間請我此義.多所利益多所安樂.大慧.凡夫無智不知心量.妄習爲因執著外物.分別一異俱不俱有無非有無常無常等一切自性.大慧.譬如群獸爲渴所逼.於熱時焰而生水想.迷惑馳趣不知非水.愚癡凡夫亦復如是.無始戲論分別所熏.三毒燒心樂色境界.見生住滅取內外法.墮一異等執著之中.大慧.如乾闥婆城非城非非城.無智之人無始時來.執著城種妄習熏故而作城想.外道亦爾.以無始來妄習熏故.不能了達自心所現.著一異等種種言說.大慧.譬如有人夢見男女象馬車步城邑園林種種嚴飾.覺已憶念彼不實事.大慧.汝意云何.如是之人是黠慧不.答言不也.大慧.外道亦爾.惡見所噬不了唯心.執著一異有無等見.大慧.譬如畫像無高無下.愚夫妄見作高下想.未來外道亦復如是.惡見熏習妄心增長.執一異等自壞壞他.於離有無無生之論.亦說爲無.此謗因果拔善根本.應知此人分別有無起自他見.當墮地獄.欲求勝法宜速遠離.大慧.譬如翳目見有毛輪.互相謂言此事希有.而此毛輪非有非無.見不見故.外道亦爾.惡見分別執著一異俱不俱等.誹謗正法自陷陷他.大慧.譬如火輪實非是輪.愚夫取著非諸智者.外道亦爾.惡見樂欲執著一異俱不俱等.一切法生.大慧.譬如水泡似玻瓈珠.愚夫執實奔馳而取.然彼水泡非珠非非珠.取不取故.外道亦爾.惡見分別習氣所熏.說非有爲生壞於緣有.復次大慧.立三種量已.於聖智內證離二自性法.起有性分別.大慧.諸修行者.轉心意識離能所取.住如來地自證聖法.於有及無不起於想.大慧.諸

竟明作境

緣三本俱作緣

像明作相

修行者．若於境界起有無執．則著我人衆生壽者．大慧．一切諸法自相共相．是化佛說非法佛說．大慧．化佛說法但順愚夫所起之見．不爲顯示自證聖智三昧樂境．大慧．譬如水中有樹影現．彼非影非非影．非樹形非非樹形．外道亦爾．諸見所熏不了自心．於一異等而生分別．大慧．譬如明鏡無有分別．隨順衆緣現諸色像．彼非像非非像而見像非像．愚夫分別而作像想．外道亦爾．於自心所現種種形像．而執一異俱不俱相．大慧．譬如谷響依於風水人等音聲和合而起．彼非有非無．以聞聲非聲故．外道亦爾．自心分別熏習力故．起於一異俱不俱見．大慧．譬如大地無草木處日光照觸焰水波動．波非有非無．以倒想非想故．愚癡凡夫亦復如是．無始戲論惡習所熏．於聖智自證法性門中．見生住滅一異有無俱不俱性．大慧．譬如木人及以起屍．以毘舍闍機關力故．動搖運轉云爲不絕．無智之人取以爲實．愚癡凡夫亦復如是．隨逐外道起諸惡見．著一異等虛妄言說．是故大慧．當於聖智所證法中離生住滅一異有無俱不俱等一切分別．爾時世尊重說頌言

諸識蘊有五　猶如水樹影　所見如幻夢　不應妄分別　三有如陽焰　幻夢及毛輪
若能如是觀　究竟得解脫　譬如熱時焰　動轉迷亂心　渴獸取爲水　而實無水事
如是識種子　動轉見境界　如翳者所見　愚夫生執著　無始生死中　執著所緣覆
退捨令出離　如因楔出楔　幻呪機所作　浮雲夢電光　觀世恒如是　永斷三相續
此中無所有　如空中陽焰　如是知諸法　則爲無所知　諸蘊如毛輪　於中妄分別
唯假施設名　求相不可得　如畫垂髮幻　夢乾闥婆城　火輪熱時焰　實無而見有
如是常無常　一異俱不俱　無始繫縛故　愚夫妄分別　明鏡水淨眼　摩尼妙寶珠
於中現色像　而實無所有　心識亦如是　普現衆色相　如夢空中焰　亦如石女兒

縁上三本倶無攀字次同

復次大慧。諸佛說法離於四句。謂離一異倶不倶及有無等建立誹謗。大慧。諸佛說法以諦縁起滅道解脫而爲其首。非與勝性自在宿作自然時微塵等而共相應。大慧。諸佛說法爲淨惑智二種障故。次第令住一百八句無相法中。而善分別諸乘地相。猶如商主善導衆人。復次大慧。有四種禪。何等爲四。謂愚夫所行禪。觀察義禪。攀縁眞如禪。諸如來禪。大慧。云何愚夫所行禪。謂聲聞縁覺諸修行者。知人無我。見自他身骨鎖相連皆是無常苦不淨相。如是觀察堅著不捨。漸次增勝至無想滅定。是名愚夫所行禪。云何觀察義禪。謂知自共相人無我已。亦離外道自他倶作。於法無我諸地相義。隨順觀察。是名觀察義禪。云何攀縁眞如禪。謂若分別無我有二是虛妄念。若如實知彼念不起。是名攀縁眞如禪。云何諸如來禪。謂入佛地住自證聖智三種樂。爲諸衆生作不思議事。是名諸如來禪。爾時世尊重說頌言

愚夫所行禪　觀察義相禪　攀縁眞如禪　如來淸淨禪　修行者在定　觀見日月形
波頭摩深險　虛空火及晝　如是種種相　墮於外道法　亦墮於聲聞　辟支佛境界
捨離此一切　住於無所縁　是則能隨入　如如眞實相　十方諸國土　所有無量佛
悉引光明手　而摩是人頂

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。諸佛如來所說涅槃。說何等法名爲涅槃。佛告大慧。一切識自性習氣。及藏識意意識見習轉已。我及諸佛說名涅槃。卽是諸法性空境界。復次大慧。涅槃者。自證聖智所行境界。遠離斷常及以有無。云何非常。謂離自相共相諸分別故。云何非斷。謂去來現在一切聖者自證智所行故。復次大慧。大般涅槃不壞不死。若死者應更受生。若壞者應是有爲。是故涅槃不壞不死。諸修行者之所歸趣。復次大慧。無捨無得故。非斷非常故。不一不異故。說名涅槃。復次大慧。聲聞縁覺知自共相捨離憒鬧。不生顚倒不起分別。彼於其中生涅槃想。復次大慧。有二種自性相。何者爲二。謂執著言說自性相。執著諸

起明作執

谷下三本俱作諸作

法自性相。執著言說自性相者。以無始戲論執著言說習氣故起。執著諸法自性相者。以不覺自心所現故起。復次大慧。諸佛有二種加持。持諸菩薩。令頂禮佛足請問衆義。云何爲二。謂令入三昧。及身現其前手灌其頂。大慧。初地菩薩摩訶薩蒙諸佛持力故。入菩薩大乘光明定。入已十方諸佛普現其前身語加持。如金剛藏及餘成就如是功德相菩薩摩訶薩者是。大慧。此菩薩摩訶薩蒙佛持力入三昧已。於百千劫集諸善根。漸入諸地善能通達治所治相。至法雲地處大蓮花微妙宮殿。坐於寶座。同類菩薩所共圍繞。首戴寶冠身如黃金。瞻蔔花色如盛滿月放大光明。十方諸佛舒蓮花手。於其座上而灌其頂。如轉輪王太子受灌頂已而得自在。此諸菩薩亦復如是。是名爲二。諸菩薩摩訶薩爲二種持之所持故。即能親見一切諸佛。異則不能。復次大慧。諸菩薩摩訶薩。入於三昧現通說法。如是一切皆由諸佛二種持力。大慧。若諸菩薩離佛加持能說法者。則諸凡夫亦應能說。大慧。山林草樹城郭宮殿及諸樂器如來至處。以佛持力尙演法音。況有心者。聾盲瘖瘂離苦解脫。大慧。如來持力有如是等廣大作用。大慧菩薩復白佛言。何故如來以其持力。令諸菩薩入於三昧及殊勝地中手灌其頂。佛言。大慧。爲欲令其遠離魔業諸煩惱故。爲令不墮聲聞地故。爲令速入如來地故。令所得法倍增長故。是故諸佛以加持力持諸菩薩。大慧。若不如是。彼菩薩便墮外道及以聲聞魔境之中。則不能得無上菩提。是故如來以加持力攝諸菩薩。爾時世尊重說頌言

世尊淸淨願　有大加持力　初地十地中　三昧及灌頂

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。佛說緣起。是由作起非自體起。外道亦說勝性自在時我微塵生於諸法。今佛世尊但以異名說作緣起。非義有別。世尊。外道亦說以作者故從無生有。世尊亦說以因緣故一切諸法本無而生生已歸滅。如佛所說。無明緣行乃至老死。此說無因非說有因。世尊說言。此有故彼有。若一時建立非次第相待者。其義不成。是故外道說勝。非如來也。何以故。外道說因不從緣生而有所生。世尊

亦元明俱作示

所說。果待於因因復待因。如是展轉成無窮過。又此有故彼有者。則無有因佛言。大慧。我了諸法唯心所現無能取所取。說此有故彼有。非是無因及因緣過失。大慧。若不了諸法唯心所現。計有能取及以所取。執著外境若有若無。彼有是過非我所說。大慧。菩薩。復白佛言。世尊。有言說故必有諸法。若無諸法言依何起。佛言。大慧。雖無諸法亦有言說。豈不現見龜毛兎角石女兒等。世人於中皆起言說。大慧。彼非有非非有。而有言說耳。大慧。如汝所說。有言說故有諸法者。此論則壞。大慧。非一切佛土皆有言說。言說者假安立耳。大慧。或有佛土瞪視顯法。或現異相。或復揚眉。或動目睛。或示微笑嚬呻謦欬憶念動搖。以如是等而顯於法。大慧。如不瞬世界妙香世界及普賢如來佛土之中。但瞪視不瞬。令諸菩薩獲無生法忍及諸勝三昧。大慧。非由言說而有諸法。此世界中蠅蟻等蟲。雖無言說成自事故。爾時世尊重說頌言

如虛空兎角　及與石女兒　無而有言說　妄計法如是
因緣和合中　愚夫妄謂生　不能如實解　流轉於三有

爾時大慧菩薩摩訶薩。復白佛言。世尊。所說常聲依何處說。佛言。大慧。依妄法說。以諸妄法聖人亦現然不顚倒。大慧。譬如陽焰火輪垂髮乾闥婆城夢幻鏡像。世無智者生顚倒說。有智不然然非不現。大慧。妄法現時無量差別。然非無常。何以故。離有無故。云何離有無。一切愚夫種種解故。如恒河水有見不見。餓鬼不見不可言有。餘所見故不可言無。聖於妄法離顚倒見。大慧。妄法是常。相不異故。非諸妄法有差別相。以分別故而有別異。是故妄法其體是常。大慧。云何而得妄法眞實。謂諸聖者於妄法中不起顚倒。非顚倒覺。若於妄法有少分想則非聖智。有少想者。當知則是愚夫戲論非聖言說。大慧。若分別妄法是倒非倒。彼則成就二種種性。謂聖種性。凡夫種性。大慧。聖種性者。彼復三種。謂聲聞緣覺佛乘別故。大慧。云何愚夫分別妄法生聲聞乘種性。所謂計著自相共相。大慧。何謂復有愚夫分別妄法成緣覺乘種性。謂卽執著自共相時離

謂明作於

已同作以

於憒閙.大慧.何謂智人分別妄法而得成就佛乘種性.所謂了達一切唯是自心分別所見無有外法.大慧.有諸愚夫分別妄法種種事物.決定如是決定不異.此則成就生死乘性.大慧.彼妄法中種種事物.非即是物亦非非物.大慧.即彼妄法.諸聖智者.心意意識諸惡習氣自性法轉依故.即說此妄名爲眞如.是故眞如離於心識.我今明了顯示此句離分別者.悉離一切諸分別故.大慧菩薩白言.世尊.所說妄法爲有爲無.佛言.如幻無執著相故.若執著相體是有者.應不可轉.則諸緣起.應如外道說作者生.大慧又言.若諸妄法同於幻者.此則當與餘妄作因.佛言大慧.非諸幻事爲妄惑因.以幻不生諸過惡故.以諸幻事無分別故.大慧.夫幻事者.從他明呪而得生起.非自分別過習力起.是故幻事不生過惡.大慧.此妄惑法唯是愚夫心所執著.非諸聖者.爾時世尊重說頌言

聖不見妄法　中間亦非實　以妄即眞故　中間亦眞實　若離於妄法　而有相生者
此還即是妄　如翳未清淨

復次大慧.見諸法非幻無有相似.故說一切法如幻.大慧言.世尊.爲依執著種種幻相.言一切法猶如幻耶.爲異依此執著顚倒相耶.若依執著種種幻相.言一切法猶如幻者.世尊.非一切法悉皆如幻.何以故.見種種色相不無因故.世尊.都無有因令種種色相顯現如幻.是故世尊.不可說言依於執著種種幻相.言一切法與幻相似.佛言.大慧.不依執著種種幻相言一切法如幻.大慧.以一切法不實速滅如電故說如幻.大慧.譬如電光見已即滅.世間凡愚悉皆現見一切諸法.依自分別自共相現亦復如是.以不能觀察無所有故.而妄計著種種色相.爾時世尊重說頌言

非幻無相似　亦非有諸法　不實速如電　如幻應當知

爾時大慧菩薩摩訶薩.復白佛言.世尊.如佛先說.一切諸法皆悉無生.又言如幻.將非所說前後相違.佛言.

大慧．無有相違．何以故．我了於生卽是無生．唯是自心之所見故．若有若無一切外法．見其無性本不生故．大慧．爲離外道因生義故．我說．諸法皆悉不生大慧．外道群聚共興惡見言從有無生一切法．非自執著分別爲緣．大慧．我說諸法非有無生故名無生．大慧．說諸法者．爲令弟子知依諸業攝受生死遮其無有斷滅見故．大慧．說諸法相猶如幻者．令離諸法自性相故．爲諸凡愚墮惡見欲不知諸法唯心所現．爲令遠離執著因緣生起之相．說一切法如幻如夢．彼諸愚夫執著惡見欺誑自他．不能明見一切諸法如實住處．大慧．見一切法如實處者．謂能了達唯心所現．爾時世尊重說頌言

無作故無生　有法攝生死　了達如幻等　於相不分別

復次大慧．我當說名句文身相．諸菩薩摩訶薩善觀此相了達其義．疾得阿耨多羅三藐三菩提．復能開悟一切衆生．大慧．名身者．謂依事立名．名卽是身．是名名身．句身者．謂能顯義決定究竟．是名句身．文身者．謂由於此能成名句．是名文身．復次大慧．句身者．謂句事究竟．名身者．謂諸字名各各差別．如從阿字乃至阿字．文身者．謂長短高下．復次句身者．如足跡．如衢巷中人畜等跡．名謂非色四蘊．以名說故．文謂名之自相．由文顯故．是名名句文身．此名句文身相汝應修學．爾時世尊重說頌言

名身與句身　及字身差別　凡愚所計著　如象溺深泥

復次大慧．未來世中有諸邪智惡思覺者．離如實法以見一異俱不俱相．問諸智者．彼卽答言．此非正問．謂色與無常．爲異爲不異．如是涅槃諸行．相所相．依所依．造所造．見所見．地與微塵．智與智者．爲異爲不異．如是等不可記事次第而問．世尊說此當止記答．愚夫無智非所能知．佛欲令其離驚怖處不爲記說．大慧．不記說者．欲令外道永得出離作者見故．大慧．諸外道衆計有作者．作如是說．命卽是身命異身異．如是等說名無記論．大慧．外道癡惑說無記論．非我教中說離能所取不起分別．云何可止．大慧．若有執著能取所取．

謂明作諸

記同作計

中下三本俱有大慧我教中五字

返三本俱作反

行上同無果字

不了唯是自心所見．彼應可止．大慧．諸佛如來以四種記論爲衆生說法．大慧．止記論者我別時說．以根未熟且止說故．復次大慧．何故一切法不生．以離能作所作無作者故．何故一切法無自性．以證智觀自相共相不可得故．何故一切法無來去．以自共相來無所從去無所至故．何故一切法不滅．謂一切法無性相故．不可得故．何故一切法無常．謂諸相起無常性故．何故一切法常．謂諸相起卽是不起．無所有故．無常性常．是故我說一切法常．爾時世尊重說頌言

一向及返問　分別與置答　如是四種說　摧伏諸外道　數論與勝論　言有非有生

如是等諸說　一切皆無記　以智觀察時　體性不可得　以彼無可說　故說無自性

爾時大慧菩薩摩訶薩．復白佛言．世尊．願爲我說諸須陀洹須陀洹果行差別相．我及諸菩薩摩訶薩聞是義故．於須陀洹斯陀含阿那含阿羅漢方便相皆得善巧．如是而爲衆生演說．令其證得二無我法淨除二障．於諸地相漸次通達．獲於如來不可思議智慧境界．如衆色摩尼．普令衆生悉得饒益．佛言．諦聽當爲汝說．大慧言唯．佛言．大慧．諸須陀洹須陀洹果差別有三．謂下中上．大慧．下者於諸有中極七反生．中者三生五生．上者卽於此生而入涅槃．大慧．此三種人斷三種結．謂身見疑戒禁取．上上勝進得阿羅漢果．大慧．身見有二種．謂俱生及分別．如依緣起有妄計性．大慧．譬如依止緣起性故種種妄計執著性生．彼法但是妄分別相．非有非無．非亦有亦無．凡夫愚癡而橫執著．猶如渴獸妄生水想．此分別身見無智慧故久遠相應．見人無我卽時捨離．大慧．俱生身見．以普觀察自他之身受等四蘊無色相故．色由大種而得生故．是諸大種互相因故．色不集故．如是觀已．明見有無卽時捨離．捨身見故貪則不生．是名身見相．大慧．疑相者．於所證法善見相故．及先二種身見分別斷故．於諸法中疑不得生．亦不於餘生大師想．爲淨不淨．是名疑相．大慧．何故須陀洹不取戒禁．謂以明見生處苦相．是故不取．夫其取者．謂諸凡愚於諸有中貪著世樂．苦行持

戒願生於彼。須陀洹人不取是相。惟求所證最勝無漏無分別法。修行戒品。是名戒禁取相。大慧。須陀洹人捨三結故離貪瞋癡。大慧白言。貪有多種捨何等貪。佛言。大慧。捨於女色纏綿貪欲。見此現樂生來苦故。又得三昧殊勝樂故。是故捨彼非涅槃貪。大慧。云何斯陀含果。謂不了色相起色分別。一往來已善修禪行。盡苦邊際而般涅槃。是名斯陀含。大慧。云何阿那含果。謂於過未現在色相起有無見分別過惡隨眠不起。永捨諸結更不還來。是名阿那含。大慧。阿羅漢者。謂諸禪三昧解脫力通悉已成就。煩惱諸苦分別永盡。是名阿羅漢。大慧言。世尊。阿羅漢有三種。謂一向趣寂。退菩提願。佛所變化。此說何者。佛言。大慧。此說趣寂非是其餘。大慧。餘二種人。謂已曾發巧方便願。及為莊嚴諸佛衆會於彼示生。大慧。於虛妄處說種種法。所謂證果禪者及禪皆性離故。自心所見得果相故。大慧。若須陀洹作如是念。我離諸結則有二過。謂墮我見及諸結不斷。復次大慧。若欲超過諸禪無量無色界者。應離自心所見諸相。大慧。想受滅三昧。超自心所見境者不然。不離心故。爾時世尊重說頌言

諸禪與無量　無色三摩提　及以想受滅　惟心不可得　預流一來果　不還阿羅漢
如是諸聖人　悉依心妄有　禪者禪所緣　斷惑見眞諦　此皆是妄想　了知即解脫

復次大慧。有二種覺智。謂觀察智。及取相分別執著建立智。觀察智者。謂觀一切法。離四句不可得。四句者。謂一異俱不俱有非有常無常等。我以諸法離此四句。是故說言一切法離。大慧。如是觀法汝應修學。云何取相分別執著建立智。謂於堅濕煖動諸大種性。取相執著虛妄分別。以宗因喩而妄建立。是名取相分別執著建立智。是名二種覺智相。菩薩摩訶薩知此智相。即能通達人法無我。以無相智於解行地善巧觀察。入於初地得百三昧。以勝三昧力見百佛百菩薩。知前後際各百劫事。光明照曜百佛世界。善能了知上上地相。以勝願力變現自在。至法雲地而受灌頂。入於佛地十無盡願成就衆生。種種應現無有休息。而恒安

惟明作唯

惟三本俱作唯

惟明作唯○現無宋元俱作見無明作見如

曰明作言

住自覺境界三昧勝樂。復次大慧。菩薩摩訶薩當善了知大種造色。云何了知。大慧。菩薩摩訶薩應如是觀彼諸大種眞實不生。以諸三界但是分別。惟心所現。無有外物。如是觀時大種所造悉皆性離。超過四句無我我所。住如實處成無生相。大慧。彼諸大種云何造色。大慧。謂虛妄分別津潤大種成內外水界。炎盛大種成內外火界。飄動大種成內外風界。色分段大種成內外地界。離於虛空。由執著邪諦。五蘊聚集大種造色生。大慧。識者以執著種種言說境界。爲因起故。於餘趣中相續受生。大慧。地等造色有大種因。非四大種爲大種因。何以故。謂若有法有形相者。則是所作非無形者。大慧。此大種造色相外道分別。非是我說。復次大慧。我今當說五蘊體相。謂色受想行識。大慧。色謂四大及所造色。此各異相。受等非色。大慧。非色諸蘊猶如虛空無有四數。大慧。譬如虛空超過數相。然分別言此是虛空。非色諸蘊亦復如是。離諸數相。離有無等四種句故。數相者愚夫所說。非諸聖者。諸聖但說如幻所作。唯假施設離異不異。如夢如像無別所有。不了聖智所行境故。見有諸蘊分別現前。是名諸蘊自性相。大慧。如是分別汝應捨離。捨離此已說寂靜法。斷一切刹諸外道見。淨法無我入遠行地。成就無量自在三昧。獲意生身。如幻三昧力通自在皆悉具足。猶如大地普益群生。復次大慧。涅槃有四種。何等爲四。謂諸法自性無性涅槃。種種相性無性涅槃。覺自相性無性涅槃。斷諸蘊自共相流注涅槃。大慧。此四涅槃是外道義。非我所說。大慧。我所說者。分別爾炎識滅名爲涅槃。大慧言。世尊。豈不建立八種識耶。佛言建立。大慧言。若建立者。云何但說意識滅非七識滅。佛言。大慧。以彼爲因及所緣故。七識得生。大慧。意識分別境界起執著時。生諸習氣長養藏識。由是意俱我我所執。思量隨轉無別體相。藏識爲因爲所緣故。執著自心所現境界。心聚生起展轉爲因。大慧。譬如海浪。自心所現境界風吹而有起滅。是故意識滅時七識亦滅。爾時世尊重說頌曰

我不以自性　及以於作相　分別境識滅　如是說涅槃

意識爲心因　心爲意境界

瀑元作暴　生明作主○是同作時　證三本俱作說　謂明作用○縛同作復

因及所緣故　諸識依止生　如大瀑流盡　波浪則不起　如是意識滅　種種識不生

復次大慧。我今當說妄計自性差別相。令汝及諸菩薩摩訶薩。善知此義。超諸妄想證聖智境。知外道法。遠離能取所取分別。於依他起種種相中。不更取著妄所計相。大慧云何妄計自性差別相。所謂言說分別所說分別。相分別。財分別。自性分別。因分別。見分別。理分別。生分別。不生分別。相屬分別。縛解分別。大慧。此是妄計自性差別相。云何言說分別。謂執著種種美妙音詞。是名言說分別。云何所說分。別謂執有所說事。是聖智所證境依此起說。是名所說分別。云何相分別。謂卽於彼所說事中。如渴獸想分別執著堅濕煖動等一切諸相。是名相分別。云何財分別。謂取著種種金銀等寶。而起言說。是名財分別。云何自性分別。謂以惡見如是分別此自性。決定非餘。是名自性分別。云何因分別。謂於因緣分別有無。以此因相而能生故。是名因分別。云何見分別。謂諸外道惡見。執著有無一異俱不俱等。是名見分別。云何理分別。謂有執著我我所相而起言說。是名理分別。云何生分別。謂計諸法若有若無從緣而生。是名生分別。云何不生分別。謂計一切法本來不生。未有諸緣而先有體不從因起。是名不生分別。云何相屬分別。謂此與彼遞相繫屬。如針與線。是名相屬分別。云何縛解分別。謂執因能縛而有所縛。如人以繩方便力故縛已復解。是名縛解分別。大慧。此是妄計性差別相。一切凡愚於中執著若有若無。大慧。於緣起中。執著種種妄計自性。如依於幻見種種物。凡愚分別見異於幻。大慧。幻與種種非異非不異。若異者。應幻非種種因。若一者。幻與種種應無差別。然見差別是故非異非不異。大慧。汝及諸菩薩摩訶薩於幻有無不應生著。爾時世尊重說頌言

心爲境所縛　覺想智隨轉　無相最勝處　平等智慧生　在妄計是有　於緣起則無
妄計迷惑取　緣起離分別　種種支分生　如幻不成就　雖現種種相　妄分別則無
彼相卽是過　皆從心縛生　妄計者不了　分別緣起法　此諸妄計性　皆卽是緣起

妄計有種種　緣起中分別　世俗第一義　第三無因生　妄計是世俗　斷則聖境界
如修觀行者　於一種種現　於彼無種種　妄計相如是　如目種種翳　妄想見衆色
彼無色非色　不了緣起然　如金離塵垢　如水離泥濁　如虛空無雲　妄想淨如是
無有妄計性　而有於緣起　建立及誹謗　斯由分別壞　若無妄計性　而有緣起者
無法而有法　有法從無生　依因於妄計　而得有緣起　相名常相隨　而生於妄計
以緣起依妄　究竟不成就　是時現清淨　名爲第一義　妄計有十二　緣起有六種
自證眞如境　彼無有差別　五法爲眞實　三自性亦爾　修行者觀此　不越於眞如
依於緣起相　妄計種種名　彼諸妄計相　皆因緣起有　智慧善觀察　無緣無妄計
眞實中無物　云何起分別　圓成若是有　此則離有無　既已離有無　云何有二性
妄計有二性　二性是安立　分別見種種　清淨聖所行　妄計種種相　緣起中分別
若異此分別　則墮外道論　以諸妄見故　妄計於妄計　離此二計者　則爲眞實法

大慧菩薩摩訶薩。復白佛言。世尊。惟願爲說自證聖智行現及一乘行相。我及諸菩薩摩訶薩得此善巧。於佛法中不由他悟。佛言。諦聽當爲汝說。大慧言唯。佛言。大慧。菩薩摩訶薩依諸聖教無有分別。獨處閑靜觀察自覺。不由他悟離分別見。上上昇進入如來地。如是修行。名自證聖智行相。云何名一乘行相。謂得證知一乘道故。云何名爲知一乘道。謂離能取所取分別如實而住。大慧。此一乘道。惟除如來。非外道二乘梵天王等之所能得。大慧白佛言。世尊。何故說有三乘不說一乘。佛言。大慧。聲聞緣覺無自般涅槃法故。我說一乘。以彼但依如來所說調伏遠離。如是修行而得解脫。非自所得。又彼未能除滅智障及業習氣。未覺法無我。未名不思議變易死。是故我說以爲三乘。若彼能除一切過習覺法無我。是時乃離三昧所醉。於無漏界

壞元明俱作境　覺明作境　已同作以　惟三本俱作唯下同　白下同無佛字

而得覺悟已。於出世上上無漏界中修諸功德。普使滿足獲不思議自在法身。爾時世尊重說頌言

天乘及梵乘　聲聞緣覺乘　諸佛如來乘　諸乘我所說　乃至有心起　諸乘未究竟
彼心轉滅已　無乘及乘者　無有乘建立　我說爲一乘　爲攝愚夫故　說諸乘差別
解脫有三種　謂離諸煩惱　及以法無我　平等智解脫　譬如海中木　常隨波浪轉
聲聞心亦然　相風所漂激　雖滅起煩惱　猶被習氣縛　三昧酒所醉　住於無漏界
彼非究竟趣　亦復不退轉　以得三昧身　乃至劫不覺　譬如昏醉人　酒消然後悟
聲聞亦如是　覺後當成佛

悟下同有既覺悟三字

彼明作彼○所同作初

大乘入楞伽經卷第三

〔麗髮〕〔宋四〕〔元四〕〔明養〕

大乘入楞伽經卷第四

大周于闐國三藏法師實叉難陀奉勅譯

無常品第三之一

爾時佛告大慧菩薩摩訶薩言。今當爲汝說意成身差別相。諦聽諦聽善思念之。大慧言唯。佛言。大慧。意成身有三種。何者爲三。謂入三昧樂意成身。覺法自性意成身。種類俱生無作行意成身。諸修行者入初地已漸次證得。大慧。云何入三昧樂意成身。謂三四五地入於三昧。離種種心寂然不動。心海不起轉識波浪。了境心現皆無所有。是名入三昧樂意成身。云何覺法自性意成身。謂八地中了法如幻皆無有相。心轉所依。住如幻定及餘三昧。能現無量自在神通。如花開敷速疾如意。如幻如夢如影如像。非四大造與造相似。一切色相具足莊嚴。普入佛刹了諸法性。是名覺法自性意成身。云何種類俱生無作行意成身。謂了達諸佛自證法相。是名種類俱生無作行意成身。大慧。三種身相當勤觀察。爾時世尊重說頌言

我大乘非乘　非聲亦非字　非諦非解脫　亦非無相覺　然乘摩訶衍　三摩提自在
種種意成身　自在花莊嚴

爾時大慧菩薩摩訶薩。復白佛言。世尊。如世尊說五無間業。何者爲五。若人作已墮阿鼻獄。佛言諦聽當爲汝說。大慧言唯。佛告大慧。五無間者。所謂殺母殺父。殺阿羅漢。破和合僧。懷惡逆心出佛身血。大慧。何者爲衆生母。謂引生愛與貪喜俱如母養育。何者爲父。所謂無明令生六處聚落中故。斷二根本名殺父母。云何殺阿羅漢。謂隨眠爲怨如鼠毒發。究竟斷彼。是故說名殺阿羅漢。云何破和合僧。謂諸蘊異相和合積聚。究

品目宋元俱無之一二字
四大三本俱作造所
覺同作境
生明作身

離明作唯

竟斷彼名爲破僧。云何惡心出佛身血。謂八識身妄生思覺。見自心外自相共相。以三解脫無漏惡心。究竟斷彼八識身佛。名爲惡心出佛身血。大慧。是爲內五無間。若有作者。無間卽得現證實法。復次大慧。今爲汝說外五無間。令汝及餘菩薩聞是義已於未來世不生疑惑。云何外五無間。謂餘敎中所說無間。若有作者。於三解脫不能現證。唯除如來諸大菩薩及大聲聞。見其有造無間業者。爲欲勸發令其改過。以神通力示同其事。尋卽悔除證於解脫。此皆化現非是實造。有實造若無間業者終無現身而得解脫。唯除覺了自心所現身資所住。離我我所分別執見。或於來世餘處受生。遇善知識離分別過方證解脫。爾時世尊重說頌言

貪愛名爲母　無明則是父　識了於境界　此則名爲佛　隨眠阿羅漢　蘊聚和合僧
斷彼無餘間　是名無間業

爾時大慧菩薩摩訶薩。復白佛言。世尊。願爲我說諸佛體性。佛言。大慧。覺二無我。除二種障。離二種死。斷二煩惱。是佛體性。大慧。聲聞緣覺得此法已。亦名爲佛。我以是義但說一乘。爾時世尊重說頌言

善知二無我　除二障二惱　及不思議死　是故名如來

爾時大慧菩薩摩訶薩。復白佛言。世尊。如來以何密意。於大衆中唱如是言。我是過去一切諸佛。及說百千本生之事。我於爾時。作頂生王大象鸚鵡月光妙眼如是等。佛言。大慧。如來應正等覺。依四平等秘密意故。於大衆中作如是言。我於昔時作拘留孫佛拘那含牟尼佛迦葉佛。云何爲四。所謂字平等語平等身平等法平等。云何字平等。謂我名佛。一切如來亦名爲佛。佛名無別是謂字等。云何語平等。謂我作六十四種梵音聲語。一切如來亦作此語。迦陵頻伽梵音聲性。不增不減無有差別。是名語等。云何身平等。謂我與諸佛。法身色相及隨形好等無差別。除爲調伏種種衆生現隨類身。是謂身等。云何法平等。謂我與諸佛皆同證

出明作世

得三十七種菩提分法.是謂法等.是故如來應正等覺.於大衆中作如是說.爾時世尊重說頌言

迦葉拘留孫　拘那含是我　依四平等故　爲諸佛子說

爾時大慧菩薩摩訶薩.復白佛言.世尊.如世尊說.我於某夜成最正覺.乃至某夜當入涅槃.於其中間不說一字.亦不已說亦不當說.不說是佛說.世尊.依何密意作如是語.佛言.大慧.依二密法故作如是說.云何二法.謂自證法及本住法.云何自證法.謂諸佛所證我亦同證不增不減.證智所行離言說相.離分別相離名字相.云何本住法.謂法本性如金等在鑛.若佛出世若不出世.法住法位.法界法性皆悉常住.大慧.譬如有人行曠野中見向古城平坦舊道.即便隨入止息遊戲.大慧.於汝意云何.彼作是道及以城中種種物耶.白言不也.佛言.大慧.我及諸佛所證眞如.常住法性亦復如是.是故說言始從成佛乃至涅槃.於其中間不說一字.亦不已說亦不當說.爾時世尊重說頌言

某夜成正覺　某夜般涅槃　於此二中間　我都無所說　自證本住法　故作是密語
我及諸如來　無有少差別

爾時大慧菩薩摩訶薩.復白佛言.世尊.願說一切法有無相.令我及諸菩薩摩訶薩離此相疾得阿耨多羅三藐三菩提.佛言諦聽當爲汝說.大慧言唯.佛言.大慧.世間衆生多墮二見.謂有見無見.墮二見故非出出想.云何有見.謂實有因緣而生諸法非不實有.實有諸法從因緣生非無法生.大慧.如是說者則說無因.云何無見.謂知受貪瞋癡.已而妄計言無.大慧.及彼分別有相.而不受諸法有.復有知諸如來聲聞緣覺無貪瞋癡性而計爲非有.此中誰爲壞者.大慧白言.謂有貪瞋癡性後取於無.名爲壞者.佛言善哉.汝解我問.此人非止無貪瞋癡名爲壞者.亦壞如來聲聞緣覺.何以故.煩惱內外不可得故.體性非異非不異故.大慧.貪瞋癡性若內若外皆不可得.無體性故.無可取故.聲聞緣覺及以如來本性解脫.無有能縛及縛因故.大慧.

密宋作蜜○惟三本俱作唯下同

無明作非

於明作于

若有能縛及以縛因則有所縛。作如是說名爲壞者。是爲無有相。我依此義密意而說。寧起我見如須彌山。不起空見懷增上慢。若起此見名爲壞者。墮自共見樂欲之中。不了諸法惟心所現。以不了故見有外法剎那無常。展轉差別蘊界處相。相續流轉起已還滅。虛妄分別。離文字相。亦成壞者。爾時世尊。重說頌言

有無是二邊　乃至心所行　淨除彼所行　平等心寂滅　不取於境界　非滅無所有
有眞如妙物　如諸聖所行　本無而有生　生已而復滅　因緣有及無　彼非住我法
非外道非佛　非我非餘衆　能以緣成有　云何而得無　誰以緣成有　而復得言無
惡見說爲生　妄想計有無　若知無所生　亦復無所滅　觀世悉空寂　有無二俱離

爾時大慧菩薩摩訶薩。復請佛言。世尊。惟願爲說宗趣之相。令我及諸菩薩摩訶薩善達此義不隨一切衆邪妄解疾得阿耨多羅三藐三菩提。佛言諦聽當爲汝說。大慧言唯。佛言。大慧。一切二乘及諸菩薩。有二種宗法相。何等爲二。謂宗趣法相。言說法相。宗趣法相者。謂自所證殊勝之相。離於文字語言分別。入無漏界成自地行。超過一切不正思覺。伏魔外道生智慧光。是名宗趣法相。言說法相者。謂說九部種種教法。離於一異有無等相。以巧方便隨衆生心令入此法。是名言說法相。汝及諸菩薩當勤修學。爾時世尊重說頌言

宗趣與言說　自證及教法　若能善知見　不隨他妄解　如愚所分別　非是眞實相
彼豈不求度　無法而可得　觀察諸有爲　生滅等相續　增長於二見　顚倒無所知
涅槃離心意　唯此一法實　觀世悉虛妄　如幻夢芭蕉　無有貪恚癡　亦復無有人
從愛生諸蘊　如夢之所見

爾時大慧菩薩摩訶薩。復白佛言。世尊。願爲我說虛妄分別相。此虛妄分別云何而生。是何而生。因何而生。誰之所生。何故名爲虛妄分別。佛言。大慧。善哉善哉。汝爲哀愍世間天人而問此義。多所利益多所安樂。諦

聽諦聽善思念之、當爲汝說、大慧言唯、佛言、大慧、一切衆生於種種境、不能了達自心所現、計能所取虛妄執著、起諸分別墮有無見、增長外道妄見習氣、心心所法相應起時、執有外義種種可得、計著於我及以我所、是故名爲虛妄分別、大慧白言、若如是者、外種種義性離有無起諸見相、世尊、第一義諦亦復如是、離諸根量宗因譬喩、世尊、何故於種種義言起分別、第一義中不言起耶、將無世尊所言乖理、一處言起一不言故、世尊、又說虛妄分別墮有無見、譬如幻事種種非實、分別亦爾有無相離、云何而說墮二見耶、此說豈不墮於世見、佛言、大慧、分別不生不滅、何以故、不起有無分別相故、所見外法皆無有故、了唯自心之所現故、但以愚夫分別自心、種種諸法著種種相、而作是說、令知所見皆是自心、斷我我所一切見著、離作所作諸惡因緣、覺唯心故轉其意樂、善明諸地入佛境界、捨五法自性諸分別見、是故我說、虛妄分別執著種種自心所現諸境界生、如實了知則得解脫、爾時世尊重說頌言

諸因及與緣　從此生世間　與四句相應　不知於我法　世非有無生　亦非俱不俱
云何諸愚夫　分別因緣起　非有亦非無　亦復非有無　如是觀世間　心轉證無我
一切法不生　以從緣生故　諸緣之所作　所作法非生　果不自生果　有二果失故
無有二果故　非有性可得　觀諸有爲法　離能緣所緣　決定唯是心　故我說心量
量之自性處　緣法二俱離　究竟妙淨事　我說名心量　施設假名我　而實不可得
諸蘊蘊假名　亦皆無實事　有四種平等　相因及所生　無我爲第四　修行者觀察
離一切諸見　及能所分別　無得亦無生　我說是心量　非有亦非無　有無二俱離
如是心亦離　我說是心量　眞如空實際　涅槃及法界　種種意成身　我說是心量
妄想習氣縛　種種從心生　衆生見爲外　我說是心量　外所見非有　而心種種現

脣明作唇
語同作義
識同作說
共明作無

身資及所住　我說是心量

爾時大慧菩薩摩訶薩。復白佛言。世尊。如來說言。如我所說。汝及諸菩薩。不應依語而取其義。世尊。何故不應依語取義。云何爲語云何爲義。佛言。諦聽當爲汝說。大慧言唯。佛言。大慧。語者所謂分別習氣而爲其因。依於喉舌脣齶齒輔。而出種種音聲文字。相對談說。是名爲語。云何爲義。菩薩摩訶薩住獨一靜處。以聞思修慧。思惟觀察向涅槃道自智境界。轉諸習氣。行於諸地種種行相。是名爲義。復次大慧。菩薩摩訶薩善於語義。知語與義不一不異。義之與語亦復如是。若義異語。則不應因語而顯於義。而因語見義如燈照色。大慧。譬如有人持燈照物知此物如是在如是處。菩薩摩訶薩亦復如是。因語言燈入離言說自證境界。復次大慧。若有於不生不滅自性涅槃三乘一乘五法諸心自性等中如言取義則墮建立及誹謗見。以異於彼起分別故。如見幻事計以爲實。是愚夫見非賢聖也。爾時世尊重說頌言

若隨言取義　建立於諸法　以彼建立故　死墮地獄中　蘊中無有我　非蘊即是我
不如彼分別　亦復非無有　如愚所分別　一切皆有性　若如彼所見　皆應見眞實
一切染淨法　悉皆無體性　不如彼所見　亦非無別有

復次大慧。我當爲汝說。智識相。汝及諸菩薩摩訶薩。若善了知智識之相。則能疾得阿耨多羅三藐三菩提。大慧。智有三種。謂世間智。出世間智。出世間上上智。云何世間智。謂一切外道凡愚計有無法。云何出世間智。謂一切二乘著自共相。云何出世間上上智。謂諸佛菩薩觀一切法皆無有相。不生不滅非有非無。證法無我入如來地。大慧。復有三種智。謂知自相共相智。知生滅智。知不生不滅智。復次大慧。生滅是識。不生滅是智。墮相無相及以有無種種相因是識。離相無相及有無因是智。有積集相是識。無積集相是智。著境界相是識。不著境界相是智。三和合相應生是識。無礙相應自性相是智。有得相是識。無得相是智。證自聖智

行同作得
集業同作業集
○逮宋作建○
威明作爲○想
同作相下同

所行境界。如水中月不入不出故。爾時世尊重說頌言

採集業爲心　觀察法爲智　慧能證無相　逮自在威光　境界縛爲心　覺想生爲智
無相及增勝　於慧於中起　心意及與識　離諸分別想　得無分別法　佛子非聲聞
寂滅殊勝忍　如來清淨智　生於善勝義　遠離諸所行　我有三種智　聖者能明照
分別於諸相　開示一切法　我智離諸相　超過於二乘　以諸聲聞等　執著諸法有
如來智無垢　了達唯心故

復次大慧。諸外道有九種轉變見。所謂形轉變。相轉變。因轉變。相應轉變。見轉變。生轉變。物轉變。緣明了轉變。所作明了轉變。是爲九。一切外道因是見故。起有無轉變論。此中形轉變者。謂形別異見。譬如以金作莊嚴具。環釧瓔珞種種不同。形狀有殊金體無易。一切法變亦復如是。諸餘外道種種計著。皆非如是亦非別異。但分別故一切轉變。如是應知。譬如乳酪酒果等熟。外道言此皆有轉變。而實無有若有若無自心所見無外物故。如此皆是愚迷凡夫從自分別習氣而起。實無一法若生若滅。如因幻夢所見諸色。如石女兒說有生死。爾時世尊重說頌言

形處時轉變　大種及諸根　中有漸次生　妄想非明智　諸佛不分別　緣起及世間
但諸緣世間　如乾闥婆城

爾時大慧菩薩摩訶薩。復白佛言。世尊。惟願如來爲我解說於一切法深密義及解義相。令我及諸菩薩摩訶薩善知此法。不墮如言取義深密執著。離文字語言虛妄分別。普入一切諸佛國土。力通自在總持所印。覺慧善住十無盡願。以無功用種種變現。光明照曜如日月摩尼地水火風。住於諸地離分別見。知一切法如幻如夢。入如來位普化衆生。令知諸法虛妄不實。離有無品斷生滅執。不著言說令轉所依。佛言諦聽當

爲汝說。大慧。於一切法如言取義執著深密其數無量。所謂相執著。緣執著。有非有執著。生非生執著。滅非滅執著。乘非乘執著。爲無爲執著。地地自相執著。自分別現證執著。外道宗有無品執著。三乘一乘執著。大慧。此等密執有無量種。皆是凡愚自分別執而密執著。此諸分別如蠶作蠒。以妄想絲自纏纏他。執著有無欲樂堅密。大慧。此中實無密非密相。以菩薩摩訶薩見一切法住寂靜故。無分別故。若了諸法唯心所見。無有外物皆同無相。隨順觀察。於若有若無分別密執。悉見寂靜。是故無有密非密相。大慧。此中無縛亦無有解。不了實者見縛解耳。何以故。一切諸法若有若無。求其體性不可得故。復次大慧。愚癡凡夫有三種密縛。謂貪恚癡及愛。來生與貪喜俱。以此密縛。令諸衆生續生五趣。密縛若斷是則無有密非密相。復次大慧。若有執著三和合緣。諸識密縛次第而起。有執著故則有密縛。若見三解脫離三和合識。一切諸密皆悉不生。

爾時世尊重說頌言

不實妄分別　是名爲密相　若能如實知　諸密網皆斷　凡愚不能了　隨言而取義

譬如蠶處蠒　妄想自纏縛

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。如世尊說。由種種心分別諸法。非諸法有自性。此但妄計耳。世尊。若但妄計無諸法者。染淨諸法將無悉壞。佛言。大慧。如是如是如汝所說。一切凡愚分別諸法。而諸法性非如是有。此但妄執無有性相。然諸聖者以聖慧眼如實知見有諸法自性。大慧白言若諸聖人以聖慧眼見有諸法性。非天眼肉眼。不同凡愚之所分別。云何凡愚得離分別。不能覺了諸聖法故。世尊。彼非顚倒非不顚倒。何以故。不見聖人所見法故。聖見遠離有無相故。聖亦不如凡所分別如是得故。非自所行境界相故。彼亦見有諸法性相。如妄執性而顯現故。不說有因及無因故。墮於諸法性相見故。世尊。其餘境界既不同此。如是則成無窮之失。孰能於法了知性相。世尊。諸法性相不因分別。云何而言以分別故而有諸法。世尊。分

蠒元明俱作繭次同

別相異諸法相異因不相似。云何諸法而由分別。復以何故凡愚分別不如是有。而作是言。為令衆生捨分別故。說如分別所見法相無如是法。世尊。何故令諸衆生離有無見所執著法。而復執著聖智境界墮於有見。何以故。不說寂靜空無之法。而說聖智自性事故。佛言。大慧。我非不說寂靜空法墮於有見。何以故。已說聖智自性事故。我為衆生無始時來計著於有。於寂靜法以聖事說。今其聞已不生恐怖。能如實證寂靜空法。離惑亂相入唯識理。知其所見無有外法。悟三脫門獲如實印。見法自性了聖境界。遠離有無一切諸著。復次大慧。菩薩摩訶薩不應成立一切諸法皆悉不生。何以故。一切法本無有故。及彼宗因生相故。復次大慧。一切法不生此言自壞。何以故。彼宗有待而生故。又彼宗即入一切法中。不生相亦不生故。又彼宗諸分而成故。又彼宗有無法皆不生。此宗即入一切法中。有無相亦不生故。是故一切法不生此宗自壞。不應如是立諸分多過故。展轉因異相故。如不生一切法空無自性亦如是。大慧。菩薩摩訶薩應說一切法如幻如夢。見不見故。一切皆是惑亂相故。除為愚夫而生恐怖。大慧。凡夫愚癡墮有無見。莫令於彼而生驚恐遠離大乘。爾時世尊重說頌言

無自性無說　無事無依處　凡愚妄分別　惡覺如死屍　一切法不生　外道所成立
以彼所有生　非緣所成故　一切法不生　智者不分別　彼宗因生故　此覺則便壞
譬如目有瞖　妄想見毛輪　諸法亦如是　凡愚妄分別　三有唯假名　無有實法體
由此假施設　分別妄計度　假名諸事相　動亂於心識　佛子悉超過　遊行無分別
無水取水相　斯由渴愛起　凡愚見法爾　諸聖則不然　聖人見清淨　生於三解脫
遠離於生滅　常行無相境　修行無相境　亦復無有無　有無悉平等　是故生聖果
云何法有無　云何成平等　若心不了法　內外斯動亂　了已則平等　亂相爾時滅

爾時大慧菩薩摩訶薩．復白佛言．世尊．如佛所說．若知境界但是假名都不可得．則無所取．無所取故亦無能取．能取所取二俱無故不起分別．說名爲智．世尊．何故彼智不得於境．爲不能了一切諸法自相共相一異義故言不得耶．爲以諸法自相共相種種不同更相隱蔽而不得耶．爲山巖石壁簾幔帷障之所覆隔而不得耶．爲極遠極近老小盲冥諸根不具而不得耶．若不了諸法自相共相一異義故．言不得者．此不名智應是無智．以有境界而不知故．若以諸法自相共相種種不同更相隱蔽而不得者．此亦非智．以知於境說名爲智．非不知故．若山巖石壁簾幔帳障之所覆隔．極遠極近老小盲冥而不知者．彼亦非智．以有境界智不具足而不知故．佛言大慧．此實是智非如汝說．我之所說非隱覆說．我言境界唯是假名不可得者．以了但是自心所見外法有無．智慧於中畢竟無得．以無得故爾焰不起．入三脫門智體亦忘．非如一切覺想凡夫無始已來戲論熏習計著外法若有若無種種形相．如是而知名爲不知．不了諸法唯心所見．著我我所分別境智．不知外法是有是無．其心住於斷見中故．爲令捨離如是分別．說一切法唯心建立．爾時世尊重說頌言

若有於所緣　智慧不觀見　彼無智非智　是名妄計者
無邊相互隱　障礙及遠近　智慧不能見　是名爲邪智
老小諸根冥　而實有境界　不能生智慧　是名爲邪智

復次大慧．愚癡凡夫無始虛僞惡邪分別之所幻惑．不了如實及言說法．計心外相著方便說．不能修習清淨眞實離四句法．大慧白言．如是如是誠如尊教．願爲我說如實之法及言說法．令我及諸菩薩摩訶薩於此二法而得善巧．非外道二乘之所能入．佛言諦聽當爲汝說．大慧．三世如來有二種法．謂言說法及如實法．言說法者．謂隨衆生心爲說種種諸方便教．如實法者．謂修行者於心所現離諸分別．不墮一異俱不俱品．超度一切心意意識．於自覺聖智所行境界．離諸因緣相應見相．一切外道聲聞緣覺墮二邊者．所不能

障明作帳

者明作著

利下三本俱無不得法利四字

龍同作畜生之三字

相元明俱作根

知。是名如實法。此二種法汝。及諸菩薩摩訶薩當善修學。爾時世尊復說頌言

我說二種法　言教及如實　教法示凡夫　實爲修行者

爾時大慧菩薩摩訶薩。復白佛言。世尊。如來一時說盧迦耶陀呪術詞論。但能攝取世間財利。不得法利。不得法利不應親近承事供養。世尊何故作如是說。佛言。大慧。盧迦耶陀所有詞論但飾文句誑惑凡愚。隨順世間虛妄言說。不如於義不稱於理。不能證入眞實境界。不能覺了一切諸法。恒墮二邊自失正道。亦令他失輪迴諸趣永不出離。何以故。不了諸法唯心所見。執著外境增分別故。是故我說。世論文句因喩莊嚴但誑愚夫。不能解脫生老病死憂悲等患。大慧。釋提桓因廣解衆論自造諸論。彼世論者有一弟子。現作龍身詣釋天宮。而立論宗作是要言。憍尸迦。我共汝論。汝若不如。我當破汝千輻之輪。我若不如。斷一一頭以謝所屈。說是語已。卽以論法摧伏帝釋。壞千輻輪還來人間。大慧。世間言論因喩莊嚴。乃至能現龍形。以妙文詞迷惑諸天及阿修羅。令其執著生滅等見。而況於人。是故大慧。不應親近承事供養。以彼能作生苦因故。大慧。世論唯說身覺境界。大慧。彼世論有百千字句。後末世中惡見乖離邪衆崩散。分成多部各執自因。大慧。非餘外道能立教法。唯盧迦耶以百千句廣說無量差別因相。非如實理。亦不自知是惑世法。爾時大慧白言。世尊。若盧迦耶所造之論。種種文字因喩莊嚴。執著自宗非如實法。名外道者。世尊。亦說世間之事。謂以種種文句言詞廣說。十方一切國土天人等衆而來集會。非是自智所證之法。世尊亦同外道說耶。佛言。大慧。我非世說亦無來去。我說諸法不來不去。大慧。來者集生。去者壞滅。不來不去。此則名爲不生不滅。大慧。我之所說不同外道墮分別中。何以故。外法有無無所著故。了唯自心不見二取。不行相境不生分別。入空無相無願之門而解脫故。大慧。我憶有時於一處住。有世論婆羅門來至我所。遽問我言。瞿曇。一切是所作耶。我時報言。婆羅門一切所作是初世論。又問我言。一切非所作耶。我時報言。一切非所作是第二世論。

彼復問言。一切常耶一切無常耶。一初生耶一切不生耶。我時報言。是第六世論。彼復問言。一切一耶一切異耶。一切俱耶一切不俱耶。一切皆由種種因緣而受生耶。我時報言。是第十一世論。彼復問言。一切有記耶一切無記耶。有我耶無我耶。有此世耶無此世耶。有他世耶無他世耶。有解脫耶無解脫耶。是剎那耶非剎那耶。虛空涅槃及非擇滅。是所作耶非所作耶。有中有耶無中有耶。我時報言。婆羅門。如是皆是汝之世論非我所說。婆羅門。我說因於無始戲論諸惡習氣而生三有。不了唯是自心所見而取外法實無可得。如外道說。我及根境三合知生。我不如是。我不說因不說無因。唯緣妄心似能所取。而說緣起。非汝及餘取著我言之所能測。大慧。虛空涅槃及非擇滅。但有三數本無體性。何況而說作與非作。大慧。爾時世論婆羅門。復問我言。無明愛業爲因緣故。有三有耶爲無因耶。我言此二亦是世論。又問我言。一切諸法皆入自相及共相耶。我時報言。此亦世論。婆羅門。乃至少有心識流動分別外境皆是世論。大慧。爾時彼婆羅門復問我言。頗有非是世論者不。一切外道所有詞論種種文句因喩莊嚴。莫不皆從我法中出。我報言有。非汝所許非世不許。非不說種種文句義理相應非不相應。彼復問言。豈有世許非世論耶。我答言有。但非於汝及以一切外道能知。何以故。以於外法虛妄分別生執著故。若能了達有無等法一切皆是自心所見。不生分別不取外境。於自處住。自處住者是不起義。不起於何不起分別。此是我法非汝有也。婆羅門。略而言之。隨何處中心識往來死生求戀。若受若見若觸若住。取種種相和合相續。於愛於因而生計著。皆汝世論非是我法。大慧。世論婆羅門作如是問。我如是答。不問於我自宗實法。默然而去。作是念言。沙門瞿曇無可尊重。說一切法無生無相無因無緣。唯是自心分別所見。若能了此分別不生。大慧。汝今亦復問我是義。何故親近諸世論者。唯得財利不得法利。大慧白言。所言財法是何等義。佛言。善哉。汝乃能爲未來衆生思惟是義。諦聽諦聽當爲汝說。大慧。所言財者。可觸可受可取可味。令著外境墮在二邊。增長貪愛生老病死憂悲苦惱。

三下三本俱有和字〇合下明無知字〇緣三本俱作依〇似同作以

我及諸佛說名財利。親近世論之所獲得。云何法利。謂了法是心見二無我。不取於相無有分別。善知諸地離心意識。一切諸佛所共灌頂。具足受行十無盡願。於一切法悉得自在。是名法利。以是不墮一切諸見戲論分別常斷二邊。大慧。外道世論令諸癡人墮在二邊。謂常及斷。受無因論則起常見。以因壞滅則生斷見。我說不見生住滅者名得法利。是名財法二差別相。汝及諸菩薩摩訶薩應勤觀察。爾時世尊重說頌言。

調伏攝衆生　以戒降諸惡　智慧滅諸見　解脫得增長　外道虛妄說　皆是世俗論
橫計作所作　不能自成立　唯我一自宗　不著於能所　爲諸弟子說　令離於世論
能取所取法　唯心無所有　二種皆心現　斷常不可得　乃至心流動　是則爲世論
分別不起者　是人見自心　來者見事生　去者事不現　明了知來去　不起於分別
有常及無常　所作無所作　此世他世等　皆是世論法

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。佛說涅槃。說何等法以爲涅槃。而諸外道種種分別。佛言。大慧。如諸外道分別涅槃。皆不隨順涅槃之相。諦聽諦聽當爲汝說。大慧。或有外道言。見法無常不貪境界。蘊界處滅心心所法不現在前。不念過現未來境界。如燈盡如種敗如火滅。諸取不起分別不生。起涅槃想。大慧。非以見壞名爲涅槃。或謂至方名得涅槃。境界想離猶如風止。或謂不見能覺所覺名爲涅槃。或謂不起分別常無常見名得涅槃。或有說言。分別諸相發生於苦。而不能知自心所現。以不知故怖畏於相以求無相。深生愛樂執爲涅槃。或謂覺知內外諸法自相共相去來現在有性不壞。作涅槃想。或計我人衆生壽命及一切法無有壞滅。作涅槃想。復有外道無有智慧。計有自性及以士夫求那轉變作一切物以爲涅槃。或有外道計福非福盡。或計不由智慧諸煩惱盡。或計自在是實作者以爲涅槃。或謂衆生展轉相生。以此爲因更無異因。彼無智故不能覺了。以不了故執爲涅槃。或計證於諦道虛妄分別以爲涅槃。或計求那與求那者而

棘同作辣

想三本俱作相

共和合一性異性俱及不俱．執爲涅槃．或計諸物從自然生．孔雀文彩棘針銛利．生寶之處出種種寶．如此等事是誰能作．卽執自然以爲涅槃．或謂能解二十五諦卽得涅槃．或有說言受能六分守護衆生斯得涅槃．或有說言．時生世間時卽涅槃．或執有物以爲涅槃．或計無物以爲涅槃．有計著或有物無物爲涅槃者．或計諸物與涅槃無別．作涅槃想．大慧．復有異彼外道所說．以一切智大師子吼說．能了達唯心所現不取外境．遠離四句住如實見．不墮二邊離能所取．不入諸量不著眞實．住於聖智所現證法．悟二無我離二煩惱．淨二種障轉修諸地入於佛地．得如幻等諸大三昧．永超心意及以意識名得涅槃．大慧．彼諸外道虛妄計度不如於理智者所棄．皆墮二邊作涅槃想．於此無有若住若出．彼諸外道皆依自宗而生妄覺．違背於理無所成就．唯令心意馳散往來．一切無有得涅槃者．汝及諸菩薩宜應遠離．爾時世尊重說頌言

外道涅槃見　各各異分別　彼唯是妄想　無解脫方便　遠離諸方便　不至無縛處
妄生解脫想　而實無解脫　外道所成立　衆智各異取　彼悉無解脫　愚癡妄分別
一切癡外道　妄見作所作　悉著有無論　是故無解脫　凡愚樂分別　不生眞實慧
言說三界本　眞實滅苦因　譬如鏡中像　雖現而非實　習氣心鏡中　凡愚見有二
不了唯心現　故起二分別　若知但是心　分別則不生　心卽是種種　遠離想所相
如愚所分別　雖見而無見　三有唯分別　外境悉無有　妄想種種現　凡愚不能覺
經經說分別　但是異名字　若離於語言　其義不可得

大乘入楞伽經卷第四

大乘入楞伽經卷第五

〔麗卷十〕〔宋四〕〔元四〕〔明義〕

大周于闐國三藏法師實叉難陀奉勅譯

無常品第三之餘

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言．世尊．願爲我說如來應正等覺自覺性．令我及諸菩薩摩訶薩而得善巧自悟悟他．佛言．大慧．如汝所問當爲汝說．大慧言唯．世尊．如來應供正等覺．爲作非作．爲果爲因．爲相所相．爲說所說．爲覺所覺．如是等爲異不異．佛言．大慧．如來應正等覺非作非非作．非果非因．非相非所相．非說非所說．非覺非所覺．何以故．俱有過故．大慧．若如來是作則是無常．若是無常一切作法應是如來．我及諸佛皆不忍可．若非作法則無體性．所修方便悉空無益．同於兎角石女之子．非作因成故．若非因非果則非有非無．若非有非無則超過四句．言四句者．但隨世間而有言說．若超過四句．惟有言說則如石女兒．大慧．石女兒者惟有言說不墮四句．以不墮故不可度量．諸有智者應如是知如來所有一切句義．大慧．如我所說諸法無我．以諸法中無有我性故說無我．非是無有諸法自性．如來句義應知亦然．大慧．譬如牛無馬性馬無牛性．非無自性．一切諸法亦復如是．無有自相．而非有卽有．非諸凡愚之所能知．何故不知．以分別故．一切法空．一切法無生．一切法無自性．悉亦如是．大慧．如來與蘊非異非不異．若不異者應是無常．五蘊諸法是所作故．若異者．如牛二角有異不異．互相似故不異．長短別故有異．如牛右角異左左角異右．長短不同色相各別．然亦不異．如於蘊於界處等．一切法亦如是．大慧．如來者依解脫說．如來解脫非異非不異．若異者．如來便與色相相應．色相相應卽是無常．若不異者．修行者見應無差別．然有差別故非不異．如是智

品目餘明作二

應下三本俱無供字

惟三本俱作唯下同

與所知。非異非不異。若非異非不異。則非常非無常。非作非所作。非爲非無爲。非覺非所覺。非相非所相。非蘊非異蘊。非說非所說。非一非異。非俱非不俱。以是義故超一切量。超一切量故惟有言說。惟有言說故則無有生。無有生故則無有滅。無有滅故則如虛空。大慧。虛空非作非所作。非作非所作故遠離攀緣。遠離攀緣故出過一切諸戲論法。出過一切諸戲論法。卽是如來。如來卽是正等覺體。正等覺者永離一切諸根境界。爾時世尊重說頌曰

出過諸根量　非果亦非因　相及所相等　如是悉皆離
蘊緣與正覺　一異莫能見
既無有見者　云何起分別　非作非非作　非因非非因
非蘊非不蘊　亦不離餘物
非有一法體　如彼分別見　亦復非是無　諸法性如是
待有故成無　待無故成有
無既不可取　有亦不應說　不了我無我　但著於語言
彼溺於二邊　自壞壞世間
若能見此法　則離一切過　是名爲正觀　不毀大導師

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。如佛經中分別攝取不生不滅。言此卽是如來異名。世尊。願爲我說不生不滅。此則無法。云何說是如來異名。如世尊說。一切諸法不生不滅。當知此則墮有無見。世尊。若法不生則不可取。無有少法誰是如來。惟願世尊爲我宣說。佛言諦聽當爲汝說。大慧。我說如來非是無法。亦非攝取不生不滅。亦不待緣亦非無義。我說無生卽是如來意生法身別異之名。一切外道聲聞獨覺七地菩薩不了其義。大慧。譬如帝釋地及虛空乃至手足。隨一一物各有多名。非以名多而有多體。亦非無體。大慧。我亦如是。於此娑婆世界有三阿僧祇百千名号。諸凡愚人雖聞雖說。而不知是如來異名。其中或有知如來者。知無師者。知導師者。知勝導者。知普導者。知是佛者。知牛王者。知梵王者。知毗紐者。知自在者。知是勝者。知迦毗羅者。知眞實邊者。知無盡者。知瑞相者。知如風者。知如火者。知如俱毗羅者。知如月者。知如日者。

曰同作言

如下三本俱無知字

說三宋俱作讀

當上宋元俱有於字

知如王者。知如仙者。知戌迦者。知因陀羅者。知明星者。知大力者。知如水者。知無滅者。知無生者。知性空者。知眞如者。知是諦者。知實性者。知實際者。知法界者。知涅槃者。知常住者。知平等者。知無二者。知無相者。知寂滅者。知具相者。知因緣者。知佛性者。知教導者。知解脫者。知道路者。知一切智者。知最勝者。知意成身者。如是等滿足三阿僧祇百千名号。不增不減。於此及餘諸世界中。有能知我如水中月不入不出。但諸凡愚心沒二邊不能解了。然亦尊重承事供養。而不善解名字句義。執著言教昧於眞實。謂無生無滅是無體性。不知是佛差別名號。如因陀羅釋揭羅等。以信言教昧於眞實。於一切法如言取義。彼諸凡愚作如是言。義如言說義說無異。何以故。義無體故。是人不了言音自性。謂言即義無別義體。大慧。彼人愚癡。不知言說是生是滅義不生滅。大慧。一切言說墮於文字。義則不墮。離有離無故。無生無體故。大慧。如來不說墮文字法。文字有無不可得故。惟除不墮於文字者。大慧。若人說法墮文字者。是虛誑說。何以故。諸法自性離文字故。是故大慧。我經中說。我與諸佛及諸菩薩。不說一字不答一字。所以者何。一切諸法離文字故。非不隨義而分別說。大慧。若不說者教法則斷。教法斷者則無聲聞緣覺菩薩諸佛。若總無者誰說爲誰。是故大慧。菩薩摩訶薩應不著文字隨宜說法。我及諸佛皆隨衆生煩惱解欲種種不同而爲開演。令知諸法自心所見無外境界。捨二分別轉心意識。非爲成立聖自證處。大慧。菩薩摩訶薩應隨於義莫依文字。依文字者墮於惡見。執著自宗而起言說。不能善了一切法相文辭章句。既自損壞亦壞於他。不能令人心得悟解。若能善知一切法相文辭句義悉皆通達。則能令自身受無相樂。亦能令他安住大乘。若能令他安住大乘。則得一切諸佛聲聞緣覺及諸菩薩之所攝受。若得諸佛聲聞緣覺及諸菩薩之所攝受。則能攝受一切衆生。若能攝受一切衆生。則能攝受一切正法。若能攝受一切正法則不斷佛種。若不斷佛種則得勝妙處。大慧。菩薩摩訶薩生勝妙處。欲令衆生安住大乘。以十自在力現衆色像。隨其所宜說眞實法。眞實法者。無異無別不來

發明作復

神三本俱作力

生上同有衆字

種明作衆

滅上三本俱無不字〇一下同有切字

不去。一切戲論悉皆息滅。是故大慧。善男子善女人。不應如言執著於義。何以故。眞實之法離文字故。大慧。譬如有人以指指物。小兒觀指不觀於物。愚癡凡夫亦復如是。隨言說指而生執著。乃至盡命終不能捨文字之指取第一義。大慧。譬如嬰兒應食熟食。有人不解成熟方便而食生者。則發狂亂。不生不滅亦復如是。不方便修則爲不善。是故宜應善修方便。莫隨言說如觀指端。大慧。實義者微妙寂靜。是涅槃因。言說者與妄想合流轉生死。大慧。實義者從多聞得。多聞者謂善於義非善言說。善義者不隨一切外道惡見。身自不隨亦令他不隨。是則名曰於義多聞。欲求義者應當親近。與此相違著文字者宜速捨離。爾時大慧菩薩摩訶薩承佛威神。復白佛言。世尊。如來演說不生不滅非爲奇特。何以故。一切外道亦說作者不生不滅。世尊亦說虛空涅槃及非數滅不生不滅。外道亦說作者因緣生於世間。世尊亦說無明愛業生諸世間。俱是因緣但名別耳。外物因緣亦復如是。是故佛說與外道說無有差別。外道說言。微塵勝妙自在生主等。如是九物不生不滅。世尊亦說一切諸法不生不滅。若有若無皆不可得。世尊。大種不壞。以其自相不生不滅。周流諸趣不捨自性。世尊分別。雖稍變異。一切無非外道已說。是故佛法同於外道。若有不同。願佛爲演。有何所以佛說爲勝。若無別異外道卽佛。以其亦說不生不滅故。世尊常說。一世界中無有多佛。如向所說是則應有。佛言。大慧。我之所說不生不滅。不同外道不生不滅不生無常論。何以故。外道所說有實性相不生不變。我不如是墮有無品。我所說法非有非無離生離滅。云何非無。如幻夢色種種見故。云何非有。色相自性非是有故。見不見故。取不取故。是故我說一切諸法非有非無。若覺惟是自心所見。住於自性分別不生。世間所作悉皆永息。分別者是凡愚事非賢聖耳。大慧。妄心分別不實境界。如乾闥婆城幻所作人。大慧。譬如小兒見乾闥婆城及以幻人商賈入出。迷心分別言有實事。凡愚所見生與不生有爲無爲悉亦如是。如幻人生如幻人滅。幻人其實不生不滅。諸法亦爾離於生滅。大慧。凡夫虛妄起生滅見。非諸聖人。言虛妄者不如

如三本俱作幻

十同作七

瑣明作鎖次二字亦同 緣韻下瑣三本

法性起顛倒見顛倒見者。執法有性。不見寂滅。不見寂滅故。不能遠離虛妄分別。是故大慧。無相見勝。非是相見。相是生因。若無有相則無分別。不生不滅則是涅槃。大慧言涅槃者。見如實處捨離分別心心所法。獲於如來內證聖智。我說此是寂滅涅槃。爾時世尊重說頌言

爲除有生執　成立無生義　我說無因論　非愚所能了　一切法無生　亦非是無法
如乾城幻夢　雖有而無因　空無生無性　云何爲我說　離諸和合緣　智慧不能見
以是故我說　空無生無性　一一緣和合　雖現而非有　分析無和合　非如外道見
如夢及垂髮　野馬與乾城　無因而妄現　世事皆如是　折伏有因論　申述無生旨
無生義若存　法眼恒不滅　我說無因論　外道咸驚怖　云何何所因　復以何故生
於何處和合　而作無因論　觀察有爲法　非因非無因　彼生滅論者　所見從是滅
爲無故不生　爲待於衆緣　爲有名無義　願爲我宣說　非無法不生　亦非以待緣
非有物而名　亦非名無義　一切諸外道　聲聞及緣覺　十住非所行　此是無生相
遠離諸因緣　無有能作者　唯心所建立　我說是無生　諸法非因生　非無亦非有
能所分別離　我說是無生　惟心無所見　亦離於二性　如是轉所依　我說是無生
外物有非有　其心無所取　一切見咸斷　此是無生相　空無性等句　其義皆如是
非以空故空　無生故說空　因緣共集會　是故有生滅　分散於因緣　生滅則無有
若離諸因緣　則更無有法　一性及異性　凡愚所分別　有無不生法　俱非亦復然
惟除衆緣會　於中見起滅　隨俗假言說　因緣遞鈎瑣　若離因緣瑣　生義不可得
我說惟鈎瑣　生無故不生　離諸外道過　非凡愚所了　若離緣鈎瑣　別有生法者

俱作鎖下同○破明作彼○於同作爲○相同作性

暖動同作動煖

常下三本俱無義有物無常五字

是則無因論　破壞鉤瑣義　如燈能照物　鉤瑣現若然　此則離鉤瑣　別有於諸法
無生則無性　體相如虛空　離鉤瑣求法　愚夫所分別　復餘有無生　衆聖所得法
彼生無生者　是則無生忍　一切諸世間　無非是鉤瑣　若能如是解　此人心得定
無明與愛業　是則內鉤瑣　種子泥輪等　如是名爲外　若言有他法　而從因緣生
離於鉤瑣義　此則非教理　生法若非有　彼爲誰因緣　展轉而相生　此是因緣義
堅濕暖動等　凡愚所分別　但緣無有法　故說無自性　如醫療衆病　其論無差別
以病不同故　方藥種種殊　我爲諸衆生　滅除煩惱病　知其根勝劣　演說諸法門
非煩惱根異　而有種種法　惟有一大乘　淸涼八支道

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。一切外道妄說無常。世尊亦言。諸行無常是生滅法。未知此說是邪是正。所言無常復有幾種。佛言。大慧。外道說有七種無常。非是我法。何等爲七。謂有說始起卽捨是名無常。生已不生無常性故。有說形處變壞是名無常。有說色卽無常。有說色之變異是名無常。一切諸法相續不斷。能令變異自然歸滅。猶如乳酪前後變異。雖不可見然在法中壞一切法。有說物無常。有說物無物無常。有說不生無常。遍住一切諸法之中。其中物無物無常者。謂能造所造其相滅壞。大種自性本來無起。不生無常者。謂常與無常有無等法。如是一切皆無有起。乃至分析至於微塵亦無所見。以下起故說名無生。此是不生無常相。若不了此則墮外道生無常義。有物無常義有物無常者。謂於非常非無常處。自生分別。其義云何。彼立無常自不滅壞能壞諸法。若無無常壞一切法。法終不滅成於無有。如杖槌瓦石能壞於物而自不壞。此亦如是。大慧。現見無常與一切法。無有能作所作差別。云此是無常此是所作。無差別故。能作所作應俱是常。不見有因。能令諸法成於無故。大慧。諸法壞滅實亦有因。但非凡愚之所能了。大慧。異因不應

大種變同作諸
大種[illegible]燒明作生

聞未作聞

法明作佛

生於異果。若能生者。一切異法應並相生。彼法此法能生所生應無有別。現見有別。云何異因生於異果。大慧。若無常性是有法者。應同所作自是無常。自無常故。所無常法皆應是性。大慧。若無常性住諸法中。應同諸法墮於三世。與過去色同時已滅。未來不生現在俱壞。一切外道計四大種體性不壞色者。即是大種差別大種造色。離異不異故。其自性亦不壞滅。大慧。三有之中能造所造。莫不皆是生住滅相。豈更別有無常之性。能生於物而不滅耶。始造即捨無常者。非大種互造大種。以各別故。非自相造。以無異故。非復共造。以乖離故。當知非是始造無常。形狀壞無常者。此非能造及所造壞。但形狀壞。其義云何。謂分析色乃至微塵。但滅形狀長短等見。不滅能造所造色體。此見墮在數論之中。色即是無常者。謂此即是形狀。無常非大種性。若大種性亦無常者則無世事。無世事者。當知則墮盧迦耶見。以見一切法自相生惟有言說故。轉變無常者。謂色體變非大種變。譬如以金作莊嚴具。嚴具有變而金無改。此亦如是。大慧。如是等種種外道。虛妄分別見無常性。彼作是說。火不能燒諸火自相。但各分散。若能燒者。能造所造則皆斷滅。大慧。我說諸法非常無常。何以故。不取外法故。三界唯心故。不說諸相故。大種性處種種差別不生不滅故。非能造所造故。能取所取二種體性一切皆從分別起故。如實而知二取性故。了達惟是自心現故。離外有無二種見故。離有無見則不分別能所造故。大慧。世間出世間及出世間上上諸法。惟是自心非常非無常。不能了達墮於外道二邊惡見。大慧。一切外道不能解了此三種法。依自分別而起言說著無常性。大慧。此三種法所有語言分別境界。非諸凡愚之所能知。爾時世尊重說頌言

始造即便捨　形狀有轉變　色物等無常　外道妄分別　諸法無壞滅　諸大自性住
外道種種見　如是說無常　彼諸外道衆　皆說不生滅　諸大性自常　誰是無常法
能取及所取　一切惟是心　二種從心現　無有我我所　梵天等諸法　我說惟是心

若離於心者　一切不可得

大乘入楞伽經現證品第四

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言．世尊．願爲我說一切聲聞緣覺入滅次第相續相．令我及諸菩薩摩訶薩．善知此已於滅盡三昧樂心無所惑．不墮二乘及諸外道錯亂之中．佛言．諦聽當爲汝說．大慧．菩薩摩訶薩至于六地．及聲聞緣覺入於滅定．七地菩薩念念恒入．離一切法自性相故非諸二乘．二乘有作墮能所取．不得諸法無差別相．了善不善自相共相入於滅定．是故不能念念恒入．大慧．八地菩薩聲聞緣覺．心意意識分別想滅．始從初地乃至六地．觀察三界一切唯是心意意識自分別起．離我我所不見外法種種諸相．凡愚不知由無始來過惡熏習．於自心內變作能取所取之相而生執著．大慧．八地菩薩所得三昧．同諸聲聞緣覺涅槃．以諸佛力所加持故．於三昧門不入涅槃．若不持者便不化度一切衆生．不能滿足如來之地．亦則斷絕如來種性．是故諸佛爲說如來不可思議諸大功德．令其究竟不入涅槃．聲聞緣覺著三昧樂．是故於中生涅槃想．大慧．七地菩薩善能觀察心意意識我我所執生法無我．若生若滅自相共相．四無礙辯善巧決定．於三昧門而得自在．漸入諸地具菩提地法．大慧．我恐諸菩薩不善了知自分共相．不知諸地相續次第．墮於外道諸惡見中故如是說．大慧．彼實無有若生若滅．諸地次第三界往來．一切皆是自心所見．而諸凡愚不能了知．以不知故我及諸佛爲如是說．大慧．聲聞緣覺至於菩薩第八地中．爲三昧樂之所昏醉．未能善了惟心所見．自共相習纏覆其心．著二無我生涅槃覺．非寂滅慧．大慧．諸菩薩摩訶薩見於寂滅三昧樂門．卽便憶念本願大悲．具足修行十無盡句．是故不卽入於涅槃．以入涅槃不生果故．離能所取故．了達惟心故．於一切法無分別故．不墮心意及以意識外法性相執著中故．然非不起佛法正因．隨智慧行

性宋作姓

提三本俱作薩

復三本俱作覆
如幻夢同作皆
如幻○獲明作
護

如是起故。得於如來自證地故。大慧。如人夢中方便度河未度便覺。覺已思惟向之所見。爲是眞實爲是虛妄。復自念言非實非妄。如是但是見聞覺知曾所更事分別習氣。離有無念意識夢中之所現耳。大慧。菩薩摩訶薩亦復如是。始從初地而至七地。乃至增進入於第八得無分別。見一切法如幻夢等離能所取。見心心所廣大力用。勤修佛法未證令證。離心意意識妄分別想獲無生忍。此是菩薩所得涅槃非滅壞也。大慧。第一義中無有次第亦無相續。遠離一切境界分別。此則名爲寂滅之法。爾時世尊重說頌言

諸住及佛地　惟心無影像　此是去來今　諸佛之所說　七地是有心　八地無影像
此二地名住　餘則我所得　自證及清淨　此則是我地　摩醯最勝處　色究竟莊嚴
譬如大火聚　光焰熾然發　化現於三有　悅意而清涼　或有現變化　或有先時化
於彼說諸乘　皆是如來地　十地則爲初　初則爲八地　第九則爲七　第七復爲八
第二爲第三　第四爲第五　第三爲第六　無相有何次

大乘入楞伽經如來常無常品第五

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。如來應正等覺。爲常爲無常。佛言。大慧。如來應正等覺。非常非無常。何以故。俱有過故。云何有過。大慧。若如來常者。有能作過。一切外道說能作常。若無常者。有所作過。同於諸蘊爲相所相。畢竟斷滅而成無有。然佛如來實非斷滅。大慧。一切所作如瓶衣等。皆是無常。是則如來有無常過。所修福智悉空無益。又諸作法應是如來。無異因故。是故如來非常非無常。復次大慧。如來非常。若是常者。應如虛空不待因成。大慧。譬如虛空非常非無常。何以故。離常無常若一若異俱不俱等諸過失故。復次大慧。如來非常。若是常者。則是不生。同於兎馬魚蛇等角。復次大慧。以別義故。亦得言常。何以故。謂以現

智證常法故。證智是常如來亦常。大慧。諸佛如來所證法性法住法位。如來出世若不出世常住不易。在於一切二乘外道所得法中。非是空無然非凡愚之所能知。大慧。夫如來者。以清淨慧內證法性而得其名。非以心意意識蘊界處法妄習得名。一切三界皆從虛妄分別而生。如來不從妄分別生。大慧。若有於二有常無常如來無二。證一切法無生相故。是故非常亦非無常。大慧。乃至少有言說分別生。卽有常無常過。是故應除二分別覺勿令少在爾時世尊重說頌言

遠離常無常　而現常無常　如是恒觀佛　不生於惡見　若常無常者　所集皆無益
為除分別覺　不說常無常　乃至有所立　一切皆錯亂　若見惟自心　是則無違諍

大乘入楞伽經刹那品第六

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。惟願為我說蘊界處生滅之相若無有我誰生誰滅。而諸凡夫依於生滅。不求盡苦不證涅槃。佛言。大慧。諦聽諦聽當為汝說。大慧。如來藏是善不善因。能遍興造一切趣生。譬如伎兒變現諸趣離我我所。以不覺故三緣和合而有果生。外道不知執為作者。無始戲偽惡習所熏。名為藏識。生於七識無明住地。譬如大海而有波浪。其體相續恒注不斷。本性清淨離無常過離於我論。其餘七識意意識等念念生滅。妄想為因境相為緣和合而生。不了色等自心所現。計著名相起苦樂受。名相纏縛。既從貪生復生於貪。若因及所緣。諸取根滅不相續生。自慧分別苦樂受者。或得滅定。或得四禪。或復善入諸諦解脫。便妄生於得解脫想。而實未捨未轉如來藏中藏識之名若無藏識七識則滅。何以故。因彼及所緣而得生故。然非一切外道二乘諸修行者所知境界。以彼惟了人無我性。於蘊界處取於自相及共相故。若見如來藏五法自性諸法無我。隨地次第而漸轉滅。不為外道惡見所動住不動地得於十種三昧樂門。

如是恒　三本俱作恒如是〇佛明作物
伎　元明俱作技下同
注　三本俱作住

境下同無界字
臆宋元俱作憶
餘明作於

想明作心

爲三昧力諸佛所持。觀察不思議佛法及本願力。不住實際及三昧樂獲自證智。不與二乘諸外道共。得十聖種性道及意生智身離於諸行。是故大慧。菩薩摩訶薩欲得勝法。應淨如來藏藏識之名。大慧。若無如來藏名藏識者則無生滅。然諸凡夫及以聖人悉有生滅。是故一切諸修行者雖見內境界住現法樂。而不捨於勇猛精進。大慧。此如來藏藏識本性淸淨。客塵所染而爲不淨。一切二乘及諸外道。臆度起見不能現證。如來於此分明現見。如觀掌中菴摩勒果。大慧。我爲勝鬘夫人及餘深妙淨智菩薩。說如來藏名藏識與七識俱起。令諸聲聞見法無我。大慧。爲勝鬘夫人說佛境界。非是外道二乘境界。大慧。此如來藏藏識是佛境界。與汝等比淨智菩薩。隨順義者所行之處。非是一切執著文字外道二乘之所行處。是故汝及諸菩薩摩訶薩。於如來藏藏識。當勤觀察莫但聞已便生足想。爾時世尊重說頌言

甚深如來藏　而與七識俱　執著二種生　了知則遠離　無始習所熏　如像現於心
若能如實觀　境相悉無有　如愚見指月　觀指不觀月　計著文字者　不見我眞實
心如工伎兒　意如和伎者　五識爲伴侶　妄想觀伎衆

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。願爲我說五法自性諸識無我差別之相。我及諸菩薩摩訶薩。善知此已漸修諸地具諸佛法。至於如來自證之位。佛言。諦聽當爲汝說。大慧。五法自性諸識無我。所謂名相分別正智如如。若修行者觀察此法。入於如來自證境界。遠離常斷有無等見得現法樂甚深三昧。大慧。凡愚不了五法自性諸識無我。於心所現見有外物而起分別。非識聖人。大慧白言。云何不了而起分別。佛言。大慧。凡愚不知名是假立。心隨流動見種種相。計我我所染著於色。覆障聖智起貪瞋癡。造作諸業如蠶作繭。妄想自纏墮於諸趣生死大海。如汲水輪循環不絕。不知諸法如幻如焰如水中月自心所見妄分別起。離能所取及生住滅。謂從自在時節微塵勝性而生。隨名相流。大慧。此中相者。謂眼識所見名之爲色。耳鼻舌

淳同作純
臆宋元俱作憶
身明作心

身意識得者．名之爲聲香味觸法．如是等我說爲相．分別者．施設衆名顯示諸相．謂以象馬車步男女等名而顯其相．此事如是決定不異．是名分別．正智者．謂觀其相互爲其客．識心不起不斷不常．不墮外道二乘之地．是名正智．大慧．菩薩摩訶薩以其正智觀察名相．非有非無．遠離損益二邊惡見．名相及識本來不起．我說此法名爲如如．大慧．菩薩摩訶薩住如如已得無照現境．昇歡喜地離外道惡趣入出世法．法相淳熟．知一切法猶如幻等．證自聖智所行之法．離臆度見．如是次第乃至法雲．至法雲已三昧諸力自在神通．開敷滿足成於如來．成如來已爲衆生故．如水中月普現其身．隨其欲樂而爲說法．其身淸淨離心意識．被弘誓甲．具足成滿十無盡願．是名菩薩摩訶薩入於如如之所獲得．爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言．世尊．爲三性入五法中．爲各有自相．佛言．大慧．三性八識及二無我悉入五法．其中名及相是妄計性．以依彼分別心心所法俱時而起．如日與光．是緣起性．正智如如不可壞故．是圓成性．大慧．於自心所現生執著時．有八種分別起．此差別相皆是不實．惟妄計性．若能捨離二種我執．二無我智卽得生長．大慧．聲聞緣覺菩薩如來．自證聖智諸地位次．一切佛法悉皆攝入此五法中．復次大慧．五法者．所謂相名分別如如正智．此中相者．謂所見色等形狀各別．是名爲相．依彼諸相立瓶等名．此如是此不異．是名爲名．施設衆名顯示諸相心心所法．是名分別．彼名彼相畢竟無有．但是妄心展轉分別．如是觀察乃至覺滅．是名如如．大慧．眞實決定究竟根本自性可得．是如如相．我及諸佛隨順證入．如其實相開示演說．若能於此隨順悟解．離斷離常不生分別．入自證處．出於外道二乘境界．是名正智．大慧．此五種法三性八識及二無我．一切佛法普皆攝盡．大慧．於此法中汝應以自智善巧通達．亦勸他人令其通達．通達此已心則決定不隨他轉．爾時世尊重說頌言

五法三自性　及與八種識　二種無我法　普攝於大乘　名相及分別　二種自性攝

悕明作希

見三本俱作現

恒下同無河字

正智與如如　是則圓成相

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言．世尊．如經中說．過去未來現在諸佛如恒河沙．此當云何．爲如言而受．爲別有義．佛告大慧．勿如言受．大慧．三世諸佛非如恒沙．河以故．如來最勝超諸世間．無與等者．非喩所及．唯以少分爲其喩耳．我以凡愚諸外道等心恒執著常與無常．惡見增長生死輪迴．令其厭離發勝悕望．言佛易成易可逢値．若言難遇如優曇華．彼便退怯不勤精進．是故我說如恒河沙．我復有時觀受化者．說佛難値如優曇華．大慧．優曇鉢華無有曾見現見當見．如來則有已見當見．大慧．如是譬喩非說自法．自法者．內證聖智所行境界．世間無等過諸譬喩．一切凡愚不能信受．大慧．眞實如來超心意意識所見之相．不可於中而立譬喩．然亦有時而爲建立．言恒河沙等無有相違．大慧．譬如恒沙魚鼈象馬之所踐蹋．不生分別恒淨無垢．如來聖智如彼恒河．力通自在以爲其沙．外道魚鼈競來擾亂．而佛不起一念分別．何以故．如來本願以三昧樂普安衆生．如恒河沙無有愛憎無分別故．大慧．譬如恒沙．是地自性劫盡燒時燒一切地．而彼地大不捨本性．恒與火大俱時生故．諸凡愚人謂地被燒．而實不燒．火所因故．如來法身亦復如是．如恒河沙終不壞滅．大慧．譬如恒沙無有限量．如來光明亦復如是．爲欲成熟無量衆生．普照一切諸佛大會．大慧．譬如恒沙住沙自性不更改變而作餘物．如來亦爾．於世間中不生不滅．諸有生因悉已斷故．大慧．譬如恒沙取不知減投不見增．諸佛亦爾．以方便智成熟衆生無減無增．何以故．如來法身無有身故．大慧．以有身．故而有滅壞．法身無身故無滅壞．大慧．譬如恒沙雖苦壓治欲求蘇油終不可得．如來亦爾．雖爲衆生衆苦所壓．乃至蠢動未盡涅槃．欲令捨離於法界中．深心願樂亦不可得．何以故．具足成就大悲心故．大慧．譬如恒沙隨水而流非無水也．如來亦爾．所有說法莫不隨順涅槃之流．以是說言．諸佛如來如恒河沙．大慧．如來說法不隨於趣．趣是壞義．生死本際不可得知．既不可知云何說趣．大慧．趣義是斷凡愚莫知．大慧菩薩

復白佛言。若生死本際不可知者。云何衆生在生死中而得解脫。佛言。大慧。無始虛僞過習因滅。了知外境自心所現分別轉依名爲解脫。非滅壞也。是故不得言無邊際。大慧。無邊際者。但是分別異名。大慧。離分別心無別衆生。以智觀察內外諸法。知與所知悉皆寂滅。大慧。一切諸法唯是自心分別所見。不了知故分別心起。了心則滅。爾時世尊重說頌言

觀察諸導師　譬如恒河沙　非壞亦非趣　是人能見佛　譬如恒河沙　悉離一切過
而恒隨順流　佛體亦如是

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。願爲我說一切諸法剎那壞相。何等諸法名有剎那。佛言。諦聽當爲汝說。大慧。一切法者。所謂善法不善法。有爲法無爲法。世間法出世間法。有漏法無漏法。有受法無受法。大慧。擧要言之。五取蘊法以心意意識習氣爲因而得增長。凡愚於此而生分別謂善不善。聖人現證三昧樂住。是則名爲善無漏法。復次大慧。善不善者。所謂八識。何等爲八。謂如來藏名藏識。意及意識幷五識身。大慧。彼五識身與意識俱。善不善相展轉差別相續不斷。無異體生生已卽滅。不了於境自心所現。次第滅時別識生起。意識與彼五識共俱。取於種種差別形相。剎那不住。我說此等名剎那法。大慧。如來藏名藏識。所與意等諸習氣俱。是剎那法。無漏習氣非剎那法。此非凡愚剎那論者之所能知。彼不能知一切諸法有是剎那非剎那故。彼計無爲同諸法壞墮於斷見。大慧。五識身非流轉。不受苦樂。非涅槃因。如來藏受苦樂與因俱有生滅。四種習氣之所迷覆。而諸凡愚分別熏心。不能了知起剎那見。大慧。如金金剛佛之舍利。是奇特性終不損壞。若得證法有剎那者。聖應非聖。而彼聖人未曾非聖。如金金剛雖經劫住稱量不減。云何凡愚不解於我秘密之說。於一切法作剎那想。大慧菩薩復白佛言。世尊。常說六波羅蜜若得滿足便成正覺。何等爲六。云何滿足。佛言。大慧。波羅蜜者。差別有三。所謂世間出世間出世間上上。大慧。世間波羅蜜者。謂

樂明作藥
於同作于
等三本俱作者

恒明作常

禪下三本俱有那字〇曰同作言

而宋明俱作心

諸凡愚著我我所執取二邊。求諸有身貪色等境。如是修行檀波羅蜜持戒忍辱精進禪定。成就神通生於梵世。大慧。出世間波羅蜜者。謂聲聞緣覺執著涅槃希求自樂。如是修習諸波羅蜜。大慧。出世間上上波羅蜜者。謂菩薩摩訶薩於自心二法。了知恆是分別所現。不起妄想不生執著。不取色相。爲欲利樂一切衆生。而恒修行檀波羅蜜。於諸境界不起分別。是則修行尸波羅蜜。卽於不起分別之時。忍知能取所取自性。是則名爲羼提波羅蜜。初中後夜勤修匪懈。隨順實解不生分別。是則名爲毘梨耶波羅蜜。不生分別。不起外道涅槃之見。是則名爲禪波羅蜜。以智觀察心無分別不墮二邊。轉淨所依而不壞滅。獲於聖智內證境界。是則名爲般若波羅蜜。爾時世尊重說頌曰

愚分別有爲　空無常刹那　分別刹那義　如河燈種子　一切法不生　寂靜無所作
諸事性皆離　是我刹那義　生無間卽滅　不爲凡愚說　無間相續法　諸趣分別起
無明爲其因　心則從彼生　未能了色來　中間何所住　無間相續滅　而有別心起
不住於色時　何所緣而生　若緣彼而起　其因則虛妄　因妄體不成　云何刹那滅
修行者正受　金剛佛舍利　及以光音宮　世間不壞事　如來圓滿智　及比丘證得
諸法性常住　云何見刹那　乾城幻等色　何故非刹那　大種無實性　云何說能造

大乘入楞伽經卷第六

大周于闐國三藏法師實叉難陀奉勑譯

〔麗髮〕〔宋四〕〔元四〕〔明養〕

變化品第七

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。如來何故授阿羅漢阿耨多羅三藐三菩提記。何故復說無般涅槃法衆生得成佛道。又何故說從初得佛至般涅槃於其中間不說一字。又言如來常在於定無覺無觀。又言佛事皆是化作。又言諸識剎那變壞。又言金剛神常隨衞護。又言前際不可知而說有般涅槃。又現有魔及以魔業。又有餘報。謂旃遮婆羅門女。孫陀利外道女。及空鉢而還等事。世尊既有如是業障。云何得成一切種智。既已成於一切種智。云何不離如是諸過。佛言。諦聽當爲汝說。大慧。我爲無餘涅槃界故。密勸令彼修菩薩行。此界他土有諸菩薩。心樂求於聲聞涅槃。令捨是心進修大行。故作是說。又變化佛與化聲聞而授記別。非法性佛。大慧。授聲聞記是祕密說。大慧。佛與二乘無差別者。據斷惑障解脫一味。非謂智障。智障要見法無我性乃淸淨故。煩惱障者。見人無我意識捨離。是時初斷藏識習滅。法障解脫方得永淨。大慧。我依本住法作是密語。非異前佛後更有說。先具如是諸文字故。大慧。如來正知無有妄念。不待思慮然後說法。如來久已斷四種習。離二種死。除二種障。大慧。意及意識眼識等七。習氣爲因是剎那性。離無漏善非流轉法。大慧。如來藏者。生死流轉及是涅槃苦樂之因。凡愚不知妄著於空。大慧。變化如來。金剛力士常隨衞護。非眞實佛。眞實如來離諸限量。二乘外道所不能知。住現法樂成就智忍。不假金剛力士所護。一切化佛不從業生。非卽是佛亦非非佛。譬如陶師衆事和合而有所作。化佛亦爾。衆相具足而演說法。然不能說自證

間明作門

別明作列

限三本俱作根

惟同作唯下同

味明作未

息同生習〇迦同作伽

志同作習〇食三本俱作可〇具同明作世間〇善明作善〇肉同作內〇其同作身〇息眼不同作實諸人

聖智所行之境。復次大慧。諸凡愚人見六識滅起於斷見。不了藏識起於常見。大慧。自心分別是其本際故不可得。離此分別卽得解脫。四種習斷離一切過。爾時世尊重說頌言

三乘及非乘　無有佛涅槃　悉授如來記　說離衆過惡　成就究竟智　及無餘涅槃
誘進怯劣人　依此密意說　諸佛所得智　演說如是道　惟此更非餘　故彼無涅槃
欲色有諸見　如是四種習　意識所從生　藏意亦在中　見意識眼等　無常故說斷
迷意藏起常　邪智謂涅槃

大乘入楞伽經斷食肉品第八

爾時大慧菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。願爲我說食不食肉功德過失。我及諸菩薩摩訶薩。知其義已爲未來現在報習所熏食肉衆生而演說之。令捨肉味求於法味。於一切衆生起大慈心。更相親愛如一子想。住菩薩地得阿耨多羅三藐三菩提。或二乘地暫時止息。究竟當成無上正覺。世尊。路迦耶等諸外道輩。起有無見執著斷常。尚有遮禁不聽食肉。何況如來應正等覺。大悲含育世所依怙。而許自他俱食肉耶。善哉世尊。具大慈悲哀愍世間。等觀衆生猶如一子。願爲解說食肉過惡不食功德。令我及與諸菩薩等。聞已奉行廣爲他說。爾時大慧菩薩重說頌言

菩薩摩訶薩　志求無上覺　酒肉及與葱　爲食爲不食　愚夫貪嗜肉　臭穢無名稱
與彼惡獸同　云何而可食　食者有何過　不食有何德　惟願最勝尊　爲我具開演

爾時佛告大慧菩薩摩訶薩言。大慧。諦聽諦聽善思念之。吾當爲汝分別解說。大慧。一切諸肉有無量緣。菩薩於中當生悲愍不應噉食。我今爲汝說其少分。大慧。一切衆生從無始來在生死中輪廻不息。靡不曾作

網同作網
住三本俱作陸
令不同作不令
女明作子

父母兄弟男女眷屬乃至朋友親愛侍使。易生而受鳥獸等身。云何於中取之而食。大慧。菩薩摩訶薩觀諸衆生同於己身。念肉皆從有命中來。云何而食。大慧。諸羅刹等聞我此說尚應斷肉。況樂法人。大慧。菩薩摩訶薩。在在生處觀諸衆生皆是親屬。乃至慈念如一子想。是故不應食一切肉。大慧。衢路市肆諸賣肉人或將犬馬人牛等肉。爲求利故而販鬻之。如是雜穢云何可食。大慧。一切諸肉皆是精血汙穢所成。求清淨人云何取食。大慧。食肉之人衆生見之悉皆驚怖。修慈心者云何食肉。大慧。譬如獵師及旃陀羅。捕魚網鳥諸惡人等。狗見驚吠獸見奔走。空飛水住一切衆生若有見之咸作是念。此人氣息猶如羅刹。今來至此必當殺我。爲護命故悉皆走避。食肉之人亦復如是。是故菩薩爲修慈行不應食肉。大慧。夫食肉者。身體臭穢惡名流布。賢聖善人不用親狎。是故菩薩不應食肉。大慧。夫血肉者。衆仙所棄群聖不食。是故菩薩不應食肉。大慧。菩薩爲護衆生信心。令於佛法不生譏謗。以慈愍故不應食肉。大慧。若我弟子食噉於肉。令諸世人悉懷譏謗。而作是言。云何沙門修淨行人。棄捨天仙所食之味。猶如惡獸食肉滿腹遊行世間。令諸衆生悉懷驚怖。壞清淨行失沙門道。是故當知佛法之中無調伏行。菩薩慈愍爲護衆生。令不生於如是之心。不應食肉。大慧。如燒人肉其氣臭穢。與燒餘肉等無差別。云何於中有食不食。是故一切樂清淨者不應食肉。大慧。諸善男女。塚間樹下阿蘭若處寂靜修行。或住慈心或持呪術。或求解脫或趣大乘。以食肉故一切障礙不得成就。是故菩薩欲利自他不應食肉。大慧。夫食肉者。見其形色則已生於貪滋味心。菩薩慈念一切衆生猶如己身。云何見之而作食想。是故菩薩不應食肉。大慧。夫食肉者諸天遠離。口氣常臭。睡夢不安覺已憂悚。夜叉惡鬼奪其精氣。心多驚怖。食不知足。增長疾病易生瘡癬。恒被諸蟲之所唼食。不能於食深生厭離。大慧。我常說言。凡所食噉作子肉想。餘食尚然。云何而聽弟子食肉。大慧。肉非美好肉不清淨。生諸罪惡敗諸功德。諸仙聖人之所棄捨。云何而許弟子食耶。若言許食此人謗我。大慧。淨美食者。應知則是秔米粟米

蘇同作酥○性三本俱作姓

息明作悉

人若三本俱作若人○味下同無於字○身下同有有字

是明作其

大小麥豆蘇油石蜜。如是等類此是過去諸佛所許。我所稱說。我種性中諸善男女。心懷淨信久植善根。於身命財不生貪著。慈愍一切猶如己身。如是之人之所應食。非諸惡習虎狼性者心所愛重。大慧。過去有王名師子生。耽著肉味食種種肉。如是不已遂至食人。臣民不堪悉皆離叛。亡失國位受大苦惱。大慧。釋提桓因處天王位。以於過去食肉餘習。變身為鷹而逐於鴿。我時作王名曰尸毗。愍念其鴿自割身肉以代其命。大慧。帝釋餘習尚惱衆生。況餘無慚常食肉者。當知食肉自惱惱他。是故菩薩不應食肉。大慧。昔有一王乘馬遊獵。馬驚奔逸入於山險。既無歸路又絕人居。有牝師子與同遊處。遂行醜行生諸子息。其最長者名曰班足。後得作王領七億家。食肉餘習非肉不食。初食禽獸後乃至人。所生男女悉是羅剎。轉此身已。復生師子豺狼虎豹鵰鷲等中。欲求人身終不可得。況出生死涅槃之道。大慧。夫食肉者。有如是等無量過失。斷而不食獲大功德。凡愚不知如是損益。是故我今為汝開演。凡是肉者悉不應食。大慧。凡殺生者多為人食。人若不食亦無殺事。是故食肉與殺同罪。奇哉世間貪著肉味。於人身肉尚取食之。況於鳥獸有不食者。以貪味故廣設方便。宜羅網罟處處安施。水陸飛行皆被殺害。設自不食為貪價直而作是事。大慧。世復有人心無慈愍專行慘暴。猶如羅剎。若見衆生其身充盛。便生肉想言此可食。大慧。世無有肉非是自殺亦非他殺心不疑殺而可食者。以是義故我許聲聞食如是肉。大慧。未來之世有愚癡人。於我法中而為出家。妄說毘尼壞亂正法。誹謗於我言聽食肉亦自曾食。大慧。我若聽許聲聞食肉。我則非是住慈心者。修觀行者。行頭陀者。趣大乘者。云何而勸諸善男子及善女人。於諸衆生生一子想斷一切肉。大慧。我於諸處說遮十種許三種者。是漸禁斷令其修學。今此經中自死他殺。凡是肉者一切悉斷。大慧。我不曾許弟子食肉。亦不現許亦不當許。大慧。凡是肉食於出家人悉是不淨。大慧。若有癡人謗言如來聽許食肉亦自食者。當知是人惡業所纏。必當永墮不饒益處。大慧。我之所有諸聖弟子。尚不食於凡夫段食。況食血肉不淨之食。大慧。聲聞

浣同作洗

韮三本俱作韮

癲三本俱作顛次同○荼同作茶○與明作有

緣覺及諸菩薩尙惟法食。豈況如來。大慧。如來法身非雜食身。大慧。我已斷除一切煩惱。我已浣滌一切習氣。我已善擇諸心智慧。大悲平等普觀衆生猶如一子。云何而許聲聞弟子食於子肉。何況自食。作是說者無有是處。爾時世尊重說頌言

悉曾爲親屬　衆穢所成長　恐怖諸含生　是故不應食　一切肉與葱　韮蒜及諸酒
如是不淨物　修行者遠離　亦常離麻油　及諸穿孔牀　以彼諸細蟲　於中大驚怖
飲食生放逸　放逸生邪覺　從覺生於貪　是故不應食　邪覺生貪故　心爲貪所醉
心醉長愛欲　生死不解脫　爲利殺衆生　以財取諸肉　二俱是惡業　死墮叫喚獄
不想不教求　此三種名淨　世無如是肉　食者我訶責　更互相食噉　死墮惡獸中
臭穢而癲狂　是故不應食　獵師栴荼羅　屠兒羅剎娑　此等種中生　斯皆食肉報
食已無慚愧　生生常癲狂　諸佛及菩薩　聲聞所嫌惡　象脇與大雲　涅槃央掘摩
及此楞伽經　我皆制斷肉　先說見聞疑　已斷一切肉　以其惡習故　愚者妄分別
如貪障解脫　肉等亦復然　若有食之者　不能入聖道　未來世衆生　於肉愚癡說
言此淨無罪　佛聽我等食　淨食尙如藥　猶如子肉想　是故修行者　知量而行乞
食肉背解脫　及違聖表相　令衆生生怖　是故不應食　安住慈心者　我說常厭離
師子及虎狼　應共同遊止　若於酒肉等　一切皆不食　必生賢聖中　豐財具智慧

大乘入楞伽經陀羅尼品第九

爾時佛告大慧菩薩摩訶薩言。大慧。過去未來現在諸佛。爲欲擁護持此經者。皆爲演說楞伽經呪。我今亦說汝當受持。卽說呪曰

◎夾註反明悉作切○纏下夾註可三本俱作荷○謎下同有第謎二字○鉢利鉢利同作般制般制○毗同作畔○駐下夾註戸明作庾反下同無下同二字下同○茶三本俱作茶下同○鉢同作般○結下同有嚩字○杜下同有杜字同下夾註三上同有並重呼三字○莎婆訶末明俱作莎阿○中明作卑◎鉢三本俱作般○同上同有般頭迷王字及記數二字○嚩下夾註二同作去擎三○譬上同無鉢頭迷及記數三字同下夾註聲下同有呼字○隸上同有主字○更隸下同有更羅二字○嗔同作囉○尼上同有嚩羅二合末第十一

怛姪他一 靚吒靚吒都駃反下同二 杜吒杜吒三 鉢吒鉢吒四 葛吒葛吒五 阿麼隸阿麼隸六 毘麼隸毘麼隸七 儞謎儞謎八 咽謎咽謎九 縛扶可反謎縛謎十 葛隸葛隸十一 揭囉葛隸十二 阿吒末吒十三 折吒咄吒十四 者若擷䚢反二合吒薩普二合吒十五 葛地稚計反下同剌地十六 鉢地十七 咽謎咽謎十八 第謎十九 折隸折隸二十 鉢利鉢利二十一 畔第毗第二十二 按制滿制二十三 駐胝戸反下同茶去聲下同嚛二十四 杜茶嚛二十五 鉢茶嚛二十六 遏計遏計二十七 末計末計二十八 斫結斫結嚛二合二十九 地依字呼謎地謎三十 咽謎咽謎三十一 駐駐駐三十二 楮答炬反楮楮楮三十三 杜杜杜三十四 杜虎二合杜虎杜虎杜虎三十五 莎婆訶三十六

大慧.未來世中.若有善男子善女人.受持讀誦爲他解說此陀羅尼.當知此人.不爲一切人與非人諸鬼神等之所得便.若復有人卒中於惡.爲其誦念一百八遍.卽時惡鬼疾走而去.大慧.我更爲汝說陀羅尼.卽說呪曰

怛姪他一 鉢頭摩第鞞二 鉢頭迷三 醯去聲下同泥醯㘑醯泥四 隸主羅主隸五 虎隸虎羅虎隸六 庾隸庾隸七 跛隸跛羅跛隸八 嗔上聲呼第膩第九 畔逝末第十 尼羅迦隸十一 莎婆訶十二

大慧.若有善男子善女人.受持讀誦爲他解說此陀羅尼.不爲一切天龍夜叉人非人等諸惡鬼神之所得便.我爲禁止諸羅剎故說此神呪.若持此呪則爲受持入楞伽經.一切文句悉已具足

大乘入楞伽經偈頌品第十之初

爾時世尊.欲重宣此修多羅中諸廣義故.而說偈言

諸法不堅固　皆從分別生　以分別卽空　所分別非有　由虛妄分別　是則有識生

八九識種種　如海衆波浪　習氣常增長　槃根堅固依　心隨境界流　如鐵於磁石

入字〇隸下記數三本俱作十二〇夢下宋明俱無婆字〇訶下記數三本俱作十三〇初明作一〇偈三本作俱頌〇磁宋元俱作慈明作磁〇得三本俱作即〇尼明作已〇生宋元俱作上〇無有三本俱作有無〇資明作貲下同

性實三本俱作眞性

暖明作煖

衆生所依性　遠離諸計度　及離智所知　轉依得解脫　得如幻三昧　超過於十地
觀見心王時　想識皆遠離　爾時心轉依　見則爲常住　在於蓮花宮　幻境之所起
旣住彼宮已　自在無功用　利益諸衆生　如衆色摩尼　無有爲無爲　惟除妄分別
愚夫迷執取　如石女夢子　應知補伽羅　蘊界諸緣等　悉空無自性　無生有非有
我以方便說　而實無有相　愚夫妄執取　能相及所相　一切知非知　一切非一切
愚夫所分別　佛無覺自他　諸法如幻夢　無生無自性　以皆性空故　無有不可得
我惟說一性　離於妄計度　自性無有二　衆聖之所行　如四大不調　變吐見螢先
所見皆非有　世間亦如是　猶如幻所現　草木瓦礫等　彼幻無所有　諸法亦如是
非取非所取　非縛非所縛　如幻如陽焰　如夢亦如翳　若欲見眞實　離諸分別取
應修眞實觀　見佛必無疑　世間等於夢　色資具亦爾　若能如是見　身爲世所尊
三界由心起　迷惑妄所見　離妄無世間　知已轉染依　愚夫之所見　妄謂有生滅
智者如實觀　不生亦不滅　常行無分別　遠離心心法　住色究竟天　離有過失處
於彼成正覺　具力通自在　及諸勝三昧　現化於此成　化身無量億　遍遊一切處
令愚夫得聞　如響難思法　遠離初中後　亦離於有無　非多而現多　不動而普遍
說衆生身中　所覆之性實　迷惑令幻有　非幻爲迷惑　由心迷惑故　一切皆悉有
以此相繫縛　藏識起世間　如是諸世間　惟有假施設　諸見如暴流　行於八法中
若能如是知　是則轉所依　乃爲我眞子　成就隨順法　愚夫所分別　堅濕暖動法
假名無有實　亦無相所相　身形及諸根　皆以八物成　凡愚妄計色　迷惑身籠檻

愛及三本俱作及愛○物明作無

毛三本俱作互

賚明作資
着三本俱作者

見同作了

凡愚妄分別　因緣和合生　不了眞實相　流轉於三有　識中諸種子　能現心境界
愚夫起分別　妄計於二取　無明愛及業　諸心依彼生　以是我了知　爲依他起性
妄分別有物　迷惑心所行　此分別都無　迷妄計爲有　心爲諸緣縛　生起於衆生
諸緣若遠離　我說無所見　已離於衆緣　自相所分別　身中不復起　我爲無所行
衆生心所起　能取及所取　所見皆無相　愚夫妄分別　顯示阿賴耶　殊勝之藏識
離於能所取　我說爲眞如　蘊中無有人　無我無衆生　生唯是識生　滅亦唯識滅
猶如畫高下　雖見無所有　諸法亦如是　雖見而非有　如乾闥婆城　亦如熱時燄
所見恒如是　智觀不可得　因緣及譬喩　以此而立宗　乾城夢火輪　陽燄日月光
火燄毛等喩　以此顯無生　世分別皆空　迷惑如幻夢　見諸有不生　三界無所依
內外亦如是　成就無生忍　得如幻三昧　及以意生身　種種諸神通　諸力及自在
諸法本無生　空無有自性　迷惑諸因緣　而謂有生滅　愚夫妄分別　以心而現心
及現於外色　而實無所有　如定力觀見　佛像與骨鎖　及分析大種　假施設世間
身資及所住　此三爲所取　意取及分別　此三爲能取　迷惑妄計著　以能所分別
但隨文字境　而不見眞實　行者以慧觀　諸法無自性　是時住無相　一切皆休息
如以畢逾難　無智者妄取　實無有三乘　愚夫不能見　若見諸聲聞　及以辟支佛
皆大悲菩薩　變化之所現　三界唯是心　分別二自性　轉依離人法　是則爲眞如
日月燈光焰　大種及摩尼　無分別作用　諸佛亦如是　諸法如毛輪　遠離生住滅
亦離常無常　染淨亦如是　如著陀羅藥　見地作金色　而實彼地中　本無有金相

種三本俱作淨
衆明作諸
明宋作閒○現
明作見

愚夫亦如是　無始迷亂心　妄取諸有實　如幻如陽焰　應觀一種子　與非種同印
一種一切種　是名心種種　種種子爲一　轉依爲非種　平等同法印　悉皆無分別
種種諸種子　能感諸趣生　種種衆雜苦　名一切種子　觀諸法自性　迷惑不待遣
物性本無生　了知卽解脫　定者觀世間　衆色由心起　無始心迷惑　實無色無心
如幻與乾城　毛輪及陽焰　非有而現有　諸法亦如是　一切法不生　唯迷惑所見
以從迷妄生　愚妄計著二　由種種習氣　生諸波浪心　若彼習斷時　心浪不復起
心緣諸境起　如畫依於壁　不爾虛空中　何不起於畫　若緣少分相　令心得生者
心既從緣起　唯心義不成　心性本淸淨　猶若淨虛空　令心還取心　由習非異因
執著自心現　令心而得起　所見實非外　是故說唯心　藏識說名心　思量以爲意
能了諸境界　是則名爲識　心常爲無記　意具二種行　現在識通具　善與不善等
證乃無定時　超地及諸剎　亦越於心量　而住無相果　所見有與無　及以種種相
皆是諸愚夫　顚倒所執著　智若離分別　物有則相違　由心故無色　是故無分別
諸根猶如幻　境界悉如夢　能作及所作　一切皆非有　世諦一切有　第一義則無
諸法無性性　說爲第一義　於無自性中　因諸言說故　而有物起者　是名爲俗諦
若無有言說　所起物亦無　世諦中無有　有言無事者　顚倒虛妄法　而實不可得
若倒是有者　則無無自性　以有無性故　而彼顚倒法　一切諸所有　是皆不可得
惡習熏於心　所現種種相　迷惑謂心外　妄取諸色像　分別無分別　分別是可斷
無分別能見　實性證眞空　無明熏於心　所現諸衆生　如幻象馬等　及樹葉爲金

翳明作瞖〇分宋作介

起三本俱作生

蘇明作酥

猶如翳目者　迷惑見毛輪　愚夫亦如是　妄取諸境界　分別所分者　及起分別者
轉所轉轉因　因此六解脫　由於妄計故　無地無諸諦　亦無諸刹土　化佛及二乘
心起一切法　一切處及身　心性實無相　無智取種種　分別迷惑相　是名依他起
相中所有名　是則爲妄計　諸緣法和合　分別於名相　此等皆不生　是則圓成實
十方諸刹土　衆生菩薩中　所有法報佛　化身及變化　皆從無量壽　極樂界中出
於方廣經中　應知密意說　所有佛子說　及諸導師說　悉是化身說　非是實報佛
諸法無有生　彼亦非非有　如幻亦如夢　如化如乹城　種種由心起　種種由心脫
心起更非餘　心滅亦如是　以衆生分別　所現虛妄相　惟心實無境　離分別解脫
由無始積集　分別諸戲論　惡習之所薰　起此虛境妄　妄計自性故　諸法皆無生
依止於緣起　衆生迷分別　分別不相應　依他卽淸淨　所在離分別　轉依卽眞如
勿妄計虛妄　妄計卽無實　迷惑妄分別　取所取皆無　分別見外境　是妄計自性
由此虛妄計　緣起自性生　邪見諸外境　無境但是心　如理正觀察　能所取皆滅
如愚所分別　外境實非有　習氣擾濁心　似多境而轉　已滅二分別　智契於眞如
起於無影像　難思聖所行　依父母和合　如蘇在於甁　阿賴耶意俱　令赤白增長
閉尸及稠胞　穢業種種生　業風增四大　出生如果熟　五與五及五　瘡竅有九種
爪甲齒毛具　滿足卽便生　初生猶糞蟲　亦如人睡覺　眼開見於色　分別漸增長
分別決了已　脣齶等和合　始發於語言　猶如鸚鵡等　隨衆生意樂　安立於大乘
非惡見行處　外道不能受　自內所證乘　非計度所行　願說佛滅後　誰能受持此

大慧汝應知　善逝涅槃後　未來世當有　持於我法者　南天竺國中　大名德比丘
厥號爲龜樹　能破有無宗　世間中顯我　無上大乘法　得初歡喜地　往生安樂國
衆緣所起義　有無俱不可　緣中妄計物　分別於有無　如是外道見　遠離於我法
一切法名字　生處常隨逐　已習及現習　展轉共分別　若不說於名　世間皆迷惑
爲除迷惑故　是故立名言　愚分別諸法　迷惑於名字　及以諸緣生　是三種分別
以不生不滅　本性如虛空　自性無所有　是名妄計相　如幻影陽焰　鏡像夢火輪
如響及乾城　是則依他起　眞如空不二　實際及法性　皆無有分別　我說是圓成
語言心所行　虛妄墮二邊　慧分別實諦　是慧無分別　於智者所現　於愚則不現
如是智所現　一切法無相　如假金瓔珞　非金愚謂金　諸法亦如是　外道是計度
諸法無始終　住於眞實相　世間皆無作　妄計不能了　過去所有法　未來及現在
如是一切法　皆悉是無生　諸緣和合故　是故說有法　若離於和合　不生亦不滅
而諸緣起法　一異不可得　略說以爲生　廣說則爲滅　一是不生空　一復是生空
不生空爲勝　生空則滅壞　眞如空實際　涅槃及法界　種種意生身　我說皆異名
於諸經律論　而起淨分別　若不了無我　依教不依義　衆生妄分別　所見如兎角
分別卽迷惑　如渴獸逐焰　由於妄執著　而起於分別　若離妄執因　分別則不起
甚深大方廣　知諸刹自在　我爲佛子說　非爲諸聲聞　三有空無常　遠離我我所
我爲諸聲聞　如是總相說　不著一切法　寂淨獨所行　思念辟支果　我爲彼人說
身是依他起　迷惑不自見　分別外自性　而令心妄起　報得及加持　諸趣種類生

智三本俱作知
則三本俱作是
淨同作靜

性同作種

心明作生

事三本俱作說

以明作與

及夢中所得　是神通四性　夢中之所得　及以佛威力　諸趣種類等　皆非報得通
習氣熏於心　似物而影起　凡愚未能悟　是故說爲生　隨於妄分別　外相幾時有
爾所時增妄　不見自心迷　何以說有生　而不說所見　無所見而見　爲誰云何說
心體自本淨　意及諸識俱　習氣常熏故　而作諸濁亂　藏諸捨於身　意乃求諸趣
識迷似境界　見已而貪取　所見唯自心　外境不可得　若修如是觀　捨妄念眞如
諸定者境界　業及佛威力　此三不思議　難思智所行　過未補伽羅　虛空及涅槃
我隨世俗事　眞諦離文字　二乘及外道　同依止諸見　迷惑於唯心　妄分別外境
羅漢辟支佛　及以佛菩提　種子堅成就　夢佛灌其頂　心幻趣寂靜　何爲說有無
何處及爲誰　何故願爲說　迷惑於惟心　故說幻有無　生滅相相應　相所相平等
分別名意識　及與五識俱　如影像暴流　從心種子起　若心及與意　諸識不起者
即得意生身　亦得於佛地　諸緣及蘊界　人法之自相　皆心假施設　如夢及毛輪
觀世幻如夢　依止於眞實　眞實離諸相　亦離因相應　聖者內所證　常住於無念
迷惑因相應　執世間爲實　一切戲論滅　迷惑則不生　隨有迷分別　癡心常現起
諸法空無性　而是常無常　生論者所見　非是無生論　一異俱不俱　自然及自在
時微塵勝性　緣分別世間　識爲生死種　有種故有生　如畫依於壁　了知即便滅
譬如見幻人　而有幻生死　凡愚亦如是　癡故起縛脫　內外二種法　及以彼因緣
修行者觀察　皆住於無相　習氣不離心　亦不與心俱　雖爲習所纒　心相無差別
心如白色衣　意識習爲垢　垢習之所汙　令心不顯現　我說如虛空　非有亦非無

藏識亦如是　有無皆遠離　意識若轉依　心則離濁亂　我說心爲佛　覺了一切法
永斷三相續　亦離於四句　有無皆捨離　諸有恒如幻　前七地心起　故有二自性
餘地及佛地　悉是圓成實　欲色無色界　及以於涅槃　於彼一切身　皆是心境界
隨其有所得　是則迷惑起　若覺自心已　迷惑則不生　我立二種法　諸相及以證
以四種理趣　方便說成就　見種種名相　是迷惑分別　若離於名相　性淨聖所行
隨能所分別　則有妄計相　若離彼分別　自性聖所行　心若解脫時　則常恒眞實
種性及法性　眞如離分別　以有淸淨心　而有雜染現　無淨則無染　眞淨聖所行
世間從緣生　增長於分別　觀彼如幻夢　是時卽解脫　種種惡習氣　與心和合故
衆生見外境　不覩心法性　心性本淸淨　不生諸迷惑　迷從惡習起　是故不見心
唯迷惑卽眞　眞實非餘處　以諸行非行　非餘處見故　若觀諸有爲　遠離相所相
以離衆相故　見世惟自心　安住於唯心　不分別外境　住眞如所緣　超過於心量
若超過心量　亦超於無相　以住無相者　不見於大乘　行寂無功用　淨修諸大願
及我最勝智　無相故不見　應觀心所行　亦觀智所行　觀見慧所行　於相無迷惑
心所行苦諦　智所行是集　餘二及佛地　皆是慧所行　得果與涅槃　及以八聖道
覺了一切法　是佛淸淨智　眼根及色境　空明與作意　故令從藏識　衆生眼識生
取者能所取　名事俱無有　無因妄分別　是爲無智者　名義互不生　名義別亦爾
計因無因生　不離於分別　妄謂住實諦　隨見施設說　一性五不成　捨離於諦義
戲論於有無　應超此等魔　以見無我故　不妄求諸有　計作者爲常　呪術與諍論

智明作處

與三本俱作與

與明作於

資同作貲

實三本俱作眞

於佛同作佛形

造同作起

實諦離言說　而見寂滅法　依於藏識故　而得有意轉　心意爲依故　而有諸識生
虛妄所立法　及心性眞如　定者如是觀　通達唯心性　觀意與相事　不念常無常
及以生不生　不分別二義　從於阿賴耶　生起於諸識　終不於一義　而生二種心
由見自心故　非空非言說　若不見自心　爲見網所縛　諸緣無有生　諸根無所有
無貪無蘊界　悉無諸有爲　本無諸業報　無作無有爲　執著本來無　無縛亦無脫
無有無記法　法非法皆無　非時非涅槃　法性不可得　非佛非眞諦　非因亦非果
非倒非涅槃　非生亦非滅　亦無十二支　邊無邊非有　一切見皆斷　我說是唯心
煩惱業與身　及業所得果　皆如焰如夢　如乾闥婆城　以住唯心故　諸相皆捨離
以住唯心故　能見於斷常　涅槃無諸蘊　無我亦無相　以入於唯心　轉依得解脫
惡習爲因故　外現於大地　及以諸衆生　唯心無所見　身資土影像　衆生習所現
心非是有無　習氣令不顯　垢現於淨中　非淨現於垢　如雲翳虛空　心不現亦爾
妄計性爲有　於緣起則無　以妄計迷執　緣起無分別　非所造皆色　有色非所造
夢幻焰乾城　此等非所造　若於緣生法　謂實及不實　此人決定依　一異等諸見
聲聞有三種　願生與變化　及離貪瞋等　從於法所生　菩薩亦三種　未有諸佛相
思念於衆生　而現於佛像　衆生心所現　皆從習氣生　種種諸影像　如星雲日月
若大種是有　可有所造生　大種無性故　無能相所相　大種是能造　地等是所造
大種本無生　故無所造色　假實等諸色　及幻所造色　夢色乾城色　焰色爲第五
一闡提五種　種性五亦然　五乘及非乘　涅槃有六種　諸蘊二十四　諸色有八種

佛有二十四　佛子有二種　法門有百八　聲聞有三種　諸佛剎惟一　佛一亦復然
解脫有三種　心流注有四　無我有六種　所知亦有四　遠離於作者　及離諸見過
內自證不動　是無上大乘　生及與不生　有八種九種　一念與漸次　證得宗唯一
無色界八種　禪差別有六　辟支諸佛子　出離有七種　三世悉無有　常無常亦無
作業及果報　皆如夢中事　諸佛本不生　爲聲聞佛子　心恒不能見　如幻等法故
故於一切剎　從兜率入胎　初生及出家　不從生處生　爲流轉衆生　而說於涅槃
諸諦及諸剎　隨機令覺悟　世間洲樹林　無我外道行　禪乘阿賴耶　果境不思議
星宿月種類　諸王諸天種　乾闥夜叉種　皆因業愛生　不思變易死　猶與習氣俱
若死永盡時　煩惱網已斷　財穀與金銀　田宅及僮僕　象馬牛羊等　皆悉不應畜
不臥穿孔牀　亦不泥塗地　金銀銅鉢等　皆悉不應畜　土石及與鐵　鍮及頗梨器
滿於摩竭量　隨鉢故聽畜　常以青等色　牛糞泥果葉　染白欽婆等　令作袈裟色
四指量刀子　刃如半月形　爲以割截衣　修行者聽畜　勿學工巧明　亦不應賣買
若須使淨人　此法我所說　常守護諸根　善解經律義　不狎諸俗人　是名修行者
樹下及巖穴　野屋與塚間　草窟及露地　修行者應住　塚間及餘處　三衣常隨身
若闕衣服時　來施者應受　乞食出遊行　前視一尋地　攝念而行乞　猶如蜂採花
閙衆所集處　衆雜比丘尼　活命與俗交　皆不應乞食　諸王及王子　大臣與長者
修行者乞食　皆不應親近　生家及死家　親友所愛家　僧尼和雜家　修行者不食
寺中烟不斷　常作種種食　及故爲所造　修行者不食　行者觀世間　能相與所相

於明作亦
頗梨明作玻璃
刀三本俱作刃
時明作者
家三本俱作處

皆悉離生滅　亦離於有無

大乘入楞伽經卷第六

〔麗髮〕〔宋四〕〔元四〕〔明養〕

大乘入楞伽經卷第七

大周于闐國三藏法師實叉難陀奉勅譯

偈頌品第十之二

若諸修行者　不起於分別　不久得三昧　力通及自在　修行者不應　妄執從微塵
時勝性作者　緣生於世間　世從自分別　種種習氣生　修行者應觀　諸有如夢幻
恒常見遠離　誹謗及建立　身資及所住　不分別三有　不思想飲食　正念端身住
數數恭敬禮　諸佛及菩薩　善解經律中　眞實理趣法　五法二無我　亦思惟自心
內證淨法性　諸地及佛地　行者修習此　處蓮花灌頂　沈輪諸趣中　厭離於諸有
往塚間靜處　修習諸觀行　有物無因生　妄謂離斷常　亦謂離有無　妄計爲中道
妄計無因論　無因是斷見　不了外物故　壞滅於中道　恐墮於斷見　不捨所執法
以建立誹謗　妄說爲中道　以覺了惟心　捨離於外法　亦離妄分別　此行契中道
惟心無有境　無境心不生　我及諸如來　說此爲中道　若生若不生　自性無自性
有無等皆空　不應分別二　不能起分別　愚夫謂解脫　心無覺智生　豈能斷二執
以覺自心故　能斷二所執　了知故能斷　非不能分別　了知心所現　分別卽不起
分別起不故　眞如心轉依　若見所起法　離諸外道過　是智者所取　涅槃非滅壞
我及諸佛說　覺此卽成佛　若更異分別　是則外道論　不生而現生　不滅而現滅

夢幻明作幻夢
惟同作唯下同
輪三本俱作淪
靜明作淨

像三本俱作相

相同作想

三同作二

普於諸億刹　頓現如水月　一身爲多身　然火及注雨　隨機心中現　是故說惟心
心亦是惟心　非心亦心起　種種諸色相　通達皆惟心　諸佛與聲聞　緣覺等形像
及餘種種色　皆說是惟心　從於無色界　乃至地獄中　普現爲衆生　皆是惟心作
如幻諸三昧　及以意生身　十地與自在　皆由轉依得　愚夫爲相縛　隨見聞覺知
自分別顚倒　戲論之所動　一切空無生　我實不涅槃　化佛於諸刹　演三乘一乘
佛有三十六　復各有十種　隨衆生心器　而現諸刹土　法佛於世間　猶如妄計性
雖見有種種　而實無所有　法佛是眞佛　餘皆是化佛　隨衆生種子　見佛所現身
以迷惑諸相　而起於分別　分別不異眞　相不卽分別　自性及受用　化身復現化
佛德三十六　皆自性所成　由外薰習種　而生於分別　不取於眞實　而取妄所執
迷惑依內心　及緣於外境　但由此二起　更無第三緣　迷惑依內外　而得生起已
六十二十八　故我說爲心　知但有根境　則離於我執　悟心無境界　則離於法執
由依本識故　而有諸識生　由依內處故　有似外影現　無智恒分別　有爲及無爲
皆悉不可得　如夢星毛輪　如乾闥婆城　如幻如焰水　非有而見有　緣起法亦然
我依三種心　假說根境我　而彼心意識　自性無所有　心意及與識　無我有二種
五法與自性　是諸佛境界　習氣因爲一　而成於三相　如以一彩色　畫壁見種種
五法二無我　自性心意識　於佛種性中　皆悉不可得　遠離心意識　亦離於五法
復離於自性　是爲佛種性　若身語意業　不修白淨法　如來淨種性　則離於現行
神通力自在　三昧淨莊嚴　種種意生身　是佛淨種性　內自證無垢　遠離於因相

說明作入

八地及佛地　如來性所成　遠行與善慧　法雲及佛地　皆是佛種性　餘悉二乘攝
如來心自在　而爲諸愚夫　心相差別故　說於七種地　第七地不起　身語意過失
第八地所依　如夢渡河等　八地及五地　解了工巧明　諸佛子能作　諸有中之王
智者不分別　若生若不生　空及與不空　自性無自性　但惟是心量　而實不可得
爲諸二乘說　此實此虛妄　非爲諸佛子　故不應分別　有非有悉非　亦無刹那相
假實法亦無　惟心不可得　有法是俗諦　無性第一義　迷惑於無性　是則爲世俗
一切法皆空　我爲諸凡愚　隨俗假施設　而彼無眞實　由言所起法　則有所行義
觀見言所生　皆悉不可得　如離壁無畫　離質亦無影　藏識若淸淨　諸識浪不生
依法身有報　從報起化身　此爲根本佛　餘皆化所現　不應妄分別　空及以不空
妄計於有無　言義不可得　凡愚妄分別　德實塵聚色　一一塵皆無　是故無境界
衆生見外相　皆由自心現　所見既非有　故無諸外境　如象溺深泥　不能復移動
聲聞住三昧　昏醉亦復然　若見諸世間　習氣以爲因　離有無俱非　法無我解脫
自性名妄計　緣起是依他　眞如是圓成　我經中常說　心意及與識　分別與表示
本識作三有　皆心之異名　壽及於煖識　阿賴耶命根　意及與意識　皆分別異名
心能持於身　意恒審思慮　意識諸識俱　了自心境界　若實有我體　異蘊及蘊中
於彼求我體　畢竟不可得　一一觀世間　皆是自心現　於煩惱隨眠　離苦得解脫
聲聞爲盡智　緣覺寂靜智　如來之智慧　生起無窮盡　外實無有色　惟自心所現
愚夫不覺知　妄分別有爲　不知外境界　種種皆自心　愚夫以因喩　四句而成立

夫三本俱作愚

愛宋元俱作受

智者悉了知　境界自心現　不以宗因喻　諸句而成立　分別所分別　是爲妄計相
依止於妄計　而復起分別　展轉互相依　皆因一習氣　此二俱爲客　非衆生心起
安住三界中　心心所分別　所起似境界　是妄計自性　影像與種子　合爲十二處
所依所緣合　說有所作事　猶如鏡中像　瞖眼見毛輪　習氣覆亦然　凡夫起妄見
於自分別境　而起於分別　如外道分別　外境不可得　如愚不了繩　妄取以爲虵
不了自心現　妄分別外境　如是繩自體　一異性皆離　但自心倒惑　妄起繩分別
妄計分別時　而彼性非有　云何見非有　而起於分別　色性無所有　瓶衣等亦然
但由分別生　所見終無有　無始有爲中　迷惑起分別　何法令迷惑　願佛爲我說
諸法無自性　但惟心所現　不了於自心　是故生分別　如愚所分別　妄計實非有
異此之所有　而彼不能知　諸聖者所有　非愚所分別　若聖同於凡　聖應有虛妄
以聖治心淨　是故無迷惑　凡愚心不淨　故有妄分別　如母語嬰兒　汝勿須啼泣
空中有果來　種種任汝取　我爲衆生說　種種妄計果　令彼愛樂已　法實離有無
諸法先非有　諸緣不和合　本不生而生　自性無所有　未生法不生　離緣無生處
現生法亦爾　離緣不可得　觀實緣起要　非有亦非無　非有無俱非　智者不分別
外道諸愚夫　妄說一異性　不了諸起起　世間如幻夢　我無上大乘　超越於名言
其義甚明了　愚夫不覺知　聲聞及外道　所說皆壓惓　令義悉改變　皆由妄計起
諸相及自體　形狀及與名　攀緣此四種　而起諸分別　計梵自在作　一身與多身
及日月運行　彼非是我子　具足於聖見　通達如實法　善巧轉諸想　到於識彼岸

以此解脫印　永離於有無　及離於去來　是我法中子　若色識轉滅　諸業失壞者
是則無生死　亦無常無常　而彼轉滅時　色處雖捨離　業住阿賴耶　離有無過失
色識雖轉滅　而業不失壞　令於諸有中　色識復相續　若彼諸衆生　所起業失壞
是則無生死　亦無有涅槃　若業與色識　俱時而滅壞　生死中若生　色業應無別
色心與分別　非異非不異　愚夫謂滅壞　而實離有無　緣起與妄計　展轉無別相
如色與無常　展轉生亦爾　既離異非異　妄計不可知　如色無常性　云何說有無
善達於妄計　緣起則不生　由是於緣起　妄計則眞如　若滅妄計性　是則壞法眼
便於我法中　建立及誹謗　如是色類人　當毀謗正法　彼皆以非法　滅壞我法眼
智者勿共語　比丘事亦棄　以滅壞妄計　建立誹謗故　若隨於分別　起於有無見
彼如幻毛輪　夢焰與乾城　彼非學佛法　不應與同住　以自墮二邊　亦壞他人故
若有修行者　觀於妄計性　寂靜離有無　攝取與同住　如世間有處　出金摩尼珠
彼雖無造作　而衆生受用　業性亦如是　遠離種種性　所見業非有　非不生諸趣
如聖所了知　法皆無所有　愚夫所分別　妄計法非無　若愚所分別　彼法非有者
既無一切法　衆生無雜染　以有雜染法　無明愛所繫　能起生死身　諸根悉具足
若謂愚分別　此法皆無者　則無諸根生　彼非正修行　若無有此法　而爲生死因
愚夫不待修　自然而解脫　若無有彼法　凡聖云何別　亦則無聖人　修行三解脫
諸蘊及人法　自共相無相　諸緣及諸根　我爲聲聞說　唯心及非因　諸地與自在
內證淨眞如　我爲佛子說　未來世當有　身著於袈裟　妄說於有無　毀壞我正法

當三本俱作常

而三本俱作能

疊元作氎

所三本俱作行

以三本俱作似

緣起法無性　是諸聖所行　妄計性無物　計度者分別　未來有愚癡　揭那諸外道
說於無因論　惡見壞世間　妄說諸世間　從於微塵生　而彼塵無因　九種實物常
從實而成實　從德能生德　眞法性異此　毀謗說言無　若本無而生　世間則有始
生死無前際　是我之所說　三界一切物　本無而生者　驢騾狗生角　亦應無有疑
眼色識本無　而今有生者　衣冠及席等　應從泥團生　如疊中無席　蒲中亦無席
何不諸緣中　一一皆生席　彼命者與身　若本無而生　我先已說彼　皆是外道論
我先所說宗　爲遮於彼意　既遮於彼已　然後說自宗　恐諸弟子衆　迷著有無宗
是故我爲其　先說外道論　迦毘羅惡慧　爲諸弟子說　勝性生世間　求那所轉變
諸緣無有故　非已生現生　諸緣既非緣　非生非不生　我宗離有無　亦離諸因緣
生滅及所相　一切皆遠離　世間如幻夢　因緣皆無性　常作如是觀　分別永不起
若能觀諸有　如焰及毛輪　亦如尋香城　常離於有無　因緣俱捨離　令心悉清淨
若言無外境　而惟有心者　無境則無心　云何成唯識　以有所緣境　衆生心得起
無因心不生　云何成惟識　眞如及惟識　是衆聖所行　此有言非有　彼非解我法
由能取所取　而心得生起　世間心如是　故非是唯心　身資土影像　如夢從心生
心雖成二分　而心無二相　如刀不自割　如指不自觸　而心不自見　其事亦如是
無有影像處　則無依他起　妄計性亦無　五法二心盡　能生及所生　皆是自心相
衒意說能生　而實無自生　種種境形狀　若由妄計生　虛空與兎角　亦應成境相
以境從心起　此境非妄計　然彼妄計境　離心不可得　無始生死中　境界悉非有

境同作鏡

心無有起處　云何成影像　若無物有生　兎角亦應生　不可無物生　而起於分別
如境現非有　彼則先亦無　云何無境中　而心緣境起　眞如空實際　涅槃及法界
一切法不生　是第一義性　愚夫墮有無　分別諸因緣　不能知諸有　無生無作者
無始心所因　惟心無所見　旣無無始境　心從何所生　無物而得生　如貧應是富
無境而生心　願佛爲我說　一切若無因　無心亦無境　心旣無所生　離三有所作
因瓶衣角等　而說兎角無　是故不應言　無彼相因法　無因有故無　是無不成無
有待無亦爾　展轉相因起　若依止少法　而有少法起　是則前所依　無因而自有
若彼別有依　彼依復有依　如是則無窮　亦無有少法　如依木葉等　現種種幻相
衆生亦如是　依事種種現　依於幻師力　令愚見幻相　而於木葉等　實無幻可得
若依止於事　此法則便壞　所見旣無二　何有少分別　分別無妄計　分別亦無有
以分別無故　無生死涅槃　由無所分別　分別則不起　云何心不起　而得有惟心
意差別無量　皆無眞實法　無實無解脫　亦無諸世間　如愚所分別　外所見皆無
習氣擾濁心　似影像而現　有無等諸法　一切皆不生　但惟自心現　遠離有分別
說諸法從緣　爲愚非智者　心自性解脫　淨心聖所住　數勝及露形　梵志與自在
皆墮有無見　遠離寂靜義　無生無自性　離垢空如幻　諸佛及今佛　爲誰如是說
淨心修行者　離諸見計度　諸佛爲彼說　我亦如是說　若一切皆心　世間何處住
何因見大地　衆生有去來　如鳥遊虛空　隨分別而去　無依亦無住　如履地而行
衆生亦如是　隨於妄分別　遊履於自心　如鳥在虛空　身資國土影　佛說惟心起

離 明作異○他 元作性

智覺 宋明俱作覺智 元作覺知

修 宋元俱作修

願說影惟心　何因云何起　身資國土影　皆由習氣轉　亦因不如理　分別之所生

外境是妄計　心緣彼境生　了境是惟心　分別則不起　若見妄計性　名義不和合

遠離覺所覺　解脫諸有爲　名義皆捨離　此是諸佛法　若離此求悟　彼無覺自他

若能見世間　離能覺所覺　是時則不起　名所名分別　由見自心故　妄作名字滅

不見於自心　則起彼分別　四蘊無色相　彼數不可得　大種性各異　云何共生色

由離諸相故　能所造非有　異色則有相　諸蘊何不生　若見於無相　蘊處皆捨離

是時心亦離　見法無我故　由根境差別　生於八種識　於彼無相中　是三相皆離

意緣阿賴耶　起我我所執　及識二執取　了知皆遠離　觀見離一異　是則無所動

離於我我所　二種妄分別　無生無增長　亦不爲識因　既離能所作　滅已不復生

世間無能作　及離能所相　妄計及惟心　云何願爲說　自心現種種　分別識形相

不了心所現　妄取謂心外　由無智覺故　而起於無見　云何於有性　而心不生著

分別非有無　故於有不生　了所見惟心　分別則不起　分別不起故　轉依無所著

則遮於四宗　謂法有因等　此但異名別　所立皆不成　應知能作因　亦復不成立

爲遮於能作　說因緣和合　爲遮於常過　說緣是無常　愚夫謂無常　而實不生滅

不見滅壞法　而能有所作　何有無常法　而能有所生　天人阿修羅　鬼畜閻羅等

衆生在中生　我說爲六道　由業上中下　於中而受生　守護諸善法　而得勝解脫

佛爲諸比丘　說於所受生　念念皆生滅　請爲我宣說　色色不暫停　心心亦生滅

我爲弟子說　受生念遷謝　色色中分別　生滅亦復然　分別是衆生　離分別非有

墮三本俱作隨道同作論

眞三本俱作實

則同作卽次同

我爲此緣故　說於念念生　若離取著色　不生亦不滅　緣生非緣生　無明眞如等
二法故有起　無二卽眞如　若彼緣非緣　生法有差別　常等與諸緣　有能作所作
是則大牟尼　及諸佛所說　有能作所作　與外道無異　我爲弟子說　身是苦世間
亦是世間集　滅道皆悉具　凡夫妄分別　取三自性故　見有能所取　世及出世法
我先觀待故　說取於自性　今爲遮諸見　不應妄分別　求過爲非法　亦令心不定
皆由二取起　無二卽眞如　若無明愛業　而生於識等　邪念復有因　是則無窮過
無智說諸法　有四種滅壞　妄起二分別　法實離有無　遠離於四句　亦離於二見
分別於起二　了已不復生　不生中知生　生中知不生　彼法同等故　不應知分別
願佛爲我說　遮二見之理　令我及餘衆　恒不墮有無　不雜諸外道　亦離於二乘
諸佛證所行　佛子不退處　解脫因非因　同一無生相　迷故執異名　智者應常離
法從分別生　如毛輪幻焰　外道妄分別　世從自性生　無生及眞如　性空與眞際
此等異名說　不應執爲無　如手有多名　帝釋名亦爾　諸法亦如是　不應執爲無
色與空無異　無生亦復然　不應執爲異　成諸見過失　以總別分別　及遍分別故
執著諸事相　長短方圓等　總分別是心　遍分別爲意　別分別是識　皆離能所相
我法中起見　及外道無生　皆是妄分別　過失等無異　若有能解了　我所說無生
及無生所爲　是人解我法　爲破於諸見　無生無住處　令知此二義　故我說無生
佛說無生法　若是有是無　則同諸外道　無因不生論　我說惟心量　遠離於有無
若生若不生　是見應皆離　無因論不生　生則著作者　作則雜諸見　無則自然生

集同作習

德同作徵

性同作住
爛宋作潤

因三本俱作依

佛說諸方便　正見大願等　一切法若無　道場何所成　離能取所取　非生亦非滅
所見法非法　皆從自心起　牟尼之所說　前後自相違　云何說諸法　而復言不生
衆生不能知　願佛爲我說　得離外道過　及彼顚倒因　惟願勝說者　說生及與滅
皆離於有無　而不壞因果　世間墮二邊　諸見所迷惑　惟願靑蓮眼　說諸地次第
取生不生等　不了寂滅因　道場無所得　我亦無所說　刹那法皆空　無生無自性
諸佛已淨二　有二卽成過　惡見之所覆　分別非如來　妄計於生滅　願爲我等說
積集於戲論　和合之所生　隨其類現前　色境皆具足　見於外色已　而起於分別
若能了知此　則見眞實義　若離於大種　諸物皆不成　大種旣惟心　當知無所生
此心亦不生　則順聖種性　勿分別分別　無分別是智　分別於分別　是二非涅槃
若立無生宗　則壞於幻法　亦無因起幻　損滅於自宗　猶如鏡中像　雖離一異性
所見非是無　生相亦如是　如乾城幻等　悉待因緣有　諸法亦如是　是生非不生
分別於人法　而起二種我　此但世俗說　愚夫不覺知　由願與緣集　自力及最勝
聲聞法第五　而有羅漢等　時隔及滅壞　勝義與遷邏　是四種無常　愚分別非智
愚夫墮二邊　德應自性作　以取有無宗　不知解脫因　大種互相違　安能起於色
但是大種性　無大所造色　火乃燒於色　水復爲爛壞　風能令散滅　云何色得生
色蘊及識蘊　惟此二非五　餘但是異名　我說彼如兔　心心所差別　而起於現法
分析於諸色　惟心無所造　靑白等相待　作所作亦然　所生及性空　冷熱相所相
有無等一切　妄計不成立　心意及餘六　諸識共相應　皆因藏識生　非一亦非異

數勝及露形　計自在能生　皆墮有無宗　遠離寂靜義　大種生形相　非生於大種
外道說大種　生大種及色　於無生法外　外道計作者　依止有無宗　愚夫不覺知
清淨眞實相　而與大智俱　但共心相應　非意等和合　若業皆生色　則違諸蘊因
衆生應無取　無有住無色　說色爲無者　衆生亦應無　無色論是斷　諸識不應生
識依四種住　無色云何成　內外旣不成　識亦不應起　衆生識若無　自然得解脫
必是外道論　妄計者不知　或有隨樂執　中有中諸蘊　如生於無色　無色云何有
無色中之色　彼非是可見　無色則違宗　非乘及乘者　識從習氣生　與諸根和合
八種於刹那　取皆不可得　若諸色不起　諸根則非根　是故世尊說　根色刹膩迦
云何不了色　而得有識生　云何識不生　而得受生死　諸根及根境　聖者了其義
愚癡無智者　妄執取其名　不應執第六　有取及無取　爲離諸過失　聖者無定說
諸外道無智　怖畏於斷常　計有爲無爲　與我無差別　或計與心一　或與意等異
一性有可取　異性有亦然　若取是決了　名爲心心所　此取何不能　決了於一性
有取及作業　可得而受生　猶如火所成　理趣似非似　如火頓燒時　然可然皆具
妄取我亦然　云何無所取　若生若不生　心性常清淨　外道所立我　何不以爲喩
迷惑識稠林　妄計離眞法　樂於我論故　馳求於彼此　內證智所行　清淨眞我相
此卽如來藏　非外道所知　分別於諸蘊　能取及所取　若能了此相　則生眞實智
是諸外道等　於賴耶藏處　計意與我俱　此非佛所說　若能辯了此　解脫見眞諦
見修諸煩惱　斷除悉清淨　本性清淨心　衆生所迷取　無垢如來藏　遠離邊無邊

膩宋元俱作膩
頓明作頓
別三本俱作析
取明作惑〇治

宋明俱作治

眞明作中

蘇同作酥

應三本俱作擬

本識在蘊中　如金銀在鑛　陶冶鍊治已　金銀皆顯現　佛非人非蘊　但是無漏智
了知常寂靜　是我之所歸　本性清淨心　隨煩惱意等　及與我相應　顯佛爲解說
自性清淨心　意等以爲他　彼所積集業　雜染故爲二　意等我煩惱　染汙於淨心
猶如彼淨衣　而有諸垢染　如衣得離垢　亦如金出鑛　衣金俱不壞　心離過亦然
無智者推求　箜篌蠡鼓等　而覓妙音聲　蘊中我亦爾　猶如伏藏寶　亦如地下水
雖有不可見　蘊眞我亦然　心心所功能　聚集蘊相應　無智不能取　蘊中我亦爾
如女懷胎藏　雖有不可見　蘊中眞實我　無智不能知　如藥中勝力　亦如木中火
蘊中眞實我　無智不能知　諸法中空性　及以無常性　蘊中眞實我　無智不能知
諸地自在通　灌頂勝三昧　若無此眞我　是等悉皆無　有人破壞言　若有應示我
智者應答言　汝分別示我　說無眞我者　謗法著有無　比丘應羯磨　擯弃不共語
說眞我熾然　猶如劫火起　燒無我稠林　離諸外道過　如蘇酪在壺　及以麻油等
嘗皆悉有味　未嘗者不知　於諸蘊身中　五種推求我　愚者不能了　智見即解脫
明智所立喻　猶未顯於心　其中所集義　豈能使明了　諸法別異相　及了惟一心
計度者妄執　無因及無起　定者觀於心　心不見於心　見從所見生　所見何因起
我雖迦旃延　淨居天中出　爲衆生說法　令入涅槃城　緣於本住法　我及諸如來
於三千經中　廣說涅槃法　欲界及無色　不於彼成佛　色界究竟天　離欲得菩提
境界非縛因　因縛於境界　修行利智劍　割斷彼煩惱　無我云何有　幻等法有無
愚應顯眞如　云何無眞我　已作未作法　皆非因所起　一切悉無生　愚夫不能了

能作者不生　所作及諸緣　此二皆無生　云何計能作　妄計者說有　先後一時因
顯瓶弟子等　說諸物生起　佛非是有爲　所具諸相好　是輪王功德　非此名如來
佛以智爲相　遠離於諸見　自內證所行　一切過皆斷　聾盲瘖瘂等　老小及懷怨
是等尤重者　皆無梵行分　隨好隱爲天　相隱爲輪王　此二著放逸　惟顯者出家
我釋迦滅後　當有毘耶婆　迦那梨沙婆　劫比羅等出　我滅百年後　毘耶婆所說
婆羅多等論　次有半擇婆　憍拉婆囉摩　次有冒狸王　難陀及毱多　次篾利車王
於後刀兵起　次有極惡時　彼時諸世間　不修行正法　如是等過後　世間如輪轉
日火共和合　焚燒於欲界　復立於諸天　世間還成就　諸王及四姓　諸仙垂法化
韋陀祠施等　當有此法興　談論戲笑法　長行與解釋　我聞如是等　迷惑於世間
所受種種衣　若有正色者　青泥牛糞等　染之令壞色　所服一切衣　令離外道相
現於修行者　諸佛之幢相　亦繫於腰絛　漉水而飲用　次第而乞食　不至於非處
生於勝妙天　及生於人中　寶相具足者　生天及人王　王有四天下　法教久臨御
上昇於天宮　由貪皆退失　純善及三時　二時幷極惡　餘佛出善時　釋迦出惡世
於我涅槃後　釋種悉達多　毘紐大自在　外道等俱出　如是我聞等　釋師子所說
談古及笑語　毘夜娑仙說　於我涅槃後　毘紐大自在　彼說如是言　我能作世間
我名離塵佛　姓迦多衍那　父名世間主　母號爲具財　我生瞻婆國　我之先祖父
從於月種生　故號爲月藏　出家修苦行　演說千法門　與大慧授記　然後當滅度
大慧付達摩　次付彌佉梨　彌佉梨惡時　劫盡法當滅　迦葉拘留孫　拘那含牟尼

著同作者
冒宋明俱作胄元作冒
幢三本俱作幢〇絛同作縚下同〇至明作生
婆三本作俱波

導同作道
成同作納
目同作月
木同作水
穬元明俱作[illegible]

及我離塵垢　皆出純善時　純善漸減時　有導師名慧　成就大勇猛　覺悟於五法
非二時三時　亦非極惡時　於彼純善時　現成等正覺　衣雖不割縷　雜碎而補成
如孔雀尾目　無有人侵奪　或二指三指　間錯而補成　異此之所作　愚夫生貪著
惟畜於三衣　恒滅貪欲火　沐以智慧水　日夜三時修　如放箭勢極　一墜還放一
亦如抨酪木　善不善亦然　若一能生多　則有別異相　施者應如田　受者應如風
若一能生多　一切無因有　所作因滅壞　是妄計所立　若妄計所立　如燈及種子
一能生多者　但相似非多　胡麻不生豆　稻非穬麥因　小豆非穀種　云何一生多
名手作聲論　廣主造王論　順世論妄說　當生梵藏中　迦多延造經　樹皮仙說祀
鵂鶹出天文　惡世時當有　世間諸衆生　福力感於王　如法御一切　守護於國土
青蛾及赤豆　側僻與馬行　此等大福仙　未來世當出　釋子悉達多　步多五髻者
口力及聰慧　亦於未來出　我在於林野　梵王來惠我　鹿皮三岐杖　膊絛及軍持
此大修行者　當成離垢尊　說於眞解脫　牟尼之幢相　梵王與梵衆　諸天及天衆
施我鹿皮衣　還歸自在宮　我在林樹間　帝釋四天王　施我妙衣服　及以乞食鉢
若立不生論　是因生復生　如是立無生　惟是虛言說　無始所積集　無明爲心因
生滅而相續　妄計所分別　僧佉論有二　勝性及變異　勝中有所作　所作應自成
勝性與物俱　求那說差別　作所作種種　變異不可得　如水銀淸淨　塵垢不能染
藏識淨亦然　衆生所依止　如興渠葱氣　鹽味及貽藏　種子亦如是　云何而不生
一性及異性　俱不俱亦然　非所取之有　非無非有爲　馬中牛性離　蘊中我亦然

滅三本俱作然

別同作析次同

所說爲無爲　悉皆無自性　理教等求我　是妄垢惡見　不了故說有　惟妄取無餘
諸蘊中之我　一異皆不成　彼過失顯然　妄計者不覺　如水鏡及眼　現於種種影
遠離一異性　蘊中我亦然　行者修於定　見諦及以道　勤修此三種　解脫諸惡見
猶如孔隙中　見電光速滅　法遷變亦然　不應起分別　愚夫心迷惑　取涅槃有無
若得聖見者　如實而能了　應知變異法　遠離於生滅　亦離於有無　及以能所相
應知變異法　遠離外道論　亦離於名相　內我亦見滅　諸天樂觸身　地獄苦逼體
若無彼中有　諸識不得生　應知諸趣中　衆生種種身　胎卵濕生等　皆隨中有生
離聖教正理　欲滅惑反增　是外道狂言　智者不應說　先應決了我　及分別諸取
以如石女兒　無決了分別　我離於肉眼　以天眼慧眼　見諸衆生身　離諸行諸蘊
觀見諸行中　有好色惡色　解脫非解脫　有住天中者　諸趣所受身　惟我能了達
超過世所知　非計度境界　無我而生心　此心云何生　豈不說心生　如河燈種子
若無無明等　心識則不生　離無明無諸　云何生相續　妄計者所說　三世及非世
第五不可說　諸佛之所知　諸行取所住　彼亦爲智因　不應說智慧　而名爲諸行
有此因緣故　則有此法生　無別有作者　是我之所說　風不能生火　而令火熾然
亦由風故滅　云何喩於我　所說爲無爲　皆離於諸取　云何愚分別　以火成立我
諸緣展轉力　是故能生火　若分別如火　是我從誰生　意等爲因故　諸蘊處積集
無我之商主　常與心俱起　此二常如日　遠離能所作　非火能成立　妄計者不知
衆生心涅槃　本性常淸淨　無始過習染　無異如虛空　象臥等外道　諸見所雜染

栴宋作旃
處三本俱作住
報明作執

意識之所覆　計火等爲淨　若得如實見　便能斷煩惱　捨邪喩稠林　到聖所行處
智所知差別　各異而分別　無智者不知　說所不應說　如愚執異材　作栴檀沈水
妄計與眞智　當知亦復然　食訖持鉢歸　洗濯令淸淨　澡漱口餘味　應當如是修
若於此法門　如理正思惟　淨信離分別　成就最勝定　離著處於義　成金光法燈
分別於有無　及諸惡見網　三毒等皆離　得佛手灌頂　外道執能作　迷方及無因
於緣起驚怖　斷滅無聖性　變起諸果報　謂諸識及意　意從賴耶生　識依末那起
賴耶起諸心　如海起波浪　習氣以爲因　隨緣而生起　刹那相鉤鏁　取自心境界
種種諸形相　意根等識生　由無始惡習　似外境而生　所見惟自心　非外道所了
因彼而緣彼　而生於餘識　是故起諸見　流轉於生死　諸法如幻夢　水月焰乾城
當知一切法　惟是自分別　正智依眞如　而起諸三昧　如幻首楞嚴　如是等差別
得入於諸地　自在及神通　成就如幻智　諸佛灌其頂　見世間虛妄　是時心轉依
獲得歡喜地　諸地及佛地　既得轉依已　如衆色摩尼　利益諸衆生　應現如水月
捨離有無見　及以俱不俱　過於二乘行　亦超第七地　自內現證法　地地而修治
遠離諸外道　應說是大乘　說解脫法門　如兎角摩尼　捨離於分別　離死及遷滅
敎由理故成　理由敎故顯　當依此敎理　勿更餘分別

大乘入楞伽經卷第七

大正六年七月二十四日印刷
大正六年七月二十七日發行
大正八年二月十七日再版發行
昭和二年十一月十五日三版發行

國譯大藏經 經部 第四卷

【非賣品】

（岡山製本）

編輯兼發行者　國民文庫刊行會
東京市神田區小川町一番地

右代表者　鶴田久作
東京市本郷區西片町十番地

印刷者　君島潔
東京市小石川區久堅町百八番地

印刷所　共同印刷株式會社
東京市小石川區久堅町百八番地

發行所　國民文庫刊行會
電話神田 一五三五番 一八三八番
振替東京 一八五七二番